
ワールド・カスタマイズ・クリエイター

へロー天気

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワールド・カスタマイズ・クリエイター

【Nコード】

N7163G

【作者名】

ヘロー天気

【あらすじ】

不思議な声によつて異世界に喚ばれた悠介は、その世界で邪神と呼ばれる存在だった？

歴史の停滞を打ち破り、世界に循環を促す存在として喚ばれた若者の魂は、新たな時代への潮流となる。

少々トンデモ設定な召喚モノ

(エピソード追加の為、一時的に連載中に戻しています)

序話（前書き）

少々トンデモ設定の異世界召喚モノです。

序話

「この辺りのバランスが悪いんだよなー、このクソゲームっ」

そう悪態を吐きつつもプレイを止められない彼は、ポータブルゲーム機のボタンをばちばちと押しながら裏山にある古い神社の境内を歩いていた。

彼は参拝する目的でここに来た訳ではない。人気ひとけが無く静かで快適にプレイ出来る環境を求めるうちに、この場所が定番になったのだ。

家では母親が『またゲームばかりして!』と五月蠅いので、外にプレイ安住の地を求めた結果である。

「くそ〜、折角手に入ってもポイントが足りないから弄りようが無い……こうなったらチート使うか」

プレイ中の画面に写っている3Dで描かれたアイテムをカーソルで動かしながら、彼は『最終手段かいぞうこうた』の使用を考えていた。手に入れたアイテムを好みのステータスに変更して使えるシステムが売りのロールプレイングゲーム RPG。

ゲームの内容自体はオーソドックスな冒険活劇風の有り触れたモノだったが、このゲームの売りであるアイテム・カスタマイズ・クリエートシステムは中々のやり込み要素があつて、彼をこのゲーム

にハマらせている部分でもあった。

しかし、明らかにバランスを間違えた自由度の低さが、多くのプレイヤー達からブーイングを呼んでいる。彼がこのポータブルゲーム機で使える『最終手段』のディスクを取り出そうと、カバンに意識を向けたその時

来タレ邪神ヨ

頭の中に声が響き、同時に身体を引きぬかれるような感覚が全身を襲う。

『な、なんだっ！』

突然の浮遊感に階段辺りで足を踏み外したかと身を竦ませた彼は、思わず頭を庇いながら自分の足元に視線を向けて唾然となった。自分自身がそこにいる。頭より少し高い位置から自分の後姿を見下ろしているのだ。

『うおっ 幽体離脱か！ ……いや、なんか変だぞ？』

高い位置から見下ろす自分自身は、何かに驚いたように周囲をキョロキョロと見渡している。やがてゲーム機を鞆に仕舞うと、首を傾げながら足早に去って行った。

『なんだこれ……、一体どう……なっ……て』

視界が水の中のように揺れて徐々に暗転して行き、朦朧とする意識の中、彼は星々に囲まれた宇宙のような暗い空間に浮かぶ巨大な皿と、その上に広がる広大な大地を見たような気がした。

『……象と亀は……居ないんだ……』

その世界は、世界と世界の狭間に存在していた。全天に見渡せる星々のような輝きは、その一つ一つが狭間の世界から見える沢山の異なる世界。星の数ほどの異世界と繋がる狭間の世界に、ポツリと浮かぶ巨大な円盤状の大地。

そこに住む人々はこの大地を『カルツイオ』と呼び、国を建て、繁栄し、衰退し、滅び滅ぼし、子を産み育て、連綿と続く人の生活と営みによって悠久の歴史を紡いでいた。

カルツイオに住む彼等が大地を飛び出し、この世界の全貌を知るには、まだ後数万年の時が必要であった。

そんなカルツイオの歴史を見守り続ける、この世界の始まりから存在する『意思』がある。この世界の神とも言えるその存在は、世界の維持と循環を促す為、定期的に異なる世界から使者を喚ぶ。

異なる世界からの来訪者は、カルツイオの大地に様々な波紋を呼び起こし、停滞を打ち溶かして新しい流れを作り、世界の循環に貢献してくれる。

ある時は、巨大な体躯を持った『竜』と呼ばれる存在。ある時は、人間から見るに異形と形容される姿の『怪物』などが喚ばれ、彼等

はこの世界の神たる存在に与えられた力を持って世界の循環に大いなる貢献を果たした。

今回また、世界に循環を促す時期が訪れた事に伴い、この世界の神たる存在は異世界からの来訪者を喚ぶ。

来タレ邪神ヨ

無限とも言える程に連なった異なる世界。数ある異世界の中から喚ばれたのは、人間型の若い男だった。

汝ノ望ム力ヲ示セ

彼が思い浮かべた力は、今までに喚ばれた者達には見られ無い一風変わったモノだった。殆どの来訪者は、敵を打ち倒す強大な力や、永遠に続く生命を望んだ。

尤も、敵を打ち倒す強大な力を望んだ者は、やがて老いては打ち倒され、永遠に続く生命を得た者は、永遠に繰り返される離別を嘆いて自ら生命の終焉を選んだが。

汝ノ望ム力ちからを与エヨウ

異世界の若者から引き抜かれた『その若者の意思』は、カルツイ才の大地に肉体を得て光臨を果たした。

1話・邪神の祠

キンコーン

頭の中に響いたチャイムに、彼、たがみ田神 悠介ゆうすけは、もろもろ朦朧としていた意識が鮮明になって行くのを感じた。

「さむっ」

ひんやりとした冷たい空気にもぞりと身体を動かすと、背中や尻に触れるゴツゴツとした石の感触。

思わず目を開いて周囲を見渡す彼の視界に飛び込んで来たのは、揺れる篝火とその明かりに照らし出された石室のような空間だった。身体を起こして異常がないかを確かめると、改めて周囲を確認する。

どうやら石の台座のような場所に寝かされていたらしい。何故か素っ裸であった。台座の正面には、人間のような怪物のような何だかよく分からない形をした禍々しい雰囲気、黒っぽい像が飾られている祭壇らしきモノ。

「なんじゃこりゃ………なんかの儀式か？」

自分の身に何が起きたのか分からない悠介は、慌てるよりも恐怖するよりも、先ず情報と着る物を欲した。

高さ一メートル程で長方形の箱型をした石の台座から下りると、直ぐ傍に小さいテールのような台があり、その上に蜜柑みかんに似た果実っぽいモノと少し萎れた色とりどりの花束、それに衣服らしき織物が並べられている。

悠介は『まるで祭壇に捧げるお供え物のようだ』という印象を持った。小さな台もやはり石で出来ていて、台座や祭壇共々相当に古いモノらしく、表面に風化の跡が見られる。

「つーか、お供えモノ……なんだろうなあ、これ」

若干の迷いはあれど背に腹はかえられないと、怪しげな祭壇の像に手を合わせて織物に手を伸ばす。とりあえず素っ裸は落ち着かないのだ。悠介が少し黄色にくすんだ白い衣服らしき織物に触れた瞬間

キンコーン

「!っ」

頭の中にチャイムが響き、驚いて手を引っ込める。先ほど目覚めた時も聴こえた音だった。祭壇を振り返って見るも、特に変わった様子は見られない。もう一度石室内を見渡し、異常が無い事を確かめてそつと織物に触れた。

今度は何事も起きず、織物を手にした悠介は首を傾げながら周囲を気にしつつ白い衣服を広げてみる。

「女物のワンピース、じゃないよな？」

首と腕を通すのであろう縁取られた穴が三つ並んでいる他は至ってシンプルな布地。布団のシートに穴を開けて被るようなイメージが湧く。

「照る照る坊主じゃあるまいし……」

腰紐らしきモノをベルトのように巻くと、映画などで見た事のある古代人っぽい風貌になった。衣服を身に纏った事で人心地ついた悠介は、意識が朦朧とする直前の事を思い出す。

「夢　　って訳でもなさそうだ」

篝火に照らし出される石室の低い天井を見上げ、そこに描かれた丸い円盤状の大地に海や山が広がっているという大昔の人々が想像した世界図のような天井画に、強い既視感を覚える。

「……なんだろうな……？　変な声が聞こえて、身体が浮いて……、その後に見たような気がするけど」

声というよりも言葉、伝達内容の意思そのモノが直接飛び込んで来たかのような不思議な感覚。その後、境内から足早に立ち去る自分自身の姿を見送り、そこからの記憶があやふやだった。

悠介は一つ溜め息を吐くと、椅子代わりに座っていた台座から下りて石室の出口に向かう。祭壇を背にして正面に見える扉の付いていない出入り口の先には、狭くて暗い通路が続いていた。

石室を出て直ぐ右に伸びる通路は少し進んだ所で左に折れているので、先がどうなっているのかここからでは分からない。篝火から松明代わりに火のついた木片を引っ張り出して通路に翳す。

この木片に触れた時も頭の中にチャイムが響いたが、悠介は慣れた事にして気にしないようにした。

不思議と不安や恐怖は湧かない。突然の超常現象的な不思議事態で、精神的な麻痺状態にあるという雰囲気でも無く、心の奥底で何処か納得しているような感覚。悠介は自分の気持ちにそんな部分がある事を感じ取っていた。

真っ白な髪を風に靡かせながら小走りに駆ける少女が、村から少し離れた森にある祠へと向かう小道を行く。

「スン、祠に行くのかね？」

「あ、ゼシャルド先生」

色とりどりの花と、もぎたてのララの実を抱え、森に向かおうとしている村娘のスンに声を掛ける老齢の男性。ゼシャルドと呼ばれた彼は、この近くにある『ルフク』という村で村医者をやっている。

加齢によりくすんでいるが、その青髪と青い瞳は、彼が『神技人』であり『水の神：シャルナー』の加護を受ける『水技の民』である事を示していた。

しんぎびり
神技人

『神技』と呼ばれる特殊能力を持つ四大神の民。この世界に住む人々には四大神信仰が定着しており、この世は『炎』『水』『土』『風』を司る四つの神によって創られたものとされていた。

大多数の人々は其々の神から加護と祝福を受けた証として『神技』を宿している。基本、一人につき一つの神技が宿るとされ、神技を宿した人間には加護を受ける神からの影響が、髪や瞳の色にも濃く顕れるのだ。

ゼシャルドは四大神の中でも二番目に神格の高い『水の神：シヤルナー』の神技を宿す中等神民である。神技も治癒系の熟達した水技を扱えるので、神技人の街に住めば相当に贅沢な暮らしが出来る程の実力者なのだが、彼は所謂変わり者であった。

「先生、また新しい文献ですか？」

「うむ。今度はノスセンチスの古い祠にあった物らしいんじゃ」

「その祠も、やっぱり無技の村に……？」

「如何にもじゃ。やはり邪神と無技人には何らかの関係がありそうじゃなあ」

無技人とは、文字通り『神技』を宿していない者の事を指し、彼等は神技人達によって明確に区別されている。

神技人達は『等民制度』という神格の違いによる身分の差異はあれど、四大神の民として共に一つの街で暮らしているが、無技人達は一部の例外を除いて神技人の街に立ち入る事が出来無い為、街の周辺に集落や村を形成して暮らしていた。

一般的に無技人達が集まって暮らす村を『無技の村』という。そして各地の古い無技の村には『無技の祠』と呼ばれる謎の祠が幾つか残されているのだが、それらの祠を研究する者達からは禍々しい像が祀られる祭壇を指して『邪神の祠』とも呼ばれていた。

『邪神』とは、古くからカルツイオに伝わる『災厄の邪神』を指す。言い伝えでは、凡そ三百年周期でカルツイオに災厄が訪れらるとされており、今年は前回の災厄から丁度三百年目に当たる年であった。

但し、『前回の災厄』も『災厄の邪神』も全て言い伝えであり、三百年前当時や更にその三百年前の状況が記された詳しい資料等は残されておらず、識者の間では半数以上の割合でただの迷信であると認識されている。

「邪神ですか……、ほんとにそんなモノが居るんでしょうか？」

「ほほっ　ワシも幾つかの言い伝えにある魔獣の始祖みたいな存在が居るとは思わんよ」

『災厄の邪神』の正体としては、自然災害や疫病の発生などを指していたのではないかと考えられている。無技人達は怪我や病気を患っても、神技人達のように水の治癒系神技で直ちに癒すという術を持たない。

その為、大規模な災害が起きたり、疫病が広がったりした場合は壊滅的な被害を被る。無技人の村に邪神の祠が多いのも、そういった災厄が村に降り掛からない事を祈る意味で、邪神に見立てた像を祀っていたのではないかという説が主流だった。

「それなら、ルフクには先生がいてくれるので邪神も怖くないですね」

「ほっほっほっ スンはええ子じゃなあ」

うむうむと目尻を下げて微笑むゼシャールドは、年季を重ねて節くれた指でスンの白い髪を撫でる。白い髪に白い瞳という特徴を持つ少女、スンは所謂『無技人』であった。この地方に点在する神技を宿さない者達が住む村の一つ『ルフク村』に住んでいる。

神技人と無技人の間には絶望的な程に深い歴然とした力の差があり、それは絶対的な身分の差となって現れている。国や地方によっては無技人は亜人であるとされ、人間と認められていなかったりもするのだ。

常に虐げられる側の存在である無技人に、戯れ以外で施しを行うような物好きな神技人は居ない。そういう意味において、無技人の村に住み、無技人と同じ視線で接し、無技人達に治癒の神技を惜しみなく振るうゼシャールドは実に『変わり者』であった。

そしてスンは、そんなゼシャールドの事を神技人の医者としても、一人の人間としても尊敬していた。

「それじゃあ、御供えの換えに行ってきますね」

「うむ。氣いつけての」

祠に向かうスンを見送ったゼシャールドは、新しく手に入れた『災厄の邪神』に関する文献を流し読みながら、ルフク村への帰途に就く。彼がこれまで調べた邪神に関する文献には共通する一節があった。『邪神は世界に災厄をもたららせて消える』

「ふむ。これにも書かれておるな……やはり疫病の類と見るべきか」

ルフク村で村医者をやる傍ら、無技の祠についての研究もしているゼシャルドは、元々は邪神研究の為に無技の村に居を構えていたのだが、神技による恩恵の無い村人達の純朴な生活を観察する内、彼等の生きる為の知恵や努力に感銘を受けた。

神技人の街に居れば、ちょっとした小物を作るにしても、立派な家を建てるにしても、それらは生産や建築専門の神技職人によって行われ、専門職人以外の者が手掛ける事は殆ど無い。個人による神技の熟達度合いが生産物、建築物の出来を左右する。

だが無技の村では一軒の家を建てるにも、村人が総出で作業を行う。木材の切り出しから土台作り、扉や屋根造り等、技術と経験を持つ者がこれから覚えようとする者達に教えながら一緒に造り上げて行くのだ。

ゼシャルドは無技人達の互いに支え合い、助け合う生活の中に知恵や技術が受け継がれていく様子を認め、それらの環境が無技の祠のような古い祠と言い伝えを後世まで残せた理由ではないかと考えていた。

「前回の災厄らしき記述と時期から推測すると……シャルナーの火^ひ月の五日目から十五日目辺り。今日は十一日目か」

三百年周期の災厄については、街でもそこそこ噂になってはいるが、なんらかの災厄に備えて警戒するというような雰囲気は無く、至って平穏であり、酒の肴として話題にされる程度の扱いだっただ。

「……………？ 何時もより鳥が多く飛んでおるな」

何気無く祠がある森の空を見上げたゼシャルドは、自身に宿る神技の力が何かを感じているような気がした。祠に向かったスンの姿は既に見えない。

「まあ、何も無ければ無しでよし」

もう一度空を見上げ、森の上空を旋回している鳥の群を一瞥した彼は、ものついでだと祠に向かって歩き出した。

2話・黒い髪

ばさりつと、少女の足元に花束が落ち、その上をララの実が転がる。見開かれた白い瞳に映る人影が何事か呟きながら手を伸ばす動作をすると、少女は恐怖に表情を引き攣らせながら悲鳴を上げて逃げ出した。

「あ、ちよつと……」

石室がある建造物の外に出られた悠介は、そこで真つ白な髪を持つ少女と出会った。そして逃げられた。悲鳴つきで。

『ちよつと話を聞こうと思ったダケなのに……』と軽くへこみながら、少女の落としていった花束と果実っぽいモノを拾い上げる。どうやら石室にあった『お供えモノ』と同じ物らしい。

「あの子がお供えモノをしてたのか……？」

祭壇の不気味な像を思い出し、まさかお供えモノの服を着ていたのでアレと間違われたのでは？ と自分の格好を気にしてみたが、少なくとも祭壇にあった像のように人間だか怪物だかよく分からないような姿では無い。単に不審者だと思われたのかもれない。

「うーむ」

悠介は唸りながら辺りを見渡した。そこそこの高さの木々が周囲をぐるりと囲む静かな場所。木々の間は暗く、向こう側を見通せない程密集しているようだ。

ここは石室のあった建造物を中心に森の中を少し切り開いたような空間らしい。何となく敵かにも感じる雰囲気は、神社の境内を思い起こさせる。少女が立ち去った方角には、踏み均されて出来たのであろう獣道のような小道が木々の間の奥へと続いていった。

「行ってみるか」

ここでじっとしていても仕方が無いと、悠介は小道を歩き出す。突然の超常現象で何処とも知れない場所に放り出されるといって、現在進行形で異常事態の最中にあつたが、とにかく人に会って話を聞かなければ現状の把握もままならない。

先程の少女のような子が一人で来られる場所ならば、然程危険も無い筈だと樂觀的に考えていた。

「先生！ ゼシャールド先生ー！」
「むん？」

祠のある森に向かう小道を歩いていたゼシャールドは、森の方から駆けて来るスンの様子を訝しんだ。

何かに追われているかの如く怯えながら、縋りつくようにゼシャールドの腕に飛び込んで来る。ゼシャールドはまた街から来た不逞の輩にでも絡まれたかと、落ち着かせるようにスンの髪を撫でながら何があつたのかを訊ねた。

「どうしたね？」

「先生！ 邪神がっ 祠から黒い邪神が！」

「……邪神？」

一体何の事かと、森に続く小道の先に視線を向けたゼシャルドは、そこに現われた人影を覩て眼を瞠る。

「黒……じゃと？」

ビクリツと肩を震わせたスンは恐る恐る振り返り、森の入り口に立つ『黒い髪を持つ者』を認めると慌ててゼシャルドの背中に隠れた。神技人は身に宿す神技によって、髪や瞳に加護を受ける神の色が顕れる。

炎の神『ヴォルナー』の加護を受ける『炎技の民』は赤。

水の神『シャルナー』の加護を受ける『水技の民』は青。

土の神『ザッルナー』の加護を受ける『土技の民』は黄。

風の神『フォルナー』の加護を受ける『風技の民』は緑。

四大神の加護を受けていない『無技の民』は白。そして、『黒』は邪神像に使われている『災厄』の色だった。尤も、無技の祠に祭られている邪神像が黒色であつたが故に、そのようなイメージで伝わっているだけという部分もあるのだが。

少なくとも、ゼシャルドはこれまで生きて来た五十二年の間、邪神研究をしながら色々な国々を巡つた三十年余りの旅の中でも、黒い髪と瞳を持つ人間など、一度も見た事は無かつた。

己が身に宿る神技の力を呼び起こしながら、スンを庇うように一歩前に出たゼシャルドは、油断なく黒い髪的人物を見据える。

「お主、何者じゃ」

先程の少女を背に庇いながら、警戒を滲ませた様子で誰何を投げ掛ける精悍な顔付きをした初老の男性に、悠介はなんと答えようと迷っていた。敵意を感じる程ではないが、明らかに友好的とはい難い。

少女の事で何か誤解をされているのかもしれない。そう思った悠介は、とりあえず怪しい者ではない事を伝えようと口を開く。

「えーと、俺は田神悠介たがみゆうすけと言います。一応日本人です。あの……言葉は伝わってると思うんだけど」

「うむ、ちゃんとした共通語じゃ。タガミユースケ……お主の名前じゃな？ ニホンジンとは、種族の事かの？」

共通語を話していると言われて疑問符を浮かべた悠介だったが、先ずは円滑なコミュニケーションを取ることを優先した。日本とは国名である事、自分は日本語を口にしてるつもりである事などを交えながら、自身の身に起きた不思議な出来事を話す。

自身を喚んだ『声』の事から始まって、気が付くとまったく知らない場所に居たという悠介の話は、一般人が聞けば荒唐無稽で頭のおかしな者の妄想と斬って捨てられるような内容だったが、ゼシヤードにとっては一笑に付せられるモノでは無かった。

タガミユースケ
田神悠介

無技の祠から現われた彼は、自らを邪神と認めただ。それも異世界から何者かに喚ばれたと言う。

「興味深い話じゃな。しかし、邪神とは……」

「あ、俺普通の人間ですんで」

「んん？ お主今、邪神として喚ばれたと」

「いや、だから……声がそう言ってたダケで、俺自身は本当にただの人間ですから」

悠介とゼシャルドが話をしている間、スンはずっとゼシャルドの背中に隠れていた。

「それで、お主はこの世界に災厄をもたらせるのかね？」

「寧ろ俺が災厄を被ってる状態なんですけど……」

ある程度の事情を聞き、悠介自身は危険な人間では無さそうだと判断したゼシャルドは、一旦彼をルフク村まで連れ帰る事にした。スンが青褪めてプルプル首を振っていたが、ゼシャルドが「彼は大丈夫だから」と諭して彼女を先に村へと帰らせた。

村までの道中、何故悠介が邪神として喚ばれたのか、悠介自身にその気は無くとも、この世界に何らかの災厄をもたらせる要素を持つていないか等をテーマにして、二人は互いに質問と返答を繰り返して、疑問と推察を重ねながら村へと続く田舎道を歩いて行く。

「ワシ等に治癒不可能な病気を患っていた場合も、伝染すれば立派な災厄じゃからなあ」

「至って健康であります」

元々あまり社会的ではない性格の悠介だったが、珍しい研究対象に出会えて上機嫌のゼシャールドと掛け合いのような会話を続ける内に、随分と打ち解けていた。相手が親しみ易い話の分かる年輩者であった事も、悠介の心に安心感を与えるのだ。

異郷の地に単身放り込まれた現状に在って取り乱す様子も無く、終始落ち着いた対応を見せる悠介に、ゼシャールドは気さくに話しかけながらも、内面では警戒を怠らないよう注意深く観察していた。異世界から来たという話も、まだ結論は保留中である。

「しかしこの服は……もう少しどうにかならないかな」

お供えモノの服を纏っている悠介は似非^{エセ}古代人な自分の格好を嘆く。ゼシャールドの服装を見ると、下は緑色の混じった厚生地風のズボンに茶色のブーツ、上はゆったりした感じの白いシャツにマントのような上着を羽織っている。

西洋の中世貴族っぽい雰囲気だが、実に『普通の格好』なのだ。似非古代人な格好で並び歩くのは少々浮いていて恥ずかしい。

「せめて普通のズボンとシャツが欲し」

服を掴みながら言いかけて突然立ち止まる悠介。二丁三歩進んだ所で気付いたゼシャールドが何事かと振り返る。何処か焦点の合っていない呆然とした表情で立ち尽くしている姿に、ゼシャールドは少し警戒を深めた。

「どうしたね？」

「俺、やっぱ夢でもみてるのかな……」

「ほほ、ではワシ等は君が見る夢の中の住人かね？」

悠介はゼシャールドの洒落た返答に反応する余裕もなく、目の前にあるモノを呆然と見詰めていた。正確には『目に浮かぶ映像を』だ。彼の目には見覚えのあるワイヤーフレームで組まれたシンプルなレイアウトのメニュー画面が映っていた。

あの不思議な声に喚ばれる直前までプレイしていたゲームの目玉要素『アイテム・カスタマイズ・クリエートシステム』、そのメニュー画面である。カスタマイズするアイテムの欄内には、今自分が着ている服が実写3Dでクルクル回っていた。

そして、唐突に思い出して腑に落ちた事が一つ。

「ああっ そうか！ あのチャイム音、カスタマイズ出来るアイテムが手に入った時の音だ！」

なんだか一人で手を打って納得している悠介に、ゼシャールドは首を傾げるのだった。

「ふむ……、ワシには君の言っている事の半分も理解できんのだが……。何か思い出したのかね？」
「あー、ちょっと待って下さい」

画面の向こうに困惑顔のゼシャールドを見ながら、悠介は目に浮かぶメニュー項目を操作する。

服の色や形、丈等たけも変更する事が出来て、身にたけ着ける物としての性能もパラメーターの脇にあるスライダーを操作する事で大まかに設定可能。一つ一つの要素をさらに細かく弄る事も出来る。ほぼゲ

ームと同じ仕様らしい。

「カスタマイズポイントの項目が無いって事は無制限に弄れるのか……？ チート仕様かよ」

何処に焦点を合わせているのかわからない眼をして、何やらぶつぶつと意味不明な言葉を呟きながら指を宙に彷徨わせる様子は、傍から見てみると実に不気味である。しかし、ゼシャールドは悠介から何か神技に似た力が行使されている事を感じ取っていた。

『……何をする気じゃ、タガミユースケ』

お供えモノの服は生地がたつぷりあるので、シャツにする部分とズボンにする部分とに分割して、其々形を整えていく。ゲームではNPCショップで買った無地の服をプレイヤーの好みにカスタマイズしてキャラクターに着せる事が出来た。

ついでにと下着も作っておく。ポジションが定まらないと落ち着かないのだ。

「よし、こんなもんか。……………実行」

夢中になってカスタマイズ画面を操作していた悠介は、これがただの幻覚だったりしないかという怖い想像に一瞬の逡巡を見せつつ、何も起きなければ起きないで別に困る事は無いと、メニュー項目の実行ボタンを押してカスタマイズを反映させる。

ふわりと、光のエフェクトが悠介を包み込んだ。

「っー」

「なっ お主……!!」

お供えモノの服は、グレーのシャツと黒っぽいズボン、紺のブリフ風下着に其々変化した。

「きゃああああああ」

光のエフェクトが収まると同時に、少女の悲鳴が響き渡った。羞恥に染まる顔を両手で覆ったスンが、白い髪を靡かせて走り去る。ゼシャールドの事が心配になって様子を見に戻って来たスンは、光と共に現われた『邪神』のシンボルを直視してしまったのだ。

「あー……」

『また悲鳴つきで逃げられた』と、豊かな自然に囲まれた田舎道のど真ん中で、悠介は深く溜め息を吐いた。素っ裸で。

「そうかー、着てる服にカスタマイズ反映させたら装備外れるんだから、実際はこうなるよなー。ハハハ……」

乾いた笑いをこぼしながら、のそのそと地面に散らばる服を拾い上げては身に着けていく悠介に、ゼシャールドは今し方彼が見せた神技らしき現象について訊ねた。……スンの事は一先ず村に戻ってから対処する。

「今のは何だね？ 神技のような力の波動を感じたが、服の仕立てを一瞬の内に作り変える技なぞ聞いた事もないぞい？」

「神技？」

首を傾げる悠介に、どうやら本当にこの世界の人間では無いらし

いという確信を深めたゼンシャルドは、とりあえず村までの道中でこの世界の常識について話し、村で落ち着いてから彼の話を詳しく聞こうと考えた。

「うむ、先ずは何から教えようかの」

3話：ルフク村での生活

「あれがルフクの村じゃよ」

ゼシャルドが指した道の先には、木造の小屋が密集するように雑然と並び立っている。村民六十世帯、約二百四十人というそこそこの規模の村だ。村の向こう側には広大な平地が広がっていた。

「あそこには無技の民って人達が住んでる訳ですか」

「うむ。さっき話したかもしれないが、ワシはあの村で水技の民として医者をやっておる」

神技人が支配者としてではなく、住人として無技人の村に住むのは、あまり一般的な事では無いという話も教えつつ、ゼシャルドはここまでの道中で説明した神技人や無技人についての御復習おひやくいをする。

大多数の人々は世界を創造した四大神の加護を受ける民、神技人として神の力である神技を宿している。その力を持ってカルツイオの大地に君臨し、世界の隅々まで支配しているのだ。

神技を宿していない無技人は少数であり、一部では人の姿をした家畜程度に見られている。

「家畜は酷いつすね」

「神技を宿す者と宿さぬ者とは、それ程に力の差があるという事

「じゃ」

四大神の神格を軸にした等民制度によって神技人の中でも身分は明確に分けられており、同じ街の中でも住める区域が決まっている。炎技の民が高等神民として最も高い身分にあり、水技の民と土技の民は中等神民、風技の民は低等神民となっている。

「まあ、主に武力としての神技の強い者が上に居るといっわけじゃな」

「なるほど」

悠介にとって未知の世界であるカルツイオの一般常識など、一度には覚えきれまいと配慮したゼシャルドが要点を絞った講義をしてくれたお陰で、悠介もこの世界の仕組みをスムーズに覚える事が出来た。

「大まかに理解したなら、後は生活をしながら追々学んでいけば良い」

「お世話になります……」

突然喚ばれたこの世界に於いて右も左も分からない悠介は、先程のカスタマイズ能力に関する研究も兼ねて、当面の間ゼシャルドの家で厄介になる事になった。

ルフク村の周囲には深さ一メートル、幅も一メートル程の溝が掘られていて、村の入り口に当たる部分には丸木を合わせて作られた橋が渡されている。穀物庫などを荒らす害獣除けに掘られた防護溝

だ。

この地方には危険な動物や魔獣の類は居ないので、殆どの村で柵の代わりに溝が掘られている。ちなみに溝の底には篝火や松明にも使われる油木あぶらぎという特殊な性質を持った木の枝が敷き詰められていて、イザという時はこれに火を放って炎の壁を作りだす。

狩猟と近くの川での漁、森で穫れる木の実などを生活の糧として
いるルフクの村人達は、時折近隣の村との交流で農作物と交換しあ
つたり、この国の首都である大きな街に毛皮や家畜から取れる毛糸
を売りに行く事で稼ぎを得ていた。

悠介を見た村人達は、黒い髪を持つ見慣れない若者に皆が一瞬ぎ
よつとした様子を見せるものの、ゼシャールドの客人ならば問題な
いと、直ぐに表情を和らげる。悠介はゼシャールドがこの村で相当
に信頼されている人物であると認識した。

「ゼシャールド先生！

と邪神の人……」

「田神 悠介です」

家に着くなり飛び出して来たかと思つたら扉の裏に隠れるスン。

ゼシャールドの家で御手伝いもしているスンは、悠介に対して警戒
の念を露わにしつつも、客人用に部屋の準備を整えていた。

「ほっほっ 随分と怯えられておるのお。 なんぞしたのかね？」

「なんもしてませんよ」

とりあえず、ゼシャールドはスンに水桶を用意するように言い付
ける。悠介は祠からここまで裸足で歩いて来た為、多少足に擦り傷

などが出来ている。汚れを洗い落として傷の治癒をしておく事にした。

「靴はワシの予備を用意しよう。足に合わんかもしれんが……」

「あ、ども。サイズは弄れると思うから、大丈夫ですよ」

悠介は勧められた椅子に腰掛けると、自分の足の裏を覗き見た。

土や小石のめり込んだ痕があり、マメは出来ていなかったが所々充血している。『うわ』とか思っている所に、スンが水桶を持ってやって来た。

「あー……、ありがとう」

「……」

肩まで伸びる白い髪を頭の後ろで縛ったスンは、細い見た目の割りに結構力持ちらしく、水の入ったタライのような木の桶を危なげなく悠介の足元に置く。そして遠慮がちに悠介の足を洗い始めた。

その行動に驚いた悠介は思わず足を引っ込めそうになるが、テレビや映画でこんな感じのシーンがあったのを観たような気もする。ここで足を引っ込めるのは失礼に当たるかもしれない。これがこの常識なのだろうと思いついた。

少々恥ずかしいのと、くすぐりたいのは我慢した。暫し、静寂の中に足を洗う水音だけが響く。

「先生、済みました」

悠介の足を洗い終えたスンはゼシャールドにそう報告すると、汚れた水を捨てに桶を持って家の外へと出て行った。ゼシャールドは

家の奥に荷物を置きがてら、予備のブーツを引っ張り出して来た。

「うむ、どれどれ」

少し埃を被った茶色のブーツを脇に置いて悠介の足の具合を確かめる。そして僅かに意識を集中させるような動作をすると、悠介の足に出来ていた小さな傷は癒え、充血した部分が正常な状態に戻っていく。

「どうじゃね？」

「凄いですね、治りましたよ」

ちくちくしていた痛みも完全に消え、足の裏を見ると綺麗なつるの肌になっている。これが神技の力かと、悠介は魔法のような癒しの力に感嘆した。

「ふむ、神技の効果はあるようじゃな」

「あ、そうか。効かない可能性もあつたんですね」

中々聡明じゃなと、悠介の反応に頷くゼシャールド。その内心では、こちら側の神技による干渉が可能である事に一先ず安堵を覚えていた。これで悠介が邪神として危険な存在になった場合、神技で対抗出来る、と。

『まあ、危険な男には見えんがのう』

ゼシャールドの思惑を余所に、悠介は貰ったブーツに触れてチャイムを確認すると、早速カスタマイズを始めていた。

色とりどりの花束を抱え、ララの実が入った籠を持つ父の傍らを
テクテク歩く。時折父を見上げては何事が問い掛け、父はそれに微
笑んで答える。何時もの祠へと続く道。何時もの御供えを持って
く日。不意に、父が足を止めた。

どうしたのかと思い、道の先に目を向けると、緑色の髪をした若
い男と、黄色い髪を持つ男が立っている。

神技人だ　　そう思った瞬間、父に突き飛ばされて道脇の草む
らに転がり込んだ。投げ出されて宙を舞う花束に混じって、赤い飛
沫が辺りに飛び散る。草むらから起き上がって最初に見えたのは、
血溜まりに倒れ伏す父の姿。

父の名を叫び、駆け寄ろうと走り出すと、突然足元の地面が盛り
上がって土砂が襲い掛かって来た。何が起きているのか分からず、
必死にもがいている内に冷たいモノがお腹にぶつかり、それは直ぐ
に焼けるような痛みへと変わった。

二人の神技人が笑っている。身体から力が抜けて行き、自分のお
腹から赤いモノが流れ出ているのを見て、『ああ……自分は死ぬん
だ』と理解した。その時、全身に絡みついてきた土砂が崩れ落ち、
同時に、力の入らない身体も崩れ落ちる。

道の向こうから、青い髪をした人が走ってくるのが見えた。あの
人は知っている。あの人は神技人。だけど、あの人は

「……………」

朝の眩しい陽射しと小鳥の囀りが、先程まで見ていた悪夢の余韻を掻き消していく。溜め息とも安堵とも付かない息を吐き、スンはむっくりと身体を起す。久し振りに見てしまった昔の夢。もう長い間見る事は無かった過去の悪夢だ。

「……きつと邪神のせいだわ……」

もう一度溜め息を吐いてから、スンは寢床から起き出した。

「おはようございます、先生。……ユースケさん」

「うむ、おはようスン」

「おはよー」

スンが広間にやって来ると、悠介とゼシャルドがテーブルの上に並べた織物や服や靴などを選び分けていた。『服の仕立て屋で身を立てられるかもしれないぞ』と持ちかけるゼシャルドに、悠介は『妥当かもしれないですね』等と答えている。

「よし、実行」

指を宙に彷徨わせていた悠介がそう言って何かを押すような動作をすると、テーブルの上に置いてある織物やボロボロの古い靴などが光に包まれ、神技人達が身につけるような凝ったデザインの衣服や、新品のように艶のある靴に変わる。

異世界からやって来たという悠介が宿す邪神の神技。悠介はこの

力を『カスタマイズ・クリエート』と呼んでいた。

ふと、視線を感じて顔を上げた悠介は、スンと目が合った。スンはそそくさと広間を出て行ってしまった。この世界に喚ばれて数日、村の暮らしにも慣れた悠介は、村人達とも時々話をしたりする。しかし、未だスンとは打ち解けあえないでいた。

知らず溜め息を吐く悠介。そんな二人を見たゼシャルドは、スンが外に出た事を確認してから徐に切り出す。

「悪く思わんでくれ、あの子はちいとばかり不幸な過去を背負^かっておつての」

そう言つて口元に人差し指を立てつつ『内緒だぞ』と片目を瞑ると、スンが経験した過去の出来事^{トピック}を話して聞かせた。

「おや、スン。今日は先生の所に居なくていいのかい？」
「バハナおばさん……。うん、先生はユースケさんの神技研究で忙しいみたいだから」

木の実を穫りに森までやって来たスンは、そこでよく知った親しい隣人に声を掛けられた。昔スンが父と暮らしていた家の近所に住む妙齢の女性。彼女はスンの事を小さい頃から知っていて、スンの身の上を心配してよく気に掛けてくれる。

自身も夫を早くに亡くしており、表向きには狩り中の事故という事になっているが、その実、神技人の戯れで殺された事を知ってい

た。神技人絡みで父親を亡くしたスンの気持ちは、痛いほど分かるのだ。スンは神技人の若い男にトラウマを持っている。

「まだ、慣れないのかい？」

「……いい人だって事は分かってるの、でも……どうしても怖いの……」

スン自身、悠介に対する態度や気持ちには、自分の心に問題がある事を分かっている。しかし、幼少の頃に刻み付けられた神技人に対する恐怖は簡単には拭えない。ゼシャルドからは、悠介は神技人ではないらしいと聞かされている。

それでも、あの力は神技そのモノであり『邪神の祠』とも呼ばれる『無技の祠』から現われた異世界の神技人。この世界に『邪神』として喚ばれた、言わば『邪神技人』であると認識してしまう。

「まあ、急ぐ事はないさ。ゆっくり時間を掛けて、少しずつ何かお話でもしてみなさいな？」

「うん」

朝の挨拶くらいは出来るようになったのだ。少しずつ慣らして行けば、普通に接せられるようになるかもしれない。

『今度、お料理の味はどうかとか……聞いてみようかな』

スンが村近くの森で親しい隣人と話しながら木の実を穫っている間、ゼシャルドの家ではスンの過去を聞かされた悠介が唸っている。

た。一般常識として説明されたダケでは今ひとつ実感の湧かなかつた神技人と無技人の関係が、よく分かる話だった。

「その二人はどうなつたんです？」

「ワシの口封じを目論んだのでな、一人はその場で仕留めたが、風技の民の方には逃げられたのう」

ルフクの村は今もそうだが、昔はこの地方にも支配者として管理する神技人の居ない無技の村が幾つか存在していた。

所有主を持たない無技人はしばしば野生動物と同じ程度に扱われる場合がある。力を覚えたての若い神技人の中には、そういった無技人達に対して神技の力試しと己の享樂の為に、誰に憚る事なく無体を働く者もいるのだ。

スンとその父親を襲つた若い神技人は、駆けつけたゼシャルドを見て彼の所有物を許可無く殺めてしまったかと勘違いをした。

水技の民であるゼシャルドは、土技の民とは同じ中等神民ながら、土の神：ザルナーと水の神：シャルナーでは、シャルナーの方が神格が高く、その関係から土技の民より上の身分にある。風技の民は低等神民なので神技人の中では一番身分が低い。

上の身分にある者の所有物を勝手に殺めたとなると、神民裁判では一方的に裁かれる事になる。窃盗罪で極刑か、財産没収の上奴隷の身分に落とされるかもしれない。それを恐れた彼等はゼシャルドを亡き者にしようとした。

ゼシャルドの神技は治癒系の水技だが、熟達した治癒の力は使い次第で肉体を破壊する効果ももたらせる。

「風技の民は伝達や移動に優れておるからな、土技の民の血管をちよいと絞めてやっつてる隙にまんまと逃げられてしまうたわい」

「怖い話ですね……」

同時に酷い話だと、悠介は憤る。何処の世界にもそういう輩は居るものなんだなあと遣り切れない気持ちになるのだった。

「お主の住んでいた世界にも、そういう輩は居るのかね？」

「まあ、変な奴は偶に居ますよ、でも人を動物扱いとかは今は先ず考えられないですね」

少々行き過ぎた所も見られるが、人権尊重という風潮があるので殆どの国で人々の人権は守られる傾向にあるという悠介の世界の話に、ゼシャールドは『良い所じゃなあ』と、色々な感情が籠もった表情で頷いた。

「少し長話になったのう」

テーブル上の荷物を一旦片付けると、ゼシャールドは街へ売りに行くモノを纏め始める。荷造りを手伝っていた悠介は、椅子の上に置かれている丈夫そうな袋の口から緑色の物体が飛び出しているのを見つけた。

椅子の下にも棒状の物体が一本落ちていたので、なんだろうかと拾い上げてみる。

キンコーン

宝石のような半透明の物体。人差し指くらいの長さで、五ミリ程の厚さ。鉛筆を思わせる六角形をしている。両端は平らだ。

「ん？ ああ、それは晶貨しゅうかじゃよ。その袋はワシの財布じゃ」

非常に硬い物質で出来た棒状の貨幣『晶貨』。カルツイオ全域に流通している晶貨は、炎技の民と土技の民によって作り出される。光を凝縮して創られると謂われており、製造法は門外不出。

この国の首都でもあるカルツイオで最大規模の街『サンクアデイエツト』。その街に王族として君臨する炎技の民の一族が、晶貨の造幣を管理している。

やはり四大神にちなんで四種類の晶貨があり、其々色によって価値が決まっているのだが、赤いヴォルナー晶貨一本は青いシャルナー晶貨五本、黄色いザッルナー晶貨で十本、緑のフォルナー晶貨だと三十本分の価値がある。

「ややこしい……」

「ほっほっほっ 後々の為にも覚えておいた方がよろしいぞ」

悠介は緑色半透明のフォルナー晶貨を光に翳して覗き込みながら、コレに触れた時にもチャイムが鳴ったので『弄れるのか?』とカステマイズ・メニューを開いてみた。

晶貨袋さいふに一本だけ混じっていたヴォルナー晶貨を拝借し、そのパラメーターを見ながらフォルナー晶貨と見比べると、一つの部分が違っているだけで殆ど同じパラメーターになっていた。

同じ種類の晶貨でも微妙に違っている部分はあるが、そこは誤差の範囲なのだろう。精密機械のようにぴったり同じモノが作られる訳ではないようだ。

「……実行」

悠介の手に乗せられたフォルナー晶貨が光に包まれ、エフェクトが収まると、そこには赤い半透明のヴォルナー晶貨があった。

「ちよつと待て、お主！」

ガタンツと椅子を鳴らして立ち上がったゼシャールドが、慌てて周囲を見渡している。今この広間には悠介とゼシャールドの二人以外、誰も居ない。悠介は『不味かつたですかね？』等と声を潜めながら、カスタマイズした赤晶貨ヴォルナーを渡す。

変化した晶貨は確かに本物だ。炎技の民と土技の民の高位職人によって造幣される晶貨は、偽造など通常は出来ない。商売をする土技の民の神技による鑑定は決して欺けない。が、これは紛れも無く本物である。

「……よいか、ユースケ」

誰にも言つてはいけない。人に見せてもいけない。所で、ここにフォルナー晶貨が八本あるのだが

今日の昼下がりに、ゼシャールドの晶貨袋さいぶにあつたフォルナー晶貨八本が何処かに消え、何故かヴォルナー晶貨が八本ほど増えていたそうなのさ。

不思議な事もあつたモノである。

4話：サンクアディエツト

カルツイオで最も広い平原地帯を国土に持つ『フオンクランク』その平原の実に五分の一に相当する規模の巨大な街、『サンクアディエツト』。炎技の民の中でも特に強力な神技を宿す一族が王となり、代々この街を首都として国を支配している。

街は等民制に基づいて各神民の生活圏が分けられており、神技で補強された上層の建物はかなりの強度を誇る。王族の宮殿では十階建ての建物なども実現していた。中層以下の建物や防壁にも、多少の神技による補強がされている。

中央の高等神民居住区域である『高民区』は周りを高い防壁に囲まれているが、区域一帯は防壁よりも更に高く築き上げられた高台にあった。『高民区』の周囲に防壁を挟んで『中民区』が広がり、その外側に『低民区』がある。

中民区も高民区と同じ構造で、下の区域と仕切る防壁よりも高い段差の上に街並みが造られ、上の区域からは下の区域を見渡せる造りになっているのだ。低民区も平地よりは高い位置にあり、街の規模が拡張される場合は新たに石畳を敷いて行く事で拡げられる。

基本的に中心部へ向かうほど地面が高くなる構造なのだが、一期無秩序に行われた開発政策の影響で街の全景は少々歪な形状になっている。街の外周に隣接する無^{むまひつ}技人街^がは例外的に補強された建物

もあり、低い立場ながらそれなりの恩恵も受けていた。

高民区の頂上に建つ『ヴォルアンス宮殿』。街の拡張開発と共に上へ上へと増築が繰り返された宮殿は、もはや建築当初の面影は無く、古い世代の部分は石畳の下に埋まっていて、或る種、地下迷宮の様相を呈している。

王族の住居でもある最上階付近の外壁や屋根には晶貨と同じ材質の装飾が埋め込まれ、太陽の光を浴びて常に輝きを放っていた。

そんな宮殿の上層階にある一室で、高級そうな赤いドレスを纏い、匠の神技で作り上げられた至高の腰掛から退屈そうに投げ出した足をぶらぶらさせている少女が、読み掛けだった本をテーブルの上に乗せ、ぼいっと放り出す。

「つまらん、退屈じゃ」

「姫様、はしたないですよ」

あろう事か頭の後ろで手を組み、椅子の上で胡坐を掻いてはギツコンギツコンと揺らし始める憤みを持つてくれない若き姫君に、専せん属警護兼教育係として日々頭を痛めている側近の男が見兼ねて窘める。

「おやめなさい、淑女のする事ではありません」

「別に良いでは無いか、誰に見られるでもなし」

退屈だ退屈だと椅子を揺らす炎技の民の姫君ヴォレット・ヴォイラスに、側近のクレイヴォルは眉間に皺を立てながら歩み寄ると、転ぶ前に椅子の背を抑えて止めさせた。

「むー」

「むーではありません。姫様にはもつと王族としての自覚を持って頂かなければ」

炎技の民の頂点に立つ者として『高貴で気高く力強く、常に光輝いている存在でなければイケない』という、何時もの御小言を貰ったヴォレットは辟易した想いで聞き流し、つまらなそうに爪を弄りながら呟いた。

「父様も周りの官僚達も中身は皆真つ黒じゃ、まるで邪神像のよう
に」

「邪神像？」

「無技の祠に祭つてあるという黒い像の事じゃ」

「姫様、炎神の末裔たる高貴な者が、そのような下賤なる物の事を口にしてはなりません」

再び始まった御小言にウンザリ顔で頬杖を付いたヴォレットは、更にクレイヴォルの眉間に皺を増やすような事を口にする。

「ゼシャールド爺に会いたいのう」

「……………」

ヴォレットはあからさまに眉を顰めるクレイヴォルの様子を覗き見ると、態とゼシャールドの事を話題にし始めた。ここ数年はめつきり宮殿にも来なくなってしまうが、ヴォレットが幼少の頃にはよく遊び相手を務めさせていたのだ。

「あのような変わり者の事を話題にすべきではありません」

「なぜじゃ？ ゼシャールドの熟達した水技は、宮殿水神隊の精鋭達さえ凌ぐと聞くぞ？」

宮殿には街の巡回と警備を担う一般衛士である『神民衛士隊』の他に、主に宮殿関係者を対象に活動する精鋭部隊が存在していた。『水神隊』は治癒系の水技を扱う精鋭で編成される。ちなみに、クレイヴォルは王族を専属警護する『炎神隊』の隊長である。

「姫様が懇意にするような事を口にすれば、姫様のご寵愛を賜らんとする者達に誤解を与えます。あの者にも災いを招きませぬぞ」

「……ふんっ　ゼシャルドはそんなに柔な男ではないわ」

唇を尖らせたヴォレットは拗ねたように顔を背けた。

「先生は街に出たんだったね、彼も一緒にかい？」

「うん、ユースケさんも一緒に。三日ほど家を空けるって」

籠に詰めたララの実を持ってバハナの家を訪ねたスンは、干し肉と交換しながら雑談を交わしていた。

スンの持つて来たララの実は悠介がカスタマイズして味を調べた特別製で、通常の実ではふにゃふにゃに熟れきらないと出せない甘みが、歯応えのある瑞々しい実の段階で楽しめるとあって、村人達にはとても人気がある。実はスンも大好物だ。

「そうかい。じゃあ食事時は家においでなさいな」

「うん、ありがとう」

バナナはスンの事を実の娘のように思っ
て可愛がっている。普段と変わり無い様子
のスンを観察していたバナナは、この子から
色気のある話が聞けるようになるには、まだ
まだ掛かりそうだねえと内心で溜め息を吐
くのだった。

「うーむ、快適じゃのう」

悠介のカスタマイズによって、やたら乗り
心地の良くなった荷馬車が街道を行く。ル
フクの村からサンクアディエットの街まで
は、街道を真っ直ぐ進むだけの道程を、馬車
で片道一日掛かる程の距離だ。

早朝に出発すれば夜には到着出来る。地平
線まで続く街道の先に、薄いベージュ色をした
街並が霞んで見えていた。

「最初、遠目に見た時は山かと思いましたよ」

「ほっほっ まあ、そう大差ないわい」

御者台で手綱を握るゼシャールドは、荷台の
悠介にサンクアディエットについて説明する。
人口の増加と共に街の規模が拡張され、王
が街の隅々まで見渡せるようにと、宮殿のある
高民区を高い場所へ上げていく内に、現在のよ
うな形状の街になっただけらしい。

「街の下には古い街が埋まっておるのじゃ」

「へっ」

歴史を感じさせる趣きがあると関心を示す
悠介に、ゼシャールドは同じ感性を持つ理解
者を得て嬉しそうに頷いた。

ゼシャルドの水技で疲れ知らずの力走を見せる馬と、乗り心地や走行性能が高級馬車並に向上している荷馬車の組み合わせにより、殆ど休憩無しで走り続ける事が出来た悠介達は、予定よりも早く街に到着した。

「うむ。今ならまだ露店市場が開いてるかもしれんのもう、少し歩いてみるかの？」

荷馬車を適当な空き地に停めて、近くで屯している地元の無技人を見張りに雇う。彼等は街に立ち寄る商人達から馬や馬車の見張りに雇われる事で稼ぎを得ている。無技人達が街の外周に住む事で受けられる恩恵の一つでもあった。

「えっ！　だ、だんなコレ……」

「あゝ生憎と今持ち合わせが無くての」
「……」

渡された黄晶貨を見て、種類を間違えて無いですかと慌てる地元の無技人に、ゼシャルドは肩を竦めてみせる。

馬車の見張りなど緑晶貨一本で十分な報酬となるのだが、ゼシャルドの晶貨袋にあった緑晶貨は赤晶貨に化けたので、一番額の小さい晶貨は黄色のザッルナー晶貨しかなかったのだ。通常の三倍もの報酬に、地元の無技人は気合を入れて見張りに就くのだった。

「なんか凄い気合い入ってましたね？」

「彼等にとってはそこそこ大金じゃからなあ」

目深に被ったフードの先を掴みあげて、少し顔を覗かせながら問い掛ける悠介に、飄々と答えるゼシャルド。フード付きマントは悠介の髪を隠す為に用意したモノだ。髪を染めたり、カツラ等で素

の色を偽る事は御法度である。

神技を宿している事を示す波動は感じれど識別が出来ず、顔立ちからして異質な雰囲気を持つ悠介を、違和感無く人目に触れないように配慮するところになった。傍目からはゼシャールドの従者のように見えるので都合も良い。

何か掘り出し物があれば購入しようかと夕刻の街へ繰り出した悠介とゼシャールドの二人は、表通りの露店を見て回る。露店市場は低民区の名物通りで、大きい街だけにピンからキリまで品揃えも豊富、連日多くの人々で賑わっている場所だ。

露店が出せるのは低民区でもこの表通りに日没までと決まっています、中民区から上の区域で商売をするには、権利を購入して店舗を構えなくてはならない。

高民区ともなると全ての店が高級店で、衣服や装飾類の店は殆どオーダーメイド。飲食店も正装でなければ入店を拒否される。

「持って来た荷物はここで売るんですか？」

「そうじゃ。上に知り合いの店もあるんじゃないが、お主の事を聞かれると面倒じゃしな」

明日は朝から露店場所を確保したら、持って来た服や靴、家畜から取れた毛糸などを売りに出し、稼いだ資金で日用品を買って帰るのだ。

この前スンが割ってしまったお皿の代えに丁度良さそうな食器は無いかと、焼き物露店を見ていたゼシャールドは、不意に強力な神技の波動を感じて通りの向こうに視線を向ける。

「どうかしたんですか？」

「うむ……」

悠介も吊られてその方向を見ると、通りの人込みが割れて、甲冑が見え隠れする色鮮やかな衣装を身に付けた一団が現われた。街の入り口付近から時々見掛けていた『神民衛士』という街の治安を守る衛士とは少々雰囲気の違い、如何にも気位の高そうな一団だ。

「なんですかアレ」

「宮殿の王族関係者辺りが『御忍び』で降りて来とるんじゃ」

「御忍びっ？」

あの大名行列染みた目立つ行進の何処ら辺りが『御忍び』なんだと、悠介は思わずツッコミを入れる。悠介の知る『御忍び』の定義を聞いたゼシャールドは、『成る程のう』と頷きながら、ここでの御忍びが何故こうなのかを教授してくれた。

神技人は神技人の宿す神技の波動を感じ取る事が出来る。王族は一年を通して行われる祭事などで民に広くその力を顕示する為、街の住人なら殆どの者が、王族の纏う神技の波動を見分けられるのだ。従って、身分を隠して街に降りても直ぐにはばれる。

同じ宮殿関係者でも裏方の者なら民に知れ渡っていないので、悠介の言うような『御忍び』も可能だが、王の一族ともなれば小さい頃から下々の民に『お前達が敬うべき御仁である』として知らしめられているので、身分を隠す事は実質不可能なのだ。

以上の理由から王族の『御忍び』とは、周囲を宮殿衛士隊に護られての下街見物、物見遊山であり、一般神民達が膝を付いて服従の

意を示さなくとも良い状態の事、となる。

「まあ、高民区に住む者が下街に降りてくる事など滅多に
……
まずい」

御忍びの一团を見つめながら解説をしていたゼシャルドは、何かに気付いたように気まずげな顔になると悠介に目配せをした。

「直ぐにここから立ち去るぞ」

「え、え？ どうしたんですか急に」

「姫様、そろそろ宮殿に戻られませんと……」

「つまらない事を言うな、まだ街は賑わっておるではないか」

側近と数人のお供を連れて『御忍び』で街を歩くヴォレットは、夕暮れ時の表通りに並ぶ露店を見て回る。なにか面白い物はないかと下々の民の様子を観察していると、不意に懐かしい波動を感じた。立ち止まって周囲を見渡す。

『あれは……！』

急に足を止めて立ち尽くす我侷な姫君に、側近やお供の者達が何事かと訝しんだその時、ヴォレットは突然警護の輪から飛び出して人込みの中に駆け出した。思わぬ行動に一瞬呆けた側近のクレイヴォルは、我に返ると慌てて後を追う。

「見つけたぞっ ゼシャールド！」

「ぐっは……」

「うおっ なんだ！」

そそくさと、この場から立ち去ろうとするゼシャールドに促されて通りを出ようとしていた悠介は、いきなりゼシャールドの腰にタックルをかまして来た少女に驚いた。赤毛のツータールで露出の高い紅のドレスを纏った気の強そうな女の子。

「姫様……年寄りはおちつと労わってくれんかのう」

「なにを言う、何時も彼方あつち此方こちに出掛けては世界中飛び回っておるくせに」

お供の『炎神隊』を引き連れてようやく追いついた側近クレイヴォルは、ゼシャールドの姿を認めると渋い顔をして見せた。

彼はゼシャールドの事を快く思っていない。クレイヴォルが仕える現国王『炎壁王』と謳われるエスヴォブス・ヴォイラス十八世は、ゼシャールドとは旧知の仲であったのだが、今は事情があつて関係が拗れている。

『ゼシャールドには関わるな』というエスヴォブス王には、何か氏に対して遠慮しているかのような素振りが見受けられる。

エスヴォブス王の強力な炎技に惚れ込み、エスヴォブス王の忠実な配下を自認するクレイヴォルは、そこに不満を持っていた。『王はゼシャールドに何か弱みでも握られているのではないか……？』と。

そんなクレイヴォルの内心を余所に、ヴォレットはゼシャールドに纏わり付いて『宮殿に來い』と誘ったり、丁重に断られてゴネた

りしている。炎神隊の衛士達は隊長の心中を察しながら警護の輪を作って姫君の護衛の任を務めるのだった。

「もう日没ですぞ？ 早く宮殿に戻らねば、お父上殿にも心配を掛けてしまいますぞい？」

孫に接するようなゼシャルドの態度に不満なヴォレットは、むうと腰に手を当てて頬を膨らませたかと思うと、ふつと表情を変えて擦り寄り、ゼシャルドの胸元に指を這わせながらシナを作る。

「わらわはもう子供ではないぞ？ もっとそなたの事を知りたいのじゃ……」

「さてはて、この老いばれに姫の興味を引くような秘密がありましたかのう」

「！っ 姫様、そのような振る舞いはっ！」

慌てる側近を軽く意識の外に追いやったヴォレットは、渾身の誘惑を惚けた反応で躲されて再び頬を膨らませた。

「ちっ 今のわらわでは色気が足りんか。だがあと数年もすれば尻も乳も育つ筈じゃ、必ずわらわの魅力で靡かせてやるぞえ？」

「その頃にはワシヤヨボヨボのじじいですじゃ」

ほっほつと笑って返すゼシャルドに唸るヴォレット。やきもきしている側近クレイヴォル。寡黙に任務を遂行している炎神隊の衛士達。一人蚊帳の外で成り行きを見守る悠介は『凄い御転婆姫っばいなあ』と、側近の人達を大変そうに眺めていた。

「お前、妙な波動を感じるな……」
「へ？」

ぼけーとしていた所へ急に話しかけられた悠介は、間の抜けた調子の声を返す。振り返った悠介の目の前に、整った顔立ちで自信に満ちて勝気な雰囲気を携えた紅い瞳が迫っていた。

ゼシャールドの傍から離れないフードを被った者の存在に気付いたヴォレットは、神技の識別が出来ないという今まで感じた事の無い波動に興味を持ち、顔を覗き込もうとする。が、さり気無く間に入ったゼシャールドに阻まれてしまう。

「彼は人見知りがありましたな、姫がそんなに見詰められては緊張して倒れてしまいますわい」

「……ふっふん」

不思議な波動を持つフードの男に対し、ゼシャールドが庇うような素振りを見せた事が面白く無いヴォレットは、半眼になって鼻を鳴らすと、大人しく引き下がる。ように見せかけて、ピンツと指で弾くような仕草を向けた。

その瞬間、ボウツと音を立てて悠介のフードが燃え上がった。

「うおわー！」

「むっ！ これはイカン」

「あははははっ」

炎は直ぐにゼシャールドの水技によって消し止められたが、ヴォレットが神技を使った事で辺りは騒然となった。笑い転げているヴォレットに駆け寄ったクレイヴォルが強く自重を促す。

「姫様！ 御自重なさい、王族の神聖なる神技を無闇に下々の民の前で見せるモノではありません！」

「そっちかよっ！」

危うく頭を燃やされ掛けた悠介は、暴走御転婆姫に対する側近の諫言に突っ込んだ。王族の姫と側近の会話にツッコミを入れて来るという、一般低等神民には有り得ない言動を行った悠介に、ヴォレツトはまたも興味を引かれて視線を向ける。そして固まった。

「つたく、なんつー無茶をしゃがるんだこの姫さんはっ じゃじゃ馬にも程があるだろ」

焦げ臭くなったフード付きマントを脱ぎ、後でカスタマイズして修繕しようかと畳みながら悪態を付く悠介は、周囲の喧騒が静まっている事に気付かなかった。

「お、お前……」

「なんだよ？」

「お前、災厄の邪神か……？ わらわの国を滅ぼしに来たのか！？」「へ？」

またしても間の抜けた調子の声を返す悠介。ゼンヤールドは『あちやー』とオデコを押さえて天を仰いだ。王族が『災厄の邪神』の存在を指摘した事で、静まり返っていた周囲は大騒ぎとなった。

邪神と呼ばれるモノの正体が何であれ、『三百年周期で災厄をもたらせる存在』の实在が仄めかされたのである。

「うーむ、流石は災厄の邪神というべきか……エライ災厄じゃ」

「いや、洒落たこと言ってる場合じゃないですよコレ」

ヴォレットを直ちに後方へ避難させた側近クレイヴォルは、炎神
隊指揮官の顔になると部下達に命令を下す。

「我等が主君に仇なす者共を捕らえよ！」

5話・ゼシヤールドの思惑

『さいやくのじゃしん?』

『そうですじゃ、人でも魔獣でも無い災厄の化身ですぞ』

絨毯の敷かれた広い部屋の真ん中に転がり、開かれた大きな絵本に描かれている黒い邪神の絵を指しながら問うヴォレットに、ゼシヤールドはニコニコと答える。

『ちちサマやじいじでもかてないの?』

『災厄の邪神に抗^{あいつが}えるのは、良き人の心のみですじゃ』

『じゃあ、わらわはよきひとになってちちサマやじいじをたすけてあげる』

『ほっほっほ、姫は良い子ですよ』

『 というような事があつてのう』

『 そんな関係だったんですか』

『 あの頃の姫は素直で良い子じゃった』と昔を懐かしむゼシヤールドに、『今は見る影も無いですね』等と相槌を打って本人から膨れっ面を向けられる悠介。余裕があるのでは無く、単に開き直っているのだ。

日没間際の低民区表通りは露店を片付ける商人と、夜の商売を始める唱謡うたうたい、それを物色する客などが入り混じり、雑然とした独特の雰囲気ふんいきに包まれる時間帯なのだが、今日は普段と違った物々しい気配きはいが通りの一角を占めていた。

突然始まった炎神隊の捕り物に、仕事を放り出して集まる野次馬と化した見物衆。ちなみに唱謡いとは娼婦の事である。

悠介とゼシャールドを取り囲んでいる炎神隊の衛士達は、槍を向けて牽制しながらもその表情には戸惑いの色が見受けられる。

数年前、エスヴォブス王は『誕生祭』という新年を祝う祭事の席で、全神民衛士に対して『ゼシャールドには関わるな』と勅令を出したのだが、それには『手を出すな』というニュアンスが多分に含まれていた。

それ以降、ゼシャールドは宮殿を訪れる事も無く、街からも離れた場所にある無技の村に住んでいる。王とゼシャールドの間にごんな事情があったのかは明らかにされていないが、王にはゼシャールドに対して何処か引け目を感じているような雰囲気があった。

「何をしているっ 早くその者達を捕らえよ！」

「し、しかし……王の命令に背く事になるのでは……？」

「それに、現時点で拘束に値する正当な理由があるとは思えません」

拘束を命じるクレイヴォル隊長に対し、衛士達は王の勅令内容に反する不安と、拘束理由がイマイチはつきりしていない事を挙げて疑問を呈する。下っ端の神民衛士と違い、宮殿衛士隊に所属する者ともなればその程度の提言ていげんは許されているのだ。

「かまわん、父様にはわらわから言っておく」

ゼシャールドに会えた事と、思わぬ退屈凌ぎが見つかった事で上機嫌なヴォレットは、面白そうに言い放つ。二人を捕らえれば宮殿にお持ち帰り出来るのだ。ゼシャールドには甘えられるし、不思議な波動を持つ無礼な黒髪の男にも興味があった。

「姫様もああ言っておられる、災厄の邪神と目される怪しげな者を街に呼び込んだのだ……やはり王の御命を狙って」

「ほっほっ お前さん、都合の良い時だけ姫の言を聞いたるじゃろ」「っ……なんだと！」

ちょこつと凶星を突かれてしまい、思わず声を荒げたクレイヴォルに、ゼシャールドは組み易しと見て事態の收拾を図る為、更なる追い討ちを仕掛ける。まだ悠介の存在と力の事は伏せておきたいと考えた。

「うーむ……お主、忠義が過ぎて主君を死なせるタイプじゃな」

「んな……っ」

「エスヴォブスからワシに関わるなど言われておるじゃろう……王が大事なら、その令に従った方がよいぞ？」

「それは、どういう意味だ！」

飄々とした態度から一転、忠告を与えるような口調で鋭い視線を向けるゼシャールドに、クレイヴォルを始め包囲している炎神隊の衛士達も身構える。面白そうに眺めていたヴォレットも、ゼシャールドの纏う気配が変わった事にビクリと身を竦ませた。

「先生先生、煽ってどうするんですかつ」

「大丈夫じゃ、ここはワシに任せておけ」

ひそひそと言葉少なに悠介と内緒話を交わしたゼシャールドは元

の飄々とした雰囲気に戻ると、苛立ちと動揺を隠せない様子のクレイヴォルに両手を広げるゼスチャーをしながら言った。

「エスヴォブスはワシを遠ざけておきたいのじゃよ、理由は聞くで無いぞ？　なのにお前さんはワシ等を宮殿に招待しようという」

「招待ではない！　第一、罪人として捕らえたお前達を王に会わせる訳がないだろう！」

「……ワシの弟子が、宮殿に何人いると思うね？」
「っ……！」

宮殿には嘗てゼシャールドに神技指導を受けた者も多く居る。水技の民で編成された宮殿衛士隊の治癒系精鋭『水神隊』は、衛士の殆どがゼシャールドを師と仰ぐ者達だ。ゼシャールドを拘束して宮殿に連れ帰れば、間違いなく彼等が抗議や陳情に動く。

王の意向に従って普段から関わりを持たないよう距離を置いているのに、『忠実なる部下』がそれを破るのか？　と問われると、己の忠義と猜疑心を前提にした行動を取っているクレイヴォルは言葉に詰まる。

「で、では……その黒い髪の男はどう説明する！」
「ユースケがどうかしたかね？」

矛先を向けられて首を竦める悠介。ヴォレットは『ユースケというのか』と、名前をチェックする呟きを漏らした。

「とぼけるなっ　災厄の邪神と思わしき者を、何故街に呼び込んだのだ！」

「はて？　ワシは『災厄の邪神の正体は疫病説』派なんじゃが……お主ら、まさか邪神の存在を信じておるのか？」

そう返されると、互いに顔を見合わせて『御伽噺おとぎばなしだよなあ』と目配せし合いつつ戸惑う事しか出来ない衛士隊の面々。元々ヴォレットが悠介の黒い髪を見て『災厄の邪神か』と騒いだ事が、この捕り物劇の切っ掛けだったのだ。

クレイヴォルも一瞬驚きはしたものの、本物の『邪神』なる存在が実在する等とは思っていない。『災厄の邪神』云々は姫が騒いだ事を此れ幸いと、ゼシャールドを捕らえる口実に利用したダケなのだ。

戸惑いと沈黙が場を支配する中、頃合と見たゼシャールドは仕上げに入った。

「知っておるか？ 全ての色が混ざると黒になるそうじゃ」

神技の民が宿す神技は、基本的に四大神の内の一つなのだが、稀に二つ以上の神技を宿している者が生まれる事もある。

「ワシは彼の黒髪は四大神全ての神技が混ざり合った状態で宿っておる影響だと見ている」

『この子を授かった親も、お主らと同じ様に邪神を思い浮かべたのかもしれない』と、ゼシャールドは悠介が遠い異国の地にある無技の祠に捨てられていたのを、近くの村の無技人達によって保護され、最近まで隠し育てられて来たのだと身の上話を語った。

実に流暢にホラを吹くゼシャールドは、周囲の野次馬達も含めて『そうなのかあ』と皆が納得した表情を浮かべたのを確認すると、最後の締めに入る。軽く咳払いをして背筋を伸ばし、威厳ある口調で朗々と紡がれる邪神伝説に関する考察。

「各地の無技の祠にある邪神像が何故黒いのか、全ての色が混じる、つまり四大神の力が統一されず調和していない混沌とした状態を指し、混沌は災厄を招く邪悪なモノと定義して黒を混沌の象徴にしたとも考えられるが、古来より学術とは縁の無い生活をしているとされる無技人が神技についてそこまで考えたかという疑問を挙げるならば、ワシは染料に塵やカビなどが混ざって長い月日に劣化した結果」

「ま、まてゼシャールド、分かった、さっきのはわらわが悪かった」

ヴォレットは論説モードに入ったゼシャールドがすこぶる苦手だった。頭が痛くなりそうな言葉の洪水を止めさせようと、慌てて自分の非を認める。それを見た悠介は目を丸くしながら「意外に可愛いくところもあるんだなあ」等と考えていた。

そんなこんなとバタバタしている内に、知らせを受けた宮殿から王の通達が届いた事でこの場の騒ぎはお開きとなる。『手出し無用、厳守せよ』通達内容はそれだけだった。

「なんじゃ、これからが良い所なのに」

ゼシャールドは表向きにそんな事を口走りながら、内心で『上手くいったわい』と胸を撫で下ろす。

「父様の事など気にするな、今度宮殿に来い」

『わらわは待っておるからな』と手を振って高民区へ帰っていくヴォレットと、護衛の宮殿衛士隊に側近クレイヴォール。

野次馬達も解散し、日没から随分経った事で慌しく露店の片付けが進められる中、ゼシャールドの論説に興味を示していた黄髪の壮年男性が続きを聞いたそうにしていたが『その内論文にして発表する』と聞いて『楽しみしている』と帰っていった。

「ふう、やれやれじゃ。ワシらも馬車に戻るとするか」

「お疲れ様でしたというべきか……」

良く回る舌ですねと尊敬も込めて皮肉を言う悠介に、ゼシャールドはほっほつと笑って答えるのだった。

荷馬車に戻った悠介達は荷台に寢床を作ると、ララの実と干し肉を齧りながら明日に備えて露店に出す荷物の整理をする傍ら、先程の騒ぎで出会った、というよりも騒ぎの元凶になったヴォレット姫や、王とゼシャールドの関係について話を始めた。

「ワシとエスヴォブスは昔、一緒に旅をした仲間だな。ふむ、もう少し塩が効いた味にならんかの？」

「へー、王様と親しかつたんですか」

ゼシャールドの干し肉に味付けのカスタマイズを行いながら、悠介は徒者ではない爺さんの話に耳を傾ける。二十年以上も昔の話、エスヴォブスがまだ王に即位する前の事。

エスヴォブスは将来国を治めるに当たって、武力による侵攻支配以外の方法で国を繁栄、発展させられるよう賢王となるべく世界各地を巡って見識を深める旅をした事がある。その旅で共に諸国を渡

り歩いた仲間や従者の中に、ゼンシャールドも居たのだ。

「賢王と言えば聞こえは良いがの、彼奴は少々覇気の足らん男でな」

武力の象徴である炎技の民の頂点にありながら、何事にも平和的解決を願う平和主義者。善政を敷く賢王として民衆の支持も高く、評判も悪くないのだが、他国からの武力によるちょっかいや政治的圧力に対して弱腰であるという批判も内から出ている。

「特に、近年は隣国からの嫌がらせが激しくての」
「嫌がらせ？」

標高一千メートルを超える大きな山が国土の三分の二を占めている隣国『ブルガーデン』は、四大神に神格による優劣は無いとする思想の元、反等民制を掲げる新興国である。

山の麓を切り開いて築かれた『要塞都市パウラ』を第二首都として、フォンクランクとの国境を睨んでいる。ちなみに、パウラとサンクアディエットの距離はルフク村よりも近い。

「ブルガーデン側の軍属と思わしき集団がしばしば国境を越えては、フォンクランク領土を荒らしていくんじゃないよ」

「え、それヤバイんじゃないですか？」

「まあ、普通なら開戦ものじゃるな」

エスヴォブス王は国境の警備強化を指示つつ抗議の使者を出しているが、ブルガーデン側は等民制度の廃止受け入れを要求するばかりで、抗議はまるつきり無視されているそうだ。

そればかりか、サンクアディエットにブルガーデンからの密偵が多数入り込んでいるらしく、内通者による宮殿関係者の取り込みに

動いた事例も確認されている。国境警備の強化も、情報が漏れていてあまり効果は見られない。

「グダグダじゃないですか……」

「まあ、こちらが幾ら平和主義を貫こうとも相手はそれを折込済みで戦略を打ってくる訳じゃからして、こうなるわな」

『この国大丈夫なんですか？』と問う悠介に、ゼシャルドは『まだ暫らくは』というあまり見通しの明るくない答えを示す。

「ワシはの、エスヴォブスと相談してブルガーデンに潜る予定になつとるんじゃ」

「それって……」

「所謂、密偵じゃな。但し、ブルガーデンの内通者から誘われる形で行く事になつとる」

その為に、王とは関係が拗れている事になっているのだと語るゼシャルド。

「ちよつ……それって、国家機密じゃないんですか？」

「うむ、超極秘機密じゃな」

「！っ そんな話、俺に聞かせていいんですか？」

何気軽に話してるんですかーっ と緊張する悠介に、ゼシャルドは真剣な表情になると、この話を聞かせた意図を口にした。

「ワシはの、邪神として喚ばれたお主がこの世界で何を成すのか、そこが気になっておるんじゃ」

諸説ある邪神のもたらす災厄についても、当時それを記した者や

言い伝えた者達が何を持って災厄としたか、時の権力者による裁定か、一般の人々の評価か。それ如何によつては、災厄は災厄では無くなる場合もある。

結局は『誰にとつての災厄なのか』という事だ。

「もしかしたら、ワシは破滅の道への一步を踏んでいるのかもしれない、だが……」

悠介に特異な力を与えてこの世界に喚んだ存在の意図は分からないが、古来より言い伝えられて来た歴史の節目とも言える時期に出現を記される邪神が、世界の裁断を行うような超越者的存在であった場合。

裁断の基準となる情報は正しく、多いが良いだろうという考えに至った。

「お主には、この世界の多くを見聞きし、知って貰いたいのじゃ」

6話・新しき日々の始まり

「これ、素材はモーフかい？」

「そうですよ」

「幾らだい？」

ルフクの村でも飼育されている家畜の毛を素材にした織物を、悠介のカスタマイズ能力で仕立てた服はこれで完売となった。

朝から表通りで露店場所を確保し、質の良さそうな服や靴を中々のお買い得価格で並べていたそれらは、飛ぶように売れた。ゼシャルドにやり方を教わりながら売り子をしていた悠介は、売上金を纏めながら一息つく。

「大分売れたのう。あとは日用品でも物色して、帰る準備でも始めるかの」

「そうですね」

売れ残りの小物商品を片付けながら、悠介は昨夜の重要機密な話を思い出していた。何かと挑発を仕掛けてくる隣国ブルガーデンの内情を探りに、密偵として潜入する予定だというゼシャルド。

元々そうだった任務に携わっていた訳ではないが、現役の宮殿関係者は政務の忙しさも然ることながら、ブルガーデンの国境付近から行われる直接的な武力挑発や、街道封鎖によって人や物資の流れを阻害する間接的な工作などに対処する事で一杯。

忠誠の厚い者は敵方の内通者によって知らされているので、送り込む事は危険すぎるし、裏切りそうな者は尚更使えない。

確かな実力と実績があり、多くの信望者によって未だ宮殿内に影響力を持つゼシャルドは、引退して政務から離れている事も踏まえると、時期や人材という面から考えて最も適任だったのだ。

昨日の騒動はブルガーデンの密偵に『元宮廷神技指導官ゼシャルドとエスヴオブス王との確執』を演出するいい宣伝になったかもしれないと、ゼシャルドは言っていた。

「よいか？ 目を付けた品は余程安いから、直ぐに手に入れたいモノで無い限り、少なくとも二度は往復して相場を見るんじゃない」

「やっぱポツタくりもあるんですねえ」

ゼシャルドには自分がこの国を去った後、ルフク村の事を悠介に頼みたいという思惑もあった。スンの事もある。悠介には出来るだけ早くこの世界の事を知り、自力で生活して行ける知恵や知識を身に付けて貰いたいのだ。

「そろそろ昼時ひるまじだの」

「昼飯にしますか？」

買い物も粗方済ませた悠介達は、昼食を摂りに近くの飲食店に入る。食事関係でも気軽に食べられる飲食露店が通りに多く並ぶが、悠介に色々教えておきたいゼシャルドの考えで、普通の店を利用する事にした。

低民区の店は中民区以上の区画にある店ほど敷居は高くない。大衆食堂のような雰囲気、夜は酒場も兼営している。

「こういう所はあんま変わらないんですね」
「まあ、同じ人種ヒトが紡ぎ出す文明じゃからな。世界は違えど、色々似る所もあるんじゃないやろって」

ゼシャールドは街での過ごし方や等民制度に基づいた仕組み等を教授し、悠介は少しずつこの世界の一般知識を吸収していく。昼飯時の混み合う店内、客達で賑わう喧騒の中、師弟のような二人の様子を他のテーブルからそつと窺い見詰める者が居た。

昼下がり

荷馬車に戻って来た悠介達は、買い込んだ荷物を積み込んで村に帰る準備を始めた。明日の朝早く出発すれば、夕方には到着出来るだろう。村の一角に畑を作る計画で作物の種類も買ったので、帰ったら早速畑にする場所の土をカスタマイズする予定だ。

「失礼、ゼシャールド殿とお見受けしますが」

積み込んだ荷物にロープを掛けていた時、荷馬車に近付いて来た緑髪の若い男が、軽く笑みを浮かべながら声を掛けてきた。

「うん？ 如何にも、ワシはゼシャールドと呼ばれておるよ」
「元………宮廷神技指導官で、いらしゃる」

含みを持たせるような男の口調に、ゼシャールドは一瞬視線を鋭

くする。悠介はキョトンとした表情でゼシャルドと緑髪の若い男を交互に見やった。知り合いでは無さそうだが、若い男はゼシャルドの事を知っているようだ。

悠介は緑髪の若い男と対峙するゼシャルドの剣呑な様子から、この男が昨日の話に出て来た『ブルガーデン側の密偵』では？ という考えに至ったが、それを表情に出す前にゼシャルドが悠介に声を掛けた。

「ユースケや、スマンがちと番を頼む」

「え？ は、はい」

悠介を荷馬車に残すと、ゼシャルドは緑髪の男と連れ立って街の方へと歩いて行った。悠介は気付いていなかったが、風技の民である緑髪の男は風を操って対象とした相手にのみ聴こえる声で誘いを掛けていたのだ。

『この国を、出る気はありませんか？』

ゼシャルドの読み通り、昨日の騒ぎはブルガーデン側に元宮廷神技指導官の引き込み工作を決意させたらしい。

数刻程が経ち、一人で戻って来たゼシャルドは荷台に上がって寝床を整える。

何の話をして来たのか気になる悠介だったが、ゼシャルドは多くは語らずとも概ね悠介が考えている通りだというような表情で、明日に備えて身体を休めるよう促した。

「少し、早いかもしれんがのう」

「まだ明るいですしね」

ゼシャルドの眩きと悠介の相槌は噛み合っているように聞こえて、その実、まるで違うモノを指していた。

翌朝、悠介達はまだ日が昇りきららない内に街を出発した。その道中、ゼシャルドはこの世界の事について喋りっぱなしだった。

神民衛士が担う治安維持について、彼等が担当する地域や行使出来る権限の範囲、トラブルが起きた場合の対処法、何処に訴え出れば良いのか等々。街の廁かわやについても細かく説明し、衛生上あまり近付かない方が良い場所なども教えておく。

「村同士の交流は村人から教わるのが良いじゃろう、乗馬の訓練もしておくの良い、新しく馬を買う時は街の」

今までのようなゆったりしたペースではなく、まるで詰め込み教育のような勢いで知識を教え込もうとするゼシャルドに、悠介は違和感を覚えながらも、何かそうしなければならような事情があるのだからと必死で覚える事に集中した。

『やっぱり、昨日の緑髪の奴が関係してるのかな……』

そんな調子で村に到着した頃には、知恵熱が出そうな程ふらふらになっている悠介なのであった。

「お帰りなさい、先生。……ユースケさん、どうしたんですか？」

「ヴァー……コメカミが脈動している……」
「うむ、ちよつと急ぎ過ぎたかの」

ゼシャルドの荷馬車がルフクの村に入ると、荷物を降ろす手伝いに村人達が集まって来た。売り物の一部には彼等に委託されていたモノもあり、買って来た日用品にも頼まれていた品が混じっている。

「先生！ 毛刈りの替え刃はあったかい？」

「ほれ、そこに入つとるじゃろ」

「貝の耳飾は売れたかしら？」

「残念ながら一つしか売れなんだよ」

わいわいと賑やかな一時を過ごすルフク村の住人達を見渡したゼシャルドは、明日の天候を話題にするくらいの軽い調子で徐に切り出した。

「所で、ワシは明日からまた長旅に出る事になったのでな、暫らく戻れんから皆、怪我や病気などせんようにの」

それを聞いた村人達は一斉に驚いた表情を浮かべたが、今までにも度々研究などで遠い地へ出かけては、長く家を空けるような事もあったので、皆直ぐに落ち着きを取り戻した。暫らくは怪我に注意しながら生活しなくちなあ等とおどけ合う。

この場で村人達と別れの挨拶を交わすゼシャルドに、スンは一人『私そんな話聞いてません』という戸惑いの表情を向けている。悠介は予想していた事だったので、それら一連の出来事を冷静に観察していた。

「では、家に戻るとするかの」

「そうですね」

「はい……」

村人達も其々の家へと帰って行く。荷馬車を家の裏に着けて馬を厩舎に入れると、三人は裏口から家に入った。

「先生、どういう事なんですか？」

家に入るなり、スンはゼシャルドに詰め寄る。今まで遠出をする時や、旅に出る場合は事前に知らせておいてくれたのだ。今回の暫らく戻らないという長旅宣言は急過ぎる。

「スマンのう、少し込み入った事情が出来たんじゃ」

「……話せない事、なんですか？」

うむと頷くゼシャルドに、スンは黙って俯いた。ゼシャルドはよく手入れされたスンの白い髪を梳くように一度撫でると、悠介も交えて今後の事を話し始める。

「ワシが留守にしている間も、ユースケはこの家に住むと良い。スンは彼の身の回りの世話を頼む」

「え……わたしが、ユースケさんと……？」

それは一つ屋根の下で二人きり、共に暮らす事を意味する。ちらりと悠介に視線を向けるスンだったが、悠介はその視線には応えず、ゼシャルドの話に耳を傾けていた。

「ユースケにはスンとこの村の事を頼もうと思っておる。じゃが、お主はまだまだこの世界に関する知識が足りん」

「そうですね……」

悠介は頷きながら、ゼシャールドの言や指摘には肯定の返答ばかり返しているなあと自覚する。それは、ゼシャールドが正しく悠介を理解しているという事でもあった。

正しい認識と誠実な心遣いによって、悠介に必要な情報と知識を与え、進むべき方向を指し示してくれていた。今後はそんなゼシャールドの支え無しでやっていかなければならない。

「見識を広めよ、ユースケ」

文字が読めるなら書物を読んで知識を学ぶようと、ゼシャールドは家の奥にある書斎の鍵を悠介に渡した。

この日の夜、三人でテーブルを囲った夕食は、ささやかながら普段よりも少し豪華な食事で、ゼシャールドとの別れを惜しみつつも旅の無事を祈って送り出す宴となった。

翌日

皆が寝静まつているまだ暗い内にルフク村を出たゼシャールドは、村から少し離れた街道で待つブルガーデンより寄越された馬車に乗り込んだ。ここからフォンクラクの領土を抜けて国境を越え、ブルガーデン領に入るまでは最短距離に行く事になる。

大胆にも一度サンクアディエットの街を目指し、街を横断して反対側から国境に向うのだ。ゼシャールドに同行するブルガーデンの

密偵は、ゼシャルドが自分達を街の衛士隊に引き渡す事は無いと確信していた。

ここ数年の内偵により、ゼシャルドとエスヴォブス王の確執は深まっているとの調査報告を受けて、遂に本国からの引き込み指令が出たのが四日前。接触する時期を慎重に見定めている所へ先日騒ぎである。

好機と見て部下に誘いを掛けさせたのだが、大正解だった。ヴォレット姫のゼシャルド寄りな言動は気になる所であったが、所詮は政務にも関わらない我侭姫の私的な嗜好でしかない。ゼシャルドも相手にしていない様子だった。

「三日もあれば、国境を越えてパウラに到着出来るでしょう。それまで窮屈かとは思いますが……」

「構わんよ、馬車での寝泊りには慣れとる。それよりも、村の近くから物騒な連中を下げてくれんか？」

『あの村はワシの憩いの場だな』と言って、村の周辺に潜んでいる者の存在を指摘するゼシャルド。

「……流石は元宮廷神技指導官殿、『風の団』の気配に気付きましたか」

「風の団……こっちでいう『風神隊』か、そんな精鋭まで入り込ませるとはのう。この国もいよいよ持たんかの」

やれやれと溜め息を吐いてみせるゼシャルドに、同行者の密偵はニヤリと笑みを返した。

朝、悠介が起き出して来た時、既にゼシャルドの姿は家に無かった。今日から何をするにも自分で考え、自分で決めて行動しなくてはならない。渡された書斎の鍵をカスタマイズメニューの欄内に見ながら、悠介は当面の問題を解決すべく口を開く。

「おはよう、スン」

「……おはよう、ごぞいます」

広間のテーブルを挟んで、ぎこちない挨拶が交わされる。表情に不安を滲ませながらそわそわとした様子のスんに、悠介は『自分から動かないと駄目だな』と気持ちを切り替える。鍵をポケットに仕舞って席を立つと、ビクツと肩を震わせるスン。

「朝食の準備、始めよっか？」

「え？ あ、はいっ ごめんなさい！」

スンは慌てて立ち上がると、水桶を持って外の井戸へと向かった。それを見送って肩を竦めた悠介は、とりあえず食糧棚に朝食の肉とララの実を取りに行くのだった。カスタマイズメニューを開き、ララの実に甘味を出すステータスを呼び出しながら。

「おや、スン。おはよう」

「あ、おはよう……バハナおばさん」

「今から朝食の支度かい？ 水汲みくらい彼にやって貰えばいいのに」

力仕事なんだからさあと促すバナナに、スンはそんなコトとても言い出せないと頭を振った。緩和剤になっていたゼシャールドが居なくなつた事で、朝の挨拶を交わすだけでも緊張してしまう。まだ普通に話す事さえ出来ないでいるのだ。

「難儀な子だねえ」

「うっー……」

先が思いやられると嘆きつつも、バナナはゼシャールドの代わりに二人の力になってやろうと決心していた。

サンクアデイエツトの下街を覆う朝靄も晴れようかという頃、高民区の頂上に聳^{そび}えるヴォルアンス宮殿の食堂では、蜜で味付けされた実の一番美味しい部分を切り取って盛られたデザートを口に運びながら、ヴォレットが独り、給仕長を相手に愚痴っていた。

「ゼシャールドは今日も宮殿に来んのか？」

「色々と事情があるのでしょう」

「つまらんのう、父様は何時までゼシャールドと仲違いしておるのじゃ。さっさと仲直りすれば良いのに」

下街で思わぬ再会が出来て久し振りに楽しい旅の話が聞けると思っていたのに、ゼシャールドは一向にやって来る気配が無い。側近のクレイヴォルは相変わらず姫君たるもの云々と御小言が五月蠅い

ばかりで、一緒に居ても面白くない。

「そいえば、もうひとり面白そうな奴が居たな。ユースケと言ったか」

ゼシャールドの知り合いらしい黒髪の無礼な男。遠い異国の地で育ったそうなので、珍しい話が聞けるかもしれない。

「また御忍びで下街を探してみるのも、良いかも知れん」

「姫様、王様から暫らくは御忍び禁止令が出ていますよ?」

「構わん、構わん。わらわが甘えてやれば一発じゃ父様ちひなまあ、わらわのゴト嫌いになったのお?」とか言つてな」

お行儀悪くケラケラ笑っている姫君に、給仕長は「王様も苦労しますねえ」と内心で溜め息を吐くのだった。

数日後、ブルガーデンから各国に向けて人事に関する公式発表がなされた。

元フオンクランク宮廷神技指導官であるゼシャールド氏を、我が国の精鋭を育成する神技指導官に迎える

7話：炎の姫君

「嘘じゃっ！ ゼシャールドがわらわ達を裏切る筈が無い！」
「事実です。お気持ちは察しますが、どうか冷静に」

ヴォルアンス宮殿上層階の一室で、ヴォレットの怒鳴り声とそれを宥める側近の冷静な返答が交される。蹴倒された椅子を起こし、どうぞと促す側近を睨みつけたヴォレットは、やり場の無い怒りと不安と焦燥を八つ当たりにして彼にぶつけた。

「貴様はゼシャールドを疎んでいたな！ 内心で嘲笑っているのではないのかっ？」

「いいえ、そのような事は」

流石に怒りに任せて神技を暴発させるような事は無かったが、テーブルの上に盛られた果実や花は床に散らばり、カーテンは引き裂かれ、壁の一部にはぶつけられた食器の欠片とワインの染みが付いている。部屋の中は滅茶苦茶だった。

「くそっ……！ 何故じゃっ！」

「姫様、言葉遣いにお気をつけを」

「うるさい！ 出て行けっ！」

背中を向けたまま扉を指すヴォレットに、普段通りのお辞儀を返

した側近は静かに退室した。彼、側近クレイヴォルは、ヴォレットの荒れる気持ちを理解していた。自分自身、もしや先日のアレが原因になったのではと思う所もあり、複雑な心境であった。

『しかし、宮殿内にも動揺が広がっている……彼が向こうに付いたとなると、追隨する者も現れかねない』

今後は宮殿関係者の動向にも特に注意を払う必要が出てくる。クレイヴォルは先ず自らが率いる炎神隊の衛士に対する意識調査と、気持ちの引き締めを考えていた。

側近が起こしていった至高の腰掛を再び蹴倒したヴォレットは、肩で息をしながらワナワナと握り締めた両手を震わせていた。父王エスヴォブスは『ゼシャールドの事は言うな』とのみ返すばかりで、ブルガーデンの発表に対して何ら声明を出す事もない。

先日、偶然下街で会った時には、この国を出ようとするような素振りは無かった。まさか自分の行動が引き金になったのではと思うと、不安と後悔に苛まれて掻き毟られるように心が疼く。

「何故じゃ……」

ゼシャールドが裏切る筈は無い、何か理由がある筈だと、ヴォレットは伏せた眼の奥に滲む感覚を押し戻しながら悩み考える。そうしてふと、脳裏に浮かぶ黒髪の男。ユースケと呼ばれていた世間知らずっぽいあの無礼な男はどうなったのか。

「一緒に付いて行った？ 或いは……」

伏せていた顔を上げて窓の外に視線を向ける。遙か遠くまで続く平地の先に、微かに見える小さな森。ゼシャルドが住んでいた無技の村に行けば、何か手掛かりが掴めるかもしれない。

目的を見つけたヴォレットの瞳は、何時もの自信に満ちた力強い光を携えていた。

ブルガーデンの公式発表はゼシャルドの事を知る宮殿関係者に衝撃と動揺を与えたが、街の一般住人は『また宮殿官僚から離反者が出たらしい』という程度の認識で、然程の影響も受けていない。宮殿事情を知る一部の識者達が討論のネタにしているくらいだ。

何時もと変わらない様子の街を、何時もなら表通りなど歩かず裏路地に行く男が晴々とした表情で歩いていた。

「へへ……これでやっと大手を振って街を歩けるってもんだ」

彼は数年間、サンクアディエットの貧民街で身を潜めるようにして生きて来た。ブルガーデンに亡命しようかと思う事もあったが、能力主義で身分が決まり、国の定めた労働に従事する事を強制される向こうでは、今のよう自由な生活は望めない。

そんな窮屈な環境に身を置くくらいなら、まだ日陰者生活でも自堕落に生きられるこちらのほうがマシだと思えた。

以前はうっかり表通りを歩いていてゼシャルドと鉢合わせるような事になればと、常に怯え、警戒していなければならなかったが、今や件の人物はフォンクランクを見限ってか隣国ブルガーデンの地へ。もう恐れる事はない。

「今なら何でも出来そうな気がするな。ハハツ 何か一発デカイ山でも当てたい所だ」

そんな彼が低民区大通りの広場に差し掛かった時、上の区画とを繋ぐ門の周辺に人だかりが出来ているのを見つけた。何かの見世物かと興味を引かれた彼は、その人だかりに近付いて行った。

「ええいつ 放せクレイヴォル！」

「なりません姫様、領内とはいえ街の外に出るなど危険です」

ゼシャルドが住んでいたと聞く無技の村、ルフクの村に向かうとしていたヴォレットは、低民区の門を抜けた所で追って来た側近クレイヴォルに捕まっていた。宮殿に連れ戻そうとするクレイヴォルと、街の外に出ようとするヴォレットの攻防が続いている。

宮殿衛士隊を使うとクレイヴォルにバレると思い、巡回に出ようとしていた神民衛士を片っ端から護衛に付けてここまで下りて来たのだが、きゆうてかんによまんじょういっち宮殿官僚満場一致でヴォレット姫は何かやらかすだろうとの予想の元、ここ暫らくは動向を監視されていたのだ。

「ちょっと無技の村を調べてくるだけじゃ！ 危険などあるものか
っ」

「王から関わらぬよう言われている筈です、彼が住んでいた村を訪ねる理由もありますまい」

クレイヴォルは民衆の耳を気にして微妙にその人物の名を避けながら説得しようとするが、猪突猛進中のヴォレットは王族の体面だ

とか、その辺りの体裁にまるで無頓着に自分の目的を口にする。

「ゼシャールドに何があったのか、手掛かりが掴めるかもしれんんじゃないー」

「……それでは理由になりません」

早速配慮も考慮も蹴散らしてしまう炎の姫君に頭痛を覚えながら、クレイヴォルは努めて理性的に御自重下さいと促がした。そんなちよつとした騒ぎの中、衛士隊の一人が遠慮がちに声を掛けて来た。

「あの、側近殿……姫様の言われる村の事でお耳に入りたい事があると申す者が……」

「ん？」

クレイヴォルが振り返ると、声を掛けてきた衛士の後ろに、みすぼらしい風体の低等民が頭を低くしたまま控えており、それと分かる愛想笑いを浮かべていた。その男に何処か危うげな雰囲気を感じ、クレイヴォルは眉を顰める。

「なんだ？ 申してみよ」

「へ、へい……実は、あの村にはブルガーデンに通じてる村人が居たんです」

ヴォレットとクレイヴォルは互いに顔を見合わせた。

ゼシャルドの家の近くに作られた小さな畑に水をやっているス
ン。悠介は近くの川まで釣りに出掛けている。

「ん〜ん〜」

鼻歌など歌いながら早く芽が出ないかな〜と、悠介が作った便利
な水撒き機ジヨウを右へ左へと振っている。スンはこの小さい雨を降らせ
る道具を気に入っていた。今日の朝食では何かと御節介を焼きに来
るバハナを話題に、悠介と世間話のような会話も出来た。

ゼシャルドの家で悠介と暮らし始めて七日目、少しずつ打ち解
けあえている事を実感出来たスンは、このまま順調に過ごして行け
るなら過去のトラウマも克服出来るかもしれないと、前向きな気持
ちになっていた。

水撒き機を道具箱の中に仕舞い、昼食用の水汲みに井戸へ向おう
と村の通りに出たスンは、サンクアディエットの方角に伸びる街道
の先から土煙が上がっているのを見つけて小首を傾げた。土煙は徐
々に近付いて来ている。

「?..... なにかしら」

サンクアディエットの衛士隊を乗せた馬車が四台、土煙を上げな
がら街道を疾走していた。

「見えて来たぞ! あれがルフクじゃな?」

「姫様、走行中は危険ですのでお座り下さい」

衛士隊は其々攻撃、防御、治療、移動と得意分野の神技を持つ者でバランス良く編成されていて、移動に特化編成した部隊の水技と風技による補佐を受けた馬車の移動速度は、早馬が単騎で駆ける速さに匹敵する。

座席から身を乗り出すヴォレットを諫めたクレイヴォルは、後続と周囲の様子を見渡して異常が無いか確かめた。本来ならヴォレットを現場に連れて来るなど有り無い事なのだが、宮殿に連れ戻してもまた直ぐ抜け出すのは目に見えている。

それならばいっその事、自分の目の届く範囲に居てもらった方が護り易いと同行を許可する事にしたのだ。割と堅物なクレイヴォルにしては柔軟な対応であった。お陰で一般衛士達は緊張しまくっているが。

「良いですか、姫様。絶対に私の傍を離れないように、くれぐれも勝手な行動をしてはなりませんよ？」

「分かつておる、お前は心配し過ぎじゃ」

ヴォレットは炎神隊も連れて来ているのだから、万が一ブルガーデンの密偵が潜んでいても問題ないと楽観的な態度だった。やっぱり置いて来た方がよかったかと軽く後悔しつつ、クレイヴォルは先程の告発して来た男の事を考える。

ルフクの村にはブルガーデンの内通者がいた

数年前に土技の民の上司と村周辺の森を訪れた彼は偶然、無技の民がブルガーデンの密偵と取り引きしている所を見たという。

口封じを仕掛けて来た密偵と交戦の末、上司は殺害されるも自分

はなんとか逃げ出せたが、密偵に加勢したのが元宮廷神技指導官のゼシャルドだった事を知り、何かの間違いで無いかと思いつつ、今日まで言い出せなかったのだそうだ。

『確かに、時期は合う。しかし……どうもあの男の眼は普通ではない気がする』

長い間、独りで悩み過ぎて来たのだと考えるなら、多少おかしな雰囲気纏っていても不思議は無いのかもしれない、とも思えるだけに、クレイヴオルは告発者の男に感じる違和感を判断し兼ねていた。

そんな事を考えている内に、馬車隊はルフクの村へと入るのだった。

ルフクの村から少し離れた森の中を流れる小さな川で、悠介はカスタマイズして作った竿と釣り糸と毛鉤けはりを使って釣りをしていた。漁をする川はもっと離れた場所にあり、往復には一日掛かってしまうので近場で小魚を狙ったのだ。

バハナがその内狩りの仕方を教えてやろうと言ってくれるが、一応現代人な悠介には体力的にも少々シビアな提案だった。

「発明はそれだけ楽をしたかったから、なんて言うしなあ」

悠介は森を駆け回って獲物を追い仕留めるより、性能の良い罠を仕掛けて楽に獲りたい等と考えている。透明感のある丈夫な釣り糸と、擬餌率を高く設定した毛鉤びくによって魚籠びくの中身は順調に満たさ

れていった。

「このくらいで十分かな」

十匹目を釣り上げた所で、そろそろ引き上げようかと釣具を片付けに入った悠介は、ふと人の気配を感じて振り返る。

「ふむ、確かに素人のようだね」

「あ、アンタ」

何時の間にか背後に緑髪の男が立っていた。数日前、サンクアデイエットでゼシャルドに声を掛けてきた男だ。ブルガーデンの密偵らしきその男は、自身を『レイフォルド』と名乗ると、悠介に早く村に戻った方が良いと促した。

「すこし、大変な事になってるみたいだよ」

「なんだよそれ、アンタ何かしたのか」

「僕はなにも？」

警戒する悠介の問いに、レイフォルドは軽く微笑みながらパツと手を開く仕草を見せる。

何だか掴み所の無い、ゼシャルドとはまた違った雰囲気飄々とした男に多少の猜疑心を懐く悠介だったが、村が大変な事になっているという言葉が気になり、急いで戻る事にした。

「なあ、アンタ……って居ない！」

釣具と魚籠を纏めてもう一度振り返った時、既にレイフォルドの姿は無かった。

衛士の半数を村に残し、サンクアディエツトを目指して昼下がりの街道を疾走する衛士隊の馬車。ヴォレットとクレイヴォルが並び座る車内では、内通の容疑で身柄を拘束された無技人の少女が、相変わらず身を縮めて震えている。

「お前、ずっと怯えておるなあ。そんなに神技人が怖いのか？」

ゼシャルドの家に長く仕えていたというこの無技の娘を捕らえる時、村人の女性が無謀にも抗議を訴えて来た。曰く、この娘は昔、神技人の若者に殺され掛けた事で神技人に対する強い恐怖の念を持っている。だから手荒な真似はやめて欲しいと。

神民衛士達がそんな抗議や懇願に耳を貸す筈も無く、邪魔立てするなら容赦しないとばかりに神技を振るおうとするのを止めたのはヴォレットだった。ゼシャルドからは無技人達の暮らしぶりなども聞かされた事がある。

元々ヴォレットがこの村に来ようと思った理由は、村で暮らしていたゼシャルドの事を知りたかったからだ。その村の住人を無闇に傷つける事はしたくなかった。

村人の抗議にあつたように、馬車に乗せる時もまともに歩けない程酷く怯える少女の様子を見兼ねたヴォレットは、ゼシャルドの事を聞きたいという気持ちもあつて、自分の馬車で護送すると言い

出した。当然の如く側近のクレイヴォルは反対したが

『王族が無技の者と、ましてや内通の嫌疑が掛かっている者と同乗するなど！』

『お前が一緒だから大丈夫じゃ』

屈託の無い『信頼の笑み』を向けられ、敢え無く陥落した。エスヴォブス王に忠誠を誓う者としては、その姫君に信頼を預けられているのならばと、普段ヴォレットから邪険に扱われてきた分の反動が出たらしい。

「お前、ゼシャールドと暮らしていたのであろう？ 何か怪しい奴が周りに居なかったか？」

「……先生を……知ってるんですか……？」
「ゼシャールドはわらわが幼少の頃、よく宮殿で遊んでくれたのじや」

え？ という表情で顔を上げたスンに、ヴォレットは自信に満ちた勝気な雰囲気を感じさせる赤い瞳を向けた。

「お前の知るゼシャールドの話を聞かせてくれ」

8話：悠介の決断

大急ぎで村に帰ってきた悠介は、入り口の所でウロウロしているバハナを見つけて声を掛ける。

「バハナさん！」

「あっ ユースケ！ 大変だよ、スンが！」

駆け寄って来たバハナは『スンが衛士隊に連れて行かれた』と絶り付くように訴えた。

村の通りにはまだ衛士隊の馬車が停まっっていて、馬車の周りに居た衛士達が悠介の姿を見つけて騒ぎ始める。悠介は釣具と魚籠をバハナに預けると、衛士隊の馬車に向かって歩き出した。

「止まれ！」

「その黒い髪、ユースケというのはお前だな」

「見ての通りですよ」

武器を向けられる事に慣れない緊張を覚えつつも、悠介は平静を装って衛士達と向かい合う。仲間と二言三言やりとりをした衛士達は、悠介に内通の容疑で身柄を拘束する趣を告げてにじり寄って来た。

無技人に対する場合と違い、神技人、それもどんな神技を使うの

か分からない者が相手となると、彼等も慎重に対応する。

「スンが連れて行かれたって聞いたんだけど、街に連れて行くなら早くしてくれない？」

じりじりと警戒しながら距離を詰めてくる衛士達に、悠介は街道の先を気にしながら急かす様に言った。顔を見合わせる衛士達。

警戒を残しながらも肩透かしを食らったような様子の衛士に枷を詰められた悠介は、心配そうな表情で遠巻きに見詰める村人の中にバハナの姿を見つけると『スンを迎えに行ってください』と伝えて衛士隊の馬車に乗り込んだ。

「ふうむ、するとゼシャールドは日がな一日、邪神研究の文献漁りばかりしておったのか」

「はい……。別に、怪しい人とか……。知らない人が、訊ねて来る事は……。ありませんでした」

「ユースケは？」

「えっ？ ユースケさんの事は……。よく、わかりません……」

最近ゼシャールドが村に連れて来た人なので、まだ良く知らないのだと、スンは嘘をついた。ゼシャールドからも、悠介が祠から現われたという事は伏せておくように言われている。

嘘をつく事の後ろめたさで遂、眼を逸らしてしまうスンだったが、終始怯える姿を見せていた為それを見抜かれる事はなかった。

「申し上げます。村に駐留させた部隊から黒髪の男を確保したとの連絡が入りました」

「おお、そうか」

伝達係の衛士が風技による知らせを受けてヴォレット達に報告する。報告にあった人物が悠介の事だと分かり、不安気な表情を更に曇らせるスンに、ヴォレットは心配するなと笑い掛けた。

「お前と同じくちょっと話を聞くだけじゃ。どうせアイツも内通者の事なんぞ知らないだろうからなっ」

ゼシャルドの話が聞ければそれで良いというヴォレットと違い、クレイヴォルは注意深くスンの様子を観察していた。

両手を前に揃えた形で無技人用の木製の枷を詰められているスンは、今の所、怯えた様子も演技とは思えないただの娘に見える。が、それだけに『もしもコレが演技であったならば』という事も想定しておかなくてはならない。

『姫様はああ言っておられるが、多少の拷問は避けられまいな』

宮殿中がブルガーデンの公式人事発表で揺れている微妙な時期だけに、内通者の嫌疑には厳しく対処せざるを得ない。

とりあえず、ヴォレットの気が済むまで話相手をさせたら、後から到着するであろう黒髪の男と入れ違いに審問所へ引き渡そうかとクレイヴォルが段取りを考えている内に、衛士隊の馬車はサンクアディエットに到着した。

「わあー……、こんな大きな街だったんですね」

「なんだ？ お前、街に来るのは初めてか？」

「はい、実は……」

ゼシャルド以外の神技人に強い恐怖を懐くスンは、今まで一度

もサンクアディエツトに来た事が無かった。

先に馬車から飛び降りたヴォレットおほつかに続いて、ゆっくり馬車を降りるスン。まだ少し足元の覚束おほつか無い様子だったが、ヴォレットの気さくさとゼシャルドを慕う者同士の親近感や、相手が年下の女の子であった事も、神技人への恐怖感を和らげていた。

街に降り立つたスンが街道を振り返ると、遠くから馬車の土煙が近付いて来るのを確認出来た。アレに悠介が乗っていると思うと、スンは少しだけ安堵を覚えるのだった。

後ろ手に枷を填められた状態で護送されている悠介は、ゼシャルドと街まで往復した荷馬車の倍近い速度で走りながら殆ど揺れ無い衛士隊の馬車に感嘆しつつ、枷をカスタマイズメニューで調べていた。

カスタマイズメニューの操作をする場合、意識を集中させれば指で誘導しなくともパラメーターの調節やカスタマイズ・クリエートが使える事に気が付いたのだ。

『慣れたら感覚的に操作出来そうだな』

神技人用の枷には装着者の神技を阻害するというような効果は無いが、土技と炎技によって鍛え上げられた非常に丈夫な材質で出来ており、ちよつとやさつとでは壊せない造りになっている。相手が普通であれば。

『晶貨のパラメーターに似てるな……外したい時は全体の強度を最低まで下げれば大丈夫だろう』

実行ボタンは押さないように気をつけながら、悠介は枷のパラメーターを弄って意識の集中で操作する訓練に勤しんだ。

大人しく座っているものの何処か焦点の合っていない視線でボンヤリしているような、それでいて何かに集中しているような、そんな奇妙な雰囲気醸し出している悠介に、衛士達はその髪の色とも相俟って不気味さを感じていた。

「姫様、我々は先に宮殿へまいりましょう」

「ん？ ユースケを待たんのか？」

『馬車から飛び降りるなど行儀が悪い』と、ヴォレットに御小言を申し上げていたクレイヴォルは、周囲に野次馬の街人が集まって来た事を気にする。この民衆の中にも、ブルガーデンの密偵が潜んでいるかもしれないのだ。

後続の馬車は間もなく到着するという距離まで来ていたので、ここに留まるよりも先に宮殿へ向かった方が良いかとクレイヴォルは判断した。ヴォレットも御小言が終了するなら幸いとばかりに側近の提案に従った。

「おおっ！ ヴォレット姫様、よくぞ御無事に戻られました」

低民区と中民区を隔てる門の前まで移動して来た時、街で待機していた衛士達から胡乱気な視線を向けられていくすんだ緑髪の男が、太鼓持ちのような笑みを浮かべながら揉み手で歩み寄って来た。

ヴォレットは『そういえばコイツを待たせていたな』等と思いで出す。男は何か手柄でも立てた気であるのか、ヴォレットには諂う態度ながら衛士達に対してはやけに尊大な振る舞いを見せている。

その男のにやけ顔を見て、スンは凍りついた。

いやったあ！ 大当たりい ひやはははーっ

へへっ その雌、そのまま抑えといて下さいよ

ああ！ おしいっ 首を狙ったんすけどねー！

過去の悪夢が意識を侵蝕するように記憶の底から吹き上がる。

「い……いや……いやあ……」

「ん？ おい、どうした？」

彼はヴォレット姫が話し掛けている無技人の娘を見て、『まさか』という不安に駆られた。あの怖ろしい水技を使うゼシャールドから何とか逃げ果せ、街の貧民街に身を隠して十年近く、最近まで何時バレるかと怯えながら過ごして来た。

今回、ゼシャールドの亡命によって晴れて自由の身となり、ついでに自らの過去を帳消しにした上で、宮殿関係者に取り入るチャンスだと、ブルガーデンの密偵をネタに一計を案じた。どうせ無技の村には何も無いのだ。

フォンクランクに比べれば、ブルガーデンの無技人に対する扱いは天と地ほどの差がある。向こうでは亜人扱いされている無技人が

ブルガーデンの関係者である筈もない。

例えゼシャールドに傾倒する無技人が居て十年近く前の事件の内容を聞かされていたとしても、当時二人の無技の民と一人の土技の民が死んだという事実が残っているのみであり、土技の民を殺めたゼシャールドは敵対国と見做^{みな}せるブルガーデンの地に在る。

自分の話に信憑性は増せど疑われる要素は無い筈なのだ。しかし

『まさか……あの時のガキか……？ あれは、致命傷だった筈……』

と、彼はそこまで考えて、ゼシャールドの神技が治癒系の水技だった事に今更ながら思い至った。一瞬で相手の血流を塞ぎ止めて死に至らしめる程の『治癒』の使い手ならば、あの状態からでも回復させられるかもしれない。

『や、やべえ！ 俺のこと覚えて……！ い、いやまで……大丈夫だ、結果は同じだ』

当時はまだ小さい子供だったのだから、何があったのかよく分かっていない筈だ。あの時に死んだ父親らしき男がブルガーデンの密偵と取り引きをしていた事にすれば問題ない。

彼がそう自分に言い聞かせつつ冷汗を流し始めた頃、悠介を護送する衛士隊の馬車が街の入り口に到着した。

街の区画門まで連行されて来た悠介は、前回ここへ来た時に見た

色鮮やかな衣装を身に纏う炎神隊が、衛士達と門の近くに集まっているのを見つけた。『またあの暴走放火姫ヴォレットでも来てるのか』と赤髪のツートールを探して見渡し、そこに白い髪を認めた。

「スン！」

急に駆け出した悠介に周りを固めていた衛士達は一瞬身構えたが、向かった先が炎神隊と衛士隊の集まる区画門の詰め所付近だったので、若干余裕を持ちながら後を追う。

座り込んだまま動こうとしない無技人の娘に、衛士達は問答無用でそのまま引き摺って行けば良いのと思いつつも、態々寄り添うようにして声を掛けているヴォレット姫の邪魔をする訳もいかない。

適当に野次馬を散らす作業をこなしながら姫様の気まぐれが終わるのを待っていた彼等は、突然、枷を付けた黒髪の男が衛士隊の輪に飛び込んで来た事で、だらけモードから一気に緊張させられた。

「おお、来たかユースケ」

「スン！」

のほほんと声を掛けて来たヴォレットに答えず、悠介は座り込んで震えているスンを気にする。無視されてムツとなるヴォレットだったが、先程から急に様子がおかしくなったスンの事も気に掛かっていたので、発火の刑は控えておく。

「大丈夫か、スン……？」

「……いや……いや……あ……」

俯き、枷の詰められた両腕に顔を埋めてぶつぶつと呟きながら、伏せるように身を丸めて震えている。そんな状態のスンにどう対処して良いか分からず、早速自分の声がスンに届かない事を悟った悠介は、その憤りの矛先をヴォレットに向けた。

「お前つ スンに何したんだよ！」

「わ、わらわは何もしておらんぞ！」

立場上、他人から剥き出しの感情を向けられる機会の少ないヴォレットは、身分差も考えず怒りをぶつけて来る悠介に一瞬怯むが、持ち前の気の強さで押し返す。

「普通に話を聞いていただけじゃ！」

「話ただけでこんなに」

言い掛けて突然、悠介の身体がぐらりと傾く。身体中の力が抜ける感覚に膝を付いた所で背中にも衝撃が走り、後ろ手に枷を詰められているので手を付く事も出来ず、そのまま前のめりに倒れ伏した。

『なんだこれ……鼻の奥が重い……？』

朦朧とする意識と揺れる視界はこの世界に喚ばれた時の事を思い起こさせるが、あの時の感覚とはまるで質が違う。首に鉄芯でも入って硬直したかのような鈍い感覚が痛みだと分かったのは、上の方から聞こえてくる話し声の内容を理解したからだ。

「こら！ 手荒に扱ってないっ」

「え？ は、はあ……申し訳ありません」

悠介は自分が衛士に殴られて倒れた事を認識した。背中への衝撃は

後頭部を殴られて膝を付いた時に、蹴られでもしたのだろう。

『くっそ……！』

首から背中、腰に掛けて、衝撃が突き抜けたかのように力が入らない。悠介はそのままの体勢で回復を待ちながら、顔だけ起こしてスンの様子を窺う。スンは伏せていた顔を僅かに上げて悠介の存在に気付いた様子ながらも、まだ蹲って震えている。

『ちつくしょうー、これじゃあ余計に心配させちゃうじゃないか……』

自身の不甲斐無さに憤るやら嘆くやらな心境の悠介は、どうせなら自分の身体もカスタマイズ出来れば良かったのにと、このような場面で大立ち回りをやらかすには些か戦闘向きと言えないカスタマイズ・クリエートという己が身に宿る不思議能力を愚痴った。

例えばカスタマイズで強力な武具を作る事が出来たとしても、ピンチを切り抜けられるか否かはそれを使う本人の力量次第なのだ。ゲームオタクな生活をしていた悠介には格闘技などは元より、そもそも喧嘩自体あまり経験が無い。

「まったく、ユースケまで伏してしまつては身動きが取れんではないか」

「ああー！ この娘だつ！ あの時の子供だつ」

水技を使える衛士を呼べと指示を出しているヴォレットに、告発者である緑髪の男が然もたつた今気が付いたかのように、スンを指してあの時現場にいた娘だと言い出した。彼は今なら自分の立てた

筋書きを通せると判断して賭けに出たのだ。

無技の娘が自分を見て怯えている理由は何となく想像が付く。幼い頃に刻み付けられた恐怖が身を竦ませ、詳細に覚えているかどうかは分からないが当時の出来事を黙らせるなら、そこに都合の良いシナリオを被せてやればいい。

ブルガーデンの密偵と取り引きをしていた無技人の男は小さい子供を連れていた。きつと周囲の目を欺く為の偽装カムフラージュだったのだろう。あの時の戦闘で流れ弾を受けたのを見た。重傷だった為、助からな
いと思った。

そんな『あの時の出来事』を、当時を振り返って思い出している様を装いながら語って聞かせる告発者の男。元々人の冒険談や体験談のようなお話を聞く事が好きなヴォレットは男の話に耳を傾けた。

「うーん……」

だが、幼少の頃から『ゼシャールド爺』の事を知るヴォレットには、男の話に出て来るゼシャールドは違和感ばかりが目立つ。道中、スンから聞いた村で暮らす『ゼシャールド先生』の話等からも、スンやゼシャールドに内通者の気配は感じられなかった。

『あ、あれっ 反応薄いな…… やっぱ唐突過ぎたか……？ そ、そうだ、証拠だ！ 証拠を見せりやいいんだっ！』

ヴォレットの微妙な反応を『本当にスンが現場にいたのかを疑っている』と捉えた彼は、流れ弾で負った傷が残っている筈だと訴えた。あの時ブルガーデンの密偵と勇敢に闘ったのだと語る男を、スンは座り込んだまま呆然とした表情で見詰めていた。

人は余りにも予想外な、自分に想像出来うる範囲の外に位置するような行為に遭遇した時、思考停止状態に陥り易い。それが自身に向けられた悪意や害意、侮辱の類であった場合、怒りよりも哀しみよりも、驚きが先に来る。スンは驚いていた。

今まで村の近郊より遠くまで出た事のなかったある意味世間知らずなスンは、こんな人間が世の中に存在する事に驚いていた。

『……ふざけやがって』

スンの隣に倒れ伏したまま男の話を聞いていた悠介は、この男が昔スンとその父親を襲った二人組の片割れだと分かり、どうしようも無い憤りに身を震わせた。怒りで乱れそうな意識をゲームプレイの要領で無理矢理集中させてカスタマイズメニューを開く。

「間違いないですって！ ホラ、多分この辺りに傷が残ってる筈でさー！」

「！……っ」

「お、おいっ」

顎に手を当てて唸っているヴォレットに業を煮やした男は、呆然としているスンに歩み寄ると枷を掴んで無理矢理引き立たせた。

ようやく我に返ったスンは身を擦って男の手から逃れようとする。勝手な真似をするなとヴォレットが注意を発する前に、男は手に纏わせた投擲も可能な神技の風刃でスンの服を切り裂いた。

「い、いやあああ！」

「ほらっ やっぱりあった！ ここですよココ、この傷痕！」

必死で振り解こうとするスンの抵抗も空しく、彼女の両腕を拘束している枷を掴み上げた男は、スンの腹部を斜めに走る古い傷痕を指し示す。ヴォレットは余程深い傷だったのであろう肌の変色した傷痕の事よりも、男の正気を疑い始めた。

『こやつ……？』

「恐らくゼシャルド氏が治癒したのでしょうか！　そうかつ！　も
しかしたらこの傷の治癒の為にあの時追って来な　ぶごっ」

「いい加減にしろてめえ！」

自説に酔い、興奮したように捲くし立てる男の顔面に、悠介の枷ナツクルパンチがめり込んだ。神技人用の非常に固い素材で出来た枷をカイザーナツクルにカスタマイズして、起き上がりしな全力で殴りつけたのだ。

両手で顔面を押さえてのたうち回る男を余所に、衛士達は悠介が枷を外した事を問題にする。例え熟達した土技の使い手であっても簡単に壊せるような代物ではないのだ。

「き、貴様！　どうやって　」

一斉に槍を構える衛士達は、次の瞬間、揃って姿を消した。

「な、なんじゃっ？」

一体何が起きたのかとヴォレットは消えた衛士達が立っていた場所を凝視し、啞然とする。そこにはポツカリと大穴が開いていた。

地面などをマップアイテムとしてカスタマイズする場合、カスタマイズ能力の届く一定範囲に弄ったステータスが反映される。

家や建物をカスタマイズする場合は、建物本体と扉、窓、造りによって屋根も其々別アイテムとして扱われるが、一つのグループアイテムとして同時にカスタマイズする事が可能だった。

ちなみに、川などを流れる水の場合は素早くカスタマイズして実行しなければキャンセルされてしまう。流れに合わせて移動しながらだと暫らくはキャンセルされない等の特性もある。

サンクアディエットの街は、区画別に石を積み重ねて造られ、ピラミッドのように一つの巨大な塊りと化して存在している。悠介のカスタマイズ能力は、この街を複数のアイテムで構成された一つのグループアイテムとして認識した。

一つのアイテムとしてならば、カスタマイズ出来る物体の大きさに制限は無い。どんな能力も使い方次第では武器になる。悠介は今日初めて、カスタマイズ・クリエート能力を戦いに使う決心をした。そして今初めて、戦いに使ったのだ。 落とし穴だが。

「そいつは昔、何の罪も無い村人の親子を襲った殺人犯の片割れだ」

悠介は未だ地面でのたうち回るくすんだ緑髪の男を指して糾弾し始めた。ゼシャールドから聞いた話を詳しく語る内、口元を押さえた男の顔がみるみる引き攣っていく。ヴォレットも男に対して不審の眼差しを向け始めた。

「くそおー！ てめえっ てめえもヤツの仲間だなあ！」

「っー！」

半狂乱になつた男は喚きながらその手に神技の風刃を纏うと、悠介に向けて投擲する。悠介は咄嗟に手を振り上げるような動作をしながら、先程からカスタマイズメニューに出していた石畳にカスタマイズを施して実行した。

ゴトンツと重厚な音を立てて、悠介の前に石の壁が出現する。神技耐性を高く設定した壁は風刃を阻んで四散させた。

「なっ！」

土を自在に操り、熟達すると岩を組み合わせてゴーレムのように扱える土系の神技は確認されているが、行き成り地面に一人飲み込める程の大穴を複数出現させたり、石の壁を瞬時に造り出すような神技は聞いた事が無い。

落とし穴への落下を免れた炎神隊の衛士や、周囲の野次馬達、風刃を放つた男も思わず言葉を失う。

「うらあっ！」

その一瞬の静けさを破る掛け声と共に、悠介は出現させた石の壁を蹴った。この壁は接地面を地味にカスタマイズして斜めにカットする事で、向こう側へ倒れるよう細工が施されている。

落とし穴は狙った対象が同じ位置に長く居てくれないと穴の空け所が分からないので、壁を攻撃手段にした。

「くそっ！ 妙な神技使いやがって！」

男は後ろに跳んで倒れてくる壁を躲すと、そのまま逃走を図った。やはり倒れるまでに時間が掛かる壁では武器にならないかと、悠介は男の逃走を阻止する為、次々と壁を出現させて退路を断つ。

これも落とし穴と同じで座標は目測と勘に頼るしか無い為、変な場所に壁を出して野次馬を巻き込まないよう注意を払いながらの力スタマイズ攻撃。だが、戦いの素人がそういった気遣いを持つ事はそのまま油断に繋がる。

周囲の被害を気にしながらという戦い方は、腕に覚えがあり、幾度もの困難と修羅場を乗り越えて、自信と経験に裏打ちされた余裕のある者にこそ出来る事なのだ。この辺り、穏かな環境で平和に育った悠介が抱える甘さであった。

「うわっ」

耳元でプロペラが回るような風音を鳴らして風刃が吹き抜け、悠介の頬と肩に切り傷を作った。退路を完全に塞がれる前に、悠介を攻撃して壁の出現を止めようとした男が立て続けに風刃を放ったのだ。

風の刃は軌道を目視し辛いので、複数放たれるとそこそこの威力でも脅威となる。

悠介は自分の周囲に壁を出して防御体勢を取った。幾つかの風刃が壁に阻まれて四散するが、素人の悠介らしい死角。

防御壁は頭上から降って来る攻撃に対応していなかった。風音で上から攻撃が来る事に気付いた悠介は咄嗟に身を躲そうとするが、脇腹を掠められた拍子にバランスを崩して転んでしまう。

防御壁から転がり出た悠介に、くすんだ緑髪の男はトドメの風刃を放つべく狙いを定め、腕を振り上げた瞬間、炎に包まれて燃え上がった。悲鳴を上げてもがきながら転げまわる男を、炎神隊の衛士が取り押さえに掛かる。

「お前……」

「わらわの名はヴォレットじゃ。どうみても彼奴おやじの方がオカシイじやろつ、わらわはアホではないぞ？」

見上げた悠介の視線の先では、ヴォレットが何時か見た指で弾く様な仕草を取り押さえられる男に向けていた。

9話・低民区門前広場

「スン、大丈夫？」
「……はい」

人の焼ける嫌な臭いを風技の民達が街の外へと吹き飛ばして換気が行われる中、悠介は治癒系の水技を使う衛士から治癒を受けながらスンの事を気遣う。裂かれた服も直ぐに何とかしてあげたかったが、それには着替えが出来る場所が必要だった。

カスタマイズ能力の元であるゲームの仕様で、装備中のアイテムにカスタマイズを反映させると、装備が外れてしまうのだ。

今のスンは裂かれた服の上に炎神隊のマントを羽織っていた。スンに炎神隊のマントを羽織らせたのはヴォレットだ。悠介は「意外にも良いヤツだったっばいヴォレットの方を振り返る。

「あははははっ クレイヴォール！ なんでお前までそこに居るのじや」

悠介の治癒やスンの解放を衛士達に指示していたヴォレットは、門前の広場に出来た大穴を覗き込んで笑い転げていた。炎神隊でただ一人、落とし穴に巻き込まれたクレイヴォールは、悠介が枷を外した事に逸早く反応して取り押さえようと動いた。その結果である。

穴の深さは低民区の街中に敷かれている石畳と、その下の基礎部分に当たる積石分、約二メートル半。大した深さではないが、甲冑を装備した状態で這い上がるのは少々困難だ。

この穴も、其処そこかしこ彼処そこかしこに立っている石の壁も、悠介の能力で『造り出した』り『出現させた』のではなく、カスタマイズによって石畳や積石を『変形させた』モノである。

上から顔を覗かせて楽しそうにしているヴォレットに『姫君たる者大口を開けて笑うものではありません』と、御小言を申し上げる職務に忠実なクレイヴォルは、穴の底で壁に背を預けつつ先程の現象を振り返る。

穴に落ちたのではなく、目の前にいきなり壁が現われたと思った。穴の底に居ただけだ。微かに光の粒が舞っていたが、それらは直ぐに見えなくなった。一体何の神技なのかサツパリ理解出来ない。その後、何人かは普通に落ちて来た。

『全ての神技が混じる、か……』

クレイヴォル達が穴から出られたのは、それから直ぐの事だった。やはり微かに光の粒が舞った後、唐突に穴の外に立っていた。というよりも、自分達の立っていた場所が穴の底から広場の地面に移ったような感覚だった。

区画門前の広場から穴やら壁やらを取り払って元の状態に戻した悠介はスンを背中に庇いながら、今回の騒ぎの事情をヴォレットに問い質した。脇に控えている側近を通さず、直接王族の姫君に説明を求めるといふ行為に衛士達がざわめく。

平伏させるべきかと御伺いの視線を向けてくる炎神隊の衛士に、
ヴォレットは身振りです。『よい、無用じゃ』と伝えて下がらせる。

「本当につくづく無礼な男よな、王族であるわらわに敬意の一つも示さぬし」

「敬意なんてのは自然に懐くモノだろ」

そんな悠介の言に道理だなと笑うヴォレットは、今回の事態は先程焼いて捕らえた男の告発によるモノだったと説明した。

ルフクの村にはブルガーデンの密偵と繋がっている者がいるという情報を受けて調べに行ったのだと聞いた悠介は、一瞬レイフォルドの事を思い出した。彼は何故あるとき森に現われ、自分に村の事を知らせてくれたのかと疑問を懐く。

「まあ、結局はあの男の狂言だったようじゃ。わらわに取り入る心算だったのは見え見えじゃったがの」

元々は自分が御忍びで村に赴いてゼシャルドの事を調べようとしていた所へ、あの男の告発があつて正式に衛士隊を出す事になったのだと一連の経緯を語るヴォレットに、悠介は呆れたように呟いた。

「なんだ、やっぱりお前が元凶かよ。しかも狂言で冤罪とか……冗談じゃないぞ」

「むっ 言っておくが、わらわはお前達を手荒に扱うつもりはなかったぞ」

「どうだかね。それより、俺たちをちゃんと村に返してくれるんだろっつな」

街からルフクの村までは普通の馬車で半日は掛かる程の距離があるのだ。そろそろ日暮れに差し掛かるうとする空を見上げながら、今日中には帰れそうにないなとこぼす悠介に、ヴォレットはその前に片付けて置かなくてはならない問題があると言う。

「内通の嫌疑はあの男の狂言だった事で晴れたが……ユースケ、お前が暴れた事で衛士に怪我人を出しておる」

「へっ？」

狂言の男としか戦った覚えのない悠介はポカンとなつて何時ぞやのような間の抜けた声を漏らす。それを見てニヤリ笑いを浮かべたヴォレットは、悠介が作った落とし穴に落ちて怪我をした者が複数人いるのだと説明した。

クレイヴォルの様に、穴が開いた場所に立っていた者は「気づいたら穴の底だった」といった具合で怪我も無かったが、穴の近くにいた者は何人か足を滑らせて落下、打撲などの怪我をした。

「ええっ 俺のせいだよ、ソレ」

「お前の気持ちも分からんでは無いが、何もあそこでお前が戦う必要はなかったのじゃ」

あの男への糾弾を訴え、後は衛士達に任せて置けばこんな騒ぎにはならなかったと諭されて、悠介は言葉に詰まる。

確かに、怒りで感情的になり、周りが見えていなかったのも事実だ。悠介がヴォレットも含めて衛士達を信用していなかったという事も、自ら戦う事を決意した理由でもあった。

「とはいえ、それでお前を罰するのも寝覚めが悪いからのう……さて、どうしたものか」

「……」

反応を窺うように肩越しの流し目で悠介の顔を覗き込むヴォレット。傍に立っているスンが不安気な表情で悠介を見上げ、次いでヴォレットに視線を向ける。あまり脅かすのも大人気ないかと息を吐いたヴォレットは、不問にする為の条件を出した。

「そうじゃな、わらわを楽しませてみる」

ヴォレットはそれで全て帳消しにして、ついでに街での身分を保証してやるという。ゼシャルドの説によれば悠介には全ての神技が混じり宿っている事になっていたので、認めさえされれば炎技の民として振舞う事も許される資格を持っている。

稀に存在する二つ以上の神技を宿している者は、神格の高い方が優先されて身分に適応されるのだ。

最初から悠介の罪を問うつもり等なかったヴォレットは、石畳に穴を空けたり壁を出したりする悠介の神技に興味を惹かれていた。アレだけの大きな壁を際限なく出せるなら、街中を迷路にしてみるのも面白いなどと傍迷惑な事を想像して楽しんでいると

「え、そんな事いわれても……俺、そういうの経験ないし……やっぱり愛がないと駄目だと思っんだ」

照れながら急にもじもじソワソワし始める悠介に、ヴォレットは一瞬『なんじゃそれは』と呆けた。が、直ぐその意味に気付く。

「あ、あほたれえ！　そういう意味ではないわっ！」

「いや、冗談だから」

若干頬を赤らめて『わらわはそんな”ふしだら”な女ではないぞ！』と抗議するヴォレットに、しれつと返す悠介。

「こ、こやつ……いますぐ消し炭にしてくれようか」

ワナワナと拳を握りしめているヴォレットを余所に、悠介は門前の広場を見渡す。既に件の男は連行され、衛士達の何人かは街の巡回に出たようだ。大勢いた野次馬の数も減り、広々というか閑散とした空間が広がっている。

「衛士と野次馬をもちよつと向こうまで下げてくれ」

「ん？ 何か思いついたのか？」

神技を行使する気配を纏って指を宙に彷徨わせている悠介の姿に、ヴォレットは何を見せてくれるのかとワクワクしながら、他の衛士達を野次馬共々下からせるよう炎神隊に指示を出す。

ここまで黙って成り行きを見守っていたクレイヴォールは、朝方の悲壮感さえ感じさせた荒れ様が嘘のように活き活きしているヴォレットを見て、これで気が晴れるのならと、悠介の礼を欠く対応にも目を瞑っていた。

色々混じっているようだが、炎技の民としての資格もあるのなら、こちらにも非がある今回は大目に見るのも良いだろうとの判断だ。クレイヴォールは『ヴォレットの楽しみ』に最後まで付き合う事にした。暫しの後、止めて置くべきだったかと後悔する事になる。

「コピペコピペと……階段は手摺りもあつた方がいいな……こんなもんか」

意識の集中によるカスタマイズ操作はまだ大雑把な形にしか使えないので、細かい部分は指先で整えていく必要があった。悠介なりに考えて導き出した答えにより、ヴォレットが喜びそうなモノを組み上げる。

「さっき広場を片付けた時にもやっておったが、ユースケのアレは一体何をしておるのじゃ？」

「さあ……、わたしもユースケさんの神技の事はよく分からないので……」

神技を使う時は何時もあんな感じに指を動かしているとだけ説明するスン。食べ物の味を変えたり、椅子やテーブルのデザインを変えたり、古い服や靴を生地から新しいモノに変えたりという今まで見てきた現象については、まだ黙っておく。

「よし、チエック……問題なし、これで大丈夫かな？」

組み上げたカスタマイズデータに問題が無いか、プレビュー機能で確かめて『転倒』や自重による『倒壊』、或いは『沈下』等の危険は無いと確認した悠介は広場の中央に歩み出ると、二人を呼び寄せる。

「スン、おいで」

「はい」

優しく呼ばれたスンは、てててと小走りに駆けて悠介の傍らに立つ。

「ほれ、お前もちよっと来い」

「おい！ なんじゃ今の扱いの差は！」

ぞんざいに呼ばれたヴォレットは肩を怒らせながらノシノシと、しかし何処か楽しそうな様子で悠介の前に立った。閑散とした区画門前広場の中央に立つ三人を、何が始まるのかと遠巻きに見詰める衛士達と、まだ残っていた野次馬達。

二人の少女と周囲の注目を浴びながら、悠介は実行ボタンに手を伸ばす。

「実行」

目の前の風景がいきなり変わる。高い防壁と中民区、さらに高い防壁と高民区、その頂上に聳える宮殿。それらが一瞬で見えなくなり、何処までも広がる大空と、遙か地平線まで続くフォンクランクの平原。高い場所特有の冷たい風が吹き抜けていく。

「うおおお！ なんじゃこれはー！」

「展望台の塔を作ってみた」

高さ約八十メートルの塔。『高い所好きそうだし』という悠介の読みは当たっていたらしく、ヴォレットは宮殿よりも高い展望塔の縁から景色を見下ろしては感嘆の声を上げている。

見た目は石の塔だが、材質は鋼鉄並の強度にカスタマイズされている。近くに街を拡張する為の、切り出された石が置いてある資材置き場があったので、材料の足りない分はそこから補って造り上げた。

突然現われた天を貫くような巨大な塔に、広場に居た者達は皆一斉に目を瞪り口をあぐりと開けたまま暫らく固まっていた。

「はっ 姫様！ 御無事ですかーっ！ ヴォレット様ー！」

我に返ったクレイヴォルは塔の天辺から響くヴォレットの声に呼びかける。すると、上から顔を出したヴォレットが手を振って応えた。辛うじて判別出来る程の高い場所から身を乗り出しているヴォレットに、クレイヴォルは冷や冷やさせられる。

「おーっ クレイヴォルー！ みよっ 凄い高さじゃぞー！」

「あ、危ないですからっ！ 身を乗り出さないで下さいっ！」

クレイヴォルはようやく顔を引っ込めてくれたヴォレットに安堵しながら、宮殿よりも高い建物が低民区に建った事は問題になるのではないかと懸念した。何よりも、一瞬でこれ程の塔を建ててしまふような神技を使う悠介の、得体の知れなさが気に掛かる。

『ゼシャルド殿は何故、これ程の力を持つ者を残していったのだ……っ？』

塔の出現に野次馬が増え始めた門前広場で、クレイヴォルは日々膨らんで行く謎と心配事に眉間の皺を増やすのだった。

「最高じゃな！ これはずっとこのままなのか？」

「まあ、一応丈夫に造ってあるから崩れる心配はないと思うけど」

「そうか、楽しみが一つ増えたわ。お前の神技は面白いな」

「そりゃどうも」

展望塔の天辺と地上を繋ぐのは塔の内側にある螺旋階段で、五階毎に休憩階を設けてある。

休憩階には小さな窓を付けているが、途中の階段は灯りがなければ真っ暗なので適当に灯りの設置をして欲しいなど、悠介が塔の仕様を簡単に説明する間、ヴォレットはずっと上機嫌だった。やがて日も暮れ、悠介達は長い階段を降りて塔を出る。

「あ、足が……棒のようじゃ」

「降りる方が……しんどいって言うしな。……スンは平気？」

「はい、わたしは大丈夫です」

悠介とヴォレットは息が上がってバテていたが、スンにはまだ余裕があるようだった。流石は田舎育ちだと二人に感心されて、スンはちよっぴり恥ずかしそうに頬を染めた。すっかり暗くなった門前広場には、宮殿から迎えの馬車が来ている。

「今日は宮殿に泊まっていくが良い、部屋を用意させよう」

「堅苦しそだからいいよ、どっか街の宿でもとってくれば」

「駄目じゃ」

「ダメで……」

別に宮殿の作法なんぞ求めやしないので安心しろと言って、ヴォレットは悠介達を宮殿に連れ帰るのだった。

10話：一泊二日の騒動閉幕

展望塔は民にも自由開放する方針で決まったが、一度に大勢が入り過ぎると危険かもしれないので安全を考え、入り口には常に見張りの衛士が立って人の出入りを管理する事になった。

普段は夜になると人気ひといけの無くなる門前広場だったが、今夜は大勢の人々がこの突然現われた展望塔に登ってみようと詰め掛けていた。早速、塔を象った土産物の商品化に向けて、小物の製造を手掛ける土技の民の募集を始める商人も居る。

休憩階では治癒系の水技の民が有料で回復を行うという商売を始めていた。

一方、ヴォルアンス宮殿まで半ば強引に招待された悠介とスンは、広い贅沢な部屋で落ち着かない一時ひといきを過ごしていた。

部屋に運んで貰った食事も摂り終え、スンと別々の部屋で休む事になった悠介は、当然の事と思いつつも心配やら不安やらな気持ちを抑え切れないでいた。疑心暗鬼ではないが、宮殿のエライ人達が皆ヴォレットのような気さくな人間だとは思えない。

「アイツが特殊なんだよな……変わり者というか」

「誰の事を言っておるのじゃ？」

部屋の中をウロウロしながら独り言を呟いていた悠介は、突然声

を掛けられて飛び上がる。

振り返ると、扉の所にスンを連れたヴォレットが立っていた。赤いドレスにツータールを下ろした赤毛のロング姿なヴォレット。白いワンピースのようなドレスを纏ったスン。何時ももさつとした村服に見慣れている為、胸元の開いたドレス姿は実に新鮮だった。

悠介の視線に気付いたのか、スンが恥ずかしそうに胸元を隠す仕草をした。

「んんんん？ どここを見ておるのじゃ、このユースケベめ」

髪を下ろしたヴォレットは艶のある美しい赤髪をさらりと流して育ちの良さを感じさせる姫君らしい淑やかな気品ある雰囲気ヴォレットを纏っているが、中身はやっぱり御転婆姫だった。

「うつせいわ。つーかどうしたんだ？ 二人揃って」

「食後のデザートを持って来てやったのじゃ、お前からはまだ話を聞いておらんなのでな」

ヴォレットとスンが部屋に入ると、メイド服姿な使用人が「失礼します」と配膳車を押して後に続く。テーブルの上に並べられた皿の上に瑞々しい果実が盛り付けられ、その上から蜜が掛けられる。ヴォレットのお気に入りヴォレットのデザートだ。

「うーわ、甘っそうだなコレ」

「こら、行儀が悪いぞ」

準備が整うまで黙して待つべしと注意され「コイツに行儀を注意されるとは」と唸る悠介に、スンはクスリと笑みをこぼした。使用人を廊下に下がらせ、さっそく頂こうとデザートに口を付ける。

「どっじゃ、美味しかろう」

「ん〜……スンはどうだ？」

「えっと……蜜ってこんなに甘いんですね？」

こんなに甘い果実は食べたことなからうと得意気に構えていたヴォレットは、二人の反応が芳しく無い事に首を傾げた。悠介の表情は如何にもイマイチというか期待外れを喰らったような様子だし、スンに至っては何故か疑問系で蜜の味にしか言及していない。

「なんじゃ、口に合わなかったのか？ まさか味が分からん訳ではあるまいな」

「いや、なんつーか……味が調和してないというか、あんま味のしない果実に蜜で無理矢理甘味をつけようとしてるみたいな」

「これって、ララの実ですよ。食べ頃の若い実みたいですけど、わたしはユースケさんの味に慣れてしまっているの……」

スンの微妙な言い回しに咽つつカスタマイズメニューを開いた悠介は、蜜和えの果実に何時も食べている実の甘味ステータスを反映した。デザートに光のエフェクトが舞うのを見たヴォレットが、キョトンとした表情を向ける。

「ほれ、食ってみ」

「んむっ」

悠介は味をカスタマイズしたデザート的一切れを掴むと、ヴォレットの口に押し込んだ。もぐもぐもぐ

「んんっ？ なんじゃこの美味さは！ まるで別物ではないか」

こんな事まで出来るのかと、ヴォレットは益々悠介の神技に興味

を持った。食べ物などの水分を調節して多少水気を増やしたり控えたり出来る水技なら知っていたが、ココまで味に変化を出す神技は初めてだ。

「他にはっ？ 他にどんな事が出来るのじゃ？」

「ん？ んー……他はまあ、服とか多少弄れるかなーって程度だよ」

興味津々な様子で身を乗り出して来るヴォレットに、悠介は曖昧に答えながら内心で少し見せ過ぎた事を気にする。色々と反則的な効果を持つ能力なので、あまり詳しく知られない方が良さそう判断して話を逸らす事にした。

「それよか、これってそこ等じゅうに生ってる実だろ？ 王族がデザートに食ってるとは思わなかったよ」

「ララの実か？ 勿論これはそこに自生している野生の実と違って、宮殿御用達の農園で育てた高級食材じゃぞ？」

他にも食材用に家畜などの飼育もしているが、こちらは牧場の場所に問題が出て来た為、大規模な移転を計画中なのだという。悠介は上手く話題を逸らせた事にホッとしつつ、牧場の話に耳を傾ける。

「この頃は何者かが牧場に魔獣を放ったりするのじゃ、まあこの辺りでそんな事をするのはブルガーデンの奴等しかおらんかの」

ゼシャールドの事もあってか、ヴォレットは幾分トーンの下がった声でブルガーデンの嫌がらせによる被害について語った。

国境方面の街道はほぼ封鎖され、他の国からサンクアディエットを目指す商人達はかなりの遠回りをしなくてはならない為、流通の滞りを招いて物価も安定しない状態が続いているらしい。

「父様は技を交える気は無いようだし、官僚共は役に立たんし、ゼシャルドは向こうに行ってしまうし……」

ふうと溜め息を吐いて頼杖を付くヴォレット。自分で口にした言葉に気落ちしたらしい。

憂いた横顔はその整った顔立ちと高貴な者に漂う独特のオーラを際立たせる。何時も勝気な光を携える赤い瞳が伏せられ、まだ幼さを残す小さな体躯で背を丸めている姿は、普段の活発な印象がある分とても弱々しく見えて、実に庇護欲をそそられる。

せつせか動く手で口に運ばれる蜜和えの実をもぐもぐしてなければ。

「明日は朝食後に村まで送るよう馬車を出してやるわ、ゆっくり休むがいい」

「そうさせて貰うよ」

デザートも食べ終え、悠介に与えられた部屋を後にするスンとヴォレット。スンは隣の部屋なのでヴォレットは扉の前で二人と別れて自室のある上層階へと戻っていった。

「じゃあ、スンもそろそろ休みな」

「はい……あの、ユースケさん」

スンは遠慮がちに悠介の傍に寄ると、そっと腕を握って直ぐに離れた。スンが悠介に触れたのは足を洗った時以来だ。自ら触れる事により、『あなたを信頼します』というスンなりの意思表示だった。

「おやすみなさい、ユースケさん」

「あ、ああ……おやすみ」

隣の部屋に消えるスンを見送り、『今はなんだったんだろう？』と首を傾げながら、悠介も部屋の中に戻るのだった。

翌朝、部屋で朝食を済ませた悠介達は、宮殿の一階出入り口前に着けられた衛士隊の馬車に乗り込もうとしていた。スンはお土産に貰った街服を着ている。裂かれた服は処分されてしまったらしい。

「おおーい！ ちょっと待てユースケっ」

「姫様っ そのように走られては、はしたないですぞ！」

ダラダラと出発準備を整えていた衛士達は、籠を抱えてバタバタ走って来るヴォレットと、御小言を申し上げながらその後ろに続いているクレイヴォルが現われた事で一斉に緊張した面持ちになり、慌てて姿勢を正した。

「これに昨夜見せてくれたお前のアレを掛けてくれ！」

「ぶっ」

スンにも増して微妙な言い回しを向けるヴォレットが手にしていたのは、デザートに使う高級ララの実を詰めた籠だった。

林檎大の大振りなララの実が八個程。とりあえず七個に甘味のカスタマイズをした悠介は、一個だけノリで作った辛味のステータスを反映させて籠を返した。

「一個だけハズレが混じってるからな」

「なんじゃ？ それは」

ニヤニヤしながら言った悠介の言葉に、スンがビクツと肩を震わせた。一度食べた事があるのだ。スンには三分の一切れが限界だったが。そんな二人の様子に首を傾げるヴォレットは、何だか面白そうだとデザートを楽しみにするのだった。

「わらわはお前達を気に入った。また遊びに来い、ユースケ」
「用事があれば来る事もあるかもね」

姫君の恩寵ウキウキを無下にするような連れな返答に衛士達がざわめき、クレイヴォルも微妙な表情を見せたが、こちらは得体の知れない悠介が来訪する事を余り芳しく思っていないので、態度に不満はあれど返答は歓迎するという意味での微妙さだった。

宮殿を出発し、街を出てルフクの村に向かう馬車の中で、悠介はスンと村に帰ってからの事を話す。

「バハナさん心配してるだろうなあ」
「ええ……わたしの事、あんなに一生懸命庇ってくれて……」

帰ったら先ずはバハナおばさんの所へ行こうと相談し合い、畑の水撒きや、預けた魚籠の中身がどうなったか等を話題に雑談を交わす。つい二日程前までは、二人で並んだ時に必ず空いていた一人分の距離が、今は腕一本分まで縮んでいた。

飛ぶような勢いで街道を駆け抜ける衛士隊の馬車は、昼前には二人をルフクの村まで送り届けたのだった。

ちなみに、実は辛い物も大好きなヴォレットは悠介曰く『ハズレの実』を食べてその辛味に嵌ってしまい、しかしこの味を実に出せるのは悠介の神技のみとあって『ユースケに会いたい』等と咳いてはクレイヴォルの心労に余計な負荷を掛け捲っているとか。

「うつつうつつ……やはりゼシャールド殿はあの男を姫様に近づけさせよう……？ いや、しかし……」

近頃めっきり胃が痛む思いの側近に、色々誤解され掛かっている悠介なのであった。

10話：一泊二日の騒動閉幕（後書き）

ちなみに甘味カスタマイズのララの実は、桃缶の味に柿の食感みた
いな感じですよ。

11話：示された道

狂言騒動から数日後、無事に帰ってきた二人を村人達は温かく迎えてくれた。スンとも打ち解けあう事が出来た悠介は、『雨が降って地が固まったか』と、平穏な村での生活を感慨深く過ごしていた。ちなみに、レイフォルドはあれ以来姿を見せていない。

遅い起床でベッドを後にした悠介は、部屋に置かれた水桶で顔を洗って広間に出てくるなり寝起きのツツコミを入れた。

「なんで居るんだよっ」

「おお、やっと起きて来たか。ユースケはお寝坊さんじゃのう」

「あ、おはよう御座いますユースケさん。朝ご飯、出来てますよ？」

何故か広間の食卓に着いているヴォレット。玄関の扉付近にはクレイヴォルの姿もある。

「それにしても、この『フライ』という料理は美味しいのう、これもユースケが作ったそうではないか」

「材料はあったからな……って、そうじゃなくて」

揚げ物は宮殿の食事で少し凝った料理も恋しくなった悠介が、バナナに預けていた魚を捌いて何となく作ってみたモノだ。穀物や卵、食用油等は揃っていたので、カスタマイズを交えながら作ってみたところ結構イケる味に仕上がった。

ララの甘実と違ってこちらは穀物を薄力粉状に加工する行程以外はカスタマイズに頼らなくても調理可能な為、即日村人達に広まり、今では各家庭の味が出せる村の定番家庭料理となっていた。

「まあいいから座れ、話は食事の後にしよう。スン、ユースケに飲み物を」

「なんでお前が仕切ってるんだ……」

朝っぱらからゲンナリ頂垂れてテーブルに着いた悠介は、とりあえず空きつ腹に芋の揚げ物と肉野菜の炒め物をララの搾り実ジュースで流し込んだ。余談だが、ララの実発酵させると実酒が出来る。良質の美味しい実酒は『ララの実酒』等と呼ばれて重宝され、割と良い値段で取り引きされるのだ。

朝食を終えて一息ついた所で、ヴォレットが徐に切り出す。

「さて、今日わらわが訪ねて来た理由だが」

「ララの甘実が目当てとかじゃないだろうな」

悠介のちゃちゃに『それもある』と返しつつ、ヴォレットは王家の紋章が記されている一通の書簡を取り出した。それをスラツと上下に開いて読み上げる。

「此度の功績を称え、我が名において汝に仕官の機会を与える。エスヴォブス・ヴォイラス十八世」

「なんだ、それ？」

「平たく言つと召致書じゃ」

宮殿に仕える機会を与えようという内容だが、実質『我が国に仕えよ』という意味の込められた召致令状だと言う。要は悠介を召抱えに来たのだ。眉を顰めて腕組みをした悠介は、搾り実ジューズを一口飲んで椅子に座りなおした。

「イラネって言いたい所だが……詳しく説明してくれ」

「うむ、お前の事だから簡単には頷くまいと思っておったわ」

官僚達の間で悠介の召致が話題になったのは例の騒動の翌々日。やはりサンクアディエツトで最も高い建造物となる展望塔を宮殿の正式な承認も無く、しかも中高民区を差し置いて低民区に建てた事が『けしからん』と問題になったらしい。

ならば中高民区にも建てさせてはどうかという提案には、『低民区の二番煎じになるのはけしからん』という理由で却下。

一応ヴォレット姫の為に建てられたモノであり、街の新たな観光名所としても採算が取れるので塔を撤去してしまえという声は無く、しかし中高民区が差し置かれたままでは等民制度を敷く国家として示しがつかない。

塔を建てたのが先日ブルガーデンに渡ったゼシャルド氏所縁の者であるという所も、官僚達が頭を痛める部分であった。それこそ、等民制度の廃止を叫んで連日挑発行為を仕掛けて来るブルガーデン側が、嬉々として付け入りそうなネタである。

悩んだ末、悠介を宮殿衛士に仕官させてフォンクランク国に貢献させる事で、等民制国家の体裁を保とうと考えられた。エスヴォブス王が裁定する御前会議で悠介を仕官させる話が決まった時、ヴォレットは自らその役目を買って出たのだ。

「仕立てや調理士にも使いたいが、一番の目当てはお前の塔を建てた神技じゃ」

今は丁度ブルガーデンに対抗する為、国境に面した砦の建設計画が進められており、それに手を貸して欲しいのだと言う。仕官に応じるなら、ルフクの村にも優遇処置をとるといふ特典つきだ。

「どうじゃ？ 悪くない話だと思うが」

ヴォレットは席を立つと、腕組みをして考え込んでいる悠介の背後に回り込んで首に腕を絡める。

彼女が妙齢の女性であれば色気で惑わそうとしているようにも見えたとあるが、実は二十歳代の悠介と十四歳のヴォレットでは、年下の子に懐かれたお兄さんが構ってくれとせがまれているようにしか見えなかった。スンが微笑ましげな視線を向けていた。

「衛士ねえ……」

「宮殿勤めだから給金も良いぞ？ スンに楽な暮らしをさせてやりたいじゃろっ？」

「なんだよ、その落とし文句は……村からは通えないよなあ」

「流石にココからでは距離があるのう」

少し考えさせてくれという悠介に、答えを予想していたヴォレットは三日後、返答を持って宮殿に来るようにと言いつける。

「どっち道行かなくちゃなんのか？」

「うむ。最初に言った通りこれは召致令状じゃからな、来ないと王の命令を無視した事になる」

士官に感じない事も命令無視に当たるのだが、そこは表現を曖昧にする事で感じずとも罰しなくて済むように、また王が誘いを蹴られた事にならないよう配慮されている。

その場合はまた別の形で何らかの貢献を強いられる事になるが、とヴォレットは付け加えた。

「めんどくせー」

「ふふっ まあゆっくり考える事じゃ、良い返事を期待しておるぞ」

ヴォレットはそう言い残して引き上げていった。すっかり甘味と辛味のカスタマイズを反映させた高級ララの実を持って。

「どうしたもんかね」

静かになった広間で溜め息と共にそう呟いた悠介は、スンに意見を求めてみた。ルフクの村にも優遇処置がとられると言うのなら、村にとつても悪い事ではない。だが、悠介が仕官する事に応じれば、スンは一人暮らしになってしまう。

「凄いですよ悠介さん、大出世じゃないですか」

「うーん、やっぱそうなのかなあ」

「時々帰って来られるみたいですし、いいと思いますよ？」

スンは仕官の話概ね肯定的に捉えているようだった。悠介としては、ようやくスンとの生活も軌道？ に乗り始めていただけに、勿体無いような急過ぎるような微妙な気持ちだ。しかしそこで『寂

しくないのか？」とは聞けない微へタレな悠介。

『イエスでもノーでもへこむなり重くなるなりするんだよなあ』

これは本当にゆっくり考えたほうが良さそうだと、悠介は搾り実ジュースの残りを飲み干して天井を仰ぐのだった。

「おや、ユースケ。森に行くのかい？」

「バハナさん」

翌日、釣具を持って家を出た所でバハナと会った悠介は、彼女にも少し意見を聞いてみる事にした。

「そうさねえ……あたしはスンを一人にするのは反対だけど」

スンも悠介の事を考えた上で賛成したのだから、個人的には賛成しかねるがスンの気持ち尊重するなら、悠介には街で頑張つて来て欲しいというのがバハナの答えだった。

「戦つたりつて危険はないんだろう？」

「多分……砦の建設に力貸してくれて言つてたし、後は食い物の味を弄るくらいでしょうからね」

ヴォレットの話ではエスヴォブス王に戦火を交える意思は無いそうだし、砦が出来たならブルガーデン側もちよっかいを出し難くな

るだろうと悠介は考えていた。

「まあ、決めるのはあんたさ」

『よく考えて決めな』と言ってバハナは悠介の背中を叩いた。スンと同じくこの村の女性は結構力があるので、悠介は咽た。

すっかり定番の釣り場となった森を流れる小川の畔で、土をカスタマイズして造ったベンチに座ってオカズを釣り上げている悠介。考え事をしていて集中しきれない為、何匹か獲り逃しているが、それでも三十分程で四匹の獲物が魚籠に収まっている。

「しかしよく釣れる針だねえ、僕にも一つ分けて欲しいな」

「うわっ びっくりした！」

物音も立てず気配も無く、何時の間にか直ぐ傍に立っていたレイフォルドが、悠介の作った毛鉤を覗き込んでいる。相変わらず掴み所の無い飄々とした雰囲気。風のように現われるブルガーデンの密偵らしき男。

「あんた何処から湧いて出るんだ」

「ふふ、僕は森の民なのさ」

『風の民だろ』という直球なツッコミも軽く受け流し、レイフォルドは宮殿からのお誘いについて話題を振る。何処で知ったのか等という問いは早速意味を為さないだろうと悟る悠介は、自分が仕官するとブルガーデンは困るのではないかと鎌かまを掛けてみた。

「そうなんだよ、君の神技ならデカイ咎も一瞬で建てちゃうんだろ
う？ だから僕は、君を始末しなくちゃならない……」
「！っ」

悠介は咄嗟に臨戦態勢をとった。カスタマイズメニューを意識の
集中で開き、何度も練習した戦闘用マップアイテムのカスタマイズ
ステータス呼び出す。自分の周囲にゴツイ多重防壁と棘付き落と
し穴という複合トラップゾーンを一瞬で組み上げる。

「なーんちゃって、なーんちゃって、雰囲気出てた？ 僕の役割は
伝達専門、暗殺なんて無粋な仕事は管轄外さ」

「あのな……」

あつはつはと笑いながら悠介が作ったベンチに腰掛けるレイフォ
ルドは、悠介の周囲に張り出した防壁に興味を持った。

「それはどんな効果があるんだい？」

「自分で試してみ」

ニコリと笑ったレイフォルドは、風を操って落ち葉と枯れ枝を固
めた人型を作り出した。そんな事も出来るのかと、思わず目を瞠る
悠介。風圧で体重も再現した人型は、複合トラップゾーンに入った
途端、薄い蓋を踏み抜いて落とし穴に嵌った。

そこへ、多重防壁の外側が垂直に滑り落ちて人型を直撃、穴の底
で棘と防壁に挟まれて串刺しになる。

「うわあ、結構エグイねえ。それにしても、落とし穴の偽装は完璧
だね」

落とし穴の存在には全く気がつかなかつたと肩を竦めて見せるレイフォルド。ゴツイ防壁に気を取られていると、まともに落とし穴の蓋を踏み抜いてしまい、更に上から防壁が降って来るという仕掛けだ。この防壁はそのまま倒すと穴の橋渡しにもなる。

「で、君は仕官するのかい？」

「いきなりだな。それをどうするか悩んでたんだよ」

「そうかあ、国に仕えてみるのも良いんじゃない？」

「なんで？」

仕官を断つてもフォンクランクへの貢献を強制されるなら、責任や義務と引き換えに立場も貰った方が得策だと諭す。何処まで事情を知ってるんだという悠介のツツコミは、やはり華麗に受け流す自称森の民なレイフォルド。

「どっち道便利に使われるなら、永続的に報酬や特典があつた方がいいでしょ」

「ふーむ」

確かに一理あるなあと思いつつ、悠介は何故また自分にそんな話をするのかとレイフォルドの行動に疑問を懐く。

「なあ、アンタなんで　　って、居ないし！」

前回同様、レイフォルドは突然現われて忽然と姿を消した。毛鉤一本に悠介の手の内とも言える戦闘用神技情報と共に。

この夜、鳥肉の細切りと角切りララの実を和えた野菜サラダに小魚のフライという夕食を味わいながら、悠介は明日、サンクアディエットに出向く事をスンに話した。

「分かりました。それなら、明日は早く起こしますね」

「ああ、頼むよ」

悠介はまだまだ馬車の扱いに慣れたとは言いが、どうにか一人で走らせる事は出来る。街までの道程は街道を真っ直ぐ進むだけなので、そこは心配ない。

会話が途切れ、暫らく食器の音やフライを齧るシャリシャリという音だけが静かな広間に響いていた。

「ユースケさん」

「えっ？ な、なに？」

急に話し掛けられて思わずもる悠介に、スンは若干気まずい気な表情を浮かべながら、悠介が内心で気にしていた事に言及する。

「わたし、大丈夫ですから。確かに一人だと寂しいですけど、先生と暮らしていた時もよくありましたし」

ゼシャルドが遠出したり旅に出るなどして家を空けていた時は、バナナがよく気に掛けてくれていたので、気にせず今回の機会を活かして頑張っって欲しいというスンに、悠介は気持ちが悪く態度に出たかな？ と、少し気恥ずかしくなった。

「先生が言っていました。ユースケさんは、何れ世界を動かす人物になるって」

「世界で……」

「だから、なるべく外の世界と触れ合う機会が必要なんだって」
「……」

ゼシャルドの言葉を思い出すと、悠介はこの世界における自身の根本的な存在理由、曖昧な立場も思い出す。

即ち『邪神』として異世界から喚ばれたという事実。この世界で何を成す為に喚ばれたのか、何故自分はここにいるのか、考えても答えは見つからず、見つける方法があるとすればたった一つ、この世界で生きて行く事。見識を広める事だ。

「そうだな……」

その後は、夕食を終えて就寝の時まで二人の間に会話は無かった。

翌日

まだ薄暗い早朝、悠介は衣類を纏めた小さな鞆を背負って荷馬車の御者台に乗る。見送りは起こしてくれたスンのみだ。宮殿で衛士になれば、暫らくは村にも帰って来られないだろう。

何か気の利いた別れの挨拶は無いかと頭を捻っていた悠介だったが、結局シンプルに行く事にした。

「行って来ます、スン」

「行ってらっしゃい、ユースケさん」

朝靄の中、悠介を乗せたゼシヤールドの荷馬車は、サンクアディエットに向けてルフクの村を出発した。

12話：ヴォルアンス宮殿

衛士隊やゼンシャルドのように水技で馬の疲労を回復させながらという走行法が使えない為、何度か休憩を挟みつつ長い街道を走り抜けて、ようやく街に到着した頃にはすっかり日も暮れようとしていた。

「まさか普通に走ったらこんなに掛かるとは……」

改めて神技の有無による力の差を実感する悠介。とりあえず荷馬車を停めて近くの無技人に見張り番を頼むと、展望塔のある区画門前広場の衛士隊詰め所に足を運ぶ。ここから宮殿に連絡して貰うのだ。

「ああ、あんたか。話は上から聞いている」

詰め所にいた連絡係の衛士が宮殿に悠介の来訪を伝えると、暫らくして迎いの馬車がやって来た。悠介を乗せた馬車は中民区を抜けて高民区に入り、宮殿の四つある主な入り口のうち一般の衛士隊が出入りする一番下の階から敷地内に入った。

現在の宮殿は一階部分の奥に厨房が三つ、使用人達の部屋が地下にあり、一般衛士達の宿舎は一階に集中していた。衛士隊の指揮官と副官は二階の出入り口を使い、士官用宿舎も二階にある。

三階の出入り口は官僚専用として使われ、彼等の宿舎となる個室も同階に用意されている。一番上の四階出入り口は王族や高官の為に用意されていて、以前悠介達が泊まった客間はこの階にあった。

五階は広いテラスのある大ホールでパーティーなど晩餐会を開く場所になっており、六階は吹き抜け。七階までは四階からの長い階段が繋がり、『炎神隊』を始めとする精鋭の宮殿衛士達が詰める階でもある。王族専門の使用人もこの階に詰めている。

八階は広い謁見の間で、余興を楽しむ場でもあった。九階は王族の住居。寝室や教養部屋などの各種部屋と施設が並ぶ。最上階である十階は王の私室。妾や唱姫を呼んだりもする場所なのだが、現在は余り使われていない。

女中達の間では、エスヴォブス王は妾を囲う甲斐性も無い等と密かに囁かれていたりする。

悠介が馬車を降りると、鮮やかな赤いマントを纏う炎神隊を引き連れたヴォレットが、すっかり見慣れたツーテール姿でやって来た。報告を受けて急いで下りて来たらしい。傍にくっ付いているクレイヴォルは、やっぱり難しい顔をしている。

「来たか、ユースケ。決心は付いたのか？」

「ああ、仕官する事にした」

「そうか！」

嬉しそうに微笑んだヴォレットは直ぐに手続きを済ませようと、用意しておいた契約書類にサインをさせた。悠介は漢字、平仮名、カタカナ、アルファベットに何故かルナー文字というカルツイオの

共通語文字が書けたので、漢字とルナー文字で名前を記す。

「ん？ なんじゃ、この紋章みたいなのは」

「俺んトコの字」

キョトンと首を傾げたヴォレットだったが、悠介が住んでいた場所ですでに日常的に使われていた文字だと聞くと『そうか』で済ませた。ゼシャルドの文明考察や論説の類が苦手なだけに、下手に突付いて難しい言葉の洪水を浴びせられてはたまらんと警戒したらしい。

「よしよし、正式な任命は父様への謁見を済ませねばならんから明日以降になるが、当面はこれでよい」

書類を担当の者に渡したヴォレットは、王女の威厳に満ちた雰囲気を感じ取った。悠介はヴォレットがただの我侭姫に納まらない存在である事を感じ取った。

「我が国に仕官した以上、お前も今日からわらわの国の衛士じゃ」

「あ、ああ……」

「特別扱いするからそのつもりでいろ」

「それは分か……って、するのかよっ」

悠介が思わずツッコミを入れると、ヴォレットは楽しそうに笑った。

「わらわのお気に入りじゃからな」

「いいのか、それで……」

「まあ、それを妬んで色々仕掛けてくる輩も居るじゃろうが、そっちは自力でなんとかしてくれ」
「ちよっ おまー！」

いい奴なのか意地悪な奴なのかわからんと、仕官早々ヴォレットに振り回されて頭を痛める思いの悠介。そんな彼の姿に不意ながら親近感を懷いてしまったクレイヴォルは、内心でこっそり溜め息を吐くのだった。

「そうそう、お前の所属は『闇神隊』となるからな。隊と言ってもお前一人じゃが」

悠介の場合、神技の特定が出来ないという特殊系統な上に、髪の色にも問題があつて既存の隊には所属させられないので、悠介用に隊を新設する事になったという。

四神の宮殿衛士『炎神隊』『水神隊』『土神隊』『風神隊』に次ぐ五つ目の宮殿衛士、黒髪を闇の暦になぞらえた『闇神隊』。

闇の暦とは一年を五つの暦と十七の月に分けたカルツイオ暦の内、五番目に当たる特殊な暦の事を指す。炎の暦、水の暦、土の暦、風の暦、闇の暦とあり、炎の暦から風の暦までは、一つの暦に『一月を二十日』で数えた四つの月で構成される。

炎の暦なら『ヴォルナーの火月の一日目』から『ヴォルナーの風月の二十日目』までという数え方だ。

闇の暦は特殊で月が一月分しか無く、自由祭という御祭りが新年の誕生祭まで続く一年の総決算となる暦だ。

「隊服も直ぐに用意させるからな」

「もしかして、俺もマントとか着けるの？」

炎神隊の衣装を見ながら訊ねる悠介に『当然じゃろう』と答える
ヴォレット。

宮殿勤めの者に安っぽい格好をさせていては国家の恥だという。
諸国の大使が訪ねて来る事もあるのだから、彼等の目に多く触れる
事になる『精鋭の宮殿衛士』が貧相な姿を晒す訳にはいかないのだ。
宮殿衛士隊の派手な衣装にはそういう体裁もあつたのかと、悠介
は納得しつつ肩を竦めるのだった。

「わらわはちよつと所用で外すゆえ、後はこの者に聞くとよい」

ヴォレットに案内を命じられた使用人に連れられ、悠介は宮殿上
層階の一角にやって来た。大きな窓に面した石畳の広い廊下が奥の
方まで続き、壁側には宮殿衛士の隊員に与えられる部屋の扉が等間
隔に並んでいる。

「こちらの一番奥が、ユースケ様のお部屋となります」
「どうも」

悠介に与えられた部屋は他の衛士達の部屋と造りは同じで、ベッ
ドに机、椅子、本棚やクローゼットといった生活に必要な最低限の
家具は備え付けられている。その他の調度品は自分で購入するなり
して部屋を整えていくようになっていた。

「窓が無いんだな……」

「はい、灯りの油木は給金と一緒に定量が支給されますので、足り
なくなつた場合は各自で補って貰う事になります」

他の日用品も支給分以上のモノは自費で購入する事になるという衛士隊の生活に関する説明を受け、宮殿衛士という立場もそれほど優遇されている訳ではないのだなあと呟いた悠介に、説明をしていた使用人は『とんでもありません』と反論した。

「精鋭宮殿衛士の方達は一般の神民衛士の方達と比べれば、得られる報酬が全然違いますよ！」

「あ、そうなんだ？」

「はいっ だって宮殿衛士隊員は神民衛士隊指揮官の倍近く あ
……も、申し訳ありませんっ わ、私ったら失礼な事を」
「いやいや、そんな謝らなくても……」

悠介があまりにも自然体で話し掛けたせいで、うっかり地が出てしまった使用人は恥ずかしそうに謝罪する。扉の前で『いえいえ此方こそ』と恐縮合戦をやっている悠介達に声を掛けて来る者がいた。

「何を騒いでいるんだい？ ここは遊戯場じゃないよ」

「え？ あっ ヒヴォデイル様」

剣呑な口調で言い放つ炎神隊の隊服を纏った赤毛の青年を、使用人はヒヴォデイル様と呼んで畏まる。その様子から、多分偉い人なのだろうと読んだ悠介は軽く会釈してみせた。

「君は……ふんっ そうか、お前が例のオモチャか」

「……？」

『外せ』と手を払うヒヴォデイルに、使用人は戸惑いつつも二人にお辞儀をしてこの場を離れて行った。まだ村服姿の悠介を鼻先で

せせら笑うヒヴォデイルは、徐に歩み寄ると悠介の髪と瞳を覗き込む。

その不躰な視線と態度に不快を感じた悠介は、少し眉を顰めながら用件を訊ねた。

「なにか？」

「ふふん、本当に黒いんだな……姫様に気に入られているようだが、調子に乗るなよ」

「はあ？」

「お前のような素性の知れぬ下賤の輩が、栄えある宮殿衛士隊に喚ばれたダケでも不相応な厚遇だと知ることだな」

『精々飽きられた後の心配でもしておく事だ』と見下すような晒しを向けられ、むかつ腹が立った悠介は睨み返した。互いに向け合う視線に攻撃的で刺々しい気配を纏わせる。所謂”やんのかコラ”と『ガン』をぶつけ合っている状態だ。

一触即発な雰囲気が漂う中、そんな空気を一蹴するように軽快な声が衛士隊員部屋の並ぶ廊下に響き渡った。

「おお、ユースケ！ もう部屋は見たか？」

「……ヴォレット？」

「おおう、姫様。ご機嫌麗しゅう」

廊下の向こうからヴォレットが手を振りながら走って来た。振り返ったヒヴォデイルは恭しくお辞儀を向ける。息せき切った様子のヴォレットに、悠介は少しだけ違和感を覚えた。

「ヒヴォデイルも一緒か、何か話しておったのか？」

「ああ、なんか恫喝された」

ヴォレットを前に貴族然とした態度で優雅な笑みを浮かべていたヒヴォデイルは、思わず目を瞠って固まった。まさかの暴露に一瞬思考が停止する。ヴォレットの表情が訝し気に曇り、ヒヴォデイルの方を振り返った。

「き、君には男としてのプライドは無いのか！」

「ああ？ プライド云々言うなら影でコソコソ恫喝してくるお前はどつなんだよ」

真つ向から反論してくる悠介に、ヒヴォデイルは益々混乱した。今まで新人衛士やライバル貴族に対して予め警告を示しておく事は何度も行つて来たが、こんな対応を返されたのは初めてだ。

「まあまでヒヴォデイル。　ユースケも……広場の時と言い、意外に喧嘩早い奴じゃな」

「別に喧嘩なんかしないよ、ただな」

心配掛けたくないからとか、プライドを守る為に『なんでもないよ』って隠して、影で嫌がらせに耐える新人君をやるだけでも？んなありがちな展開踏むかよ、アホくせえ、ノベルゲーマー舐めんな

「大体そんなの俺のキャラじゃねーよ」

そう言つて笑い飛ばす悠介。力を得た事と、この前の実戦経験で多少気が大きくなっているが故の饒舌モードだったのだが、ヒヴォデイルは所々意味の分からない部分はあったものの、悠介に計略を見抜く才を感じた。

尤も、ヒヴォデイルに人の才能を見抜く能力がどれだけ備わって

いるかは、非常に微妙なところだが。

「分かった分かった、さつき下で言った事が早速発生したようじゃな」

やれやれと肩を竦めながら宥めるような仕草を向けるヴォレットに、悠介は何だか自分が大人気ない事をしてしまったような気恥ずかしい気分になった。照れ隠しに腕組みをしてソツポを向いてみる。

「ヒヴォデイルも、高貴な血筋のお主には気に入らんかもしれんが、あまり事を荒立てんでくれぬか？」

「はっ　め、滅相ありません。このヒヴォデイル、姫様の婚約者候補を自負する身でありますればっ」

『婚約者っ？』と思わず目を丸くして振り返る悠介に、ヒヴォデイルは優越感たっぷりな笑みを向けた。

「お前、何歳よ？」

「む？　さつきから無礼な言葉遣いだな君は。僕は今年で十八になる」

「ヴォレットは？」

「なんじゃ、知らんのか？　わらわは十四じゃ」

女性に歳を訊ねるものでは無いぞ？　と注意しながら答えるヴォレット。十四歳と十八歳、中学生と高校生、大人の入り口とも言える歳と大人になりきれない歳。唸る悠介。

「うーん、微妙だな」

「なにがだ」

「なにがじゃ」

つくづく奇妙な反応を見せる悠介の言動に興味を引かれ、何時の間にかヒヴォデイルはヴォレットと同じ様に、悠介との会話を楽しんでいた。今までの高貴な身分上にある交友関係には見られ無い、全く新しい概念に引き込まれる。

結局この日は悠介の部屋で三人、夕食に呼ばれる時間まで会話をしながら過ごしたのだった。

13話：闇神隊の初任務

翌朝

悠介は新しい生活の拠点となる自室で惰眠を貪っていた。前日は朝から夕方過ぎまで荷馬車で延々移動した事と、その後の宮殿内でのごたごたで疲れていたのも、夕食後は早めにベッドに潜り込んだのだが慣れない環境で中々眠れなかったのだ。

そんな朝のまどろみという最も至福の時に意識を委ねている所へ、それらを無情に蹴散らす炎の小悪魔が乱入して来た。

「ユースケっ 起きておるか！ 寝ておるなら今直ぐ起きよ！」

「……………ねーかーせーろー……………」

「駄目じゃ」

「うー……………」

ずりずりとベッドから引きずり出されて床に転がった所で、委ねていた意識をまどろみから回収する悠介。欠伸をしながらノソノソ起き上がると、ヴォレットが黒い布の塊りを突き出した。

「お前の隊服じゃ、早く着て見せてみよ」
「隊服？」

受け取ってみると、それは宮殿衛士隊が纏っている衣装と同じデザインをした黒い服だった。『ああ』と、悠介は自分が新設される

闇神隊とやらの所属になった事を思い出す。コスプレ衣装を渡された気分になりながら着替えようとして、ふと振り返る。

「……着替えるんだけど」

「うむ、早く着替えるがよい」

「いや、そうじゃなくて……」

「なんじゃ、男の癖に肌を見られるのが恥ずかしいのか？」

お前は女の癖に恥じらいは無いのかと突っ込みたい悠介だったが、王族でしかも暴走御転婆姫ならきつとこんなモノなのだろうと思わず。ヴォレットの視線に罰ゲームでも受けているような気分を味わいつつ、新品の黒い隊服に袖を通した。

「そういえば、昨日の事なんだけどさ」

「うん？」

落ち着かない気分を紛らわせるついで、悠介は昨日ヒヴォデイルと睨み合いをしていた所へ現われたヴォレットに、何となく違和感を覚えた事について訊ねてみた。するとヴォレットは『なかなか鋭いな』と感心してみせた。

「お前の案内を任せた使用人からヒヴォデイルの事を聞いてな、急いで駆けつけたのじゃ」

「なんだ、そうだったのか……」

ヒヴォデイルは他の婚約者候補や若い衛士達にもよくプレッシャーを与える為の駆引きを仕掛けているらしい。彼自身、炎神隊の中では若手で神技の実力もそこそこだが、血筋は王族所縁の名門ヴォーアス公爵家の家督という立場にある。

「まあ、彼奴は彼奴で色々抱え込んでおるのじゃ。家が名門なだけにな」

そう言つて若干憂いた表情を浮かべるヴォレット。こつこつ所で時々大人っぽさを感じられる辺りが、世に聞く『女は成長が早い』などの通説に一応の納得を感じられる部分なのかなあと思う悠介だった。そう考えると、スンが仕官を勧めた事にも頷ける。

「ほうほう、中々決まつておるのう。中身は貧弱じゃったが」

「うっせ……マントは慣れないと動き辛そうだな」

悠介の要望で甲冑は最低限に抑えた為、防具は少し補強版が縫い込まれているだけの軽装になるが、そこはカスタマイズで独自の強化を施しておく。姿見に映る黒い隊服を纏った自身の姿に、悠介はまた今日から新しい生活が始まる事を実感した。

「よし、では早速父様の所へ謁見に行くぞ」

「え、今から？」

「今は何かと微妙な時期じゃからな、こつこつのはさつさと済ませた方が良い」

もたもたしていると官僚達から格式だの警備の問題だのと色々横槍が入って面倒な進行や手順が追加されていくぞと言われ、悠介も複雑な段取りを飛ばせるのなら有難いと、急かすヴォレットに付いて謁見の間のある階へと急いだ。

『ふふ……わらわだけの衛士じゃ……』

「ん？ 何か言ったか？」

「何も言っておらん、ほらっ 急ぐのじゃー！」

ヴォルアンス宮殿の八階、謁見の間。奥の壇上に玉座があり、広々とした空間に重厚な石柱が並ぶ。壁際の高い位置に設けられた窓から外の明かりが引き込まれる造りになっていて、幾つかの控え室や使用人の作業部屋が石柱の裏側に配置されている。

壇だんの前には各宮殿衛士隊の隊長と副長、それに王の側近や大臣数名がずらりと並ぶ。新設する闇神隊の任命式に必要最低限の者だけが集められていた。玉座のエスヴォブス王は、カーテンの影に隠れて膝先しか確認する事が出来ない。

「ほれ、早く行くぞ」

「ちよつと待てつて、俺作法とか全然分からんぞ？」

「そんなモノ適当で良い」

「適当つて……」

悠介はヴォレットに手を引かれながら緊張した面持ちで玉座の見える壇の前までやって来た。その姿を見た居並ぶ宮殿衛士隊の隊長や副長達は『これは使えそうにない』と複雑な表情を浮かべる。

『どうやら、衛士達の噂通りのようですね……』

『うむ、姫様のオモチャなる比喻は当たっていたようだ』

巨大な塔を一瞬で出現させたという特異な神技の有用性には期待したい所だが、それ以外の使い所は無さそうだと囁きあう。尤も、炎神隊のクレイヴォル隊長だけは、悠介の力を実際に体験している

ので、他の隊長達とは違う意味で複雑な表情を向けていた。

「此度はよくぞ召致に応えた。汝ユースケ、王に仕え、民を護りしフオンクランク衛士となる事を誓うか」

「え、と……誓います？」

『なんでそこで疑問系なんじゃっ』

『だから作法とか分からんつつたじゃないかっ』

小声でヒソヒソとやり取りする悠介とヴォレットに、進行役の大臣は困った顔で玉座の王に御伺いを向けた。

向けられたエスヴォブス王は軽く手を上げて『いいから進行せよ』の指示を返すと、奔放な愛娘ヴォレットに慈しみの視線を向けて目尻を下げる。だめだこりゃといった雰囲気ヴォレットで頭を振った大臣は、任命式の進行に戻った。

衛士の証となる紋章を乗せたトレーが玉座の近くに運ばれ、徐に立ち上がったエスヴォブス王がその紋章を手にとると、ヴォレットに促がされた悠介は壇の階段を上って王の前で片膝を付いた。

そうして王に差し出された紋章を受け取る事で、悠介は正式に衛士と認められ、任命式は無事終了となった。四大神への誓いとが王への忠誠を謳うたう儀など、色々すつ飛ばして大分簡略化された任命式だったが、要は王様から衛士の証を賜ればそれで良いのだ。

各衛士隊の隊長達も、またぞろ姫の我侭で行われた任命式なら、然して格式に拘る必要も無いと誰も問題にしなかった。

最近姫がお気に入りにしているらしい黒髪の若者に衛士の証を授けたエスヴォブス王は、この若者がゼシャルドとも親しい間柄であるとの報告を受けていた事で、色々話を聞いてみたい気持ちに駆られていた。

「ユースケよ、お前は」

「はい？」

下がるうとしていた所に王から声を掛けられ、悠介は腰を浮かしかけた所で止まる。しかし、エスヴォブス王は逡巡するように何か言いかけては口を噤み

「……いや、よい」

この場でゼシャルドの名を出す事は憚られる。そう思い直し、結局何も言わず下がって良いぞと手を払った。

「あー緊張した。しかし、なんか王様つつても普通のおっちゃんみたいな感じだったな」

「わははっ まあ、父様はあんな感じじゃ。ああ見えて政では結構腹黒い所もあるぞ？」

任命式を終えた悠介はヴォレットに連れられて宮殿衛士隊の控え室に向かっていた。闇神隊の新設と悠介の就任は宮殿中に伝えられているので、顔見せも兼ねて宮殿の衛士隊施設を案内してくれるらしい。衛士食堂や私用で街に出る場合の馬車乗り場なども回る。

ちなみに、悠介が乗ってきたゼシャルドの荷馬車と馬はルフク

村まで届けて貰える事になった。

「昼過ぎには皆の建設現場に行つて貰う事になるからな、とりあえず重要な施設だけ回つておくぞ」

「それはいいけど、お前自ら案内とかしてていいのか？」

「言ったじゃろう？ 特別扱いするから、そのつもりでいると」

「……またヒヴォデルみたいなのに絡まれると面倒なんだけどなあ」

ぶつくさ言っている悠介を、ヴォレットは楽しそうにしながら宮殿内を連れまわした。行く先々でヴォレットに向けられる視線と、自分に向けられる視線との温度差にうんざりしつつ、無難に新任の挨拶をして回る悠介。

そんな調子で憶えておくべき施設を粗方回り、最後に神民衛士隊の控え室にやって来る。宮殿衛士隊の無駄に豪華な控え室と比べると、こちらはシンプルで良く言えば機能的、ぶつちやけ『何処の酒場だ』といった雰囲気だった。

同じ宮殿内にある部屋でも、上層階と下層階とでは格調の高さも違うのだなあと、悠介は変に納得していた。

「ここは相変わらずうらぶれておるのう」

「こ、これはっ ヴォレット様！ この様な場所にまたどの様なご用件で？」

半分傾いたソファアールでだらだらしていた神民衛士隊の指揮官らしき衛士が慌てて飛び起き、ヴォレットに挨拶を向けた。他の一般衛士達もくすんだテーブルの上に散らばる賭博札や、持ち込んだ実酒を隠したりしながら整列する。

「ユースケ、この中から適当に選ぶがよい」
「へ？ どゆこと？」

せめて必要最低限の情報を与えてから選択肢を出せと抗議する悠介に、ヴォレットは「闇神隊は悠介一人の隊なので、暫らくは部下として神民衛士を付けるのだ」と説明した。今後、任務に赴くときはその部下を連れて行動する事になる。

「そういう大事なことは先に言えよ……」
「任務と言つても、どうせ今回の皆建設が済めば部下なぞ必要なくなるだろうからな」

広場に建てた展望塔のように、皆も悠介の神技でポンと建てて終わりだろうと肩を竦めて見せるヴォレット。

この任務が済めば、後はヴォレットの傍で話し相手なり料理の味付けなりという『特殊任務』ばかりなので、今回だけ体裁を繕う為の部下を就けるに過ぎない。

「なので適当に五人ほど選んで連れて行け」
「適当にねえ」

二人の会話を聞いていた衛士達は黒い隊服を纏った悠介に「あれが新しく設立された闇神隊の衛士か」と物珍しげな視線を向けていたが、部下として下に就く者を選ぶと聞かされて姿勢を正す。

宮殿衛士隊の任務に駆り出されたとなれば、厳しい仕事なら当然、緩い仕事でも結構な特別手当が付く事を期待できるのだ。是非とも自分を選んで欲しいとアピールの笑顔でやる気を見せる。

悠介は今回の任務に必要と思われる人員、馬車での移動を補佐する治癒系水技の民と付与系風技の民。帰りが遅くなつた場合、灯りが要るので付与系炎技の民。他、連絡係に伝達系風技の民と建設現場に行つた経験があるという攻撃系水技の民を選んだ。

神民衛士隊で指揮官もやっている三十代後半の男性。付与系炎技の民、ヴォーマル。

同じく神民衛士隊で副官の任に就く二十代後半の男性。攻撃系水技の民、シャイド。

二十歳代前半の女性衛士。治癒系水技の民、エイシャ。

同じく女性衛士で十代後半の少女。伝達系風技の民、イフヨカ。

さつき素早く賭博札を隠していた二十代中頃の青年。付与系風技の民、フヨンケ。

以上の五名が、悠介の部下として皆の建設現場に同行する。其々互いに自己紹介を終えた悠介と衛士達は一旦解散し、昼食を済ませたあと馬車乗り場に集合して任務地へ出発する事になる。

「じゃあ、とりあえず昼飯済ませちまおうか。ヴォレットは上に戻るのか？」

「うむ、残念じゃが父様と約束があるのでな」

早朝に手早く任命式を行う条件として、一緒に昼食をという手札を切っていたのだ。猫撫で声で駄目なときは食事や散歩で甘えて釣るという手を使うヴォレットだった。『なんという親バカ』と想いつつも、ヴォレットの今後が気になる悠介。

「お前、将来は魅惑の王女とか魔性の姫君とか言われそうだな」

「なんじゃそれは、いや……結構格好いい響きかも……？」

和やかにそんな会話を交わす悠介とヴォレットに、衛士達は啞然とした表情を向けていた。それに気付いた悠介がどうかしたのかと訊ねると、悠介の部下代表として最年長のヴォーマルが遠慮がちに問いかける。

「いやあの……姫様を呼び捨てになさってるんで、隊長と姫様ってどういう関係かな？なんて思いやしてね」
「あ……」

隊長と呼ばれる事に若干照れを覚えつつ、悠介は『確かに呼び捨ては不味いかな』と考えた。ヴォレットの婚約者候補で相当に身分も高いらしいヒヴォデイルでさえ、姫様と呼んでいるのだ。

「ヴォレット様……」
「うん？」

敬称を付けて呼んでみると、名前を呼ばれたヴォレットは『なんじゃ？』と小首を傾げる。

「ヴォレットヴォレットヴォレットヴォレットー！」
「わっ な、なんじゃいきなり」

「いや、なんか発声後の違和感が酷かったんで振り切ろうと思って」
「……わらわの名は灰汁あぐの強い実酒かつ」

もう慣れてしまった上に本人からも特別扱いするとの御達しが出ているので、このままでいいやと悠介は開き直る事にした。部下の衛士達には、『まあ、こんな感じの関係っばい』と他人事のように答えるのだった。

「ちゃっちやと終わらせて早く帰って来い」
「へいへい」

昼過ぎ

ヴォレットに送り出された悠介と部下五名を乗せた衛士隊の馬車は、宮殿を出発して砦の建設予定地へと向かう。ブルガーデンとの国境に面した平地に建てられる『ギアホーク砦』。基礎部分は既に半分程出来ていて、建物部分も三分の一程が組みあがっていた。

まだ砦としての機能は果たせないものの、物資を運び込んで衛士を配置すれば、国境を監視する拠点としては使える。

「隊長は一瞬であのデカイ塔を建てたって聞きましたが、砦も同じ様に建てられるんですかい？」

「どうだろうね、材料さえあれば出来なくは無いと思うよ」

「す、すごいですね……。た、建つ所……。見てみたいです」

ヴォーマルの問い掛けに答える悠介に、イフヨカが胸の前で握った両手を合わせながらキラキラとした瞳を向ける。

材料なら十分に揃っている筈だと、以前現場で警備に就いていたシャイドが十日程前に街へと帰還する際、交代要員と共に大量の資材が運び込まれていた事を説明した。エイシャとフォンケは高速走行中の馬車を安定させる事に集中している。

既に出来上がっている部分があるならカスタマイズもし易いだろうと、悠介は楽に構えて馬車が目的地に着くのを待っていた。

「隊長、見えてきましたぜ」

「と、到着の連絡……入れておきますね」

建設途中のギアホーク砦は、ほぼ出来上がっている真ん中部分の建物が石造りの重厚なシルエットで平地に佇み、その両側から木で組まれた足場の掛かる外壁が延びていて、壁沿いには切り出された角石かくいしが等間隔に積み上げられている。

真ん中部分だけでも高さ三十メートル、端から端まで五十メートルくらいはありそうな巨大な建造物だった。

「あ、あれえ……おかしいな」

「どうした、イフヨカ」

頭に指を当てながらパタパタわたたと落ち着かない様子で独り言を呟きながら首を傾げていたイフヨカに、速度を落とし始めた馬車の御者台からヴォーマルが肩越しに声を掛ける。

「あ、あの……風が、届かないんです」

砦側にも街側にも連絡がつかないのだとイフヨカは困惑気味に答えた。そうこうしている間にも馬車は建築現場の敷地内に入る。整地された地面に木材の切れ端などが散乱し、積み上げられた資材の近くでは、捲れあがった大きな布が風にはためいている。

「……妙だな、静か過ぎる」

シャイードは自分が居た時の現場と雰囲気が違う事に違和感を感じていた。今ぐらいの陽の高さであれば、足場や敷地内を大勢の作

業員が行き来している筈である。皆の入り口前に馬車を着けると、車体を風で包んでいたフヨンケが伸びをしながら風技を解いた。

「ふい〜やれやれ、みんな休憩でもしてるんじゃないのかい？」

実酒の一杯でもやりてえなあ」

「任務中よ、隊長の前で不謹慎な言動は謹んで」

真面目なエイシャに注意されて『お〜こわ』等と言いながら肩を竦めるフヨンケ。

「とにかく降りてみるか、隊長は何か聞いてませんか？」

「いや、特になにも……ここ、そんなに雰囲気おかしいのか？」

ヴォーマルを先頭に馬車を降りながら、悠介はシャイドに訊ねてみる。シャイドは自分が居た時は日が沈むまで何かしら作業が行われていたので、こんなに明るいうちから誰の姿も見えないのはやはりおかしいと、警戒を促した。

「わかった、じゃあみんな周囲に」

後ろから狙っているぞ！

皆に警戒を指示しようとした悠介の耳に、聞き覚えのある声が飛び込んで来た。思わず振り返った先、敷地の入り口付近で掘り返されて盛られた土が連なっている場所に、緑髪で衛士隊の服に似た格好の男が腕を振り上げて立っている姿を見つけた。

その男の服は不自然に激しくはためき、足元には砂埃が舞い、髪が靡いている。腕を振り上げたその体勢には見覚えがあった。門前広場で対峙した、あのくすんだ緑髪の男が風の刃を放つ時の体勢だ。悠介は咄嗟にカスタマイズメニューを開き、足元の土をカスタマ

イズして防壁を造りだした。防壁の出現と、緑髪の男が風刃を放ったのは殆ど同時だった。

ガスンツという土が削られる音がして、防壁の上半分が逆三角形に抉り取られる。

「な、何事です！」

「風刃っ？ 一体何処から」

「あそこだっ 入り口の土山！ もう一回防壁作るから、皆一箇所に固まってくれ」

中腰になりながら再度防壁を構築し、神技耐性のパラメーターも目一杯上げて反映する。光のエフェクトに包まれた土の壁が、第二刃を放とうとしている男の視界から悠介達の姿を隠した。が、直後にイフヨカの悲鳴が響き、同時にシャイードが水球を放った。

別方向にも風刃を放とうと構えている男がいたのだ。シャイードの水球攻撃で狙いを逸らされた風刃は、防壁の裏に隠れる悠介達の直ぐ傍を通り抜け、地面にその威力を示す爪痕を残した。

入り口付近から放たれた風刃も、神技耐性を高めてある土の防壁を一撃で穿つ程の威力を見せた。

「やべえ！ アイツ等『風の団』だ！ ブルガーデンの精鋭部隊ですぜ！」

「なんだってこんな所に……っ！」

「そんな……！ それじゃあ、ここで作業をしてた人達は……」

相手の正体を知ったフヨンケとヴォーマルが顔色を変え、エイシヤも青褪めた表情で口元を覆う。

「このままじゃ狙い撃ちにされやすぜっ 皆の中に逃げ込みやしよっ！」

「わかった！ あと、一時的に指揮をヴォーマルに任せる！」

悠介は砦の入り口まで土の防壁をトンネル状に出現させると、ヴォーマルに指揮を預けて全員に退避指示を出した。『良い判断です』とヴォーマルが感心してみせる。

待ち伏せがいた場合に備え、神技での攻撃手段を持つシャイードを先頭に砦を目指して走り出す。次々と風刃で打ち崩されていく防壁のトンネルを、次々とカスタマイズで修復しながら駆け抜けた。

「イフヨカ、索敵を」

「は、はい……」

入り口前で油断無く構えるシャイードの脇からイフヨカが砦内の風を探り、潜んでいる者が居ないかを確かめる。

その間、悠介は防壁を玉葱の皮が如く何重にも重ねていく事で風刃攻撃を凌いでいた。広場で戦った男とは比べ物にならない。これが『精鋭』と呼ばれる神技人戦士が放つ神技の威力なのかと、悠介は己が力に過信を懐いていた事を実感した。

『壁が土だからって事もあるんだろうけど、一番武力が低い事になつてる風技でこんな威力なのかよ……』

「て、敵の気配……ありません」

「よしっ 隊長！ 砦の中へ！」

扉の無い入り口に駆け込みながら、悠介は砦の壁に触れてカスタマイズ可能を示すチャイムを確認すると、すぐさまカスタマイズメニューで侵入出来そうな場所を片っ端から塞いでは反映していく。

侵入路を完全に封鎖し、更に砦を構成する石の強度と神技耐性を上げる事で鉄壁の護りに固めた。

建築途中とはいえ結構大きいギアホーク砦。イフヨカの索敵は屋内だと極端に範囲が狭まるので、封鎖してなお移動できる空間、地下一階と地上二階までの何処かに敵が潜んでいないとも限らない。或いは味方が立て籠もっている可能性もある。

風技による街への連絡は妨害されているらしく、応援は呼べそうにないが、明日、明後日にもなれば悠介達が帰って来ない事で異変を感じたヴォレット辺りが、衛士隊を差し向けてくれるかもしれない。

とりあえず、悠介達は近くの部屋に移動して立て籠もり、今後の対策を話し合う事にした。

「とんだ初任務になったなあ……」

14話：ギアホーク砦

「どうだ？」

「駄目ですね、表面を少し削るのがやっとです」

最も貫通力の高い風技を扱う部下からお手上げの報告を聞いたブルガーデンの精鋭を率いる団長は、溜め息とも唸りとも言えない声を吐きながら、封鎖された砦の外壁を叩いた。

まさか立て籠もられるとは予想外だったのだ。正確には『立て籠もりが効果を成した事が』だが。

「このまま帰還しちまう訳には行きませんか？」

「今はまだ不味い、俺達の痕跡は完全に消しておく必要がある」

風技による伝達は偽装と妨害で封じているものの、あまり時間は掛けられない。しかし、この砦の壁は風技の力で斬ろうが突こうがびくともしないのだ。ここを襲撃した数日前は、これほど強固な壁では無かった。

「やっぱり、あの黒い奴の仕業ですかね？」

「恐らくそうだろう。かなり特殊な神技を使うとは聞いていたが

……」

「諜報の怠慢ですな、抗議しますか？」

「いや、どうせ水の団の連中が擁護に出張って来るだろう。無駄な

事はしない」

ブルガーデンの内政上の問題で、要塞都市パウラには水技を扱う者が少なく、治癒や浄水を行える水技の民は重宝されている。ブルガーデンの象徴的存在が水技の民であったりする事もあり、水技の民の発言力は比較的高い傾向にあった。

今回ブルガーデンに存在する神民兵組織、フォンクランクでいう所の神民衛士隊にあたる組織の内、風技の民で構成される諜報部隊がゼンヤールドの抱き込みに成功した事もあって、有能な水技指導官を得た水の団はその部隊を鼻屑にしているのだ。

主に暗殺や破壊工作に活動の主軸を置いた風の団は、対象国に自分達の痕跡を残さず、それでいて自分達の仕業である事を悟らせるような『嫌がらせ』の挑発を続ける事で、長期的には甚大な被害を与えるという趣旨を中心に動いている。

そうして相手の暴発か、でなければ自滅を誘発するような工作を行うのだが、フォンクランクは何時まで経っても暴発の気配も無ければ自滅の気配も無い為、本国でも風の団の働きによる効果を疑問視する声が上がっていた。

団の予算を減らされない為にも、ここらでもう少し直接的な被害を与えて戦果をアピールしようとする今回の作戦行動に出たのだ。

が、ここで皆を襲撃したのが自分達である事を『明確』に知られてしまうと、今まで『疑いようもないが証拠もない噂』として躲して来たフォンクランク領内を荒らす工作活動への抗議を、ブルガーデン政府は無視出来なくなってしまう。

そこまで行けば流石に他の国からの批難も免れないので、出来る限り証拠は残したくない。

「ま、ここは潜伏組の連中に頑張って貰うしかないでしょう」

「上手くいかんモノだな……」

部下の楽観とも達観とも取れる言葉に答えながら、風の団団長は封鎖された建設途中のギアホーク砦を見上げた。

ギアホーク砦の一階、右側通路にある一室に身を潜めた六人は、今後の対策を話し合っていた。今居るメンバーでブルガーデンの精鋭と戦うのは無謀でしかない。よって救援が来るまで籠城する事になるのだが、それには先ず食糧や水の確保が必要になる。

「馬車に常備してた分はどうしようもないですから、砦の食糧庫を漁るしかねえでしょうね」

「水と食糧なら地下に倉庫と井戸があった筈だ。確か、厨房に階段があったと思う」

「じゃあ、先に全員で地下を調べよう」

ヴォーマルとシャイードの話から、悠介は先ず水と食糧の確保を優先し、環境が整えば他の通路も全て封鎖して襲撃に備えようと段取りを決める。

「医療品やランプの油木も集めておいた方が良いと思います、日用品の確保も士気を維持する上で大事かと」

「賛成だねえ、こんな状況で酒もないんじゃないやっつてらませんか」

籠城が長引いた場合にも備えて、日用品や消耗品も集められるだけ集めて置くべきだというエイシャの意見も取り入れ、一階と二階の部屋も手分けして探索する事にした。一応、フォンケには酒を見

つけても独り占めしない事と釘を刺しておく。

「あ、あの……二階と地下は、索敵しきれてないですから……」
「じゃあ、索敵よろしく」

オドオドと探索の危険を訴えるイフヨカにはしつかり仕事をこなして貰う事にした。

「それにしても、流石は宮殿衛士に抜擢されるだけありやすな」

ヴォーマルは危険に対する察知の鋭さや、慣れない指揮を部下に預けるなど、咄嗟の機転を利かせた対応を挙げて評価した。悠介は『たまたまだよ』と照れつつ、最初の攻撃を知らせてくれた声の事を考える。

『あの声、レイフォルド（あいつ）だったよなあ……』

ブルガーデンの密偵である筈の彼が何故、危険を知らせてくれたのか。スンが連れて行かれた時や仕官の誘いに悩んでいた時も、何処からとも無く現われては、アドバイスなどして消えていく。『何が目的なのだろう？』と悠介は内心で疑問を深めるのだった。

「砦に居た人達は、どうなったのかしら……？」

「さあな、人の気配は無いんだろ？ イフヨカ」

「は、はい……でも、空気が不自然に綺麗だから……多分、流される」

イフヨカの返答を聞いたフォンケは舌打ちして頭を掻き、エイシ

ヤも俯いて眉を顰める。イフヨカの言葉の内容を理解しきれなかった悠介は、その意味を訊ねた。

「それって、どういう事？」

「え、と……」

説明によると、普段から人が居る場所には常に気配が残っていて、特に屋内などは無人になっても数十日は残るモノらしい。

長く留まる空気の積み重ねで、気配の残り具合から人が居なくなつてどのくらい経過したのか、何時頃居なくなつたのか等を割り出せるのだが、この砦からはそういった気配が不自然に消失しており、人為的に拭い去られた事が窺えるという。

「ですので……多分、風技で空気を入れ替えてると……」

「ようするに、奴等は一度この中に入って血の匂いやなんやらを掃除して行つたつて事つすよ」

フォンケが端的に結論を述べた。砦に居た者は既に殺されている、と。

「移動中にも話したが、十日程前に資材の搬入と作業員の交代があった。少なくともそれ以降にこの事態が起きたと思われる」

「定期連絡は恐らく連中が偽装してたんでしょうな」

自分達が砦に逃げ込む事を想定して砦内の気配を浄化して置いたのだと考えると、現在の状況は決して芳しいと言えない。

しかし、悠介が砦の侵入口を全て封鎖した後、暫らく正面入り口の壁を外からガシガシやっていた様子からして、完全に立て籠もられる事は想定外だったのかもしれないと、シャイードは分析する。

「隊長の神技には奴等も対応出来なかつたって事でしよう」
「そつか……でも結構ギリギリだったんだな」

風の団が放つ風刃の威力を思い出し、あんな高威力の風刃は少し掠めたダケでも大怪我しそうだと言を竦める悠介。

「直撃したら一発で終わる自信があるね」

色々と話が纏まった所で、とりあえず食糧と水の確保に行こうと皆で厨房を目指した。索敵と移動補佐を行うイフヨカ、フヨンケを中心に添え、正面にシャイドとヴォーマル、後方を悠介とエイシヤが付いて行く。シャイドはイザという時の攻撃、牽制役だ。

「ヴォーマルの炎技は攻撃に使えないのか？」

「灯りくらいなら出せますがね、火力が足りないんで武器にはなりませんや」

そんな訳でヴォーマルは灯り役だ。現状、直接的な攻撃力を持っているのはシャイドだけである。悠介はカスタマイズメニューを出しっぱなしにして、緊急の際には全員を床石の防壁で包めるよう備えていた。

厨房のある食堂フロアは破壊された椅子やテーブルが転がっており、萎びた料理の残骸らしきモノが床に散乱している。通路にも何箇所か削り取られたような風刃の傷痕が残っていたが、ここは特に酷い有り様だった。

「どうやら食事時を狙われたようですね、ここで大分死んでますぜ」

ヴォーマルが指摘した通り、食堂に散乱する壊れたテーブルや椅子、床や壁、天井にも風刃痕と共に大量の血痕が付着していた。先程集まっていた部屋では感じられなかった異様な臭いが漂っている。腐った料理の臭いと血の臭気が混じったモノだ。

「地下に死体が投げ込まれてなきやいいいな」

フォンケのそんな言葉に、口元を抑えていたイフヨカが『ひつ』と肩を震わせる。これだけの規模の砦を建設するなら相当数の作業員が居た筈だ。外なら地面に埋める事で隠せるが、屋内にまったく遺体が見当たらない事を思えば、ありえない事ではない。

「イフヨカ、大丈夫か？」

「は、はい……へへいきですから」

上擦りながらそう答えつつも緊張して肩を強張らせているイフヨカに、悠介は『なんでこんな普通っぽい子が衛士なんてやってるんだろう？』と疑問に思うのだった。ともあれ、今は地下を調べる事に集中する。

「……しっかり蓋が閉じてやすね、鍵も掛かってる」

「今あけるよ……開いたよ」

ガツチリと閉じられていた地下へ床扉を三秒で開ける悠介。扉の状態を直接弄るのだから、土技の開錠よりも遙かに早い。

「便利な神技ですねえ」

屋内では無敵じゃないですか等と感嘆するヴォーマルは、フォンケに取っ手を引かせて半分ほど床扉を開くと、隙間から灯りを差し

込んで地下へと続く階段の様子を窺った。床扉を跨ぐ格好で取っ手を持ち上げていたフォンケが訝しげに表情を歪める。

「……………」

「どうした？ フォンケ」

「…………いや、ちよ〜っと気になりましたね」

そう言っただけ自分の鼻下を親指で掻いたフォンケは、ちらりとイフヨカに視線を向ける。床扉の開いた隙間から地下の索敵を行っていたイフヨカは、隙間を凝視したまま硬直していた。その様子に気付いたエイシャが心配そうな表情で彼女を気に掛ける。

「どうしたの？ ……何が聞こえたの？」

「イフヨカ？」

「だ、だいじょうぶです…………。て、敵と思われる存在が三人…………風技の波動を感じます。あ、あと、捕虜と思われる存在も…………」

恐らく風の団と思われる風技の民が三人、捕虜が二人。扉付き倉庫の内側までは分からないという索敵結果が報告された。

悠介は風技の索敵でどの程度の情報を得られるのかは分からなかったが、青褪めて肩を震わせているイフヨカの様子から、余程その風技の民が強力な使い手なのか、或いは捕虜の二人が酷い状態にあるのかと想像した。

「こっちに気付いた様子は？」

「ま、まだ…………気付いてません…………あの、半分…………寝てます」

「鍵まで掛けて閉じ籠った事を考えると、連中が寝床に使ったか、或いは罠か…………」

「隊長、扉に何か仕掛けはありやせんでしたか？ 鍵に連動するよ

うな」

ヴォーマルに訊ねられ、悠介はカスタマイズメニューを開いてバツクアップデータを参照した。回転・拡大機能で鍵の部分を調べてみる。すると、普通に開錠すれば鍵の抓み部分が回って小さな玉状の塊りが零れ落ちるような仕掛けになっていた。

階段を転がり落ちればさぞかし大きな音を響き渡らせそうな金属製っぽい玉だ。

「なるほど……一応仕掛けはあつた訳ですか」

扉の外から仕掛けごと鍵を外してしまう悠介の神技に、呆れるやら感心するやらなヴォーマル達は、しかしこれで『こちらが先手を取る事が出来る』と、地下の相手にどう対処するか相談し合う。半分眠っているそうなので、攻めるなら今がチャンスだ。

「こつちには攻撃手段が殆どありやせんからね」

「一気に攻めて決めるしかねえっしょ」

「至近距離からなら、私の水球でもしとめられると思つ」

神技戦ではどうにもならないが、接近できれば武器で何とかなるかもしれないという部下達に、悠介は彼等の持つ護身の短剣をカスタマイズで強化する事にした。土技で補強された普通の短剣に色々な効果を付与していく。

カスタマイズ・クリエート能力の基であるゲームのアイテム・カスタマイズ・クリエートシステムだが、衣服やマップアイテム、食糧などのカスタマイズは自由度を表現する為に備わっていたオマケ要素であり、元々は武器や防具のカスタマイズがメインなのだ。

従って武具の類はかなり幅広く設定できるようになっている。つ

いでにチート仕様なので威力も強度も上げ放題だ。

攻撃力、耐久力、神技力、命中力、体力、筋力、俊敏、などの項目を上げられるだけ上げて特殊効果も付与し捲り、この短剣にカスタマイズ出来る限界値まで強化した。そうして装備品で身体能力を底上げするという手があった事に、今更ながら気付く悠介。

『我ながら意外な盲点だった……』

内心で呟きながらカスタマイズした短剣を攻撃役の三人に渡す。

「っ！ ひゅっ、こいつあスゲエ……」

「不思議だ、短剣を握っただけで力が湧いて来るようだ。身体も軽い」

「武器強化や行動補佐の付与って神技なら分かりますが……武器単品に強化やら補佐効果なんて聞いた事ねえですぜ」

本当にどういう神技なんですかい？ と問うヴォーマルに、邪神技だよ等と答える悠介。機密事項である事を冗談めかして答えたと判断したヴォーマルは、ニヤリと笑みを返すと、それ以上悠介の神技に関する質問を止めた。

「隊長は初任務でしたよね、荒事の経験は？」

「無いよ、この前の広場でやりやったのと今回ののが初めて」

それを聞いて頷いたヴォーマルは、女性衛士二人と悠介をここに残して自分達三人で突入するので、合図したら踏み込んでサポートして欲しいと作戦を告げる。決定権を持つ素人な悠介はこういった事態の専門家であるヴォーマル達に全て任せて許可を出した。

こちらの灯りを消してそつと床扉を全開にすると、フヨンケが自身とヴォーマル、シャイードを風の膜で包んで移動補佐を掛ける。三人は音も無く地下への階段を滑り下りて行った。作戦遂行中、イフヨカはずつと地下の様子を探り続ける。

悠介はその間、自分のマントに特殊効果の付与を行っていた。隊服その他のカスタマイズは帰ってからだ。

「あ……あの、終わりました」

ピクリと顔を上げたイフヨカがそう言つて悠介に指示を仰ぐ。戦闘の音も響かず、断末魔も上がらず、地下に潜んでいた風の囀らしき風技の民は、静かな最期を遂げたようだ。一応、段取り通りヴォーマル達からの合図を待つて悠介達も地下へと降りる。

「……んん？」

階段を降りるに従い、妙な臭いが充満している事に悠介は眉を顰める。食堂に漂っていた血の臭気が混じるモノとはまた違う、やけに生々しい湿気を孕んだ臭いだった。

地下に下りると、少し広くなつた空間から左右に通路が延びていて、右の通路には向かい合わせの扉が四つ、突き当たりに樽が三つ程積まれている。左の通路は先が直ぐに広い部屋になっており、井戸らしき設置物が見えた。

「随分あっさり終わったな？」

「いやあ、正直ヤバかったです。この短剣がなきゃこつちがやら

れてた」

『右の奥だ』と指し示すヴォーマルに、エイシャが頷いてその倉庫部屋へと入って行く。悠介が疑問符を浮かべると、ヴォーマルは解放した捕虜の治癒を頼んだのだと答えた。やがて奥の倉庫部屋からしくしくと泣く女の声が聞こえて来る。

「怪我が酷いのか……？」

「まあ、怪我の方は大した傷じゃないんですがね」

悠介の問いに言葉を濁すヴォーマル。隅っこで俯いていたイフヨカはエイシャの手伝いに呼ばれて井戸から水を汲むと、倉庫部屋に入って行った。フォンケは明後日の方を向いて頭をぽりぽり掻いている。

ここに充満している臭い同様、妙な空気が漂う中、一人沈黙していたシャイードが口を開いた。

「隊長はまだ若いし見た目も軟弱だが、広場での戦闘やあの狂言者への糾弾を見る限り、思うほど子供ではないのかもしれない」

「え、どういうこと？ 俺一応、成人してるけど……」

「ありや、そうだったんですかい？ まあ、あんま配慮するのも変だったかもしれないね」

「いや、隊長があんまり堅気っぽいんでトラウマになっちゃ悪いかなって思ったんすけどねー」

気負いが抜けた三人は態度を崩すと、悠介を手前の倉庫部屋に案内した。食糧は備蓄されていた物がそのまま残っていたので倉庫部屋の一箇所に纏め、空いた部屋に其々処理した風の団らしき風技の民と、捕虜になっていた者の遺体を保管したのだという。

「ここに監禁されていた捕虜は三人、うち二人は今エイシャが治療にあたってます」

「じゃあ、もう一人は……」

床に敷かれた布の膨らみに視線を向ける悠介。この下には捕虜だった人の遺体が寝かされているのである。事は容易に想像出来る。フォンケが布の端に手を掛け、捲りますよ？ と確認の目線を向けた。

「まあ……態々見せるモンでもねえんでしょうけど」

主に宮殿回りで活動をする汚れ仕事の無いエリート衛士にも、神衛士が出る現場の事などを少しでも知って置いて貰えればと、ヴォーマル達はここで捕虜として死んだ神衛士、恐らくは皆の警備に当たっていた女性衛士の遺体を宮殿衛士隊長殿に見せた。

「う……」

最初、赤い斑模様の迷彩服を着ているのかと思ったそれは、全身を覆う裂けた皮膚や腫れ上がって赤黒く変色している痣だった。普通の体勢で横たわっているが、腕や脚に不自然な歪み方をした箇所がある。手や足の残っている指には爪がなかった。

女性のシンボルとも言える部分は両方とも削ぎ落とされており、顔は鼻が潰され顎の形もおかしい。くしゃくしゃに乱れた水色の髪が固められたように束なり、黄色く変色した粉状のモノがこびり付いている。

「……酷いな」

遺体に再び布が掛けられるまで、悠介は目を逸らさなかった。その事に、ヴォーマルは少し感心したような表情を浮かべた。ここまですぐに酷い状態にされる事は平時には滅多に無いが、小競り合いが起きている時は珍しくないのだそうだ。

「……………」

悠介はふと思い立ち、布からはみ出ている遺体に触れてみた。

キンコーン

「っ！ マジかよ……………」

「隊長……………」

訝しむ部下の呼びかけに答えず、悠介は逸る気持ちを抑えながらカスタマイズメニューを開く。メニューの欄内に酷い状態の人体が表示され、各部の状態を操作していくと裂けた皮膚や腫れている部分、折れた骨なども繋ぐ事が出来た。

殆どスライダを動かして各部の損傷率をゼロに戻していく作業だったのだが、それでも人体の全身を弄るとなれば、随分と時間が掛かってしまった。画面内には少し筋肉質な肉付きで水色の髪を持つ若い女性の裸体が映し出されている。

突然神技を行使する気配を纏いながら宙に指を彷徨わせる独特の儀式を始めた悠介に、ヴォーマル達は何をする気なのかと困惑気味に見詰めていた。エイシャの治療を受けていた二人が落ち着いた事を報告に来たイフヨカも、入り口の所で様子を窺っている。

「よし、実行」

光のエフェクトが遺体に被せてある布の隙間から零れ出す。やがて舞っていた光の粒が納まると、布からはみ出していた赤黒い指の足りない手が、女性特有のすべすべ感のある白くて美しい手に変化した。無惨に切り取られていた指も五指全て揃っている。

「なっ！ なんすかそりゃあ」

思わず目を瞠って絶句するヴォーマルとシャイード、二人が制止する間もなくフォンケは布を捲った。そこには、傷一つ無い白い肌に均整の取れた肉付きを持つ美しい肢体が横たわっていた。入り口から様子を窺っていたイフォカが口元を抑えて赤面する。

今にも起き出して来そうな彼女を暫らくじっと見詰めていた悠介は、ゆっくり溜め息を吐いてしゃがみ込む。

「はあー……やっぱり生き返らせたりするのは無理か……」

遺体をアイテムとしてカスタマイズ出来たダケだったのだ。

「お、驚きやした……このうえ生き返ったりしたら、あっしは隊長のこと人だとは思いやせんよ」

「同感だ……」

「はあ……こんな美人さんだったんだなあ。風の団の奴等、勿体ねえ事しやがって」

胆を冷やした顔のヴォーマルとシャイードは、悠介と同じ様に息を吐いてしゃがみ込んだ。そんな二人とは対照的に、今日撃した不可解な現象よりも、それによって明らかになった被害者の美しさを重要視するフォンケは、名残惜しそうに布を被せるのだった。

その後、落ち着いた悠介達男性陣は、イフヨカの報告を受けて二人の生存者に話を聞く為、奥の倉庫部屋へと向かう。

「あ、あの……隊長」

「うん？」

「わ、わたしは……綺麗にして貰えて、あのヒトも……ホッとすると思います」

「……そっか」

『そうだといいいね』と、少しは慰めになる事を願って冥福を祈る悠介。

そんな『ユースケ隊長』を、イフヨカは翠色の瞳でじっと見上げていた。

15話・堕ちたるは空か心か(前書き)

今回は前回よりもちょっとグロい表現があります。

15話：墮ちたるは空か心か

倉庫部屋には資材などに被せる布に包くまれた黄髪くの女性と青髪の少女が、寄り添いながら座っていた。かなり憔悴した様子で、泣き腫らした目元や頬に残る痣が痛々しい。悠介の表情からその内心を読み取ったエイシャは、自らの力不足を嘆くように言った。

「私の力では、これが限界です」

擦り傷や小さな切り傷を塞ぐ事で精一杯だったと俯くエイシャに、悠介は手の施しようが無い程の怪我が無くて良かったじゃないかと思いつつ、それよりも気になった事を問う。

「というか、何故この格好？」

「代えの服が無かったもので……」

悠介の疑問にそう答えたエイシャは、衣服としての機能を失った状態で倉庫の隅に投棄されている布の塊りを指す。元は使用人の服と給仕の服だったそれは、ボロボロに切り裂かれて血や大量の体液が付着する汚れた布切れと化している。

不安そうな瞳を向けてこちらを窺っている二人の生存者のあんまりな格好を不憫に思った悠介は、とりあえず資材防護用の布に包まれた状態では落ち着かないだろうと、投棄された衣服に触れてカスタマイズを行う。洗浄。修復。出来上がり。

「えっ た、隊長……今、何したんですか？」
「俺たちやもう驚かねーっすよ」

新品同然の綺麗な使用人服と給仕服を『ほい』と差し出されたエイシャは、驚きに目を瞪る。失われた布分だけ少し裾や丈が短くなっているが、資材用の布に包まっているよりはマシであろう。フヨンケ達はもう何でもありだなと肩を竦めた。

着替えの間、男性陣は部屋の外で待機。ついでに、倉庫の冷たい床に座らせるのも可哀相だと、適当な椅子も作っておく。

「隊長、ほんつとに何でも有りすねー」

「便利というか、何というか」

「全ての神技を宿すという噂……あながち嘘ではなかったという事か」

着替えが終わり、改めて生存者の二人から砦で何があったのか事情を聞く。それは人員の交代と資材搬入があった日から三日後の事だった。その日の作業も終わり、作業員達が夕食を摂りに食堂へ集まる頃、砦の外に助けを呼ぶ声が響いた。

『見張りの衛士が転落したぞー！ 誰か治癒を使える者は手を貸してくれー！』

砦の屋上通路から転落者が出たらしいと、外で騒ぎが起きたそのタイミングで、突然食堂内に無数の風刃が吹き荒れた。

夕食を摂る者で賑わっていた食堂は、瞬く間に阿鼻叫喚の地獄と化し、壁や天井は飛び散った鮮血で染められ、料理のぶちまけられた床は斬り刻まれた死体から流れ出る血と臓器で溢れかえった。

二階から外の様子を窺っていた非番の衛士達が突如発生した皆内部の騒ぎに警戒態勢を取る中、今度は皆内部の騒ぎに気を取られていた外の衛士達に風刃が襲い掛かった。転落した衛士の傍に集まっていた者はその攻撃で一網打尽にされる。

作業員に紛れ込んでいたブルガーデンの精鋭は混乱する皆内で用人や給仕を人質として盾に使いながら、或いは味方の振りをして近付き、不意打ちで次々と衛士達を討ち取って行った。

混乱が一段落した時、皆の内外で動いている者は、作業員に扮した『風の団』の団員達だけだった。

生き残った者の内、戦闘力を持たない衛士や作業員達は仲間の遺体運び等をやらされ、外の遺体は穴を掘って埋め、皆内の遺体は食糧庫とは反対側の地下にある汚水処理施設に運び込み、作業が終わるや遺体の重なる施設内に集められて、そこで殺された。

先程の女性衛士は、まだ皆内に生き残りが居ないかと、隠し部屋や隠し通路など避難部屋の在り処を聞き出す為に拷問されていたらしい。三日ほど掛けて生き残りの探索が行われる中、皆に『闇神隊』が来るといふ連絡が入った。

『風の団』が掴んでいた情報では、闇神隊衛士は一人だという事。特殊な神技を使うこと。それらの内容から皆の建設を早める為に来たのだろうと推測した彼等は、新設された精鋭宮殿衛士を待ち伏せて殲滅し、手柄にするつもりだったようだ。

保護された二人は、襲撃された日から悠介達が来た今日までずっと、女性衛士の悲鳴が響く地下で彼等の相手をさせられていた。彼女達が正気を保てたのは、今に宮殿衛士隊が助けに来てくれると自身に言い聞かせ続けていたからだと言う。

大体の話を聞き終えて、悠介達は重い溜め息を吐いた。結局、砦の生存者はこの二人だけのようだ。約八十人近い衛士や作業員、使用人達が殺害された事になる。重苦しい沈黙を破るように、ヴォーマルが今後の方針を提案する。

「まず、相手の戦力を確認しやしょう」

敵勢力の規模を推測すると、フォンクランク領内において同時期に複数の箇所ではブルガーデンの工作と思われる事件が発生していたので、それらが風の団の仕業であると考えれば、大体三隊くらいに分かれて動いていたと思われる。

通常、一隊は四人から八人程の編成で運用されるが、今回のような砦の襲撃ともなれば複数の隊が合流して動いたと考えられる。

現時点で外には四人居た事が確認出来ていた。そしてここに三人、彼女達の証言によれば十人前後は居たらしいという事から、三人編成でもう一隊位は砦内部に潜んでいる可能性がある。そんな事を話し合っていたその時

カッーーン　カッーーン　カッン　カッン　カッン　カッカッカツ

……

「っー！」

「今のは……？」

「シッ」

この地下倉庫へと降りる際、悠介は入り口の床扉を鍵の仕掛け共々元の状態に戻しておいた。今響いた音は、その鍵の仕掛けから金

属製っぽい玉が階段を転がり落ちた音である。誰かが床扉の鍵を開けた、という事だ。

「ふ、二人……近付いてきます……か、階段の上にも一人……。
！っ、こ、こちらにも気付かれています」

直ぐに索敵を行ったイフヨカが、強い風技の波動を感じると声を潜めながら報告する。使用人と給仕の二人がエイシャの腕にしがみ付いて怯え始めた。足音は聞こえないが、確かに近付いて来るような風の気配があった。

「隊長、どうしやす？」

指示を仰がれた悠介は、どう対処すべきか考えていて、ふと森でレイフォルドが言ったセリフを思い出した。彼も中々に腕の立つ風技の使い手であろう事は神出鬼没さから想像出来るが、その彼を持つてしても悠介が作る落とし穴には気付かなかったという。

「なあ、神技の攻撃って特定の動作が無くても発動出来るのか？」

「手を翳したり突き出したりって動作ですかい？ まあ、大抵の神技は慣れれば集中するだけで使えますからねえ」

精鋭であれば全く問題ないだろうと答えるヴォーマルに、若干安定性は落ちるものの、直立不動の体勢からでも水球を放つ事が出来るとシャイードが補足した。故に、攻撃系の神技使いを無力化して捕まえる等という行為は殆ど不可能に近いとされる。

「捕まえて拘束は無理か……」

「相手は潜入工作の精鋭ですからね、甘い事は考えない方がいいですぜ？」

「恐らく、実行部隊の他にも、砦を見張っている部隊がいるだろう」
「逃げ出すのも簡単にはいかねーって事すねー……、尤も逃げ出し
ようがねえんですが」

神技力にマイナス補正が掛かる枷なども思いついた悠介だったが、
苦勞して捕らえても精鋭工作員相手に情報など得られるとは思えず、
自決されるのがオチ。戦うなら倒すしか無いと部下達に諭され、迷
いはあるモノの生き残る為には仕方なしと殲滅を決意した。

とりあえず、倉庫部屋の扉を閉じてカスタマイズで補強すると、
地下通路に仕掛けを作り始める。

この部屋の入り口前と階段の下にも落とし穴を作り、同時に穴の
真上に当たる天井を細工して吊り天井のような仕掛けを作った。

天井を支える柱をカスタマイズで消し去る事で落下する仕組みだ。
元々地下な為か、床石のカスタマイズだけでは余り深い穴が作れな
かったので、天井を落としてトドメを刺す仕掛けにした。

通路を慎重に進んでいた二人は、扉が閉じられた事で相手が籠城
を選んだと判断し、気配を消すことを止めた。相手を精神的に追い
詰める方法に切り替えて、声を出しながら扉に近付く。

二階に潜んで居た彼等は強固な壁に封鎖された砦から外に出られ
なくなつて困っていたのだが、壁越しに指示を受けて悠介達を搜索
していたのだ。

「おーい、隠れても無駄だぞお」

「砦の中にはまだ何人も俺たちの仲間が残ってるんだ、諦めて封鎖
を解いた方がいいぞ」

物音などを聞き漏らさないよう、部屋の中の様子を探りながら二

人は目配せし合い、扉を挟んで壁際に寄ろうとした所で床が抜けた。二人が落とし穴に落ちた事を確認した悠介は、支柱を消して天井を落とした。肉の潰れる嫌な音と断末魔が響く。

「っ！ どうしたのっ！ 何があったの！ 二人とも返事をして！」

階段に陣取っていたもう一人が、仲間の悲鳴に声を上げる。『女かっ？』と一瞬迷う悠介だったが、迷っちゃ駄目だという部下の強い視線を受けて覚悟を決めた。カスタマイズで階段の段差を消す。いきなり足元の支えを失った彼女は通路まで滑り落ちると、そのまま落とし穴に落下した。そこへ天井の石塊が落ちてきて、悲鳴を上げる間もなく押し潰されたのだった。

「……大丈夫です、もう……誰も居ないみたいです」

索敵の報告を受け、悠介は落とし穴を埋めて天井を戻した。潰された三人は皆の下の地面にそのまま埋まっている。実感があるのか無いのか曖昧ではつきりしないが、確かに自分の手で三人の命を奪ったんだなど、鳩尾の辺りが重くなる事を自覚する悠介。

その後、地下の入り口をエイシャとシャイードに見張らせ、ヴォーマルを先頭にイフヨカとフォンケを連れて二階の索敵を行ったが、もう誰も居ないようだった。

封鎖した屋上通路への出入り口には、内側から外に出ようと何度か風刃をぶつけたらしい痕跡があった。

『そっぴゃこんな跡も表示されるんだから、上手く使えば敵の現在地とかある程度探れるかもしれないな』

悠介は新しいカスタマイズ能力の使い方を模索しつつ、生存者の

二人から聞いた汚水処理施設のある地下を調べてみる事にした。

皆の正面玄関に当たる最初に駆け込んだ広い空間まで下りて来ると、左側の通路を進んでいく。こちら側には使用人の部屋と洗い場などが並んでいる。そうして階段のある部屋の扉を開けると、全員が思わず服の裾で鼻を覆った。

「なんだ、これ」

「死臭ってヤツですよ……イフヨカは下りない方がいい」

遺体の確認をするだけなので、イフヨカを扉の見張りに残して悠介とヴォーマル、フォンケで地下への階段を下りて行く。ちなみに三人とも悠介が即席で作ったマスクを着用している。流石にこの死臭の中を素で呼吸はしたくない。

地下に下りる階段も乾いた血で黒ずんでいる。灯りは火を出して腐乱ガスにでも引火すると怖いので、ヴォーマルの手をボンヤリ発光させているだけだ。よって視界もあまり良くないのだが、今回に至ってはそれで幸いだったとも言えた。

「うわ、ひでえ……こりゃ長く居ていい所じゃねえですぜ」

大量の変色した肉塊。高威力の風刃で切断された遺体は何れも原形を止めておらず、衣服が見えていなければ、それが人であったとは想像も付かないような有り様だった。

手前に折り重なって倒れている比較的人の形を残した遺体は、恐らく遺体運びの最後にここで殺された人達だろう。

被害者の確認を終えた悠介達は足早にこの場を立ち去る。冥福を祈る余裕も無く階段を駆け上がり、通路に出ると同時に扉を閉めた。フォンケが移動補佐の風の膜に巻き込んだ死臭を吹き払っている。

「立派ですぜ、隊長」

「？ なにか？」

「吐かねーことがつすよ」

胃の辺りを擦りながら顔を顰めたフォンケが答えた。『ああ』と悠介は納得する。立派かどうかは分からないが、確かにアレは吐いてもおかしくない光景だった。

きつと麻痺しているのだろうなあと、悠介も何か込み上げて来そうな胸の辺りを抑えながら思うのだった。そして、表面意識では感じ取れない程の心の奥で、自分が免罪符を得たという事を、無意識下に感じていた。

「外の四人をなんとかしよう」

風の団てきの殲滅てきを告げる悠介。ヴォーマルとフォンケは顔を見合わせ、イフヨカも目をぱちくりさせて悠介を見た。

厨房の地下に戻った悠介は井戸のある部屋に食糧を移動させると、部屋の周囲をしっかりと防壁で固めた。強化した防壁を何重にも重ねる事で核シエルトーのような丈夫な防空壕を造り出す。万が一地下まで被害が及んでも大丈夫なように。

そうして皆をこの一番安全な部屋に集めた悠介は、カスタマイズメニューを開いて操作を始める。

「イフヨカ」

「は、はいっ」

「ここから外の馬に遠くへ逃げるよう呼びかけてくれ」

「は、はい？」

地下から地上へ、一本の細い煙突のような管を繋いだ悠介は、まだ砦の周辺に居るかもしれないここまで乗って来た馬車の馬を、これから行う事に巻き込まないように、イフヨカの伝達で逃がすように仕向けた。上手くすれば、帰りの足にもなってくれる筈だ。

「……伝えました、でも……ちゃんと届いてるかどうかまでは……」
「いいよ、巻き込んだじゃったら悪いけどね……」

砦の外で潜伏組からの連絡を待つ風の団団長と部下数名は、先程発せられた砦の中からのモノと思われる風技の伝達について話し合っていた。何かの暗号なのか『行け』というような意味合いの伝達。敷地内をうろついていた衛士隊の馬が、その声に反応して繋がれた馬車ごと何処かへ走り去って行った。

「もしかして、空の馬車を街へ帰して応援を呼んだ……とかですかね？」

「空で帰す事をそういった意味合いの暗号にしているという事か？
うーむ……」

「どちらにせよ、この時刻までフォンクランクの衛士が生きているという事は、潜伏組はしくじった可能性が高い」

戦果の帳消し覚悟で撤退して帰還するか、どうにかして誘き出す作戦を考えるかと、今後の方針に頭を悩ませる団長は、不意に神技の波動を感じて砦を見上げた。

「だ、団長！ あれを」

「なんだ……一体」

砦全体が光のエフェクトに包まれる。これは闇神隊一行が砦内に逃げ込んだ直後にも見られた現象だ。この光の後から急に砦の壁が強固になった。光は砦の真ん中辺りから空に向かって伸びて行き、その先で雲のように広がり始めた。

光の雲が空一杯に広がった時、光の粒が一面に舞って辺りに暗闇が戻る。そして何かが砕けるような音が響いた後、ヒュウヒュウという風を切るような音が周囲に響き、上空の暗闇がひび割れのように裂けて行く。

空一杯に広がっていた光の雲は、黒い塊りになって降ってきた。その正体に気付いた風の団員達は、啞然とした表情で呟いた。

「嘘だろ……」

それが彼等の最期の言葉となった。

ギアホーク砦の建設現場敷地内全域に、砦の上半分を構成していた角石、凡そ五万二千個が、上空約百メートル付近から一斉に落下して来たのだ。大地を揺るがす衝突音。長さ八十センチ、縦横四十センチ角の角石が雨のように降り注ぐ。

暫しの後、静けさに包まれる半壊した砦周辺に、呼び戻された衛士隊の馬が引く馬車の音だけが響いていた。

16話：太陽と星空の下で

ギアホーク砦から非常事態の連絡を受け、緊急出動した複数の衛士隊からなる衛士団が到着したのは、夜も明けようかという頃だった。朝靄の中、彼等が見たものは廃墟の如く崩れた落ちた姿を曝すギアホーク砦を中心に、墓標のような角石の残骸が敷地全域を埋め尽くすように突き立った光景。そしてその周辺を、衛士隊の馬車を引く馬が所在無さ気にうろろしている姿だった。

味方の到着を確認して砦から無事生還出来た悠介達は、一連の出来事を説明しながら生存者の二人を水技専門の部隊に任せると、暫らく現場に残って残骸の後始末や砦地下の遺体が置かれている場所への案内等をこなした。

敷地全域を埋め尽くす角石の残骸は悠介のカスタマイズ能力にグループライテムとして認識されていたので、纏めて敷地の片隅に積み重ねられた。まるで耕かされたかのように無数のクレーターで掘り返された敷地内からは、風の団と思われる物体が見つかった。

砦の中で潰された三人も掘り出し、彼等も含めてカスタマイズで遺体の修復をする。流石に色々足りなくなっている部分があったので良い状態とは言えないが、十分に判別出来る状態まで修復出来た。彼等は後日、ブルガーデンに返還される事になる。

風の団の遺体は悠介達が確認していた十人と、砦の裏側付近からも五人分発見されたので、合わせて十五人。

フォンクランクの宮殿衛士隊と同じく、ブルガーデンの精鋭団も常時二十人編成での活動体制を取っていたと思われる為、事実上、風の団の実行部隊は壊滅したと言える。

地下に積み重ねられていた遺体は流石に手がつけられないという事で、この場で茶毘に付される事になり、ギアホーク砦は一部を建て直したうえで犠牲者を追悼する慰霊碑として残される事になった。

少し移動した場所に改めて砦が建てられる事になるようだ。犠牲者の葬儀は国葬として現地で行われ、遺族や親類の為に会葬用の送迎馬車が宮殿から出される事になっている。

事件から四日後

『ギアホーク砦を襲撃したブルガーデンの武装集団、フォンクランク閻神隊の鉄槌により壊滅せり』

サンクアデイエツトの街を賑わせている話題はそんなフレーズで配られた号外のような宮殿発表の公布だった。展望塔の建築主でもある宮殿衛士が、たった一人でブルガーデンの精鋭工作部隊を壊滅させた！ という触れ込みの噂で連日持ちきりである。

エスヴォブス王は今回の事件で悠介を英雄の如く称えてその功績と武勲を人々に広く知らしめる事により、砦の虐殺に関する印象を薄める事に成功していた。被害の情報を抑え、戦功で民の憤慨を逸らして開戦の気運が高まらないよう画策したのだ。

ブルガーデン側は『風の団は独断専行が過ぎるので更迭が決まった状態であり、砦襲撃は我が国の政府の指示によるモノではない』と公式発表し、砦襲撃に関してブルガーデン政府の関与を否定した。これは、精鋭の立場にある団の暴走を認めた事を意味する。

「まったく忌々しい」

要塞都市パウラの地下にある中枢機関施設の一室で、ブルガーデンの指導者『イザップナー最高指導官』は一人悪態を付いた。

この件に関する各国への根回しと、自国民、神民兵組織、精鋭団への各種通達内容を纏めて書類を仕上げていく。今回ブルガーデン政府は、他国から『自国の兵も満足に管理出来ていない』という誹りを受けてでも体裁を取り繕う必要があった。

壊滅した風の団はこの所議^{ユリ}会でも活動の効果を疑問視される声が上がっていたが、炎技の民が少ないブルガーデンでは、彼等風技の精鋭こそ実質最強の手札だったのだ。

彼等の存在あってこそその挑発行為だった為、対フォンクランク戦のノウハウを持つ彼等を失った事は実に手痛い損失だった。実動している風の団はまだ健在だが、ギアホーク砦の一件で実際に使える全戦力の五分の一程を失った事になる。

ここ十数年の間に台頭して来た発展著しい新興国であるブルガーデンは、反等民制を国策に掲げている事もあって近隣国からは快く思われていない。

不十分な戦力状況でフォンクランクと戦を始めれば、国境を接するノスセンテスやガゼツタからも背後を突かれ兼ねない為、そちら

に展開している風の団を引き上げさせる訳にもいかない。故に今、フォンクランクと戦火を交えるのは危険過ぎるのだ。

イザツプナー最高指導官は、エスヴォブス王の取った方策に乗るしかなかったのである。

ブルガーデンの指導者が執務室で腐っている頃、パウラの神技指導訓練施設ではゼシャルドが水技の訓練生に指導を行いながら、先日飛び込んで来た一報、今や各国にその噂が広まっている『ギアホークの英雄』について考えを巡らせていた。

悠介がこの世界に喚ばれて凡そ二月ふたつき、ゼシャルドがブルガーデンに渡ってから僅か十六日余りの間に宮殿衛士に召し抱えられ、初任務で風の団を壊滅させる大功績を上げて英雄と称えられている。

『ユースケを英雄に祭り上げたエスヴォブスの思惑は想像出来るが……』

あまりにも急激に、権力の中枢へ向けて足場を固めていく『邪神』の姿を幻視し、ゼシャルドは一瞬寒気を覚えた。悠介に見識を広めるよう勧めたのは、この世界の事を良く知って貰いたかったからだ。

彼の持つ異世界の概念からは、遙かに進んだ文明を感じられた。だからこそ、この世界に住む人々を知り、この世界にもささやかな営みが在る事を知って欲しかった。

そうする事で、彼が文献に記されるような何らかの災厄をもたらせる『邪神』として目覚める事があっても、この世を滅ぼそうとするような衝動は抑制出来るのでは、とも考えていた。全ては憶測に

よる想像でしかない。

『だがもし、見識を深めた事が返って負の結果に繋がるような事があれば』

この世界の事、よく分かりました。滅んだ方がいいですね

黒い瞳を鈍く光らせてそう言い放つ悠介の姿。

などという怖い想像を振り払い、ゼシャルドは溜め息を吐いた。どうも環境が違った為か思考がネガティブになっているようだ。自嘲する。悠介が今後、この世界にどう関わっていくのか、注視して行かねばなるまいと思いを巡らせた。

「あの、指導官……私、駄目でしたか？」

「ん？ あーいやいや、ちと考え事しておっただけじゃよ」

溜め息を吐かれた事に不安げな表情を向けている若い水技の生徒に、ゼシャルドは『いや、すまんかった』と彼女の水技に問題はない事を告げる。それを聞いて安心したように微笑む水技の生徒。彼女は『水の団』へ入団志望の候補生であった。

「それにしても、お主程の力であればもう神民兵の水技隊になら所属できように」

「ありがとうございます。でも、私はどうしても水の団に所属したいんです……お姉ちゃんの力になりたいから」

精鋭団と神民兵組織は同じブルガーデンの軍属ながら、微妙に所属する立場が違っていて、双方に少々の対立も見受けられる。彼女の姉は精鋭団に所属し、現在も作戦行動中であり家にも帰って来られないらしい。

「今度の任務が済んだら、暫らく休暇が取れるって言ってましたけどね」

「まあ、精鋭団も『土の団』以外は皆忙しそうじゃしなあ」

休暇中でも暫らくは基地内待機が続くので、同じ精鋭団に所属すれば団が違っても基地内で会う事が出来るという訳だ。

「さて、ならばお主ら姉妹の為にワシも一頑張りするかの。所で、お主の姉上はどの団に居るのだね？」

「風の団です」

ゼシャールド指導官の言葉に、彼女は顔を綻はなせながら答えた。

サンクアディエツト

昼下がりのヴォルアンス宮殿上層階の一室で、ヴォレットは好みの味付けにカスタマイズされた高級ララの実に舌鼓を打ちながら、向かい側に座る悠介に実酒を勧めていた。

「いや、俺はいいよ」

「なんじゃ、酒くらい飲めねば英雄の名が泣くぞ？」

悠介が英雄のように扱われた事をヴォレットは喜んでいたが、当の本人は胸中複雑な心境だった。皆で過酷な現場を見てきた悠介は、そういう現実にあまり触れた事のないヴォレットとの間に温度差を

感じていた。

「英雄て……何人も死んでる中で命からがら生き残っただけだよ」

「おうおう、そこで謙遜するとは中々の大物ぶりを見せ始めたのう」

何時にも増してはしゃぐヴォレットとは対照的に、悠介の気持ちはどんどん褪めていく。ヴォレットの楽しいげな様子を何とも形容し難いもどかしい気分で眺めていた悠介だったが、それが姫君という立場にいる人間の在り方なのだろうと思いついた。

『ま、知る必要なんてないのかもな』

側近のクレイヴォルが何時も言い聞かせている通り、『高貴な姫君』という存在で居なければならぬヴォレットは、下界の、所謂下々の民や末端衛士の事など知る必要は無いのだろう。

底辺で働く者達の事をよく知り、世の中の仕組みを理解した支配者は理想的だが、彼女が将来の国を統べる王になる訳ではないのだから、次の世代の王となるべく者を迎える『王族の血筋を持つ健康な姫君』で在れば良いのだ。

そのヴォレットの計らいで今、自分はここに居る。人それぞれに決まった役割があるのなら、ヴォレットは『高貴な姫君』の役割を果たすだろう。自分は自分の役割を果たせばいい。

そんな結論に至った悠介は、自分のここでの役割を果たすべく肩の力を抜くと、ララの実を一つ手に取った。

「次はどんな味にしようか、また辛いのは行つて見るか？」

「ユースケ……？」

悠介の雰囲気が変わった事を敏感に感じ取ったヴォレットは、訝

しげな視線を向けた。じつと、紅い瞳が覗き込むように黒い瞳を見詰める。『どうかしたか?』と微笑みながら小首を傾げて見せる悠介。

「いやじゃ! やめろ!」

ヴォレットはいきなり叫んで立ち上がると、悠介が差し出していたララの実を払い飛ばした。

「な、なんだよ……?」

「その目はやめろ! わらわをそんな目で見るなっ! お前までそんな……」

激昂して燃えるような鋭い視線を向けていたヴォレットの瞳に、じわりと涙が浮かぶ。それを見せまいとするかのように紅いドレスをひるがえ返し、ツィーテルを揺らして走り去る後ろ姿を、悠介は呆然と見送る事しか出来なかった。

コトリと椅子を引く背後の物音に悠介が振り返ると、部屋の隅に控えていたクレイヴォルが眉間の皺を増やしつつ、胸の辺りで握り締めた自分の拳をじつと見詰めていた。が、やがて息を吐きながら静かに下ろす。

「とりあえず、貴殿を一発殴っておきたい所だが、私にその資格があると思えんので自重しておく」
「……」

「貴殿が皆で何を見て来たのか、大体想像は付く。だが……知らない者への嘲りは傲慢である事を知って欲しい」
「俺は、別にそんなつもりは……」

無かったと言いきれるだろうか、悠介は自身に問う。色々と認識を改めざるを得ない体験をして、それが現在進行形である事と、相変わらずな普段通りのノリを見せるヴォレットに苛立ちを覚えていた事は確かだ。

「素直だな、貴殿は……」

クレイヴォルの『ここだけの話』によれば、ヴォレットが人の話を聞いたがったり色々知りたがる傾向にあるのも、やたら奔放にハツちやけているのも、ふだん周囲から向けられる『何も知らないお姫様』という視線と態度への反撥と抵抗なのだという。

「私の立場としては、姫様は現場の事など知る必要はない。しかし」

専属警護兼教育係として長く見守って来た者の個人的な心情で言えば、温室育ちの姫君にして時折宮殿内の政まつごとに関する駆引きに鋭い見識を発揮するなどの利発さを垣間見せる彼女には、もっと広い世界を見せてやりたい。彼はそう吐露した。

悠介は自身の気持ちを戒める。見識を広めよというゼンヤールドの声が心に響く。自分の役割を果たそうという先程の考えは、ただの思考放棄ではなかったか、人には確かにそれぞれ役割があるのかもしれない。

しかしそれは、個々がそれぞれ己の考えで導き出して掴んだ答え、自ら選んだ道によって示されるのではないか。

『誰かに与えられたり、最初から決められてる訳じゃない』

自分が『運命は自ら切り開くモノだ派』であった事を、悠介は今ほど強く意識した事は無かった。

ヴォレットを探して宮殿の馬車乗り場まで下りて来た悠介は、そこで見知った顔と出くわした。

「あれ、隊長どうしたんすか？　こんな所で」

「フォンケか、ヴォレットを見なかったか？」

「姫様なら、さっき御忍びに出たみたいですよ？」

「街か……」

街に出るなら乗って行きますかと馬車を指すフォンケに、悠介は頼む事にする。行き先は大体予想が付いていた。

『ギアホークの英雄』の部下として皆に同行した彼等も民衆の間では結構話題になっているようで、酒場に行くとモテるとい理由から、フォンケはしょっちゅう街に出ているらしい。

ヴォーマルやシャイード、エイシャ達は落ち着いて巡回も出来ないからと、あまり低民区には下りない事になっているようだ。

「姫様の迎えにでも行くんすか？」

「ああ、まあね」

一人で乗り場に現われたヴォレットは、何時ぞやのようにその場に居た衛士達を片っ端から護衛にして御忍びに出たらしく、下の区画でまた何か問題でも起こしてるかもしれない等と雑談しながら馬車を走らせる。

そうして区画門を二つ程越えた所で目的地に到着した。低民区、区画門前の展望塔広場。夕暮れが迫る時刻、表通りに並ぶ露店ではそろそろ店を畳もうかと商品の片付けが始められている。

展望塔の周辺にも特別に露店が許可されているので、運良く場所を確保出来た店主は日が沈むギリギリまで粘るようだ。

「それじゃ隊長、俺たちは酒場の巡回に行きますんでー」
「ほどほどにしとけよー」

馬車を詰め所に預け、非番のフォンケは酒場の『巡回』に出掛けた。エイシャが居れば、宮殿衛士で且つ隊長である悠介に対して余りにフランクなフォンケの態度を叱っていた所だろう。その場合は悠介も『隊長としての自覚を』と叱られる事になるが。

「さて」

フォンケを送り出した悠介は展望塔を見上げた。紅いドレスは目立つ。ヒラヒラと風に揺れているスカートを確認し、悠介は展望塔に向かって歩き出した。

「おい、あれ……ギアホークの英雄じゃないか？」

「宮殿衛士隊の隊服着てるし、本物？」

「まさかっ　なんでこんな所にいるんだよ？」

「自分が建てた塔の具合を見に来たとか……？」

展望塔周辺には塔に上る順番待ちの人々が集まっていて、悠介の姿を見つけた彼等は口々に噂を始めた。少し前に御忍びの姫様が登って行ったので、お供の関係では無いかとも囁かれる。気付いた門番の衛士が悠介に挨拶を向けて来た。

「お疲れ様です、先程姫様が登って行かれたのですが……」
「ああ、迎えに来た」

ヴォレットが展望塔に上る際、人払いがされたので順番待ちの民衆が詰まっているらしく、迎えと聞いた門番の衛士は安堵に表情を崩す。やはり地味なれどしっかり問題を起こしていたようだ。

展望塔の入り口に立った悠介は、塔を見上げて少し考える。これを建てた時は最初から天辺に居たので一階から上るのは今回が初めてになるが、以前下りる際に随分バテた事を思い出した。

現在、悠介の装備は特殊効果を付与した闇神隊の隊服、ズボンと上着とマント。主に防御力として物理攻撃耐性、神技耐性、燃焼耐性、凍結耐性などの状態異常耐性を高めてある。体力や移動補佐が欲しいと考え、何か手頃なモノは無いかと辺りを見渡した。

「その指輪、四個貰える？」

「え？ は、はいっ 緑十六になります！」

「ほい、急いであるから釣りはいらさないよ」

「あ、ありがとうございますですっ」

青晶貨三本で買い取った安物の指輪四個に、其々体力回復補正効果と移動速度補正効果を付与。安物だけにあまり高い補正值には出来なかったが、階段の上り下りに使うだけなので問題ない。二つの指輪を装備して補正効果を得た悠介は、展望塔の入り口を潜ると一気に階段を駆け上がり始めた。ちなみに残りの二つは塔を下りる際ヴォレットに装備させる分だ。

通常なら五十段も駆け上げれば息が上がって膝も上がらなくなる

所だが、息は乱れるもまだまだ余裕がある。少しペースを落として休めば回復するので、そしたらまた駆け上がるというサイクル。

そうして途中、一度も休憩階で足を止める事無く最上階まで辿り着いた。夕焼け色に染まった雲が流れる空の半分、太陽と反対側の地平線付近には星が見え始めている。

「お前、ほんとに高い所好きだよな」
「……」

悠介は息を整えながら、展望台の端っこで頬杖を付いて遠くを眺めている少女に声を掛けた。紅いドレスの裾がはためき、スカーフが翻り、ツートールの髪が風に靡く。背後に立つてもこちらを向かないヴォレットに、もう一度声を掛けて肩に触れる。

「こっち向けよ」
「気安く触れるな、無礼者」

肩に掛けた手を身を振って払うヴォレットだったが、その辛辣な言葉とは裏腹に全く覇気が感じられ無い。悠介が構わず両肩を掴んで自分の方を向かせると、ヴォレットは俯いたまま顔を合わせようとしなかった。

「顔上げろよ」
「やじゃ」
「上げろって」

今度は頬を両手で挟んで顔を上げさせる。涙を浮かべた紅い瞳が『無礼者！』と抗議するように一度睨んで見せたが、直ぐにぶいっ

と目を逸らしてしまう。

「俺の目を見る」

「……………」

恐る恐るといった雰囲気では悠介の瞳を覗き込んだヴォレットは、そこに先程のような『距離』^{かへ}が見えない事に安堵した。

「さつきは悪かった」

「え……………」

悠介の謝罪にキョトンとなるヴォレット。悠介は宮殿で自分が考えていた事を話した上で、アレは自分の判断ミスだったと告げる。ヴォレットの事をきちんと考えず、安易な答えを踏んでしまったのだと。

「本当に良い姫、高貴な者になりたいなら、ヴォレットはもっと下界の事も知るべきだと思う」

「ほんとに、ユースケは本当にそう思うのか？」

悠介の肯定に目を輝かせるヴォレット。他の者達は皆『高貴なる者は、下賤なモノを知るべきではない』と言うが、自分に『世の中の色々な事を知るべきだ』と言ったのはゼシャルドと悠介くらいだと顔を綻ばせる。

「父様にも昔は、言われた事がある」

「そっか……………まあ、偉い人には色々事情があるんだよ」

そついう事情も知って行く事が、他者を理解する事に繋がり、自分を磨くことにもなる筈だと説く悠介。

「俺自身、人に偉そうな事言えるほど世の中の事も自分の事も分かってないけどな」

「そんなの、わらわも一緒じゃ」

それならば、共に世界を知り見識を深めて行こうじゃないかと頷きあう。ヴォレットは立場上あまり自由に宮殿の外を動き回る事が出来ないのも、代わりに悠介が色んな立場から色々なモノを見聞きして回り、それをヴォレットに話して聞かせる。

これを持ってヴォレット直属の闇神隊に与えられた特殊任務とし、悠介は宮殿衛士で唯一宮殿外での活動を主とする衛士となった。

「ところでユースケよ」

「ん？」

「今自分が何をしているか理解しておるか？」

「……へ？」

言われて我に返った悠介は、星の瞬き始めた空の下、展望台の端で涙を浮かべたヴォレットの頬を両手で挟んで顔を寄せているという体勢である事に気付いた。背後の出入り口からコソコソと様子を覗き込んでいる衛士達の気配を感じる。

「やっぱり逢引じゃないか？」

「宮殿だと邪魔が多いからってなあ」

「えーでも婚約者候補の発表は無かっただろ？」

「なんせ英雄だからなあ」

とりあえずヴォレットを解放して離れた悠介は、あらぬ噂をしている彼等の誤解を解くべく初特殊任務を遂行するのだった。

17話：衛士の日常と休日

夜明け頃

ヴォルアンス宮殿の上層階、宮殿衛士隊宿舎の自室で、悠介は小物を弄っていた。対象が装備品であれば特殊効果の付与が出来るというカスタマイズ能力の特性を活かし、寝巻き代わりの服に回復効果と沈静作用などを付与して快適な睡眠を得られるようになったお陰で、起床時間が早くなった、というより睡眠時間が短くなった。

なのでここ数日の悠介は、夜明け前の静かな時間を使って小物の製作とカスタマイズを行う事を日課にしている。

「ん〜、やっぱり晶貨を材料にすると良い物が出来るなあ」

給金の晶貨を指輪や腕輪などの形にカスタマイズして装備品にする事で特殊効果を付与し、状況に合わせて使い分けられるよう種類を揃える。付与出来る効果の補正率も、八日前に展望塔前の露店で買った安物の指輪に比べて倍以上の数値を設定出来た。

装備への特殊効果付与に関してはこの先隠し通せるモノでは無いので、部下やヴォレットにも『一つ作るのにも時間が掛かる』という事しておくよう、口裏を合わせた上で控え目に公表しておいた。

この付与能力のお陰で、悠介の宮殿内での生活は概ね静かで平和な日々を維持している。

悠介達が皆から帰還した翌日には事件の概要が宮殿中に知れ渡っており、『姫様のオモチャ』と比喻される使えない衛士であった筈の闇神隊がブルガーデンの精鋭団を壊滅させたという事実は、各隊の宮殿衛士達に衝撃と動揺を与えた。

取り分け、悠介の台頭を警戒した姫君の婚約者候補達は、偶々幸運が重なったか、同行した部下達が優秀だったのではないかと等と邪推を向けて訝しんでいたが、その心中は穏かではなかった。

尽く戦を避けるエスヴォブス王の政策下では、武勲という手っ取り早く手柄を立てる機会が与えられ無い。

ブルガーデン側の度重なる挑発に対する報復と、犠牲者の弔いを掲げて開戦を望む声も上がっていたが、報告にあるような詳細不明ながら広範囲の敵を殲滅出来るらしい神技を使う悠介に更なる武勲を立てる機会を与えるだけだと、同調する者は少なかった。

そんな中、悠介の武勲をどうにか褪せさせられないかと、事件の詳細を明らかにするという名目で悠介の部下達から証言を取っていた婚約者候補組は『ユースケ隊長から賜った』という短剣の超性能に惹き付けられた。

握っているだけで力が湧き出し、身体が軽くなり、神技力を増幅させるという見た目は普通の短剣。試しにその短剣を装備して神技を使ってみた炎神隊の衛士は、普段より一・五倍近い大きさの火球を生み出す事が出来たのだ。

彼等は是非その短剣を自分に譲って欲しいと持ち掛けたが、ヴォーマル達は『隊長から直々に賜ったモノなので』と丁重に断ると、

後々その事を妬んで睨まれないように『どうしても欲しいのなら隊長に掛け合いますよ』と言ってちゃっかり矛先を逸らした。

事情を聞いた悠介はヴォレットと相談し、クレイヴォルも巻き込んで一計を案じる。展望塔の上り下りに使った四つの指輪を再調整して各宮殿衛士隊長に贈ったのだ。

『炎技の指輪』、『水技の指輪』、『土技の指輪』、『風技の指輪』という各神技専門に調整された指輪。デザインもそれっぽいモノに変えてあり、其々の神技に特化させてある分、ヴォーマル達の短剣に付与されているモノより増幅率も高い。

クレイヴォルが指輪を装備して自身の炎技を使って見せた所、通常なら揺らめく炎が槍に巻き付いて燃え盛るのだが、指輪の効果によって炎はまるでソレ自体が槍であるかのような集束を見せ、炎を纏った槍ではなく炎の槍そのモノが出現した。

その洗練された炎槍えんそうに衛士隊の皆が目を奪われる中、悠介とクレイヴォルは予め申し合わせておいた台詞のやり取りを行う。

『是非、私の部下達にも装備を都合して欲しいのだが』

『いいですよ、ただ任務の合間に作業する事になるので、どうしても時間は掛かりますが……』

このやり取りにより『ユースケが作る装備が欲しくば、ユースケの邪魔をしてはならない』という暗黙の了解が、衛士達の間で成り立った。お陰で宮殿内でも街でも、悠介の機嫌を損ねるようなちよっかいを出して来る者は殆どいない。

この場合『殆ど』であって、やはり例外も居る。尤も、悠介が機嫌を損ねる程の疲れる手合いでは無いのだが。

「やあ、ユースケ。僕が貰える指輪は出来たかな？」

「まだ。つか副隊長とかが先だろ？ 普通」

衛士食堂に向かう途中、廊下でばったり出くわしたヒヴォデイルと並んで歩きながら、悠介は『最低でもあと五十日は待て』と製作に時間が掛かる事をアピールした。一つ作るのに十日程掛かる事にして今の状況を引き延ばしているのだ。

「なーにを言う、確かに隊内での僕は一精鋭衛士に過ぎないが、宮殿では隊長よりも高貴な一族なのだよ」

「しらんしらん」

ヴォレットから懇意にされ、英雄と謳われる実力を持ち、既に各四神隊長とも同格の扱いである闇神隊長。殆どの宮殿衛士達が悠介と交流を持つ事に躊躇う中、ある種最悪な出会い方をしたヒヴォデイルは積極的に関わりを持つとうとする一人である。

彼は彼なりに、自分の背負う名門の血筋という看板と、それ見合った実力が足りない事にコンプレックスを抱えており、純粋な神技力が足りないのであれば、他の何かで補うしかあるまいと駆引きや貴族然とした在り方等で身を立てて来た。

そんな彼にとって、悠介との交流は唯一、駆引きや名家の家督である事を意識せずに話し、振舞える時間であった。

「ま、僕に相応しい最高の装備を期待してるよ」

「あれ、飯食わないのか？」

食堂を通り過ぎていくヒヴォデイルに悠介が訪い掛けると『朝は実家で撰る事になっているのさ』などと言いながら背中越しに振り

返りつつ軽く上げた片手をひらりと一振り、キラーンと歯でも光らせそうな雰囲気です。笑みを向ける。

前から来たワゴンを運ぶ給仕さんに撥ねられ掛けた所が面白かったと、悠介は感想を述べて食堂に入って行った。

「き、君い！ 気をつけたまえよっ 膝がつ膝が」

「あわわっ も、申し訳ありません！ 大丈夫ですか」

「うむ、意外に面白いヤツだ」

昼過ぎ、悠介は何時ものように神民衛士隊の控え室に顔を出した。数日前ヴォレットに連れられた悠介が初めてここを訪れた時は、何処の酒場だといった雰囲気のうちらぶれた部屋だったが、今は宮殿衛士隊の控え室と遜色ない程に整えられた部屋になっていた。

無駄に豪華な装飾品などの類は無いが、上の階でも見られない特別なソファーやテーブル等が並んでいる。

「お、隊長のおでましだぜ」

「お疲れ様です、ユースケ隊長」

「うーっす。今日はフォンケとエイシャだけか、他は？」

「イフォカは非番ですよ、ヴォーマルのおやっさんは巡回に出てますぜ」

シャイドは訓練場で自主訓練を行っているらしい。待機室には彼等以外にも一般の神民衛士達が待機たむろしているのだが、宮殿衛士達と違って皆悠介との交流に躊躇は見られない。

「隊長さん、また実酒の味付けしてくださいよ」

「すみません、ランプ割っちゃったんですけど……これ直せませんかねえ？」

「たいちよーさん、この前作ってくれた下着、もう一回り胸のサイズ大きいの出来ませんか？」

待つてましたとばかりに色々な依頼を持つてくる一般衛士達。悠介は部下との交流を理由によくこちらの控え室に下りてきては、部屋の調度品をカスタマイズで修理したり、持ち込まれた安実酒を美酒に調整するなどして、彼等との親睦を深めていた。

悠介の任務は下々の者達を観察し、彼等の声を聞き、それらをヴオレットに話して聞かせる事である。街の巡回任務をこなす一般衛士達からは様々な噂話や裏話を聞くことが出来た。面白い話から眉を顰めるような話、かなり眉唾モノまで色々だ。

地下に埋められた街には幽閉された王族の亡霊が住み着いている等というホラーな話や、展望塔の天辺から誰かが粗相を仕出かしやがった！ 等という笑えない話までそれこそピンきりである。

「隊長は、今日も街すか？ おおっとう、掴み掴み」

「ああ、何時も展望塔の方はっかり回ってたからな、今日はちよつと別の所も見て回ろうと思う」

衛士達のリクエストに応えつつ、実酒の掴みに辛味カスタマイズを効かせた干し肉をフォンケに投げ渡した悠介は、酒盛り組の『ウヒョー』とかいう奇声を聞きながら、そそくさと控え室を後にした。逃げるように立ち去ったのは、エイシャが呆れ顔から怒り顔に移行する所を見たからだ。既に四度程叱られている。

「隊長っ！」

「うひょー」

悠介は廊下を全力ダッシュした。

宮殿を出た悠介は馬車を使わず、移動力に特化した補正効果のある指輪の力で低民区まで走る。闇神隊の隊服は手袋やベルト、ブーツに至るまで全て身をを守る為の特殊効果を付与してあるので、他の部分は指輪や腕輪等を使うのだ。

マントを翻ひるがえして高民区や中民区の通りを風技の民が如く突風のように駆け抜ける黒い影。『ギアホークの英雄』が駆け行く姿は、そろそろ街の名物風景と認識され始めていた。

「さてと、今日はモーフ牧場のある方でも見に行くか」

便宜上、太陽の昇る方角を東として、街の西北側に向かって歩き出す悠介。展望塔の丁度反対方向である。ちなみにギアホーク砦は街から西の方角。ルフク村は東のやや南方向にあった。

街の西側には広大なモーフ牧場が広がっているのだが、近年ブルガーデンの工作と思われる猛獣や魔獣の被害が相次いでおり、街の北側か東側への移転が計画されている。外周に住む無技人達の中には牧場でモーフの世話などをして生活費を稼ぐ者もいた。

そんな低民区西側通りを歩いていた悠介は、知った顔を見つけて足を止める。

「イフヨカ……？」

衛士隊の甲冑姿ではなく、普段着らしき街服を纏ったイフヨカが、胸元に抱えた荷物に半分顔を埋めながらトテトテと小走りに通り過ぎていく。悠介はこうして見ると本当に衛士っぽくない普通の少女だなあという印象を懐きながら、その姿を眼で追った。

イフヨカは荷物と人込みで悠介に気付く事無く通りを抜けると、街の外周に向かう路地へと入って行く。何となく行き先が気になった悠介は、ぶらぶらと路地を歩いてみる事にした。歩幅が小さいイフヨカは小走りでも悠介の普通歩きで付いていける。

薄暗い路地を抜けると、そこは無技人達が住む一角、貧民窟スラムのような無技人街が広がっていた。イフヨカのような子が無技人街に何の用事だろう？ と、更に気になった悠介はイフヨカの後を追って無技人街へ足を踏み入れた。

宮殿衛士隊である悠介の姿を見た住人達は皆、慌てて家の中に閉じ籠るか、脇道に入って身を隠す等、目立つまいとする行動が見受けられる。この辺りの反応から、街の外周に住む彼等でさえ、神技人にはあまり良い印象を持っていないらしいと推察出来る。

『相手が衛士でもこの反応って事は、神技人の犯罪とかで無技人に被害者が出た時、ちゃんと動いて無いなんて事も考えられるな』

衛士達から聞く話が無技人に関する話題は殆ど無い。一度ピンポイントで聞いてみるべきかと考える悠介は、イフヨカが一軒の家に入って行く所を見て、考え事を中断する。

ここまでの道中、擦れ違ふ無技人街の住人達はイフヨカとは普通

に挨拶を交わす姿を見掛けている。単に衛士姿ではない見掛けも普通の少女だからという訳でも無く、本当に顔見知りのような親しみを双方に見て取れた。

そのイフヨカと親しげに挨拶を交わした無技人のおばちゃんも、悠介と擦れ違う時は俯き加減で目を逸らしながら、道の端を恐る恐るといった雰囲気歩き去って行ったのだ。

「うーん」

イフヨカの入って行った家は角石と木材で組まれた小屋つばい一戸建てだった。悠介はその家の前まで歩いて行くと、中から話し声が聞こえて来たので耳を敬こぼてる。

「もう行くのかい？ もっとゆっくりして行けばいいのに」

「うん……でも、衛士隊の訓練もおかないと……仲間に迷惑掛けちゃうから」

普段より若干流暢に話すイフヨカはそう言っただけで家の布扉を潜り、そこにユースケ隊長の姿を見つけて思わず飛び上がった。

「ひえっ！ た、隊長！」

「や、やあ」

「ああのっ どうしてここに？」

「いやあ、ちょっと街で見掛けたから、何処行くのかなーと思って……」

後を付けて来た訳だが『後を付けてきた』とは言い辛い事に気付いた悠介は、ちよつと気まずそうに言葉を濁す。それを別の意味に

解釈したイフヨカは凄い勢いで釈明を始めた。

「ちっち違うんです！ 隠してた訳じゃ無いんです！ い、今任を解かれると……こ、困るんですっ！」

「お、落ち着け、落ち着け。何の事やらさっぱり分からんぞ」

「……どうした、イフヨカ」

そこへ先程家の中から聞こえた声とは違う男の声が響き、頭と身体に包帯を巻いた白髪の少し大柄な若者が布扉を捲って現われた。若者の後ろには、心配そうにこちらを窺っている年輩の男性と女性の姿も見える。その二人も無技人を示す白髪に白瞳だった。

包帯を巻いている無技の若者は悠介を見て一瞬眼を瞪るが、直ぐに納得したような表情になると

「アンタが、ギアホークの英雄か」

そう言っつて不敵な笑みを見せた。

18話：無技の旅人

イフヨカの両親は無技の民だった。通常、神技人の女性に無技の子が宿ると、それを確認した時点で墮胎したり、産んでも無技人の里親に引き取らせる場合が殆どだ。逆に、無技人が神技を宿す子を生んだ場合も大抵は神技人の里親に引き取って貰う事が多い。

彼女の場合は偶々引き取り手の里親が見つからなかった事と、両親が街の外周に住んでいる事から、実質神技人の街で育つのなら、いずれ成人した時に街の住人として受け入れられ易いと考えて、そのまま無技人街で育てられた。

無技の子供ばかりの中で一人だけ緑色の髪と瞳を持つイフヨカは、中々輪に溶け込めず、少々内向的に育ってしまったが。

等民制では子供が成人するまでは親の神格が適応される。無技人が親で子供が神技人だった場合は子供にだけ神格に見合った身分が与えられる事になっている。イフヨカは神民衛士隊の入隊規定年齢に達して直ぐ、老いた両親を養う為に入隊したのだ。

数日前、闇神隊の部下として選ばれた事で給金も上がり、牧場で怪我を負って働けなくなった両親を養って行く事にも目処がたった。しかしながら、宮殿衛士隊は基本的に身分の高い者ばかりで構成されるエリート部隊。

部下といっても体裁を取り繕う為だけに適当に選ばれた、偶々あの場合で伝達系風技を扱う者が他に居なかったという幸運によって得

られた立場である。

イフヨカは自分が無技人街出身である事を知られれば、闇神隊の体裁の為に任を解かれるのではないかと不安を抱えていた。家の前で立ち話も何なのでと、悠介を家に迎え入れようとすると両親に眩暈を覚えながら、イフヨカは意を決してその事を打ち明けた。

「そーなのかー」

悠介はその一言で済ませた。『やっぱりこの人は少し違う』緊張と不安が抜けて座り込みそうになりながら、悠介を見上げたイフヨカは、改めてそんな風に思うのだった。

「へー、旅人かあ」

イフヨカの両親に勧められて彼女の家にお邪魔する事になった悠介は、先程の若者について話を聞いていた。

彼が大怪我を負った状態でこの家に運び込まれたのは、悠介が仕官しに宮殿を訪れる少し前。イフヨカの両親がモーフ牧場で魔獣に襲われていた所へ助けに入り、その時に負傷したのだという。シン八と名乗った彼は、諸国を放浪する旅人らしい。

治療系水技の医者を呼べる程のお金も無く、また態々無技人街まで怪しげな無技の旅人を治療に来てくれるような物好きも居ない。イフヨカの両親はお互いに傷が癒えるまでこの家でゆっくり養生しようと呼びかけて、彼も暫らく世話になる事にしたのだそうだ。

この世界でも旅人の存在は珍しく無い。しかし、無技人の一人旅は少々珍しいと言える。しかも彼は帯剣していた。少なくとも、フ

オングランク領内の無技人が狩猟以外で武装している姿はあまり見ない。故に、怪しげな無技の旅人と認識される。

「その剣つて本物？」

「……ああ、勿論そうだが。やはり気になるか？」

シンハは悠介が武装の事を気にしているのかと考えた。神技の民にとって無技の民は無力な存在でしかなく、『無力な存在でなくてはならない存在』でもある。特に、フオンクランクのような歴史ある等民制国家なら尚更その傾向は強い。

そのフオンクランクの宮殿衛士、ましてや英雄と称えられる精鋭衛士としては、武装した無技の旅人が首都に入り込んでいるなど、見過ごせない事柄なのかもしれない、と。しかし

「いやー剣らしい剣とか見たことなかったから」

珍しくてつい見惚^{みと}れていたという悠介に、シンハは訝しむ気持ちを抱いた。何かしら探りを入れて来る気配も無く、見掛けも変わっているが何処か他の神技人達とは根本的に違うような異質感を覚える。

その時、イフヨカの母が『何時も娘がお世話になってます』とお茶を持ってやって来た。

「あ、ども」

悠介はお茶を受け取ると一口啜る。その姿を見て、異質感の正体が分かったシンハは悠介に興味を持った。

無技人の老婦に頭を下げ、無技人の安っぽいお茶に躊躇無く口をつける。悠介には差別感が見られない。殆どの神技人が持つ、無技人に対する優越的な感情の気配がまるで無いのだ。

「……見るか？」

シンハは壁に立てかけてあった大剣を悠介に差し出した。本物の剣を見るのは初めてだったので、喜んで見せて貰う悠介。全長一・二メートル程の両手剣。手に取ると見た目通りに重く、ずっしりとする。

「ん？ 折れてるのか」

「ほう、持っただけで分かるのか」

早速カスタマイズメニューを開いてステータスを調べていた悠介は、剣が中程で折れている事を確認した。素材は晶貨よりも高級な金属らしい事は分かる。白金しろかねの大剣たいけん。武器の戦闘記録には、かなり高い数値がカウントとして残されていた。

「これって、牧場に出たっていう魔獣とやり合っただけで折れたとか？」

「いや……フォンクランク領に入る前はブルガーデン領を通って来たからな、連中とやり合った時に折れてしまった」

なるべく街道を外れて森の中などを進んでいたのだが、国境沿いでブルガーデンの工作部隊らしき小集団と遭遇し、一戦やらかしたらしい。その話に目を丸くしているイフヨカを余所に、悠介は剣の修理を持ち掛けた。

「良かったら修理しようか？ これだけ良い剣なら色々特殊効果も付けられると思うし」

イフヨカが目を丸くしたように、今の話には色々としん八の素性に関する捨て置けないキーワードを含ませていたのだが、まるで意

に介した様子も見せない悠介に、彼は益々興味を惹かれた。実際は、単なる悠介の知識不足である。

衛士のような立場の人間であれば、今の話を聞いて誰しもが思い浮かべる『とある地域』の事を、悠介はまだ知らなかった。悠介の事情を知らないシンハは悠介の対応を度量の深さと受け取っていた。あながち間違いとも言えない勘違いであった。

ギアホークの英雄の人となりを知ったシンハは、その力も是非この眼で見たいと、剣の修理を頼む事にした。

悠介はカスタマイズメニューで剣の状態を弄りつつ、最終的な仕様を決める為に色々と質問を投げ掛ける。

「そうだな……斬り返しをもう少し速くしたいとは思っているのだが、これ以上軽くなると威力が心許ないのでな」

シンハの意見では、余り斬れ過ぎるのも困るとの事だったので攻撃力は据え置き。斬るよりも叩き付ける使い方をしていそうなので、剣の耐久力が劣化しないよう耐久値を上限固定に設定した。

更に攻撃速度上昇効果を付与し、一人旅の危険性を考慮して体力回復効果と治癒効果も付ける。

床上の折れた剣を前に、戦い方や戦闘の嗜好などを質問しつつ宙に指を彷徨わせている悠介の姿を、シンハは特殊な生産系神技を使う時のリラックス効果を狙った、集中力を増す為の行動と見ていた。質問そのものに意味は無く、折れた刀身を接合する為に必要な集中力、それらを雑談によって得ているのだろうと。実際、彼の愛剣を創った神技職人にも、作業中は余程気を付けなくてはならない所以外は喋りっぱなしという者が居た。

「んー、こんなもんかな……実行」

光のエフェクトが白金の大剣を包み込む。既に見慣れた光景であるイフヨ力は相変わらず綺麗だなあとという表情で眺めていたが、彼女の両親は目を瞞って美しい光の帯びに見惚れていた。

長く諸国を渡り歩いて色々な神技を見てきた経験のあるシンハも、こんな現象は初めて見る。やがてエフェクトは光の粒を残して消え去り、床上には修理された美しい白金の刀身を持つ大剣が残される。

「一応、治癒効果も付けたから、その傷も治ると思うよ」
「治癒効果？」

悠介の言葉を訝しみながらシンハは愛剣を握った。その瞬間、身体中に力が漲るような感覚を覚え、傷口に熱と痒みが走る。

「これは……！」

包帯を解いて見ると、背中から脇腹、胸元に掛けて刻まれていた傷がジリジリと塞がっていく。まるでそこそこ熟達した治癒系水技のような効果が、自身の愛剣から発せられている事に、彼は驚きを隠せない。

「とりあえず要望通りに攻撃力は据え置きでそのまま、攻撃速度上昇も付けて耐久力も弄つといたから」

「要望……」

一撃で折れるような負荷でも掛からない限り、どれだけ使っても壊れる事は無い筈だと説明されて、シンハは自分の愛剣を見つめる。見た目は鍛え直したときのような感じだが、確かに、今までと比べて握った感覚に違和感があった。

剣の具合を確かめたいというシン八に、悠介は試し斬りを提案した。とりあえずイフヨカの両親にも握らせて二人の傷を癒し、家を出て適当な空き地を見つけると、悠介は地面のカスタマイズで的にする案山子を作り始める。

その間、シン八は二度三度と剣の素振りを行い、悠介の言った攻撃速度上昇の効果を身を持って感じ取った。剣が軽くなった訳でもないのに、明らかに速く振るう事が出来るのだ。

「案山子だすぞー」

悠介はそう告げると、カスタマイズで作った土の人型を出現させた。素材はこの辺りの土だが、石のように固めてある。シン八はいきなり案山子が出現した事にも驚いていたが、その強度を確かめて『コレで試し斬りをするのはどうか』と躊躇をみせた。

「大丈夫だって。その剣、素がかなり丈夫にできてるし」

折れる程の無茶さえしなければ磨り減る事も無いという悠介の言葉に、半信半疑で土石の案山子と向かい合う。

三角形を描くように配置された三体の案山子。スツと腰を落としたりシン八は一呼吸で手前の二体を袈裟懸け、横薙ぎと両断すると、薙いだ勢いそのまま身体を捻るように回転させて奥の一体に叩き降ろした。真つ二つに割れる土石の案山子。

「おおっ　すげえ豪快！」

「……驚くのは俺の方だ、なんだこの素晴らしい剣速は」

欠片も刃こぼれしていない愛剣の刀身を確かめながら、シン八は抑えきれない笑みを零しつつ自身のイメージを上回る剣速に感嘆していた。少々野性味の強い獰猛な笑みに、イフヨカがこそつと悠介

の背に隠れる。

暫し愛剣の力を堪能したシンハは、剣を鞘に収めて悠介に礼を言う。何かを確かめるように問い掛けた。

「正直、有難い。だが、これほどのモノを……余所者の俺に与えていいのか？ それに、俺は無技の民だぞ？」

「あー俺十二人とかその辺りに偏見無いから、部下の両親を助けてくれた御礼って事でいいんじゃないかな？」

一応、特殊効果を簡単に付与できる事は口外しないでくれと注意を入れておく。悠介の言葉や態度に、何ら含むモノも無ければ偽りも無い事を読み取ったシンハは、ヴォレットに似た楽しそうな表情を浮かべた。

「アンタは面白い神技人だな、俺はガゼッタのシンハ・トルイヤード。何時かアンタの力になる事を約束しよう」

そう言っただけで差し出されたシンハの右手を、悠介はしっかりと握って握手した。特に深く考えた様子も無く、普通に握手に応じたダケに見える悠介を、シンハはやはり面白そうに見つめていた。

そろそろ夕方になるつかというサンクアディエットの街並みを眺めながら、悠介はイフヨカと並んで衛士隊の詰め所に向かっていた。あの後、剣も直って傷も癒えたシンハは、もう一晩泊まってから旅に出ると言っていた。

「そつえば、無技人街の人達ってイフヨカとは普通に接してるよ

な」

「はい、私は……小さい頃からあそこに居ましたから……」

他に無技人街で親しくしている衛士はいないのかと訊ねる悠介に、イフヨカは静かに首を振って答える。

「みんなは、衛士の事をきら……怖がってますから……街の神技人と何かトラブルが起きると、いつも……」
「割り食わされてる？」

シヨートの緑髪が揺れ、こくりと頷くイフヨカ。

「ふーむ」

四大神信仰の神格を基にした等民制国家。大多数の人間は其々の神から加護と祝福を受けた証として神技を宿す、とされているので神技を持たない無技の民は神から祝福されていないと考えられている。

国教と信仰に根差した問題だけに、等民制度の中で無技人達の地位を向上させるのは中々難しい所だろう。しかし、その事と衛士が役割を果たさない事とは別問題だ。トラブル 犯罪の取り締まりに無技人も神技人も関係無い筈だと悠介は考える。

「どうしても身分つてのは関係して来るんだろうけど……治安維持は手を抜くべきじゃないよなあ」

「隊長……？」

悠介は無技人との関わり方について、考えを巡らせ始めるのだった。

19話：ブルガーデンの内情

夜明け前

要塞都市パウラの長大な防壁の影で、ゼシャルドはこれまで
掴んだブルガーデンの内情を纏めながら、協力者の男からフォンク
ランクの近況報告を受けて今後の活動方針を練っていた。

「そうか、ユースケは上手くやっておるのじゃな。それにしても
……聞く限りでは凄まじい力じゃな」

「流石にアレには僕も驚きましたよ」

危うく巻き込まれる所でしたと彼は笑う。

今、この要塞都市パウラではギアホーク砦で風の団が壊滅した事
により、戦力の復旧を急ぐ動きが活発化していた。神民兵からの引
き抜きや新兵の募集などで連日バタバタしていて忙しい。その為か、
ゼシャルドに対する監視も日に日に緩くなり始めていた。

「ワシは近々、水巫女の女王に接近する」

「……第一首都、コフタですか」

ブルガーデンは元々山頂のシャルナー神殿に集まる信徒達が神殿
の周囲に住み着いて街を形成し、そこから建国された小さな王国だ
った。第一首都である山頂の街コフタには、シャルナー神殿を居城

に国民から絶大な支持を受ける女王が君臨していた。

現在は第二首都、要塞都市パウラにて軍民を統治管理する指導者、イザップナー最高指導官がほぼ全ての実権を握っており、要塞地下に設けられた議会堂を中枢としてブルガーデンの政治を動かしている。

しかし、水巫女の女王が持つ国家の象徴としての権威と国民の人氣は絶大であり、女王が正式に即位するまでの後見人だった元ブルガーデン国王の側近でもあるイザップナーは、形式上、軍資金の要請や国費で事業を行う場合などは女王に御伺いを立てて了承を得るという手続きを通さねばならなかった。

水巫女の女王リシャレウスと、イザップナー最高指導官、両者の間には反目こそ見られないものの、双方の政策や意見は決して一致している訳では無いらしい。お互い無干渉に近い関係で、第一首都と第二首都それぞれに個別の統治を布いている。

ゼシャルドはこの辺りに付け込める隙があるのではと見ていた。

「なら、こっちの観察情報もそっちに運びますよ」

「いつもスマンのう」

「いやあ、ユースケ君から報酬は貰ってますから」

「報酬？」

首を傾げるゼシャルドに、彼は微笑みながら小さい虫のような物体を取り出して見せた。

「よく釣れるんですよ、この釣り針」

悠介がサンクアディエットの通りでイフヨカを見かけていた頃、ゼシャルドはパウラの中心街から外れた長城部分の上道通りを歩いていた。パウラ的一般民住居は北側の中心街に集中しており、重要施設などは殆ど中心街の地下に当たる要塞内部にある。

ブルガーデンの国土の半分以上を占めるボーザス山の麓に添って造られた要塞都市、その長城部分はサンクアディエットの半周分にも匹敵する実に長大な防壁要塞だ。中心街から離れたこの辺りにも、移動式だが多くの店舗が並ぶ。

防壁内部には各神民兵組織の訓練施設や宿舍などもあり、中心街から離れた一般民や神民兵の家族なども暮らしている。沢山の空き部屋があるので、神民兵達は適当な部屋を見つけては『分隊の部屋』などと勝手に札を付けて割と自由に使っていた。

「……ふむ」

上道通りに並ぶ移動店舗群。ゼシャルドはふと一軒の店の前で足を止めた。首輪を付けた数人の無技人が店の前に繋がれている。一人足に怪我を負っている者がいるらしく、負担が掛からないよう座り込んで、しきりに小さな出血を気にしている様子だった。

ゼシャルドはおもむろに歩み寄ると、彼女の怪我に水技の治療を施す。傷を癒して貰えた彼女は御礼を言いたそうにしていたが、勝手に喋ると主人から鞭が飛んでくるので困り顔を見せている。

「いいんじゃないよ、言わずとも分かっておる」

「……」

あたまを下げる無技人。丁度その時、店から出て来た彼女等の主人らしき男が威圧的に声を掛けてきた。

「おい、うちの飼い無技の何かようか」

「いやなに、怪我をしておるようじゃから治癒しておったのじゃよ」
「?……っ あ、あんた……ゼシャールド神技指導官!」

飼い主の男は相手がゼシャールドだと分かると、慌てて態度を改めた。ただでさえ貴重な人材ゆえに水技の民の発言力は比較的大きいブルガーデンだが、その中でもゼシャールド程の熟達クラスとなれば特に別格だ。

「いやあそうでしたか、ですがあの……今はちよつと余り持ち合わせが……」

「構わんよ、趣味の治癒じゃからして気にするな」

報酬を渋ろうとする飼い主の男に、ゼシャールドは「金なぞ要らん」と手を振った。飼い主の男が飼い無技達を連れて去った後、この国の無技人達の扱いを不憫に思い、溜め息を吐くゼシャールド。等民制国家では、神々の祝福を受けていない民として扱われる無技の民だが、四大神に神格の差異は無いとするブルガーデンでは、神技を持たないモノは人にあらずとされていて、無技の民は人間と認められず亜人扱いなのだ。

「ゼシャールド指導官」

「ん？ おお、ブラウシヤ君か。 もう、良いのかね？」
「はい、ご心配お掛けしました……。明日からまた訓練に出ますので、宜しく願います」

ゼシャルドに声を掛けてきたのは、彼のこちらでの教え子でもある水の団候補生の少女だった。ここ数日は訳あって訓練を休んでいたのだが。やはり水の団への入団を目指す気持ちに変わりは無いという。

「ずっと決めていた事ですから……。もう、お姉ちゃんは居ませんけど」

「……そうか」

彼女の姉はギアホーク砦の一報が入った後日、フォンクランク政府から返還された。所々欠けた姉の遺体を前に、茫然自失で佇んでいた姿は、ゼシャルドの記憶に新しい。陰った空気を払うように、ブラウシヤは明るく話題を振った。

「そういえば、指導官はフォンクランクで沢山無技を飼ってらしたそうですね、やっぱり水技の実験に？」

「いや、ワシは彼等の村で一緒に暮らしておったのじゃよ」

「え？ 無技とですか？」

家でも昔一匹飼っていたという彼女は、心底不思議そうに問い返すのだった。

「難しい問題じゃな」

「だろうな」

宮殿に戻った悠介は早速その日に得た情報をヴォレットに報告した。シンハの事を話した時、ヴォレットは一瞬驚いたような顔を見せ、クレイヴォルが顔色を変えて席を立とうとしたが、ヴォレットはそれを引き止めると一切の口外を禁じた。

そして悠介にもシンハの事はしばらく誰にも話すなと釘を刺して置く。彼についての詳しい話は、また後日にでもと言うヴォレットに、悠介は何か複雑な事情でもありそうだと判断して頷いた。

その後、無技人街の事を話題に、無技人と神技人との関係について話したのだが、一般衛士達も含めて意識改革をという悠介の考えは、謂わば信仰にも関わる問題だけに中々難しいのではないかとヴォレットも腕を組む。

「そもそもじゃ、今の制度を引っくり返すような事をすれば国は混乱するじゃろうからしてな」

「まあなあ」

「もしそうなった時、頼れるのは己が力だけじゃろ？」

「絶対数からして我々神技の民の方が多い、結局今以上に無技の民は厳しい生活を強いられる事になるだろう」

等民制の中で無技の民の地位や扱いを向上させようと思えば、今から徹底的に無技の民に対する既成概念を変える教育を、子供の内から行つて、刷り込みのようなやり方で数十年くらい続けられれば可能かもしれないとクレイヴォルは言う。

しかしそれは限りなく実行が不可能な方法でもありと補足を付けた。必ず反対する者が出る。

「だが、治安の優遇や差別については何とか出来るな」

「何か良い案ある？」

「簡単なことだ、『衛士としての誇り』を理由に任務遂行の意識を引き締めればいい」

「あゝ流石エリート、如何にもエライさんな発想だ」

残念そうに言われたクレイヴォルが少しムツとした表情を浮かべたので、悠介は軽く謝りながら『一般衛士』にとつての『誇り』がどの程度の価値なのか説明した。衛士になれば給金で食べていける。誇りは食べられない。それだけだ。

「名誉だの誇りだのつてのは、ソレを追い求めてやっていける人達には価値があるんだろうけどね」

大事な家族と誇りのどちらを選ぶか、一般民は家族を選ぶ。故に一般民であるとも言える。誇りや名誉がくだらないとは言わないが、現実問題として、一般民は誇りと名誉では食べて行けないのだ。

「ま、異論はあるだろうし必ずしもそうとは言い切れないけどな」

「うーむ……確かに……我が王も名誉より実を選ぶ方であるし……」

眉間の皺を増やしてぶつぶつと考え込んでしまったクレイヴォルを余所に、ヴォレットは官僚達の間で当たり前のように横行する汚職、賄賂の類が、一般衛士や一般民の間にもあるのだなと、ふむふむ頷いていた。

「意識改革は簡単にはいかないだろうけど、国のトップが協力してくれるなら手っ取り早い方法はあるんだよな」
「ほう？ それはどんな方法じゃ？」

保護条例の公布だと、悠介は端的に語った。

「ちちさまあ……わらわのお願い、聞いてほしいのじゃ」

何か適当な理由をつけて無技人達を保護する条例を作る。ブルガーデンのように無技人を所有している者の少ないフォンクランクでは、別段『無技の民を保護する条例』を出した所で困る人間も殆ど居ない。

フォンクランクにも奴隷は存在し、その中に無技の民も居るが、元々待遇は大して変わらないので保護条例による影響は少ないと考えられる。ちなみに、フォンクランクに限らず奴隷は神技人の方が数が多い。所有する奴隷の質がそのまま所有者のステータスに繋がるので、無技人の奴隷よりも神技人の奴隷を連れている方がより格調高く見られるのだ。

「ヴォレット様はまた妙な事を言い出し始めましたな……」
「やはりあの男の影響か。無技の民など保護してどうしようというのだ？」

官僚達がヒソヒソと囁きあう中、父王エスヴォブスの許しを得た（攻め落とした）ヴォレットは早速、悠介と保護条例の中身を考えようと部屋に戻って行くのだった。スキップで。

要塞都市パウラから山側に少し入った辺りに、精鋭団専用の育成訓練施設がある。そこは初めから精鋭団に入団する事が決まっている身分の高い者にしか利用出来ないエリート育成施設、士官学校のような施設だった。

その施設の敷地を関所として、整地された山道を上って行くと、ブルガーデン第一首都コフタの街に入る事が出来る。

シャルナー神殿の膝元に広がるコフタの街は、山頂付近の僅かに開けた場所を街の入り口として、無数に掘られた坑道の中に住居施設が広がっている。カルツイオで最も高い場所にある地下の都であった。

山頂の神殿を居城として、日々静かに暮らすことを望む水巫女の女王リシャレウスは、執政官から届けられた書状に憂鬱な溜め息をもらす。謁見を要請する内容のそれには、ゼシャルドの名が記されていた。

最近ブルガーデンの神技指導官に就いたと聞く元フォンクランクの宮廷神技指導官。またぞろイザップナー最高指導官が絡んでいるのだろうかと思うと、気持ちが重くなるというものだ。

十四歳の頃、建国者でもある父王を亡くした彼女は、十六歳で正式に即位するまで後見人となった元国王側近であるイザップナーの献身的な働きに支えられながら、新興国であったブルガーデンを大

国フォンクランクと並ぶ地位まで押し上げ、国の象徴的存在として崇められるようになった。というのがブルガーデンの一般国民が持つ認識である。

イザップナーは王亡き現状は亡国の危機にあると国民の危機感を煽り、隣国に付け入られないようにフォンクランクを牽制する名目でパウラ要塞の都市化事業を進めて行く中、国の中枢を自分の派閥で固めていった。

彼が急速に実権を握って行く事への懸念を示す旧党派官僚達もいたが、リシャレウスを国民的象徴に添える事で王の権威を持たせて、忠誠に対する信頼を持って自らの活動を支援するよう仕向ける事で、彼等の批判を躲していた。

女王に即位する頃には、リシャレウスもイザップナーの献身が亡き王と残された王女への忠誠などではなく、己が野望の為だという事に薄々感付いてはいた。しかし、頼る者のいなかった彼女は彼を王の忠実な臣下として扱うしかなかったのだ。

そうなるよう、身の回りに置く者にも工作を仕掛けられていた事に気付いたのは、ずっと後になってからの事である。

「会わなくちゃ駄目なのかしら……」

もう一度溜め息を吐きながら、リシャレウスは側近を呼ぶのだった。

20話：錯綜し始める潮流

「ユースケはガゼッタの事をどこまで知っておる？」

「名前くらいしか知らないな」

「そうか、わらわもよく知らん」

「なんじゃそりゃっ」

エスヴォブス王から無技の民を対象にした保護条例を定める約束を取り付け、中身をどうしようかと考えていたヴォレットはふと、悠介の話にあったシンハのことを思い出し、何かの参考になるかもしれないと話題を振った。

「詳しくは知らんが、ゼシャールドから聞いた事があるのじゃ。

あの国の王は無技の民じゃ、と」

「それって、無技の民の国があるってことか？」

よく分からんのじゃと答えたヴォレットはクレイヴォルに視線を向ける。『何か知っていよう？』という目配せを受けたクレイヴォルは、渋々といった様子で自分の知るガゼッタ国について語った。

国境の大部分をノスセンテスと隣するガゼッタは、国土の殆どが険しい山岳地帯となっている。ブルガーデンとの国境に近い場所に首都らしき街があり、特にこれといって特筆するようなモノも無い、表向きは到って普通の等民制国家という印象を受ける。

が、実際に国を動かしているのは広大な山脈のどこかに存在する王都と、そこに君臨する無技の王なのだという。ガゼツタ領の山岳地帯には戦士の訓練施設が点在しており、そこでは大勢の『無技の戦士』が育てられているのだそうだ。

「ノスセンテスもブルガーデンも、無技の戦士の存在を知っていないから目を逸らしている」

あまり大きな声で口にする事は憚られるが、実は無技の民は神技の民よりも、生命力や基礎の身体能力が優れているらしい事が学者達の研究で分かっているのだと、クレイヴォルは若干声を潜めながら語った。

これらの研究結果や内容は一般には公にされていない。一部の国防に携^{たす}る高官や学者達しか知らない事である。悠介は今の話に思い当たる節があった。スンやバナおばさん達に『見た目細いのに力あるなあ』という印象を持った事は、一度や二度ではない。

「実際、無技の民からは神技の波動を感じ取れないからな、気配を消して接近されると風技の索敵でなければ見つけるのは難しい」

正面から戦えば攻撃系神技を持つ者が有利かと思われるが、接近されたり弓を使われればその限りではない。

『無技の戦士』の存在については、衛士達の間でも時折噂になる。神技を宿さない無力な民である筈の無技人に衛士が倒された等という話は、確かにあまり大きな声では言えないことだった。無論『一般人同士』レベルであれば絶対的に神技の民が有利だが。

「うーん、無技の民って実は戦士系のキャラなのか……？ だとすると」

「なんじゃ？ それは」

はてなマークを浮かべたような顔で首を傾げているヴォレットに笑みを返しつつ、悠介は思い付いたアイデアを話した。

- ・フオンクランク領内に住む全ての無技の民をサンクアディエットの清掃人に任命する。
- ・街の各区画清掃は無技の民の義務とする。
- ・無技の民は清掃を強制されないものとする。
- ・清掃報酬は宮殿より出資されるものとする。

「清掃人……無技の民を街に入れるのか？」
「ふむ、宮殿が雇いこむ形にする事で、不逞の輩を牽制するわけじやな」

街の清掃は月に何度か日雇いの者が当たっており、ゴミなどは風技で簡単に吹き飛ばしたり、石畳を水技で洗い流したりしている。しかし、吹き飛ばされたゴミは路地裏に、石畳の水洗いも適当で疎ら、ぶつちやけあまり清潔とはいえない。

高民区や中民区も通りは綺麗に見えるが、裏に回れば である。
悠介がここ数日、街を走り回って気付いた事だった。

「まあ、いきなり上の区画を任せようと思ってもどうせ反対する奴が出るだろうから、最初は低民区からな」

区画ごとに担当衛士を決めて彼等の監督の元に清掃を行うという形式を取る。掃除用具は悠介が作るつもりでいた。報酬の支払い方や、その為の予算枠も決めなくてはならないので、この辺りは経理の者と相談して決める事にした。

「……狙いは分かるが、果たしてそう上手くゆくのか？」

無技の民が街中を歩くことに住民から不満の聲が上がらないか、そもそも強制しない義務という時点で無技人達にどの程度の参加が見込めるのか、というクレイヴォルの懸念に対して悠介は「先ずは触れ合える環境から作るのだ」と説明した。

「クレイヴォル炎神隊長殿はあんま下街とか歩かないだろうから知らないのかも
しれないけど、表通りでも無技人の姿は結構見かけるぞ？」

外周で屯する無技人を即席使用人として荷物運びなどに雇っている者はよく見かける。荷馬車の番にも雇われるように、彼等の仕事ぶりが誠実であるという認識は、殆ど意識しないレベルで街の住民や商人達の間に着定しているのだ。

イフヨカの例から見ても、外周の無技人街は長い年月サンクアデイエットの発展と共に在り続けているので、低民区の住民には子供の頃に無技の子達と遊んだ経験がある者も多い。親が禁止する家も当然あつたであろうが、子供達はその辺り無垢である。

成長するに従い、無技の民に差別感情を持つ人々がいる一方で、成人した後も友人として付き合いのある人々もいるのだ。

「中民区とか高民区の下街におりて来ないような環境で育った人らも、よく分かってないと思うしな」

四大神信仰と子供の頃からの刷り込みで『下賤なるモノ』と思ひ込んでいるだけなので、何故そうなのかと深く理由を考えた事も無いだろうと悠介は指摘する。

「俺はあんまり詳しくないんだけど、四大神信仰の教義って無技の

民と交流する事に何か触れる部分とかってあるのか？」

「ん？ そういえば、特に思い当たらぬな……クレイヴォルは何か知っておるか？」

「一応『神の祝福を受けぬ者は彼の地へと追放されん』という一節がありますか……」

『彼の地』ってどこよ？ というツツコミに答えてくれる記述はないそうだ。また、そういった教義の一節を理由に無技の民を国内から追放しようという声も無く、極端な人種差別主義者のような存在も見受けられない。

「それなら大丈夫だろ、俺の知ってる信仰集団みたいに教義で人殺したりする部分があるなら、ちよっと話も変わってくるけど」

信仰の教義に反するから等という理由で反対する者が出た場合は、かなり難しい問題となるが、それが無いのなら問題ないだろうと悠介は割と楽観的に考えていた。普段の生活の中で無技人の存在が当たり前になる事『慣れる生き物』である人の性質に期待する。

無技の民を街の清掃人に就かせる保護条例が公布されたのは、それから数日後のことだった。

サンクアディエツトで保護条例が公布される少し前

ブルガーデン第一首都、山頂の街コフタ。この街からもう少し山

を登った先にシャルナー神殿がある。水巫女の女王リシャレウスへの謁見を明日に控えたゼシャールドは、コフタの街が昔の旅で訪れた時と殆ど変わりなく在る事に感慨を覚えていた。

同時に、女王との良好な関係を築くことが出来れば、ブルガーデントとの関係も大きく違ったモノに出来ると確信した。

コフタの街で見かける無技人たちはパウラと違ってきちんと服も着ており、靴も履いている。皆例外なく所有者の存在を示す腕輪、奴隷の腕輪を付けてはいるが、表情は明るく健康的である。

彼等は神殿が所有する奴隷であり、神殿の所有は女王の所有、彼等は女王の奴隷という庇護の下、街で平穩に暮らしている。本来その身の束縛を意味する奴隷の腕輪は、彼等の身を守る盾となっているのだ。

『同じ国内でも女王と最高指導官の統治にここまで違いがあるとはな……』

神技指導を担当している生徒達から聞いた、長年パウラで暮らしていた者が両親に連れられて里帰りなどでコフタを訪れると、大抵面食らうらしいという話に、ゼシャールドは納得していた。

街の様子を見て歩くゼシャールドに向けられる住民達の視線には、パウラの神技指導官という事であり良くない印象を持っている雰囲気を感じ取れた。その事からも、パウラとコフタの関係が窺い知れる。

『ふむ……明日の謁見、成功させねばならんのだ』

そこそこ古い歴史を持つボーザス山のシャルナー神殿は、一階の入り口をくぐると広い廊下が奥まで伸びていて、入って直ぐの所に神殿兵の詰め所と客間があり、そこから奥に向かって信徒の寄宿舎が暫らく続く。

少し進むと厨房や食堂、洗い場、井戸などがあり、長い廊下の中頃には使用人と神殿兵の宿舎がある。何れも廊下を挟んで両端にそれぞれの部屋が並んでいた。これは、廊下に神殿兵が大軍で整列できるような造りにしてあるらしい。

一階の奥に執政官の個室と執務室があり、最奥には二階へ上がる階段と、ここにも神殿兵の詰め所が設置されていた。二階は水巫女の女王が使う寝室、書庫、食堂などの各私室と、謁見部屋がある。ちなみに、一階廊下最奥の壁の向こうには二階と直通のフロアがあり、女王がお清めをする為の湯浴み場になっている。

謁見部屋に通されたゼシャルドは、奥の玉座に座る女王リシャレウスに膝を付いて一礼した。

「ご機嫌麗しゆう御座いますリシャレウス女王陛下。この度は謁見を許され、この上ない喜び」

「堅苦しい挨拶は抜きにしましょうゼシャルド神技指導官、今日はどうのような用件で参ったのですか？」

凜とした声でゼシャルドの口上を遮ると、早く用件を言えとばかりに煩わしそうな視線を向けるリシャレウスに、ゼシャルドは

己が懐いていた女王像と随分違っていた事に少し驚きを覚えた。しかし、彼の長年の勘がリシャレウスの人となり疑問を感じさせる。『演技』そんなイメージが浮かぶ。

「ブルガーデンに就いた以上は、女王陛下への挨拶に赴かねばと思っていた次第で」

「そうですか。ですが、貴殿が我が国に亡命なされたのは一月と十日程も前だったように思いますが」

今頃やって来て何を空々しいと言わんばかりの皮肉を込めた女王の言葉に、御付きの女官達が笑いを堪える仕草を見せる。

「これは手厳しい。しかし、私の方と致しましても中々監視の目が緩まず、今日まで挨拶の機会が得られなかった次第です」

「それは私の指示ではありませんが、監視の目と謁見の機会……どう繋がるのでしょうか？」

立てば膝裏まで届く長い水色の髪をふわりと揺らしながら、小首を傾げて見せるリシャレウス。ほぼ敵国と見做している国からの亡命者に監視の目が付くのは当然として、それは女王への謁見を申し込めない理由には、ならないのではないかという疑問。

挨拶に向いてくる事を特に求めるつもりもないが、ゼシャルドの言葉に引つ掛かりを感じたりリシャレウスはそう訊ねた。

「イザップナー最高指導官殿の優秀な部下を連れての謁見を避けたかったから、ですな」

「……？」

「女王陛下とは個人的にお会いしたかったですよ、……元フォンクランク宮廷神技指導官として」

謁見部屋にざわり、とした空気が漂う。女官達が目配せし合い、警戒するような仕草を見せた。神殿兵を呼び寄せようとしているようだ。それを一旦止めたリシャレウスは、人払いをしてゼシャルドの言葉の真意を問い質す。

「それは、どういう意味ですか？」

「陛下、貴女はこの国の現状を憂いておられる」

イザツプナー最高指導官の政策に不満はあれど、実権は殆どあの男に握られているので、血筋と権威だけではどうにもならない事をもどかしく思っていると指摘するゼシャルドに、御付の女官が不敬ではないかと叱責する。

「待ちなさい、マーシャ。……確かに、貴方の言われるとおり、私は彼の方針を最善だとは思っていません。ですが」

イザツプナーのやり方と国の現状には不満だが、フォンクランクの体制に賛成している訳ではないと、彼女はきっぱり言い切った。リシャレウスは亡き父王の理想を受け継ぎ、ほんの僅かな区域だけでも自分の治めるコフタの街でそれを実践している。

「しかし、このままでは何れコフタの街も、ゆくゆくは貴女の権威も奪われてしまうでしょうなあ」

「無礼な！ 陛下に向かって暴言は許さぬ！」

先程のマーシャと呼ばれた女官が憤りも露に神技を放とうと手を翳す。が、何も起こらず、彼女は向かい側に立つ同じ顔をした女官に目配せして見せた。しかし、スルーされてしまった。

『ちよつと、サーシャ！ ぼけつとしてないであの無礼な爺さんに一発かましてやんなさいよ！』

『無駄。陛下は待てと言った。もう少し見定めるべき』

少々感情的になりやすい姉マーシャに、妹サーシャは淡々と返しながらも神技の波動を高めている。ちなみにマーシャの水技は防御系で『水壁』を使い、サーシャは攻撃系水技『水柱』を使う。

どちらも近くに水がなければ殆ど効果を為さなかつたりするのだが、二人ともイザップナーの息が掛かつていない、リシャレウスが自ら任命した信頼できる女官、嘗ての友人達であつた。

「落ち着きなさい二人とも。ゼシャルド殿、貴方の目的は何なのですか？」

「両国の友好、といった所でしょうかのう」

「……私に、イザップナーを討てとおっしゃりたいの？」

「できる事なら、穩便に済ませられればとは、思っておりますじゃ」

それは女王の問いに対する肯定を意味していた。リシャレウスは頭を振つて溜め息を吐いた。そんな事は無理だと内心で呟く。

第一、今イザップナーという指導者を失えば、国は大混乱に陥つてしまう。そうなれば、きつとここぞとばかりにフォンクランクの軍勢が押し寄せ、ブルガーデンはあつという間に攻め滅ぼされてしまつたろう。エスヴォブス王はそういう男だ。

「フォンクランクはブルガーデンの滅亡など望んではおりませぬ」
「ですが、あの男を討てばイザップナーそういう事態を招く事になるでしょう」

「ほっほっ 失礼ながら、女王陛下は御自身の権威と国民の絶大な支持を過小評価なさつておるようじゃ」

「私に国を動かす力は、もはやありません」

軍も官僚も全てイザツプナーに掌握されている今は、どれだけ国民の支持を集めていても、所詮はお飾りの女王なのだ自嘲する。女官の二人が、そんなリシャレウスを気遣うように傍に寄った。その行動に、三人の親しい関係が推察できた。

「されば、陛下に国を動かす為の人材を御用意致しましょう」
「どういう、ことですか？」

女王の信頼を得る為、ゼシャルドは自らの策略を語って聞かせた。

21話：ゼシャルドの依頼

条例が公布されてから四日、担当の衛士に率いられた無技人の清掃員が低民区の彼方あつち此方こつちで見られるようになった。今日この頃。初日は見物人が多過ぎてたどたどしい活動になったが、以降は特に混乱もなく順調に街の一風景いちざうけいとなり始めている。

今日の巡回と報告を終えて自室に戻って来た悠介は扉を開けるなり固まった。

「やあ」

「やあ、じゃないだろ……」

何故か部屋に居るレイフォルドに、ここ宮殿だぞ？ と呆れるやら驚くやらな表情を見せる。彼の今までの行動から、ブルガーデンの密偵らしいとはいえ、敵とは思えなく感じていた悠介は『今日は何のようだ』と用件を尋ねて扉を閉めた。

「あれ？ 侵入者発見で衛士を呼ばなくていいのかい？」

「衛士なら目の前にいるぞ。尋問だ、アンタは何者で何しに来た」

中々の余裕と貫禄を感じさせる悠介の対応に、レイフォルドは『なんだか成長したみたいだねえ』などと面白そうに言った。そして何処からともなく取り出した手紙を差し出す。差出人はゼシャルドの名義になっている。

「これは？」

「見てのとおり、ゼシャールド氏から君宛の手紙だよ」

色々聞きたい事があつた悠介だったが、まずは読んでみるかと封を開ける。

「ちなみに内容は、近況と事情と道具の製作依頼だよ」

「ネタバレすんな！」

ゼシャールドからの手紙にはブルガーデンでの近況と、向こうでもギアホークの英雄が噂になっていいる事などが書かれてある。要塞都市パウラではあの事件を切っ掛けに軍の再編で多少の混乱が起きているらしく、その隙を突いていよいよ行動に出るとあつた。

女王に接近したゼシャールドは、女王側に付いて中枢の人材などを引き込み『女王派勢力』を拡大していく事でイザップナー最高指導官という事実上のブルガーデン指導者を失墜させる計画を進めているそうだ。

差し当たっては、女王こそがブルガーデンの真の君主である事を強く印象付けるため為、国家の象徴である女王の権威を目に見える形にした道具を用意して欲しいとの依頼だつた。

ゼシャールドの計画では、女王の側近としてパウラに戻り、悠介の作った道具を女王から賜った神器であると宣伝しながら、その権威を持つて前ブルガーデン国王に忠誠を持つ官僚や、元々女王派であるといえる神民兵達を引きこんで勢力の拡大を目指す。

イザップナーは旧党派官僚からの批判を躲す為に権威と政策の決定権は女王に預けてある。これまで国内の中枢を抑えられて実権も握られている女王には味方となる勢力が無かつたので、何か申請されれば無条件で承諾するしかなかった。

が、女王派の勢力が増せばイザツプナーの政治的な圧力は減退し、権威と決定権を持つている以上、女王が『駄目だ』と言えば、彼等は従わざるを得ない。最悪、内戦に発展しかねないやり方でもあるが、万一事が起きればフォンクランクが女王派に加勢する。

そうしてブルガーデン国内で絶対的な発言力を持った女王と良好な関係を築くことで、フォンクランクとブルガーデン両国は平和的な付き合い方が出来るようになるというわけだ。

「ふーん……もし事が起きても、フォンクランク側は痛くも痒くもないってわけか」

「まあ、対岸の火事だからねえ。火つけるのは僕らだけだ」

「……ん？ 『僕ら』で……」

「あれ？ もう気付いてるかと思ったんだけどなあ。僕って二重^{ダブル}スパイ密偵なんだよね」

フォンクランクに送り込まれたブルガーデンの密偵、という立場をブルガーデンに持つ、フォンクランクからブルガーデンに送り込まれた密偵。悠介も薄々そうじゃないかという気がしていたので、種明かしに口をついて出た言葉は『やっぱりな』だった。

仕官を勧めたのもそれで納得出来ると、悠介は軽く溜め息を吐く。

「事情は分かったよ、偽神器は何かかしてみる」

「よろしくねー、僕はエスヴォブス王にも報告に行ってくるから。」

「あ、僕の事は他の人には内緒だからねー」

それじゃ、とレイフォルドは片手を振って部屋を後にする。普通に歩いて去って行く姿が、悠介には妙に新鮮に感じられた。

「しかし……ついことは、レイフォードを通して俺の能力の事は先生に伝わってるんだな」

敵陣の真っ只中で事実上の最高権力者相手に対抗する勢力を造り上げる。とんでもなく危険で大変な役割だという事は悠介にも理解できた。女王の側近という立場と肩書きは、向こうの実情を聞く限りあまり身を守る役には立たなさそうだ。

ゼシャルドもそういつた危険な仕事や修羅場は潜ってきているであろうが、活動を始めれば常に暗殺などの危険に曝される。女王の勢力が拡大して味方が増えるまでは、要塞都市内では孤軍奮闘する事になるのだろう。

「だとしたら、俺の作る偽神器の性能でサポートするしかないわけか」

これは責任重大だと、悠介は神器の構想を練り始めるのだった。

要塞都市パウラの中核施設、議会議堂。その一室で、イザップナー最高指導官は自らの片腕ともいえる部下の男と今回の事態について話し合っていた。ゼシャルド神技指導官が女王リシャレウスに単独で謁見した事だ。

「完全に隙を突かれたな、女王の暗殺目的で行ってくれるなら歓迎したい所だが……」

「恐らく、女王陛下に取り入って我々に対抗する勢力の立ち上げを模索していると考えられます」

何ら本音を繕う事無く言い放つイザップナーとは対照的に、部下の男は言葉を選びつつゼシャルドの狙いを推察する。

「やはりあの砦が痛手だったな、些か時間を掛け過ぎた」

「ゼシャルド氏の指導手腕は確かなモノでしたから、惜しんでしまった事が悔やまれます」

本来ならば、もっと早い段階でゼシャルドを女王に謁見させ、同行させた暗殺者によって氏諸共リシャレウスを暗殺し、それを『密命を受けたゼシャルドによる女王暗殺』というフォンクランクの陰謀として発表する計画シナリオだった。

陳腐な方法であるとは本人達も自覚していたが、フォンクランクへの挑発と国民の怒りを扇動する事で開戦の機運を高め、開戦すれば真つ先に女王派を『甲い合戦だ』と煽って前線に送り出す。彼等は勇敢に戦い、散るだろう。

後は国内に残る数を減らした女王派を取り込み、済し崩し的に王家の権威も手に入れる。ゼシャルドを始めフォンクランクの官僚引き抜きも、常磐のブルガーデン王朝を築く下準備の一環でしかなかったのだが、ここに来ていきなり躓いた格好だ。

「内に毒を取り込んでしまったか……女王派の勢力が増すことは、そのまま内戦に繋がりがねん」

「その場合、フォンクランクが女王派に加勢すると考えられます」

「！……っ 奴め！ それを狙いかっ」

「既に此方側こちらの人間には目星を付けられているでしょう」

女王に対する国民の人気は高い。各精鋭団や中枢官僚の殆どは身分優遇などの利権で此方側の派閥に組しているが、神民兵や中枢から遠ざけてある旧王党派官僚達は女王が動く素振りを見せたなら、喜んで女王派に付くだろう。

「何か手を打っておかねば……」

「ゼシャルド氏に近しい者で首輪を付けるのに丁度良い人材がいまず、取り込むなら早いうちが良いかと」

「よし許可する、それで行け」

「では、水の団の団員枠を一つ、用意して頂けますか」

部下の男はイザップナーの用意した書類を受け取ると、一礼して執務室を後にした。

「ん〜」

夜遅く、悠介は自室でありでもないこーでもないと唸っていた。ゼシャルドから依頼された神器は、性能に関しては何も指定はされていないモノの、相当なモノでなければ『神器』としての『格』も表せないであろうし、ゼシャルドの身を守る事も出来ない。

自分が着ている隊服のように複数用意すれば、一つ一つの性能はイマイチでも合わせる事でかなりの効果を発揮する。が

「ただの服じゃインパクトに欠けるよなあ……なにかこう、一つの装備品で全て事足りる、みたいなものとか……」

独り言を呟きながら唸っている所へ、扉をノックする音が響く。またヴォレットがララの実に味付けでもねだりに来たかと、悠介はベッドから身体を起した。ヴォレットは時々夜中にやって来てはお菓子やら味を変えたお茶やらを楽しんで帰っていく。

『そういえば、暫らくスンに甘味の実を食わしてやってないな』

甘味カスタマイズの実は悠介でなくては作る事が出来ないの、ゼシャルドの家に作り置きしておいた実も、もう無くなっている筈だ。まだルフクの村に帰省する事は出来ないが、実を送る事ぐらゐなら誰かに配達を頼めば良い。

「こんど手紙でも書くか　って、アンタか……」

「やあ、こんばんわ」

扉を開けると、レイフォルドが立っていた。

「はかどつてないみたいだねえ」

「ああ、ちよつと材料がな」

テーブルの上や床に散らばる神器候補の数々を見て察するレイフォルドに、悠介はカスタマイズ・クリエート能力の問題点を挙げた。形や見栄えはどうとでもなるが、その材質によって付与できる効果に大きく差が出てしまうのだ。

部屋に散らばる神器候補は晶貨を材料に試作したモノだが、今ひとつイメージ通りのモノが出来なくて行き詰っている。

「これでも水技に特化させりゃあ、かなりの効果が期待できるとは思うんだけど、それだけじゃなあ」

もし神器を奪われるような事があれば、とんでもない力を敵方に与えてしまう事になる。よって複数作るという選択も避けたいし、何よりもゼンザールドの身の安全を優先したかった。その上で女王の権威を具現化したような効果が欲しい。

晶貨の腕輪を指でくるくる回しながら片腕を組む悠介に、レイフヨルドはニツコリ笑って懐から包みを取り出す。

「そんな君にエスヴォブス王からプレゼントを預かってきたよ」
「王様から？　なんだこれ……重いな」

受け取った包みを開くと、金属の塊りが出て来た。白金の重金属。カスタマイズメニューで調べると、シンハの大剣とよく似た材質の金属だった。なんでも、王族以外立ち入り禁止の宝物庫に昔から保管されていたかなり古い時代のモノらしい。

「へへ、確かにこれなら良い物が作れそうだ」

「じゃあ、明日の夜にでもまた来るよ」

「あ、ちよつと待ってくれ、一つ頼みたい事があるんだけど」

悠介は神器候補の一つだった晶貨の指輪を拾って手早く『風技の指輪』に作り変えると、これを報酬にルフクの村まで手紙とララの実の配達を依頼した。まさか悠介に仕事を依頼されるとは思わなかったレイフヨルドは、珍しく驚いた表情を見せるのだった。

サンクアディエツトからルフクの村まで続く夜の街道を、衛士隊馬車の高速走行を超える速度で疾走する人影。託された手紙とララの実を背負い、報酬に貰った『風技の指輪』の効果を確かめるように駆け抜ける。

付与系風技を極めているレイフォルドはそのままでも、高速走行中の衛士隊馬車と並走する程の速さで駆けることが出来るのだが、指輪の効果で更に増した速度は、彼に初めてスピードの恐怖感を覚えさせた。

それでも速度を落とさず走り続けるのは、どこまで速くなれるのかという彼の好奇心が勝ったからだ。

『殆ど片手間で作った指輪でこの効果……とんでもないね、ユースケという存在は』

使える手駒と判明すれば直ちに使ってみせる柔軟さ。皆での機転や一般衛士達を懐柔する手際、使用人達の人気からも度量の深さが窺える。姫とその側近とも良好な関係を築き、姫の婚約者候補でもある高名なヴォーアス家の嫡男とは親しい友人関係にある。

『なるほど、何れ世界を動かす　か……』

概ね、価値観の違いと世間知らずを軸とした行動を深読みするという、よくある勘違いの類でもあった。

翌早朝、何時ものように起きだしてバナナの家に向かおうとしたスンは、家の玄関にララの実が入った袋と手紙が添えられているのを発見した。手紙を読み、袋を抱えて運びながらスンはクスリと笑みをこぼす。

「ユースケさん……結構マメな人」

スンの好感度がUPした。

22話・収穫祭（前書き）

ちよつと妙な表現が出てきます^^；

22話：収穫祭

「こんばんはー、ユースケ君」

「ああ、来たか」

前日の言葉通りやって来たレイフォルドに、悠介は出来上がった『シャルナーの神器』を渡す。レースの様な装飾が組み合わさった白金の輪、いわゆる額冠^{サークレット}だ。付与してある特殊効果は材質の良さもあつてか、相当なモノになっている。

- ・ 水技増幅効果
- ・ 体力増幅効果
- ・ 体力回復効果
- ・ 治癒効果
- ・ 解毒効果
- ・ 沈静効果
- ・ 神技耐性上昇効果
- ・ 物理耐性上昇効果
- ・ 移動速度上昇効果

食事と排泄を除けば、ほぼ二十四時間戦えるような生命維持に特化した仕様となっていた。ゼシャルルド程の高齢者でも、数時間の仮眠を取るだけで十分な気力の回復を期待出来る。体力などは言わずもがな、休まなくても良いことが最大の武器となる。

「なるほど、これならずと付けっぱなしでいられるね」
「指輪とか腕輪だと付与出来る数と効果がイマイチ上がらない感じだったんでな」

この手の補助効果装備ならサークレット辺りがゲームでも定番だったので、試してみたらビンゴだったと、悠介はレイフォルドには分からないであろう部分を端折りながら説明した。

「それから……これは効果があるかどうか分からないんだけど」

一応、常に身に付けておくよう伝えておいて欲しいと言って指輪を一つ渡す。

「これもあの金属で出来てるんだね、効果があるかどうか分からないって？」

「まあ、ちよつと特殊過ぎてな、試す訳にも行かないし」

御守りみたいなものだと言って、悠介は詳しい説明を避けた。実際に効果を得られるか否か分からないそれは、ゲームなどではよくあるポピュラーな道具としての特殊効果が付与されている。悠介の脳内命名では『身代わりの指輪』となっていた。

「それじゃ、確かに受け取ったよ。あと、荷物と手紙はしっかりと届けておいたからね」

レイフォルドはそう言って『神器』を懐に仕舞うと、早速ブルガードンの第一首都コフタを目指して宮殿を後にする。一仕事終えた悠介は息を吐いてベッドに転がった。今日はシャルナーの風月の十六日目、もう直ぐ土の暦に入る。

「ふう……こつちはもう直ぐ休暇か、神器あれが先生に届くのは収穫祭の前後くらいかな」

国によって期間はまちまちだが、ザッルナーの火月の一日目から三日目までは収穫祭が行われる。悠介は今月の十九日から来月の五日まで休暇に入るので、それまでに衛士隊の馬車を借りて馬用の装備を整え、村に持って帰る御土産などを買っておく予定だ。

ゼシャルドの動向が気になるので村に帰ってもあまりノンビリ過ごせるとは思えないが、そのゼシャルドから頼まれているスンの事をほったらかしにするつもりはない。何か服でも買って帰ろうかと、悠介は御土産の内容について思案するのだった。

パウラの中樞施設、議会議堂。その兵舎区画の一室で、プラウシヤは自分に与えられたこの個室を見渡しながら、複雑な心境を持って余っていた。精鋭団の規定年齢に達していないプラウシヤは、特別処置として水の団暫定団員として登録された。彼女がこの議会議堂兵舎区画に住めるようにする為の処置である。

『ほんとに、これで良かったのかしら……』

プラウシヤは先日、イザツプナー最高指導官の腹心とも言われる『火の団』の団長、ヴォーメスト団長と交した密約の事を考える。ゼシャルド神技指導官の傍に付き、その動きを探って報告する。水の団入団と、姉の仇に関する情報と引き換えに。

君が、プラウシャ君かな？

え、はい、はい、そうです。

指導官がコフタに出掛けてしまっている為、家で自主学习をしている所へ突然たずねて来た中枢幹部。一体何事かと驚き、慌てて応対するプラウシャに、ヴォーメスト団長は極秘の任務を依頼したいと言つて、水の団入団資格書を差し出した。

「指導官を探るって……どういふ事ですか？」

「ゼシャールド氏は、どうも我々を偽っている可能性がある」

「それって、フォンクラנקの密偵とか……」

「うむ、端的に言えばそうなる」

ヴォーメスト団長はゼシャールド指導官の行動に不審な点が多いと指摘し、今回パウラ中枢本部への届出も無く、独断で女王陛下に謁見を申し込んだ事で、その疑いが強まったのだと説明する。

「女王陛下が、無技を特別扱いしている事は知っているね？」

「はい、はい……、コフタの街で見た事はありますから」

無技を人と同じ様に扱う、パウラでは考えられない光景がコフタでは常識の風景として見受けられる。それは女王陛下の一存による政策だと聞かされていた。コフタの街は女王陛下が独自の統治を行っているのだと。

「女王陛下は……随分以前から、心を病んでおられるのだ」

「え……」

中枢幹部が女王陛下に対して不敬にあたるような言葉を口にした事に、プラウシヤは驚きの声を漏らす。ヴォーメストは痛ましやといった沈痛な面持ちで、コフタの街の現状と女王陛下ご乱心の経緯いきざつを語った。

リシャレウス様は父王を亡くされた悲しみから少しずつお心を害されていき、前国王が戯れで行っていた無技の育成を『父王の理想である』と信じて無技の保護を行い、国の運営を後見人だったイザップナー殿に任せると、自身は神殿に引き籠もってしまった。

「ゼシャルド氏が、無技の村に住んでいたという話は聞いているかね？」

「はい……以前、誰かの飼った無技の怪我を治癒している所をお見掛けして、その時に聞きました」

「うむ、それらの行為は訓練の成果を試していたのだろう」

「……訓練、ですか？」

ゼシャルド氏は無技に対して人と同じ様に接し、大切に扱って見せる事で女王陛下の関心を惹こうと考え、その為に無技の村で暮らすという訓練を行っていたのだとヴォーメストは説明する。

「恐らく、氏は女王陛下から何らかの立場を賜り、我々を混乱に陥れようと画策してくるに違いない」

「ま、待ってください！ そんな大変なお話、私には……」

「……君のお姉さんの事だが、砦の事件は実に残念な出来事だった」
「！……っ」

国家の裏事情に関わるような話を聞かされて混乱するプラウシャに、ヴォーメスト団長は数日前、戦死として処理された彼女の姉を話題に出した。ビクリとプラウシャの細い肩が揺れる様子を見定め、彼女を落とす為の”餌”を使う。

「ギアホークの英雄と噂されるフォンクランクの精鋭衛士だがどうやらゼシャールド氏と深い繋がりがあるらしいのだ」

「指導官と……」

「君のお姉さんは伝達系風技の使い手だったね、風の団での活躍は聞いていた」

「……はい」

動揺がありありと見て取れるプラウシャの心を揺さぶり、理由を作ってやる事で行動を促がす。返還された風の団団員達の遺体は、何れも身体の一部が欠損していた。ヴォーメストは事実には僅かな推察を入れて想像力を刺激する事で、彼女の心を更に決る。

悪しき因習、等民制を布くフォンクランクでは、風技の民は不当な神格判定で低い身分に貶められている。

「戦う力を持たない風技の女性が、どのような扱いを受けたか……想像に難くない」

「……」

「我々の手の者は既に目星を付けられ、遠くから見張る事しか出来ないのだ。だが、君は生徒として氏に見込まれている」

「わ、私はそんな……」

姉の事を想っている所へ急に話を戻され、色々な感情も入り混じ

ったプラウシヤは混乱に益々拍車が掛かった。だが、その思考は一方方向へと誘導される。ゼシャルルド神技指導官とギアホークの英雄との繋がり。姉の仇。

「私……」

水の団に所属する君が向こう側に付いているように振舞えば、彼等も君を利用しようとするだろう。

君はただ彼等の集まりに参加して、活動の報告を宿舎に戻った時に伝えてくれればいい。

ヴォーメストはそう言って入団資格書と中枢施設への入場許可書を置いていった。そして今、プラウシヤは中枢施設内の兵舎区画で、各精鋭団の一般団員に与えられる個室を見渡していた。

「お姉ちゃんの仇を知って、私……どうするんだろう」

本当にこれで良かったのだろうか、プラウシヤはもう一度呟いて、自室の扉を閉めた。

シャルナーの風月の十九日目

休暇に入った悠介は早朝から宮殿衛士隊の控え室を訪れた。無駄に豪華な宮殿衛士隊控え室には、高貴な家柄を持つエリート衛士達が集まっている。衛士の控え室というよりも紳士の社交場といった

秀囲気だ。

『このままガラ悪くしたら、下の控え室と変わらんよなあ』

前日までに買っておいタルフク村への御土産を抱えている悠介は、微妙に場違いな格好なのだが、闇神隊というれっきとした精鋭宮殿衛士隊の隊長なので文句をいう者は誰もいない。

「お、いたいた。おーい、ヒヴォデイル」

「また君は……珍しくこつちに顔を出したかと思えば、随分と珍妙な格好で現われたものだねえ」

買い物袋を満載したオバサンのような格好の悠介を見て、頭を振りながら溜め息を吐いて見せるヒヴォデイル。そんな彼に、悠介は握っていた指輪をピンツと親指で弾いて投げ渡した。何か飛んできたのでヒヴォデイルは思わずキャッチする。顔面で。

「あいたつ！ いきなり何をするんだ　ってこれは……もしやつ

「昨日仕上がった炎技の指輪だ。本当は各隊の副隊長から渡すつもりだったんだけどな、お前があんまりゴネるんで先に渡しとく」

控え室にいた各隊の副隊長達から鋭い視線が向けられる。特に炎神隊の副隊長辺りから。

「あつはつはつ　それは儲けた気分だよ、君と積極的に交流を深めた甲斐があつたってモノだねえ！」

ヒヴォデイルはどこ吹く風といった様子でそれら視線の圧力を受け流すと、意気揚々と指輪を填めながら効果を試しに訓練場を目指して控え室を後にした。内心は冷や汗だらだらなのだが、これまで

培ってきた貴族然とした態度で繕いきったのだった。

宮殿の馬車乗り場に降りて来た悠介は、部下達が街に出ようとしている所に出くわした。闇神隊の休暇という事で、彼等にも特別休暇が与えられている。イフヨカも無技人街の家族の元に帰っているようだ。

「おはようございます隊長、今から村に行かれるのですか？」

「荷物の積み込み、手伝いやすぜ」

「ああ、悪いなヴォーマル。エイシャも帰省組か？」

エイシャとシャイドは中民区の実家で休暇を過ごす予定らしい。ヴォーマルは休暇中する事がないので、一応出頭して宮殿でうだうだしているつもりなのだそうだ。フォンケは酒場巡りで知り合った街唱まらった（所謂娼婦の事）の所に入り浸っている。

「そついや、姫様はゴネなかつたんですかい？」

「ヴォレットか？ んー、意外に物分りが良かったというか、気を回されたというか……」

休暇中はルフク村に帰ると話した時、ヴォレットは収穫祭で悠介を連れて御忍びに行きたがっていたのだが、村でスンと過ごす事を聞くと『それなら仕方ないか』と理解を見せた。ゼシャルドの事で気落ちしているのはスンも同じだろうと気遣うヴォレットに、悠介は内心で謝りながら彼女の優しさを垣間見た。

そんなこんなで纏まった休暇を得た悠介は、凡そ二十九日ぶりにルフクの村へと出発したのだった。

カスタマイズで弄った衛士隊の馬車を、体力回復効果付きの馬装具を付けた疲れ知らずの馬が引く。街を出発した悠介がルフクの村に到着したのは、昼下がりを少し過ぎようかという頃だった。以前、ゼシャルドと共に街へ出た時と同じくらいのペースだ。

少し懐かしさを感じながら防護溝を渡す丸太の橋を越えて村に入る。村の仕事も一段落する時間、知った顔の村人達が悠介の姿を見て顔を綻ばせる。悠介の仕官に付いてきたオマケで優遇処置が取られているルフクの村には、家畜や肥料、農作物の種類などが提供されており、以前はあまり見られなかった畑の数が増えていた。

ゼシャルドの家の前に馬車を止めると、家の扉が開いてスンが姿を見せる。今日、村に戻る事はレイフォルドに届けて貰った手紙に認めておいた。村を出た日の朝にも見た、以前と変わらない控え目な笑みを向けるスンに、悠介も笑顔で返す。

馬車に歩み寄って来るスンに続いて、村人らしき若い男性が扉から現われた。悠介とはあまり面識のない相手だった。

「おかえりなさい、ユースケさん」

「ただいま、スン」

馬車を降りた悠介は、スンと挨拶を交わしながら「誰？」と後ろに立つ若者の事を訊ねる。スンの話によれば小さい頃の幼馴染らしく、最近まで疎遠になっていた為に悠介との面識もなかったのだそ

うだ。

ゼシャールドに続いて悠介まで村から居なくなり、一人になった
スンを心配して最近よく家に訪ねて来ているらしい。

「こんにちは、オレの名はタリスっていうんだ」

「悠介だ、よろしくな」

軽く挨拶を交わす。髪は短めで背は悠介と同じくらい、中々快活
そうだがフヨンケのような軽い雰囲気を持つ、ごく普通の若者とい
った印象を持った。

その後、荷物を降ろして家に運び終えた頃には、すっかり夕方に
なっていた。荷物運びを手伝ってくれたタリスは『それじゃあまた
明日』と、スんに声を掛けて帰って行った。

「ユースケ！ 戻ってたのかい」

「ハバナさん、ただいまー」

丁度狩猟から帰って来たハバナが、馬を厩舎に運んでいた悠介を
見つけて声を掛けた。よく戻ったねーと背中をバンバン叩かれて咽
る悠介。相変わらず見た目細いのに凄い力だなあと、先日宮殿で聞
いた話を思い出し『無技の民はファイター系』を実感する。

「ん？ なんだい、あんた英雄になったとかって騒がれてるみた
いけど、ちっとも肉付いた感じしないね？」

「そりゃまあ、肉体労働とかはあんましてないし」

身体も鍛えなよ？ と脇腹をふにふにしてくるハバナを躲しつ
つ、悠介は御土産に買って来た弓の弦などを渡すのだった。

「いや、バハナさんも相変わらず元気だな」

「うふふつ ユースケさんが帰って来るって聞いてから、それなら料理を作って迎えてやるうって張り切ってましたよ？」

家に戻って一息付きながら、脇腹ふにふにされたゼーとソファーで寛ぐ悠介に、スンはお茶を出しながらここ数日の出来事を語って聞かせた。収穫祭では村でも皆で料理を持ち寄って外で食事を取るような催しがある。

「今年は賑やかな祭りになりそうです」

「そりゃ楽しみだ」

お土産の荷物を選び分けていたスンは、食器類とは別の良質な布に包まれた街服に気が付いた。宮殿で着た事のあるシンプルなドレス風のワンピースと、もう少しデザインを大人しくした上下服にベストタイプの上着。村で畑仕事をする時にも着られそうだ。

「わぁ……この服」

「あーそれな、好みが分からなかったから俺のイメージで適当に選んでみたんだけど」

「ありがとうございます……嬉しいです」

「そ、そっか」

少し頬を染めながら心から嬉しそうに微笑むスんに、悠介は買って正解だったようだと言わずに少々ドギマギしながら頷いた。

翌日

各国の街や村では明日から始まる収穫祭の準備が進められ、ルフクの村でも朝から村人達が祭りの下準備を始めていた。村の広場に油木の井桁いげたが生まれ、キャンプファイアのような会場が作られる。料理を乗せる為の長いテーブルなども並べられてゆく。

悠介も手伝うつもりでいたのだが『折角の休暇なのだから休んでいるように』と言われて仕方なく、村の散策に増えた畑や家畜などを見て周っていた。実際の所、手伝おうにも段取りがサツパリ分らないので手伝える事も殆どないのだ。

熟年の既婚女性達は家で料理の下拵したしじらえを進め、若い女達は広場で飾り付けをしている。悠介がぶらぶらと広場を通り掛かると、スンを手伝うタリスの姿が見えた。仲が良いのかなあ等と思いつつ、ぼーっとしている悠介にバハナが声を掛ける。

「暇そうだね、ユースケ」

「まあね」

手伝わせてくれないんだよと悠介が肩を竦めて見せると、バハナはキョロキョロと周囲を見渡して悠介を建物の影へと誘導する。『なんだ、なんだ』と背中を押されて納屋の物陰に連行された悠介は、身体を密着させてきたバハナに『すわっ未亡人の誘惑か！』などと、おばかな眩きをして額をぺチリとやられた。

「ばか言っつてんじゃないよ、この子は。 スンの事だよ」

「スン？」

「先生やあんたが居なくなってから、タリスがスンの事をずっと狙ってるんだよ」

「あの二人って、幼馴染なんだろう？」

バハナの話によると、スンの幼馴染といっても、タリスには今まで殆どスンとの交流はなかった。ゼシャルドが居なくなり、悠介も仕官してほぼ一人暮らしになったスンをお手頃だと狙っているのだという。

「しつかり守ってやないと、スンを獲られちゃうよ？」

「いや、獲られるも何も……人の恋路を邪魔するのはなあ」

スンが迷惑そうにしているようであったなら当然、出張って行って睨みの一つも効かせるところだが、これまで疎遠であったとしても、今の二人にトラブルらしい兆しも見えない以上、自分がどうこう言う問題では無いのでは？ と戸惑う悠介。

バハナは呆れたように頭を振ると、タリスはスンに対して恋心がある訳ではなく、村娘達の中でも特に美しく育ったスンをモノにしたがっているだけだと力説する。何故にそこまで気にするのかと訊ねる悠介に、バハナは声を潜めて眉も潜めて耳打ちした。

「タリスって子はね、仲間内でも特に移り気で、モノにした女の子の数を自慢してるような誑たらしなんだよっ」

なんとバハナ自身も口説かれた事があるそうだ。その時は子供のやんちゃと笑い流すつもりだったのだが、口説き落としが無理と見るや実力行使に出て来たので驚いたらしい。バハナも実力行使で叩

きのめしたそうだが。

『いいじゃないですか、どうせ毎晩寂しがつてるんでしょ？』

『よく言った、いい度胸だ』

ベキッ

ぎゃ ああああ……

「まあ、あたしに齒あ折られてからは無茶は控えてるみたいけど」
「こ、こええっすね」

かなり出血して引いたと笑うバハナに悠介も引いた。咳払いして誤魔化したバハナは、とにかくそういう輩なので目を離さないほうが良いと忠告する。収穫祭には恋人探しなどの側面もあるので、村の若い者は皆お相手探しの事で浮き立っている。

祭りの興に乗じてまた強引な手段に出ないとも限らないのだ。

「うーん、そこまで言われるとなんか心配になってきた。一応手は打っておくよ」

「”ずっと傍にいてやる”くらい聞きたかったんだけどねえ」

お昼を過ぎる頃には祭りの準備も一段落し、村は一時の静けさに包まれる。祭りは日が落ちてからなので、村人達は夜に備えて休んでおこうと今から睡眠を取っているのだ。バハナと別れてから家で小物作りをしていた悠介は、スンが帰って来たので部屋を出た。

「スン」

「あら？ ユースケさん、家に居たんですか？」

広場でもちらっと見掛けていたので、てっきり村の散策をしていると思っていたスンはそう言って小首を傾げる。その仕草に和みつつ、悠介は今さっきまで作っていた小物を差し出した。

晶貨をカスタマイズして作った透明色の指輪。少々くすんでいるので白っぽい。

「え、え？ あの、これ……」

「バハナさんにタリスの事でさんざ脅かされてさ、一応御守りって意味で持っていてくれ」

それを聞いたスンは合点がいったというような困り笑いの表情を見せながら指輪を受け取り、手の中のそれをじっと見つめてから悠介の顔もじっと見つめる。上目遣いの視線に背中やら耳の裏やらが痒くなった悠介は『なにかな？』と首を傾けた。

「いえ……ありがとうございます、心配してくれて」

スンはそう言って微笑みながら、白い指輪を指に填めた。

夜

太陽が沈んでから始まった収穫祭は、月が最も近くなる深夜が祭り本番となる。燃え盛る井桁の炎を照明代わりに、ぐるりと囲むテーブル上の実酒や料理を飲み食いしながら、朝まで皆で騒ぐのだ。

笛や太鼓のような楽器もあり、陽気な音楽に合わせて踊る者達と
囃し立てる者達。ひたすら飲んでいる者、ひたすら食べている者。
若者は男女に別れた数人単位のグループを形成し、彼にしようか彼
女がいいかと膝を付き合わせてヒソヒソ話。

お祭り独特の雑然としていながら連帯感を感じさせる楽しい気持ち。
高揚した風を肌に覚える。

「ユースケさんっ 衛士になって活躍したって聞きました！」

「いや、偶々そうなたってただけでね……」

「お話聞かせて下さい！ ユースケさんっ」

「その、そんな楽しいものでもないから……」

料理をパクついていた悠介は、村の娘達に囲まれて質問責めと誘
惑攻撃にさらされていた。普段は純朴で大人しそうな村娘達なのだ
が、少しお酒も入った深夜のお祭り収穫祭では、彼女達もちょっぴ
り大胆になるのだとばかりにお目当ての男性に誘いを掛ける。

ちなみに、『風の暦』の舞踏祭ではもっと切実で露骨な事になる
のだが、それはまた先の話である。

悠介が防戦一方で追い込まれている最中、スンはそれを肴に実酒
を飲んでいるバハナとお喋りをしていた。『あんたも行つといでよ
ー』と促がすバハナに『わたしはいつでもお話できますから』と、
余裕とも取られかねない台詞で躲して相手を務めるスン。

「バハナ、肉が足りないってよお」

「ありゃ？ 流石に今年はいいい肉だったんで、みんな食が進んだか
ねえ」

肉の追加を頼まれたバハナは、スンに『ちよつと行って来るよ』

とウインクをして席を立った。バナナの背中が人込みに消えた頃を見計らって、スンの隣に立つタリス。悠介は相変わらず村娘達に包囲されている。しかも増援まで向かっているようだ。

「たーすーけーてー」

「ははっ 彼は凄い人気だな」

「うん、そうだね」

微笑ましげにその攻防を眺めているスンの横顔を覗き見たタリスは、実酒のカップをテーブルに置いて席を立ちながらスんに頼みごとを持ち掛けた。

「スン、今から井戸で冷やしている果物を取りに行くんだけど、手伝ってくれるかな？」

「ん、いいわよ」

タリスと離れたって井戸に向かうスンは、一度広場を振り返り、もみくちやにされている悠介を見てクスリと笑みを浮かべた。

井戸は家屋が建ち並ぶ通りから少し離れた場所にある。お祭りの日はこの辺りまで篝火が焚かれているので、十分足元を照らし出して来ていた。月明かりも深夜が迫るにつれて明るさを増していく。

それでも、少し脇道にそれると地面も見えない程の真つ暗闇に包まれる。井戸までの道沿いには幾つか農具置き場などの小屋が並んでおり、油木の枝に灯る小さな明かりが揺れる納屋の中で、いきなり引っ張り込まれたスンは藁束の上に押し倒されていた。

「スン……」

「ちよ、ちよつとタリス！ なにするのっ」

「分かってるんだろ？ ここまでついて来といて、惚けるのはやめようよ」

「ち、違つわつ わたし、そんなつもりない！」

藁束の上でわたわたしているスンに覆いかぶさったタリスは、スンの腰に手を回して抱き寄せると、髪に唇を這わして耳元にキスを落とそうとする。首を竦めたスンは身を擦って逃れようとタリスの胸板を押し返した。

「ぐは……」

すると何処か鳩尾の良い所にも入ったらしく、肺から空気を押し出すように息を吐きつつ、タリスの身体が引き離された。思いの外抵抗が強いと思ったタリスは、スンの細腕を捕まえると抵抗できないように押さえつけようとした。

このまま唇を奪って虜にし、思考を麻痺させてやれば良いと顔を寄せようとしたが、押さえつけようとした腕が押し戻される。

「う~~~~っ」

「な、なんだよこいつ……」

なんと、タリスとスンの力は拮抗していた。互角に見えた二人の鏝迫り合いは、下から徐々に押し戻すスンの力の方が勝っているようだ。スンの細腕からは考えられないような怪力に、焦ったタリスは中腰になって力を加えようと身体を起こす。その瞬間

「っー」

「ふっっ」

不用意に弱点を晒して急所への一撃を貰ったタリスは、泡を吹いて昏倒した。悠介がスンに渡した指輪は『力の指輪』。装備者の力を大きく底上げるモノだ。少し乱された服を整えて納屋を後にしたスンは、広場に戻って役員のおじさま達に事情を話した。

「まったあのっ大バカヤロウは……!!」

「後はワツシらがやっておくから、スンちゃんは心配せんでええ」

ちよつとヤキ入れてやらなきゃいかんと、腕まくりをしながら拳骨を固めたおじさん達が納屋へと向かう。それを見送ったスンは、へにゃへにゃと広場の椅子に座り込んだ。そして悠介に貰った御守りの指輪を胸元で撫でる。

送り主は未だ包囲網から抜け出せず、そろそろ殲滅されかかっていた。

「……もう、ユースケさんの、バカ」

スンは小さく呟くと、指輪に囁き掛けるようにキスをした。

ザッルナーの火月の一日目。月が最も近付き、収穫祭の本番が始まる刻。ブルガーデン国内全ての民に向けて、女王リシャレウスから重大発表がなされた。

ゼシヤールド神技指導官を女王直属の側近として迎える。以後、
パウラでの活動を通じて女王への忠誠を示さん

祭り始めに行われたこの発表によって、ブルガーデンの民は大きく
反応を二分させた。

23話：水鏡

レイフォルドによって届けられた悠介作の反則サークレットを女王陛下から賜りし神器と偽り、収穫祭の始めに行われた重大発表に合わせてパウラに戻ったゼシャルドは、女王直属の活動組織『水鏡^{かがみ}』の設立を宣言して人員の募集を行った。

イザップナー最高指導官は概ね予想していた通りの事態に旧王党派官僚達を緊急招集、『フォンクランクの策略に乗せられてはならない』と、敢えて陰謀論を掲げる事で『水鏡』との接触を牽制した。

しかし、イザップナーの政策や女王に対する見解に不満を持っていた旧王党派達はそれらの警告を無視、次々と『水鏡』への加入を表明しては幹部待遇で迎えられた。パウラの中樞から遠ざけられていた彼等も、元は国を動かす官僚として働いていたのだ。

彼等は現役時代の経験と能力を活かし、発足して間もない『水鏡』の、組織としての体制を整えていく。同じく、女王の支持者が多い神民兵からも所属を希望する申し出が殺到したのだった。

精鋭団を構成する団員の殆どはイザップナーの派閥に絡む者達なので、『水鏡』には懐疑的な反応が多く見られたが、それでも一部の者は前王への忠誠から女王側に付く意味で接触する動きを見せている。

収穫祭二日目の夜の時点で、『水鏡』に所属する官僚や神民兵な

ど組織の構成員は、一部の民衆や精鋭団も含めてブルガーデン全体の四分の一程まで拡大していた。祭り明けからもまだまだ増えそうな勢いが感じられた。

「王党派はほぼ全員の所属を確認しました、精鋭団の一部にも向こうに付こうとする素振りが見られます」

「ち……予想はしていたが、権威というものは厄介なものだな。奴等はどこを根城にするつもりだ？」

「恐らく、長城部分の空き部屋を使うと思われませぬ。構造上、侵入は難しくありませんが警備もし易いので……」

「攻め難くはないが隠密は無意味か。どちらにせよ、これで女王暗殺という選択肢は無くなつた」

今の段階で女王が暗殺されれば、イザップナー陣営を疑わない者は居ないだろう。同じ理由でゼシャルドの暗殺もリスクは高いが、こちらは組織内部の犯行を装えばどうにかなる。

現時点で早急に手を打たなければならぬ事は『水鏡』の勢力拡大を阻止する事だ。祭りの勢いに乗じた一過性のモノであれ、組織の力が政務を行えるまで伸びて女王の発言力が増せば、最悪、女王権限によって最高指導官の解任などという手段も取られかねない。

イザップナーにとって手痛いのは、ゼシャルドの活動を表立ってフォンクランクの陰謀だと糾弾出来ない事にあつた。

女王に関してはコフタの統治に見られる無技人の扱いにより、『女王はお心を害しておられる』説を密かに囁かれる程度でもまかりとおす事が出来たが、ゼシャルドに関してはフォンクランクの工作員だと指摘する事は出来ない。

ゼシャールドはブルガーデン側から勧誘して招き入れた人物なのだ。女王からの信頼を得て直属の側近という立場まで賜った人物を敵国の工作員であると糾弾する事は、『パウラの中樞はフォンクランクにしてやられました』と宣伝するようなものだ。抗議なぞみつともなくて出来よう筈もないという所である。従つて、あくまでも国内の内政問題として処理しなくてはならなかった。

「国境付近でフォンクランク側に動きがあつたという報告も入っております」

「エスヴォブスめ、狙つていやがるな……監視を強めるように伝えておけ」

イザップナーはここが正念場だと、長年掛けて下地を整えてきたブルガーデン王朝の実現を目指して政務に取り組むのだった。

収穫祭三日目の朝、早馬で伝令を務めたフォンケより非常招集の知らせを受け、悠介は急遽街に戻るべく準備を整えていた。

祭りの最終日という事もあって、多くの村人が見送りに集まっている。が、誰もが声を掛ける事を躊躇っていた。闇神隊の隊服を身に纏い、部下の衛士と帰路の打ち合わせをしている悠介の姿は、正に噂に聞く精鋭宮殿衛士、ギアホークの英雄であつたのだ。

「な、なんか別人みたいに見えるねえ」

バナナも珍しく気後れしているような言葉を呟く。そんな中、スンは打ち合わせを終えて馬車に乗り込もうとしている悠介に歩み寄ると、何時ぞやの宮殿でした時のように、そつと腕を握ってスツと離れた。『おやまあ』とバナナが目丸くする。

「いつてらつしゃい、ユースケさん。気をつけて下さいね」

「ああ、行って来ます。スン」

悠介は、スンのこれは何かのおまじないの類だろうと思っておく事にしたらしく、自然な動作で受け入れた。バナナにスンを宜しくと軽く頭を下げると、村人達にそれじゃあまたと手を振って馬車に乗り込む。

フォンケの乗ってきた早馬を村に預け、悠介達はサンクアディエツトを目指してルフクの村を出発した。

街までの道中はフォンケが風技による補佐を担当したので、通常体制の衛士隊馬車のように高速走行が可能となり、さらに馬車の走行性能もカスタマイズしてある為、通常の高速度以上の速度で街道を駆け抜けた。

「なんすかこれ、異常に速くなかったすか？」

「車体も多少弄ってあるからな」

予定よりも早く街に到着した悠介達は、二つの区画門を抜けてヴオルアンス宮殿に向かう。途中、神民衛士を乗せた数台の衛士隊馬車とすれ違った。馬車乗り場にも大勢の衛士達が整列しており、順

次乗車しては出発して行く。

「ユースケ！」

宮殿に着くなり満面の笑みを浮かべたヴォレットが飛びついて来たので、悠介は思わず抱き止めた。その光景に周囲が騒然とする中、悠介の首にぶら下がったヴォレットはそのまま齧り付きそうな勢いでゼシャルドの事を捲くし立てた。

「爺がやりおったぞ！ やはり爺はわらわ達の味方じゃ！」

ゼシャルドがブルガーデンで行動を起こした事に、やはりそういう目的で行ったのだ、裏切った訳ではないのだと嬉しそうにはしゃぐヴォレット。あまり驚かない悠介に「さては知っておったな？」と追求して見せるなど、ご機嫌な様子である。

「姫様、少し落ち着きなさい。……ユースケ殿、今回の非常招集による任務だが」

話が進まないのでクレイヴォルが任務の説明を行う事にしたようだ。ヴォレットを諫めるのは後回しにするらしい。ヴォレットをぶら下げて斜めになったまま、悠介は任務内容に耳を傾ける。

今回、ブルガーデンに発足した女王直属組織がパウラで急速に勢力を広げており、ブルガーデン国内で大きな政変の動きが予想される。この事態を受け、フォンクランクはブルガーデンとの国境付近に兵を配置して有事に備える事が決定した。

ギアホーク砦の跡地から少し離れた場所に建設を予定してる新たな砦を早急に設けて、そこに衛士団を駐留させる。ブルガーデンの

動向を観察し、事あらば直ぐにでも出撃できる体勢を維持するのだ。

建設予定地には既に先発隊が到着して陣地を確保しており、先程大量の資材を乗せた輸送部隊も作業員と共に出発した。使用人達と共に駐留する衛士達の第一陣も順次出発している。

「貴殿には明朝、衛士団と共に砦の建設予定地に赴き、そこで砦とその他、必要な施設の建設に尽力して貰いたい」
「りょーかい。明朝、砦の建設に向かいます」

闇神隊として二度目の砦建設任務を受けた悠介は短く復唱すると、明日に備えて砦のモデルデータ作りなどを為す為に自室へと向かう。ヴォレットをぶら下げたまま歩き去る後ろ姿を『いいんすかあれ？』とフヨンケが遠慮がちに指差した。

「姫様っ！」

「わははっ」

クレイヴォルは久し振りに眉間の皺を増やすのだった。

パウラの中枢施設、議会議堂。精鋭団の一般団員用宿舎がある兵舎区画の廊下を、水の団の制服を着たブラウシャが自室に向かって歩いていた。こちらに住まうに伴い、衣類などの荷物を前の部屋から運び込む引越し作業を一日掛けてどうにか終わらせ、団員が着用する制服も昨夜届いた。

後は『水鏡』の本部に向いて所属を申し出るといふ極秘任務の
第一歩を踏み出すだけだ。が、中々踏み出せないでいた。

「はあ……」

知らず溜め息を吐く。『水鏡』に所属する構成員は神民兵や一般
民達もどんだん数を増やしているらしい。早く組織に入り込んでゼ
シャルド指導官と接触しなくてはならないのだが、自分にそんな
大役が務まるのだろうかと思切りが付かないでいる。

明日行こう、今日はもう夜遅いので明日行こう、と決意の先延ば
しをしていたブラウシャは、廊下の先から歩いて来る赤髪の精鋭団
員らしき制服を着た若い男四人組に気付いて端に避けた。すると、
その四人組も軌道を変えてブラウシャの正面に移動する。

譲り合いのお見合いをしてしまったかなと顔を上げたブラウシャ
は、何時の間にか彼等に囲まれていた。

「なんだ？ こいつ、団員の制服着てるけど、まだ子供^{ガキ}じゃないの
か？」

「見ない顔だな……こんな子、水の団にいたか？」

「え……あの……？」

「お前、本当にこの者か？ 許可書を見せてみる」

どうやら不審人物に間違えられていると思ったブラウシャは慌て
て施設の入場許可書を出そうとしたが、初めて訪れた時に入り口で
示して以降使われる事が無かったので自室に置きっぱなしだった事
を思い出す。なので代わりに水の団暫定団員登録証を見せた。

「暫定団員だと？ 誰の名義だ、水の団団長か？」

「い、いえ……ヴォーメスト団長さんです……」

火の団団長の名前を出したプラウシヤに、彼等は顔を見合わせて『なんで火の団うちの団長が水の団に暫定団員を置けるんだ?』と不思議がる。理由もなく規定年齢にも達していない者を余所の団にねじ込む筈は無いと、彼等はプラウシヤを疑った。

「ほ、ほんとはです! ヴォーメストさ……団長さんに確かめて下さい」

「団長らは今忙しいんだ。入団を許可された理由を言え」

「そ、それはその……特別な任務で……」

極秘任務の事は口外できないので、プラウシヤはぼしよぼしよと曖昧に『任務の関係で』とだけ答えた。それを聞いた四人は目配せしあつと、おもむろに納得したような口調で雰囲気を和らげる。

「ああ、そういう事が」

「うちの団長殿がねえ……」

だが、和らいだと思つた追求の気配は、別方向に不穏な気配を増して行く。

「女は見かけによらねえな」

「まあ、団長が男色じゃなかったって事はハッキリした訳だ」

「……?」

キョトンとした表情で『何の話だろう?』と小首を傾げていたプラウシヤは、彼等の一人に突然背後から抱きつかれて狼狽する。更

に正面の一人が身体を寄せて来ると、なんとスカートの中に手を入れて来た。

流石に驚いて抵抗しようとするプラウシャだったが、両腕を左右の二人に抑えつけられて身動きが取れなくなってしまうた。

「な、なにするんですか！ やめてくださいっ！」

「俺たちも特別任務の裁定してやるよ」

「ここんとかバタバタしてて街唱も買えなくてさ」

「いやっ！ 放してっ 放してください！」

正面から組み付いていた男は、必死で逃れようと身を擦る彼女の大事な部分に指をあてがうと、耳元で威嚇するように囁く。

「騒ぐな、ナカを焼かれないか？」

「っ……っ！」

ビクリと身を震わし、息を呑んで凍りついたように固まるプラウシャ。静かになった彼女を『やつと大人しくなったか』とばかりに近くの部屋へ連れ込もうと引き摺っていく。

思わぬ事態に怯えながら、プラウシャの頭の中では姉から聞いていた精鋭団の話がぐるぐると渦巻いていた。姉の話では、中には『アレな奴』もいたが、精鋭団は規律正しくて紳士的で

『なんで？ なんで中枢本部の中でこんな事に……っ お姉ちゃん

……っ！』

プラウシャが姉に祈ったその時、廊下に聞き覚えのある声が響いた。

「貴様等、何をしている」

火の団団長にしてイザツプナー最高指導官の腹心でもあるヴォーメスト団長が、厳しい表情でカツカツと靴を鳴らしながら廊下を歩いて来る。プラウシヤは助けを求める視線を送ったが、まだ指を当てられている為、恐怖で声は出せなかった。

四人組はヴォーメスト団長の登場に顔を見合わせて戸惑ったが、直ぐに肩の力を抜いた軽い調子で団長と対峙する。

「いえ、ちよつと特別任務のおさらいを」

「可愛い後輩の教育くらいさせて下さいよ」

ニヤニヤ笑いを見せつつそんな台詞を吐いた男が、プラウシヤの制服のスカートをひらひらと持ち上げて見せた。カアと顔を赤らめるプラウシヤ。次の瞬間、スカートを持ち上げていた男の顔が、乾いた音と共にぶれて横面を見せた。

次々と四人組の頬を張ったヴォーメストはプラウシヤを背中に庇うと、不満気な表情を見せている彼等に落ち着いた声で語る。

「貴様等何か勘違いをしているようだがな、彼女はギアホーク砦で戦死した団員の……身内の者だ。姉だったそうだ」

「っ!」

「も、申し訳ありませんでした……」

プラウシヤの立場を聞かされた四人組は動揺した様子を見せる。落ち込んでいるようにも見える四人組に反省を促がし、ヴォーメストはプラウシヤを連れて彼女の部屋まで送った。

「すまない、私の監督不行き届きだ。二度とこのような事がないよ

う、私からよく言っておく」

「い、いえ……」

ブラウシャに謝罪したヴォーメストは、恐縮している彼女に先程の彼等の事情も少し語って聞かせる。彼等も親しい友人を一度に失い、喪に服す暇もなく戦力の再編で忙しく動き回って、やっと纏まり始めたと思つた矢先、ここに来てまた『水鏡』騒動で混乱が広まる現状に腐っているのだ、と。ブラウシャも街の混乱ぶりは見ているので、その事情には理解を示す。

「無理をさせてすまないが……」

「私、がんばります」

『水鏡』の勢いは危険な領域まで迫っているというヴォーメストに、ブラウシャは任務を遂行する決意を固めた。明日から『水鏡』を探る活動に従事する。

「今日はもう休みなさい」

ヴォーメストはそう言ってブラウシャの部屋を後にした。

宿舎などのある区画の地下には様々な娯楽施設が造られてあり、兵舎区画の地下にも遊技場や酒場が設けられている。ブラウシャの部屋を後にしたヴォーメストは地下の遊技場に下りて来た。そこでは先程の四人組が酒を酌み交わしている。

「団長ーさっき本気で殴ったでしょー」

「その方が真実味も増す」

「囿にそこまでする必要あるんですか？」

「囿だからこそだ、本命を活かす為にはしっかりした餌になってもらわねばならん」

殴られた頬を撫でながら愚痴っぽくこぼす部下達にフォローを入れて回るヴォーメスト。『演技は中々真に迫っていたぞ』などと煽ててやる。部下達も互いに、お前のあの顔は笑えたなどと思いついては笑いあっていた。

「これであの娘も動く筈だ、上手く相手の目を引き付けてくれれば、後は専門家が片をつける」

「で、誰を潜り込ませるんです？」

「水の団からベルーシャを使う」

「ああ、あの氷女ですか」

水の団は水神隊のような治療を専門にしている集団ではなく、どちらかと言えば神民兵の水技隊がそれにあたる。

精鋭団の水技使いには治療系と攻撃系が半々くらいの割合で所属しており、ベルーシャはその中でも幹部クラスの實力を持つ付与系水技の使い手である。差し出されたグラスに注がれる酒を一口含み、それを気付けに次の仕事へと向かうヴォーメスト。

「まあボ口を出さんようにな、あの娘の前ではしよぼくれている」

「へーいへい」

部下達の生返事を聞きながら、ヴォーメストは遊技場を後にした。

24話：デアノース砦

ゼシャルドが女王陛下から賜ったという『神器』の力が注目を浴び始めたのは、収穫祭も終わろうかという頃だった。

ザッルナーの火月の一日目に『水鏡』の設立を宣言してから、ゼシャルドは殆ど休む事無く活動を続けている。立場上、深夜にこっそりやって来る精鋭団団員なども居て、それこそ昼夜を問わず訪れる加入希望者達を捌いているのだ。

また、ゼシャルドの傍にいと彼自身の持つ神技の波動から神器の効果が伝わり、気持ちが悪く落ち着いたり、身体の調子がよくなって回復が早まったりするなど『神器』の力の一端をその身で感じる事が出来た。

尤も、それらの効果は想定外の副次的なモノだったのだが、ゼシャルドがこれを神器の力であると宣伝した事で、『水鏡』に所属する者や一般民衆達にも、じわじわと神器の神秘性が浸透していった。その羨望と敬意が女王の権威を高めていく。

「ほう、新しく建設されるのはデアノース砦というのかの」

「どうやら、ユースケ君が動くようですよ」

「そうか……こちらも随分と体制が整ってきたでな、そろそろイザツプナー側から何か仕掛けられそうじゃわい」

「思っていたよりも早い展開ですね、やはり祭りの効果がありました」

たか」

フォンクランクからの最新情報を届けたレイフォルドは、ゼシャルドから新たな伝言を受け取り、今度は女王リシャレウスの待つコフタのシャルナー神殿へと向かう。

旧党派と連絡を取り付けたり、女王との伝令を努めるなど、レイフォルドも活発に暗躍する事で女王派勢力を拡大していった。

「ふむ……明日は一雨ついできそうじゃな」

窓から空を見上げたゼシャルドは一人、フォンクランク領の方角を眺めながら呟いた。

サンクアディエツト、ヴォルアンス宮殿

出発準備を整えた衛士隊馬車がズラリと並ぶ宮殿一階の馬車乗り場に、並んで現れる黒い隊服と赤い隊服の宮殿衛士が二人。

闇神隊長の悠介と、炎神隊員のヒヴォデルである。今回は特別に、炎神隊からヒヴォデルが衛士団指揮官として参加する事になっていた。彼が参加するに至った経緯は、例によってヴォレットの婚約者候補組が絡んでいる。

今回の任務で悠介がまた手柄を立てて、今度こそヴォレット姫に釣り合う身分まで手に入れてしまうのでは、と警戒した婚約者候補組は、彼等の集まりの中で宮殿衛士からも誰か出るべきじゃないか

という声を上げた。しかし、名乗りを上げる者は居なかった。

宮殿衛士達は神技力の高さや身分からエリートという立場にあるものの、訓練主体で実戦経験は殆ど無いのが実状だ。

国境付近の砦という、謂わば最前線にもなり兼ねない場所への駐留、彼等が尻込みするのは当然と言えた。重い沈黙が支配する中『それなら僕が行こうじゃないか』と、砦行きに志願したのがヒヴォデイルだったのだ。

「お前も一緒とは意外だったなー」

「ふふん、僕も姫様の婚約者候補としては、手柄の一つも上げなくてはと思ってね」

「何も起きない方が望ましいんだけどなあ」

「はっはっは、とりあえず僕の手柄分だけ敵が来てくれれば、それで構わないさ」

何とも呑気な会話を交わしながら、悠介達はそれぞれの馬車に乗り込んだ。闇神隊メンバーと、この任務で悠介に与えられた部下の衛士、合わせて二十名が先頭に行く。使用人とその他の追加要員二十名が後に続き、後方をヒヴォデイルが指揮する衛士団三十名が固める。

十台の馬車に分乗したディアノース砦駐留部隊の後発隊は、多くの人々に見送られながらサンクアディエットの街を出発した。

パウラに近い国境付近の街道脇で、ブルガーデン神民兵風技隊の偵察部隊は『国境ギリギリの場所にフォンクランクの衛士隊が集結

して陣地を構築し、そこに大量の資材を運び込んでいる』という報告を受け、先日から彼等の動きを監視していた。

サンクアディエツトに潜入している者からの情報では、新たな砦を建設して兵を駐留させる計画を進めているらしいとあった。

「また新しい部隊が到着しましたね」

「ああ、奴等本気で侵攻を考えているかもしれんぞ」

筒状の望遠鏡を覗き込みながらフォンクランクの大部隊が集結する陣地を観察していた部隊長は、馬車隊の先頭車両から下りる人物を見て思わず部下に声を掛ける。

「おいつ あの黒い奴、闇神隊じゃないか？」

「ギアホークの英雄っていうヤツですか？」

隣で同じく望遠鏡を覗き込んでいた部下がその姿を確認し、間違いなさそうだとパウラの本部に連絡を入れるべく後方の伝達係を呼び寄せた。集団の中には王族専護隊である筈の炎神隊衛士らしき姿も確認したので、何か大きな動きがあるのではと警戒する。

「噂では一日で巨大な塔を建てる特殊神技の使い手だそうだが……」

「自分は数刻で建てたとか聞きましたね、酷いものになると瞬きする間に塔が現われたなんて話もあります」

悠介が建てた展望塔の噂はブルガーデンにも伝わってはいるものの、一瞬で建てた等という逸話は比喩的な表現で話に尾ひれが付いた眉唾部分としてみられており、新しい建築技術と特殊な神技を組み合わせた高速建築の類であろうと考えられていた。

部下が伝達係と話している間、部隊長はギアホークの英雄が入っ

たフォンクランク陣地の監視を続けていたが、陣地のテントが次々と置かれ始めた事を訝しむ。

場所を移すのか、まさかこのまま進軍はないだろう等と考えを巡らせていると、件の人物が何かを始めた。

「なんだ……？」

「何か、動きがありましたか？」

伝達係を傍で待たせながら望遠鏡を構えて隣に並んだ部下も、同じ様に首を傾げた。テントが全て引き払われ、黒い隊服に身を包んだ人物が何やら宙に手を翳す度に、地面の彼方此方が暫らく発光するという謎の現象がみられる。

「あれは、なにをやってるんでしょうね？」

「わからん」

唸る監視役二人の後ろから、伝達係の神民兵も中腰になって額に手を翳しては、遠くに見える集団の人影に目を細めた。

「よし、地下部分はこんな感じで大丈夫かな」

「この上に砦本体を建てるのか、つくづく君の神技は訳が分からんな」

「ほっとけ」

「所で、ちゃんと指揮官用の部屋は用意してくれよ？」

悠介はまず砦の基礎となる部分を構築して地下の通路や部屋を整備した。広範囲に渡って出現した砦の地下部分を、駐留予定の衛士

達が覗き込んで感嘆する。広場の展望塔が建つ所を目撃していた衛士は、砦が建つ瞬間をワクワクしながら待っていた。

「よし、じゃあ本体を置くから、みんな一応下がっててくれ」

カスタマイズメニューに呼び出しているマップアイテムデータ『ギアホーク砦』を参考にして組上げた『ディアノース砦』の完成図を設置場所に移動させて最終チェックを行う。各部に問題が無い事を確認すると、悠介は実行ボタンに手を伸ばした。

「実行」

地下部分の上に発生した光のエフェクトが巨大な壁を形成しながら空へと伸びていき、同時に、近くに積み上げられていた大量の資材も光に包まれて消えていく。やがて光の粒が舞い消えると、そこには重厚な存在感を持つ巨大な砦が出現していた。

ディアノース砦に駐留する事になる総勢百二十名の衛士や使用人達から、自分達の『家』の誕生に歓声が上がった。

「なんだそりゃっ!」

フォンクランクの陣地を監視していた偵察部隊の隊長が、思わずそう叫んで立ち上がった。望遠鏡越しでなくとも肉眼で確認出来る巨大な砦が、瞬きする間に『出現』したのだ。

「ただの、噂じゃ……なかったのか……?」

「た、隊長! 見て下さい、他にも建物が!」

監視をしている彼等の位置からだ、砦を正面の右斜め方向から見渡す事が出来た。砦が出現した付近からフォンクランク側に幾つもの光の壁が現われたかと思うと、厩舎らしき建物や何かの施設らしき建物が次々と出現していく。

やがて見張り台つばい石造りの塔が生えたあと、砦とその一帯を囲むように防護溝が現われてそれらの現象は落ち着いた。防護溝に囲まれた敷地内に居る大勢のフォンクランク衛士達が、わらわらと作業を始める様子が窺える。

「ず、随分でかい砦が出来ちゃいましたね……」

「冗談じゃないぞ……」

呆然と呟いてから自分が無防備に突っ立っている事に気付き、慌てて伏せると岩場の隙間に身を隠す部隊長。砦の醸し出す重厚な存在感には、こちらを見透かされているような、不安な気分させられる。味方の砦だったなら、さぞかし心強かつたであろう。

通常なら建設を急いでも半年か一年は掛かる規模の砦を一瞬で造られたのだ。敵対国側からすれば、たまったものではない。

「この事態を直ぐ本国に知らせろ、我々はここで監視を続ける」

「ハッ」

「お、今度は跳ね橋を造ってるみたいですね」

伝達係に連絡を任せると、監視役の二人は新しく出現した砦の監視任務を続行するのだった。昨日まで晴れていた空は、今にも降りだしそうな灰色の雲に覆われ始めていた。

予定する全ての施設を造り終えた悠介は内装が整うまでの間、外でノンビリと休憩していた。馬や馬車は其々厩舎と車庫に運ばれ、監視塔には何故かヒヴォデルが登って周囲を見渡している。別に監視活動をしている訳では無いようだ。

悠介の周りには闇神隊のメンバーが集まっていた。先程までヒヴォデルが傍にいた為、近寄り難かったらしい。

「おつかれさまです、隊長」

「久々に隊長の神技を見やしたが……やっぱり凄え力ですね」

「ほんと、なんでもありっすよねー」

「つくづく隊長が味方で良かったと思わせられる光景だった」

皆が口々に労いの言葉を掛けてくれる。悠介はくすぐったい気持ちになりながら、ふと、何か気になる事があるのか困惑顔を浮かべているイフヨカに気が付き、声を掛けた。

「ん？ どうしたイフヨカ」

「あ、いえ……さつきから、誰かがこつちを、ずっと窺っているよ。うな気配を感じて……」

「ブルガーデンの奴等じゃないか？ 近くで監視でもしてるんだろ」

索敵に引つ掛かる気配を感じるというイフヨカに、国境が近いのだからあって然るべき監視くらい気にすんなとフォンケが軽く流そうとする。しかし、イフヨカは風技のそれとは違う『視線』のような気配を感じるのだと不気味がっていた。

「ふーむ……」

「なににせよ、皆の中にいれば安全だろう」

「なんなら隊長と一緒に部屋のしてもらうかあ？」

「えっ！　そ、そそんな、しつ失礼なこと、できまできませんですよっ？」

フォンケにからかわれて噛み捲ってるイフヨカに和みつつ、悠介は一応周囲の監視に役立つ道具でも作るかと思案するのだった。

25話・白い影

『ネリ！ ネリ！』

工事を急ぐあまり、しっかりと補強されていなかった土台が雨で崩れ、建設中の長城部分が一部崩落。上道を歩いていた一般民数人がこの事故に巻き込まれた。

ブラウ！ そこにいるの？

『おねえちゃんっ ネリが！ ネリが！』

現場には工事の作業員もいた為、怪我人や崩れた防壁の下敷きになった人達は直ぐに救出された。幸いにも死者は出なかった。

こりゃあ駄目だな、熟練した水技でもなけりゃ無理だろう

『どうしてネリをたすけてくれないの？ はやく、スイギのお医者さんを呼んで！』

無^ム技^ギの治^チ癒^ユなんか呼び付いたら、へそ曲げられちまうよ

『ネリは家族だもん！ 家族でともだちだもん！』

ブラウ……仕方ないのよ、ネリは無技なんだから

早く楽にしてやった方がいいぞ

嬢ちゃんには可哀相だけど、無技だからしょうがないね

プラウ、いい子だから、ネリとはここでお別れしましょう、

ね？

『ネリ……』

雨が降りしきる崩れた防壁の傍で、自分を庇って下敷きになった飼い無技、物心が付く頃から一緒に過ごしてきたネリの赤い血が、その命と共に流れ出ていく様を、幼い彼女はどうする事も出来ずに、ただ泣きながら見つめていた。

「……ん」

要塞内部にある部屋でも、雨の強い日には石畳を叩く雨音が微かに響く。気だるい寝起きに、何か哀しい夢を見ていたような思いを懐きながら、無意識的にそれを考えないようにしつつ、プラウシヤは一つ伸びをしてベッドから起き出した。

「今日も指導官の所へ行かなきゃ……」

身嗜みを整え、パンと干し実を一切れ口にして水の団団員の制服に着替えると、彼女は兵舎区画の自室を後にした。

フォンクランクとブルガーデンの国境付近にディアノース砦が出現してから四日目、先日から降り続く雨はカルツイオの乾燥した大

地を潤し、水不足気味だったパウラにも恩恵を与えていた。

三日間降り続ける雨の中、今日も今日とて岩場の影から砦の監視任務を続ける風技隊の視線の先で、どっしりとした佇まいを見せるディアノース砦では非番の衛士達が遊戯場に集まり、悠介が暇つぶしに作った遊び道具でゲームに興じていた。

回転盤の外側に赤、青、黄、緑、黒、白のマスがあつて、その周囲の溝に玉を走らせ、玉の勢いが落ちると何れかのマスに転がり落ちる。マスの中には倍率の数字が書かれており、予想した色に札を賭けて遊ぶ賭博円盤。その名も『カルツイオ・ルーレット』

「よっしゃ！ 赤二倍来た！」

「あ~~~~っつ あと一つとなりに入ってればー！」

これまでの賭博札遊びと違ってギャンブル性が高く、視覚的にも楽しめる事で娯楽に飢える衛士達には大人気となっていた。

「パチンコとか作つたらみんな無茶苦茶ハマりそうだな……構造が分からんから作れないけど」

「隊長、いいんですか？ こんな……」

堂々と賭博遊びを許して良いのかと眉を顰めるエイシャに、悠介は『行き過ぎなければ大丈夫だろう』と、適度な息抜きの必要性を説いた。ちなみにこの砦内では、宮殿衛士隊の隊長である悠介が一番エライ人で、二番目が衛士団指揮官のヒヴォデルである。

その二番目にエライ人はルーレット台の前で、全部入ってしまった賭博札を部下に奢って貰うというお約束な事をやっていた。

「よおし！ 次で勝負だ、一気に取り返してやるっ」

「指揮官殿、それ三回目ですよ？」

ディアノース皆は概ねこんな感じであった。

パウラの長城部分に並ぶ空き部屋を適当に改装して整えた『水鏡本部』その一室にて、ゼシャルドは今日も組織の活動に勤しんでいた。活動内容は女王の統治するコフタの制度を少しずつパウラにも適応して行くという内容。

それは地味ながらもパウラの日常にある常識を覆すような内容であった。目に見えてその変化を確認出来る事柄に、無技人の扱いなどがある。パウラの路地などに屯する野良無技や、既に飼われている無技達にも奴隷の腕輪を付けて女王の所有物とするのだ。

女王の所有物となった無技人にはきちんと衣服を着せて食事も与えなくてはならない。無闇に暴力を振るってはいけない。

性処理に使う場合、本人の承諾が無くてはいけない。その際はきちんと水技による健康診断を受けさせなくてはならない等々、彼等を人として扱う事に重点を置いている。

初めの内は双方に戸惑いが見られたが、コフタから越して来た年配者などには、割とすんなり受け入れられていた。

「そろそろ昼になるのう、プラウシャ君も食事にせんかね？」

「あ、はい」

水鏡本部の中ではゼシャールドの周囲に護衛役の神民兵が交代で付いており、暗殺を警戒してゼシャールドに近寄る者には常に監視の目が向けられている。そんな中で、プラウシヤは比較的近い場所にいられる特殊な立場にあった。

プラウシヤが水の団暫定団員に取り立てられたのは、戦力再編で有能な人材の確保や神民兵からの引き抜きが盛んな頃だったので、偶々彼女の取り立て確保と水鏡設立宣言の時期が重なったものと認識されている。

元々ゼシャールドの教え子として水の団に入団希望だった事もあり、彼女が精鋭団の暫定団員となってもゼシャールドの傍にいる事に違和感や不自然を訴える者も無く、イザップナー陣営が差し向けた密偵の類を疑う者はいなかった。

本部内の簡素な長テーブルで食事を摂りながら、プラウシヤは何か情報を聞き出さなくてはと気持ちを焦らせる。ここ数日、ゼシャールドの近くにいられるにもかかわらず、他愛無い話をする事しか出来ずにいたのだ。

組織の活動が忙しいので神技指導をお願いする訳にも行かず、その組織の事をあれこれ訊ねるのも不自然に思われるかもしれない。というような調子で、今日も内心の焦りとは裏腹に明日の天気など話題にしてみたりと、ほのぼのした時間が過ぎていく。

『ああー……やっぱり私、向いてないのかも』
「どづしたね？」

はふう、と溜め息を吐くプラウシヤに、ゼシャールドは何か悩み

事かと問い掛ける。

「い、いえその……そういえば国境に砦が出来たそうですね」

「うむ、ディアノース砦の事じゃな。心配せずとも向こうから仕掛けて来ることは無いと思うぞい？」

「そう、なんですか？ あ……でも、その砦には闇神隊の衛士がいるって聞きましたけど……」

「なあに、あやつも争いは好まん者じゃからして、何も起きなければ動く事もあるまいて。皆、大人しくしておれば良い」

そう言つて山菜の御浸しをポリポリ齧るゼシャルド。ギアホークの英雄について僅かながらも言及された事で、プラウシヤは複雑な気持ちを抱えて思考の海に埋没する。その為、ゼシャルドの言葉の不自然さに気付く事は無かった。

ゼシャルドの近くに付いている水鏡の構成員はプラウシヤに疑いの目を向けておらず、また、精鋭団の暫定団員に抜擢されたとはいえ、彼女はまだまだ未熟な少女であり。強化系水技の使い手であるプラウシヤには武力的な脅威も無いと見られている。

しかし、暗躍するレイフォルドを情報源として持っているゼシャルドは、プラウシヤがイザップナー陣営から諜報の依頼を受けている事を見抜いていた。先程の台詞の中には「事を起こせば闇神隊が動くぞ」というメッセージを含ませているのだ。

『とはいえ、イザップナーも大人しく指導者の座を手放すつもりは無いじゃろつのお』

本部内には今日も、女王直属の側近となった元神技指導官とその

教え子が、仲良く並んで食事を摂る光景、祖父と孫のような二人の仲睦まじい姿が垣間見られた。その実、水面下では権威の象徴と権力者による静かな攻防が繰り広げられているのであった。

「大分雨も落ち着いたみたいだな」

「あ、ユースケ隊長殿」

三日間激しく降り続いた雨もようやく小降りになり、灰色に覆われていた空は霧のような白い雲が散り始めている。砦の屋上通路部分から周囲を監視している衛士に声を掛けつつ、悠介は箱状の物体をどっころしよと石壁の縁に置いた。

「それは？」

「見張り用の望遠鏡」

サクサクとカスタマイズで架台を屋上通路の床と結合すると、作った望遠鏡を設置する。ケプラー式の望遠鏡で、倍率は約三十倍程は期待できると踏んでいた。ピントを調節しつつ架台の安定具合を確かめながら、水溜りの広がる砦周辺を観察する。

「んっ？」

「どっしました？」

「……覗いてみ」

悠介は望遠鏡の角度と方向を固定して衛士に接眼部を譲ると、先程見えた岩が並んでいる方角に向かって手を振った。

「……隊長、ギアホークの英雄が何か手を振ってますけど……っ！
こ、こっち指差してますけどっ」
「まさか、気付かれたのか……？ 拙いっ 移動するぞ！」

岩場の影に隠れていた風技隊の監視組は慌てて場所の移動を始めた。雨でぬかるんだ地面を這うようにして泥だらけになりながら、風技の索敵が近くに迫っていないか警戒する。

「しかし……なんで俺達の潜んでいる場所が分かったんだ？」
「向こうも何か覗き込んでましたから、偶々望遠鏡で覗いてて見つけたとかじゃないですかね」
「そんなわけあるかっ どれだけ距離があると思っている」

偶々で見つけられて堪るかとはやく風技隊の隊長は、実は当たっている部下の適当な推測にツッコミながら、別の岩場に身を隠した。ちなみに彼等の使っている望遠鏡は任務に携帯出来る大きさの物で約四倍から六倍の倍率を持つ。

「あれはブルガーデン神民兵の風技隊ですね。 あ、どうやらあそこの岩陰に隠れたようです」

「他にもこっちを監視してる連中がいらないか、適当に探していく

れ」

「ハッ 了解しました。 それにしても……凄い性能ですね、この望遠鏡は」

砦の上から風技隊の動きを難なく追っていた衛士は、悠介が設置した望遠鏡の性能に驚いていた。衛士隊にも指揮官が使う偵察用のモノがあるが、この距離から人相まで判別できる程の望遠鏡は初めて見たという。

「なら、あと五〜六台作つとくかな」

望遠鏡の出来に満足した悠介は、そう言って屋上通路を後にした。

一階に降りて来た悠介は出入り口付近に見知った後ろ姿を見つけたので、近付いて声を掛けた。

「イフヨカ」

「ひゃいつ!」

文字通り飛び上がって驚くイフヨカに、悠介も驚いた。

「そ、そこまで驚かなくても」

「え、あ、た、隊長……す、すみません」

どうも例の『視線』の気配を探して広範囲索敵に集中していたらしく、適度に緊張している所へ急に声を掛けられたのでかなり驚いたのだそうだ。まだドキドキしているらしい胸元に手をあてながら軽く赤面する姿に、中々可愛いな等と感想を持つ悠介。

今日までにイフヨカよりも神技力の高い伝達系衛士数人が索敵を試みてみたが、イフヨカが言うような気配は感じられないという結果が出ていた。それでも単なる気のせいで流すには引っ掛かりを感じるという事で、彼女にはその気配の調査を任せている。

「まだ感じてるのか？」

「はい、昨日の……雨足が強まった時は、かなり強く近くに感じましたが……」

今はまた、遠くにぼんやり感じるような感覚だと小雨の降る大地に遠い視線を向ける。近くに感じた気配は複数だったという。

「ふーむ、風技の索敵って何をどんな風に感じるモノなんだ？」

「えーと……」

基本、風技による索敵は神技の波動を感じ取れる範囲を、風によって広げているモノらしい。通常、神技人は一般民でも普通に神技の波動を感じ取る事が出来る。これは視覚や聴覚ほど明確で直接的ではないものの、感じようと思えば感じられるレベルのモノだ。

風技の索敵はそこに自身の神技で起こす風の流れを使い、空気の微妙な震えを神技の感覚に感じ取る事で情報を識別する。同じ風技の索敵を使う者や、神技の波動に敏感な者なら、索敵の風を察知する事も出来るのだそうだ。

リーダーのようなモノかとイメージを膨らませていた悠介は、ふと、索敵に掛かり難い存在として神技の波動を持たない無技の民のことが心に浮かび、シンハの事を思い出した。何時だったか、クレイヴォルも『無技人は見つけ難い』と言っていた。

「なあ、イフヨカは無技人の波動ってどうか気配とかは感じ取れる

のか？」

「無技人は、神技の波動が無いので　ああ！　そっかつ　これ…
…みんなの気配だったんだあ」

唐突に何かに気付いたらしく、合点がいったように両手を合わせ
て声を上げる。珍しく人前で素を出したイフヨカだったが、直ぐに
自分の言動に気付いて恥ずかしそうに顔を伏せた。悠介はそんな彼
女に、何か分かったのかと問い質した。　笑いを堪えながら。

「うっ…えっと、わたしは…無技の中で育ったので…」

無技人の間で育てられたイフヨカは、彼等が纏う独特の微かな波
動に馴染んでおり、普段からそれを感じ取っていた。街や無技人街
にいる時は当たり前前に感じていた気配の様な波動だったので、こん
な場所を感じるとは思わず、気が付かなかつたらしい。

「じゃあ近くに無技人が複数いるってことか」

「そう……なります、ね？」

それも、皆に近付いたり離れたりしている。

「牧場からは遠いし方向も違う、いったいなんだろう？」

「うーん…」

イフヨカがずっと感じていた視線のような気配が複数人の無技人
だったとして、こんな街からも遠くてブルガーデンとの国境に近く、
無技人にとっては色んな意味で危険地帯に何故？　と二人して首を
傾げあう。

「一応、警戒はしておいてくれ」

「はい」

悠介は謎の気配に対して、今のところ味方の中では唯一それを探る事の出来るイフヨカに、今後の警戒を任せた。

夜

星を隠し空を覆う薄雲の向こうにボンヤリと浮かぶ月灯りで、辛うじて闇夜を免れているカルツイオの大地。夕方まで降り続いていた雨によってあちらこちらに広がった沢山の水溜りが、揺れる月明かりを映している。

パウラの中枢施設、議会の執務室では、イザップナー最高指導官と腹心のヴォーメストが、女王直属組織『水鏡』への対策を話し合っていた。プラウシヤの報告に混じっていたゼシャルドからのメッセージについて議論する。

「奴め、牽制してきやがったぞ」

「ですが、これで彼女を我々側の密偵として見ている事が分かりました」

餌がすっかり役割を果たしていると、ヴォーメストは良い傾向である事を仄めかす。

「しかし闇神隊か……皆の報告、風技隊の情報は信頼できるのか？」

「風の団で調査済みです、確かに砦が建っていたそうです」

女王派の多い神民兵組織所属である風技隊の情報、それもかなり突飛な内容に懐疑的なイザップナーだったが、砦の存在は紛れも無く事実であると告げられて眉を顰めた。自軍の主力を壊滅させたギアホークの英雄が、国境から睨んでいるというのだ。

「……意識が餌に向いている隙に、ベルーシャを使うか」

イザップナーは今、事を起こした場合を想定して各勢力の戦力分析に入る。報告書を照らし合わせながら戦略のシミュレーションを行うのだ。フォンクランク側の戦力は、砦から出て来られる実動部隊を五十前後と見積もる。

闇神隊の戦力は未知数だが数の上だけなら報告にある約二十、それに炎神隊が率いる衛士団、凡そ三十と合わせた数字だ。

「今は雨で地面がぬかるんでいる、馬車も走り辛いだろうし、野外戦では炎技や風技の威力も落ちるだろう」

つまりは、この要塞に立て籠もってしまえば、ギアホークの英雄がいかな神技を振おうと然したる脅威にならない。イザップナーはそう判断した。地面が多く水を吸っている現状は自然の防壁となっている、と。

水鏡の状況は、女王への忠誠が高い者を神民兵から選んではコフタに送っているようだ。女王に直接戦力を持たせるつもりなのだろう。今パウラに残っているのはコフタ行きを拒否した者と選定中の者、中にはこちらの息が掛かっている者も混じっている。

「事が起きれば寝返る可能性もあるな」

「頭であるゼシャールドを討ち取れば、烏合の衆です」

「ふむ、やるなら今がチャンスか」

「出来れば、神器の回収も内密に行うのが良いかと」

先ずは内乱状態を演出し、混乱に乗じてゼシャールドを討つ。失敗しても、そのまま組織のアジトを制圧してしまえば良い。パウラ内部での戦力差ははつきりしているのだ、旗振り役がいなければ組織的な抵抗も続かず、直ぐに壊滅するだろう事は予測できる。

「直ぐに使える各精鋭団を招集しろ、制圧作戦に入りそうなら訓練施設から候補生を使って構わん」

「では、直ちに」

ザッルナーの火月の八日目、まだ太陽が顔を出さない未明の刻。ブルガーデンの要塞都市パウラにて、内乱が勃発した。

26話：邪神の咆哮

大多数の一般住民が内乱騒動に気付く事無く寝静まっている要塞都市パウラ。水鏡本部のある長城部分の二階内部通路では、襲撃を仕掛けて来たイザップナー陣営の精鋭団と、迎え撃つ水鏡陣営の神兵との攻防が続いていた。

精鋭団による襲撃が行われる直前、一人の精鋭団員が自らの危険を顧みず、水鏡本部に襲撃情報をもたらせた。

「あ、ゼシャルド殿」

「どんな様子じゃね？」

水鏡本部の一室では、戦闘で負傷した者に水技の治療が行なわれている。その部屋の片隅では、集まった数人の水技隊員達が一人の女性に懸命な治療を施していた。肩の辺りが焼け焦げた水の団の制服を纏う妙齡の女性。彼女が襲撃を知らせてくれたのだ。

「通路の攻防は膠着状態です、彼女は火傷が酷くて我々の水技では……」
「うむ、ワシがやろう」

ゼシャルドが治療の力を行使すると、女性の皮膚がみるみる再生していく。ただでさえ熟達した治療の使い手であるゼシャルドの力に神器の効果が上乘せされる事で、治療系水技史上類を見ない程の驚異的な治療効果が発揮されるのだ。

通常なら十数日は掛けて癒す炎技による火傷を、痕跡も残さず瞬く間に治癒してしまった。

「凄い……これが、神器の力ですか」

「良かった、彼女が知らせてくれなかったら味方の怪我人はもっと増えていた所でしたからね」

女性の回復を喜ぶ水技隊員達は、次々と部屋に運び込まれて来る負傷者の治療活動に勤しんだ。まだ意識を失ったままの彼女をベッドに残し、ゼシャールドは重傷者に治療を施しながら水鏡軍の指揮を執る。

先程レイフォルドが女王リシャレウスの元へ走ったので、この事態は直ぐに伝えられる筈だ。

「さて……ユースケの援護は間に合わんかもしれんのだ」

イザツプナーが今日このタイミングで仕掛けて来たのは、水鏡の戦力バランスと天候による地の利を最大限に活かした戦略であろう事が読み取れた。水鏡の設立宣言と同時にフォンクランクも動いていたので、イザツプナーは纏まりきっていない再編中の戦力で外敵への備えと、水鏡勢力への牽制を行わなければならず、勢力拡大を阻止する手段も封じられていたのだ。

このまま水鏡から女王へ実質的な戦力が流れ、女王の力がイザツプナーと並んでしまえば、権威と民衆支持の差によってブルガーデン国内での発言力、権力者としての立場は逆転してしまうだろう。

それを阻止する為には、強引な手段を持つても水鏡を潰す必要があったのだが、水鏡の勢力が危険な領域まで拡大すると同時に国境からフォンクランク軍、それも曰くのある闇神隊が睨みを利かせるという状況に追い込まれていたのだ。

昨日までの三日間降り続けた雨は、イザップナーにとって正に恵みをもたらせる雨となった。

「戦況はどうなっている？」

「ほぼ予定通りです、襲撃を知らせたベルーシャは重症を負って水鏡陣営に保護されました」

「よし、後はゼシャルドが討たれるのを待つばかりか」

「失敗した場合に備えて、少し押しておきますか？」

ヴォーメストの提案に、イザップナーは『そうだな』と許可を出した。この内乱演出は失敗すれば誤魔化しが利かない反乱行為である。故に、ここで確実にパウラから女王勢力を排除しなければ、自分に後が無いのだ。

ついさつき、国境の砦を監視している者からフォンクランク軍が出撃体勢に入ったという知らせが届いた。砦の位置から現在戦闘が行われている長城部分までは、通常ならば馬車の高速走行によって直ぐに駆けつけられてしまう距離だ。時間にして凡そ四十分程。

しかし、今は地面の状態が最悪に近く、夜なので視界も悪い。いくら風技の補佐があっても、多くの兵を乗せた重みで馬車の車輪が泥の中に沈み込み、満足に走れない事が予想される。

通常速度でどうにか進む事は出来るであろうが、長城付近に到着するのは陽も昇りきる頃だろう。その時にはとくに決着が付いているという訳だ。今の所、全て計算通り事が進んでいる。

「ふふん、ギアホーク砦のお返しにゼシャルドの死体を返してや

るのも面白いか」

気運は自分に向いている。イザップナーはそう確信していた。

「隊長！ 起きて下さい、ユースケ隊長！」

「ほわっ？ なんだなんだ」

夜遅くまで作業を行い、少し前から横になっていた悠介は息せき切って部屋へ飛び込んで来たエイシャに叩き起こされた。

「パウラで内乱です！ 先程ゼシャールド氏の『水鏡』とイザップナー陣営の精鋭団が交戦状態になりました！」

「！っ 遂に動いたか」

夜の眠りに付いていたディアノース等は、走り回る衛士達の氣勢で俄かに緊張感が増していく。出撃準備を整えるよう指示を出して隊服に着替え始めた悠介は、深夜まで行なっていた作業が功を奏しそうだと馬車の新装備の事を思い浮かべた。

悠介が砦前に下りて来ると、準備を整える馬車の周りに作業員が群がり、出撃予定の衛士達は既に整列をしていた。ヒヴォデイルもキツチリ炎神隊の隊服に身を包んで己が率いる衛士団に指示を飛ばしている。

「おおつ来たかユースケ、いよいよ出陣だな！ さあ、衛士達を鼓舞する演説でもくれたまえ」

「パス。フヨンケ、馬車は行けそうか？」

「もうちょい待ってください、あと二台つてとこっす」

衛士隊馬車を特別仕様に換装する作業を見守りながら、準備を終えた馬車から乗車を開始させる。特別仕様の馬車には、ぬかるんだ地面の上でも速度を出せるよう、車輪の代わりにソリ板を装着してある。悠介は夜遅くまでこのソリ板作りをしていたのだ。

「ちよつと待ちたまえユースケ！ 出陣には演説が付き物だろう？

それに僕は初陣だよ初陣！」

「じゃあお前に任せる」

「なにっ よし、任せよう」

「手短になー」

ヒヴォデイルの演説をBGMに出撃準備が進められるディアノース砦。雨上がりの澄んだ夜空に星が瞬き、土の匂いを運ぶ湿度の高い風が、頬を撫でて髪を靡かせ、漆黒のマントをひるがえ翻す。ようやく眠気が抜けてきた悠介は、一つ深呼吸して気持ちを整えた。

「出撃準備完了しました！ 何時でも出られます！」

「よし……行くか」

闇神隊の悠介率いるフオンクランク軍衛士団五十名が、パウラの長城付近を目指してディアノース砦を出撃していった。

パウラで勃発した内乱により、水鏡陣営の神民兵とイザップナー陣営の精鋭団が交戦を始めて約一時間程が経過した頃

「報告します！ フォンクラク軍と思われる車列が多数接近中！」
「なんだと！ よく確認しろっ」

突然もたらされたフォンクラク軍接近の報に、イザップナーは思わず声を荒げた。襲撃の直後から出撃したとしても早過ぎる。上道に配置する予定の防衛部隊にも招集を掛けるべきかと考え、現場の指揮に出ているヴォーメストを呼ぶよう指示を出した。

「一体どんな手を……いや、相手は皆を一瞬で建てる等という奇妙な神技を使う闇神隊だ」

常識を当て嵌めて考えるべきでは無かったかと、思わぬ計算違いに齒噛みする。だがまだ地の利は自軍にあった。パウラの長城部分は四階建ての建物に匹敵する防壁である。上道と長城内部からの迎撃により、そう簡単には攻略出来ない造りになっているのだ。

「来たか、ヴォーメスト」

「どうやら、フォンクラク軍の横槍が入りそうです」

「ああ、だが奴等を長城に入れなければいい」

水鏡との戦闘は長城内部の通路上で行われているのだ。外からでは手出しできない事に変わりはない。

「上道に防衛部隊を率いて迎撃しろ、長城に近付かせるな」

長城の外壁を視認できる辺りまで進軍した所で、悠介達は馬車を降りて散開する。既にブルガーデン側から多数の索敵が向けられている事を確認していた。

「やっぱ足場が悪いな」

「隊長、長城の上道に向こうさんの部隊が出て来たようですね」

「迎撃部隊とかは？」

「無いでしょう、上から神技やら弓やらで射る方が楽で確実ですからね」

次々と降車した衛士達は所定の位置に付くと、総隊長ユースケからの命令を待つ。辺りが暗いお陰で、悠介は大部隊を預かる緊張が幾らか解ほくされていた。とりあえず、手筈通りに行こうかと全軍前進の合図を送る。

長城の上道に配置された防衛部隊の射程ギリギリまで近付き、そこで一先ず待機。ゼンシャルド率いる水鏡軍と交信を試みるも、風技の妨害が強くて伝達の風は届かなかった。

「防壁部分の小窓で時々光ってる所がありやすね……多分、あの辺りで交戦してるんだと思いやすが」

「適当に突っ込む訳にもいかないしな、資材は着いたか？」

「今到着しましたぜ、やっぱ重いんで中々進めなかつたっすよ」

砦の建設にも使った角石の小さいサイズのモノを満載した荷物用馬車三台が、衛士隊馬車よりも少し遅れて現場に到着した。運搬の指揮を任されていたフォンケが首を回しながら報告に来る。

「よし、じゃあ始めるか」

悠介はヴォーマルが当たりを付けた防壁部分を睨みながら、荷馬車の角石からメニュー画面を開いてカスタマイズを始めた。

ギアホーク砦で角石を降らせた時にも使った方法。角石を縦に繋いで距離を稼ぎ、その先を長城に繋いで結合、グループアイテム化してしまう事で、遠距離から『要塞都市パウラ』を直接カスタマイズするという戦法だ。

何層かに別れた要塞都市の長城部分、角石と繋がった接続部の辺りから弄り始める。

長城の上道にてフォンクランク軍を警戒するブルガーデンの防衛部隊は、先程そのフォンクランク軍が集結している辺りから光の紐のようなモノが伸びて来たと思ったら、長城防壁の下部にぶつかり、そこに細長い石柱が繋がっている事を確認した。

防衛部隊の指揮を執るヴォーメストは、報告からギアホークの英雄が使う神技とその現象に付いて『事前に光を発する』ということを知っていたので、明らかに何かの仕掛けに違いないと判断し、あれは何だとざわめいている部下達に石柱の破壊を命じる。

「どうした、早く破壊しろ」

「そ、それが……」

「炎玉の効果、ありません！」

「同じく、氷槍の効果なし！」

「風刃、効果なし！」

土技で石の塊りも落としてみたが、細長い見た目と裏腹に角石の石柱はビクともしなかった。

「くそ……、一体何で出来ているんだ」

終始沈着なヴォーメストも流石に焦りを感じ始めたその時

「……っ いかん！ 全員退避っ！」

長城が彼等のいる場所も含め、広範囲に渡って発光を始めた。

ボーザス山から吹き下ろす風が、長城の中を吹き抜けていく。この長城防壁が建設されてから、ボーザス山を下りて来る風はそこで阻まれ、長らく麓の大地を撫でる事は叶わなかったのだが、長城に面した大地は十数年ぶりにその風を浴びた。

「うわあーっ な、なんだこりゃあ！」

「ど、どうなってる！ 敵の罠か？」

長城は角石が繋がった部分から左右に約百メートル近くに及ぶ範囲で壁が無くなり、内部の構造が横から丸見えの状態になっていた。強度不足で崩れ落ちないよう柱と床や天井は補強がされている。

通路で戦闘を行っていた水鏡陣営の神民兵とイザップナー陣営の精鋭団は、いきなり劇場の舞台にでも放り出されたような錯覚を覚えた。対峙する両陣営の部隊を横から眺める形になったフォンクラ

ンク軍の衛士団も、あまりの出来事にあっけに取られる。

「うわっはははは！ こりやおもしれえ！」

「フヨンケ！ 作戦の最中に馬鹿笑いは止めなさい、不謹慎よっ」

この場にいる全軍が動きを止めている中で、闇神隊のメンバーだけが何時も通りの行動を見せていた。

「えーと、全軍攻撃？」

皆が固まっている為、悠介は疑問系で攻撃命令を下した。フォンクランク軍から、吹き抜けになった長城内部にいるブルガーデンの精鋭団に向けて、最初の一撃を放ったのはシャイードだった。

「痛てえ！ って、うわああー……」

闇神隊の短剣効果で威力の増幅された水球が飛んで行き、ぼけつと突っ立っていた精鋭団の一人を向こう側へ弾き落とす。その一撃で我に返った精鋭団は、とりあえず僅かに残った遮蔽物となる柱の影に身を隠すと、横からの攻撃に備えた。

「隊長、水鏡軍に加勢する宣言を」

「あ、そか。イフヨカ、声頼む」

「はい」

風技の伝達には特定の対象に向けて密かに声を届ける使い方の他に、声の波動を増幅させて一帯の空気に乗せる事で広範囲に響かせる『広伝』という技法がある。イフヨカの風技によって増幅された悠介の声が、戦場となっている辺り一帯に向けて響き渡った。

「えーフォンクラंकから来ました闇神隊隊長の悠介です。我々は水鏡軍を援護するのでヨロシク」

一瞬、戦場の喧騒が静まり返った。

「あゝ……隊長、今のでいいんですかい？」

「ユースケ！ 幾らなんでもその『広伝』はないだろう！」

「まあ、在る意味、隊長らしいとも言える」

汗をたらりを一筋流しつつ確認を取るヴォーマル。『僕の隊の紹介が無いじゃないか』とポイントのずれた抗議を向けるヒヴォディル。シャイードは『悠介らしさ』に理解を示し、フォンケは腹を抱えて笑い転げては、エイシャに注意されていた。

「しよーがないだろ、口上とか演説とか経験ないんだから」

寧ろ敵の動きを止める意表を突いた『広伝』だっただろうと、悠介は開き直った。味方の動きも止めたが。

「とにかく、水鏡軍を援護してフォンクラंकにちよっかい掛けてくるパウラの指導者を叩く！ 適当に攻撃開始！」

「了解！ 全軍、攻撃開始せよ！」

気を取り直して攻撃命令を放つ悠介。復唱されたそれは直ちに実行に移される。フォンクラंक軍からの攻撃は距離があるので殆ど殺傷力は得られないが、吹き抜けの通路で正面の水鏡軍と対峙している精鋭団にとっては厄介かつ理不尽極まりない攻撃だった。

「くっそお……味方の援護はどうなってる！ これじゃ制圧どころ

か、こつちが壊滅しちまうぞ」

「こじやどうにもならん！ 壁のある所まで後退だ！」

ギリギリ後退を始める精鋭団を、水鏡軍は深追いせずとも確実に通路の前線を押し上げていく。フォンクランク軍は遠くから精鋭団を狙い撃ちにして、こちらもチクチクと確実に相手の戦力を削っていく。

両軍共に暗くて視界が悪い中での神技による射撃戦なのだが、敵味方の放つ神技の光によつて位置が浮かび上がる通路上の精鋭団に対し、フォンクランク軍は野外に陣取っているので殆ど闇に隠れて位置を悟らせず、水鏡軍との連係で反撃の間も与えない。

ようやく長城の上道にいた防衛部隊が迎撃位置に戻ってきて反撃を開始するが、こちらの攻撃と同じく距離があるので、偶に直撃を受ける衛士が出るも大した怪我にすらならなかった。

東の空が徐々に深い青から紫色へと変化を始め、夜明けの訪れが告げられる頃。楽勝ムードが漂う中、索敵をしていたイフォカがフォンクランク軍の左後方から近付いて来る大きな気配を感じ取って警戒を發した。

ディアノース砦に居る間、ずっと感じていた無技人の気配。他の索敵係もそちらの方角に索敵の風を放つて警戒する。

「左後方より騎馬隊多数接近！ いや……、進行方向はパウラの長城、戦闘区域と思われます！」

「騎馬隊だつて？」

「神技の波動が感じられない……まさか」

「騎馬隊さらに接近！ か、数およそ二百！」

二百騎もの大部隊が近付いているという報告に、衛士達からざわめきがあがった。フォンクラク軍の全衛士達が意識を向ける方角から、ぬかるんだ大地の泥を蹴散らす馬の蹄ひづめの音が近付いてくる。そして

「無技の戦士だ！」

暗闇を切り裂く朝陽の光を側面に浴びながら、剣や弓で武装した無技の民の戦闘集団、白の軍団が現われた。

突然現われた白の軍団は、混乱に陥り掛けているフォンクラク軍から約五百メートルほど南に離れた付近で停止すると、そこで一斉に馬から下りて隊列を整える。戦闘員では無いのか、半数近くが馬を引き連れてその場から離れて行った。

それでも百名近い武装した無技の戦士が、隊列を組んでパウラの長城を睨む位置に陣取ったのだ。よく見ると、彼等の中にもチラホラと赤や青、緑といった色の髪を持つ神技人らしき姿が混じっている。

「我々はガゼツタの白刃騎兵団である。シン八王の命により、ギアホークの英雄ユースケ殿に御味方する」

ガゼツタ軍から発せられた風技の『広伝』が辺り一帯に響き渡った。ガゼツタは表向き普通の等民制国家を装っているが、国土の大部分を占める山岳地帯の奥には無技の王を頂く古い王都があり、領内各地に無技の戦士を育成する施設があると噂されている。

噂でしかなかった無技の軍団によるガゼツタの参戦。混乱するフ

オンクランク軍の中で、悠介はカメラマンがファインダー越しでならどんな地獄へでも踏み込んでいけるが如く、カスタマイズメニューの画面を通して気持ちを落ち着けながら事態に対処する。

一つずつ情報を整理し、こちらの味方をすると言っている事。シン八を王と呼んでいた事等を取り纏める。総隊長の悠介が毅然として冷静な態度を見せている事と、敵では無いらしいという話から、混乱していたフォンクランク軍は次第に落ち着きを取り戻す。

「隊長、やつこさん達、うちと水鏡の連係とか分かってるんでしょうかね？」

「うーん、どうだろう？」

「彼等の援軍が無くとも、このまま押せば水鏡はパウラの指導者を排せる筈だ」

味方に付くとは言われたものの、国交も浅かったガゼッタ、それも存在が明らかにされていなかった無技の軍団という不確定要素の参戦は、正直なところ場に混乱をもたらせるダケだ。部下達と相談した悠介は、ガゼッタ軍に返答の『広伝』を行った。

「援軍、感謝する。しかし、我々は無闇に犠牲をだすつもりはない。布陣するだけに止めて頂きたい」

指揮下に入るなら進軍を中止してくれと要請を出す。ちなみに、台詞はヒヴオデル監修である。これに対するガゼッタ軍からの返答は、『この戦いで味方はするが、同胞の解放目的もあるので我が軍の指揮権はこちらが有する』というモノだった。

「……こりゃあ、きな臭せえですぜ」

「ああ、中々したたかな連中のような」

「どづいつことだ？」

これは悠介に味方する事を口実にしながら、フォンクランクの武カ介人に乗じたガゼツタによるブルガーデンへの侵攻作戦だと断ずるヴォーマルとシャイード。悠介が二人の見解に詳しく耳を傾けようとしている所に、また新たな『広伝』が響き渡る。

「ワシは女王直属組織水鏡のゼシャルドじゃ」

今度は水鏡からゼシャルドの声で『広伝』が発せられ、懐かしい声の響きに悠介は思わず長城を振り返った。

威厳のある重い響きで語られたのは、女王の政策によりブルガーデンの無技人は保護され、今後はその政策がとられること。武力衝突の規模は小さく、長城にいるのは殆どが民間人なので、ガゼツタの侵攻は認められないとする内容。

ゼシャルドはガゼツタ軍をフォンクランクの援軍とは見做さないと宣言した。ゼシャルドもヴォーマル達と同じ結論に辿り着き、ガゼツタ軍を牽制しながら悠介を援護する為の策として放った『広伝』だった。

「同胞の解放戦争ゆえ、ブルガーデン側の言い分には応じない」

ガゼツタ軍はそう返した。更に、女王の保護という名目は認めず、女王に所有される同胞の解放にも動くと言明する。それは明らかに宣戦布告とも言える内容である。三つ巴の様相を呈してきた広伝合戦が続く中、戦闘は小康状態（ここうじょうたい）に入っていた。

「何か、ややこしくなってきたぞ？」

「！っ 隊長、長城の山側から新たな部隊が！」

「ブルガーデンの援軍っすかね？」

「いや、あれは……女王の旗印だ」

吹き抜けの長城を挟んで山側から戦場に現われた新たな部隊は、内戦に備えてコフタに集められていた女王軍の実戦部隊だった。

「 私はブルガーデン女王、リシャレウス・トゥール 」

女王の凜とした声が響き渡り、フォンクランク軍の介入は条件付で容認するが、ガゼッタの侵攻には徹底抗戦すると宣言する。女王自らの登場と『広伝』に、所属軍問わずこの場にいる兵士達からざわめきや歓声が上がった。

そこへ、水をさすようにイザップナー最高指導官の戦いを鼓舞する声が響き渡る。

「 フォンクランクとガゼッタの謀略による侵略を許すな、同志達よ！ 敵を迎え撃て！ 」

ブルガーデンの神民兵、精鋭団問わず、女王に傾きかけた気運を引き戻そうと、外敵の存在を指して危機感を煽る事で全軍の掌握を試みる。イザップナーが今の地位に上り詰める過程で頻繁に行った民衆を動かす手法、彼の得意技でもある。

「 なりません、直ちに戦闘を止めなさい。イザップナーは兵を退きなさい。住人の避難を優先するのです 」

水鏡軍の神民兵とイザップナー陣営の精鋭団が吹き抜けの通路で

対峙、女王軍は壁の無くなった長城の下を潜ってガゼツタ軍を牽制する位置へ移動を始め、フォンクランク軍は神民兵と精鋭団が睨み合う吹き抜け通路の横合いに布陣。

ガゼツタ軍はフォンクランク軍よりも更に南側付近から長城を睨む。位置的には正面に水鏡軍の背後を見ている辺りだ。

「なんだこの状況、随分混沌としてきたな」

「……うーん、ユースケ。これはかなり厄介な状況になってきたよ
うだぞ?」

「見りゃあ分かる、下手すりゃ五つ巴だ」

「いや、そうじゃない」

ガゼツタの動向について、態々軍の対峙しているこの場所に堂々と現われたのは、自分達の存在を世界中に宣伝する意味もあるのだらうと、己が分析した内容を語るヒヴォデイル。今回ここでの戦いには、他の国々も注目している筈なのだ。

フォンクランクとブルガーデンの衝突を見越して参戦し、ギアホークの英雄を助けるといふ名目の元、ブルガーデンの無技人解放を掲げてパウラに侵攻。ブルガーデンの神技人住民に多数の死者を出した場合、各地で無技人への報復弾圧が予想される。

結果、無技人達は救いを求めてガゼツタを目指すようになる。それに伴ってガゼツタの国力は増し、戦力も増強されていく。

「このまま事が進めば、エスヴォブス王の狙いも潰されて僕等もただでは済まないよ」

辛うじて壁が残っている水鏡本部で、ゼシヤールドは神民兵達の指揮を執りながらガゼツタの狙いについて考察する。

このままガゼツタの侵攻を許せば、例えこの一戦を退ける事が出来たとしてもブルガーデン内部では紛争が治まらなくなるだろう。内部紛争を治められても、フォンクランクとは戦争状態になる事が予想される。

ガゼツタと戦う為に、ブルガーデンがフォンクランクと同盟を結ぶ可能性は低い。これまで一方的にブルガーデンから被害を被っていたフォンクランク。ガゼツタ参戦で一方的に被害を被る事になるブルガーデン。

ブルガーデンに混乱をもたらせたのはフォンクランクの策略であり、その策略に乗ったのは女王である。双方に争いの原因となる要素が多過ぎるのだ。ガゼツタは纏まり掛けていた二国を最悪の状況おとしいに陥れる一本の凶矢である。

『シンハ王……こやつを狙いは、無技の民による世界の転覆、それにユースケの確保か』

ガゼツタ軍の中央で部下の兵達に囲まれながら、参謀とパウラ攻略について作戦の最終確認を行うシンハは、古より続く己が一族の悲願である白族帝国の再興、その第一歩となる戦いに静かな闘志を燃やしていた。

「この戦いが終わった時、ギアホークの英雄は神技の民の敵と見做されるか……」

フォンクランクも他国からの敵対を恐れてギアホークの英雄を処罰する方向に動かざるを得ない可能性がある。その場合、処分されるならそれもよし。潔く死を受け入れるも、足掻き至らず死を迎えるも、死ねばそこまでの男だったという事だ。

生き延びてガゼツタに亡命するなら尚よし、その時は大いに恩遇を持って迎え入れよう。シン八はそんな考えを巡らせていた。

「出撃準備、整いました」

「よし……風技の補佐を始めろ」

ヒヴォデイルの分析を聞き終えた悠介達が深刻な状況に唖っている時、ガゼツタ軍が風技の移動補佐を纏い始めたと報告が入った。いよいよ進軍を開始するらしい。今の話では、ガゼツタ参戦の口実にされている悠介に裏切り者のレッテルが貼られかねない。

真の目的は彼等の同族である無技人の解放であろう事は誰の目にも明らかだが、彼等が悠介の味方をすると言明して戦場に乗り込んできた事が問題だった。悠介には、サンクアディエツトで無技人の保護条例を公布させた実績があるのだ。

「恐らく、世界中の神技人に追われる事になるユースケが、ガゼツタに逃げ込んで来る状況を仕組もうとしてるのかもね」

「なんだそりゃっ　なんで隊長がんなことになるんだよ!」

「ぼ、僕に怒りをぶつけられても困るっ」

「うーむ……」

憤りの為か、ヒヴォデイルに対して遠慮が無くなっているフォンケを宥めながら、悠介はどうしたものかと頭を悩ませる。シン八が

ガゼツタの王だった事には驚いたが、それに驚いている暇も無いような面倒な状況になってしまった。

「アイツ自身は、そんな裏表なさそうな奴に見えたけどなあ」

「あ、あの……隊長、あの人……向こうの軍に、いるみたいですよ、え、マジで？」

こくりと、緑髪を揺らしながら不安そうな表情で頷くイフヨカ。

「シンハ！ いるんならそつちの軍を退いてくれ、無技人の待遇改善ならまた別の席を設けて話し合うべきだ」

ガゼツタ軍の侵攻に備える女王軍、未だ吹き抜け長城通路で睨み合う水鏡軍とイザップナー陣営の精鋭団。戦場に緊張感が高まっていく中、フォンクランク軍からガゼツタ軍へ向けてもう一度、進軍の中止を要請する悠介の『広伝』が響き渡る。

白刃騎兵団の参謀がシンハにお伺いの視線を向けた。

「ふ……構わん、進撃だ」

シンハは悠介に修理してもらった白金の大剣を掲げると、パウラの長城前に布陣する女王軍に向けて進撃を命じた。

『所詮ヤツも神技人には変わりないということか』

侵攻を開始するガゼツタ軍を為す術もなく見送るフォンクランク軍。味方である事を宣言しているガゼツタ軍を攻撃する事は、後々の事を考えると外交上でもリスクが大き過ぎる上に、戦力差から考えても力尽くで止める等という選択はありえない。

「ちっ いきなり出張って来やがって、反則だろこんなの……」
「それが外交、これが戦略ってもんだ」

荷馬車の台を蹴って悪態を付くフォンケに、ヴォーマルはそう論しながらも口惜しそうな視線をガゼツタ軍に向ける。同じく難しい顔をしていたシャイドは『広伝』を無視されて俯いている悠介に今後の指示を仰いだ。

「隊長、どうします?」

「ふざけやがって……なにが何時か俺の力になるだ」

俯いたままブツブツと呟く悠介に、エイシャが心配そうな表情を向ける。

「隊長?」

「外交も戦略も反則が常識か……上等だよ」

顔を上げた悠介は荷馬車の台に駆け上がると、ガゼツタ軍とその進行方向に見える長城を睨む。ボーザス山から吹き抜ける風に、漆黒のマントが翻る。フォンクランク軍の全衛士が注目する中、悠介はガゼツタ軍の白刃騎兵団に向かって吼えた。

「本物の反則みせてやらあ!」

両手を翳してカスタマイズメニューを開く。片手で操作できるカスタマイズメニューも両手で操作する事で作業効率倍化、という訳でもないのだが、気分の問題だ。悠介は所謂『本気モード』に入っていた。

「ヴォーマル、俺の周りを固めろ！ 邪魔が入らないようにするんだ」

「……了解！」

今までと雰囲気が違う悠介に若干戸惑いを見せたヴォーマルだったが、直ぐに気を取り直して命令を実行する。悠介の乗った荷馬車の回りを、闇神隊に与えられた衛士達がグルリと囲んで防護陣を作った。

「ヒヴォデイル、お前は団を率いてガゼッタ軍を包囲しろ」

タイミングはこつちから知らせるので、ギリギリまで近付いて牽制するようと指示を出す。

「か、数が違い過ぎるんだが……わかった、なんとかしよう」

お調子者だがやる時はやる男を密かに自負しているヒヴォデイルは、三十対百という戦力差にはつきりと怖気づきながらも、腰を退く事無く任務を承諾した。空威張りでも指揮官がどっしり構えてくれた方が、衛士達は動き易い。

「イフヨカ、水鏡軍に伝達、住民を山側に逃がすように言え、今すぐだ」

「は、はい！」

広伝ではなく伝達で水鏡軍に連絡を取り始めるイフヨカ。混沌とした今なら風技の妨害も無いのではないかという予測は当たっていた。水鏡の神民兵に伝わった言伝は、直ちにゼシャルドへと伝えられる。

「ゲーマーなめんなよっ シンハ！」

両手で忙しく操作するカスタマイズ画面の中では、3Dで表示された対象物が目まぐるしく形を変化させていた。

長城の水鏡本部内では、任務遂行の機会を窺う人影がゆっくりと起き上がった。

27話：誤算

シャルナーの火月の十一日目

ガゼツタの山岳地帯にある隠された古い一族の里。小さな砦のよ
うな城を構え、周囲には石造りのこじんまりとした建物が並ぶ、一
見すると山奥に隔絶された集落のようにみえる。

それほど多くない建物群の中に一軒、他の建物とは毛色の違う社
のような建物があった。

『よう、婆さん。まだしぶとく生きてたか』

『お前さんも大きゅうなったのう、よう育ったもんじゃ』

幼少の頃から馴染みである里巫女の所に顔を出した若い男は、互
いに軽口を叩き合って親睦を示すと本題に入った。

『今度はどんなお告げがあったって？』

『うむ……邪神が降臨した』

『ほう？ それはまた、どんな奴だ？ 古の怪物か、四大神の祖か』

『四大神の祖に似た姿をしておった、恐らく人種ひとしゅじゃ』

先程までの和気藹々とした雰囲気は消え、若い男は真剣な表情で
里巫女のお告げに耳を傾ける。

一族の悲願を叶える存在。太古の昔、カルツイオに降臨した邪神

の一つに、白族繁栄の基となった邪神があった。尤も、その繁栄を滅亡に導いたのも、後の世に降臨した『ヴィ・ザード』という名が伝わる人種の邪神だったのだが

『場所はフオンクランク領の辺りかの』

『人種か……ならば、今度は神技人の繁栄を打ち壊す存在なのか？』

白族の支配する世界に降臨し、当時は従民階級にあった特殊な力を持つ少数民族『色付き』と呼ばれる者達に『神技』という概念で力を与えた四大神の祖。邪神自身はその力を『魔術』と呼んでいたようではあったが。

『色付き』が自らを『神技人』と定めて力を振うようになり、次第に勢力を拡大し、やがては白族をこの地に追いやった。

『それは分からぬよ。じゃが、黒い頭部を持つておるのが見えた』
『ふむ……確かめに行くしか無いか』

白族繁栄の基となった邪神は『ヴィ・ザード』より以前に降臨した人型の怪物だった。その怪物の猛威は、色付き達が世界から大きく数を減らして少数民族となる原因となり、白族が繁栄の時代を築く流れの切っ掛けとなったのだ。

各地の無技の祠に祀られている邪神像こそ、その怪物の姿を象つたモノである。

古より代々受け継がれてきた白族の王に課せられる使命として、降臨した邪神の存在を確かめに行かなければならない。待望の人型、邪神像に近い黒のイメージ。里巫女の社を後にして城に戻った彼は、さっそく旅支度を整える。

『本当に一人で行かれるのですか？』

『それが王としての、俺の使命だからな』
『ですが、もし陛下の身に何かあれば……』

せめて護衛をと申し出る側近であり側室でもある女官を宥め、心配する彼女のお腹に触れる。

『既に俺の世継ぎはお前の中にもいるだろう』

『そ、そんな、まだ男の子か女の子かも分からないのに……』

そう言っただけで照れる女官に接吻を与えて安心させると、彼はフォンクランクの地へ旅立った。

ザッルナーの火月の二日目

『まさか、ヤツが邪神だったとはな』

ブルガーデンの動向を見張る監視からの急報が届き、パウラ侵攻を決意した彼は兵を集めるよう指示。国境に近い街に集結させつつ、ギアホーク砦跡に向けて斥候部隊を出し、本隊を少人数編成で目立たないように移動させ始めた。

『陛下、リシャ様の事はどうなさるおつもりで？』

『リシャの父王は既に亡く、今や彼女は籠の中の鳥。一緒に解放してやるぞ』

亡き王の理想を受け継ぐと頑張ってはいるようだが、あの小さな箱庭^{コックタ}も、そのうちパウラの指導者に取り上げられるだろう。女王リシャレウスの保護では手元の無技人にしか救いが届かない事を指摘する。

『女王としての立場から、我々を受け入れる事はできないだろう』

「ならば、力尽くで解放してやるまでだ」

白金の大剣を掲げ、前方で防衛陣を敷く女王軍に向けて進撃する。少し勾配のある長城への平地を、足場の悪さも物ともせず駆け上がる。鍛え抜かれた白族の末裔である無技の戦士達が、手に手に武器を構えては雄叫びを上げながら突撃してくる怖ろしい光景に、女王軍の神民兵達はリシャレウスの私兵になった事への誇りと忠誠心で何とか踏み止まっていた。

「むう、これはイカンのう」

壁の抜けた長城の二階部分から戦況を窺っていたゼシャルドが、住民の避難に回している神民兵を女王軍の援護に向かわせられないかと考えていたその時、長城の一部から紐の様な光が女王軍の前方に伸びて行き、長城が広い範囲に渡って発光を始めた。

次の瞬間、光の粒が舞うと同時に巨大な壁が、ガゼツタ軍の行く手を遮るような形で女王軍の正面に出現した。

進軍中のガゼツタ軍は突然前方の、女王軍との間に現われた巨大な壁に驚き、少し足並みが乱れる。シンハは全軍に立ち止まらないよう、壁を迂回する指示を出しながら後方のフォンクランク軍を振り返った。

「ユースケか！」

ガゼツタ軍と悠介のいるフォンクランク軍闇神隊との距離はかなり離れており、間に炎神隊衛士の率いる衛士団も追って来ている。悠介を護る部隊の総数は約二十程度。

神技を妨害する為に本隊から分隊を向かわせた場合、後方の衛士団を躲すのは難しく、余計な被害が予想される。

「後詰めの子を出せ！」

シンハはより確実な方法を選んで早々に切り札を切った。

『さて、どうするユースケ』

悠介はカスタマイズメニューに映るノーマルな長城部分と壁を抜いた部分、目視での女王軍の位置などから大体の座標を割り出し、殆ど勘で巨大防壁を置いていた。ガゼツタ軍とはかなり距離があるので、目測で正確な位置を捉えるのは難しい。

カスタマイズメニューで更なる操作を続けている所へ、周囲を警戒していた索敵役から敵部隊の接近が告げられた。

「後方よりガゼツタ軍の騎兵接近！ 数、凡そ四十騎！」

「やべえ！ さっき引き上げてった奴等か」

「隊長！ 衛士団を呼び戻しましょう」

「必要ない」

闇神隊と衛士隊二十人の内、戦闘用の神技を使える者は半数程だ。倍近い数の騎兵で突入されれば、成す術もなく蹂躪されてしまう。焦る衛士達に対し、悠介は『まだ距離がある』と言ってカスタマイズ操作を続ける。

そうして予定していたモノを組上げると直ちに実行、反映させた。防護陣を敷く衛士達の前方に、広い石畳が出現する。

「全員、石畳の上に乗れ！」

荷馬車から飛び降りた悠介が、そう叫んで走り出す。直ぐに反応した闇神隊メンバーに続き、護衛の衛士達も揃った動きで石畳を指して移動を始める。こちらに向かつて突進して来るガゼツタ軍の騎兵は、既に五十メートルほど離れた位置にまで迫っていた。

「みんな乗ったか？ 乗ったな？ 地面に立ってる奴いないな？」

悠介は全員が石畳の上に乗っている事を確認すると、カスタマイズメニューをスツと一弄りして実行ボタンを押した。縦、上下に移動できるなら、水平、横にだって移動できる筈だ、という発想のもとに実験済みだった仕様上の反則技。

闇神隊と衛士隊の二十人は、光の粒が舞い消えると同時に、長城付近に陣取る女王軍の隣に出現した。

「な、なんだと！」

巨大防壁を迂回しながら後詰め**の**兵達が闇神隊に突撃する様子を見ていたシンハは、驚きのあまり声を上げた。いきなり部隊が掻き消えたかと思つたら、突如として女王軍の隣に現われたのだ。

「部隊ごと転移させたのか……！　なんて出鱈目な」

「陛下！　このままでは前方の女王軍、闇神隊と後方のフォンクランク衛士団に挟撃されます」

「分かっている、騎兵をこちらの援護に向かわせる」

突然目標を見失つて茫然としている騎兵隊に本隊の援護に回るよう風技の伝達を飛ばし、巨大防壁を逆に利用して背後からの攻撃を凌ぐ算段をつけていたシンハは、悠介の力が想像以上だった事に作戦の修正を考える。

各国の無技の村に出撃させてある別働隊に連絡を付け、保護の名目で悠介と親しい者の身柄を優先的に確保させる。今回の戦いで世界に対してガゼツタの力を示す事に失敗しても、『邪神』をガゼツタに招く糸口は掴んでおきたい。

「確か、スンという娘だったな……伝達兵！」

長城付近に文字通り瞬間移動した悠介の率いる部隊は、とりあえず回れ右をしてガゼツタ軍に向き直ると、女王軍に山側へ下がるよう要請した。女王軍は『邪魔だから下がれ』と言われたようなもので、神民兵たちが憤りを見せる。

しかし、女王リシャレウスはゼシャールドやレイフォルドからも聞いていた闇神隊衛士が、これほどの力を使う者ならば、彼等に任

せた方が良いかもしれないという判断を下した。

女王の判断によって、『フォンクランク軍にガゼツタ軍を撃退する役目を与える』という名目で体面を保ちつつ、女王軍は壁の抜けた長城を潜ってポーザス山側に後退を始める。

悠介が長城を見上げると、二階部分から顔を出したゼシャルドが軽く笑みを向けて手を振った。暫し互いに視線を交し合う。

「女王軍、後退します」

「ヒヴォデイル衛士団、壁を迂回するガゼツタ軍の側面に迫っています」

「後方の騎兵が動き出しました、ガゼツタ軍と合流するつもりですよです」

「よし、ヒヴォデイルに合図を送る準備をしてくれ。他は水鏡軍の援護を頼む」

幾分、落ち着いた様子で指示を出す悠介に、衛士達がキビキビと動き出す。悠介はカスタマイズメニューに先程組み上げたマップアイテムデータを呼び出しながらそれを設置、反映させるタイミングを計っていた。

水鏡軍と対峙していたイザップナー陣営の精鋭団も状況が二転三転した上に、女王軍と水鏡軍、フォンクランク軍がガゼツタ軍相手に共闘を始めた事で混乱を極め、イザップナー最高指導官からの交戦命令を無視して女王軍に投降する者が出始めた。

やがて、巨大防壁を迂回して現われるガゼツタ軍。悠介は彼等が防壁に近い場所から現われた事を幸運とばかりに、マップアイテムデータを反映させる。悠介のカスタマイズによる地形干渉型の間接攻撃は、その性質上、対象の近くに干渉できるマップアイテムが必

要になる。巨防壁を逆利用しようとしたシンハの目論みは、そういう意味で裏目に出た。

防壁から伸びる光の壁が、白刃騎兵団をぐるりと囲む。百人にも及ぶ無技の戦士達を巨大な壁で囲むとなると、相当な量の石材が必要になるのだが、幸い材料は腐るほどあった。長城の上半分の壁が広い範囲に渡って次々と消えていく。

「へ、陛下！ これは……っ」

「まさか、俺たちごと壁で閉じ込める気か！」

巨大な石の壁に閉じ込められるような形で進軍を止められた白刃騎兵団の中で、シンハは先程の部隊ごと転移させるような出鱈目な神技を考えれば、巨防壁を幾つも出現させて部隊ごと囲む位のはやりかねない事に、今更ながら気がついた。

「くっ 俺の失策だ……常識を当て嵌めて考えるべきではなかった」

奇しくもイザップナー最高指導官と同じ轍^{てつ}を踏んでしまったシンハ率いるガゼツタ軍白刃騎兵団は、一度も交戦相手と刃を交える事無く『捕獲』されてしまったのだった。

その後、隔離防壁の傍まで追いついたヒヴォデイルの衛士団に外周部分の階段を上るよう指示を出した悠介は、隔離防壁の上から白刃騎兵団を見下ろしては『これで楽に殲滅できる』と高笑いをしているヒヴォデイルに攻撃不許可を申し渡し、後詰め^ごのガゼツタ軍に進軍中止を呼びかけた。ガゼツタ軍の騎兵隊は本隊を人質に取られてしまったので、動くに動けなくなった。

「残りの精鋭団を全て議会議堂に集結させる、こうなったら戦闘後の活動で巻き返すしかない！」

イザップナーは残った戦力で議会議堂に立て籠もると、民衆を煽って継続的な内乱状態を引き起こし、そこから巻き返しを図ろうと策を練る。まずは女王が隣国の兵を領内に入れた事でパウラの長城防壁を滅茶苦茶にされたと指摘、フォンクランクの策略に乗せられてガゼッタの侵略にフォンクランク軍の力を頼るといふ国辱的失策を犯したと流布する。

女王直属の側近となったゼシャールドはフォンクランクの工作員であると認定して『ブルガーデンの中枢はフォンクランクにしてやられた』という事実を逆に利用する事で、女王の失策はブルガーデンの全神民に屈辱を与えたとして糾弾する方向で動く。

その為には、ゼシャールドを何とかしなくてはならない。女王を援護するフォンクランクとの繋ぎ役を排除しておかなければ、エスヴォブス王の女王リシャレウスを起点とした融和政策に対抗できなくなる。水鏡に潜り込ませたベルーシャの任務遂行が待たれた。

「ただだつ　まだ何とかなる、ガゼッタ軍の処理に兵力を割かれる筈だからこつちに回せる分は……」

ブツブツと今後の展望に対する策を口にしつつ、民衆を煽る為の演説文を考える。イザップナーは書き損じた書類を乱暴に丸めて投げ捨てると、喉の渴きを癒す為に水差しとカップを使おうとして、ガシヤガシヤと陶器を鳴らした。

そこで初めて自分の手が酷く震えている事に気付く。手を懐ふとこに突っ込んで震えを隠しながら尚も策を練り続ける。

「とにかく女王の民衆支持を落とさねば……、おいっ！ ヴォーメストはどうした！ 伝達係っ！」

実際には、内乱を起こした当事者であるイザップナーにはもう、起死回生の策など残っていない。水鏡を制圧出来ず、精鋭団を撤退させた時点で既に勝負は付いていた。イザップナーが生き残る道は、女王の恩赦に縋るか、国を脱出する以外に残されていない。

「精鋭団の集結はどうなってる！ 早く報告に来んか！ まったく……なにをやっているんだ……急がないと……」

議会議堂の最高指導官執務室にて、独りブツブツと策を呟くイザップナーの元に、腹心のヴォーメストが現われる事はなかった。

28話：シンハの忠告

ガゼツタ軍の武装解除が行われる中、撤退を始めた精鋭団の動きを注視するゼシャールドは深追いしないよう指示を出しながら、これでブルガーデンとフォンクランクの関係は改善されるだろうと、一先ずの決着が見えた事に肩の荷が降りた気分です。

後はイザツプナー最高指導官の身柄拘束と、議会堂を制圧すればブルガーデンの内乱騒動は終わる。ガゼツタ軍の乱入という予想外の出来事もあったが、『災厄の邪神』を挑発した結果、ガゼツタの王が捕獲されるといふ盛大な自爆で、『災厄』を被っている。

「ゼシャールド殿、議会堂の制圧には行かれるのですか？」

「そうじゃのう、ワシも出向いた方が手っ取り早かるう」

風通しの良くなった水鏡本部で次の段取りを話し合いながら、ゼシャールドはパウラの都市部にあたる街並みを眺めた。そろそろ住民達が起き出して活動を始める頃だ。その都市部にある中枢施設、議会堂の迅速な制圧に向かう為、兵を運ぶ馬車が用意される。

常にゼシャールドの周囲を固めていた護衛の神民兵達が、この忙しい雑然とした空気の中、都市部に向かう制圧部隊や巨大隔離防壁から出てくる武装解除されたガゼツタ兵に気を取られて護衛対象から目を離れたその瞬間

「むっ？」

背後から一気に近付いたベルーシャがゼシャルドの左肩甲骨と胸椎の間に手を当て、自身の得意技である付与系水技を行使した。ベルーシャの水技は対象を瞬間的に凍結させる神技。相手の心臓を一瞬で凍らせて即死させるという怖ろしい暗殺神技だった。

神技による干渉への耐性は個人の神技力に左右されるのだが、幼い頃から実戦で鍛え上げられたベルーシャの神技力はかなり高く、ゼシャルドが如何な熟達した水技の使い手で神器による神技耐性の上昇効果を受けていても、心臓の一点に集中して行使された凍結の水技は防ぎ切れるモノではなかった。ピシリツと、何かが碎ける音がした。

確かな手応えを感じ、ベルーシャは任務の達成を確信して退路の確保に動く。ゆっくりと振り返りながら倒れ伏すかと思われたゼシャルドは、奥の部屋へ下がろうとするベルーシャの腕を掴んだ。最後の足掻きかと振り解こうとしたベルーシャは、仕留めた筈のゼシャルドにニヤリと笑みを向けられて息を呑む。

「っ！」

「残念じゃったの」

確かに心臓を凍らせた筈だという想いと同時に、ベルーシャはもう一度『凍結』を行使しようと手を伸ばす。が、ゼシャルドの方が早かった。

「昇天せい」

「う……？ ひあああああう」

ゼシャルドから反撃の水技を受けたベルーシャは、身体を弓な

りに仰け反らせながら硬直すると、甲高い悲鳴と共に崩れ落ちた。転がった床上でびくんびくんと痙攣を起こしている。

「な、何事ですか!」

「うむ、どうやら刺客じゃったらしい」

驚く護衛役達にそう説明しながら、ゼシャールドは床に散らばる指輪の欠片を拾い上げる。レイフォルドによって神器と共に届けられた白金の指輪の残骸。悠介曰く『身代わりの指輪』だ。

この指輪は、装備者が死亡に至るダメージを一度だけ肩代わりしてくれる効果を持つ。実は結構微妙な性能の効果で、例えば装備者が何らかの原因で即死級のダメージを受けた場合、そのダメージだけは肩代わりしてくれるが、効果はそこで御仕舞いになる。

毒で死に至る場合など、死に際まで発動する事は無く、最後の一撃となる毒のダメージだけ肩代わりしてくれる為、次の瞬間には毒で死に至る。溺死や焼死なども同じ。重い物の下敷きになる圧死でも同じ結果に繋がる。

剣や槍などの武器で突き刺されるような攻撃を受けた場合、その一撃が装備者に即死をもたらせる場合は肩代わり効果が発動するが、そのあと武器が刺さったままだったなら、やはり次の瞬間にはその傷が原因で死に至ってしまうのだ。

ぶつちやけ『神器』のようなアイテムとセットで装備しなければ、あまり効果に期待出来ない使い所の難しい代物といえたが、相手の暗殺手段が特殊だった事が幸いした。

今回の場合は、ベルーシャの『凍結』によって心臓を凍り付かされたゼシャールドに、指輪が即死判定を出して肩代わり効果を発動させた。その瞬間から神器の回復効果が凍りついた心臓を癒し始め、ダメージの肩代わりで気を失わなかったゼシャールド自身の水技に

よる治癒も行使され、体力も殆ど無尽蔵なので心臓に掛かった一瞬の負担にも十分耐えられたのだ。

「死んだのですか……？」

「いや、最初は血管を狙ったんじゃが中々に神技力が強くての」

彼女の腕に触れた時、身体に異常がある事を感じ取れたのでソコを突いたのだが、思いのほか効果があったとゼシャルドは肩を竦めてみせる。

ベルーシャは子供の頃に神技の扱いを誤って全身に大怪我を負うという事故に遭い、それが原因で神経に障害が残っていた。

痛みを殆ど感じられない身体になった彼女は、苦痛や怪我に強いその体質と、通常なら危険視される事の無い付与系水技の、特殊な使い手である事とも相俟って暗殺者としての価値を見出され、今まで裏の仕事を中心に使われていたのだ。

体質と任務のせいか、普段から感情を表に出さない冷たい印象に、同僚達からは『氷女』などと揶揄されている。

ゼシャルドは彼女の神経を癒しながら直接刺激を与えて絶頂に至らせる事で失神させた。子供の頃からこれまで、身体に刺激を感じる事のなかったベルーシャにとって、それは破滅的な快樂の奔流となつて彼女の意識を飛ばしたのだ。

ベルーシャの神技は相手に密着する距離で触れていないと効果が発揮されないので、拘束して転がしておけば危険は無いとしてトドメは刺さない処置が取られた。

ようやく痙攣が治まって来た氷女と揶揄される刺客は、ほんのり頬を染めた幸せそうな表情で気絶していたのだった。

水鏡本部内で発生した暗殺騒ぎは僅かな関係者の間だけで処理され、神民兵を率いたゼシャルドが議会堂制圧に向かった頃、長城前の巨大隔離防壁の前に並ぶ武装解除されたガゼツタ兵の中に、手枷を付けられていても悠然と立つシンハの姿があった。

それを見つけた悠介は文句の一つも言ってやろうかと其方に足を向けたが、二人の女官を引き連れた女王がシンハと向かい合う光景に立ち止まる。

水色の長い髪が特徴的な、清楚な雰囲気を持つ美しい女王リシャレウス。お供の女官も中々の器量良しで、それぞれ雰囲気は正反対だが、同じ顔を持つ双子のようだ。

ヴォレット姫がロケット花火なら、リシャレウス女王は清流だなあ等と感想を持った悠介は『ブルガーデンには美人さんが多い』と心のデータベースにチェックを入れた。

つかつかとシンハの前に歩み寄ったりリシャレウスは、細い眉を顰めて睨みつけると強い口調で言い放つ。

「あなたは……っ 何をしているのですか!」

「リシャカ、見ての通りだ。折角の晴れ舞台が台無しになってしまった」

『戦は時の運だな』などと肩を竦めて見せるシンハに、リシャレウスは心苦しいような表情を向けた。

「何故こんな無茶な戦いを」

「無茶ではないぞ、少々闇神隊の力を見誤ったがな」

あの力こそが『無茶』であり、あれが無ければ勝っていたと悪びれる様子も無いシンハは、うち（ガゼツタ）も一枚岩ではないので世継ぎが生まれる前に行動を起こす必要もあつたのだと、少しだけ内情を語る。

「私を、討つつもりだったのですか」

「まさか。解放してやるつもりだったさ」

「解放ですって？ 私が籠の中の鳥だとても仰りたいの？」

「自覚がないのか？ それとも、強がりには相変わらずか？」

気丈に振舞うリシャレウスの胸の内を見透かすようなシンハの態度に、リシャレウスから軽い溜め息と共に呟きがこぼれる。

「傲慢な人」

「そうだとも、王は傲慢でなければ自国の民一族を導くことなどできん」

どうやら顔見知りであつたらしいシンハとリシャレウスの会話に、痴話げんかのような雰囲気を感じとつた悠介は、もう少し二人のやり取りを見守る事にした。

「お前、さつきから陛下に対して無礼だぞ！」

シンハのリシャレウスに対する態度に堪え兼ねたお供の女官、双子の姉であるマーシャが批難の言葉を向ける。

「俺たちは旧知の仲なのだよ、なあリシャ」

「む、昔の事です」

だが、まるで意に介さないシンハのふてぶてしくも馴れ馴れしい態度と、それに対して強く不快を示さないリシャレウスの様子に、マーシャは嫉妬に近い感情に駆られて悪態の言葉を口にする。

「無技の癖に！」

その瞬間、獰猛な笑みを浮かべて笑い出したシンハに、マーシャは思わず後退った。

「聞いたかりシャ、お前にもっとも近い親しい者の認識でさえこうなのだ」

「……」

「え？ え？」

言い返せず唇を噛むリシャレウス。戸惑いと困惑の表情で二人の様子に視線を向けていたマーシャは、妹のサーシャに今の発言について指摘される。

「陛下は無技人を隷属階級から解放する事を願って政策をしている」

街で普通に生活をさせる事で、神技人と無技人の双方が内面に持つ、互いの存在に対する既成概念の壁を崩そうとしているのだ。無技人の所有化はその為の布石として打った保護政策の一環である。

その女王に一番近い人間が無技人を差別するような発言をした事に突っ込まれているのだ、と。リシャレウスに恥を掻かせる事になつて焦ったマーシャは、慌てて言い繕った。

「そ、そういう意味で言ったんじゃない！」

王族に対しての敬意が足りないと身分を上げて言及するが

「俺もガゼッタの王なのだが、お前からは敬意の欠片も感じぬなあ」
「貴方は我が国の捕虜でしょ！」

「ああ、お前達とは一戦も交えず、フォンクランクの闇神隊にしてやられてな」

「うぐ……っ」

思いつ切り正論と事実と皮肉で切り返された。さらに駄目押しまで付け加えられる。

「そう言えば、水鏡を指揮する御老体もフォンクランク所縁の者だったな。はて、ここはブルガーデンという国だったと思うが」

「うぐぐ……っ」

割と自爆体質なマーシヤを宥めたりシヤレウスは、シンハの意味深な口調に対して少し語調を強めながら反論した。

「フォンクランクには、今回少し力を借りただけです」

向こうの政策、等民制度を受け入れた訳ではないとするリシヤレウスだったが、シンハは『例え心情的にそうであっても、現実的にはどうなるのだ？』とリシヤレウスの外交手腕を問う。エスヴォブス王の融和政策を躲せるのかと。

「フォンクランク軍、或いは水鏡の指導者にこのまま居座られた場

合、追い出せるのか？」

それを聞いたマーシャがハツとした表情を見せた。サーシャも懸念はしていたらしく、僅かに眼を細める。結局、パウラの指導者を追い出して主導権を握ったフォンクランクの息が掛かる者が、代わりの座に就くだけではないか？ と追求するシンハ。

「わ、私は……」

その不安が無かった訳ではないリシャレウスは、俯き加減に瞳を揺らす。他にどうしようもなかった、イザップナーに対抗する術がなかったのだと内心で叫び、シンハに仄めかされた『籠の中の鳥』という言葉が胸中を渦巻く。

「で、俺たちの処遇はどうする？」

リシャレウスを追い詰めるような問い掛けから一転、肩の力を抜いて口調を戻したシンハは自分達の処遇を尋ねた。一応はブルガーデンの捕虜という事になっているので、女王の裁断で決められるのだ。

「……私の名において、あなた方には即刻ブルガーデン領内からの退去を命じます」

女王の権限でシンハ達の放免と国外退去命令を告げるリシャレウス。このまま帰してよろしいのですかと女官の二人が再考を促すも彼女の決意は固かった。実質的にガゼツタ軍からの被害は無かったので、兵達にも特に不満気な様子は見られない。

突撃の迫力には驚かされたが、結局は何も出来ずに捕虜になった事が神民兵達の溜飲を下げたという部分もある。

「シンハ、私は必ずお父様の理想を実現します。私が倒れるその時まで、この国に手を出さないと約束して」

「見守る……と、いう事か。　良いだろう、暫らくは様子をみてやる」

あくまで傲慢に上から目線なシンハの在り方。女官の二人は眉を顰めたが、リシャレウスは表情を緩めて微笑を浮かべる。

「ほんとに、貴方という人は……昔から変わらない」

「お前も人の事は言えまい。まあ、外見は随分と美しくなったものだがな」

「な、何を仰つてやがるのかしらっ！」

「リシャレウス様、言葉、言葉！」

昔馴染みの、恋心を持った事もあった相手からの不意打ちに、ついつつかり水巫女の女王というオーラの奥深くに封印していた地を出してしまうリシャレウス。マーシャに指摘されて口元を抑えながら赤面する姿は、彼女の素顔である可憐な一面を見せていた。

「ふっ」

「と、とにかく、ガゼツタ軍は放免にします。彼等の枷を」

リシャレウスはシンハ達の枷を外すよう、離れた所に控えていた私兵となる神民兵に指示を出す。

自分達の女王に対するシンハの不遜な態度に不満はあれど、女官の二人と違つて女王が話をしている所に割り込む事の許されない彼等は、『所詮は我々の捕虜だ』と優越感の態度を見せる事で意趣返しを狙っていた。

その意図を感じ取ったシンハは状況と手札を分析し、彼等の侮りを叩き潰してガゼッタの戦士に対するインパクトを与える為に、切っても良いカードをプライドと闘争心も籠めながら切って見せる。

「一つ忠告しておいてやる、白族の戦士にとって武器など道具の一つに過ぎん」

獰猛な笑みを浮かべてそんな事を語り始めるシンハに、神民兵達は足を止めて怪訝な表情を向ける。リシャレウスはこういう顔を見せた時のシンハを知っているので、少し後退った。

「道具など無くとも、俺たちは身体一つで戦う事が出来るのだ。このようになっ！」

シンハは枷で拘束された両腕を胸の前に持ち上げると、それを力尽くで引き千切って見せた。すると、シンハに倣って他の白刃騎兵団員達も次々と枷を引き千切る。無技人用の木製枷とはいえ、拘束具を素手で破壊する腕力に神民兵達は目を瞠った。

但し、白刃騎兵団の中に混じっている神技人には真似の出来ない事らしく、こっちは普通に外してくれとアピールしている。

そうして固まっている神民兵達を尻目に、獣のような身のこなしで地を蹴ったシンハは、一気にリシャレウスとの間合いを詰めた。女官の二人が反応するも、既にリシャレウスの懐に飛び込まれているので、水技の防御も攻撃も出来ない。

「……なっ！」

「甘いのだよ、お前は」

驚いて見開かれた空色の瞳を覗き込みながら、シンハは彼女の頭部に手を伸ばしてスツと一束、水色の髪を梳くい上げると、その髪にキスを落として身を離す。入れ替わるようにリシャレウスの傍へ駆け寄った女官の二人がシンハを威嚇した。

シンハはそれを嘲笑うように背を向け、さつさと仲間の所へ戻って行く。今の一連の動きは、やろうと思えば何時でも枷を破壊してお前達を殲滅できたという意味が籠められていた。

事実、女王の髪に接吻をするのではなく、そのまま人質に取っつまえば、ブルガーデン側は手出し出来なくなっていたのだ。

撤退準備を始めるガゼツタ軍に警戒の籠った視線を向けるブルガーデンの神民兵。俄かに剣呑な空気が漂い始めたその時、黒髪に黒い隊服のフォンクランク軍閥神隊長が、ガゼツタ軍白刃騎兵団長に歩み寄る。

今回の戦いで或る意味、大暴れを見せた『無茶』な力を振るう閥神隊長の登場に、ガゼツタ軍の戦士達は若干緊張を見せた。

「くらっ シンハ！」

「ユースケか、お前には完全にしてやられたな」

「お陰でこつちはまた面倒な事になったじゃないか、あんま力見せる気無かったのに」

どーしてくれろと詰め寄る悠介。それほど怒り心頭といった雰囲気でもない悠介の態度に、勝者の余裕か、器の深さかと観察の目を向けるシンハは、しれっとした態度で答えながら重要な言葉^{キーワード}を口にした。

「お前の力になるさ、邪神としての役割を果たせるようにな」

「！」

思わず表情を強張らせた悠介にシンハは軽く笑ってみせる。悠介が邪神としてこの地に喚ばれた事を知っているのは、ゼシャルドの他はスンくらいしか居ない筈なのだ。二人の会話が聞こえていた顔の赤いリシャレウスは、邪神という言葉に小首を傾げる。

「この地でお前の存在は大きく、そして薄い」

俺たちは数千年の歴史の上に立っているからなと、召喚されて来た悠介の立場、存在に対する見解を述べるシンハ。古来より数百年、数千年と受け継がれて来た白族復興の願いは重く、厚い。

「白族帝国の復活は神技人世界の滅亡を指す、邪神の役割はその切っ掛けとなる事だ」

「なんでだよ、共存しろよ」

結論から入るシンハに、悠介はどちらかが滅びなければイケない明確な理由なりルールでもあるのかと突っ込む。邪神の役割については周りの耳が気になるので深く突っ込めないでいた。

「白族社会を滅亡させた神技人が繁栄しているのなら、白族の繁栄は神技人社会の滅亡が条件となる」

「答えになってねーよ、それじゃこの先また同じ事が繰り返されるだけだろうが」

「そうだとも、永遠の繁栄など無い。これはカルツイオの大地で繰り返される世界の営みだ」

「……お前」

何かを知った上での確信染みた自信を覗わせるシンハの堂々とした言葉に、悠介はシンハが邪神の何を知っているのか気になった。白族の里には、三千年に及ぶ歴史の流れが記されているという。

「邪神の歴史が記される里で待つ。お前は必ずガゼツタに来る事になるだろう」

やけに含みを持たせた言い方が気になった悠介は、それはどういう意味かと訊ねようとした。が、その時ガゼツタ軍に所属する風技の伝達係らしき兵が馬を引いて近付いて来ると、シンハに何事か耳打ちする。俄かに顔を曇らせるシンハ。

「訂正だ、興味があるなら見に来るといい。歓迎するぞ」

そう言っつて馬に跨ったシンハは、白刃騎兵団に撤退命令を出した。

「引き揚げだ！」

長城から数百メートル離れた所で全軍との合流を果たしたガゼツタ軍は、乾き始めた地面に馬の蹄の音を響かせ、土煙を上げながら長城沿いにガゼツタ方面へ向けて去って行った。

「存在が薄いか……」

ガゼツタ軍の撤退を見送って一息吐きながら呟いた悠介は、とりあえず巨大隔離防壁の解体と長城の修理を始めるのだった。なにせ巨大隔離防壁を構築する為にかなりの範囲に渡って長城の上半分の壁を材料に削り取ってしまったのだ。

「しかし実際、迷惑以外何物でもないよな、これ」

削り取られた部分の部屋で寝ていた住人達は、朝起きたら部屋が無くなっていたという状況に啞然としていたそうなの。

28話・シンハの忠告（後書き）

多分、次でこの章は片が付く筈……。

29話：闇神隊の帰還

朝起きたら世界が変わっていた。

と、彼女はそのとき思った。何時も通りに起床して水の団制服に着替え、水鏡の本部に向かおうと部屋を出ると、何故か水鏡の神民兵が廊下を歩いていた。プラウシヤが目を覚ました時、議会議堂は既に水鏡の部隊によって制圧された後だった。

プラウシヤは元々水鏡の中でもイザツプナー派とは見做されておらず、今回の内乱騒ぎにも参加せず部屋で寝ていた事から、彼女を疑う者はいない。よって、身柄を拘束されるでもなく、部屋を出て自由に歩き回ることが出来た。

イザツプナーも腹心だったヴォーメストからそういう娘が居るといふ話だけは聞いていたが、詳しい活動内容にまで気を割いていないので、彼の口からプラウシヤの立場が語られることもない。

唯一それら諜報活動の人選や工作の管理をしていたヴォーメストは、プラウシヤの役回りを知る数人の火の団団員と共に行方不明になっている。イザツプナーは『ヴォーメストめ、逃げおつたな!』と喚んでいたとか。

パウラの都市部では朝から水鏡所属の精鋭団と神民兵が、イザツプナー派勢力に属する官僚の身柄確保や施設制圧に走り回り、物々しくも整然とした雰囲気を中心街の通りを馬車が駆け抜けていく。

パウラでイザツプナー体制が終焉を迎えた朝であった。

「すること、なくなっちゃった……」

長城の上道通りをあても無く歩いてきたプラウシヤは、移動店舗などがゴツソリ無くなってやけにスッキリした通りの先に、見慣れない制服の精鋭団員らしき姿を見つけて、何となく其方に意識を向ける。

欄干の縁に頬杖を付いて遠くを眺めているその人物は、真っ黒な制服にマントを纏い、髪の色も黒だった。

「……え？ 違う、精鋭団じゃない」

フォンクランク宮殿衛士の紋章を付けた黒い隊服を纏うその人物が、噂に聞く『ギアホークの英雄』だと気付いたプラウシヤは、思わず立ち止まって凝視する。この場合、足が竦んでしまったと表現した方が正しいだろう。

気配を感じ取ったのか、闇神隊の隊服を纏うその人物がプラウシヤを振り返った。

警戒と動揺を滲ませた視線を向ける精鋭団員らしき制服姿の少女に気が付いた悠介は、苦笑しながら声を掛けた。

「そんなに怯えなくても」

「お、怯えてなんかいません！」

ビクリと肩を震わせては思いつき裏声で反論され、悠介は『しまった、ここは天候の話題入りから入るべきだったか!』などと、選択ミスを悔いながら普通に交流を試みる。

「あー、ごめん」

「い、いえ……」

見た感じではスンと同一年くらいの印象で、スンと打ち解け合える以前の頃のような警戒感というか、溝のような壁を感じる。初対面でもほんの数時間前までは敵対していたのだから、当然の反応だろうなあと思いつつ、悠介は自然体で接した。

プラウシヤは目の前の男から噂に聞いていた『一人で精鋭団を壊滅させる猛者』のようなイメージが浮かばず、少し困惑していた。容姿も少し珍しい見た目で、神技の波動も今まで感じた事の無いように分からない感覚だったが、なんというか『普通の人』という印象しか湧かないのだ。

「あなたは、本当にギアホークの英雄って言われてる人なんですか？」

「あゝそれね……あれは正直、失敗だった」

ギアホーク砦の事は失敗したと思っていると聞き、プラウシヤは驚く。謙遜している風でもなく、本当に失敗したという表情で頭を掻く仕草を見せる悠介に、自然と理由を訊ねてみる。

「別に殲滅なんかしなくても、今回みたいに閉じ込めて捕らえればよかったんだ」

フォンクランク領内で現役のブルガーデン精鋭団である風の団を

多数確保、皆の非戦闘員に犠牲者大勢、この条件なら今回のような内乱騒ぎを待たずとも、もっと迅速にイザップナーを失脚させられていたかもしれない。

『たられば』だけどねと、悠介は自嘲する。プラウシヤは『今回ここで何があったのかは分からなかったが、『殲滅しなくても良かった』という悠介の言葉に反応した。

「どうして、そうしなかったんですか？」

「あん時は気持ちに余裕が無かったからな」

『捕らえておけば良かった』などと簡単に口に出る程の実力を持っているなら、何故そうしてくれなかったのか、そうしてくれていれば、姉は死なずに済んだかもしれない。プラウシヤの心に湧いたそんな感情が、一つの言葉となってポツリとこぼれた。

「……………どうして」

その意図せぬ呟きに、思いも寄らなかった答えが返される。

「怖かったから」

「え？」

「死にたくなかったしね」

湧き上がる感情の渦から意識を引き戻されたプラウシヤは『英雄』が答えた意外な理由に目を丸くした。

「英雄って呼ばれる精鋭の衛士が、死を恐れるんですか？」

「そりゃな、だって俺中身は普通の一般人だもん」

それを聞いたプラウシヤは、最初に悠介と言葉を交わして感じた『普通の人』という印象を思い出し、姉の事を考える。記憶に残る姉の姿も、家に居る時はごく普通の女性だったと思う。任務の地ではどうだったのか知らない。

「ギアホーク砦で、何があつたんですか？」

ブルガーデンの一般民や末端の神民兵には詳しい内容が伝わっていないのだ。

当事者である『ギアホークの英雄』に語られた内容、沢山の人が死んだということ、酷い事をされた人がいたということ、事件の全容を詳しく聞き出したプラウシヤは、自分が如何に無知であつたのかを思い知った。

姉の風技は攻撃系ではないので、話にあつた人達に直接危害を加えたりはしてはいないと思うも、その作戦に団員として参加していたことは事実。仕方が無かつたとは思いたくないが、姉と戦って、姉を倒した人の生の声を聞く事が出来た意味は大きいと思える。

所々欠損していたが、姉の遺体は綺麗だった。それは『彼』が神技によつて修復してくれたモノらしい。悠介の人となりを知つた事で、プラウシヤは気持ちに整理をつける事が出来た。

「隊長ー！ 早速ブルガーデン娘を引つ掛けてるんすかあ〜」

「ちやうわっ お前と一緒にすんな」

長城の下から囃し立てるような部下フョウケの声が響き、悠介は身を乗り出してツッコミを返す。

「それじゃあ、俺は行くから」

「あ、はい、お話ありがとうございます」

漆黒のマントを翻して去っていく『ギアホークの英雄』を、プラウシヤは翳りが取れたような表情で見送るのだった。

悠介達フオンクラク軍は一旦ディアノース砦まで引き上げ、衛士団の一部はそのまま砦に駐留して、闇神隊はサンクアディエツトに帰還する事になる。ヒヴォディルも一緒だ。彼の手柄は『三倍以上の敵を悠介の敷く罠に追い込んだ』という内容にしておいた。

ゼシャルドは政務関連の業務引継ぎやエスヴォブス王とリシヤレウス女王との会談を設定するなどの作業を行う為、あと四、五日はパウラに残って活動を続ける予定だ。

その後は『神器を女王にお返し』して側近の任を解かれ、ルフク村に帰って隠居生活に戻るつもりらしい。

闇神隊とヒヴォディルがサンクアディエツトに帰還したのはこの日から二日後、ザッルナーの火月の十日目の事だった。

『ギアホークの英雄』が、今度は『ディアノースの英雄』としてフオンクラクに勝利をもたらせた。サンクアディエツトの街はそんな噂で持ちきりである。ガゼツタに関する情報は不自然なほど含まれていない。エスヴォブス王の何時もの情報工作であつた。

闇神隊一行は多くのフオンクラク民に凱旋を祝がいせんされながら、ヴォルアンス宮殿に帰還した。

「戻ったかつ ユースケ！」

「おかえりなさい、ユースケさん」

「ただいま　って、なんでスンが宮殿（みやと）に？」

帰還早々予想外の出迎えを受けて驚く悠介。ヴォレットは『わらわが呼んだのじゃ』と結論だけ答える。悠介達が皆建設に出発した日の夕方から宮殿に招き、ずっと一緒に過ごしていたらしい。理由を訊ねてもはぐらかされたが、大体察しはついた。

「スンが一人では寂しかろうと思ってな、ゼシャールドの事も聞かせてやりたかったし」

『要するに自分が寂しかったんだな』

「姫様！　不肖ながらこのヒヴォデイル、無事任務を果たして帰還致しました！」

「おお、ご苦労であったな。父様もお喜びになるじやろう」

ヒヴォデイルを適当に労ったヴォレットは任務の話聞かせよと悠介にせっついていっている。ゼシャールドも数日中に戻るとあって、色々ご機嫌のようだった。ズルズルと何時もの部屋に連行されていく悠介を見送ったヒヴォデイルは、その後にくスンの姿を見て、ガゼツタ軍の白刃騎兵団とシン八王を思い出す。

「ふむ……どうも彼等からは、国軍というよりも傭兵に近い戦闘集団のような気配を感じたな」

あれは国家間の駆引きなど考えず、邪魔なモノは蹴散らしていく霸王タイプの間人だと、シン八の事を分析する。

悠介を取り込もうと画策していたようだが、ガゼツタ覇権主義国に悠介の作る特殊装備やパウラ戦で見せたような出鱈目な神技が加われば、

カルツイオに普く神技人の国々は簡単に蹂躪されてしまつだろつ。

「これは、婚約者候補組が愚行に及ばないよう、僕が抑え役をしないかね」

事ここに至つて、ヒヴォデイルは悠介に付くことを選んだ。積極的に交流していれば分かる事だが、悠介には身分や権力に対する野心が希薄で、ヴォレットの傍に親しく仕えていても、その夫の座を狙うような素振りは皆無と言つて良いほど全く感じられない。

それが分かつてしまえば、婚約者候補組の焦りは実に滑稽に感じられる。よしんば、悠介にその気が湧いたとしても、それはそれで別に良いのでは無いかとさえ思えてくる。

今までの人生で、名門ヴォーアス家の家督でありながら神技力が低い事に対する自身のコンプレックスにより、成り上がる事ばかり考えていたヒヴォデイルは、自然体で接する事の出来る戦友を得た事で価値観に変化が起き始めていた。

「まあ、それはそれとして。国王様からの褒美はなつにつかなかつ」

初陣を果たして実戦を経験し、無事に帰還したという事実も彼の気持ちに余裕をもたらせる結果に繋がっていた。婚約者候補組の中でも、また宮殿衛士の中でも、実戦で手柄を上げた衛士はここ最近あまり居ない。そもそも機会が無いのだから。

この日、宮殿上層階でスキップしながら廊下に行くヒヴォデイルの姿が、使用人達の間で何度か目撃されたそうなの。

29話：闇神隊の帰還（後書き）

今回で一先ず、フォンクランクとブルガーデンのゴタゴタは決着が付きました。次からはまたノンビリモードになる予定です。

30話・任務終了

闇神隊が帰還した翌日、任務で潰れてしまった休暇の残りを与えられた悠介は、ついでにスンをルフク村まで連れて帰る事にした。今回、パウラでの働きで悠介に与えられる褒美は王の側近や官僚達も交えて審議中である。

正式にフォンクランク貴族としての相応の身分を与えるべきか、高民区に屋敷を持たせる程度に留めておくかといった具合らしい。その審議にも微妙に絡む問題として、領内にある無技の村にガゼツタ軍が現れたという報告が現地の管理者から上がっていた。

パウラの内乱に関する噂に、不自然な程ガゼツタの情報が抜け落ちていたのはこの問題の為だったりする。

「そんじゃ、また三日後辺りにでも」

「お疲れ様でした、隊長」

「道中お気をつけて」

「また遊びにくるとよいぞ、スン」

ヴォレットと部下達に見送られながら、悠介とスンを乗せた衛士隊馬車はルフクの村に向けて宮殿を出発した。

「そつえば初めてですね、ユースケさんと二人っきりで馬車に乗るのって」

「だな。それはそうと、ヴォレットに振り回されて疲れなかったか？」

「ううん、楽しかったですよ？」
「そっか」

ノンビリと雑談に興じながら街道に行く。宮殿で過ごした六日間
の出来事を、スンが掻い摘んで話してくれる。一緒に食事をしたり、
カードで遊んだり、夜遅くまでお喋りをしてそのまま一緒に眠った
りもしたそうだ。

ヴォレットの気を引きたい婚約者候補らしき紳士達にはあまりい
い顔をされなかったが、スンを邪険に扱おうとするとヴォレットの
機嫌が悪くなるので、彼等も表面的には『紳士的』に接してくれて
いたという。

「へーえ、そういや普段はあんまヴォレットの所に顔出さないよな
あ、ヒヴォデイル以外の婚約者候補って」

「なんでも、普段はその人が中心ヒヴォデイルになって婚約者候補の人達を仲間
内で牽制してるそうで……」

ヴォレットも頻繁にアピールを仕掛けられること無く静かに過ご
せているらしい。闇神隊がディアノース砦に向いていた間、彼等
は悠介もヒヴォデイルも居ない今がチャンスとばかりに、積極的な
自己アピールに動いてたようだ。

「神技人にはもう慣れた？」

「……まだ、ちょっと怖いですけど……前ほどじゃないです」
「そか」

「あ、ユースケさんは先生と同じくらい一緒に居ると安心しますよ
？」

そんな調子で順調に街道を走り抜け、昼過ぎ頃にはルフク村に到着した。

「あつ スン！ ユースケ！」
「バハナおばさん、ただいまー」
「なんか慌ててないか？」

村に入り、ゼシャルドの家の前で馬車を停めていると、何処かそわそわした様子のバハナが、収穫祭で役員をやっていた村のおじさん達数人と一緒に駆け寄って来た。

「よかった、ちゃんと帰ってきて……アンタたち無事だったんだね」

思わず顔を見合わせた悠介とスンは、一体何がどうしたのかとバハナ達に安堵の理由を訊ねる。聞けば数日前、丁度パウラで悠介達が戦っていた日にガゼツタ軍を名乗る無技の戦士達が村を訪れ、スンを探していたのだという。

スンはサンクアディエツトの宮殿に呼ばれて留守にしていると聞いた彼等は「先手を打たれた」とか「まさか予知能力が」などと相談し合い、不在なら致し方あるまいと諦めた様子で風技の民に何やら言い付けていた。

『この国での生活、今の境遇に不満のある者は、我等と共にガゼツタへ』

気を取り直した彼等は広場に村人達を集めて本来の目的であるガゼツタへの亡命を呼び掛けた。

しかし、ルフク村は元々神技人であるゼシャーランドが同じ村民として住んでいた事で、神技人支配者による徴収が行われる事もなく、また最近も悠介の仕官に付いてきたオマケなどで色々と優遇されている環境なだけに、不満を持つ者は殆どいなかった。

僅かに数人、呼び掛けに応じた者を連れて彼等は引き上げて行ったそうだ。他の村にも、同じ様にガゼツタ軍を名乗る使者が訪れていたらしい事が隣村との交流で明らかになっている。

悠介は宮殿内でもそういつた話を聞かなかつたので、エスヴオブス王が緘口令を敷いていた可能性を考えた。

「保護条例に対する配慮なんだろうなあ、やっぱり」

ちなみに、応じた者の中には村八分状態寸前にあつたタリスも含まれている。彼は収穫祭でやらかした痴態に今までの素行によるツケが回って村内でも微妙な立場になっており、常々環境を変えたいと考えていた。

ガゼツタ軍の彼等が神技人を部下として使っている姿に憧れたという面もあつたようだ。

シンハが別れ際に言った言葉と訂正の意味が繋がりに、悠介は合点がいった。と同時に、今後もスンを狙われる可能性がある事に思い至る。ヒヴォデイルの分析やシンハの態度から、彼が自分をガゼツタに呼びたがっているらしい事は何となく感じていた。

「強引な手段にでないとも限らないからなあ」

ガゼツタが掲げる国策の内容が内容なだけに、親善大使というよ
うな形で出向く事も難しい。

単にガゼツタの繁栄や白族帝国とやらの復興を目指しているだけ
ならともかく、その実現が神技人社会の崩壊、神技人が支配する世
界の滅亡を条件にしているのだから。　しかし

見識を深めよ

この世界における自分自身の存在理由。邪神についての知識。そ
れらの手掛かりを得られるという意味では、シンハの言う白族の里
に行ってみるのも一つの手だと考えられる。

悠介はとりあえず、ガゼツタの事もスンの事も、邪神じぶんの事も含め
てゼシャルドが帰ってきてから相談しようとして一時棚上げした。

議会議堂に設けられた一室にて、『返却』された神器を手に、リシ
ヤレウスは安堵半分、戸惑い半分の心境でゼシャルドと向かい合
う。各業務の引継ぎも終わり、ゼシャルドはフォンクランクに帰
国する為に神器の返却と側近解任の申し出に訪れていた。

「陛下もこれから大変でしょうからな、神器が大いに役立ってくれ
るでしょう」

「本当に、よろしいのですか？　それに……」

最初の宣言通り、事が済んだので帰国しようとするゼシャルド
に、リシヤレウスは却って猜疑心が湧く。後日ディアノース砦にて

会談を行うに先立ち、エスヴォブス王から何かしらの要求を突きつけられる覚悟はあったのだ。

「心配せずとも、フォンクラंकはブルガーデンの滅亡や従属国化は望んでおらんよ」

「ですが、私はこの国に等民制度を導入するつもりは無いのですよ？」

イザツプナーがフォンクラंकを挑発する意味で強引な等民制度止要求を行っていた事実があるだけに、その逆を要求された場合の事を考えると、数々の被害を負わせていた経緯も踏まえて何処かで妥協を図らざるを得ない状況に追い込まれる。

「会談でも等民制度の押し付けはしないじゃろう、なにせ今一つ王としての覇気の足りぬ奴じゃからして、本当に友好を願つとるよ。例えばブルガーデンを手に入れる力と策を持っていても、あやつはソレをしない奴なのじゃ」

ゼシャルドはそう言つて笑つと、あからさまに安堵した表情になつているリシャレウスと未だ不安そうな気配を保つ女官の二人に、気を引き締める意味で付け加える。

「まあ、そういう王がいても良いのではないかの？ 対極のような王もおることじゃな」

ガゼツタとシン八王の話題に、リシャレウスは表情を引き締めた。シン八がつくろうとして世界は神技人と無技人の関係が逆転した世界。ガゼツタの力は未知数ながら、あれ程の戦力を誰にも悟られず戦場に送り込めるだけの力がある事は分かっている。

「いつか 彼とも雌雄を決する時が来るのかもかもしれません……」
「なあに、そう悲観する事もないと思うぞい？」

少なくとも、シンハが野望成就の当て込みに行っている力と存在は、今のところ平和を望んでいる。案外、共存共栄を説得されるやもしれぬと、ゼシャルドは語った。邪神に関してはまだ伏せられる範囲では伏せておきたいので、あまり詳しく触れないでおく。

「常に最善の結果を思い描きながら、それに向けて日々の努力を怠らぬ事じゃよ」

主義思想は違えど互いに手を取り合える関係という理想を『理想』として追う事も悪いことではない。ゼシャルドはそんな言葉を残して、女王との謁見部屋を後にした。

中枢区画の廊下に出たゼシャルドは、議会議堂の出口に向かおうと歩き出した所で覚えのある神技の波動を感じて足を止めた。今は無人になっている筈の最高指導官執務室から人の気配を感じる。

灯りが消えた暗い執務室。奥の壁にブルガーデンの旗と、正面に執務用の大きな机。その机の前にポツリと佇む人影を認め、ゼシャルドは声を掛けた。

「そこで、なにをしておるのじゃね？」
「……」

別の場所にある収容施設に投獄されている筈の女性がゆっくりと振り返る。

「ここにはもう、イザップナーもヴォーメストもおらんぞ？」
「……………」

ベルーシャは黙って俯いた。任務失敗の報告に来たものの、報告する相手はもう居ない。組織が無くなり、居場所も無くなった。

「……………帰るところ、無くなった」
「ふむ……………」

ゼシャルドは無人の執務室で一人佇むベルーシャの手を取り、今し方退室してきた謁見部屋へと誘う。今ならまだリシャレウスも居る筈だ。ゼシャルドに触れられた瞬間、ビクリと身を震わせたベルーシャだったが、大人しく手を引かれて付いて来る。

「身体感覚は戻っておるようじゃの。お前さんにはもう一つ、選択を与えてやるう」
「……………」

ベルーシャは久しく感じていなかった人の手の温もりを覚えながら、手を引かれるままに付いて行くのだった。

議会議堂の出入り口の所で、ゼシャルドはこちらでの教え子と顔を合わせた。

「あ、ゼシャールド指導官」
「おお、プラウシヤ君か」

以前は何処か陰のある印象があつた彼女も、今では本来の姿なのである。うすつきりした明るい表情を見せている。議会議堂が制圧された当日に長城の上道で闇神隊長ユースケと話をしている姿が目撃されていたので、何か気持ちの整理が付くような話が出来たのかもしれない。

「今から帰国されるんですか？」

「うむ、講義が中途になつてしまつてスマンのう」

「いいえ、指導官の講義はとても参考になりました」

そのまま話をしながらパウラの馬車乗り場まで歩き、そこで別れる。

「またパウラまで御越した時は、声を掛けて下さいね」

「ほっほっ お前さんもフォンクランクに出向く事があれば、ワシの住む村まで遊びに来るとええ」

「はい、その時はよろしくお願いします」

プラウシヤはゼシャールドの言葉に込められた意味を正確に読み取つてそう返事をした。今後、女王リシャレウスの政策によって、ブルガーデン国内では一つの価値観が否定される事により、一部で劇的な変化を見られる事が予想される。

イザツプナーが無技の民を亜人指定にしたのは、非等民制の中に絶対的な虐げられる存在を置く事で、能力主義によつて国の定めた労働に従事する事を強制される人々の鬱憤を解消し、不満の矛先を逸らせる意味合いもあつた。

能力主義の効率化により、他の等民制を布く大国に匹敵する生産

性を得る事で国力を増していったのだ。

今後は労働の強制部分が緩められる傾向になる為、主に低等神民の亡命者も増える可能性がある。無技の民に対する扱いも変わる。四大神信仰に係わる制度の違いはあれど、他国との交流も盛んになる事が予想された。

「それでは、元気で」

「はい、指導官もお元気で」

こうして、ゼシャルドはエスヴォブス王との密約で始めた数年間に渡る極秘任務を完遂し、帰国の途に就いたのだった。

31話…これからの事

ブルガーデンから引き上げた白刃騎兵団は、ガゼッタの山岳地帯奥地にある戦士達を育成する街に帰還して英気を養っていた。ここは王族関係者ばかりが集まる白族の里とは違い、白族の一般兵士とその家族が集う街でもある。

「陛下、ノスセンテスの潜入部隊から都で動きがあったと連絡が入りました」

「ふ、やはりブルガーデンとフォンクランクの衝突を窺っていたか」

「国境の警備を固めますか？」

「平地では不利だからな、監視はそのまま防衛線を少し下げろ、国境を跨いでくれば討ち取って構わん」

邪神の事を知っているガゼッタの戦士達は今回の出陣で戦果を上げられなかった事よりも、邪神の力を見定めることが出来たという点で概ね満足している。不満があるとすれば、自分達を捕虜にしたつもりで完全に油断しきっていたブルガーデン神民兵を軽く一蹴散らしするくらいはさせて欲しかったというぐらいだ。

この辺りは悠介が近くに居たのでシンハも自重したし、させた。あれだけの力を見せた邪神なので、まだ他にどんな手を持っているか知れない。流星にあの場で邪神と敵対するのは拙いと判断したのだ。

ガゼツタは表向きの等民制を装った神技人の街ではそれなりに上手くやっている為、そのまま神技人社会に溶け込もうとする勢力が暗躍している。白族はガゼツタの中核組織だが、今まで表に出ていなかった事もあってそれら融和活動への牽制に動き難かった。

今回の戦でガゼツタの白族の事は世界中に伝わり、邪神の横槍が無ければ神技人兵士に勝てる手応えも掴めた。それが一番の目的だったので、果たすべき目的は果たせている。戦果はオマケのようなものだ。融和派の動きもこれで封じる事が出来た。

国境付近の街では今まで通り、変哲もない等民制の街を装わせておけばいい。後は各国からガゼツタ入りしてくる無技人を選別して戦力を固めながらノスセンテスに攻め入る機会を窺い、邪神が訪れるのを待つ。

「とはいえ、ユースケも早々来そうになし。先にノスセンテスの都奪回を済ませる事になるだろうな」

今のノスセンテスの首都である古都は、嘗て白族帝国の巨城だった。今から約二千年ほど前の話だ。白族が現在のガゼツタ領に追いやられる以前、当時の白族はカルツイオの半分を領土として支配する巨大帝国を造り上げていたのだ。

「俺の代で帝国復興の悲願が叶うと良いのだがな」

「此度の邪神は無技の民に味方する傾向にあるようですからな、必ずや我が方に付いてくれる事でしょう」

そう鼓舞する参謀に『だといいがな』と軽く笑みを返したシンハは、白族の里に向けて馬を走らせた。

パウラを出発したゼシャールドが任務完了の報告に宮殿へ立ち寄り、エスヴォブス王から大いに労われ、ヴォレットには大いに纏わり付かれながら宮殿に一泊して、ルフクの村に帰って来られたのは、ザッルナーの火月の十三日目の事だった。

「おかえりなさい、ゼシャールド先生！ ……と、どちら様でしょう？？」

「お久しぶりです、先生。 ……と、精鋭団の制服？」

「おお、二人とも元気そうで何よりじゃ」
「 ……こんにちは」

ゼシャールド先生がブルガーデンのベッピンさんを連れて帰って来た！ てな具合に、村ではゼシャールドの帰還を喜ぶ声と、女連れに驚く声で暫し盛り上がった。

「 ……ベルーシャです」

ブルガーデンを発つ日、無人の執務室に佇んでいたベルーシャを女王の下に連れて行ったゼシャールドは、今後ブルガーデンで女王に仕えるか、自分と共にフォンクランクに来るかという選択肢を与えた。

ヴォーメスト団長と団員数名が行方不明にある現状、彼女をそのままパウラの独房に置く事は、もしもの事を考えるなら好ましくないと判断した。簡単に脱獄してしまえる程の力を持つベルーシャは、

その経歴と実力を鑑みれば危険な存在と言える。

ブルーシヤは新たな主君の下で働くか、ゼシャルドと共に新天地で平穏な暮らしに身を置くかという選択で、後者を選んだ。彼女なりに、他者の命を狩って自分の居場所を保つ生き方に疲れていたらしい。

「治癒の力で人を殺める事が出来るなら、暗殺に使われていた凍結の神技でも人を癒す力になる筈じゃ」

行使する力の性質上、人体の構造もある程度分かっているので助手としては申し分ない。そんな訳で、ゼシャルドはリシヤレウスの許可を得て、ブルーシヤを貰い受けてきたのだった。無技の村で暮らす事に関しては彼女自身、特に抵抗感はないようだ。

一通り騒いだ村人達も仕事に戻ったり家事に戻ったりと一段落し、久方ぶりの我が家に帰って来たゼシャルドはソファアで寛ぎながら『帰宅早々で悪いけど』と悠介から相談を持ちかけられ、ふむふむと唸っていた。

「ガゼツタのシン八王か……白族の里にあるという三千年の記録は、是非とも見てみたいものじゃがなあ」

「俺も邪神の役割とかがつてのが気になるから、許可があれば行ってみてもいいんですけどね」

宮殿衛士隊に所属する今の立場を考えると、ひょいひょい出掛けで行ける所でも無く、しかしこのまま放っておけばそれを見越して

スンを連れ去られる等という事も起こり兼ねない。

ゼシャールドとブルーシャがいれば心強いが、四六時中見張って
いられる訳でもないし、スンを村の中に閉じ込めておくのも可哀相
だ。それに、相手が本気で強引な手段に出た場合、幾ら実力のある
二人でも護り切るのは難しいだろう。

「先方に見れば、宮殿衛士の身分を捨ててもスンを迎えに来
るであろう事は織り込み済みじゃろうからのう」

「まあ、多分その時はヴォレットがガゼツタ行きの許可をどうにか
して取り付けてくれるだろうけど」

シンハも自分と敵対する事は望んでいないようなので、手荒な事
はすまいとは思いたい。が、邪神の何を知っていてどう考えているの
かがハッキリしない辺り、どうしても不安が残る。

ゲーム風に考えれば『邪神の力を引き出す為に』とか『親し
き者を』云々で『鬱な展開』なども在りえなくは無いだ。

「正直、邪神云々でスンの身に何かあったりしたら、俺は暴れます
よ」

「それは勘弁してくれ」

半分冗談ぽく言った悠介に、ゼシャールドも冗談ぽく、しかし内
心では割と本気で『世界を壊すのは止めてくれよ?』と返す。話題
の当事者たるスンが終始キョトンとしている横で、ブルーシャは静
かにお茶を啜っていた。

「しかしまあ、そうじゃのう……いつそサンクアディエツトに匿っ
てみてはどうかの?」

「街にですか? うーん、でも無技人街だとあんま変わらない気が
……」

「いやいや、高民区にじゃよ。お主、まだ今回の働きに対する褒美を貰っておらんじゃろう?」

ゼシャルドが宮殿に立ち寄った時の様子では、悠介に与える褒美についてまだ結論が出せずにいたらしく、最終的には本人に何を求めるか問うてから、その内容如何を審議して決める方向で纏まり掛けていたそうだ。

「高民区に屋敷を貰ってそこにスンを住ませれば、ガゼツタの連中も流石に手出しはできまい」

悠介の生い立ちはゼシャルドのホラによって『無技の民に育てられていた』事になっているので、自分の屋敷に無技の少女を住ませる事にも違和感は無く、事情が事情だけに文句を言い出す者もないであろうし、居ても黙らせられる。

闇神隊の普段の任務は低民区を歩き回って街の人々の声に耳を傾ける事、なので毎日散歩がてら一緒に低民区を連れ歩けば、窮屈な想いをさせる事もないだろう。

ヴォレットが宮殿に呼んだ事でスンの事を知る宮殿関係者も多く、悠介が任務で街を離れる場合などは宮殿でヴォレットの話し相手を務めるといふ役回りもこなせる。

「んー、でもなあ……スンはどう思う?」

「わたしは、ユースケさんが良ければ別に……」

まだ神技人を怖いと感じている事や生活環境の変化など、村を離れて街で暮らすとなれば色々配慮すべき問題があると難色を示す悠介だったが、スンは割とサバサバした雰囲気だ。街に住む事を肯定

的に考えている様子だった。

「いいのか？」

「はい、だって……わたしの事でユースケさんに迷惑掛けられませ
んし、それに」

『先生にもちゃんとした助手が出来たようなので、安心して任せ
られるから』と、気を回したとも思えるような返答にゼシャルド
は頬を掻き、当のベルーシャはカップから伝わるお茶の熱を感じ取
ってほんのりしていた。

「ん、納得した」

「……何か色々と誤解されとる気がするんじゃないが」

悠介は明日宮殿に戻る事になっているので、街での準備が整い次
第スンを屋敷に呼ぶ方針で今後の対策とする。ゼシャルドの抗議
はスルーした。この日の夕飯は悠介の昇進祝いとゼシャルドの帰
還祝い、それにベルーシャの歓迎会がささやかに催された。

その夜。

「あれ、スン？」

「ユースケさん、まだ起きてたんですか？」

「俺の台詞でもあるんだが」

「ふふっ そうですね」

家の庭先で空を眺めているスンを見つけて声を掛けた悠介は、そ

のまま隣に並んで同じように空を見上げる。月明かりに黄色く縁取られた灰色の千切れた雲が、星の瞬く夜空をゆったりと流れていく。

「やっぱ不安か？」

「ううん、そんな事ないですよ。ただ、わたしにも何かできることは無いかなって思ってた……」

幼少の頃に親と死に別れて以来、ゼシャルドの保護下で村医者の手伝いなどこなしながら、毎日平穩に過ごして来たものの、実際には大して役に立っていない事は自分でも分かっている。

ゼシャルドは自分に役割と居場所を与えてくれたが、何時までもそれに甘えてはられない。そんな風に思っていたスンにとって、ベルーシャが家にやって来た事とガゼツタの問題は、自身の在り方を考え直す良い切っ掛けになった。

「だけど、今のままだと結局、今度はユースケさんに甘えるだけになっちゃう」

「ふーむ……そんなこと考えてたのか」

悠介はスンの自立心について考える。何かしら自分の役割というモノを実感できる仕事や立場、そういったモノを用意してやれるだろうか、と。『与える』のではなく『用意』する。ソレを活かすも殺すも本人次第という形のなにか。

「あ、ごめんなさい、変なこと言って……困らせちゃいますよね」「いやいや、そんな事はないよ。俺も一応部下を持つ立場の人間になってるからね、いい機会だから何か考えさせてくれ」

戦場でキレた時は勢いで動いていたものの、まだまだ平時に『部下を使う』という行為に慣れていない悠介は、自らの成長の糧にも

なるからと、スンの能力に見合う仕事や立場を用意すると持ち掛けた。

「……いいんですか？」

「まあ、俺もヴォレットの懇意におんぶだっこみたいな立場だからな、あんま期待はしないでくれ」

スンの自立したいという想いは応援するので『一緒に成長していきこうぜ』と、何時か誰かに言ったような言葉を口にする悠介。

「ユースケさん……」

自分の気持ちを理解して貰える事に喜びを感じたスンは、嬉しさに瞳を潤ませながら悠介をじっと見上げた。

……他意は無く、月明かりの下で、二人はただ見詰め合っていた。

「なんでそこでぶちゅっといかないかねえ！ あの二人は」「うむ、まだそういう仲では無いようじゃからしてなあ」

草葉の影ならぬ窓辺の影で、実酒を振舞うバハナと晩酌に付き合うゼシャールドが、二人の様子をこっそり見守っていたそうなの。

ルフク村から宮殿に戻った悠介はスンの事情をヴォレットにも話して賛同を得ると、クレイヴォルからも問題無しのお墨付きを貰ったので、デアアノース砦建設やパウラの一件に対する報酬に『家くれ』と要求して高民区に屋敷を建てる事が決まった。

準備が調い次第、ルフク村からスンを迎える事になるのだが、スンの自立心に触発された悠介は通常特殊任務の合間に余った時間を何か有意義な事に使えないかと考え、自身の能力開発を思い付くに到った。

「こんなもんかな？」

カスタマイズ・クリエート能力の基である『アイテム・カスタマイズ・クリエートシステム』には、アイテムのステータスや形状をカスタマイズする他に、ギミック機能という要素がある。

これは装飾品などで背中に羽を生やしているような装備を作った場合、モーションを作ってパタパタと羽を動かして見せられる等、主に見栄えを楽しめる要素として備えられた機能であった。

ゲームの仕様ではカスタマイズポイントを消費してそれらの要素をアイテムに付与出来るのだが、プレイヤーの中には『ギミック職人』なる作り手も居て、凝った仕掛けの施されたギミック付きアイテムデータが、アップローダーなどでよく取り引きされていた。

悠介はカスタマイズポイントの殆どをメイン装備の強化カスタマイズに使っていたので、そういつたお遊び機能にはあまり触れていなかったのだが、ふと思いついて適当な素材でギミック機能に使うモーション作りを試してみたのだ。

「実物でやると中々面白いな、これ……」

悠介が実験で弄ったのは木彫りの馬と荷馬車がそれぞれ独立した形で繋がっている手乗りサイズな馬車型の玩具。馬と荷馬車の車輪にそれぞれギミック機能を付与し、作ったモーションで動かして自走出来るように改造している。

ゲーム画面内ではただ作って指定したモーション通りに動いて見えるというだけで、実用性皆無な観賞用。ある種ネタ機能とも言われる仕様だったのだが、現実はこの世界でギミック機能を使って車輪を回転させればちゃんと前進する事が分かった。

「こりや色々と応用が利きそうだ」

あまり複雑な動きをさせるのは無理だが、単純な動きの組み合わせでならモーションスイッチのON・OFFで簡易エレベーター位は作れそうだと、悠介は自分の屋敷にハイテクならぬトンテク製品が溢れている光景を思い描く。

モーションの速度は一度設定すると再設定しない限り調整が効かない為。乗り物などあまり速く動かすと危険だ。

「ユースケ！ 起きておるか……うおわっ なんじゃソレは！」

「……その驚き方は、姫としてどうなんだ」

何時ものようにノックも前触れも無くボタンツと扉を開けて飛び

込んで来たヴォレットは、床をぐるぐると走り回る荷馬車の玩具に飛び上がって驚いた。

仕掛けで動く玩具そのものは神技職人の作る物の中にもあるにはあるのだが、生きているかのように動く木彫りの馬や、人が早歩きする程の速度で床を走るような玩具はまず存在しない。

「びっくりした、亡霊の仕業かと思ったわ」

「なんで亡霊？」

「うむ、それなんじゃが実はな」

動く玩具をひよいと掴み上げてしげしげと観察しながら、ヴォレットは悠介の部屋に飛び込んで来た用件を話し始めた。

サンクアデイエットの地下に埋まった街から夜な夜な這い出てくるという亡霊の噂。以前からよく囁かれていたのだが、最近また夜になると何処からとも無くぶつぶつと人の咳く声が聞こえてきたり、その付近で子供が行方不明になった等の噂があるという。

古風な格好をした怪しげな人物の後を付けてみたら、行き止まりの路地に入って忽然と姿を消したなんて話もあった。

「幽霊騒動ってやつか」

「そうなのじゃ、まだ噂の真偽も定かではないので衛士を動かす段階でもない」

「で、俺に調べてこいと？」

「そうじゃ」

にこーっとワクワクしているような笑顔を向けて頷くヴォレット。少なくとも幽霊の類が駄目な子ではないらしい。

「という訳で、闇神隊出動じゃ！」
「へいへい」

悠介はテンションを上げていこうとするヴォレットにぞんざいな返事で答えると、まずは衛士隊の控え室に向かう事にした。

ちなみに一緒に付いて来ようとしたヴォレットはクレイヴォルに捕まって『お稽古の時間です』と連れて行かれた。どうやら稽古事から逃げ出す目的もあったようだ。

「亡霊、ですかい？ 確かにここ数年、誰もいない場所で声だけ聞こえるなんて話がありやすね」

「そっぴい最近またその手の噂をチラホラ聞くようになったっつてたなあ、中民区辺りを流してる街唱が」

「以前からそういう噂はあった。亡霊の正体が何にせよ、そういった噂の元になる原因がある筈だ」

「低民区とか、無技人街ではあまり聞きませんが……中民区のお掃除に出た人が、そういう噂を聞いたって言ってました」

控え室に集まっていた闇神隊のメンバーにヴォレットからの緊急任務、地下の亡霊探索について話を振ると、皆それなりに噂を耳にした事があるようだった。他の衛士達も概ね何かしら話を知っており、とりわけ中民区出身者達の間でよく聞かれるという。

「中民区か……エイシャはどうだ？ 何か聞いた事は？」

「え！ わ、私は特にその、そういう話には興味がありませんでしたのでっ」

なんだかとても分かり易い反応が返ってきた。悠介は敢えて触れない優しさを気取って話を進める。

「そんじゃ、とりあえず街に出て声が聞こえるって場所の特定から始めようか」

以前ざっとだが街の構造をカスタマイズメニューで見た事がある悠介は、地下に埋まった街の隙間部分を流れる空気などが原因になっている可能性を考えていた。風鳴り現象か、或いは別の場所で話している人の声が反響して、違う場所に響いているか。

「エイシャは待機しとくか？」

「い、いえ！ 大丈夫です、一緒に行きます」

「そつか、まあ心靈現象つてのは殆ど悪戯か、ただの自然現象を人の想像力が恐怖を煽り立てて誤認してる場合が多いからな」

怖いなら無理しなくてもいいのになあと思いつつも、真面目な彼女が私的な理由で任務を辞退する筈もないかと思いついた悠介は、自分の記憶にある現代日本の知識をもって、理解出来る限りの科学的見地から亡霊が存在する可能性を低く見積もる事で、なるべく安心させてやろうと配慮を試みた、のだが

「亡霊つて水技に惹かれるらしいぜえ〜？ 俺の知ってる亡霊を見たって街唱はみんな水技の民だったし、それも治癒系の」
「っー！」

お調子者フォンケが絶好調で台無しだった。

エイシャとシャイド、ヴォーマルとフォンケを組ませて、それ

ぞれ中民区での聞き込み調査に当たらせると、悠介はイフヨカの案内で無技人街に降りて清掃時に亡霊の噂を聞いたという人物の話の聞きに行く。

「イフヨカは幽霊とか平気なんだな」

「私は……普段から色々、聴こえますし……」

「そ、そうか」

イフヨカの言葉を、伝達系風技の使い手なので色々な『声』を聞いているのだろつという意味で理解しようとする悠介だったが、その『声』は必ずしも生者のモノとは限らない。人の『声』は気配と同じく現場に残ったりする事もあるそうだ。

その場合、聴こえているのは強い感情や想いが籠められた声の残照、空間に焼き付けられた残留思念のようなモノであったりもする。ギアホーク皆で地下への扉を開いた時、イフヨカが凍りついたように固まったのは、死を懇願するソレを聴いたからだ。

何処か沈んだ表情で俯き加減になったイフヨカの緑髪を、悠介がそつと撫でる。

「悪い、嫌なこと思い出させちゃったか」

「い、いえっ そそんなことないですよっ」

どもりながら両手の指をもじもじさせて顔を赤らめるイフヨカの様子に、この年頃で頭なでりなでりはまずかったかと悠介は手を引っ込めた。低民区の路地を並び歩く闇神隊長と部下の衛士隊員は、微妙な雰囲気醸し出しながら無技人街へと入って行く。

「うーむむ、ユースケめ……最近女子共にも受けが良いから調子に

乗っておるな？」

「姫様、指導官殿が御待ちです。下街観察は後になさってください」

ヴォルアンス宮殿上層階の一室にて、テラスからディアノース砦にも設置されている闇神隊印の望遠鏡で悠介達一行の様子を覗いていたヴォレットは、クレイヴォルにそう諭されて渋々部屋に戻るのだった。

昼過ぎから始めた聞き込み調査によって集められた情報を総合分析したところ、中民区の第二層、主に土技の民が生活する区画で声が多く聞かれているという結果が出た。そして怪しげな人影が消えたという場所は、第一層のとある路地に集中している。

「結構場所とかはつきりしてるみたいなのに、誰も調べようとしなかったのかな？」

「まあ、こんな場所じゃあ近付こうとする一般民はそういませんよね」

ここは中民区の中でも日当たりの関係であまり住む人のいない寂れた一画で、特に問題の路地は高民区との境目に建つ高い防壁と、中民区の無人になった大きな屋敷の廃墟に挟まれて閑散としている荒れた場所。狭い路地を挟む両側の壁に圧迫感を感じる。

ただでさえ日当たりの悪い区画だけに、昼間でも奥が見えないほど路地の先は仄暗い。

「子供が消えたって話は、搜索願いとかが出てないんだよね？」

「ええ、ですので……ただの噂かと思われませう」

「……それか、探して欲しくねえとかな……」

「っ！」

亡霊の噂について事件性の有無を確認する悠介に、今のところ被害届けのような報告も無い事をエイシャが答えると、オドロオドロしい口調のフォンケが、噂の裏に隠された事件の可能性を指摘するような振りをしてエイシャを脅かす。

「……自分を見つけて欲しくて、夜な夜な街に現れては」

「ち、ちよつとやめてよ！」

「フォンケ、遊ぶなって」

「ふひひ、すみません」

やれやれと軽く溜め息を吐いた悠介は、とりあえずカスタマイズメニューを開いて路地と周辺のマップデータを調べてみる。悠介が何時もの儀式を始めたので、メンバーの部下達は静かに成り行きを見守った。

「んん？」

「な、なにか、ありましたか？」

「路地の途中辺りに、縦穴みたいなものがあるぞ？」

「縦穴？ 地下に降りる通路とかじゃねえんですかい？」

カスタマイズメニューで一带の構造を調べた結果、路地を曲がって直ぐの辺りにポツカリと穴が開いており、それは地下の空間に繋

がっていた。埋められた旧区画の街に残る建物の内部は、嘗ての居住空間がそのまま残っている箇所が幾つもある。

殆ど同じ場所で上へ上へと増築しながら高く伸びていったヴォルアンス宮殿と違い、埋められた旧区画は建物の位置も大きさも時代によってバラバラで、それらが幾つも連なつた街の地下空間は、宮殿の地下よりも複雑な迷宮を造りだしていた。

明かり持ちのヴォーマルを先頭に穴のある箇所まで路地を進んだ一行は、背丈程も生い茂つた手入れされてない路地脇の植木の中に隠されるように開いている穴と、そこから地下へ垂らされた縄梯子を発見した。

「そんなに古いもんじゃありやせんね……」

「最近も、誰かがここに来た形跡がある」

「地下に住んでる奴でもいるんすかね？」

「それじゃあ、人の声だけ聞こえるって話は、もしかして……」

地下空間で何者かの喋つた声が反響して、地上を行く人の耳に聞こえていた可能性が出て来た。第一層であるこの場所よりも低い、第二層で多く謎の声が聞かれていたという事実もこの説を有力にする。

「ふーむ……とりあえず、降りてみるか？」

寂れた路地で発見した地下へと続く穴と縄梯子を前に相談し合う悠介達。街はそろそろ夕方の色に染まり始めていた。

エイシャとシャイドを地上に残し、ヴォーマル、フヨンケ、イフヨカと悠介が地下に降りてみる。縄梯子はよく使い込まれていて、素材のしつかりした上等なモノであった。

縦穴は一メートル程の厚みを持つ石畳の層を過ぎると、地下に埋まる古い屋敷の天井を抜ける形で屋内に繋がっていた。

「どうやらこの穴、人為的に開けられたモノのようですね」

先に降りて足元の明かりを確保していたヴォーマルが、石畳の層を抜ける穴の不自然さを指摘する。たまたま自然崩落などで出来た穴に縄梯子を掛けたのではなく、恐らくは縄梯子を掛けた何者かが、この場所に穴を開けたのだらうと推測した。

街を構成している石材は土技によってある程度の補強がされているが、同じ土技の力で掘削するのはそう難しい事ではない。無論、街を管理する部署への届け出なく勝手に穴を開けるのは禁止行為だ。

「もしかして、ブルガーデンの密偵が潜んでたとかってオチじゃ無いだろうな」

「……なるほど、ありえない事もねえですね」

「げー……、ギアホーク砦の二の舞は御免だぜ……」

悠介達が降り立ったのは、埋め立てられた古い屋敷の廊下の突き当たり部分。少し先に下へ続く階段が見えるので、二階以上の場所

にある廊下である事が分かった。当然ながら明かりはヴォーマルの炎技のみで、光の届かない先は真っ暗闇である。

ひんやりとしたカビ臭い空気は、何処か懐かしいような気分にもさせた。

「イフヨカ、人の気配は？」

「誰も、居ないみたいです……あ、でも、半日ほど前に……誰かが、ここを通っています」

「ふむ……」

早速カスタマイズメニューで屋敷の構造を調べると、屋敷全体が上の街を支える柱の一本として石材で囲うように補強されていた。

屋内で移動できる箇所は、この廊下と一つ下の階の廊下の一部、そこからさらに地下へと続く階段がある。

「殆ど一本道か、とりあえず行ける所まで進んでみよう。フォンケ、移動補佐だ」

「はいよ」

ある程度調べたら明日にでも人数を揃えて探索に来る事を話し合いつつ、古い地下屋敷の中を進んで行く。

廊下の先に見えていた階段を降りると、玄関ホールのような広間に出た。両側に伸びる廊下の片方は塞がれており、白く曇った窓の外には積まれた石の表面しか見えない。塞がれていない方の廊下を進んで地下への階段前までやって来る。

「イフヨカ、どうだ？」

「……近くに人は居ませんが、遠くから足音みたい……音が混

じつて、よく分からないです……」

畏の類が仕掛けられていない事はカスタマイズメニューにて確認済みだったので、そのまま地下に降りて通路なりに暫らく進み、突き当たりの階段を上ると庭園跡らしき場所に出た。

嘗ては緑の芝生が広がっていたであろう枯れ草の広がる空間に、巨大な柱が幾つも連なっている光景は中々壮観であった。

「こりゃ凄い」

「昔はこの辺りも高民区だったみたいですね」

大きな建物は石材で囲われて上の街を支える巨大な柱と一体化しており、小さな建物は柱群の間にそのまま残されているようだ。

カスタマイズメニューによって周辺の構造と現在地の割り出しが出来る上に、イザとなったら石畳を入れ替えて地上まで瞬間移動で脱出も可能。遭難する心配の無い悠介達は、イフヨカの風技で人の通った気配を追って、柱の間を奥へ奥へと進んでいく。

途中、水没している箇所などもあり、カスタマイズで足場を作つて向かい側に渡ると、小船が一艘つけてあった。

「あ……近くに誰かいます！ ……土技の波動だと思います」

「やはり土技の民か……さっきの船からして、恐らく一人しかいねえと思ひやすが」

「それって、穴開けた本人かもしれないって事だよな？」

小船が一艘しかなかった事から、複数人ではないだろうと分析するヴォーマル。穴の開き具合から見て加工系土技の使い手である事が予想される。ちなみに、素材の硬度を高めて補強したり、逆に脆くしたりする事が出来る加工系土技の使い手には建築家も多い。

悠介は念の為、いつでも防壁を出せる体勢を整えてイフヨカの指

す方角に声を掛けてみた。

「おーい、誰か居るかー！」

「……誰だ？」

少し間をおいて警戒するような男性の音が響き、顔を見合わせる悠介達。とりあえず、ヴォーマルが代表で声の主すいかに誰何すいかを向ける。自分達は衛士隊であり、街中の路地まちなかに怪しげな穴を発見したので地下を捜査に来たことを伝えた。すると

「な、なに！ 衛士隊？ ちょっと待て、私は決して怪しい者ではないぞっ」

声の主は慌てたようにバタバタと床を鳴らしながら柱の間に見える建物の窓から顔を出した。そこが出入り口になっているらしく、黄髪おうはつの壮年男性がどっころしよと這い出てくる。

「そこで止まれ、名前と所属、何故ここに居るのか言え」

「わ、私は中民区に住む一般民で小物の加工屋をやっている。名はソルザック、ここには趣味で街の歴史を調べに来ていたのだ」

勝手に穴を開けて入り込むという非合法行為の自覚はあるらしく、ヴォーマルの尋問におどししながら答えている。そんな彼の容姿に、悠介は何処かで見えた覚えがあるような気がして首を傾げた。

「うーん、この人どっかで……」

「隊長？」

暗闇の中、ヴォーマルが明かりを向けるまでその存在に気付いて

いなかったソルザックは、隊長と呼ばれた悠介の姿を認めると、『あつ！』という表情を見せながら思わず声を上げる。

「君は……ゼシャルド殿と一緒に居た黒髪の青年！」

「ん？ あーっ 思い出した！ 初めて街に来た日に見た人だ」

ヴォレットにフードを燃やされて露わになった黒髪に災厄の邪神を疑われ、炎神隊の捕り物騒ぎが発生し、ゼシャルドが流暢にホラを吹いて邪神伝説に関する考察を語った時に、続きを聞いたそうにしていた壮年男性。

彼は随分以前から地下に潜っては、日がな一日古い街の構造などを研究して過ごしていた為、悠介が闇神隊に就任した事や、最近ゼシャルドがブルガーデンから潜入工作任務を終えて帰還した事なども知らずにいたようだ。

食糧が尽きると地上に戻って買出し、また地下に潜って研究を続けるという日々明け暮れていたらしい。

街の噂にある『古風な格好をした怪しげな人物』とは、数十年前に売り出されていた古いデザインの服を纏う彼の事であった。

ちなみに、研究資金は偶々地上の市場へ出向いたある日、何時の間にか建っていた展望塔を見物に行った時に、塔を模った御土産品の小物作りで土技の使い手を募集していたので、それに参加して得た報酬である。一山当てたのだそう。

「古い層の建物には珍しい建築様式のモノがあつてね。昔の地図を見つけてから前時代の建物を研究するのが楽しくて楽しくて」

「はあ……研究するのはいいが、ちゃんと届け出をしてくれないと困るんだがなあ」

「怪しげな人影ってのはこれで説明ついたな、後は人の話し声だけ

ど……」

「おっさんの他にも物好きな研究者が降りて来てるんじゃないか？」

路地に消える亡霊の正体は、ただの道楽な研究家だと分かり、威圧を緩めたヴォーマルが注意を促している傍らで『話し声の正体』について意見を出し合う悠介とフォンケに、ソルザックが『それは街の子供達ではないか』と指摘する。

「こちらの区画とは反対側になるが、今は使われていない排水路から地下に入れる場所があるのだよ」

「なんだって？ 聞いてないぞ、そんな話」

歴史ある巨大な街だけに、衛士隊や街を管理する部署が把握していない問題や箇所など幾らでもあるのだとソルザックは語る。

「例えば、貧民街スラムなどその最たる部分ではないかね？ 低民区とはいえ、神民居住区にあのような場所の存在が許されている」

「それはいいとして、あんたの知ってる地下への入り口を全部教えて貰おうか」

街の管理運営について論じ合う気は無いと、ヴォーマルは問題箇所に関する情報を要求した。すかさず、その情報で不法侵入の件は大目に見て欲しいと懇願気味に取り引きをもちかけるソルザック。

「……だ、そうですね？」

「ああ、いいよ。 どうせ調べるの大変なんだろうし」

どうします？ と目線を向けてきたヴォーマルに、悠介はそう答えて許可を出した。ソルザックが地下の街を調べる事で何か重大な

問題が発生していた等という事があつたのならともかく、この程度なら現場にて宮殿衛士隊長の裁量で処理しても構わないのだ。

斯くして情報を得た悠介達は、一度地上に戻って街の問題箇所^かに人を派遣し、後日建築職人を送り込んで適切な処置を施すという方針で纏めて任務の引き上げに入る。

「いやあ、まさか亡霊に間違えられていたとは……」

ソルザックの話によれば、比較的浅い層に入り込んで住み着いている者や、野良唱が商売に使っている場所もあるという。

家でペットを飼わせて貰えない子供が地下で動物を飼っていたり、彼等の遊び場になっていたりもしているそうだ。飼育場から脱走した家畜のキナ鳥が迷い込んで半分野生化しているモノもいるらしいと、話している目の前を、羽毛の塊りが転がっていた。

丸っこい姿が特徴的な家畜の鳥。何処かにこの鳥が入り込めるような小さな穴でも開いているのだろう。

「まあ、なんにせよ明日だな。これで亡霊の噂も消えるだろ」

「そうっすね、あー帰ったら鳥肉の油木焼きでも食おっかな」

「でも、地下に住み着いてる人達の立ち退きで……また揉めるかもしませんね」

「丁度いい、詰め所どころどころしてる若い衆を働かせよう」

地下に降りた時のような緊張感も無く、がやがやと雑談交じりに来た道に戻っていく闇神隊一行と道楽研究家。彼等が地上に戻った時は既に日も暮れており、見上げれば星の瞬く夜空が広がっていた。

「もう！ 隊長酷いですよお、全然連絡も無しで……」

「……疲れた」

悠介達が地下に降りている間、不気味な暗い路地で待機させられていたエイシャは、恐怖を紛らわせる為に饒舌モードで喋り捲り、相手をさせられたシャイードはすっかりクタクタになっていた。

亡霊の正体について説明されたエイシャは衛士隊詰め所までの道中、ソルザックにガミガミと説教を与えていたのだった。

「まあまあ、お陰で街の問題箇所が改善されるんだから、その辺りで赦してやろうよ」

「隊長……分かりました、隊長がそう判断するのであれば従います」

「くっくっくっ よっぼど怖かったんだな、こりゃ」

「フヨンケ！」

顔を赤くしながら怒るエイシャから風技の移動補佐を纏って逃げるフヨンケ。何時ものドタバタを微笑ましくも生暖かく見守る悠介達。そんな彼等の在り方に違和感を覚えたソルザックは、不思議そうな表情を浮かべて闇神隊のメンバーを観察していた。

彼が闇神隊に感じた違和感、他の衛士隊グループには無い不思議な感覚は、神格による身分の違いを無視した親密なコミュニケーションに原因がある。

一般市民の間では、しばしば見受けられる光景でもあるのだが、宮殿衛士隊長がソレを行っている事に大きな違和感があった。

『闇神隊長の彼が特別だからなのか、それとも……』

この頃は低民区に宮殿を超える高さの展望塔が建ったり、街中で活動する無技人の姿も以前と比べて多く見掛けるようになるなど、サンクアディエットに何らかの変化が訪れようとしている事が感じ

られる。

ソルザツクは世の中の動向に疎いながらも、闇神隊の在り方に時代の潮流を見たような気がするのだった。

33話・中民区の亡霊【後編】（後書き）

いまいち才子の無い話になってしまいました。
売春婦、無技の民に多い

野良唱＝無届けの

34話：僅かなる平穩

「なんじゃ、結局亡霊の噂はその研究家と子供達の仕業であったのか」

「仕業というかまあ、そういう噂の正体なんて大抵はこんなもんだよ」

「ツマランのう。しかし地下の街は中々面白そうじゃな、今度宮殿の地下でも探検しに行かぬか？」

「宮殿の地下ねえ……」

亡霊騒ぎの一件が片付いて数日、今日も下街の巡回任務を終えて自室に籠もり、ギミック機能の仕様をあれこれ確かめながら実験製品の製作に勤しむ悠介と、その実験製品目当てで部屋に入り浸っているヴォレットは、ノンビリとした時間を他愛無い会話で楽しんでいた。

悠介の屋敷を建てる場所なども大体決まったので、後は屋敷が建つのを待つばかり。悠介が自分で建てるという手は諸々の諸事情により自重を促がされ、土技の建築職人達に頑張ってもらっている。

二、三日中にはディアノース砦でブルガーデンの女王リシャレウスと、エスヴォブス王の会談が行われる予定になっているのだが、会談に同席する官僚達は下見に出向いたディアノース砦の余りの規模と重厚さに、悠介の力を見誤っていた事を思い知った。

彼等は街の発展開発を担うポストに悠介を就かせようと王に進言するなどの動きを見せていたが、闇神隊設立当初から悠介の存在を過小評価していた官僚達に対し、今更取り込みにも動こうとしても、そうはさせじとヴォレットが壁になって彼等を牽制している。

悠介を活躍させたくない婚約者候補組を、上手くコントロールするヒヴォデイルもそれに協力しているので、悠介の立場は今までと変わりなく、街で下々の民と交流し、ヴォレットの話し相手を務めるという割と平穏な日々を送っていた。

自宅建築を自重する理由はそんな所にあつた。が、悠介を独り占めしておきたいヴォレットの我侭が概ねの理由でもある。

「のうユースケ、これの大きいのは作れんのか？」

実験で作られた動く置物を弄って遊んでいるヴォレットは、お気に入りの実験製品に結びつけた紐をくいくいと引っばって見せる。彼女のお気に入りには『空飛ぶお皿』だ。円盤状の物体に四つの穴が開いており、その中に回転する羽が内蔵されている。

悠介が元の世界で見た事のあるラジコン飛行機の中でも、変り種といえる円盤型飛行機を再現してみたモノで、なんと空中静止する事が出来るのだ。というか、空中に浮いたままふわふわしているダケなのだが。

実に珍しい宙に浮くお皿を気に入ったヴォレットは、それに紐を付けて持ち歩いている。実は真上に浮かべていると結構涼しい。

「出来なくはないと思うけど、乗れるようなのは無理だぞ？ 色々危ないし」

「ふむう、じゃあこっちの車輪が回って動く引き手の要らない車はどうじゃ？」

「それは今研究中、荷物用の台車で試したんだけどな」
「ほう！ どうじゃった？ 人は運べそうか？」

台車の車輪をギミック機能で動かしてみたものの、荷物を載せると動かなくなつたと悠介は首を振る。ギミック機能で付与出来るモーションはその状態でその動きが可能な分の力しか与えられていないらしく、ある程度の負荷が掛かると止まってしまうのだ。

従って、重い物を載せても動けるだけの力を台車の車輪に与える場合、予め車輪自体に重りなどの抵抗を付けて負荷が掛かった状態で回転モーションを付与、その後、重りを外して使えば重り分だけパワーが増えているというやり方が必要になる。

「面倒な仕様だけど、これはこれで逆に安全性が高いんだよな」

何があつても止まらないような仕様だと、悲惨な事故に繋がる危険もあるのだ。

「馬車を暴走させてしまうような事故か？」

「いや、例えば……その回転してるプロペラにお前の髪が巻き込まれたりした場合」

身の毛もよだつ怖ろしい事故の可能性を指摘され、思わず頭を気にするヴォレット。

「こ、怖い事を言うな」

「まあ、この仕様ならそんな事故の危険もまず無いから安心しろって事だよ」

軽くヴォレットをからかって遊びながら、悠介は今し方完成させたミニ自動荷車を床に置いた。

全長五十センチ、幅四十センチ程で、直径三十センチの車輪が四つ。後輪には重りで負荷を掛けながら回転モーションを付与しており、操縦桿っぽい棒状のハンドルの先端にモーションのON・OFFスイッチを付けてある。

「さて、動くかな？」

棒状のハンドルを又の間に挟むように胡坐をかく体勢でミニ自動荷車に乗り込んだ悠介は、ヴォレットから期待の眼差しを受けつつモーションスイッチをONにした。車輪が回転しようとした僅かな振動が尻に伝わる。

「……」

「……」

悠介を乗せた荷車は、その場からピクリともしなかった。

「何も起きぬな？」

「うーん」

失敗したかと足を床に下ろした事で荷車に掛かっていた悠介の体重による負荷が軽減されると、途端に前進を始めるミニ自動荷車。直ぐにモーションスイッチをOFFにしたので引き摺られてコケるような愉快的事態にはならなかった。

「車輪に付けてた重りが足りなかったか……」

「どれ、わらわにもやらせてみよ」

悠介よりは体重が軽いであろう自分なら、少しは動けるかもしれない。そう言っていそいそとミニ自動荷車に乗り込むヴォレット。

操縦法を教わり、モーションスイッチをONにする。

「おおっ！」

「あ、やっぱり軽いと動くんだな」

ゴロゴロゴロと木製の車輪が床石を踏む音を鳴らしながら、人がゆっくり歩くぐらいの速度で前進するヴォレットを乗せたミニ自動荷車。これは面白いとはしゃぐヴォレットは、そのまま部屋の扉を開こうとして悠介に止められた。

「待て待て、そんな格好で廊下に出る気かお前は」

「ええい止めるなユースケ、わらわはこれで廊下を走るのじゃ」

小さい箱状の荷車に胡坐をかく体勢で座っている為、正面からはパンツも丸見えなのだ。

「幾ら御転婆ヴォレット姫でもその格好はあんまりだろ、つーか専属警護兼教クレイヴ育係オル殿に見つかったら御小言ハリケーンだぞ」

「う……仕方あるまい」

渋谷部屋の中をぐるぐる走り回るだけで我慢するヴォレット。最近、側近の胃に優しい悠介だった。

「どうせモーターの類が作れるんだから、ギアボックスみたいな変速機構を作った方が手っ取り早いな、こりゃ」

「ふむ、それがどんなモノかは分かんが……必要な物があれば言うがいいぞ、直ぐに揃えさせよう」

あまり派手なモノは作らず、力を抑えて目立つ事を避けようという当初の目論みはパウラでの戦いで今更となってしまった為、官僚

達の思惑を躲す意味での建築自重はともかく、こういった自身の能力に関係するモノづくりは自由に進める事を決めた悠介。

ここらで一発、本格的な乗り物でも造ってみようかと適当な乗り物のイメージから必要な材料を算出する。

「まずは遊園地のゴーカートレベルからいってみるか」

ヘリウムガスで浮かぶ風船のように、紐付き『空飛ぶお皿』を頭上でふわふわ浮かべながら、ミニ自動荷車に乗って楽しそうにしているヴォレットを眺める悠介は、こんな平穏な光景がずっと続けばいいなと心の中で呟いた。

フォンクランク領にある無技の村の一つが壊滅している

そんな急報が宮殿に飛び込んで来たのは、この日の夕刻過ぎの事であった。

とある飲食店を営んでいる神技の民が、自分の出資で管理支配している村に収穫の徴収に出向いてみると、村人の殆どが惨殺されていたらしい。

生き残った者の証言では、ガゼッタ軍を名乗る兵士が雪崩れ込んで来て『ガゼッタに恭順しない無技は敵だ』と言って村人を殺害し始めたという。

直ちに衛士隊の調査団が派遣され、官僚達や宮殿衛士隊員の中にも自分の家が所有する無技の村に被害が出ていないか、至急調べるよう実家と連絡を取りに走る者など、宮殿内は俄かに物々しさと騒

がしさが増して行く。

ブルガーデンとの会談を控えたこの時期、エスヴォブス王は出来るだけ情報を外部にもらさないよう画策しつつ、調査団からの報告を待つ。街に放つてある諜報部隊にも、民の間にどの程度の噂が立っているかを調べさせて他国による工作の類を警戒した。

「まったく……平穩とは長く続かないものよな」

宮殿の馬車乗り場では、急遽スンを迎えに行く事になった悠介が宮殿馬車に乗り込み、闇神隊メンバーと共にルフクの村へ向けて出発しようとしていた。衛士隊馬車は殆ど出払ってしまった為、ヴォレットが高官用の宮殿馬車を手配してくれたのだ。

「手間かけさせてわりいなヴォレット、助かるよ」

「このくらい何でもない、早くスンを迎えに行つてやれ」

「移動補佐、準備完了！」

「隊長、出発しやすぜ」

衛士隊馬車と比べればあまり速度は出せずとも、風技と水技による完全サポート体制である。明かり役のヴォーマルと手綱を握るシヤードが御者台に座り、フォンケが馬車を風の膜で包んで、エイシャは馬の体力を回復し続ける。

イフォカは常に宮殿から発せられる伝達情報に意識を向けて緊急連絡に備え、悠介は道中を彼等に任せて考え事に耽っていた。

『ガゼツタの兵……シンハの差し金なのか……？』

ルフクの村に続く一本道である夜の街道を、闇神隊を乗せた宮殿馬車が駆け抜けていった。

34話・僅かなる平穩（後書き）

ちよつと短くなりましたが、新章導入部的な感じで。

35話：深夜の喧騒

悠介達がルフクの村に到着したのは夜も更けようかという頃だった。村同士の交流による情報網でガゼツタ軍を名乗る武装集団の暴挙は伝わっているらしく、防護溝の内側には等間隔に篝火が設置され、見張り役のおじさん等が立っていた。

「先生」

「うむ、やはり来たかユースケ」

ゼシャルドは今回の事態で悠介がスンを心配して迎えに来るであろう事を予測していたようだ。

スンは既に荷物の整理も済ませてある。悠介達はスンを保護すれば直ぐにとんぼ返りで街へ戻る予定だったが、休憩がてら今回の騒動についてゼシャルドの意見も聞いておこうと、少し話をしに行く事になった。

夜遅いにも関わらずバハナもゼシャルドの家に顔を出して夜食などを作ってくれたので、ベルーシャが慣れない手付きで淹れたお茶を啜りつつ、バハナが用意してくれた夜食のフライを皆で齧る。

「今回の事、ユースケはどう思うね？」

「んー、正直よく分からないですけど……本当にガゼツタ軍の仕業なのかなーと」

「ふむ……確かにあの霸王^{シンハ}がやりそうには思えんの」
「あいつは、世界中の無技の民をガゼツタに呼び込もうとしてるみたいなのに、これじゃ逆効果になる」

それが分からない程お馬鹿では無いだろうと語りながらお茶を啜る悠介。その言い方が面白かったらしく、スンがくすりと笑った。

ゼシャルドも襲撃はシンハが指示したもので無いだろうという考えだったが、実際に襲撃を実行した部隊がガゼツタ軍か否かはまた別の話なので、ガゼツタ内にシンハとは別の思惑で動く勢力がいる可能性も考えられる。

「どちらにせよ、被害が出てしまった以上、只事では済まされん
う」

「ですよね……」

とりあえず現状は各村々と頻繁に連絡を取り合いながら、衛士隊を派遣するなどして自衛策を取るしかないだろうと、当面の方針を纏める。エスヴォブス王からガゼツタへの抗議などは、今の段階では決まっていない。

休憩を終えて闇神隊の部下達が街に戻る準備を始める中、悠介は持って来た腕輪と指輪をゼシャルドに差し出す。神器作りで没になったモノだが、ブルガーデンに渡った神器の三分の一くらいの能力補佐効果が付与してある。

「ルフク村は優遇処置で警備の衛士も配置されると思うんだけど、一応」

「ほう……これはまた。うむ、ありがたく使わせて貰うでしょう」

ゼシャルドは受け取った一对の腕輪と指輪を其々片方づつ、ベ

ルーシャにも渡して装備した。ゼシャールドが装備した方には水技の増幅効果や体力増幅効果が付与されており、ベルーシャが装備した方には神技耐性や物理耐性の効果が付与されている。指輪は治癒効果と解毒効果だ。

「ペアルックすかー」

「うん？ なんじゃね、それは」

何でもないと微妙な笑みを贈りながら悠介は出発準備を整えている宮殿馬車に向かった。

「スン、これを持って行きな」

「バハナおばさん、いいの？」

ゼシャールドの家の前では、バハナが手製の弓をスンにプレゼントしている所だった。

実はこの数日間、スンはバハナに弓の扱いを学んでいたのだ。力の指輪の効果もあってか弦を引くだけなら問題なく、後は的に命中させられるよう練習を重ねれば、狩りくらいは出来るだろうといった具合らしい。

「そんな事してたのか……」

「はい、少しでもユースケさんのお手伝いが出来ればと思って」

スンは自分が悠介の足手纏いになる事を恐れて、戦う術を学ぼうと考えていたようだ。悠介としてはスンを戦いの場に立たせること自体、想定外の事であり、内心複雑な気持ちであった。

しかしそれは、スンに対する庇護すべき『か弱い存在である』という自身の思い込みが為せる感情である事にも気付いていたので、

ここはスンのやる気を応援すべきかと気持ち切り替える。

「まだ全然、的に当てられないんですけどね」

「ふむ……ちよつとその弓貸してみ？」

『バハナの弓』を受け取り、カスタマイズメニューで性能を確かめる。木製の中々しつかりした作りをした極普通の弓。

レア度が低い為かカスタマイズ出来る範囲も小さく、シンハの大剣に施したような使い減りしない効果等は付与不可だったものの、とりあえず命中補正を上げてみた。カスタマイズ反映のエフェクトが弓を包み、キラキラと光の粒が舞い消える。

「これでどうかな？」

「えーと……？」

返された弓を受け取りながら小首を傾げるスン。悠介に適当な的を狙って射るよう促がされたスンは、バハナから『じゃあ、あそこの実を狙ってみな』と、家畜小屋近くの木に生っているララの実を指し示され、ララの実どころか指定された木に当てるのも無理なのに〜と思いつつも矢を番えた弓を構える。

『あ……凄く安定する』

狙いがぶれずぴったり定まる感覚に、スンはララの実を射抜くイメージを明確に描くことが出来た。

そうして放たれた矢は見事ララの実を貫き、枝から実をもぎ取って小屋の壁に突き刺さった。家畜小屋の柵の中で寝ていたモーフが驚いて飛び起き、暫しキョロキョロしていたが、矢の刺さったララの実を見つけると嬉しそうに齧り付いてモシャモシャし始める。

「あ、当たっちゃった」

「へえ、凄いじゃないか。今のもユースケの力なのかい？」

「俺はちよつと武器の命中率を上げたダケだよ」

事も無げに言う悠介だったが、視界の悪い夜間にそこそこ離れた場所の木に生る実を射抜くなど、今のスンの腕では無理な芸当をやつてのけさせたのだ。

「隊長が居れば訓練兵と安価な弓を揃えるだけで、熟練兵並の働きをする部隊が作れるな」

「ガゼツタが欲しがるわけだぜ」

自分達もその恩恵を受ける立場にあるシャイード達は、悠介の神技による効果を客観的に見せられた事で、改めてその力の大きさを実感するのだった。

「じゃあ、何かあったら直ぐ連絡して下さい」

「うむ、街に居るとして油断するでないぞ？」

「ちゃんとスンを守っておやりよ？」

「勿論ですよ」

ゼシャールド達に見送られながらスンを連れてサンクアディエツトに帰還する悠介は、何時か良い弓でも作ってプレゼントしようか等と考えながらルフクの村を後にする。闇神隊一行を乗せた宮殿馬車が深夜の街道を駆け抜けて行った。

「さて、ワシらも一休みするかの」

「……はい」

「先生たちは、街に呼ばれたりしないのかい？」

「ワシヤ隠居しとる身じゃからの、今更呼ばれる事もなかるうて」

例え呼ばれても村での生活を優先するというゼシャルドに、バハナや近くで会話に耳を傾けていた見張り役のおじさん達は拳こぶつて安堵の気持ちを持つのがあった。ゼシャルドはこの村にとってなくてはならない存在なのだ。

『……然りとして此度の由々しき事態、エスヴォブスに泣き付かれれば動かぬ訳にもいくまい。ユースケはどう動くかのう』

深夜、闇神隊一行を乗せた宮殿馬車はサンクアディエットの街に入って最初の区画門を通過した。

街はひっそりと静まり返っており、住民は皆寝静まっている事が窺える。所々に見える明かりは、朝まで営業している酒場や娼館の明かりだ。その周辺だけ人影がちらほら見えている。

「夜の街って、なんだか寂しい感じがしますね」

ちよっぴり眠そうな様子のスンは、静まり返ったサンクアディエットの通りを見てそんな感想を口にする。昏間が賑やかな分、よけいにそう感じるのだらうなと悠介も同意した。

悠介達が宮殿に到着すると、馬車乗り場はこんな夜更けにもかかわらず煌々と明かりが焚かれ、衛士隊馬車や個人の所有する馬車などが引つ切り無しに出入りしており、皆慌しく走り回っている。

「バタバタしてるなあ」

「流石に、村一つ壊滅してやすからね」

ブルガーデンが仕掛けていたような挑発いやらせとは内容の質も被害の度合いも違う。今の所は生存者の証言以外にガゼッタの仕業であるという明確な証拠も無い為、とにかく情報を集める事に奔走している状態だ。

「やあ、ユースケ」

「ヒヴォデイル……？」

悠介達が馬車を降りて宮殿に入ろうとしている所へ、実家の使用人らしき供を連れたヒヴォデイルが何時もの炎神隊服姿ではなく、如何にも『お貴族様』っぽい格好で現れた。聞けば今からヴォーアス家の所有する無技の村を視察に行くらしい。

「こんな夜中じゃ村人も寝てるんじゃないか？」

「僕の所は私設軍衛士を置いてあるからね、対応するのは彼等さ」

今後に備えて私設軍衛士の増員も検討しており、それらを協議する意味合いも兼ねているのだと、ヒヴォデイルは深夜の視察訪問に行く理由を語った。

「じゃ、急ぐので僕はこれで」

「ちよっと待った」

ヴォーアス家の紋章が入った馬車に乗り込もうとするヒヴォデイルを引きとめた悠介は、何となく彼の普段着らしい服のマントに触れてカスタマイズを施す。

上質の服らしく、宮殿衛士隊の隊服並には特殊効果も付与出来そうだったので、逡巡の末、治癒効果を付与しておいた。光のエフェクトに包まれたマントがヒヴォデイルの装備から解除される。

「ん？ マントが……一体何をしたんだい？」

「ちよつとした安全のおまじない、みたいなもんだ」

ヒヴォデイルは首を傾げながらも、悠介に『気にすんな』と言って差し出されたマントを羽織り直すと、馬車に乗り込んで深夜のヴォルアンス宮殿を出発して行った。

「そんじゃあ、俺たちも一旦解散するか」

「お疲れ様でした、隊長」

「ふあ〜……ねみいっす」

「あつしらは交代で仮眠を取ってますんで」

衛士隊控え室に向かうヴォーマル達と別れ、悠介はスンを連れて客間のある四階へ。スンを宿泊させる為に、ヴォレットがこの前と同じ部屋を用意しており、流石に三度目ともなればスンも宮殿の雰囲気慣れた様子だった。

「ここだな……じゃあ、俺も部屋に戻るから」

「はい、あの……ユースケさん」

バナナに貰った弓を胸に抱えるスンは、部屋の前で悠介と向かい合い

「おやすみなさい、ユースケさん」

「ん、おやすみ、スン」

少し懐かしさに微笑みながら、おやすみの挨拶を交わすのだった。

ちなみに、馬車乗り場で悠介達の帰還を待っていたヴォレットは眠気に倒されたので、クレイヴォルが回収していったそうなの。

36話・陰謀の影

翌日、悠介が任務に出ようと部屋を出ると、丁度ヴォレットがスンを連れてやって来た。

「おうユースケ、今から街へ出るのか？」

「ああ、まあね」

「おはようございます、ユースケさん」

「おはよう、スン。朝っぱらから連れまわされてんのな」

二人と挨拶を交わした悠介は、相変わらず紐を付けた『空飛ぶお皿』を頭上に浮かべて持ち歩いているヴォレットと、その後ろに付き従うように歩くスンを見て苦笑する。ヴォレットは何時もの紅いドレス。スンは何時かの白いドレスを纏っていた。

ヴォレットがスンと一緒にいるのは単に仲良しであるという理由の他に、悠介が任務に出ている間、ヒヴォデイルも宮殿に居ないのを見越してご機嫌取りに群がってくる婚約者候補組を躲す意味もある。

「今からスンの弓捌きを見せて貰おうと思っただけ」

「まだ覚えたばかりで、人に見せられるような腕じゃないんですが

……」

闇神隊メンバーから聞いたらしく、スンの持つ弓に施されている特殊効果とやらを見たいというヴォレット。普通の弓と射比べて、どのくらい命中率が上がっているのか確かめるのだそう。ヴォレットも嗜みとして少しくらいは弓を扱える。

衛士隊の訓練所に行く途中、とある用件を済ませる為に悠介の部屋を訪れたのだ。

「それはいいけど、その格好で弓使うのか？」
「まさか、ちゃんと動き易い服に着替えるぞ？」

態々スンと自分のドレス姿を見せに来てやったのだと、ヴォレットは薄い胸を張る。その隣で、やっぱり広めに開いた胸元を気にしてか、さり気無く隠そうとする仕草を見せるスンに萌える悠介だった。

「で、本題じゃが、ユースケがこの前言っておった”ギアボックス”とやらの材料じゃがな」

中民区に質の良い素材を扱う店があるので、自分で適当に見繕って来るようにと宮殿支払いの明細書を差し出す。

「使いの者をやっても良いのだが、素材は使う本人が見定める方が一番良いじゃろう？」

「そうだな、実際に触って確かめないと分からない事もあるしな」

悠介の場合、別段そういった素材に関する知識がある訳でも無いので、モノに触れてカスタマイズメニューで確かめなければ、素材の良し悪しなぞサッパリなのである。

カスタマイズ能力は既に形としてあるモノを加工する事は得意だが、鉄鉱石などからソレに含まれている一定量の鉄材を精製するよ

うな工程を行うのは難しい。

「ほんじゃ、行ってくるわ」

「うむ、お前の言う乗り物が一日でも早く作られるのを期待しておるぞ」

「いつてらっしゃい、ユースケさん」

中民区に下りて来た悠介は早速土技の素材店を探して通りを歩く。低民区に比べると道幅は若干狭いが、小綺麗な装飾が施された柵が並び、建物もそこそこ大きな屋敷ばかりだ。

通行人も少なく、時折巡回をしている衛士隊と擦れ違う。閑静な高級住宅街といった雰囲気だった。

「ここかな？」

何軒か店が建ち並ぶ通りに入り、比較的こじんまりとした素材店の前に立つ。各店舗の前にはサンプルらしき角石や、ブロック状のガラスっぽいモノが飾られ、この店の前には鉄の塊が置いてある。それに触れてカスタマイズメニューで調べてみると、中々上質の鉄である事を示すステータスが表示された。

「こんちはー」

扉を開けて店に入ると喫茶店などでもよく聞かれる鐘の音がカラ

ンコロンと鳴り響き、奥に居るであろう店主に来客を告げた。

「はいはい、いらっしゃ　って、あー！！」

「あれ？　ソルザックさんじゃないか」

素材店の主は、亡霊騒ぎで知り合った道楽研究家のソルザックだった。

地下が閉鎖されて暇になったソルザックは、そろそろ懐も寂しくなり始めていたので本業に戻り、余っていた資金で鉄鉱石を買い付けては鉄を精製して鍛冶屋に売り込むなど細々とした商売を続けていたそう。

「小物を作ってるんじゃないっけ？」

「ああ、元々はこちらが本業なのだよ。小物加工は例の展望塔の土産物で味を占めてね」

最近では同業者も多く、以前ほど儲からなくなったので堅実に精製業へ戻ったのだとソルザックは語る。

「ふーむ、もしかしてソルザックさん土技の腕利き？」

「私より腕の良い職人も当然いるのだろうけど、少なくともサンクアディエットにおいては誰にも負ける気はしないね」

そう答えたソルザックに虚勢や驕りたかぶる気配は無く、寧ろゼシャールドが纏う実力に裏打ちされた自信のような空気を感じさせる。悠介は少し考え込むと、思いついた事があったので一旦宮殿に引き上げることにした。

「後でまた来ます」

「そうかね。暇にしてるんで何時でも来てくれたまえ」

宮殿に戻った悠介は訓練場に出向いて弓の射比べをしているヴォレットとスンの所へやって来た。丁度休憩していたらしく、二人は隊服をもっとシンプルにしたようなデザインの服を纏ってテーブルで向かい合いながらお茶を飲んでいた。

「あら？ ユースケさん」

「ん？ どうしたユースケ、早かったな」

「ああ、実はさ」

悠介は優秀な土技の使い手によって精製される良質の鉄材確保に、ソルザックを専属土技師として雇えないかと考えた。その事をヴォレットに相談しようと思って来たのだが、それなら部下として闇神隊に組み込めとの返答に思わず聞き返す。

「え、いいのかそれ」

「本人の意思次第じゃがな、お前は闇神隊長として宮殿衛士隊の一角を担っておるのじゃ」

その闇神隊は現状で部下が神民衛士隊員たった五人しかいない。そのままでも良い筈も無かろうとヴォレットは続ける。

「何れお前の耳にも入ることゆえ、良い機会じゃから教えておくが、

闇神隊に入りたがっている者は実は結構居るのじゃ」

宮殿衛士隊の中にも闇神隊に枠があるならと転属願いを申し出ている者が居るらしい。炎神隊、水神隊、土神隊、風神隊は其々神技の属性が合っていないければ所属出来ないが、闇神隊はその辺りがバラバラなので各隊から希望者が出ているそうなの。

「ま、どいつもこいつもお前から賜る装備が目当てなんじゃろうがな」

「あゝなるほどなあ」

そういう事も踏まえて、ヴォレットは今後、悠介が欲しいと思う人材があれば自らスカウトして部隊に組み込んで良いと許可を出した。スンがちらつと悠介の顔を窺ったが、直ぐに視線を戻したので気付かれる事は無かった。

その後、再びソルザックの店を訪れた悠介は大まかな事の次第を告げると、闇神隊の専属土技師として所属する気は無いか持ち掛けた。

「なんとっ 私を宮殿衛士隊にですと！」

「つつつても、神技兵の立場からになるって言うってただけ」

ソルザックは一般神民なので、有事の際に徴兵される神技人の兵『神技兵』に民間技師として取り立てられてから、闇神隊に組み込まれる形で所属させる事になる。

「構いませんとも！ 構いませんとも！ 宮殿衛士隊、それも噂の闇神隊に所属できるなんて、なんたる幸運！」

「そ、そっすか……。 んじゃ、この契約書にサインを」

嬉々として契約書にサインを入れるソルザック。これにより、闇神隊に最も効率よく悠介のサポートを行える人材が確保された。

ガゼッタの山岳地帯に点在する戦士養成施設を兼ねた幾つかの村。その一つに滞在中の白刃騎兵団は、本拠地から届けられた報告について話し合っていた。

「フォンクランク側の陰謀だと？」

「その可能性が高いかと」

あの王に限ってそれは無いだろうと、側近からの報告に頭を振るシンハ。

フォンクランク領の騒ぎを受けて調査に向かわせた隊からの連絡が途絶えた翌日、帰還した調査隊員の報告はブルガーデンの領内を横断中にフォンクラン軍と思わしき部隊から急襲されたという内容だった。

ただ一人生き残ったその調査隊員も、強力な炎技によるモノと思われる火傷を負っており、報告を終えると同時に意識を失ったので水技の治癒を受けさせている。

国内から今後不穏分子となり得る無技の民を減らす為、ガゼッタ

に流れないようにする為に、ガゼツタに靡かないものを処刑するという名目でガゼツタ軍が襲撃しているように装ったフォンクランクの陰謀ではないか、というのが、側近達の意見だった。

だが、シンハはその考えには懐疑的だった。エスヴォブス王の人格者ぶりは邪神探索の旅でフォンクランク領を旅した時に感じ取っている。ブルガーデンから殆どなんの利権も取らずにあの御老体を引き揚げさせた所から考えても、そんな謀をするとは思えない。

「もっと詳しい情報が必要だ」

「ですが、今は密偵の殆どをノスセンテス攻略に向けています」

ノスセンテスに潜入させている諜報部隊を今動かす訳にはいかない。だが事態は深刻だ。

「このまま問題を放置する事はできんな……副長、暫く全軍の指揮を預ける」

「陛下、まさか……」

シンハはフォンクランク領がある方角の空に視線を向けながら白刃騎兵団の鎧を外すと、白金の大剣を背に担いで馬に跨った。

「暫く留守にする!」

再び無技の旅人となったシンハは、慌てて止めようとする側近を振り切り、一路フォンクランクへと旅立った。

37話：風の知らせ

ソルザックを闇神隊の部下に加える事が正式発表されると、闇神^{ユースケ}隊長に認められれば民間人からでも闇神隊にスカウトされるという噂が街や宮殿を駆け巡った。

その影響で悠介が街に降りる度に自身の売り込みを試みる者が後を絶たず、下々の声を聞いて回る任務に少しばかり支障が出てしまった為、ヴォレットの計らいによって下街巡回は暫く休止になっている。

「むむう、歯車を組み合わせた変速機構ですか……これは面白い」

五日程が経過して騒ぎも下火になった頃、悠介は簡単なギヤボックスの試作品を持ってソルザックの店を訪れていた。悠介は特別こういった機械の構造に詳しい訳でもなく、精々がプラモデルやラジコンカーの分解で仕組みを知っている程度である。

「組み合わせと仕掛け次第で逆回転とかも出来る筈なんだけど、俺もそこまで詳しくないから」

「分かりました、是非研究させて貰いましょう」

小物作りも手掛けていたソルザックは悠介の作る実験製品に深い関心を示し、動力機関の開発にも協力する事になった。ソルザックが精製した上質の素材を使い、悠介が形を作りながら概念を伝え、

それをソルザックが再現して研究開発を行う。

必要な材料は問題なく手に入り、部品は悠介もソルザックもイメージ通りのモノを作る事が出来る。動力の大元となる実験モーターは『謎の力』によって永久機関の如く動き続けるので、朝から晩まで好きなだけ研究し放題という環境が出来上がった。

「最終的には衛士隊馬車と同じ位の速度で走れる動力車とか目指したいね」

「おおう、それは素晴らしい！ 実に革新的発想だ」

悠介が提唱する新しい乗り物の開発に、未知のモノを研究するのが趣味であるソルザックは大いに乗り気だった。

低民区の街角を無技人の清掃集団が掃除道具を持ってぞろぞろと移動している。彼等を率いる監督役の担当衛士は、街を行く住人達の様子を観察しながら、最近発生した無技の村襲撃事件の影響を探っていた。

フォンクランク領内で無技の村を所有している者は、宮殿関係者のみならず一般商人達の中にもいるので、流石に情報の流出は抑え切れない。ガゼツタ軍による無技の村襲撃について話が広がると、そこから先日のパウラ戦での出来事が知れ渡り、民の間からも早速ガゼツタを懲罰すべきではという声が聞かれ始めていた。

領内の無技人に対する不審感は今のところ見られない。長年の安

定した関係と実際に無技の戦士が持つ高い戦闘力や、無技人は総じて神技人より身体能力に優れているなどの事実が知られていないので、危機感も薄いのだと思われる。

ソルザックの店を後にした悠介は、無技人の清掃集団が活動している様子を横目に露店市場へ向かっていた。そろそろ他の宮殿衛士隊に新しい神技の指輪を用意する時期なので、適当な指輪を購入しに降りて来たのだ。

予め大量に買い込んでおいても良いのだが、どうせなら下街巡回の一環に組み込んで買ひ物と一緒に任務を行うようにすれば、店員と顔馴染みになって相手の口も軽くなりそうだという思惑もあり、毎回新しく購入する事になっている。

品物の相場もある程度の把握をしておけるというメリットもある等、色々と打算的な理由も含んでいた。

『お？ イフヨカだ、今日は非番か』

材料にする安物の指輪を購入し、適当に露店を見ていた悠介は、人込みの中に何時ぞやの私服姿なイフヨカを見掛けた。大量の食糧を買い込んでいるらしく、大きな籠を抱えてヨタヨタと通りを横切っていく。どうにも見えていて危なっかしい。

「イフヨカ」

「はい？ っ！ た、隊長！」

何処かボンヤリとした雰囲気振り返ったイフヨカは、声を掛けて来た相手が悠介だと分かれると、途端に慌てたような表情を見せる。そして、何故か訊ねてもない荷物について、まるで釈明するかのような説明を始めた。

「ちょ、ちょっと買い物に来てただけで、ですっ　これは、し、食糧が入用で！」

「そ、そうか……。えっと……重そうだし、家まで運ぶの手伝おうか？」

「っ！　いいいえっ　だ、だいじょーぶですから！」

あからさまに焦りを見せつつヨタヨタと後退って行くイフヨカの様子に、激しく違和感を覚えた悠介はズズイと詰め寄った。あうあう言いながら後退るイフヨカは、やがて路地の壁に追い詰められる。後退出来なくなったので横に逃げようと壁伝いに身体をずらすイフヨカを、壁に手をついて逃がさないようにロックオンした悠介は、揺れる翠色の瞳を覗き込むように顔を寄せると

「イフヨカ……」

「は、はい」

「……変だぞ？」

「あう……」

一体何をそんなに焦っているのかと、問い詰めようとする悠介の背後で、露店市場の喧騒に訝しむような声が混じる。

ヒソヒソヒソ……　あれって闇神隊の隊長だよな　あんな小

さな女の子を口説いてるのか？　いや、あの子も確か闇神隊の関

係者だった筈だ　え、じゃあ部下を手籠めに　そういえば、ヴ

オレット姫様にも手をだしてるとか　英雄色を好むんだなあ

でも小さい子ばかりだな　……ヒソヒソヒソ。

「ちっがーっ！」

露店市場に行く街の人々の声を聞いた悠介は、彼等に向かって魂の叫びを放った。そしてイフヨカの荷物を半分ひったくるように持つと、彼女の手を引いて速やかに路地を抜けて行くのだった。

「あの……隊長」

「んー？」

夕日に染まる無技人街の通りまでやって来た二人は、イフヨカの家に向かう道を歩きながらポツポツと言葉を交わす。あからさまにおかしかった態度を悠介に問い詰められ、イフヨカはおずおずとその理由にある隠し事について白状した。

「本当に、大丈夫なんでしょうか……？ お父さんも、お母さんも

……もうだいが歳ですし」

「心配しなくてもアイツはそこまで外道じゃないと思うよ、いきなり人質に取るような真似はしないさ」

そんな話をしながら歩くこと暫く、悠介は以前にも訪れたことのあるイフヨカの実家に到着した。不安げな表情を見せるイフヨカに、悠介は頷いて励ます。

「お母さん、ただいまー」

「お邪魔しまーす」

「お帰りイフヨカ、早かったね」

「いらっしやい、おや？ この前の隊長さんかい？」

入り口の布扉を捲って家に入ると、イフヨカの両親が出迎えてくれた。悠介は運んで来た荷物を床に降ろして一息ついてから、部屋の奥で構えていた大剣を壁に立て掛けて寛いでいる件の人物に歩み寄り

「くらっ シンハ！」

「ユースケか」

拳骨を落とそうとして空振りした。

「ユースケか、じゃねーよ。なにやってんだお前は」

「諜報だ。この国は相変わらず出入りが楽だな」

悠々と拳骨を回避したシンハは、しれっとそんな事を口走る。護衛も連れておらず、単身で乗り込んで来ているらしい。

「王様が一人でスパイしてんなよ」

「ふっ 俺にとってはこの程度、どうという事はない」

実際一人の方が動き易いというシンハは、ガゼッタの戦士養成施設村を出立して三日目となる昨日の夜、ここサンクアディエットの外周に並ぶ無技人街に入り込んでいたのだ。

これはフォンクランクの警備がザルだったという訳ではなく、神技の波動を持たない無技人ならばこそその結果である。気配を消した無技人が闇夜に紛れて近付けば、並みの神技人では気付けない。相手が訓練された無技の戦士ともなれば尚更だ。

「で、なんでまたイフヨカの家に戻り込んだんだ？」

イフヨカが神民衛士で且つ、シンハの正体も知っている以上、少しでも危険を減らそうと思えば、自分と面識の無い人間の多い場所へ行くのがセオリーではないかと問う悠介に、シンハは『彼女が俺を衛士隊に突き出すとは思えんのでな』と笑って答える。

それはどういふ事かと悠介に視線を向けられたイフヨカは、ビクリと肩を震わせた。

「ああああの、私っ 両親が！ だって、恩人だしっ それでっ 隊長になら！ って思ってた、でも、いきなりだったからっ」

「ふーむ……なるほどね、そういう事か」

噛み捲りなイフヨカの弁解内容を正確に把握してみせる悠介。

「今を読み取れるのか……それも邪神の力なのか？」

「……ノベルゲーマー舐めんなどだけ言っておく」

イフヨカにとって、シンハは両親を助けてくれた命の恩人でもある。

最近フォンクランク領内で起きている無技の村襲撃事件について、ガゼッタは無関係であることを明言した上で事件の調査に出向いてきたというシンハを、イフヨカは少しの間だけならと匿う事を約束した。

この事を『ユースケ隊長』にだけはこっそり知らせておこうと思っていたイフヨカだったが、何と言って説明すれば良いのかを考えている所へ突然その本人が現れたモノだから、イフヨカは気が動転してしまったのだ。

「お前のトコ（ガゼッタ）の勢力は完全に把握出来てるのか？」

「一応はな。俺と主義主張を違える者こそいるが、こんな馬鹿げた行動をしでかす奴は居ない」

ガゼツタの調査隊も被害を被っており、生還者の証言ではブルガーデン領を横断中にフオンクランク軍と思しき部隊に急襲されたとの事だった。側近達はフオンクランクの陰謀を疑っていたが、シンハはあのエスヴォブス王に限ってそれは無いだろうと確信している。それには悠介も同意した。

「ブルガーデン領って所に引つ掛かるなあ」

「言っておくが、リシャもそんな手段を取れる玉ではないぞ？」

「タマ呼ばわりかよ、つーか俺もあの女王様がそんな事命令するとは思ってないよ」

「では……イザップナー派の残党辺りか……？」

悠介とシンハが襲撃者の正体や目的について話し合っている間、イフヨカは両親と共に夕飯の支度を始めていた。そこへ、新たな客人が現れる。『訊ねて来た』というよりも『出現した』という表現がしっくり来るような現れ方をする緑髪の若い男。

「こんばんわあ、ユースケ君はいるかなー？」

「！っ」

イフヨカは驚きのあまり硬直した。慣れ親しんだ風技の波動を全く感じさせず、これほど近くに現れたレイフォルドを前に、声も出せず固まっていたが、ぼんつと背後から肩に手をおいた『ユースケ隊長』が纏う独特の波動を感じて、緊張が少し解れる。

「あ、脅かしちゃったかな？」

「久し振りだな、自称森の人」

「森の民だよー」

どうでもよさ気な挨拶を交わす悠介とレイフォールドを、シンハは見た目の姿勢はそのままに、内面では臨戦態勢を取りながら、油断なく眺めていた。壁に立てかけてある大剣との距離が先程より短い辺りに、警戒の深さが現れている。

レイフォールドはシンハの存在を気にする素振りも見せず、悠介に重要なお知らせがあると告げた。

「ガゼツタ軍っぽい武装集団が、フォンクランク領内を移動中みたいなんだよねえ」

顔を見合わせる悠介とシンハ。その集団が向かっている方角には、そこそこ規模の大きい無技の村がある。名門ヴォーア家が所有するその村には今、家督でもあるヒヴォデイルが視察で滞在している筈だという。

「そういやアイツ、そんな事言ってたな……」

「その村にいるヴォーア家の私設軍衛士に連絡を取ろうと試みたんだけど、風技の伝達が届かないんだよね」

「まさか、妨害されてるとか？」

どうやら、そのまさからしいという事で様子を調べに衛士隊を出したいのだが、生憎と今はフォンクランク領内の彼方此方へ、被害の有無を確認する任務に出向いているので『使える』衛士隊が残っていない。

「そこで、闇神隊の出番という訳なんだよ」

「じゃあこれは、ヴォレットからの出撃命令か」

悠介の問いに首を振って応えたレイフォルドは、相変わらず何を思っているのか読み取れない表情を向ける。

「姫君にはこれから知らせるよ、今回はエスヴォブス王からの緊急出動命令だね」

そう言っつてレイフォルドが布扉を指し示すと、勢いよく布扉が捲り上げられ、神民衛士隊の装備に身を固めたヴォーマルとフヨンケが飛び込んで来た。

「隊長！ 出撃命令ですぜ！」

「うーっわ、ホントにイフヨカのところに居たよ……」

既に陽は沈み、カルツイオの大地に夜の帳が訪れようとしていた。

38話・白い獣（前書き）

ちよつとグロいかも。

38話・白い獣

名門ヴォーアス家が所有する無技の村を目指し、闇神隊一行を乗せた衛士隊馬車が夜の街道を駆け抜けていく。

「あの、隊長……」

「気にすんな」

その車上で、ヴォーマルは悠介の隣に座るガゼツタの王に複雑な表情を向ける。この件に関してはユースケ闇神隊長殿から気になるなという『任務』を賜ったが、それは非常に困難を極めた。

「ですがねえ……」

一番多く文句を言いそうなフォンケは、風技による馬車の高速走行を安定させるのに忙しく、二番目に御小言の多そうなエイシャも水技で馬の体力を回復し続ける仕事に集中している。

シャイドは無口で元々物事に対する関心が薄い。イフォカは悠介と共犯的な立場にある。よって、シンハの同行を問題視する役目はヴォーマルに回って来たのだが

「まあ、あまり気にしないことだ。それより、そろそろ明かりを消したほうがいい」

「お前が言うなっ　つか俺の指揮とんな！」

「ふっ」

「……はあ」

どうにも緊張感の無いやり取りをする悠介とシンハを見て、ヴォーマルはやれやれと頭を振りながら明かりを落とす。

街道の先に見え始めた小さな明かりは、ヒヴォデイルが滞在しているらしい無技の村のモノと思われる。とりあえず隊長殿に次の指示を頂こうかと、ヴォーマルが声を掛けようとしたその時、周囲の索敵をしていたイフヨカが警戒を発した。

「！っ　だ、誰か来ます……馬一頭に、炎技の波動です」

シャイードが即座に馬車の速度を緩め、悠介はカスタマイズメニューを開いて非常事態に備える。その隣で、シンハは白金の大剣に手を掛けて何時でも飛び出せる体勢を取った。

暗闇の向こうから蹄の音を響かせて徐々に近付いて来る馬に乗った人影。一定の距離まで近付いた所で、ヴォーマルが炎技の明かりを放ってその正体を見定める。

「ヒヴォデイル！」

馬の首にもたれ掛かるようにして夜の街道を駆けて来た人影は、満身創痍な姿のヒヴォデイルだった。数日前、悠介が宮殿の馬車乗り場で見た『お貴族様』っぽい彼の衣服には彼方此方に焼け焦げた跡や、斬られたモノと思われる裂け目が出てくる。

興奮している馬を落ち着かせてヒヴォデイルを地面に降ろし、エイシャを治癒に当たらせる。

辛うじて意識があるものの朦朧としている様子だったヒヴォデイル

ルは、マントに付与されていた治癒効果とエイシャの治癒によって周囲の状況を把握出来るまでに回復した。

「おい、大丈夫か！」

「や、やあ……ユースケ……助けに来てくれたのか」

「一体、何があったんだ」

「……襲撃を受けたんだ……ガゼツタ軍の兵装を纏った集団だったんだけど……」

ヒヴォデイルの話によると、何時も通り収穫量の計算を終えて今日の作業を終えようとしていた時、突如村に侵入してきた武装集団が私設軍衛士の宿舎に夜襲を仕掛けて来たらしい。

その攻撃で宿舎の出入り口を塞がれてしまった為、私設軍の援護が無い状況でヒヴォデイルと数人の会計係りや使用人、側近達が襲われた。

周辺の警戒任務で外にいた少数の私設軍衛士は、索敵をしていた風技の民が何時の間にか倒されていた為、最初の襲撃が起きるまで武装集団の侵入はもとより接近にすら気がつかなかつたようだ。

「最初に雪崩れ込んで来たのは、確かに無技の戦士に見えた……でも交戦中に相手の一人が炎技を使ったんだ」

炎神隊の中では平凡な実力といえど、攻撃系炎技の使い手としてはヒヴォデイルも十分、精鋭と呼べるだけの力は備えており、尚且つ、悠介から貰った炎技の指輪で力の底上げがされているので、彼が放つ炎弾は中々の威力を誇る。

炎弾の直撃を受けそうになった無技の戦士らしき姿の相手は、咄嗟に炎の塊をぶつけてそれを打ち消すというミスを犯した。

「それって、変装してたつて事か……？」

「恐らくね……あれは見た目こそ無技の戦士だったけど神技の波動を……って、出たぁー！」

腕組みをして話に耳を傾けていたシンハの姿に、今更ながら気付いたヒヴォデイルが飛び上がる勢いで叫んだ。『気持ちは分かる』とばかりにヴォーマル達がうんうん頷く。

とりあえず事情を説明しようとする悠介だったが、シンハがヒヴォデイルに重要な質問を投げ掛けた。

「状況は概ね分かった。お前が一人負傷した状態で逃げてきたという事は、部下は全滅したのか？ 村人達は怎么样了？」

「はっ そうだ！ 使用人達が僕を逃がす為に途中で奴等の足止めを……！」

「っ！ イフヨカ、街道の先の様子は？」

「……駄目です、距離があり過ぎて……あ、でも、僅かに空気の乱れを感じます」

恐らく街道上か、或いは村の中でまだ戦闘が続いている可能性があるという。悠介は宮殿に緊急連絡を入れるよう促がすと、ヒヴォデイルを逃がす為に追撃の足止めを行っているという使用人達の救援に、臨戦態勢で馬車を走らせた。

「追撃に出た者は？」

「まだ戻りません。ですが、脱出したのは手負いのフォンクランク貴族とその使用人数名です」

「ふむ……あの傷では最早助からんか」

風技の伝達による呼び掛けが頻繁に行われているとの報告が上がっている、そろそろ街から衛士隊が向かって来るかもしれない。ガゼツタ軍の兵装に身を包む武装集団の隊長は、今の内に次の場所へ移動しておいた方が良くと判断して撤収命令を出した。

「村に火を放て！ 我々は次の目標に向かう、追撃隊にはそこで合流すると伝える！」

彼等は村中の建物を回り、家畜小屋や農園にまで火を放ち始めた。村人が避難しているヴォーアス家の別荘と駐留部隊らしき衛士達が立て籠もる宿舎には、土技による耐火処理がされているので、油木を積み上げて念入りに燃やす。

村に滞在していたフォンクランク貴族との交戦では思わぬ損害も出したが、適度な抵抗は却って都合が良い。

「よし、撤収する！」

焼け落ちる村に小さな工作を仕掛けると、彼等は何処かへ去っていった。

遠くに見えていた小さな明かりが、ボンヤリと広がる光に飲み込まれていく。それを指して村に火の手が上がっていると指摘するヴオーマル。

「ありやあ多分、焼き討ちですぜ」

「こりや急いだ方がいいな……」

「っ！ た、隊長っ 前方の林に、複数の反応が……っ 戦闘が行われてます！」

イフヨカが警戒を発した瞬間、街道の先に見える林の間で炎が飛び交っているのを確認した。御者台のシャイドが急遽馬車を減速させる。すると、停車しきる前に白金の大剣を振り翳したシンハが馬車を飛び降り、林の一带へと駆け出した。

「ここは俺が引き受ける、お前達は先に行け」

「シンハ！ たくっ ヴオーマル、後の指揮を任せる。このまま村まで行ってくれ、ヤバそうなら直ぐ引き返して構わない」

そう言って指揮を預けた悠介は、十分に減速した馬車から飛び降りてシンハの後を追う。回復したヒヴォデイルも戦力に数えているので、余程の大部隊にでも遭遇しない限り大丈夫だろうと考えていた。

「どうする……っ？」

「隊長の命令だ、俺たちはこのまま村へ向かう！」

あのシンハ王と二人だけにして良いのかという意味も含んだシャイドの問い掛けに、ヴオーマルは悠介の命令を優先する判断を下した。街道脇の林に消える悠介達を見送り、衛士隊馬車は徐々に速

度を上げて行く。

「そういう訳なんで、イザって時はよろしく頼みますぜ?」

「う、うむ、任せておきたまえ」

ヒヴォデイルを戦闘要員に加えたヴォーマル達は、襲撃を受けた村を目指して街道を駆け抜けていった。

「俺に付き合っつて良かったのか? お前の部下達は、見たところまともに戦えそうな者はいなかったようだが」

「そう思うんなら一人で勝手に飛び出すなつての、それに神技力の強さが戦いの強さつて訳でもないだろ?」

ヴォーマル達はギアホーク砦で自分達より遥かに強力な攻撃系神技の使い手を倒している。

カスタマイズされた短剣の補佐があつたとはいえ、実戦経験からしても彼等は手慣れであり、ベテランと言えるのだ。悠介は普通に心配する気持ちこそあれど、そこは彼等を信頼していた。

今回はヒヴォデイルも居るので、攻撃系神技の使い手にも不足していないという悠介に、シンハは感心する素振りを見せる。

「意外に殊勝な心掛けだな、使える者はたとえ保護した被害者であっても使うか」

「ん? 怪我はもう治ってるんだし、アイツも宮殿衛士なんだから当然だろ?」

悠介の思考をシミュレーションRPG風に表現するなら、とある

イベントで合流した仲間ユニットをそのイベントで出撃させて使うようなモノで、『脱出してきた被害者だから』とか『貴族だから』という理由でその状況に参加させないという考えは無い。

『大事を取って先に街へ帰らせる』等という選択はありえないのだ。そんな話をしながら走っていた悠介とシン八の間を、流れ弾らしき炎の塊が通り過ぎる。

「良い判断だ！」

「うおっと！」

左右に跳んで分かれた二人は、暗闇に染まる木々の間を駆け行く微かな人影を見つけると、見失わないように後を追って走り出す。

先程の炎の塊を放った者か、放たれる対象となった者か、その判断は或る程度の距離を詰められた所で見分けが付いた。

編み込まれた二対のおさげを揺らしながら走るメイド服姿の人影。ヒョオデルの屋敷で働く使用人である事を確認した悠介が声を掛けようとしたその時、何かに足を取られたのか彼女は豪快にすっ転んだ。

そこへ、林の奥から炎の塊が二つ三つほど飛んで来るのを見た悠介は、咄嗟に転んでいる使用人の前に飛び出すとマントで覆いながら土の防壁を出現させた。二発まで耐えた防壁は三発目の着弾で碎け散る。

防壁を吹き飛ばして威力の落ちた炎の塊が粉々に飛び散りながら悠介達に降り掛かるも、カスタマイズによってコレでもかと防御効果を施してある闇神隊の隊服は、熱も衝撃も延焼も防いで着用者とそのマントの下に庇われた者を守った。

「あぶねえ〜」

「あ、あなたは……」

「闇神隊の悠介だ、ヒヴォディルんこの使用人さん？」

「は、はい、そうです！ ……あの、お坊ちやまは無事なのでしょうか」

ヒヴォディルが『お坊ちやま』と呼ばれているらしい所にツッコミたい気分になった悠介だったが、今はそれどころでは無いので真面目に返す。おさげ髪の使用人はヒヴォディルの無事を聞くとホツした表情を見せた。

彼女は移動系風技の使い手だったらしく、風技の補佐を使って林の間を逃げ回り、追っ手を攪乱していたようだ。

使用人を助け起こした悠介は、木の陰に隠れながら炎の塊が飛んで来た方向を窺ってみたが、林の奥はひたすら暗闇が続いていた。しんと静まり返った闇に耳を澄ませば、虫の鳴く声にかさかさという僅かな葉擦れの音が混じる。

「早いとこ街道に出て応援の衛士隊と合流したいんだが、シンハ！ 敵の居場所は分かるか？」

「わからんな、こつ暗くては何も見えん」

数歩離れた場所で同じ様に身を隠しているシンハは、姿勢を低く保ち、一瞬の変化も見逃すまいと周囲に視線を飛ばしながら辺りの気配を探っている。

「下手に動くのは危険か……」

「あいつ まだ執事長達が」

使用人の娘と一緒に残った他の仲間について訴えかけようとした

時、闇の奥に赤い炎が生まれた。何時の間にも回り込まれたのか、隠れている木を背に、ほぼ正面の方角から飛来する二発の炎の塊。

「危ない！ 伏せろっ」

「きゃあ！」

土の防壁で対抗する悠介だったが、正面の防壁を補強する事に集中していた為、右側面からの時間差攻撃に対応しきれなかった。使用人を庇って衝撃に備える。

「そのまま伏せていろ！」

直撃コースだった炎の塊は、悠介達の傍まで一気に駆けて飛び込んで来たシン八が、白金の大剣で叩き潰した。

神技を相手にした戦闘を前提に鍛えられているシン八は、神技人との戦いにも慣れていく。攻撃系神技、それも今回のような投擲型との戦闘も一度や二度ではない。邪神探索の旅ではブルガーデンの精鋭団とやりあった経験もあるのだ。

『敵』のいる方角を確認したシン八は暗闇に向かって跳躍すると、木を蹴り、大地を削り、獲物を追う猛獣の如く素早さで右に左に身を振りながら、闇の奥に潜んでいる炎技の使い手に突進して行く。

白い刀身を煌めかせながら猛然と迫り来るシン八の姿に、焦った炎技の使い手は迎撃しようとする闇雲に炎の塊を放った。それによって自身の居場所を明確にしてしまうというミスをおかす。彼にとって本日二度目のミスである。しかも、今回は致命的であった。

「ふっ　そこか……」

殆ど勘で突進していたシンハは、目標を完全に捉えた事で獰猛な笑みを浮かべる。

「おいつシンハ！ 殺すんじゃないぞ！」

「分かっている、一人は……残す！」

シンハはそう答えるや否や、グシャツという中身の詰まった果物が潰れるような音を一带に響き渡らせた。大剣の血糊を振り払う動作と次の目標に向けて踏み出す動作を同時に行い、飛んで来た炎の塊二発のうち一発を躲して、もう一発は叩き潰す。

そうして木々の間を疾風のような勢いで駆け抜け、ガゼツタ軍の戦士を装った炎技の使い手二人との距離を詰めると、炎の塊を放とうと突き出された腕を斬り上げて縦に両断する。

「ぎゃあああああ」

「ひい……っ げはっ！」

シヨックと激痛で断末魔のような悲鳴をあげる仲間の姿に怖気づき、思わず逃げ出そうと背中を見せたもう一人に強烈な一撃を蹴りこんで背骨を砕いた。

腕を抑えて唸っている炎技の使い手の首筋に、加減した手刀を落として意識を奪った所で戦闘は終了した。辺りに静寂が戻る。

「お前なっ やり過ぎだろ！」

シンハが捕虜の止血をしている所へ、使用人を連れた悠介がやって来た。無惨に裂けた腕を直視してしまった使用人の娘が、両手で口元を覆って息を呑む。背骨を砕かれた男はまだ息こそあるものの、早く治癒しなければ間違いなく死に至る致命傷だ。

最初に倒された男は悠介が先程復元したので、顔の判別は付くようになつた。襲撃者の身元を調べる為にも、あまり酷い状態にされるのは困る。

「まったく、無双しやがって」

「ムソウ？」

「二つと並ぶ者無しってな意味だよ」

「なるほど、無双か……ふっ」

気に入つたらしい。

「とにかく、街道まで移動しよう。使用人さんの仲間も無事なら様子見に出て来ると思うし、まずは応援の衛士隊と合流しよう」

「はい、わかりました」

「こいつはどうする」

「お前の剣でも握らせる」

流石に破壊された背骨までは癒せるかどうか分からなかったが、シンハの大剣に付与してある治癒効果はかなり高い。なんとか生命維持くらいは出来る筈だと促がす悠介に、『我が一族を騙る愚者に俺の剣を握らせるのか』と渋るシンハだったが

「……普通の剣に戻すぞ」

「……仕方あるまい」

た。
シンハは渋々、本当に渋々、虫の息の男に剣を握らせるのであ

39話・無技の村にて

緊急連絡を受けて出勤してきた応援の衛士隊と合流し、悠介達は彼等の馬車にて襲撃を受けた無技の村へと向かっていた。

今回駆けつけた（送られた）応援の衛士隊員は実力的に低い能力に留まっている者達で、所謂あぶれていた『使えない』者の寄せ集めである。彼等が重要な作戦や危険の伴う任務に駆り出される事はまず無い。

故に、デアアノース砦に配属された者もおらず、パウラの長城前で行われた戦いにも参加していないので、シンハの事を知る者もいなかった。お陰で合流を果たした後も問題なく村を目指している。

「フォンクラंकも人手不足は深刻なのか？」

「タイミングが悪かったんじゃないか？」

フォンクラंकの広大な領土に点在する無技の村を短期間で調べ、一度に方々へと部隊を出している現状。

敵勢力の規模も分からない上に、相手が『無技の戦士』かもしれないとすれば、一部隊の人数も多めに編成する事になる。部隊を預かる様な熟練した衛士達の間では『無技の戦士』が非常に手強い相手である事は周知の事実なのだ。

巨大な街であるサンクアディエットの警備にも多くの人員を割くので、宮殿関係者などの重要人物が関わる場所以外は後回しにするというような手段を取らないエスヴォブス王の方策下では、今回のような問題が起きるとどうしても人手不足に陥る。

「民に優しき王も考えモノだな」

「暴君よりやマシだろ」

何気に酷い物言いをしている事に自覚の無い悠介だった。

「村が見えてきたぞ」

悠介達が村に到着した時には、殆どの建物が焼け落ち、黒く炭化した残骸ばかりが広がっていた。奥の方にまだ燃えている建物が見える。

「ああ！ お屋敷がっ」

保護したヴォーアス家の使用人によれば、奥で燃えている屋敷がヴォーアス家の別荘なのだという。村人を避難させてあると聞き、悠介達が急いで屋敷前に向かうと、そこではヴォーマル達を始め十数人の衛士が必死の消火活動を行っていた。

ヴォーアス家の私設軍衛士達は焼け落ちる宿舎から自力で脱出したらしい。

「隊長！」

「ヴォーマル、中にいる村人達は？」

「奥に居るらしくて、生死の確認までは……」

「火の勢いが強過ぎる、このままでは全焼も免れない」

付与系か攻撃系水技の使い手が欲しい所だと現状の報告をしたシ

ヤードは、応援の衛士隊を見て表情を険しくした。彼等の力ではコップに掬った水で業火を消そうと試みるようなモノだ。

「ヒヴオデイル、避難民はどの辺りにいるんだ？」

「ええっと、多分一階中央の広間だと思うんだが……確かそうだったな？ リフヨスイ」

「はい、半階分ほど地下に掘り下げたホールに収容しています」

私設軍衛士の指揮を執っていたヒヴオデイルに、先程まで互いの無事を確かめ合っていた使用人の娘が補足する。

「うし、分かった。ちょっと別荘壊す事になるけど」

「構わないさ、後で直してくれるんだらう？」

そう言って理解を示すヒヴオデイルに、悠介は口の端で笑って返すと、燃え盛る屋敷に向かって駆け出した。手の施しようが無い程の炎に包まれた屋敷へ真っ直ぐ突っ込んで行く闇神隊長の姿に、私設軍衛士や応援の衛士達は一体何をするつもりなのかと見守る。

熱風が頬を撫で、髪を揺らす。舞い落ちる火の粉からマントで身を守りながら屋敷の外壁まで辿り着くと、表面をバシツと叩いてカスタマイズメニューを開いた。対象の近くに居なければ使えないのが、カスタマイズ能力の一種ウィークポイントでもある。

パウラの長城戦で使ったような石柱の連結による遠距離からのカスタマイズは、最初からしっかりとそういう作戦を行う想定に基づいて下準備をしておかなければ、そうそう簡単に出来るモノではない。

「あちあちつ あつちーな！ …… よし、実行！」

あちやあちや言いながらカスタマイズメニューで屋敷を弄っていた悠介は、避難民が居るのであろう空間を残して屋敷全体を畳み込んだ。屋敷を包む炎の内側から光のエフェクトが溢れたかと思うと、舞い消える光の粒を残して炎も屋敷も一瞬で消え去る。ざわりつと、私設軍衛士や応援の衛士隊からざわめきが上がった。

「おみごとです、隊長」

「どうやら上手く行ったか…… まだ燻ってるからな、しっかり鎮火させといてくれ」

先程まで立ち昇っていた黒煙は、巻き起こった一陣の風によって夜空の彼方へと運ばれて行き、屋敷の建っていた中央付近では、少し掘り下げられた空間に身を寄せ合う村人達が、ポカンとした表情で周囲を見渡していた。

「いやあ、改めて見ると本当に非常識だねえ、君の神技は」
「ほつとけ」

ともかく、避難していた村人達の無事も確認された。焼け落ちた村の復興作業は朝を待って始める事になり、悠介は村に散らばる焼け残った資材を集めて一時収容施設を建てると、そこで村人達を休ませた。

私設軍衛士と衛士隊によって行方不明者の搜索、確認作業などが行われる中、ヒヴオデイルと一緒に脱出して途中で追っ手の足止めに残った使用人や側近達のうち、遺体で発見された者や、怪我を負っているがまだ息のある者達が村に運び込まれて来る。

道中でシンハが倒した襲撃者の追っ手の中で、最初の餌食となつてしまった炎技の民は、間違はなく村を襲撃した者の中に居たと、面通ししたヒヴォデルが証言した。

残りの二人も、白髪にガゼツタ軍の兵装を纏っているが、炎技を中心にした攻撃を行っていた事は確認済みだ。そこへ、衛士隊が焼け跡の近くから襲撃者と思しき遺体を発見したと報告を持ってくる。悠介が闇神隊メンバーと共にシンハも伴って確認に行くと、全身に深い火傷らしき傷痕の残る無技の民の遺体があった。

「……間違いない、この者はガゼツタの白刃偵察団に所属する戦士だ」

「え……」

シンハの言葉に、思わず聞き返す悠介。ヴォーマルと顔を見合わせたフォンケが口を開く。

「じゃあ、この襲撃はやっぱりガゼツタが加担してるってのか？」

「いや、そうではない。ふん……読めてきたぞ、そういう事が「どついつ事だよ?」

説明を求める悠介に、シンハはイフォカの家でも話した内容を語った。五日ほど前、フォンクランク領へ無技の村襲撃事件について調べに向かわせた調査隊がブルガーデン領を横断中、フォンクランク軍衛士の襲撃を受けて壊滅したという報告を受けた事。

「なんだそりゃ? そんな話、聞いてねえぞ」

「当然だろう、調査隊を襲ったのはフォンクランク軍衛士ではなかったのだからな」

フォンケの疑問にさらりと答えるシンハ。悠介はその含みを持つ

た言葉と昼間に話した内容から、何となくシンハの言いたい事が分かった気がした。ヒヴォデイルも同じモノを感じたのか、顎に手を当ててふむふむ頷いている。

「それって、ブルガーデン軍の兵でも無いって事だよな？」

「そうだ。ちなみに、調査隊でガゼッタに生還した者は一人だけだ」

「ああ……なるほどな」

「え、どういう事です？ 意味分かんねえですよ」

闇神隊メンバーの顔を見渡しながら困惑するフォンケに、悠介は恐らくシンハが至ったであろう考えについて語る。ブルガーデン領でガゼッタの調査隊を襲ったのは、今回この村を襲撃した武装集団である可能性。

そしてこの調査隊員は、襲撃者達の手によってここに打ち棄てられたのであろうという推測。

フォンクランク政府が国内から無技の民を減らす為、ガゼッタに流れないようにする為『ガゼッタに靡かない者を粛清する』という名目で『ガゼッタ軍が襲撃している』ように装った『フォンクランクの陰謀』と見せかけた、『フォンクランクとガゼッタの衝突』を目論む何者かの陰謀。

「ガゼッタ側にはフォンクランクの陰謀と思わせ、フォンクランク側にはガゼッタの暴挙と思わせる。という策だな」

実際、側近達はエスヴォブス王による陰謀ではないかと疑っていた事を明かすシンハ。頭痛でも起きているのか、若干顔を顰めたフォンケが自分の理解出来た所まで確認をとる。

「えーと、ようするに……なんだ、うちでもガゼッタでもブルガードンでもねえ第三者の仕業ってことっすかい？」

「一応そうなるよな？ フォンクランクにはそんな無茶する集団がいる様子も無いし、ガゼッタの方もちゃんと抑えてるんだろ？」

「ああ、融和派の主張からしてこういう策に手は貸すまいよ。だが、騙されて協力する愚か者は何処にでもいる」

ガゼッタ軍を装うにしても、今まで謎に包まれていたガゼッタに関する詳しい情報が無くては、髪を白く偽って即変装完了という訳には行かない。調査隊を襲撃する場合など、軍内部の情報が無ければ部隊を見つucker事すら困難な筈だ。

「そうすると……フォンクランク領に詳しくて、ガゼッタの融和派？ とも繋がりのある勢力か」

「フォンクランクとガゼッタが衝突して得をする位置にある勢力という事だねえ」

「しかも、それなりの兵力を備えてなけりゃあ、コレだけの事は起こせやせんぜ？」

限りなく確信に近い推測から、『敵』の正体を見極めようとする悠介達。調査隊員の遺体を別にして、犠牲者の遺体が一箇所に集められる作業を横目に、皆で向かい合いながら意見を出し合う。

「イザップナー派の残党って線はこれで薄くなったか……」

「いや、実行部隊としてなら使える筈だ。イザップナーの部下だった精鋭団は、フォンクランク領に詳しいのだろう？」

「実行部隊か、ならそいつ等の後ろから糸を引いてる黒幕が居るって事だよな……心当たりはあるのか？」

「恐らく……ノスセンテス」

カルツイオで最古の街と謳われる古都を首都に持つ二番目に大きな国。等民制度の基である四大神信仰発祥の地とも言われる、歴史深い国である。白族帝国復興を掲げるガゼツタが最初に狙う国でもあった。

「おいおい、それって自分とかが狙われててやべえから、ガゼツタを俺等に押し付けようって魂胆じゃねえだろうな」

「無いとは言い切れんな……」

大国なれど首脳部が閉鎖的で国力に問題も見られるノスセンテスにとっては、フォンクランクとガゼツタ、双方が適度に消耗してくれば都合が良いだろう。

ブルガーデンとフォンクランクの衝突にも表向きは完全に傍観する立場を取っていたようだが、しっかり軍事行動を起こせる準備を整えて監視していたらしい事は、ガゼツタに対するその後の迅速な動きから推察できる。

「ふっ……神技人はとかく争いを好む民族のようだ。どうだユースケ、今からでも同土を大事にするガゼツタに乗り換えんか？」

「お前が言っつな、っーか、このタイミングで口説くな」

冗談めかした口調でそんな煽り気味な台詞を吐くシン八に、何処まで本気なのやらと肩を竦める悠介なのであった。

40話・炎と牙と地下の街（前書き）

今回ちょっと雰囲気変えています。

40話：炎と牙と地下の街

ヴォルアンス宮殿の上層にて、事件の概要について報告を受けたエスヴォブス王は、官僚達と今後の対策について話し合っていた。公爵家の家督が負傷する事態が起きた事で、衛士団を編成して領内の警戒に当たらせようという議論が交わされる。

国内を賊が荒らし回っている現状、安全性を考慮してブルガーデンの会談も延期が検討されていた。

悠介達が宮殿に帰還したのは深夜になるつかという頃だった。交代の衛士隊が村に到着したので、闇神隊とつかえない応援の衛士隊は入れ替わりで街に戻り、通常任務に備えて待機する。

シンハは街に入った所で馬車を降りて無技人街へと消えていった。明日一日様子を見てガゼツタに帰国するそうだ。

「じゃあ今日はこれで解散だな、みんなお疲れー」

「お疲れ様でした、隊長」

「あつしらはまた控え室に居ますんで」

「はあ〜もう、今日はマジで疲れたぜ」

宮殿の馬車乗り場にて、皆が其々の帰途につく。ヴォーマルとシヤードは控え室で仮眠を取りに、エイシヤは自室へ、フォンケは

相変わらず入り浸っている街唱の所へ行くつもりらしい。イフヨカは無技人街の実家に帰宅する。

「じゃあ、僕等もこれで失礼するよ」

ボロボロになった高級貴族服のマントを優雅に翻すヒヴォデイル彼の隣でペコリとお辞儀をした使用人の娘リフヨスイが、疲労の為か足をよろけさせて転びそうになった所を、ヒヴォデイルは咄嗟に肩を抱いて支える。

『申し訳ありません』と小さく詫びるリフヨスイを優しく気遣う様子に、悠介はヒヴォデイルの意外な一面を見た気がした。

明けて、翌日

闇神隊を事前の通達も無く勝手に動かされた事には不満気なヴォレットだったが、今回は公爵家でもある名門ヴォーアス家の救援を行う為に仕方がなかったという事には理解を示していた。

また、この件で闇神隊がヴォーアス家の家督を救った事により、これまで悠介に対して猜疑的だった他の名家、ヴォーアス家と交流のある家々の者達も、悠介の立場を認めるよう姿勢に変化が見え始めた。

何よりも、婚約者候補組をコントロールしていたヒヴォデイルが無事に生還した事は大きく、婚約者候補組の子息達は親からも悠介に対して真に敬意を払うように申し付けられる事になるのだった。

「ガゼツタの者が街に来ておるとな？」

「シン八殿は、ガゼツタの王子なのか？」

「いや、王だつってたな」

「国王が一人で来ておるといふのか？」

闇神隊の活動報告で、悠介からシン八が無技人街に入り込んでいた事を聞くヴォレットとクレイヴォル。慌てて飛び出していこうとするクレイヴォルを、ヴォレットは服の裾を掴んで引き止める。

「まあまで、クレイヴォル」

「しかし、今ガゼツタの王が街にいるのならチャンスです！」

「なんのじゃ？ ガゼツタと戦争する口実を態々作ってやる事のか？」

「あ、いえ……それは」

いつか敵対するであろうと見られているガゼツタの国王、その身柄を確保する事の有益性ばかり考えていた為、悠介の報告にあった第三者勢力が絡んでいるらしい陰謀の事が思考から抜け落ちていたクレイヴォルは、思わず言葉を失う。

「わらわも会つてみたいのう、どうにか出来んか？ ユースケ」

「まーたそんな無茶を……まだイフヨカの家に居るとは思っけど」

「姫様……まさかとは思いますが、御忍びで行こうなどという事は」

「勿論、誰にも知られず内密にじゃ」

知恵を絞った結果、この前閉鎖した街の地下を利用しようという事になった。ヴォレットを宮殿の地下で待機させ、悠介はシン八を

連れて地下街に詳しいソルザックを案内人に、カスタマイズで道を作りながら宮殿の地下まで進むという計画。

「それじゃ、ちよつと無技人街まで行つて来る」

「うむ、良い知らせを期待しておるぞ」

無技人街に向かう途中でソルザックの店に立ち寄り、イフヨカの家を訪ねた悠介は、丁度旅支度を整えていたシンハにヴォレットが会いたがっている事を伝えた。

「いいだろう」

「少しは迷え」

即決したシンハを連れて低民区に入ると、ソルザックの案内で中民区の地下に入り込めそうな人通りの少ない路地へと向かう。閉鎖して三日も経つた頃には、もう新しい穴が開けられているそうなの。

「まさか、ソルザックさんも常連で入り込んでるんじゃないか……」

「いやいや、私はほらっ 例の乗り物開発で充実しているからね」

機会があれば喜んで地下街探索も行いたいが、今は法を犯してまでするうとは思わないと笑うソルザック。地下空間を有効利用しているのは、もっぱら存在自体が摘発対象である違法営業の野良唱達だと彼は語った。

「……ヴォレットは宮殿の地下で待機させて正解だったな」

「はっはっは、あの姫様の情操教育という面で考えるなら確かに」

「ふむ……王族を語る様を見るに、この国は身分に対して意外に大らかなのだな」

「いや、ヴォレットが特殊なだけだと思うぞ？」

貴殿も大概特殊ですよというソルザツクの突っ込みをスルーした悠介は、薄暗い路地に立つ扇情的な格好をした唱謡い達の間を『はいはいごめんなさいよ』と通り抜ける。

彼女達は最初、宮殿衛士がやって来たのを見て摘発かと逃げ出す者が居たが、相手が『閻神隊のユースケ隊長』だと気付くと遠慮がちに営業スマイルで誘惑を仕掛けて来た。

任務中でもあったので悠介は丁重にお断りしたが、後に彼女達が営業を試みた理由を知って悶絶する羽目になる。それはさておき、ランタンを掲げるソルザツクを先頭にして、悠介達は不自然に空いた壁の穴から中民区の地下街へと入った。

「宮殿にはこっちのルートから行くと近道ですな、途中で高民区に入りますが、水没している箇所がかなりありますよ？」

「ああ、それは俺が何とかするから大丈夫」

「ふむ……ここは絶好の隠れ家になるな」

「……潜むなよ？」

地下街に入るにはどうしても低民区を通らなければならない為、通常は勝手に街へ上がれることを許されない無技人がこっそり潜む事など無理なのだが、シン八ならやりそうに思えて注意しておく悠介だった。

ソルザツクの案内で小一時間ほど地下を進んだ悠介達は、区画門

に見られるような巨大な壁に突き当たる。

「この壁の向こうが宮殿の地下に繋がってる筈です」
「なるほど、確かに」

カスタマイズメニューで周囲の構造を調べた悠介は、この壁が古い防壁である事を確認した。壁に抜け穴の通道を作って宮殿の地下に入り込む。古い様式の宮殿廊下に感嘆しているソルザックが、何処から響いてくるブーンという奇妙な音に首を傾げる。

「この音は……？」
「多分、ヴォレットだ」

カルツイオには馴染みの無い扇風機のような音。ヴォレットが最近いつも持ち歩いている『空飛ぶお皿』の、プロペラが風を切る音だった。どうやら近くに居るらしいと、悠介は少し大声で呼んでみた。

「ヴォレットー！ 居るのかー！」

「ユースケか！ 近くに来ておるのか？」
「ああ！ 今宮殿の馬車乗り場がある方向辺りだ」

互いに反響する声で呼び合って位置を確認しあい、地下宮殿の玄関ホールに当たる場所で合流を果たす。

ヴォレットの傍にはクレイヴォルの他に、闇神隊メンバーと弓を持ったスンの姿もあった。以前、訓練場で見た隊服をもつとシンブルにしたような服を纏っている。クレイヴォルはやはり警戒の籠った視線でシンハの姿を見つめていた。

「お初にお目に掛かる、フォンクランクの姫君」

「ヴォレットトじゃ。よく来たのうガゼッタの王」

「シンハだ。俺に何用か」

「特に用は無いが、一度顔をみておこうと思つての」

「そうか」

シンハ王とヴォレットト姫の非公式極秘会談？ は、周囲の者がハラハラするような雰囲気が始まった。早速クレイヴォールの眉間に皺が増えている。炎の姫君と白狼の王は互いに相手の器を見定めようと言葉を交わす。

「それと、ユースケは渡さんからな」

「ふっ 邪神という世界の循環を担う存在、貴女の手に残るのではないか？」

「わー！ わー！」

二人のやり取りを静かに見守っていた悠介は、いきなり邪神の名を出された事で慌てて対話妨害を試みるも、ヴォレットトはシンハの言葉を聞き返すでもなく、騒ぐ悠介に『やかましい』と空飛ぶ皿をぶつけた。

「ええい騒ぐな、ユースケが本物の邪神らしい事はもう知っておる」

「ほわっつ？ なんで？」

思わず英語を混じらせて首を傾げる悠介。頭に激突した空飛ぶ皿が、ふよふよと上昇を開始する。

「なんじゃその妙な詛りは、さっきスンから聞いたのじゃ」

「あ……ごめんなさい、喋っちゃいました」
「うおおい」

なんじゃそりゃーと思わずツツコミを入れてしまう悠介。よもやそこまで籠絡されてしまったのか等と内心で焦るも、ヴォレットがスンに秘密の共有を許されるまで信頼されたというのが実際の所であった。

危険な任務で悠介を支えて来た闇神隊の部下達も信頼に値する者に含まれている。当のスは、悠介に胸を裏タッチされて石化（赤化）していた。それを生温かい半目で見流したヴォレットは、シン八に向き直ってキツパリと告げる。

「まあ、そういう訳じゃからして、尚更ユースケは渡せん。色々諦めるんじゃな」

「……」

中々に豪胆な振る舞いを見せるヴォレットに、珍しくやり難そうな素振りを見せるシン八。その雰囲気を感じ取った悠介が話を向けると、シン八は『確かにこの手の娘はやり難い』と苦手意識がある事を認めた。どうも昔のリシャレウスを思い出してしまうらしい。

「え、あの清楚で可憐な女王様を？」

「可憐かは分からんが、アレも昔はこんなだった」

「こんなとはなんじゃ」

本人を前にして失敬な奴等じゃと御立腹をアピールするヴォレット。苦笑しながらな辺り、本気で機嫌を損ねた訳でもないようだ。最初はギスギスした雰囲気から始まった非公式極秘会談は、一転、ほのぼのした穏かな空気に包まれた。

「リシャレウス女王といえば、ブルガーデンとの会談は延期になりそうじゃな」

ヴォレットが今朝、父王の所へ挨拶に出向いた折、側近と官僚達がそんな話をしていたという。それを聞いたシンハは、ブルガーデンとの会談延期に反対を示した。ある意味、内政干渉的な発言になるが、今この場では立場を無視した雑談の延長に過ぎない。

フォンクラंकとガゼッタを争わせるノスセンテスの工作、と思われる一連の事件に、ブルガーデン内部の者も関わっていた場合を考慮し、今は全権を握っているリシャレウスとの距離を縮めておいた方が良くと説くシンハ。

「フォンクラंकとブルガーデンが蜜月になって、後々困るのはガゼッタではないのか？」

「どうという事はない」

「ふむ、大した自信じゃのう」

「全て想定している事だからな」

やがて非公式極秘会談の時間も終わり、ヴォレット達は宮殿の地下から地上階へ。悠介はソルザックと共にシンハを外に出られる位置まで案内する。

「お前の計画だと何れフォンクラंकともやりあうのか？」

「必要があればそうなるな」

「つーか、前に白族の繁栄は神技人社会の滅亡とか言ってたな」

「それがカルツイオの営みだからな、邪神の役割もそこに含まれる」

相変わらず確信的な口ぶりに、シン八達が邪神についてどんな事を知っているのか気に掛かる悠介は、いずれ何らかの形で白族の里にも出向く事になるかもしれないと感じていた。シン八の言う邪神の役割も、自分で真偽を確かめなくてはならない。

「将来敵対するみたいな事も言ってたけど、もしここで捕まるなり何かあったらどうするつもりだ」

「俺がここで果てるならそこまでの男だったというだけの事だ、ガゼッタは次の王を迎えて新たな時代を目指すだろう」

「なんつーか……お前、王様に向いてないんじゃないか？」

「否定はしない」

何となく、悠介はシン八が自らの意志で行動しているように見えて、その実、与えられた役割をこなそうとしているようにも思えた。シン八の言う白族帝国の復興も、始めから何れ滅ぶことを前提にしたような言い方が引く掛かる。

諸行無常を悟ったような言葉を口にしながら、願望成就を目指した積極的な行動という矛盾するような違和感。悠介は国家や邪神云々を抜きにして、何時かゆっくり腹を割って話し合ってみたいと思うのだった。

「では、何れまた会おう」

「おう、またな」

地下を出て無技人街までやって来たシンハは、そのままサンクア
ディエットを後にした。

「それでは、また何かあれば呼んで下さい」

「ん、お疲れさん」

中民区でソルザックと別れ、宮殿に帰って来た悠介は神民衛士隊
の控え室に向かう。そこには地下から戻ったヴォレットと闇神隊メ
ンバーにスンも混じって、わいわいと雑談に興じていた。他の衛士
達は皆、襲撃事件絡みで出払っているようだ。

クレイヴォルはブルガーデンとの会談について、延期を取りやめ
るよう王に進言する為の根回しに席を外している。

「おお、戻ったかユースケ」

「お疲れ様でした、どうぞ隊長」

「ユースケさん、これどうぞ」

皆で飲んでいるララの実ジュースの入ったコップを差し出すスン
とイフヨカ。見事にタイミングが被ってしまい、一瞬迷う悠介だっ
たが、微妙な空気が漂う前に両方受け取るという迅速な選択で事な
きを得た。

「そっぴゃあ……昨日街で」

フォンケが空気を読んでか読まずか、街で聞いた『闇神隊のユースケ隊長』に関する噂話を口にする。曰く、気に入った女の子には

神技人、無技人に関係なく片っ端から手を付けている。

「ああ、英雄がなんとかかんとかで、色眼鏡で見られるからな…
…」

曰く、ブルガーデンのパウラを制圧したその日の内に、ブルガーデン精鋭団の女の子を墮としていた。

「まで！ その噂流したのお前だろ！」

曰く、部下も情け容赦なく手籠めにしている。

「してねーし！ つか、情け容赦なくってなんだよ」

「最後のは多分イフヨカの事ですけど、露店市場のある広場で噂になってやしたからね」

「なんか公衆の面前で口説いて、怯えるイフヨカを強引に連れて行ったらしいじゃねっすか」

緊急出勤命令を受けて悠介を探していた時、イフヨカの家にいるという情報を受けて出向いてみたら本当に居たので、昼間の噂の信憑性が増してしまった等と嘯くフォンケ。勿論、本人は別のオチがあると思っっている。

「隊長、力尽くは良くねーですね？」

「女の子には優しくしてあげないと」

「ちよっ お前等な」

悪ノリするフォンケとヴォーマル。エイシャはヴォレット姫の御前で畏まっているのか何時ものキレが無く、シャイードは普段の無口はもとより、こづい話には入って来ない。

ヴォレットとスンは面白そうに二人の話を聞いているので、援護の無い悠介は応援を求めてイフヨカに視線を送った。

「力尽くだなんてそんなっ 確かに最初は強引でしたけど……でも、隊長は優しかったです！」

シーン

イフヨカの『荷物を持ってくれた』とか『黙っていた事を怒らなかつた』とか、色々重要な部分が省かれた状況説明という応援は、賑やかな衛士隊の控え室に静寂をもたらせた。

「あー……ユースケよ、遊ぶなら街唱辺りにしておけ、素人は止めておいた方がよいぞ」

なんなら唱姫を呼んでやってもよいぞ？ と気遣うヴォレット。口の端が笑っていて頬がびくびくしている。

「男の人ですから、そういう事に興味があるのも分かります。でも、節度は必要だと思いますよ」

と、宥めるように優しい口調で諭すスンは、肩をプルプルさせている。

「お前ら纏めてちょっと待てー！」

今日は珍しく弄られる悠介なのであった。

フォンクランク領の南に広がる大きな湖の畔で、ガゼツタ軍の兵装を纏った十数人の武装集団が、次の襲撃目標である無技の村を前方に見ながら計画の見直しを迫られていた。

先日襲撃した村より脱出したフォンクランク貴族と数名の使用人彼等に放った追撃隊が壊滅したという報告を、一人生き残って本隊と合流を果たした伝達係の風技の民がもたらせたのだが、その内容が問題だった。

「フォンクランクの闇神隊長とガゼツタのシン八王が手を組んでいるだと……？」

「ちよつと、考えられませんね」

闇神隊と行動を共にしていたらしい無技の戦士に関して、それがシン八王だというのは流石に見間違いでは無いかと、武装集団を指揮する隊長は唸り、部下も同意する。だが少なくとも、無技の戦士が闇神隊と共闘した事実は確かなようだ。

協力者によって筒抜けだったガゼツタ軍の動向に、不透明な部分が出来てしまった。こういった想定外の事態が起きた時、そのまま敵地で活動を続けるのは非常に危険である。

この事を現場で判断するのは難しいとして、彼等は一旦指示を貰いに本国へ戻る事を決めた。

「つくづく闇神隊の存在は疫病神だな」

未熟だが『使える兵』だった部下を三人も失い、ヴォーメストは溜め息を吐きながら撤退命令を出すのだった。

41話：水面下

「では、補償についてはそのように」

サンクアディエットの地下で非公式極秘会談が行われた日から暫く、ブルガーデン女王リシャレウスと、フォンクランクのエスヴォブス王による公式会談が、ディアノース砦にて行われていた。

会談の中ではギアホーク砦の犠牲者家族への補償についても話し合われ、ブルガーデン側から全遺族に賠償金が支払われる事となった。それらの資金にはイザップナー元最高指導官の私財を処分して充てられる事になるのだが、この補償についての話し合いを前に、ブルガーデン側が予め氏の私財を確認した所、何者かによって半分の程持ち出されていた事が明らかにされている。

恐らくは内乱騒ぎのあった日から『火の団』を中心に行方不明となった精鋭団員達数名の仕業であろうと見られていた。幸いにも、持ち出しきれなかったのか残されていた分の宝石や貴金属類を処分すれば、請求される賠償金の額は満たせそうであった。

ギアホーク砦の話は一旦決着とし、両国にとって当面の脅威となりうるガゼッタの問題について話題が移る。エスヴォブス王は最近フォンクランク領内で起きている事件について、ガゼッタの関与があるか否かという問い掛けを行い、リシャレウスの反応を窺う。

「私は、無いと見ています」

「それは、貴女が彼の王の人となりを知った上での判断、と考えてよろしいかな？」

「そう捉えて頂いて結構ですわ」

「ふむ……」

実は表立つては明らかにしていないが、悠介達の動きやシン八が街に来ていた事なども、エスヴォブス王は把握している。

悠介が本物の邪神であるらしい事も、ゼシャルドが神器の製作依頼をした辺りで知っていた。これは王の側近達も知らない事だ。ちなみに、情報源は自称森の民だったりする。

「少し、踏み込んだ話をよろしいかな」

そう言って会談部屋から人払いをしたエスヴォブス王は、ガゼツタの王とリシャレウス女王との個人的な繋がりに就いて訊ねた。

「立ち入った話ながら、貴女はガゼツタ、シン八王とどう向き合うつもりでいるのか、真意をお聞かせ願いたい」

「シン八の事、ですか……」

多少の逡巡を見せながらも、リシャレウスはシン八に対する自身の気持ちを語り始める。

「シン八は……いえ、ガゼツタの王は、古の亡霊に取り憑かれています」

彼は白族の繁栄と衰退を神技人と表裏一体で繰り返す事が、カル

ツイオの営みであり、正しい歴史の流れだと伝える白族の教えに縛られているのだと、リシャレウスはガゼツタの内情にかなり突っ込んだ内容を語った。

リシャレウスは共存共栄の理想実現をもって、無技の民を、シンハを白族の呪縛から解放したいと願っている。

「これは、四大神信仰の否定にも繋がる話ですが」

そう前置きして、ブルガーデン女王から語られるガゼツタに纏わる秘密の一端。リシャレウスは幼少時代、父王や先代ガゼツタ王と共に過ごした白族の里で、四大神信仰の発祥に関する秘密を知った。体裁の為、四大神の概念こそ使っているが、リシャレウス自身、本当はそんなモノは無いという認識である。

「……それは」

「四大神信仰は、嘗てカルツイオに降臨した邪神『ヴィ・ザード』の没後、時の権力者たちの手によって捏造された信仰なのです」

ディアノース砦の会談で、リシャレウス女王とエスヴォブス王がこの世界の常識を引っくり返し兼ねないような話をしている頃、サックアディエットの中民区にあるソルザックの店では、この世界の工業面に多大な影響を与えそうな一つの発明品が生まれていた。

「まだ二段階の変速しか実現出来ませんでした」

「最初はこんな感じで十分じゃないかな、徐々に出力とか規模を大

きくしていこう」

試作ギアボックスの完成。悠介のカスタマイズにより、歯車や軸など各部の磨耗を抑え、潤滑油も良いモノにした静音仕様。

それをそのまま、カスタマイズのコピーで丸々複製すると、片方をソルザックに残してさらなる研究を続けさせ、もう片方は悠介が持って帰って乗り物に組み込むなど実用化の研究を進める。そうして問題点を洗い出して改善していく。

「それじゃ、また来月の手前くらいにでも」

「ええ、乗り物に使った研究結果も心待ちにしていますよ」

宮殿の自室に帰ってきた悠介は、何か適当なモノはないかと部屋の中を物色する。試作ギアボックスはギミック機能で回転し続けるモーターを中心に何重か歯車を噛み合わせて回転力を強めたモノで、凡そ四十センチ角の箱型から軸が一本突き出ている。

回転速度はイマイチだったが、その分パワーは増しているようだった。

「ん……とりあえず、これにでも取り付けてみるか」

手頃な『乗り物』を見つけた悠介は、試作ギアボックスの組み込みにカスタマイズメニューを開いて弄り始めた。

「ユースケ！ 何か面白いモノは出来たか」

悠介がソルザツクの店から帰ったと聞いて部屋にやって来たヴォレットは、扉を開けて踏み込んだ体勢で足を止めた。

ソファーに腰掛けた悠介が、そのままスーツと目の前を横切っていく。悠介はソファーの足にコマを付けて移動式に改造すると、ギアボックスと繋いだ動力用の車輪を取り付けて『動力付きソファー』を試作し、自走実験を行っていた。

「わはははっ なんじゃそれはー！」

動くソファーに大喜びのヴォレットは、『わらわにも座らせる』と悠介の膝に飛び乗る。

「おいおい、って……これもでも動けるのか、パワーは問題ないな」

「スン！ お前も来い」

「えっ！」

「え？」

ヴォレットの呼び掛けに一瞬驚くような声が応えて、悠介がそちらに視線を向けると、扉の所にスンがいた。実はスンも連れてきていたのだ。この頃はすっかり見慣れたような、着慣れたような感のあるドレス姿のスンが、遠慮がちに部屋へと入って来る。

「えっと、じゃあ……失礼します」

「ちょ……っ」

右膝側に寄ったヴォレットの隣、悠介の左膝にそっと腰を下ろすスン。

「おお、三人乗っても大丈夫じゃ」
「凄いですねー」

どっかで聞いたフレーズだな、とか思いつつ、これでも何とかソファーを自走させている試作ギアボックスのパワーに、悠介は実験の成功を確信した。このまま研究を進めて行けば、当初思い描いていた馬車の代わりになるような乗り物の実現も遠くない。

「ユースケさん、足、大丈夫ですか？」

スンは動くソファーにも気は惹かれたが、先程から黙ってる悠介が気になって声を掛けた。『重くないですか』と気遣う。

「ああ、それは問題ないんだけど……」

「ふふっ 気にするなスン、ユースケはわらわ達の尻の感触を楽しんでおるだけじゃ」

「えっ！」

「をいつ！」

もうお前等降りろつと怒って見せる悠介に、『駄目じゃ』で済ませるヴォレット。スンは照れてもぢもぢと顔を伏せてる。

そんな調子で何時もの如く騒いでいる悠介の部屋を、ヴォレットを探して宮殿中を歩き回っていた専属警護兼教育係殿クレイヴォールが訪れる。

「やはりここに居ましたか姫様、そろそろお稽古の」

ヴォレットとスンを両膝に座らせた格好の悠介を乗せたソファーがゴロゴロとコマを鳴らしながら部屋の中を走っている。という、一瞬理解に苦しむ光景を目の当たりにしたクレイヴォールは、思考を数秒ほど麻痺させた。数秒で済む辺りに、慣れを感じさせる。

「やあーじゃあつ 折角面白かったのにいー！」

「我俣を言わないで下さい」

子供のように駄々をこねる姫君をズルズルと連行して行くクレイヴォール団長に、ご苦労様と心の中で労いつつ見送った悠介は、残されたスンと苦笑し合うと、何気無い会話を楽しむ。

「宮殿の暮らしには、もう慣れたか？」

「はい、あんまり贅沢に慣れちゃうと村での生活に戻れなくなりそうで、少し怖いくらい」

「そっか、確かになあ」

宮殿で暮らしていると毎朝の水汲みも食事の支度も、果ては着替えまで使用人達がやってしまうので、色々鈍ってしまうという。

「この前のシンハの様子からして、またスンを狙うとは思えないけど……今の騒ぎが片付いたら一度ルフクに戻るか？」

「そうですね……あ、でも先生の邪魔しちゃ悪いですし」

「ぷぷつ そういやそうだったな」

「それに、行き帰りも大変ですしね」

高速走行の補佐付きで衛士隊馬車を走らせても、ルフク村との往復にはそれなりに時間が掛かるので不便である。

村まで角石でも繋ぎ合わせれば、パウラの長城前戦で部隊を移動させた方法を使って一瞬で行き来が出来るのだが、それこそ膨大な

量の角石が必要になり、あまり現実的とはいえない。

その一方で、悠介はカスタマイズ能力の性質を利用した連続瞬間移動なる移動法も構想していた。

「まだイメージの段階だけど、資材の問題をクリアした方法があるんだけどね」

サンクアディエツトのような構造をした街の中でなら、やろうと思えば床石の入れ替えで何処にでも一瞬で移動できる。そこから思いついた方法で、イメージ通りに出来れば少ない資材でとんでもなく効率の良い機動力を得られるという。

「まあ、どっちみちカスタマイズ能力を前提にした方法だから、俺にしか使えないんじゃないやあんま意味ないんだよなあ」

今ソルザックと共に進めている動力の研究では、いずれ一度に大勢を運べるバスのような乗り物をカルツイオ中に走らせるという計画も視野に入れていた。

尤も、それはソルザックと悠介が二人して妄想に近い将来の発展図を語り合う中で思い浮かんだモノの一つに過ぎないのだが。

「とりあえず、街の中で普通にそれなりのモノを走らせる事からだな」

「この動く椅子が、街の中を走るようになるんですか？」

「いや、それはそれで面白そうだけど……」

スンの言った街の光景を想像して思わず吹き出しそうになりながら、まずはヴォレットの乗るゴーカートを作ろうかと、悠介は動力付きソファアの解体を始めるのだった。

カルツイオの中央部に広がる巨大な湖。『月の鏡』と呼ばれるこの湖を挟んで対岸に位置する伝統ある古い国、ノスセンテス。

その首都である古都パトルティアノーストの奥深くに、中枢的な役割を担う建物があった。神議堂と呼ばれるこの建物では、国家の意思決定機関である『神議会』のメンバーが集まり、日々政策議論が行われている。

ノスセンテスは古都に住む各神技の民から二人ずつが代表として神議会メンバーに選出され、彼等を中心とした議会によって国家を運営する合議制が敷かれていたが、選出される人物に民意は反映されておらず、実質は少数による独裁制であった。

「さて、例の報告についてだが……ガゼッタ勢力と闇神隊長の繋がりは確かなようだ」

「我々の諜報が集めた情報によると、ガゼッタは闇神隊の特殊な神技を目当てに自国へ呼び込もうとしているようだな」

「闇神隊長の『ユースケ』なる者は、無技の村で育てられていたそうではないか」

「ガゼッタが付け入ろうとしているのもそこか……」

無技の民を保護する条例公布を働きかけるなど、一連の行動に見られる無技との繋がりはそこではないかと分析する。ガゼッタとの繋がりを指摘してフォンクランク内での立場を貶めても、結局はガゼッタに利するだけだ。

それならば、ガゼツタに持っていかれないよう先にこちら側から手を打てないかと、闇神隊長の取り込みを検討する議題が上がった事で『ユースケ』の正体について議論が及ぶ。

「ガゼツタが『ユースケ』を邪神として扱っている事についてはどうか」

「本当に邪神なのか、邪神に担ぎ上げようとしているのかは分からぬ」

「だが、ガゼツタのどこかに今も生きているであろう『アユウカス』が予言したのであれば、本物だろう」

「その場合は、なんとしても邪神を手に入れるか、滅ぼすかしくはない」

彼等もガゼツタの白族と同じく邪神が実在する事や、その役割というモノを知っており、それは古くから神議会メンバーという形でノスセンテスを担う彼等一族に、代々言い伝えられて来たものだった。

その言い伝えにある『アユウカス・イクドウト』という、邪神の降臨を告げる者の搜索も、随分と昔から続けられていた。

「アユウカスが潜伏すると思われる白族の里は、未だ場所が割れず、それらを確かめる術はない……」

「暫くはガゼツタとフォンクランク、双方の動きを注視するとしよう」

「ブルガーデンは如何に動くか……」

「あの国はフォンクランクに叩かれたばかりだ、これから切り崩されて行き、やがて消えるだろうて」

フォンクランク国内から無技の民を減らす為、ガゼツタに流れないようにする為、ガゼツタに靡かない者を処刑するという名目で、

ガゼツタ軍が襲撃してのように装ったフォンクランクの陰謀、と見せ掛けたノスセンテスの陰謀。

亡命者ヴォーメストを使う事で最終段階ではブルガーデンが裏で糸を引いていたかのように装ってフォンクランク、ガゼツタを翻弄し、ブルガーデンと三つ巴の争いを展開させる予定だったノスセンテスの策略は、一時中断して様子を見る事となった。

四大神信仰発祥の地にて、その神を造り上げた末裔達は、闇神隊長に纏わる情報を分析、吟味した上で結論を出す。

「では、闇神隊長の取り込みについては、この方向で宜しいか」
「うむ……こちらはそれで問題あるまい」

悠介の取り込みに関する謀が纏められ、そのあまりに古典的な方策内容に、思わず鼻を鳴らした一人が呟いた。

「まこと、何時の時代も英雄などと呼ばれる存在は、色欲深きモノよな」

42話：サンクアディエットの唱姫

先日エスヴォブス王が会談から戻り、ブルガーデンとの間に締結した協定や取り決め、補償などが発表され、両国の交流が解放された。元々禁じられていた訳では無いが、状況を見越して各商人達も大多数が取り引きを自重していたのだ。

これに伴い、滞っていた流通も活発になり、フォンクランクとブルガーデン双方の街で物価も安定し始めるのだった。

「やあ、ユースケじゃないか」

そろそろ次の指輪を作る頃なので下街へ買い物に行こうと宮殿を出た悠介は、高民区の通りでヒヴォデイルに会った。

「よう、怪我はもういいのか」

「あの日の内に水技で治癒済みだよ、休暇も貰ったからもう平気さ」

『また下街へ行くのかい？』と低民区の様子に興味を持つヒヴォデイルと二人して、他愛無い雑談をしながら通りを歩く。街を歩くときは常に馬車を使っていたヒヴォデイルも、最近はよく自分の足で歩くようになっていた。

中民区との区画門近くまで来た時、通りの角からパタパタと駆け出してくる女性に気が付いたヒヴォデイルが声を掛ける。

「これはこれは、ラサナーシャ殿。今日も御美しい」
「あら、ヒヴォデイル様。お久しぶりです」

誰？ と目で問う悠介に『彼女は唱姫だよ』と答えるヒヴォデイル。サンクアディエツトには唱姫が六人存在していて、彼女は三番目の唱姫だという。

腰の辺りまで伸びた水色の髪と瞳、髪のは少しウェーブしている。見た目はブルガーデンのリシャレウス女王を彷彿とさせるが、ラサナーシャはどちらかというと庶民っぽい雰囲気を感じていた。

「もしや、今日はエスヴォブス王の所に？」

「いいえ、ちょっと上の役人さんに呼ばれちゃいました」

最近ディアノース砦での会談に出席していた官僚達から呼ばれる事が多いという。『なるほど』と、納得気味に頷くヒヴォデイル。ラサナーシャは高価だが似たようなドレスが増えて喜んでいいやら困っていいやらと苦笑を見せた。

「それでは急ぎますので」

「ああ、引きとめて悪かったね」

「ユースケ様も、失礼します」

迎えの宮殿馬車に乗って去っていく姿を見送る悠介達。ヒヴォデイルが同意を求めるような口調で独り言っぽく呟いた。

「やはり、ブルガーデンの女王に中てられたって所なのだろうか
え」
「なんのこっちゃ？」

意味が分からず首を傾げる悠介に、ヒヴォデイルはふむふむと顎

に手を当てると、芝居掛かった仕草で得意気に告げる。

「何の話か分かってなさそうなユースケに、今の会話の概要を僕が説明してあげよう」

「好きにきなさい」

ヒヴォデイルの説明によると、ブルガーデンとの会談に出席していた高級官僚達から彼女への依頼が増えており、それに伴って彼女の元には官僚達おんやうから衣装として贈られる高価で美しいドレスが増えていくのだが、どれも似たり寄ったりなので苦笑している。

要するに、水色の髪に瞳、歳の頃も似ている唱姫の彼女を、ブルガーデンの女王様にみたててごによごによごという話。

「イメクラかよっ!」

この世界の風俗に突っ込む悠介であった。

とある伯爵の屋敷に呼ばれた唱姫ラサナーシャは、人払いのされた私室へと通された。この屋敷には月に一度の割合で訪れているが、何れも唱姫としての勤めを果たす為ではない。

中央に豪華な天蓋付きベッドが置かれているだけの、シンプルだが装飾などに凝った高級感を漂わせる部屋。厚いカーテンの下がる奥の窓際から屋敷の主が声を掛ける。

「仕事だ、ナーシャ」

「……はい」

「神議会から闇神隊長を亡命させられないか、もしくはノスセンテスに大使としても寄越せないかという指令が届いた」

「亡命、ですか……？」

この伯爵はフォンクランク内部に潜むノスセンテス神議会のシンパであり、ラサナーシャは彼の後ろ盾によって得た唱姫の身分を利用して諜報や懐柔を行う、謂わば特殊工作員のような立場にあった。今回は話題の闇神隊長をノスセンテスへ亡命させるという任務がもたらされたようだ。

「彼を亡命させるというのは、今の優遇された環境から考えて無理があるのでは？」

「それは分かっている、そこで君の出番という訳だ」

闇神隊長の女癖の悪さを利用するのだと説明しながら、伯爵はベツドに腰掛ける。ラサナーシャは伯爵の前に跪くと、その膝の上に頭を乗せた。さらさらと手触りの良い水色の髪が、無骨な指に梳かされる。

「君も噂に聞いていよう」

「確かに、そういう噂はよく耳にしますが」

まず、闇神隊長をラサナーシャの魅力で誘惑して虜にする。但し、それを前提とはせず、ヴォレット姫に睨まれないよう適度な距離を保ちながらとにかく親しくなる事を優先する。

それとなく会話の中に『ノスセンテスは一部で性に開放的である』という内容をアピールしておき、自身がノスセンテス出身であることを交えて近々里帰りを考えている事などを挙げ、興味を持たせる。

ノスセンテスの貴族に求婚されていた事を仄めかし『本当はあまり帰りたくないんだけど、妹がいるのでそうもいかない』と憂いを見せて気を惹きつつ反応を窺い、『妹は自分のような娼婦の世界とは無縁の普通の少女』と餌を撒く。

『妹』役の人材はこちらで得た闇神隊長の『好み』の情報に合わせて向こうで用意するそうだ。

その一方で、伯爵が宮殿上層に働きかける事によってガゼッタという共通の脅威に対し、おなじ四大神を崇める等民制国家として協力し合おうという風潮を作り、闇神隊が親善大使としてノスセンテスに派遣されるよう仕向ける。

ラサナーシャには闇神隊長の心にノスセンテス行きの理由を作らせ、伯爵は闇神隊を送り出す機会を作るのだ。

「方法は任せる、上手く惹きつける」
「分かりました」

頬をスツと一撫でされた彼女は伯爵の膝から頭を起こす。これが何時もの終了あがりを示す合図なのだ。余談だが伯爵は少々変わった性癖を持っており、『女性の髪を撫でる事』で気分が満たされる人らしい。

「それと、今月の分だ。体調はしっかりと管理するように」
「あ……はい、ありがとうございます」

伯爵が差し出す深い青色の液体が詰まった薬瓶を受け取り、ラサナーシャはそれを大事そうに懐に仕舞うと、屋敷を後にした。

指輪を購入した帰り、ソルザツクの店に寄っておこうと中民区を歩いていた悠介は、低民区を見渡せる防壁沿いの公園で、柵の手摺りに頬杖をついてぼくっとしているラサナーシャを見かけた。

朝方出会った時とは纏う雰囲気の違い、何処か陰のある表情が気に掛かる。

「あら、こんにちは」

「あ、ども」

視線に気付いて自然な笑顔を向ける彼女に、悠介は先程までの憂いた表情を隠そうとするような取り繕った気配を感じた。

「お買い物ですか？」

「ええ、まあ」

薄い化粧に、香水も意識しなければ気が付かない程の微量で、装飾の類も殆ど着けていない。

近寄り難さを感じさせるような美しさではなく、自然な可愛らしさを伴う綺麗な女性（ひびと）という感じ。素朴な笑顔は落ち着きがあって相手を安心させる。悠介はラサナーシャにそんな印象を持った。

これから帰宅する予定だという彼女と、偶々方向が同じだったソルザツクの店まで暫く話しながら一緒に歩く。

「でも、噂ってアテになりませんね、ユースケ様ってもつと怖い方だと思ってました」

「どんな噂かは聞かないでおくよ……」

「うふふっ 実はさっき初めてお会いした時も、私、内心ではビクビクしてたんですよ？」

唱姫として仕事をしているだけに『これでも女性としての魅力にはそれなりに自信がある』と自負してみせるラサナーシャは、街で真しやかに囁かれている闇神隊長の『女癖』に纏わる噂に、怖々としていたそうなの。

「目を付けられてしまっんじゃないかって」「ひでー」

そんな調子で和気藹々と会話を楽しみながらソルザックの店までやって来る。悠介は随分と短い時間で着いたように感じていた。

「それでは、私はこれで」「うん、またね」

軽く会釈して通りの向こうへと去って行くラサナーシャを見送り、悠介は来店の鐘を鳴らすのだった。

カラコロと鐘を鳴らして扉を潜るなり、店内のカウンターに居たらしいソルザックが物凄い勢いで詰め寄ってくる。

「今の女性！ 唱姫じゃありませんでしたかっ？」

「ああ、そうだけど」

「か、買ったんですかっ？」

「買わねーよっ！」

悠介はソルザツクの勢いに少し面食らいながら『ちよつとそこの公園で会ったので、話をしながら歩いただけだ』と説明した。

凄く羨ましそうな表情を見せるソルザツク。唱姫は宮殿関係者でも、それこそ高級官僚辺りしか相手にしない超高級娼婦、個人的に親しくなれるだけでも周囲から羨ましがられるのだ。

「また噂が盛り上がりそうですね」

「勘弁しろよ……」

何故か棒読みなソルザツクに、女遊びなんて全くしてないぞと疲れて見せる悠介。

「まさか姫様とそういう関係に至っているとまでは思っていないせんが 街唱くらい普通に利用してるでしょう？」

「いや全然」

「え、まったく？ これっぽっちも？ もしや姫様に禁じられてい
るのですか？」

「んにゃ、別にそういう事はないけど……」

顎に手を当て、小首を傾げて何か考える素振りを見せたソルザツクは、ポンと掌に自分の握った手を落として納得の表情を見せながらにこやかに言った。

「ああっ 確か子供にしか興味が」

「それは違う！」

「あ……もしかや男色で」

「断じて違う！」

憧れの唱姫と簡単に談笑してしまう悠介に対する嫉妬からか、やけに絡むソルザックであった。

宮殿に戻って来た悠介は自室で神技の指輪を仕上げて一息吐いていた。今日も今日とて悠介の部屋に入り浸って実験製品で遊ぶヴオレットと付き添いなスンに、昼間の事を愚痴る。

「やたら絡まれてさー」

「わははっ 或る意味それは仕方あるまい」

唱姫と言えば高級いいな女性オンナの象徴であり、その性的な魅力に留まらない包み込むような優しさに憧れる男性も多いという。

「ユースケさんは、女性に興味がないんですか？」

「凄く心配そうに言うのは止めてくれ、スン」

普通に興味はあるぞとアピールする悠介。

「その割には、まだスンにチューのひとつもくれてやってないそうではないか」

「！っ ヴォレット様！ わたしは別にそんなつもりは……」

「無いと申すか、無いと申すか」

「きゃっ あっ ちよっとそこはっ……！ やんっ」

こやつめこやつめと全身を満遍なくつつんして遊び始めるヴォレット。こういう歳相応のじゃれ合いが出来るのも、宮殿内ではこの部屋くらいであった。ヴォレットの私室は常に使用人が控えているし、スンの客間に居る時は外に護衛の衛士が立つのだ。

部屋の中できゃあきゃあと騒げば『何事ですかあ！』と踏み込まれ兼ねないのである。

「この期に及んで何を照れておるか、自覚が無いわけでもあるまい？」

「いえ、あの、その……」

背中から抱きついて耳元で囁くヴォレットと、赤くなってしどろもどろになるスン。女の子同士の過激なスキンシップにちよっと中てられ気味な悠介は、軽く溜め息を吐きつつ御転婆姫様ヴォレットを引き剥がす。

「反応がお約束過ぎるぞスン。ヴォレットもあんまりスンをからかうなって」

「……こやつが一番自覚ないようじゃ」

「んっ」

故意が無自覚か、目の前で露骨に繰り広げて見せた挑発やっわくにも期待した反応も示さず、なんのこっちゃと首を傾げてみせる悠介に、肩を竦めてぼやくヴォレットだった。

「スシも苦労するのじ」
「……」

43話：薬と疑問と平和な夜

「お、こんちやー」

「あら、こんにちはユースケ様。最近よくお会いしますね」

闇神隊の下街巡回任務が再開されて数日、低民区や中民区を歩き回っている悠介はラサナーシャと頻繁に遭遇するようになった。

が、これは単に以前からも街の通りで普通にすれ違っていたのが、知り合つてからはその都度声を掛け合うので、そう感じるのだろうと悠介は認識していた。今まで気にも留めなかった、ただの通行人だった他人が、顔見知りになった故だと。

「今日もお仕事ですか？」

「まあね、何か面白い話とかある？」

ラサナーシャは『サンクアダイエットはいつも通りだけれど、ノスセントスで新しい娯館が出来たらしい話を聞いた』という話題を振った。悠介はその店のサービス内容に内心で『ソープランドみたいな店だな』などと感想を持ちたりする。利用経験は、無い。

「ノスセントスか……」

「私、実はパトルティアノースト出身なんですよ」

向こうに妹がいるという話をして悠介に興味を持たせると、少し家庭の事情をこぼすように『妹は普通の一般民』『自分の仕事のこ

とは知っている』『偶に家に戻った時は唱^{しごと}姫の事で口喧嘩しちゃう事もある』等の内容で気を惹くのだ。

「お姉さんの事を心配してるんだろっ」

「私も、そうだと思います」

彼女との会話を楽しみながら『何故この仕事をしているかは聞いちゃいけないだろうな』と気を使う悠介。その時、不意にラサナーシャの身体が揺れた。立ち眩みでも起こしたようにふらつくと、お腹の辺りを押さえて立ち止まる。

「あ……ちょっと、ごめんなさい……」

悠介に背を向けつつ、懐から薬瓶を取り出して中身を少し口に含むと、体内の痛みを発する部分に水技の治癒を使う。

『今朝飲んできた筈なのに……最近発作の周期が早まってる？』

内心に不安を懐きながら、ラサナーシャは治癒の効果が患部に広がって行く感覚を受けて気持ちを落ち着けた。

「大丈夫か？ どこか悪いのか」

「いえその……昔からちよつと」

持病の事が知られれば興味を失われるかもしれないと焦り、誤魔化そうとするラサナーシャだったが、彼女を心配した悠介は知り合いに治癒の専門家がいるので『なんなら診て貰うか？』と勧める。

「治癒の腕は確かな人だよ、ゼシャールドって聞いた事ないかな？」

「あ、知ってます。元宮廷神技指導官のゼシャールド様ですね」

発作の周期が短くなった事も気に掛かるし、悠介と親しくなる切っ掛けにもなると判断した彼女は、ゼシャルドに診察を頼めるよう宜しくお願いする事にした。

翌日、宮殿を訪ねて来たラサナーシャをゼシャルドの所へ連れて行く為、昨日の内にヴォレットにも話を通して準備も済ませておいた悠介は、闇神隊メンバーと共に衛士隊馬車に乗り込んだ。良い機会なので、スンも一緒に連れて帰る。

宮殿の馬車乗り場では、個人的な用事で唱姫を連れているという闇神隊に、神民衛士や態々上階から様子を見に下りて来た宮殿衛士達から嫉妬の目が向けられていた。

最初、悠介から唱姫をルフクの村に連れて行きたいと言われたときは流石に驚いたヴォレットだったが、ラサナーシャの事情を聞いて納得し、後は任せると許可を出してスンと共に送り出した。

彼女の事情とは、病気の事を公には伏せておきたいという思惑。唱姫として、病気を患っているというのは評判に関わるからだ。伝染する病気ではないとは言え、やはり偏見と猜疑の目はある。

ヴォレットはヒヴォデイルとソルザックを呼び寄せると、周囲の有象無象に『唱姫は体調が優れないので大事をとってゼシャルドの診察を受けに行った』『闇神隊はその護衛である』という噂が広まるよう手を打った。

宮殿衛士隊周りから上層の人間をヒヴォデイルに任せ、商売関係から一般民にはソルザックを使う。雑談や噂話で今回の話題が上がった場合はこの内容で定着させるよう指示を出している。

「よいかお前たち、ボロを出すでないぞ？」

「はっはっはっ 情報操作ならこの僕にお任せあれ！」

「ああ……私も一緒に行きたかったなあ」

珍しい取り合わせとなった三人を微妙な面持ちで見つめるクレイヴォル。内心ではヴォレットの動きについて考察していた。行動力はあれど、思い付きの暴走とお強請^{ねだ}りが主だった今までのヴォレットとは違う。

『姫様自ら情報工作に動く、か……。まだまだ子供の遊び、と断ずるのは簡単だが』

成長の片鱗を見たような気がして、何時もより眉間の皺を増やしているやら減らしているやらな複雑な心境のクレイヴォルだった。

ルフクの村を目指して街道を行く闇神隊一行を乗せた衛士隊馬車出発前に『後は土が揃えばパーフェクトっすね』とか口走ってはエイシャに睨まれていたフォンケは、通常なら下っ端の衛士など会話の機会すらない唱姫の同行という事でテンションが高いせいか、風技の補佐に集中しながらもラサナーシャに目を奪われるという器用な事をやっていた。

ヴォーマルは満更でもない様子で手綱を握り、シャイードは何時もの沈黙に珍しく緊張しているような雰囲気が見られる。エイシャとイフヨカも気になるらしく、ラサナーシャにちらちらと視線をやっていた。悠介はスンも交えてラサナーシャと談笑中である。

「御二人とも、ゼシャールド様の事を凄く信頼してらっしゃるんですねー」

「はい、先生はとても良い人ですから」

「割とおちゃめな所とかもあって、とっつき易い爺さんって感じなんだよな」

しかし単に人の良い爺さんではない。高齢でありながらブルガーデンとの関係が悪化している時期に亡命を装って単身で乗り込み、女王の信頼を得て組織を立ち上げ、内部から反フォンクランク勢力を壊滅に追い込むという偉業を成し遂げる『猛者』でもある。

ラサナーシャは前日の報告に行った際、伯爵からも『十分に注意せよ』と促されていた。悠介たちとの談笑で表情に出さずとも、もう直ぐ顔を合わせる事になるであろうゼシャールドとの対面に、若干の緊張を覚えているのだった。

「おお、来たかユースケ、スン」

「ただいま、先生」

「ちーす」

夕方頃、闇神隊一行はルフクの村に到着した。悠介達が来る事は

村に駐屯している衛士隊に風技の伝達で告げてあったので、ゼシャルドも診察の準備をして待つていたようだ。

村には衛士隊の仮設兵舎などが建っており、防護溝の内側には簡単な柵も作られている。例の武装集団に備えたモノであった。

「あ、ベルーシャさん」

スンが世話をしていた畑は、ベルーシャが管理していた。ベルーシャにとって畑の管理は、生きる為に命を狩っていた頃とは違う、生きる為に命を育て、収穫してはまた育む、紡がれる生命のサイクルに感じ入るモノがあるようだ。

何故かメイド服姿なベルーシャとぽつぽつ会話をしながら畑をみているスン。ヴォーマル達は仮設兵舎で休むらしく、ラサナーシャの荷物持ちをやるうとしていたフォンケをズルズルと引き摺って行った。ちなみに、仮設兵舎ではバハナが中心となって衛士達の食事などを世話をしている。

『隊長だけずるいー』とか叫んでエイシャに踏まれているフォンケに、悠介は溜め息を吐く。

「あいつ……お気に入りの街唱がいるとかで入り浸ってるって話だったのに」

「うふふつ 私たち唱謡いは所詮一夜を慰める遊戯の相手。本気になつては駄目ですよ？」

何だか爽やかに濃厚な事を言われたような気がするなあ等と思いつつ、悠介はラサナーシャをゼシャルドの家に案内した。

「うむ、元気にやっておるようじゃの」

「おかげさまで」

診察室としても使われる広間の椅子に腰掛けたゼシャルドは、神技の波動を高めながら悠介達にソファアを勧める。

「しかしまあ、唱姫を連れてくるとは……お主も　さて、ラサナーシャ殿じゃったかね？」

「え？　あ、はいっ　御初にお目に掛かります」
「……………って、途中で言うの止めないで下さいよっ」

すっげー気になるんですけど！　と騒ぐ悠介をスルーしつつ、和やかな挨拶を交わしてラサナーシャをリラックスさせたゼシャルドは、早速診察の水技を行使した。ラサナーシャの体内にある患部を探り出し、治療を施して効果を窺う。

「ふむ……朽病じゃな」
「……はい」

『ゼシャルドの確認に重苦しく頷くラサナーシャ。彼女が患う『朽病』とは、発症率は然程高くないものの、主に身体の内部に出来た腫瘍が全身に広がり、それが色々な他の病も併発させ、やがて患者を死に至らしめる病気。』

水技の治療によって症状を抑える事は出来るが、並みの水技では効果も得られず、完治した例は無いと言われている。

『癌みたいなものか……』

「ふむ……大分、進行しておるのう。補助薬は持っておるかね？」
「あ、はい……ここに」

薬瓶を取り出したラサナーシャは、ゼシャルドに促されて瓶に収まる青い液体を口に含んだ。治癒補助薬と水技の治癒を併用する事で、朽病の進行はかなり抑制する事ができる。彼女は普段からそうやって病気の進行を抑えているのだ。

補助薬の効果が現れるのを待ち、治癒を行使するゼシャルド。彼女の使う水技とは比べ物にならない程の強力な水技の治癒効果で、ラサナーシャは身体の調子がかかなり良くなった事を実感した。

「どつじゃね？」

「凄いです……こんなに身体が軽くなったのは久し振りかも」

治癒補助薬を使った水技の治癒では、腫瘍の広がりや転移を抑制し、強力な治癒なら腫瘍そのものも或る程度は削る事が出来るが、完全に消し去る事までは出来ないので、完治に至らず『朽病は不治の病』となっている。

ラサナーシャも自らの水技で体内の腫瘍を感じ取る事が出来るだけに、昨日までと比べて明らかに腫瘍の範囲が小さくなっている事を確認して『流石は元宮廷神技指導官』と、ゼシャルドの実力に感嘆していた。

「その薬って、昨日飲んでたやつ？」

「はい、そうです」

悠介は昨日も見た彼女が手にしている薬瓶について訊ねた。非常に高価な薬で、ノスセンテスでしか精製されていないモノらしい。フォンクラंकにも商人達の手で輸入されているが、数も少なく入手も困難な代物だという。

中身が半分程になった治癒補助薬の薬瓶を『ちよいと失礼』と見せてもらう悠介。

「ふーむ、どれどれ？」

悠介がカスタマイズメニューを開くと、その気配を感じ取ったゼシャルドは静かにその行動を見守る。急に悠介を観察するような雰囲気纏うゼシャルドに、ラサナーシャは戸惑いを感じながら両者へと交互に視線を向けた。

治癒補助薬のステータスを確認する悠介。

「直接回復させるタイプじゃなく、回復効果を高める効果ってやつか」

「それも、弄れそうかね？」

「ええ、まあ一応は……でも相当強力な薬みたいだし」

服用者の身体に強い影響を与える薬なので、迂闊に弄れないというニュアンスを仄めかす悠介に、ゼシャルドは薬の効果を弄った場合、自分級の治癒系水技を使う者にならどんな変化が起きるのか鑑定できる事を挙げる。

「補助薬の製法はノスセンテスが独占しておるでな、良い薬が出来ると助かるんじゃないかのう」

安全面は保障できるので、高い治癒効果を持つ薬にカスタマイズ出来るならやってみてはどうかと促すゼシャルド。悠介は唸りながら考える。とりあえず弄るならサンプルに何本か欲しい所だが、フォンクランクでは易々と手に入らない代物だ。

『ノスセンテスに出向いてみるか？ 他にもこの病気で苦しんでる人もいるだろうし……』

「やっぱ直接買いに行った方が手っ取り早いですかね？」
「うむ、向こうには他にも色々と役立つ薬が売られておるからのお主が直接見定めた方が良いじゃろう」

二人の会話の意味が分からず、ラサナーシャは唯々ただただキョトンとしながら成り行きを見守っていたが

「じゃあ、ヴォレットにも相談してみますよ、ノスセンテスマで出張できないかなーって」

思わぬ所からノスセンテス行きの原因が出来て、びっくりのラサナーシャだった。そして内心に疑問が湧く。

『ユースケ様って、本当に噂されてるような女癖があるのかしら…？』

あの内気そうな伝達系風技使いの部下が悠介に向ける眼差しは、上司に権力ちからずくで手籠めにされているとは、とても思えない尊敬の籠ったモノだったし、何故か宮殿に住んでいるらしい無技の少女からも悠介の事を信頼して慕っている事が感じられた。

ともあれ、悠介がノスセンテスに赴く理由は確保出来たので、街に戻ったら伯爵に報告に行かなければと、ラサナーシャは心の中の予定表に今回の経緯報告と、闇神隊長の人柄に対する情報精度についての疑問を記すのだった。

夜

夕食が終わり、広間にはスンと悠介、ゼシャールド、ベルーシャが其々向かい合わせのソファーに腰掛けてお茶など飲みながら、ゆったりとした時間を過ごしていた。ラサナーシャは大事をとって先に客室で休ませている。

ゼシャールドからノスセスについてのアレコレを聞いていた悠介は、話が一段落した所で徐に気になっていた事を訊ねた。

「ところで、なんでメイド服なんですか？」

ベルーシャのメイド服姿を指摘する悠介。片目が隠れるようなシヨートの青髪で、物静かというか、一見ボンヤリしているようにも見えるベルーシャは、悠介の疑問に何時もの呟きのような口調で答える。

「……ルードが、この方がいっていうから」

そう言ってちらりとゼシャールドを見るベルーシャ。

「ルード？」

「ん……まあ、ワシの若い頃の愛称というか、呼び名での」

一瞬、広間の空気が固まる。スンがポツリと呟き、悠介はツッコミ体勢に入った。

「愛称で呼ばせてる……」

「先生なにやってんすか」

「ほっほっほっ」

「……（お茶、おいしい）」

とても平和な夜だったという。

44話：英雄風刺恢恢（前書き）

ちと妙なタイトルですが^^；

44話：英雄風刺恢恢

「本当にお世話になりました、おかげさまで随分と楽になりました」
「うむうむ、また体調が悪くなったら何時でも来なさい」

翌日、早朝からルフクの村を出発した悠介達は、朝の内にサンクアディエットへと帰還を果たした。

自宅に帰るラサナーシャとは宮殿前で別れる事になったのだが、フォンケがちゃっかり家まで送ると申し出て宜しくお願いされている。すかさず、御者台に座りなおすヴォーマル。

隊長ユースケの許可を得たフォンケとヴォーマルが馬車でラサナーシャを送って行くのを見送り、他のメンバーは何時も通り衛士隊の控え室へ。悠介はヴォレットの部屋まで報告に上がるのだった。

「フーわけで、ノスセンテスマで薬買いに行きたいんだけど」
「ふーむ……」

悠介から今回の報告と薬の仕入れを提案として持ちかけられたヴォレットは、微妙な表情を浮かべて考え込んだ。

やはりノスセンテス行きには何か問題があるのだろうかと小首を傾げる悠介に、クレイヴォルが闇神隊の新たな任務について、ノスセンテスへ親善大使として王の親書を届ける役を与える内容で検討がされている事を告げた。

「大使！ て……俺そういう政治的な仕事は要領とか全然分からんぞ？」

「なあに、大使役はちゃんとした者を就けるのでそこは問題ない。そうじゃろう？ クレイヴォール」

闇神隊を使うのは表向き of 体裁の為だろうと指摘するヴォレットに、頷いて肯定を示すクレイヴォールは、内心で感嘆する。彼が自分の役割を自覚しながらも、ヴォレットと悠介の活動に協力している理由が、時折ヴォレットに見せられるこの鋭い洞察力だ。

「ただのう、何か気になるというか……」

「？」

ヴォレットは今回の提案に今ひとつ気乗りがしない様子だった。

悠介の言う朽病と治癒補助薬の事は理解出来る。殆ど勘に近いモノなのだが、なんだかモヤモヤするのだと唸っている。

「よく分からんがの、なーんか引つ掛かるのじゃ」

「女の勘ってやつか？ それともラサナーシャさんへのヤキモチの類か」

茶化す悠介に空飛ぶお皿をべしーんべしーんとぶつけながら、ヴォレットはノスセンテスを探る意味でも大使として出向くのは悪くないかと思ひ直す。ノスセンテスは襲撃事件の黒幕ではないかと怪しんでいる所でもあるのだ。

「そう言えば、ユースケの屋敷が明日にも完成するそうじゃぞ？」

屋敷を受け取ってスンを住ませ、それから行けば良いとヴォレットは薬の仕入れに許可を出した。

購入資金も幾らか用意してくれるそうだ。屋敷の受け渡しが終わる頃にはノスセンテスとも大使を向かわせる交渉が済んでいるでしょうとクレイヴォルが予定を取り纏める。

「建築職人さん達に何か手土産でも持って行った方がいいかな？」
「別にいらんじやろう、気になるようならお前が調節した実酒でも用意してやればどうじゃ？」

それはいいアイデアだなと、悠介は早速実酒の入手に街へ出るのだった。

深夜、人目を忍んで伯爵の家を訪れたラサナーシャは、病気関連で向こうへ行く理由が出来た事を、一連の流れを説明しながら報告した。伯爵はこちらも王に話は通したし、闇神隊を大使として向かわせる任務が検討されていると、作戦の成功を仄めかす。

「よし、第一段階は上手く事が運びそうだ」

第二段階として、闇神隊一行が親善大使として発つ前にノスセンテスの別荘へと赴き、妹役に会って段取りを付けて置くようにと、ラサナーシャに任務の継続を告げる伯爵。

「向こうでは積極的に惹きつけて行け」

国外でならヴォレット姫の目も届かない。存分に『姉妹』として酒池肉林の誘惑で虜にせよと指示を出す伯爵に、ラサナーシャは少し困惑顔を見せると、悠介に対する印象などから『闇神隊長に対す

る事前情報、人物把握に誤りがあるのでは？」と意見する。

「ラサナーシャ、自分が何者が言ってみなさい」

「え？ 私は、唱姫です……」

「そつだ、我々によって与えられた唱姫という立場を持つ、我々の諜報員だ」

「……はい」

伯爵は情報の分析、諜報指示などは我々専門家が決める事だと諭し、君は指示に忠実であれば良いと言葉を続けた。

「いいかね？ 我々は君の見解など必要としてない、君の役割は命令に従って情報を集める事と、時にそれを吹聴する事だ」

「も、申し訳ありません……差し出がましい事でした」

「よろしい。しかし、唱姫としてキャリアもある君をそこまで感わせられるとは……」

病気を心配してみせる慈悲深さで気を惹き、ゼシャルドというコネを使って信頼を得る。さらには国内で病を患っているであろう民の為に高価な薬の買い付けに行くという、人道的な理由を掲げてノスセンテス行きを定める手際の良さ。

「人心掌握の手並みといい、予想以上のやり手だ」

闇神隊長の誑しぶりは噂通りだと、本人が聞いたらすつ飛びそ
うな人物像に納得する伯爵であった。

翌日、完成した屋敷の引き取りに、悠介は朝からスンを連れて高民区の一画にやって来た。

三階建ての石造りで、厨房や使用人の部屋、広間などを別にしても大小合わせて三十近い部屋があり、敷地には厩舎や専用の馬車を停める車庫もあって、乗馬が出来る程度の広さがある。

「ちよつとでか過ぎないか？ これ」

「あれ？ ユースケさん、自分のお屋敷を見るの初めてだったんですか？」

スンはヴォレットに連れられて馬車の中からだか、時々建築途中の屋敷を見に来ていたらしく、大きさにはもう見慣れていた。悠介は活動範囲が主に中民区以下だったので、最初に屋敷が建つと決まった時に場所を見に来てソレっきりだったのだ。

「でも……改めてこうして見ると、本当に大きいですね」

「だな。そんじゃとりあえず、中に入るうか」

屋敷に向かつて並び歩く二人に、門前に立つ専属の衛士が悠介のきたく来訪を敬礼で迎える。この時、門番の衛士が少し戸惑うような表情を見せたが、悠介は特に気に留める事は無かった。

色々と例外を重ねて得た立場上、好奇の視線や困惑の表情を向けられる事には慣れているのだ。正門から少し歩いて辿り着いた正面玄関の大きな扉を潜ると、中央広間にずらりと並んだ使用人達が揃って悠介達を出迎えた。

「お帰りなさいませ、ご主人様」

「痒っ」

「は？」

「いや、なんでもない」

『ご主人様』の呼び名に背中がむず痒くなつた悠介だったが、それが普通なのだから仕方ないと思ひ直す。ちなみに、外に居た門番など専用馬車の御者も務める事になる専属衛士達は屋敷を管理する者とは別系統で働く事になっている。

後で呼び方の変更を申請しようなどと考えながら、悠介は屋敷内を見渡した。左右に伸びる廊下、広間の奥に見える向かい合った階段。彫刻や絵画など、よくある美術品の類は飾られておらず、装飾も質素なれど決して侘しい雰囲気ではない。

あまりゴテゴテした内装だと落ち着かないので、悠介は丁度いい感じだなという好印象を持った。

「……ん？」

不意に、使用人達から戸惑うような気配を伴つた視線を感じて、悠介はそちらに気を向ける。ちらちらと注がれる彼等の視線の先には、高い天井を見上げているスンの姿。

使用人達の一部で、無技の民を『屋敷の住人』として住まわせる事に戸惑うような雰囲気が見られた。闇神隊に纏わる噂についてヒソヒソと囁きあう彼等は『無技を妾にしているらしい』という噂が本当だったのかと驚きにざわめく。

実は宮殿の一部官僚達が無技の民を特別視するような行動を取る悠介に不快と猜疑を感じており、『闇神隊長の影響で姫様まで無技を特別扱いする始末！』と不満に思っていた。

彼等はゼシヤールド所縁の者とは言え、宮殿で当たり前のように過ごすスンの事も少なからず疎ましく思っていたのだ。

しかしながら、両者ともヴォレット姫のお気に入りである上に、今や英雄と称される闇神隊長に至っては例の『神技の指輪』絡みで各宮殿衛士達の間でも悠介の機嫌を損ねるような真似は慎むよう暗黙の了解がなされており、下手に意見する事も出来ないでいた。

それ故の意趣返しというような認識で仕組まれた人事。悠介の屋敷にあてがわれた使用人は宮殿外からの雇用で募った者達で、彼等には予めスンが宮殿で客人として扱われている事を教えていない。ぶっちゃけ嫌がらせに近いモノである。

清掃業務で中民区辺りでも普通に姿を見るようになった無技人達だが、あくまでも仕事として担当衛士の引率の下に街中を歩けるのであり、等民制による身分の差が無くなった訳ではない。当然それは、人々が心に持つ認識にも同じ事が言えた。

一般神民達にとって、無技の民は等民制の枠からも外れた外民なのである。

人事を仕組んだ官僚達は、スンの宮殿での立場を、ヴォレット姫あつての扱いであり、姫様の気まぐれ、戯れの類だと思っている。彼等はスンとヴォレットの信頼関係を理解していない。

スンの事をよく知らない者ばかりで構成され、情報も与えられていない使用人達は、悠介に不満を持つ官僚達の迷惑通り、一般神民の反応を持って無技の娘に自分の立場を思い知らせるという事に成功していた。

『どうして無技がこんな所にいるんだ？』というような使用人達

の訝しむ視線。それに気付いて身体を硬直させるスン。

元々神技人に対して強い恐怖心を持つているだけに、彼等の『友好的』とはいえない視線』ダケでも、スンの心を萎縮させるのに十分な効果を持っていた。近く悠介がノスセンテスに発てば、スンは一人この屋敷で過ごす事になるのだから、余計に不安は募る。

人事の裏に隠されたささやかな陰謀を知る由も無い悠介はしかし、使用人達と門番の態度にも見られた戸惑いがスンに向けられている事を把握した。神技人と無技人の関係は今更考えるまでも無い。

「…………えーと、執事長さん？」

「ザツフィスと御呼び下さい、ご主人様」

「ん…………じゃあザツフィス」

「はい、何で御座いましょう」

悠介は執事長に命じて外にいる専属衛士隊も中へ呼ぶように伝えようと、屋敷で働く者全員を広間に集めて挨拶を行う事にした。最初の挨拶でハツキリさせておこうと考えたのだ。

「スンはゼシャルド先生から預かった大事な友人であり、家族のような存在だ」

「無技人に対する偏見がある者もいるだろうが、責めはしない、但し、俺の屋敷で働くには向かないと思う」

「双方の為にならないから、スンを屋敷の住人と認められない人は今の内に申し出てくれ」

悠介は集まった使用人や専属衛士達に向けて挨拶でそう語った。黒い隊服のマントの裾を掴んで、微かに肩を震わせるスンをそつと

抱き寄せながら語る闇神隊長の言葉に、いきなりギアホークの、デアアノースの英雄を怒らせてしまったかと青褪める使用人達。
シン……と静まり返る中央広間。

「あー、そうか……ここで申し出るつても酷だよな」

俯き加減に顔を伏せて立ち尽くす使用人達を見て、悠介はバツが悪そうに頭を掻くと語調を緩めて言い直した。

「訂正する、申し出なくてもいいから、午後にも申請して屋敷を出てくれて構わない、以上」

『一応、新しい就職先が見つかるように口利きはするよ』と付け加えると、悠介はスンを連れて屋敷の中を見て回り始めた。案内を申し出ようとした執事長を手で制し『彼等の決断を見届けてくれ』と広間に残された顔を見合わせる使用人一同を指し示す。

ザッフィス 執事長は静かに頭を下げて主人の意向に従った。

「しっかし、抜け穴とか隠し部屋が結構あるぞ？ これ」

カスタマイズメニューで屋敷の構造を見通す事が出来る悠介には、本来の建築予定に無い抜け穴らしき隠し通路や隠し部屋っぽい隙間など、全て筒抜けである。それらの『穴』は適当にカスタマイズで埋めておいた。ちよっぴり仕掛けも施して。

「……あの、ユースケさん」

「ん？ ちよっとは落ち着いたか」

「はい……ありがとう」

「気にすんな。よし、次は二階を見に行こうぜ」

屋敷の中を見て回る間、悠介とスンはずっと手を繋いでいたのだ
った。

結局、使用人達の中で屋敷を出た者はいなかった。

45話：ノスセンテスへ

翌朝、悠介は昨夜の内に済ませておいた旅支度の荷物をチェックしていた。普通は着替えなどを用意するのだが、汚れや綻びはカスタマイズでどうにでも出来るので、布地やら食糧の類が詰め込まれている。

これから宮殿に出向いて正式にノスセンテス行きの仕事を賜り、説明を受けた後はそのまま出発する事になっていた。

昨日のプチ騒動から一夜明けて、屋敷の使用人達は屋敷の住人たるスンに一切の礼を欠く事の無いしつかりした対応を以ってプロらしい働きを見せており、悠介も『これなら安心して留守を任せられるな』と首肯うなずいた。

「スン、俺の留守中に一つ頼みたい事があるんだけど」
「はい？　なんですか？」

悠介はスんに『風技の指輪』を預けると、四日後あたりにでも風神隊の副隊長に渡すよう託した。ヴォレットに頼んでも良かったのだが、姫君直々に渡されたとなれば、特に他意は無くとも色々と憶測を呼んで面倒な事態が起こりかねない。

余計な騒動を避ける意味でも、悠介に近い人間で且つ宮殿内に顔の知られるスンが適役と判断したのだ。

「じゃあ、行って来るよ」
「行ってらっしゃい、ユースケさん」

スンが悠介の腕をそつと握ってスツと離れる。すっかり出掛ける時のおまじないの様になってしまった感のある何時ものスンの仕草に、悠介はこつちからも何かリアクションを取ったほうが良いかな？ と何となく思いつき、スンの髪をそつと撫でた。

一瞬驚いたように目をぱちくりさせていたスンは、少し頬を赤らめながら、ふんわりした笑みを浮かべて悠介を送り出した。

悠介が中央広間に降りて来ると、執事と二人の使用人が扉の前で送り出しの挨拶を向ける。

「留守中、スンを頼むよ」

「畏まりました御座います」

玄関に横付けされている専用馬車に乗り込み、悠介は執事ザッフィスに一言声を掛けてから屋敷を後にした。

「では、任務の概要を伝える」

ヴォルアンス宮殿の上層階にて正式に親書を届ける任務を賜った闇神隊は、大使とその補佐二名を連れてノスセントスの首都であるパトルティアノーストへと赴き、数日間の滞在を経て帰国する。

表向き、エスヴォブス王の親書を運ぶのは闇神隊だが、実質的に

は大使一行の護衛という役割を担っていた。

「本来なら各宮殿衛士隊からの人選で護衛隊を組織し、外交使節団を組んでじっくり進めたい所だが……」

今はノスセンテスもガゼッタと睨みあっているという時期が時期だけに、迅速な遂行を優先したのだとクレイヴォル炎神隊長が任務の概要に事情を交えて説明する。旅の行程はまず、サンクアディエツトを出発したら南にある小さな街を目指して、そこで一泊。

翌日、一日を掛けて月鏡湖の近くにある港街まで移動し、そこでまた一泊。その翌日は舟で湖を渡ってトレントリエッタ領の半島に上陸し、そこからは徒歩で半島の中程まで移動して野営する事になる。

更にその翌日にはトレントリエッタ領の半島を抜けて国境付近まで南下し、ノスセンテス側から派遣される予定になっている護衛隊の野営地で彼等と合流、そのまた翌日には彼等の馬車隊にてパトルティアノーストを目指す。

順調に行けば四日後の昼過ぎにはノスセンテスの首都に入ることが出来る。

「なお、トレントリエッタの半島には魔獣が出る恐れがあるので、十分注意して欲しい」

「魔獣とか見た経験ないんだけど、対処法は？」

「基本的に危険な野生動物の類と見て問題ない」

魔獣は元々は普通の肉食動物だったのが、神技人を食べた事で神技の力の影響を受け、突然変異した存在であるらしい。その魔獣の犠牲となった神技人の属性を持ち、同じ種類の神技の民を好んで狙

う傾向にある。

仲間の誰を狙ってくるのか、見た目で判断を付け易いので、上手く誘導して立ち回れば怪我人も出さずに撃退出来るだろう。

同じ動物系の魔獣でも、肉食型や植物系の魔獣を何らかの要因で体内に取り込んだ草食動物が、魔獣に宿っていた力の影響を受けて変異した草食型も居て、こちらは人を襲う事は滅多に無い為、見掛けても放っておけばあまり危険は無い。

「植物系の魔獣は火に弱く、森から出る事はない。野営をする時は森の外で常に火を焚いておけば安全だろう」
「なるほど」

魔獣についてはヴォーマル達にも討伐経験があるので、道中、特に注意を払うべき危険は野盗などの武装集団による襲撃の類となるが、フォンクランク領を出た後は街道を通らず最短距離を行くルートを使う為、遭遇する確率も少ないだろうとの事だ。

「それでは、貴殿の武運と任務の成功を期待する」
「無理するでないぞ？ 皆、無事に帰って来るようにな」

全員の無事を祈るヴォレットに見送られながら、闇神隊は一路ノスセンテスの首都に向けてサンクアディエットを出発した。

闇神隊と大使達を乗せた衛士隊馬車が最初の目的地である小さな街に到着したのは、夕方頃だった。明日から本格的な長距離移動を行う為、今日の短い行程は馴らしのようなモノである。

大使役の三人と今後の行程について二、三の細かい段取りや確認を終えると、明日に備えて宿部屋で身体を休める。

「イフヨカ」

「あ、隊長……」

「今日の報告か？」

「はい」

広々とした通りに出てサンクアディエツトの方角に集中しているイフヨカ。風技の伝達で今日の行程が無事遂行された事を伝えるのは大事な仕事だ。移動中の索敵や定期連絡など、伝達系風技は地味ながら非常に重要な役割を担っている。

「私、今回みたいに……遠い所まで行く任務って、初めてなんです」

「俺もだよ」

「あ……そ、そうでしたね……」

闇神隊のメンバーは悠介が何処か遠い地にある無技の村から、ゼシヤールドに見出されてフォンクランクにやって来たのではなく、別の世界から邪神として召喚されて来たらしいという事を知っている。

とはいえ、『そもそも邪神とはなんなのか？』という根本的な部分に関しては本人を含めてよく分かっていない。

「隊長って……ちつとも邪たいていな感じ、しませんよね」

「ははは、邪神って言っても多分そういう呼び名が使われてるだけで、本当に邪悪だったりする訳じゃないんだと思うぞ？」

自分の事ながら、悠介は『災厄の邪神』を言葉通りの存在だとは考えていなかった。シンハとの会話などから拾い集めた邪神に関する

る情報の欠片を繋ぎ合わせ、悠介なりに『邪神とは革命の鍵になるような存在ではないか』と分析している。

「まあ、シンハの所へでも行って直接調べた方が確実なんだろうけど」

「……隊長は、その……いつか、ガゼッタに行っちゃうんですか？」
「いずれは出向こうかと思ってるよ。つっても、向こうに付くって訳じゃないぞ？」

自分がこの世界に存在する意味を調べに行くだけだという悠介に、イフヨカは何処か不安げな表情を向ける。

「それでもし、隊長がガゼッタに……味方しなくちゃいけない存在だったら……？」

「そんな時やそんな時にも考えるさ」

「真面目に答えて下さい」

然して考える素振りも見せずさらりと答える悠介に、将来、敵対関係になるかもしれない事を恐れるイフヨカは、珍しく食い下がって悠介の考えを問い質そうとする。そんなイフヨカの気持ちを察してか、悠介は宥めるような口調でキツパリと明言した。

「俺が俺である限り、お前達の敵になるような事は無いよ。だから安心しろ」

「……はい」

イフヨカは小さく頷いた。

翌朝、早い内から出発した闇神隊一行は森の中を突っ切る街道を順調に進み、ブルガーデン方面との分岐点付近で昼の休憩に入った。ここから港街まではサンクアディエツトとルフクの村を往復するくらいの距離がある。

「このまま行けば、到着は夜になりやすね」

「そっか、ご苦労さん。みんな出発までゆっくり休んでくれ」

「うーっす」

「隊長、食事の用意が出来ました」

街道脇に停めた馬車の傍で、大使役達も交えて皆で円陣を組みながら簡易食を頼張る。森に入って少し探せば、自生するララの実が見つかるので、カルツイオでは余程荒れ果てた土地でもなければ旅の道中で食糧に困ることはまず無い。

「この辺りには魔獣とか出ないのか？」

「フォンクランク領内の肉食系魔獣は大体狩り尽くされてやすね、森の奥まで入るとまだ偶に植物系が残ってるようですが」

街道付近なら概ね安全が確認されている。これは一時期ブルガーデンに国境を封鎖されていた頃、遠回りで街道を行く事になる商人達の安全を図る為に、徹底して街道付近の魔獣討伐を行った結果、魔獣が寄り付かなくなったという経緯があった。

代わりに盗賊団が出没するようになってしまったが。

「集団で武装した人間の方が、魔獣なんぞよりよっぽど危険ですぜ」
「皮肉なこつたな」

魔獣退治もやり過ぎると返って危険な状況を生み出してしまふ。そういう意味で、フォンクラंकは何事も行き過ぎは良くないという教訓を得たのだそう。

旧来からの身分制度を保ちながらも無技人の立場向上に理解を示すなど、時代の変化に柔軟な姿勢を取れるのはその辺りも関係しているのかも知れない。

休憩を終えた一行は港街を目指して森に囲まれた街道をひた走る。太陽が沈もうかという頃に森を抜け、右側に月鏡湖を眺めながら馬車を走らせること約三時間、湖に面したそこそこの規模を持つ港街に入る事が出来た。

魚の荷揚げがされている棧橋を近くに見下ろせる大きな宿前で馬車を降りると、皆で手分けして荷物を降ろし始める。明日は舟で湖を渡り、そこからは暫らく徒歩で移動する事になるので、荷物は全て担いで行かなくてはならない。

「今日はここに泊まって、明日からはいよいよ隣国入りか」

風技の伝達で報告を行っているイフヨカの傍ら、悠介はカルツイオの月が映る暗い湖面を眺めながら呟いた。

4 話・トレントリエツタ領横断

「おはよう御座います、隊長。 早いですね」
「はよ」

夜明け前、まだ暗いうちから起き出したエイシャは、宿前の通りで湖を眺めている悠介を見つけて挨拶を向けた。 棧橋の近くでは、早朝から漁に出かける舟の明かりが揺れている。

「昨日も思ってたけど、小さい舟ばかりだな」
「ええ、月鏡湖は神聖な湖とされてますから、あまり大きな船を走らせる事は出来ない事になってるんですよ」
「信仰がらみか……」
「どちらかと言えば、迷信の類だと思います」

月鏡湖に大きな船を浮かべると、うらや 尽く湖の主に湖底へと引きずり込まれるという類の言い伝えに則り、今も手漕ぎ舟程度の舟しか使われていない。

言い伝えでは『湖底に古い街が沈んでいて、そこには巨万の財宝が眠っており、それを守る湖の主ぬしが、財宝を積めるような大きな船が近付いて来るのを妨げている』となっていた。

「ふーん、実際に潜って調べた人とかは？」
「居たと思いますよ？ でも、沈んだ街が見つかったとか、湖底に何かあったという話は聞きませんから」

良くも悪くも、古き因習が今も守られる港街といった所であろうと、エイシャはこの街の事を評した。大きな船があれば馬車ごと湖を渡っていけるのだが、それはこちらの都合である以上、やはり良いとも悪いとも言い切れない。

「まあ、四つの国で交易が出来る事も考えれば、やっぱり大きい船が使えた方がいいわな」

陽が昇るまでの僅かな時間、エイシャとそんな話を話しながら過ごす悠介であった。

朝食を済ませた闇神隊と大使一行が手配した舟に乗り込む準備を進める間、殆ど荷物の無い悠介は自分達が乗せて貰う舟の確認に棧橋まで赴いた。六人乗りの細長い舟が二艘、首都のエライさんを運ぶという事で一番良い舟を用意してくれたらしい。

「ん〜？」

カスタマイズメニューで舟の状態を見ていた悠介は、訝しむ声で唸ると、とある部分をズームしていく。

「隊長、どうかしやしたか？」

舟の前で神技を行使する波動を纏いながら宙に指を彷徨わせる何時もの儀式を始めた悠介に、荷物を担いでやって来たヴォーマルが声を掛けた。ちよいちよいと指先を動かしていた悠介がちよんと何

かを押す動作をすると、舟の一部に光のエフェクトが舞う。

「なんか、途中で沈みそうな仕掛けっぽいモノがあったから固めといた」

「……仕掛け？」

スツと表情を険しくして周囲に視線を向けるヴォーマル。もう一艘のカスタマイズに取り掛かった悠介は、舟の底に水で少しずつ溶け出していく粘土のような素材で塞がれた穴のような仕掛けがあった事を説明する。

「これでよし」と

「我々を狙ったモノでしょうか？」

「俺たちの為に用意された舟なんだから、多分そうなるんじゃないかな」

「一体、何処の誰が……」

少し声を潜めながら、これがフォンクランクとノスセンテスの接近を阻害しようとした何者かの工作である可能性を話し合う悠介達。単純に考えれば、現在ノスセンテスと睨み合う状況にあるガゼッタを疑うところだが

「最近鳴りを潜めてる例の武装集団も怪しいんだよな」

フォンクランク領内で暴れていた武装集団はノスセンテスが黒幕ではないかという疑惑が浮かんでいる今、ノスセンテス側が将来フォンクランクと事を構える時の為に、フォンクランクでは最も武功を上げている闇神隊を最強の実戦部隊と定め、その脅威を葬り去る工作をしたとも考えられる。

「もしや、国内にノスセンテスか武装集団の協力者がいるのでは？」
「ブルガーデンの時の事を考えると十分ありえるわな、シン八も出入りし易い国だとか言ってたし」

その辺りは疑えばキリが無く、幾らでも可能性は出て来ると悠介は肩を竦めて見せる。武装集団がシン八の推測どおりノスセンテスと関係しているかどうかも、実際はまだ分からないのだから。

ガゼツタは闇神隊、ひいては悠介を抹殺するつもりは無いとみられるも、それはシン八とシン八に従う勢力の意向であり、シン八自身が自分と主義主張を違える者も居ることを認めている以上、彼が幾らその一派に武装集団のような愚かな行いをする者は居ない筈と主張しても、必ずしも彼の認識が正しいとは限らない。

この問題を判断するにはもっと多くの情報が必要だと、悠介は話を締め括った。

「一応、上に報告はしておいた方がいいかな」

「ですね、イフヨカに伝えて来ます」

宮殿には親書を届ける任務に妨害工作があつた事と、至急、港街へ調査の衛士団を派遣して貰えるよう伝えられた。

トレントリエッタの半島に向けて漕ぎ出す闇神隊一行を乗せた舟を、安宿の一室から望遠鏡で覗き込む人影。彼の計算では、半島と港の中間辺りで舟底の穴から浸水が始まる筈である。

「ここからでは結果を確認できんが、舟を調べていた様子もなかったし、上手く湖の藻屑となってくれるだろう」

「しかし、よろしかったのですか？ 神議会は闇神隊長を籠絡させる予定で呼び込むと伝えていましたか……」

「ふん……出来るものか、あんな時代遅れのジジイ共には手に余る化け物だ。 さっさと始末しておいたほうが良い」

「は、はあ……」

部隊を分散させて港街に潜んでいた武装集団の隊長ヴォーメストは、命令無視と独断専攻に戸惑う部下を尻目に扉へと向かう。

「団長、どちらへ？」

「朝食だ、港街だけあつて魚料理が美味いらしいぞ」

そう言つて部屋を出て行くノスセンテス特詮隊所属、特殊工作部隊のヴォーメスト隊長。ブルガーデン精鋭団に居た頃の癖で、時折『団長』と呼んでしまう元『火の団』団員な部下の彼も、慌てて後にくのだった。

二艘のうち、大使役三人が乗る船には悠介とエイシャが同船。残りのメンバーはもう一艘に乗つて湖を渡る。不意に、覚えのある気配を感じたイフヨカはキョロキョロと辺りを見渡し、ついで首を傾げた。

近くで大きな魚が水面に頭を出すなりしたのを、別の何かに捉え

違えたのだろうかといふヨカは頭を振る。『気のせいよね』と呟く彼女の独り言に気付く者はいなかった。

「下船準備ー」

気合いの入ってない悠介の掛け声で、闇神隊メンバーと大使役達は荷物を担ぐと上陸準備に入る。トレントリエッタ領の半島に到着したのは、丁度お昼になろうかという頃だった。

棧橋のような気の利いた設備は無い為、岸に舟を寄せて直接這い上がるのだが、荷物を持ったままでは中々骨が折れるという事で、部下のサポートを受けながら先に手ぶらで上陸した悠介が、水際の地面をカスタマイズしてプチ岬を作り、棧橋の代わりにする。

船頭さん達が目を丸くしている姿に苦笑しながら、一行は半島に上陸を果たした。

「ほぼ予定通りってとこかな？」

「ええ、ここまでの行程は順調ですよ」

港街に帰って行く舟を見送り、そのまま湖の畔で昼食を済ませた後、一度広範囲の索敵を行ってから南に向けて出発する。索敵の風技に乗る神技の波動に魔獣が反応するので、魔獣のいる地域では討伐目的でも無い限り、あまり広範囲の索敵は使用しない。

群れで行動しないとはいえ、広範囲の索敵はそれぞれ離れた場所を徘徊している魔獣を同時に呼び寄せてしまう危険があるのだ。

森に沿って南下して行き、半島の中央付近まで進んだ所で日が暮れ始めたので、ここで野営をする事になった。

「それにしても、ここまで全く疲れた様子も見せないなんて、流石隊長ですね……隊長？　どうかしましたか？」

「いや、そこはかとなく罪悪感が……」

上陸地点からここまでの道中、大使役や闇神隊メンバーも含め皆少なからず疲労の色が見られる中で、一人平然としている悠介に回復のエイシャが感心してみせる。が、悠介は装備品に施した能力補正で体力等は常に回復されている。疲れる訳はないのだ。

能力補正効果を持つ道具は一つ作るにも時間が掛かるという事になっている為、同行する大使役の前でホイホイ便利装備を作るわけにも行かない。『体力の指輪』くらいなら予め用意しておいてもよかつたかなと、準備不足を反省する悠介だった。

「せめて皆がゆっくり休めるように配慮させてもらおうよ」

野営の準備を始めるメンバーに食事の準備だけ整えるよう指示を出した悠介は、カスタマイズメニューを開いて地面を弄り始める。隊長の指示通り、テントを張る作業を一旦中止して食糧を用意するエイシャとイフヨカ。

ヴォーマルとシャイドは木の実を採りに森へ分け入り、ここまですて風技の移動補佐を使い続けて一番バテバテなフォンケは、荷物袋を枕にして寝そべっていた。

日も暮れかかっているのにテントの一つも張ろうとしない闇神隊メンバーの様子に、大使役の三人は怪訝な表情を浮かべる。

「あゝ、君たち……野営の準備はいいのかね？」

「大丈夫です、隊長がいって言うてますから」

「あ、いや、しかしだね……」

夜は冷え込むし、肌を刺す虫も少なく無い。雨だつて降るかもしれない。野宿の経験など無い文官な彼等は、地面に布を敷いて眠るには少々厳しいのでは無いかと天幕を要請したが

「大丈夫ですよ、ほら」

エイシャは彼等を宥めるように、離れた場所で作業をしている闇神隊長殿を指し示した。

地面をカスタマイズして石のように固めたブロックを切り出すというやり方で資材を作りながら、三十分程で煉瓦造りのような丈夫さを持った宿泊小屋を組み立てる悠介。カスタマイズ画面の中で最終チェックを行い、反映させる。

「実行」

「うおっ」

「なんと！」

全員分の個室まで用意されている宿泊小屋、野営と呼ぶにはあまりにもしつかりした建物の出現に、大使役の三人はびっくりな様子を見せながら、噂に聞いていた闇神隊長の超高速建築という特殊神技を目の当たりに出来た事を実感した。

ちなみに、地面の土を材料にしたので小屋を中心に周囲一帯は少し窪地になっている。安全で且つ快適な寝床を確保出来た闇神隊と大使一行は、簡易食ではない調理された夕食で今日の疲れを癒し、明日に備えてゆっくり休むことが出来たのだった。

夜、食事を終えてから部屋で作り物をしていた悠介は、少し夜風にでも当たろうかと宿泊小屋の外に出た。

「あ、隊長」

「エイシャか、今日はご苦労さん」

回復役のエイシャは、長い道中で疲れた仲間の体力回復を補佐する為、断続的に頻繁な水技の行使を求められる。移動補佐の風技を張り続けるフォンケと同じくらい疲れている筈だ。

「明日からは全員にコレを装備して貰うから、大分楽になるとおも
う」

「それは？」

「回復の指輪、その辺の石ころバージョン」

見た目も安っぽく、形もあまり良くない作りにしてある事で『以前から持っていたモノだけど、流石にこんな不恰好な物を使わせる訳にはいかなかった』という今まで持ち出さなかった理由付けにする。

ここから先、ノスセンスとの国境付近までは森の中を進んで行くので、今まで以上に厳しい道程みちのりになる事が予想される。イザという時の為に、治癒と移動補佐の力はなるべく節約しておきたい。

「で、こっちは晶貨で作った指輪。石ころバージョンの三倍は効果があるぞ」

そう言って半透明の指輪を差し出す悠介に、エイシャは指輪と悠

介の顔を交互に見やりながら戸惑いの声を上げる。

「え？ あの、え……？」

「ずっとしんどそうにしてたろ？ 特に大使役の三人は体力なさそうだったし、しょっちゅう回復してるの見てたよ」

これはエイシャの頑張りに対する俺からの特別ボーナスだと言って、悠介は晶貨製回復の指輪を彼女の手に握らせた。上司の優しい心遣いに思わず感激するエイシャ。

「あ、ありがとうございます、隊長。 これ……大切にします」

貰った指輪を胸元で大事そうに握りながら感動に潤む瞳で上目遣い、とかやられると、傍目からはここで為された本来のやり取りとは全く違う状況に見えるのではないだろうか、等と埒も無い事を思ってみたりする悠介なのであった。

「うっわっ エイシャ嬢陥落つか、隊長どんだけー」

「いいから自分の部屋に戻ってとっとと寝ろ」

態々隣の部屋までやって来て窓から外を覗き込んでいるフォンケに、枕を投げ付けるヴォーマルであった。

47話：港街にて

翌朝、宿泊小屋を畳んで出発した闇神隊と大使一行は、まず森沿いに半島の南端まで進むと、そこから西方向へと進路を変えて森に入った。回復の指輪効果で疲れ難く、特に回復役のエイシャが疲れ知らずな状態なので移動速度もペースアップ気味だ。

定期的に風技の伝達を飛ばしてノスセンテスから派遣されている護衛隊の野営地と双方の位置を確認し合っている。

速過ぎず、遅くならず、立ち止まっただの休憩が必要ない程度にバランスを取りながら、獣道のような森の中を慎重に且つ足早に移動する。食事も歩きながら簡易食やララの実を摂取する強行軍だったが、その甲斐あってか夕方頃には国境に到着出来そうだった。

「方角は合ってるか？」

「はい、大丈夫です。あと半刻もあれば……国境に着きますよ」

木々の隙間から射す木漏れ日に朱が交わり始める頃、流石に朝から歩き通しだったので皆、息が上がって来ているものの、野営時には安全快適な空間でゆっくり身体を休められる事を分かっている為か、大使達も不満を口にする事無く黙々と歩を進めている。

寧ろ、彼等にとっては今回の様な野営を含む長旅や強行軍で森の中に行く事など、これまでの任務では役職からしてありえない未知の体験であり、慣れてしまえば快適なれど退屈な宮殿暮らしで刺激の少なかった生活に比べて、非常に気分を高揚させられる。

未開拓の見知らぬ地に行く険しき道、困難な任務に挑む我等、格好良い！ のような冒険者の心境で結構楽しんでる節があった。

「？」

そろそろノスセンスの護衛隊野営地が見えてこようかという地点まで来た時、時折イフヨカが左後方へちらちらと視線を向けては首を傾げている事に気付いた悠介は、隣に寄って囁くように声を掛ける。

「なにかあったか？」

「っ！ い、いえ……多分、気のせいです」

急に耳元で囁かれて身体をビクツとさせつつ、イフヨカはそう言っつて手をパタパタ振った。

「そうか。 っつて流すと、後で”もしやあの時！”とかのフラグが立ちそうだからなあ……」

「はい？」

謎の呟きに小首を傾げるイフヨカ。悠介は湖を渡る際、舟に細工がされていた事などを踏まえ、どんな些細なモノでも何か引っ掛かる事があるなら言っつてくれと要請する。

「とりあえず、どんな気がしたのか教えてくれ」

「……えと、実は……かなり遠くて薄いんですが、その……無技の戦士みたいな気配が……」

イフヨカは言い難そうに小声でボソツと、湖を渡る時にも感じていた事を告げた。

湖に突き出た半島の森はよくある普通の森だが、トレントリエッタ領の大部分を覆う森は樹海と呼ばれる程に深く入り組んでおり、街道を外れて踏み入れた場合、熟練した伝達系風技の使い手でもなければまず、間違いなく迷ってしまう程の巨大な森である。

この樹海が自然の要塞と化し、それなりに歴史はあれど決して国力が大きいとは言い難いトレントリエッタを長い年月、カルツイオの大地に存続させ続けているのだ。

そんなトレントリエッタの樹海に少し入った所、ノスセンテスの国境まで半日程の辺りに潜む白刃騎兵団の姿があった。

フォンクランクから親善大使が訪れるという情報を受け、この機に乗じてノスセンテスの首都パトルティアノーストを背後から急襲する為に、ブルガーデン領を跨いでフォンクランクの港街付近から湖を渡り、数日前よりトレントリエッタの森に潜伏している。

「フォンクランクの大使一行が、ノスセンテスの護衛隊と合流したようです」

「そうか、引き続き動向を探るよう伝える。但し、慎重にな」

闇神隊が護衛隊の野営地に到着したという知らせを受けたシンハは追跡続行の指示を出すと、自軍部隊の集結状況を問う。

「今日到着予定の戦士は六名、残りの戦士達も順調にこちらを目指しています」

「部隊編成が調うまで、あと二日は必要かと」

「二日か……ギリギリのタイミングになるかもしれない」

当初、ガゼツタはフォンクランクの大使一行が通るルートを、東からトレントリエッタの街道を使うか、西のブルガーデンを経由してノスセンテスの街道を進むかと予測していたのだが、湖を渡つての最短ルートを行く事を知って部隊の集結を急いでいた。

パトルティアノーストはその大部分が、嘗ての白族帝国の王族が建造した巨城をそのまま使っているので、白族王家の末裔であるシンハは巨城の抜け道や中枢機関である神議会が陣取る神議堂の位置も把握している。

ただ、外敵に侵入された場合を想定した備えで特殊な造りをしている為、確実に内部まで攻め込めなければ制圧は非常に困難を極めるのだ。シンハ達の狙いは、大使一行が神議会と接触する席を狙って神議堂のある政務省施設を急襲、制圧する事にあつた。

「それと、フォンクランクの港街でなにやら大きな動きがあつたとの連絡も入ってますが」

「ふむ、港街か……一応、情報だけは拾っておけ」

今は急襲部隊の集結を優先したいと判断したシンハは、対岸の騒動については一先ず流しておく事にした。

その頃、港街では

「敵部隊の様子は？」

「また増えました、さっき到着した部隊は東側の包囲に回っているようです」

「ふん……トレントリエツタ方面の脱出路を塞ぐつもりか」

闇神隊からの報告を受けて港街に急行した衛士団と、潜伏していた武装集団との攻防が続いていた。

夜になってから個別に街を出て、適当に人目の付かない場所で合流する予定だったヴォーメスト率いる武装集団の特殊工作部隊は、最初に到着してこっそり港街を包囲していた衛士団の監視と検問に引っ掛かり、既に何人が捕らえられている。

衛士団の規模を早々に見切ったヴォーメストは、この程度の数で包囲しているなら戦力を集中して一点突破を仕掛ける事で脱出できるとし、街の中で部隊を集結させると直ちに臨戦態勢を整えた。

その動きを素早く察知した衛士団は街中に突入を開始、住民を街の外へと避難させつつ、ヴォーメスト達が動き出す前に包囲網を縮めていく事で、包囲の壁が薄くならないよう隙間を詰めていった。

そうして追い込まれたヴォーメスト達は、最終的に街の中央に建つ大きな宿を占拠して立て籠もる事になり、この大衆宿を舞台に籠城戦の様相を呈している。

「第三、第四部隊はバリケードを維持、第二、第一部隊は正面玄関と広間を見下ろせる二階に布陣、正面のバリケードは破棄だ」

ヴォーメストは的確に指示を出しながら防衛箇所の一画をあけてそこに敵を誘い込み、周囲から一斉攻撃でダメージを与えるよう、

組上げた作戦を伝えた。

別働隊の援軍が来るまで戦線を死守せよとの命令を下すと、部下を連れて作戦司令室として居る宿の一室に籠もり、作っておいた抜け穴を通って衛士団による包囲網の外へと抜け出すチャンスを窺う。衛士団側は宿に突入させる部隊分だけ包囲網を狭める事になり、その結果、抜け穴の出口付近は包囲の外側となった。

「よし、行くぞ」

隣の民家まで床下を通る抜け穴から大衆宿を脱出したヴォーメストと部下の二人は、突入する部隊に注意を向けている衛士達を尻目に、隙を見てこの一帯から離脱していく。

「街を出たら北側の森に暫く身を隠す、しつかり付いて来い」

「え？ 団長、援軍はどうするんですか？」

街の外へ脱出しようとするヴォーメストに、部下の二人は別働隊という援軍の事を尋ねるが、ヴォーメストは『何を言っているんだ』という表情で半分だけ顔を向けると、呆れたような口調で今回の脱出作戦について説明した。

「そんなもの居るわけ無いだろう、奴らには精々脱出の時間を稼いで貰う。我々は森に潜伏後、トレントリエッタ方面から撤退だ」

「か、彼等を見捨てるって言うんですか！」

「ガゼッタの協力者も、ノスセンテスの兵も、我々とここまで共闘してきた仲間じゃないですか！」

「静かにしろ、敵に覚きこられる」

同じ精鋭団内で訳ありな新人をちょっと引つ掛ける程度の策略ならまだしも、これでは完全な裏切り行為だ。元ブルガーデン精鋭団、

火の団団員だったヴォーメストの部下二人は、嘗ての団長にこの行動は受け入れられない事を告げた。

「すみません団長」

「自分らは、もう付いていきません」

「そうか、ではここでお別れだ」

部下の離反に、淡々とそう言って背を向けるヴォーメスト。

「お前達、ここまでよく私に付いて来てくれたな」

「団長……」

振り返りながら一閃、炎が薙ぎ、団長からの労うような言葉に万感の表情を浮かべていた部下の首が落ちる。驚愕するもう一人に、ヴォーメストは薙ぎ払った状態の炎を纏った剣を突き刺した。

「だ、団……長……」

「もう少し使えると思っていたのだが、残念だ。今までご苦労だったな」

剣に纏わせた炎の火力を上げ、刺傷部分から身体の内部を焼き斬ると、絶命した元部下から剣を引き抜く。そうして倒れ伏す遺体には目もくれず、ヴォーメストは一人、街の出口を目指して歩き出した。

「っ！」

入り組んだ路地を抜け、若干広い十字路に差し掛かった所で突然、

横合いから飛んできた火炎弾を咄嗟に炎を纏わせた剣で打ち消す。次の瞬間、周囲の路地から現れた衛士達が逃走を阻止するようにくるりと取り囲んで一斉に武器を構えた。

ヴォーメストを包囲する円陣の一角から、鮮やかな赤い隊服を身に纏う一人の宮殿衛士が歩み出る。

「見下げ果てた奴だね、部下を囷にして逃げ出すとは」

「お前は、あの時の……。これは驚いた、炎神隊の者だったとは」

脱出される寸前でヴォーメストを抑えたのは、今回の調査に態々志願してついて来たヒヴォデイルだった。

大衆宿に籠城する武装集団の動きが、急に単調になった事を不審に思った彼は、衛士団から分隊を率いて街中を巡回していたのだ。

ヒヴォデイルなりに、フォンクランク領で無技の村を荒らす武装集団に対して雪辱の機会を胸中に秘めていた。

「降参だ、投降する」

万事休すと言える状況にあつて些かの狼狽も焦りも見せず、あっさりと剣を捨てて降服の意を示すヴォーメストに、ヒヴォデイル達は怪訝な表情を向ける。

「なんだと？」

「捕虜になると言ったのだ、私は襲撃事件について重要な情報を持っているぞ」

さつさと投降を選んだヴォーメストの内心では、今後の展開を推測して生き延びるための計算が為されていた。

エスヴォブス王の人柄や方針から考えれば、降服した相手に危害を加える行為は禁じられているであろう事など簡単に推測できる。

このまま速やかにサンクアディエットまで護送される事になるだろう。

フォンクランク内にもノスセンテスのシンパや密偵は居るので、まず向こうから接触して来る事が予想される。

彼等が口封じに動いた場合、『闇神隊長を籠絡する決定的な情報を得た』とも言え、脱出の協力は得られる筈だ。闇神隊が無事に対岸へ渡った事は、舟が帰港した事で確認済みである。

『ノスセンテスの連中はやたらと自尊心が高いからな』

保身の為に直接神議会へ出向いて情報を渡したいという言は、恐らく理解されるであろう。ちよつと『卑しき者』を演じてやれば、彼等の自尊心を満たすことが出来る。ヴォーメストはフォンクランクもノスセンテスも尽く出し抜いて逃げ果す事を目論んでいた。

こうして、フォンクランク領を荒らしていた武装集団は月鏡湖の港街で衛士団によって討伐された。

深夜まで続いた大衆宿での戦闘は、投降者一名を除くほぼ全員が討ち死にする事で幕を閉じたのだった。

48話：パトルティアノースト

ノスセンテスの護衛隊野营地で一泊した悠介達一行は、翌朝早くから護衛隊の馬車に分乗すると、古都パトルティアノーストを目指して出発する。

護衛隊とは昨日の夕刻に合流して短い挨拶を済ませ、そのまま翌日の移動に備えて休む事になったのだが、さほど開かれていない森の中では地面を切り出すカスタマイズにも手間が掛かるし、流石に天幕の並んでいる陣地に九部屋の一戸建て宿泊小屋を出現させるのもどうかと思い、自重した悠介達は用意されていた護衛隊の天幕を使わせてもらった。

宿泊小屋で休める事を期待していた大使達は、気落ちしてか幾分疲れが増したようにも見えたので、悠介は代わりに寝具をカスタマイズする事で、部下や大使達、護衛隊の皆さんにも快適な寝心地を提供したのであった。

「隊長は戦場にいるより、こういうのが向いてるかもしれやせんね」「まあなあ、自分でも荒事に向いてるとは思わないよ」

闇神隊印の安眠寝具『快適寝袋』で十分な睡眠を取る事の出来る。大使達はもとより、護衛隊の兵達も何処か充実した雰囲気を感じられる。一つ確実な事は、安眠寝具によって彼等から高い信頼を得られたのは間違いない。

どんな過酷な状況下にあっても休める時に休まなくてはならない兵達にとって、何時でも何処でも安定した寝心地を得られる快適寝袋は正に手放せない行軍必需品となった。

「何がウケるか分からんな、この世界……」

そんなこんなで良好な関係を築けた闇神隊大使一行と護衛隊は、順調に森を抜けて街道に入り、昼過ぎには目的地へと到着した。

パトルティアノーストは拡張を重ねる内にピラミッドのような山形になったサンクアディエツトと比べて、街全体が最初から一つの要塞として在る様な造りをした巨大な城塞都市である。元は白族帝国の王族関係者のみが暮らす巨城であった。

一戸の建造物がそのまま街になっているという構造的に、神民の等区画分けも高低さではなく、ほぼ均等な間隔で五つの区画に分かれていた。そうしなくては低等民は常に建物の中で暮らすような状況になってしまうのだ。

最上階はほぼ開けた広場になっていて、居住区や商店などは屋内に配置されている。

其々の区画のうち、最も豪華で背の高い建物が並ぶ宮廷区画に通された悠介達は、大使の謁見を明日と定めて親書を渡す段取りなどを行い、細かい協議は大使役組みに任せて今日は一度解散という事になった。

闇神隊メンバーは用意された部屋で休む者、街に出る者にと別れ、

悠介は例の薬を買う為に街へと出掛けた。

ヴォーマルとシャイードは移動が許される範囲で街の構造を把握する為にあちこち歩き回り、エイシャはイフォカと化粧品やら両親への御土産やらを見に連れ立ってお買い物に。

真つ先に遊びに行きそうなフォンケは珍しく部屋で休んでいた。実は夜になってから街へ繰り出すつもりである。

「うーん、ちゃんと場所を聞いてくればよかったか……」

薬を取り扱っている店を探して地下商店街のような屋内街路を行く悠介。適当に歩いていけば見つかるかなと、甘く構えていた事に少し後悔を覚えつつ、入り組んだ街中で行き交う人々を眺めては溜め息を吐いた。そうして壁際で暫くキョロキョロしていると

「あの、どうされました？」

何かお困りですか？ と、声を掛けてくる若い女性がいた。実は通りを行く人々の中にも悠介が道に迷っているであろう事を察していた者は多かったのだが、その見た目と得体の知れない神技の波動が近づく事を躊躇わせていたのだ。

フォンクランクから親善大使が来ている事は、ノスセンテスの一般民にも知れ渡っている。

長年の敵対国であるガゼッタがブルガーデンの地でフォンクランク軍に破れたという話の中に、闇神隊という英雄の存在が囁かれていた。戦の英雄といえどどれだけ敵兵を殺したかで決まるようなモノ。

闇神隊やギアホーク砦、ディアノース砦の英雄については、あまり詳しい事は伝わっていない。

故に、壁を背に街行く人々をじいっと見詰めている黒尽くめの男が、フォンクランクの英雄である可能性を考えると、怖ろしくて声など掛けられなかったのだ。

そんな中、悠介に声を掛けた女性は勇敢なのかお人好しなのか、はたまた天然なのか。見た目は二十歳前後の女性未満、少女以上の秀囲気で、黄髪をサイドで纏めた活発そうな印象を与える見掛けの割りに柔らかい物腰で、可愛らしい感じのする娘だった。

「いやー助かりました、道案内までさせてしまっただけで申し訳ない」

「いいえ、お役に立てて良かったですよ」

薬品店通りまで案内して貰った悠介は、優しい笑顔で去って行く彼女に礼を言っただけで別れると、早速店で目的の薬瓶を何本か購入して宮廷区画に用意された客間の自室に籠り、軽くカスタマイズを施し始める。

治癒補助薬は一瓶辺り赤晶貨三本近い値段もする高価な品だが、纏めて数本買っていき悠介に店員さんが目を丸くしていた。ちなみに、余所の国で購入した場合、輸送人件費で商人の取り分が加算されてももう少し高くなる。

「浸透率の数值はそのままにして、神技の増幅効果を体力回復効果に変えてみようかな……？」

よく効く回復薬のようなものにカスタマイズしながら、効果部分を弄れば色々応用が利きそうだと、悠介は手応えを感じていた。

翌日、朝帰りを見つかつてエイシャに叱られているフォンケがえらく疲れていた様子だったので、悠介は実験がてら昨日カスタマイズして作った回復薬を飲ませてみたところ、水技の回復と同じような効果が得られる事を確認出来た。

流石に普通の水からここまで効果のある薬を作るのは無理だが、これは中々使えそうだと実験の成功を確信する。

「ちよつ 俺で実験しないで下さいよっ」

「いや、まあ危険が無い事は分かってたんだ。どの程度の効果が得られるのかを確かめておきたくてさ」

だから気にするなと流しつつ、何となく作ってみたら出来てしまった精力増強剤を握らせる。

「俺は隊長の忠実な部下っす」

「そうか、これからも期待しているぞ」

「……こ、この人たちって……」

朝から疲れた気分させられて精神安定剤でも要求したいエイシヤなのであった。

今日の謁見で親書の受け渡しを済ませれば、後は大使達に任せて闇神隊の任務はとりあえず一段落という事になる。細かい協議などが交わされる間、悠介達は適当に街の観光でもしながら帰国する日までノンビリ過ごせる予定になっていた。

フォンクランクの大使達がノスセス神議会の代表と本会談の打ち合わせがたら、滞在中の待遇や情報の入手に関わる行動制限について協議し、闇神隊メンバーは其々護衛という名の監視付きで街の散策などしている頃、神議堂に集まった神議会の各神民議長達が闇神隊長ユースケ籠絡の手筈やガゼッタの動き、フォンクランクの近況について話し合っていた。

「ヴォーメストの部隊は壊滅したそうだな」

「やはり余所者になど任せるべきではなかったのだ！」

「問題は、奴が現在フォンクランク側の捕虜になっているという事だ」

「それについては向こうに居る有力貴族の同志達に動いて貰うとして、今は闇神隊と邪神ユースケの扱いについて考えねばならん」

港街での出来事は未だ悠介達には伝わっていない。大使達にも今しばらくは情報を伏せておこうとノスセス側は画策していた。ノスセスの諜報力を隠す為、延いては多くの密偵を潜り込ませている事を気取られたく無い為、情報を態と遅らせる。

街は周囲を風技の伝達封鎖によって情報防衛しているので、風技の伝達を行うには許可を取らねばならない。

無事、ノスセスの首都に到着した事を本国フォンクランクに伝えようとしたイフォカは、伝達はノスセスが行うのでと、交信を止められていた。が、余所の国に来ているならその国のやり方に従うのは当然

として、別に不審には思っていないかった。

一応その事をユースケ隊長に報告した際『本人達からの連絡もあつた方がより確実な気がするけどなあ』という呟きに、イフヨカは『確かに』と納得すると、ノスセントス側の対応に対して僅かな違和感を覚えた。

とは言え、そんな呟きを口にした悠介も余所の国のルールだからとあまり気にした様子も無く、今日も薬を見に街へと出掛ける。

「あら？ ユースケ様じゃありませんか？」

「え？ お姉ちゃん知り合いなの？」

「ん？」

薬品店通りを歩いていた悠介がそんな声に振り返ると、そこには見知った顔と知っている顔が並んでいた。水色の髪と瞳を持つ美しい妙齡の女性と、昨日、道案内をしてくれた黄髪をサイドに纏める可愛らしい感じのする若い女性。

「ラサナーシャ？ と、昨日の……」

「あ……こんにちは」

「まあ！ やっぱりユースケ様でしたのね」

思わぬ所で思わぬ相手との再会に驚きつつ、悠介は『そういや近々ノスセントスに帰郷するって言ってたな』と、前にラサナーシャから聞いていた話を思い出す。

「と、いう事は　彼女は妹さん？」

「ええ、以前お話ししたこっちに住んでいる妹です」

「あ、えと、改めまして、ラーザツシアと言います」

「昨日はどうも、悠介といます」

ぺこりと挨拶するラーザツシアに悠介はドームドームと日本人な挨拶を返す。悠介から見たラーザツシアの印象は、活発そうなお見掛けはヴォレット、柔らかい物腰はスン、慌て方がイフヨカで、ハキハキした喋り方はエイシャに似ていた。

闇神隊長と彼女達の接触を物陰から見張っていた人影が、風技の秘匿伝達で報告を上げる。

『 ミツバチの目標との接触を確認しました 』
『 了解した。監視を続行せよ 』

49話：前兆

元の世界で生活していた頃の悠介は、よくゲームで遊んでいた。ゲームオタクと呼べる程のヘビーユーザーではないものの、ライトユーザーと呼ぶには手をつけた量やジャンルも浅くはない。

普通にギャルゲーと呼称されていた恋愛系ノベルなど、萌え要素に比重がおかれたモノもプレイしていた。だからという訳ではないが、人や物事の例えをゲームっぽい表現で評する事もしばしばあった。

「なんとなくか……出現期間限定キャラにありがちな怒涛のフラグラッシュなのか？」

闇神隊がノスセンテスに滞在して三日目、悠介は街に出る度にラーザツシアと何らかのイベントを発生させていた。

何故か行く先々で『偶然』顔を合わせたり、通路の曲がり角で衝突したり、しかも大股開きで尻餅をついて暫らく『あいたたあ』とか可愛く痛がつて見せ、自分の格好に気付いて慌ててスカートで隠したり、でもって涙目上目遣いで『み、見ました？』とか

「ユースケさんで、凄い人なのにとっても自然体で……一緒にいるとなんだか安心しちゃいます」

「ははは……」

そんな会話を交しながら通路を並び歩く悠介とラーザツシア。そ

の時、ふわりとレーザーシアのポケットからハンカチが落ちる。思わずそれを拾おうと手を伸ばした悠介と、レーザーシアの手が触れ合う。

「……………あつ」

重なり合う手と手。竦むように引つ込めた手を胸元でぎゅっと握って赤くなるレーザーシア。最近こんな事ばかり続いていた。

宮廷区画の二画に広がる来賓用のサロンで寛いでいたフォンケが、街から帰って来た悠介を見つけて声を掛ける。

「たーいちよー、またあの娘とイチャついてたんすかー？」

「フォンケか……別にイチャついてる訳じゃないんだけどなあ」

ポリポリと頭を掻きつつ、悠介はフォンケの意見も聞いてみようかと彼の寛ぐソファアの対面に腰掛けた。壁際に控える給仕達がささと寄ってきては、悠介の為に花茶を用意する。

「なーに言ってるんすかあー、隊長といえる時のシアちゃん、ムチャクチャ可愛いじゃないすかあー」

「可愛い、のかなあ？」

やつかみ半分の棒読み口調だったフォンケは、腕組みをして首を傾けながら『うーむ』と唸り始める悠介に照れ隠しやおどけた雰囲気を感じ取れず、本当に何も感じていないのではないかと本気で心配し始めた。

「隊長、まさか本当に女に興味が沸かないんじゃないですか？ 例の事しんが関係してるとかで……」

「いやいや、そうじゃないんだよ……なんつーかなあ」

確かにレーザーシアの仕草や表情は愛らしいのだが、彼女の行動にはわざとらしさが目に付くのだと語る悠介。フォンケは盛大に疑問を呈した。

「はあっ？ 何処がつかつ？ いや、アレが例え演技だとしても、アレだけ可愛く見せようするっていう事はっすね」

「落ちて着け落ちて着け、とりあえず落ちて着け」

まず座れと宥める悠介に、フォンケは彼女に対する周囲の反応も概ね『なんと可愛い娘だろう』と良好で、意中の男性に対するアピールが入っている事を差し引いても、是非お近付きになりたいし、守ってあげたいと想わせられる娘だと暑苦しく語る。

「まあ、女側からはちょっと可愛い子ぶってるって意見も聞かれますけどね、それだってヤツカミすよ」

「うーん、やっぱこっちの人にはそう感じるのかー」

悠介の言う『こっちの人』とはカルツイオの人々全般を指すのだが、『ノスセンテス人』の事を指していると取ったフォンケは、『可愛いは万国共通っす！』等と色んな世界で通用しそうな格言？を放つたりしていた。

「話の流れから考えて、俺に好意を持ってってくれる故の演技とも言える訳か……」

「考えなくてもあの反応見てりゃ分かりそうなもんでしょようによ」

「いや、俺としては自然な接し方というか、在りのままの自分を見せて欲しいというか」

「ぐああああ隊長腹立つ！ なんすかその贅沢な要求！ あんな健気なアピール見せられて」在りのままが良い』とかっ！」

喚くフヨンケに『健気か？』などと煽る疑問を投げ掛けて遊びながら、悠介はラーザツシアの事を考える。何かしら好意を持つに至った原因があるとするれば、恐らくラサナーシャの事だろうなと当たりを付けた。だが

『にしても、アレはちよつとなあ……』

彼女の演技は確かに完璧で、例えば初めて日本に来て女子高生に接した外国人が、彼女達の可愛い子ぶりっ子に『Oh! Cute』とか言つてコロツと引つ掛かるような感じで、並みの男ならみんな虜にしてしまい兼ねない可憐さを發揮している。

だが、日頃から電話口や玄関先のセールス相手に、口調のみならず声色まで変えて別人のように接する女家族や同じクラスの女生徒などを観察してきた知識と経験を持つ悠介には通用しないのだ。

実際の所、ラーザツシアのあざとい演技はあざと過ぎて、現代人の感覚を持つ悠介にはそれらの演技で自身をどう見せようとしているかまでバレバレであった。冷静に観察出来る分、本人はラーザツシアバレていないと思っっている事まで分かつてしまう。

だからといって、態々それを指摘するのも相手の好意を無下にするようで何だか憚られる。そんな調子で、中途半端に偏った知識と経験を持つ悠介は適切な対処法が浮かばず、どう接すればいいのやらと、もによもによした気持ちになるのだった。

悠介が宮廷区画で微妙な気持ちになっている頃、ラサナーシヤとラーザツシア姉妹が住む家、という事になっている中民居住区の一室にて、ノスセンテス諜報工作員である二人は仕事の段取りについて話し合っていた。

「さあ、明日からいよいよ仕上げに入るわ」

「少し急すぎませんか？」

「いいのよ、こういうのはとにかく勢いが大事なの。相手に考える暇を与えちゃダメなのよ」

「なるほど……」

闇神隊長^{ユースケ}の人物像を行動力や出世速度などから『先を急ぎたがる傾向にある人物』と分析したラーザツシアは、とにかくトントン拍子に事が運べば、機運ありと見て勢いに乗り、一気に事を進めようとするタイプだと読む。

こちらから餌として撒いた『付け入る隙』に対して、何処か煮え切らないような反応を見せる悠介の態度も、今までの経験から考えるなら、あれは自分の衝動を無理に抑え込んでいる男に見られた雰囲気にも似ている。

「フォンクランクからの報告書を読む限りじゃあ、相当な誑しみたいじゃない？」

「噂では、確かにそうなってますが……」

表面上は平静を装い、内面を抑える事に理性の大半を使っている

という精神状態では、表情の取り繕いが疎かになって意図せず硬い表情になったり怖い顔になる場合が珍しくない。

一見、慚然とした面持ちの裏では、内心の大喜びな気持ちを必死に隠そうとしている、などという事はよくある。

「闇神隊が発つのは明々後日、相手の焦りも考えたと仕掛けるタイミングとしては明日が一番いいのよ」

欲情的にはもう辛抱タマランという所まで来ているが、親善大使の同行者という立場上、人目もあるし、姉のラサナーシャには良い人を演じて近付いてるので、ここで狼になる訳にもいかない。

といった感じで悶々としているに違いないとラーザツシアは判断した。そういうタイプは直前まで紳士を装おうとするが、いざ事に至ればそれまで抑えていた衝動が一気に噴出し、豹変する。今までの仕事で見てきた彼女の知る男とは、尽くそんな生き物だった。

上手く誘惑して襲い掛かって来た所でラサナーシャも交え、なし崩し的に抱かせて後は自分にハマらせれば良いと考える。

「快楽促進剤（媚薬）も用意するよう上に申請しておくわ。あなた、アレ使っても大丈夫よね？」

「はい、一応経験はありますから」

神経に作用する薬は病気を抱えた身体に負担を掛ける事にもなる。誘惑の最中に逝ってしまったら洒落にもならない。

「そ、ならいいわ。アレを使うと自分も飛んじゃうけど、今回はターゲットと深い繋がりを持つ事が目的だから問題ないわね」

「一つだけ問題があるとすれば、これだけウブを装っておいて生娘ではないという理由をどうするか。」

実際にターゲットと接してから相手に応じて自分像を変えていく
臨機応変型のラーザツシアは、事前の情報を元にして対応策を考え
ておくというやり方をしない。情報に囚われれば、対応を読み違え
たりして折角立てた策も無駄になり易いからだ。

昔、お姉ちゃんに恋慕していた貴族の男に力尽くで手籠めに
された事があって、本当は男の人が怖い。だから、お姉ちゃんの
仕事も嫌悪してた。でも、ユースケさんは怖くない、ごめん綺麗な
身体じゃなくて、でも……あたし、ユースケさんになら

「よし、このシナリオでいこう」

脳内劇場で男にとっては実に都合の良い女像の物語を組み上げた
ラーザツシアが、そう呟いてポンと手を打つ。傍らで小首を傾げる
ラサナーシャに「あんたが私より可愛い仕草してどうすんのよ」と
か内心で悪態など吐きながら、当日の段取りを決めていく。

「あんたは私とユースケが始めたら偶然を装って部屋に来て、後は
妹に嫉妬した姉が乱入って感じで、搾り尽くしちゃいましょう」
「わかりました」

明日の夕食に誘う役目を引き受けたラサナーシャは、この仕事で
は先輩であるベテランラーザツシア諜報工作員の作戦に頷きつつも、内心では彼
女の悠介に対する認識に疑問を懐いていた。

「あのユースケ様が、こんな手に乗るかしら……？」

やっぱり噂や伯爵達の人物把握はおかしい気がするラサナーシャ

だった。

翌日

ラサナーシャ達から夕食の招待を受けていた悠介は、午前中に目ぼしい薬を買い漁ってカスタマイズの具合を確かめ、午後になつてから彼女達姉妹の家に向かおうと部屋を出た所で、難しい顔をしたヴォーマルに呼び止められた。

「隊長、ちょっといいですか？」

「ん？」

少し耳に入れておきたい事があるというヴォーマルに案内されて、闇神隊メンバーが集まっているサロンの一角にやって来ると、フヨンケが盗聴防止用に風技の膜を張った。

「何か厄介な話か？」

「いえ、なんとはいやしうか……イフヨカがまた例の気配を感じてるそうでした」

「例の気配って……無技の戦士の？」

「は、はい……野营地から、街に来るまでの間も、ずっと感じてたんですが……」

街に入ってから伝達封鎖の風壁もあつてか、索敵も街の近くま

でしか届かないので特に何も感じることは無く、時々ノスセンテスの業務で何処かへ伝達が行われている時などに、外から聴こえて来る風に耳を傾けていた程度だったのだが

「無技の戦士が近くに来ていると……？」

「多分……本当にちらつと感じたダケだったんですが……ここからだと思えば余程近くじゃないと、感じられない筈……ですし」

ディアノース砦の時のように、ガゼッタの軍が何処か街の近くに潜んでいるのではないかと、イフヨカは不安げに話す。ガゼッタとノスセンテスは長く小競り合いが続く紛争状態にあるようなので、国境付近にガゼッタ軍が居てもおかしくは無い。

両国の戦いを見ると、平地では強力な遠距離攻撃の神技を活かしたノスセンテス軍が有利だが、森や山に入るとガゼッタ軍のゲリラ戦法にまったく太刀打ち出来ないらしい。

その結果、ガゼッタとノスセンテスの国境はパルティアノーストの周辺でかなり歪な事になっていた。街の直ぐ傍に広がる西の森が全てガゼッタの支配下にあり、両国の小競り合いは主にこの森が舞台となる。

街の背後はトレントリエッタ領の樹海が覆っている為、ノスセンテス軍はパルティアノーストの北と南に騎士団の部隊を展開する事でガゼッタ軍の攻撃を街の側面に集中させ、要塞都市の防御力でそれらを防ぐという戦術がとられていた。

「ちなみに、気配がした方向は？」

「東の……トレントリエッタの方角です」

「ガゼッタの偵察部隊なんかつかね？」

「うーん、確か……ノスセントスの野営地に入る前から、そつちの方角に気配がしてたんだよね？」

悠介の問いに、こくりと頷いて答えるイフヨカ。湖を渡る時にも、気のせいに出来るほど遠くに薄っすらと感じていたという事実も合わせると、単なるガゼッタの偵察部隊と考えるには感知した場所が色々と不自然だ。

「俺たちの後をついて来てた？」

「何の為に？」

フォンクラクとノスセントスの親善妨害にしては、これといって何も仕掛けられていない。

「舟の件以外は妨害らしい妨害もなかったしなあ……アレだってガゼッタの関連は微妙なとこだし」

「偶々街の背後に回りこむルートが、俺等の通る道と被ったとかじゃないっすか？」

パトルティアノーストの背後に回ったとて、この要塞都市は全方向からの攻撃に対応している。西側からの攻撃に合わせて東側から襲撃を掛けても、然程効果があるとは思えないとはシャイードの弁だ。

「うーん、分からんっ　一応、みんなで気持ち警戒だけはしておこう」

「ノスセントス側にこの事は……？」

ヴォーマルに問われてふとイフヨカに視線を向けた悠介は、そのまましばし考える。じいっと見つめられてオドオドするイフヨカの

拳動が怪しくなってきた所で結論を出した。

「伝える必要はないな、ガゼツタに不審な動きがないか警戒を促すだけでいいと思う」

「理由を聞いてもいいですかい？」

「今の所、無技人の気配を探れるのはイフヨカだけっぽいからな、態々こつちの手札を明かしてやる事もないさ」

伝達封鎖された街の中にいる闇神隊から、近くにガゼツタ軍がいるかもしれない等という情報もたらされるのは、ノスセントス側に無用な疑心を呼びかねない。そうなった場合、イフヨカの能力について説明しなくてはならなくなる。

今後の対ガゼツタを考えるなら、無闇に明かすべきではないと悠介は判断した。ヴォーマルとシャイドがその判断を支持すると、フヨンケとエイシャも黙って頷く。

「つーわけだから、イフヨカも俺たち以外の人間にその事は話さないようにな」

「あ、はい、分かりました」

よしよしと、ついノリで頭をナデナデしてイフヨカを再び拳動不審にしたりしつつ、すっかり話し込んでしまったなと席を立った悠介は、少し急ぎ足で姉妹の待つ家へと向かう事にした。

悠介が例の美人姉妹から夕食に招待されていると聞いたフヨンケが、手を振りながら見送る。棒読みで。

「たいちよーごゆっくりー」

「なるべく早く戻るようにするよ」

「せーぜーごゆっくりー」

「……すぐ戻るよ」

割と深刻な話をした直後なだけに、その足でいそいそと美人姉妹の元へ向かう姿は節操が無いように思われてやしないかと、女性陣の視線を気にしながら、そそくさ立ち去る悠介。

「はぁ……まったく、隊長もフォンケも不真面目なんだから……」。

ほら、あなたもいい加減しっかりなさい」

「はうあう……」

闇神隊の良心こと常識人エイシャは、素面^{しつぽん}で酔っ払っているイフヨ力を介抱しながら溜め息を吐くのだった。

50話：偽りの姉妹

「隊長は美人姉妹と夕食、大使さんらはエライさんらと晩餐会かー」
「はは、俺たちとの食事だって悪くはないだろう」

「イフヨカってお酒も飲めたのね」
「一応、ちよつとだけなら……」

悠介を送り出した後、何となくサロンに残ってうだうだと過ごしていた闇神隊メンバーは、そのまま夕食の時間となったので皆でテーブルを囲んでいた。

初日こそ各々が思い思いに行動していたが、やはり団体行動が身についているのか一塊ひとかたまりになって活動する事に安心感を覚えるようだ。つい先程まで不穏な気配について話し合っていた事も、少なからず影響しているのかもしれない。

「しかし、まあ……ガゼツタの攻撃があったとして、この城塞のよ
うな街がそうそう簡単に落ちるような事もあるまい」

シャイードのそんな言葉に『確かに』と頷くメンバー達だった。

一方、ラサナーシャとラーザツシア姉妹の家に招待されている悠

介は、それなりに楽しい時間を過ごしていた。

「お味はどうですか？」

「ん、中々美味しいですよ」

「ふふっ 良かったあ」

お酒も勧められたのだが、あまり飲まないのとやんわり断り、意図せず興奮剤が混入されたお酒の接取を躲す悠介。ラーザツシアは何時もの対闇神隊長可憐な少女モードで表面を繕いながら、何とか気分を高揚させる薬を盛ろうとタイミングを図る。

ラーザツシアが自ら調合した特別な興奮剤は、無味無臭で痕跡を残さず幻覚剤にも似た強力な淫欲を呼び起こすが、短時間で効果が切れる上に、料理や飲み物に混ぜると十数秒の内に接取しなければ、やはり効果が消えてしまうという扱いの難しい薬だ。

相手に食べ物や飲み物を勧め、それが接取される直前に混入しなければならぬ。従ってお酒の酌などが最も仕掛け易く、次点で「はい、あ〜ん」のようなシチュエーションなのだが、お酒は早々に断られてしまった。

『中々羽目を外そうとしないわね……でも、流石にここでいきなり“あ〜ん”をやるのは不自然よね』

料理は少し辛味のあるものを並べてあるので、暫らく経てば喉が渴いてくる筈。小さめのカップに水は半分程しか入れていない。ラーザツシアはそのうち水を求めてくるであろう事を見越して、そこで混入を試みる事にした。そのチャンスは直ぐに訪れる。

「すみません、水のおかわりお願いします」

「あ、はい」

「ああつ お姉ちゃん、わたしがやるから座ってていいよ」

ひよいと水差しを持って悠介の隣へ移動したレーザーシヤは、指の間に挟んだ小さな筒の先を僅かな動きで開くと、コップに水を注ぎつつポトリと一滴、特製興奮剤を混入した。「どうぞ」と差し出した水を『ありがとう』と口にする悠介。

『よし、次はこっちの準備ね』

スツと目で合図するレーザーシヤ。それを受けたラサナーシヤが、自然な動作で『デザートをお持ちしますね』と言って席を立つ。ラサナーシヤが部屋を出た事を確認したレーザーシヤは、ススツと悠介の傍らに擦り寄り、耳元でひそひそと訊ねる。

「所でユースケさん……お姉ちゃんとは何処まで進んでるんですか？」

「え？ 俺と彼女は別にそういう関係じゃないよ？」

「ええ〜〜本当ですかあ〜〜？」

「いや、ホントにホントに」

そうして暫らくお約束問答が繰り広げられ、悠介の言に一応の納得を見せたレーザーシヤは、クスツと含み笑いをして何事かを耳打ちしようと更に顔を近付けた。微かに香る甘いクツキーのような匂いが、彼女から伝わる体温に乗って悠介の鼻腔を擦る。

「それじゃあ〜あ、ユースケさんって……好きな人とか」

と、そこへデザートの盛られたお皿を持ってラサナーシヤが戻ってきた。

「おまたせしました……どうかしましたか？」

「いえいえ」

「な、なんでもないよっ お姉ちゃん」

慌てて自分の席に座りなおして『見せる』ラーザツシアに、小首を傾げて『見せ』つつデザートのお皿をテーブルの上に置くラーザツシア。ここまでは打ち合わせ通りのタイミングで進んでいる。

見た感じでは悠介の様子に変わりはないが、特製興奮剤が効いているであろう所へ、ラーザツシアの甘い囁きという誘惑の布石を打ったのだ。その内面では彼女のどんなあられもない姿が渦巻いているだろうか。

尤も、それは自分も交えて直ぐに現実の事となるのだ。ここまで来たならばもう、個人的な感傷は封じて仕事に専念しなくてはと、密かに気合いを入れなおしたラーザツシアは、そんな事を思いながら次の段階へ事を進める。

「ちよつと、シア？ あなたそれお酒じゃないの？」

「はれ？ ……まちがえちゃった」

うつかり姉が飲んでいたお酒を間違えて飲んでしまったラーザツシアは、途端に呂律が回らなくなってくる。

「ふにゃふにゃ」

「もう、この子ったら……お酒弱いのに」

「あーらら、大丈夫？」

ラーザツシアは酔い覚まし薬を用意しますのでと、ぐらんぐらんしているラーザツシアを椅子から落ちないように悠介に支えて貰い

ながら戸棚の引き出しを「ごそごそ」していたが、どうやら切らしていたようだ。

「すみません、急いで買ってきますので……暫らくシアを看ててやって下さいませんか？」

「あゝはいはい、いいですよ」

「むふーユースケさん」

「ほいほい、落っこちるから大人しくしてような」

絡み付いてくる酔っ払いを適当にあやす悠介の姿は中々板に付いていた。これも元世界で酒癖の悪い女家族相手に鍛えられたモノだが、レーザーシア達には酔わせた女を扱いなれていると捉えられた。

『それでは宜しく願います』と足早に部屋を出て行くラサナーシャ。まだ興奮剤の効果は続いている筈なので、邪魔者がいなくなれば後は墮ちるだけというシチュエーションだ。

未だ理性を保っている悠介に最後の一步を踏み出させるべく、レーザーシアは誘惑の仕上げに入った。

「眠いー、シアの部屋いくー」

「ん、分かった。こっちな？」

しなだれかかるレーザーシアの身体を支えながら、指定された部屋へと誘導する悠介。

その間、ヨタヨタとふら付きながら腰なり胸なりお尻なりに手が伸びてくる事を待ち構えていたレーザーシアは、この期に及んでもまだ紳士的に振舞う悠介の態度に違和感を感じ始めていた。

ターゲットの人物像が本当に諜報部の資料であっているのか、資料通りならもうそろそろに押し倒されてもいい頃だ、と。

『もしかして、好みの把握に間違いがあった……？』

だが、ラーザツシアは多少相手の趣味と違っていても誘惑出来る自信があった。興奮剤がもたらせる淫欲には贖えない筈、目の前には自分に好意を見せる無防備で無垢な美少女。

『さあ喰え』と言わんばかりに誘導された自室のベッドで仰向けに転がって見せる。

「ん〜……きもちいい……」

ベッドシートに手を這わせて感触を楽しみながら、潤んだ瞳を向けて微かに笑みを浮かべるラーザツシア。

転がる直前に服の前ボタンを三つほど外しておいたので、微妙に乱れた衣服の胸元が大きく開かれ、白い肌も艶かしく鎖骨と胸元の膨らみが呼吸に合わせて上下する。あとちょっと、抓んで引き下ろせば、薄い布の下に隠された乳房が露わになるだろう。

そつとベッドに近付いた悠介の手が、乱れた衣服の胸元に伸ばされ

『よし、来た！』

恐らく転がった拍子に外れたのであろうという判断の元に、少々大胆かとも思いつつ胸元のボタンをしっかり止めると、身体の下敷きになっていたシートを引っ張り出してそつと被せる。

そうしてラーザツシアの前髪を一撫でし、『おやすみ』などと言

い残してそのまま部屋を出て行った。

『……………あれ？』

水でも用意してやるのかなと部屋を出た所で、悠介はラサナーシヤと鉢合わせした。実は出番に備えてスタンバイしていた彼女は、悠介が何もせずに出て来るとは思わなかった。身を隠す間もなく、完全に虚をつかれた格好となった。

「お、早かったですね。妹さん、部屋に運んどきましたよ」
「え？ あ、は、はいっ お手数お掛けしまして」

悠介が身に纏う隊服その他には様々な防御効果が付与されており、その中には解毒効果や鎮静効果も含まれる。

その為、ただでさえ強力だが短時間しか持たない特製興奮剤は一瞬で効力を失い、ラーザツシアの誘惑攻撃は『おお、可愛いな』と感じさせる程度に留まっていた。

もし彼女たちの計画通りに事が進んでいたならば

『シア……！ 私が先に目をつけていたのに！』
『は、早いもの勝ちだもん！』

などと『男にとって都合の良い女の素顔』をもって修羅場を演出、姉妹で一人の男を夜通し奪い合うという、めくるめく淫乱劇が行われる予定だったのだが

「それじゃあ俺そろそろ戻ります、今日のご馳走様でした。ラサナーシアさんの手料理、美味かったですよ」
「い、いえいえ、御粗末様でした……」

おいとまを告げられ、ラサナーシャは少々混乱しつつも玄関まで見送ってその場を取り繕う。悠介の姿が通路の先に消えた頃、部屋から出て来たラーザツシアはドスンドスンと床を踏み蹴りながら悪態をついていた。

「なんなのよアイツ！ 女に興味無いんじゃないの!？」

まさかこれで誘惑できないとは思わなかった、プライドが傷ついた！ と荒れるラーザツシアを宥めつつ、ラサナーシャは計画が失敗した事を安堵している自分に気が付き、そんな気持ちに戸惑いを感じていた。

宮廷区画までの帰り道、悠介の前方を十数人の武装した騎士達が駆け抜けて行く。何事かと彼等が向かった西側低民区を覗き込むと、かなり大勢の騎士達が集まっていた。

少数の部隊を編成しては、指揮官らしき人に指示を受けて所定の位置へと移動を始める。悠介は何があつたのかを訊ねようと、新たに通路を駆けて来た騎士達に声を掛けてみた。

「ああ、これは大使殿……どうもまたガゼッタから大規模な攻撃があるようでした」

彼等の話ではガゼッタとの衝突が最も激しい西の森に大軍が集結しているらしいという情報入手し、偵察部隊を向かわせたところ、

五百騎近いガゼツタの騎兵団が潜んでいるのを確認出来たらしく、総攻撃に備えて緊急招集を受けたのだそうだ。

「そりゃあまた……」

「しかしまあ、この街の防壁が破られる事はありませんので、大使殿達は安心して下さい」

それでは急ぎますのでと、割と感じの良い騎士は敬礼して去っていった。

「イフヨカの感じてた気配ってコレの事、だったのかな……?」

とりあえずは緊急事態につき、悠介は早く仲間の所へ戻ろうと駆け足気味に宮廷区画までの道程を急ぐのだった。

51話：虚城陥落

放置されて五百年は経つであろう古い抜け道に行くガゼッタの少数精鋭部隊。案内役として同行する白族の里から出て来た里巫女、アユウカスは、懐かしむような口調で呟いた。

「他は殆ど塞がれていたようじゃが……やはり、ここはそのままじやったのう」

「しかし、何故ここだけ放置されてるんだ？ 罫の一つも無かったようだが……」

「これじゃよ」

「……魔獣か」

アユウカスが指し示した足元に散乱する固形物は、骨だけとなった魔獣の成れの果てだった。

パトルテイアノーストの彼方此方に張り巡らされていた隠し通路、抜け道の類は、歴代の神議会メンバーが長年を掛けて探索しては、外部からの侵入を阻止する為に塞いでいったのだが、この古い地下通路には大量の魔獣が住み着いていたので、そのまま番犬代わりにしてしまおうと放置されていたのだ。

「魔獣とて、食べねば生きて行けぬのにのう」

共食いの跡が見られる魔獣達の骸に、せめて冥福をと祈りを捧げ

る里巫女の姿があった。

パトルティアノーストは民の居住区となる要塞部分と、総指揮を司る中枢部分とが内部で別れており、宮廷区画の奥にある中枢塔がノスセンテスの全てを統治管理する政務省施設となっていた。

嘗て白族帝国の象徴ともいえる巨城だった頃の王室にあたる中枢塔は、ほぼ円柱形の六階建て構造で、三階部分から四箇所の跳ね橋によつて要塞部分と繋がっている。ここを封鎖すると政務省施設には出入り出来なくなるのだ。

塔の地下には専用の深い井戸があり、別の水源として湖からも水を引いているといわれている。一階から二階までは厨房や食糧庫、使用人の宿舎。三階から四階は兵舎と厩舎があり、建物の中を騎士団の馬車が走る。

五階には官僚用の宿舎や客室、会談部屋などもあるが、他国の人間で中枢塔に招かれるのは王族クラスであり、今回ノスセンテスを訪れたフォンクランク大使は、闇神隊を含めて立ち入りを許されていない。

最上階の六階に上がる階段は一箇所しか無く、階段を上がりきるといきなり緑の庭園が広がっている。所謂空中庭園いわゆるであった。庭園の中央付近に建つドーム状の建築物の中に神議堂がある。

この中枢塔には地下から最上階まで、数百人が一ヶ月以上籠城生活出来る程の備蓄能力が備わっていた。

「森に配置した部隊は予定通り動きました」
「よし、では……こちらもやるぞ」

宮廷区画の奥、シンハが率いるガゼッタの少数精鋭は、中枢塔を見通せる一角に潜んでいた。

樹海に隠れて部隊を編成したシンハ達は、戦士の半数を攪乱と撤退支援に残すと、夜の闇に乗じてパトルティアノーストの内部へと古い抜け道から侵入を果たした。現在は中枢塔の制圧に向けて機会を窺っている状態だ。

普段、中枢塔に引き籠もっている神議会メンバーは、フォンクランク大使との晩餐会に出席する為に宮廷区の方まで出向いている。その関係で、何時もなら上がっている中枢塔と宮廷区を繋ぐ跳ね橋が一箇所だけ下りたままになっていた。

各跳ね橋の見える場所に急襲制圧部隊を配置したシンハ達はまず、西の森に集結させているガゼッタ軍を進撃させる事で、神議会が中枢塔に駆け込む状況を作り出す。

神議会の馬車が橋に差し掛かるタイミングで襲撃を仕掛けて、護衛や警備の騎士達と乱戦に持ち込みつつ中枢塔内部に侵入、内側から四箇所全ての橋を下ろして待機していた制圧部隊を突入させる。後は神議会メンバーの拘束と中枢塔の制圧を宣言する事で、ノスセンタースの抵抗を全て押さえるのだ。

ノスセンタースは権力の全てを神議会と中枢塔に集中させているので、神議会が中枢塔に籠ってしまえば例え要塞部分を一時占領出来

たとしても、ノスセンテスの戦力と指揮は生きたままとなり、要塞内部で占領部隊が孤立してしまう事態にもなり兼ねない。

個々の技量ではガゼツタの戦士が武で勝る部分を持つものの、風技の伝達指揮によって完璧に管理統制されたノスセンテスの騎士団が各騎士団単位で縦横無尽に行動出来るのに対して、ガゼツタ軍は今ひとつ纏まりに欠ける為、組織力で引けを取る。

部隊としての機能を維持する事が難しいガゼツタ軍は、戦いが長期化すればするほど不利になって行くのだ。

だが、逆に神議会と中枢塔を押さえしまえば、伝達指揮による統制戦闘に慣れきってしまったているノスセンテスの騎士団はたちまち烏合の衆と成り果てる。

彼等は下っ端から指揮官まで、上からの命令を正確に実行する術には長けているが、個人で判断して行動する術に関してはまったくと言って良いほど鍛えられていないのだ。『考えるな、動け』というのが、彼等の訓練で叩き込まれるスローガンであった。

無技の戦士にゲリラ戦法を仕掛けられると滅法弱いのは、その為だったりする。

「しかし議長、よろしかったのですか？」

「フォンクランク大使の事か？ 構わん、今は緊急事態なのだからな」

ガゼツタ軍接近の急報を受け、晩餐会の席を途中で立って来た炎技の民を代表する議長は、寧ろ退屈な晩餐会を抜け出せる良い機会

だったと内心でほくそ笑んでいた。西の森周辺での小競り合いは何時もの事なので、彼に緊張感は見られない。

それでも、有事の際は中枢塔に籠って指揮を執るのが、ノスセンテスの長い歴史の中で培われてきた神議会の習わしでもある。

並走する護衛の騎士達が先行して跳ね橋の両側を護り、高等神民議長が馬車が橋に差し掛かったその時

「行くぞっ 全軍突撃！」

「っ！ 敵襲だー！」

物陰に潜んでいた無技の戦士達が一斉に飛び出して跳ね橋に殺到した。まさかの侵入者による襲撃に騎士達は一瞬の動揺を見せたが、即座に迎撃態勢へ移行する。中枢塔の跳ね橋で激突するガゼッタの精鋭戦士とノスセンテスの護衛騎士。

ちなみに、シンハは精鋭戦士筆頭として先頭に立っている為、彼の部下達は二重三重の意味で決死のというより必死の想いで戦いに挑んでいる。今回、西の森で騎兵団の指揮を任されている参謀などは、某専属警護兼教育係りな人並に胃が鍛えられていた。

シンハ達が中枢塔に襲撃を仕掛けたのとほぼ同時刻、西の森に集結していたガゼッタの白刃騎兵団五百騎が、バトルティアノーストの西側防壁に向けて進撃を開始した。

防壁上から迎撃の神技や矢が放たれるが、ガゼッタ軍は先頭を行く戦士が盾となってこれを防ぎながら突進力を維持、防壁の城塞門直前まで馬で駆け抜け抜けると、門前で隊列を組んでいるノスセンテス

の騎士団に踊りかかる。

盾役の戦士達で落馬せずに辿り着いた者は、そのまま馬上から騎士団の隊列に突っ込み、後続の攻撃部隊が速やかに接近できるように己が身を剣と盾の如く振るい暴れた。

「く……っ　いつもの襲撃と様子が違う、こいつら門を破る気でいるぞ！」

「神議会の指示はまだか！　早く統制戦闘に入らないと、被害が無視できなくなるぞ」

城塞門を護る騎士達は予め指示されている迎撃マニュアルに従って応戦しているが、正面から一塊になつての接近戦ではガゼツタ軍の白兵戦闘力に太刀打ち出来ない。

彼等の真価が発揮されるのは完璧な統制の元に複数の部隊が連係して中、遠距離攻撃で翻弄しながら相手の戦力を削っていき、撤退に追い込みつつ追撃で討ち取れるだけ討ちとるといふ戦術だ。

神議会からの指示を待つ騎士団が城塞門前で防戦を続けている所へ、東側防壁でもガゼツタ軍の攻撃が始まったという知らせが届く。規模は明らかにされておらず、西側と同等の大部隊だった場合、常駐する防衛隊だけでは防ぎきれない可能性もある。

西側城塞門の中では待機している各騎士団の団長達が、幾つか部隊を応援に向かわせるべきか、指示の無い状態で勝手に動くべきでは無いかと議論を始めた。そんな混乱気味の中、城塞門の開閉レバーに手を掛ける一人の騎士に気付く者はいなかった。

この日の為に何ヶ月も前から潜り込んで準備していたガゼツタ側の密偵による風技の伝達を封鎖攪乱する工作が功を奏し、中枢塔が

襲撃を受けるといふ非常事態の情報が伝わらず、ノスセンテス側は対応が遅れに遅れた。

情報と戦力を分断し、西側防壁の城塞門、中枢塔、東側防壁でそれぞれ個別に戦闘が行われるよう仕向ける。風技の伝達が伝わらない以上、直接伝令が走る事になるのだが、彼等の通り道は分かっているのだ。伝令は尽く目的地に辿り着く事はなかった。

「おい、何をしている！ ガゼツタ軍が来ているんだぞつ、早く門を閉めろつ」

突然、西側城塞門が開き始め、何事かと議論を中止した団長達は開閉レバーを操作している騎士を見つけて怒鳴り声を上げる。大方背もたれにでもしていて、何かの拍子に下ろしてしまったのだろうと叱責を飛ばそうとするが、騎士の表情に違和感を覚えた。

「きさま……？ まさかっ」

その騎士はニヤリと笑みを浮かべると、剣を抜いて騎士達を威嚇した。

混乱の中、騎士団内部に紛れ込んでいたガゼツタの密偵によって城塞門が開かれ、パトルティアノーストはガゼツタ軍の侵入を許してしまった。一度内部に入り込まれば次々と抜け穴を開かれて、大勢のガゼツタ兵が雪崩れ込む。

瞬く間に要塞部分である街、居住区画を制圧されるが、ノスセン

テスの騎士団は各所から撤退してきた部隊を集結させながら中枢塔前で陣を張るべく、宮廷区まで後退して来た所で、中枢塔の異変に気がついた。

普段や緊急時には上げられている四箇所の跳ね橋が全て下りている。橋を防御する騎士の姿も見えず、綺麗に磨き上げられた艶のある床石や柱には鮮血が飛び散った跡や、ひび割れたり砕けたりしている部分があり、武具や破れた布地の一部が散乱していた。

「一体……何が……」

彼等の目前に広がる痕跡からして、ここで戦闘があつた事は明白なのだが、そんな情報は伝わっていない。中枢塔が直接襲撃されるような事態になれば、全軍に緊急事態の報が発せられる筈なのだ。他の防衛箇所を放り出しても此処に集まる事になる。

居住区画からガゼッタの騎兵団が迫つて来ている事も忘れてはし、呆然としていた彼等に、中枢塔から『広伝』が発せられた。

「俺はガゼッタの王、シンハ・トルイヤードだ。神議会高等神民議長と神議堂は我々が制圧した。ノスセントスの全ての勢力は沈黙せよ」

シン八王の声で発せられた広伝は、中枢塔が統制するパトルティアノーストの全域、街の隅々にまで響き渡つたのだった。

52話：神議会の陰謀

シン八王による中枢塔制圧の広伝が響き渡ってから暫らく。深夜にも関わらず街の北側通用門には住民達が長蛇の列を作っていた。その様子を神義堂の中央に設置されている『神眼鏡』しんがんきょうという特殊な遠見の鏡で眺めているシン八。

古の邪神が造り出したとも謂われるこの神眼鏡は、どういう仕組みなのかパトルティアノーストとその周辺を上空から見下ろしたような風景が映っており、実際にその場にいる人間の動きなどもリアルタイムで映し出される。

神議会の直接指揮によるノスセス騎士団の統制戦闘は、この神眼鏡の力あってこそその戦術だったのだ。

映し出せる範囲はパトルティアノーストを中心に馬車で約半日ほど進んだ距離までであり、森の中まで見通す事は出来ない。ノスセス騎士団が森に入ると極端に弱くなる理由でもあった。

現在、街を制圧しているガゼッタの部隊は、中枢塔を急襲した潜入部隊に城塞門から入って来た騎兵団、街に潜伏していた密偵達を含めても八百人前後と少ない為、パトルティアノースト全体を占領する為の大部隊がガゼッタから向かって来ている。

無技人国家の占領下では、神技人がどんな扱いをされるか分からないという事で、住民達はガゼッタの占領軍が到着するまえに近く

の街へと避難を始めたのだ。

ガゼツタ軍は中枢塔付近に布陣してノスセンテスの騎士団に睨みを利かせているので、住民達の脱出を抑える為に人数を割くことは出来ず、また占領後の事を考えると住民とのトラブルという厄介事が減らせる為、抑える気も無かった。

結果として制圧後の混乱は最小限に止められたのだが、避難する住民達に混じって神議会メンバーの中等神民議長以下、ノスセンテスの中枢を担っていた重要人物をごっそり取り逃がしてしまうという失策もやらかしていた。

「神議会で身柄を押さえられたのは高等神民議長だけか……」
「脱出した神議会関係者に他国で亡命政府を立てられると厄介ですね」

ノスセンテスの他に四大神信仰を軸にしている大国といえればフォクランクが筆頭だ。トレントリエツタはガゼツタと事を構えるだけの国力は無く、ブルガーデンは四大神信仰を軸にしているもの、等民制の否定を謳っているので神議会を受け入れる筈もない。

「闇神隊の行方はどうなってる？」
「残念ながら、その後の足取りは掴めませんでした」

パトルティアノーストの住民達とは別ルートでフォクランク大使達と共に脱出した事までは確認出来ている。

一般居住区の馬車乗り場から街の中を北東防壁に向けて一直線に不自然な穴が開いていたそう。防壁自体に穴は無かったのだが、複数の足跡と馬車の車輪跡が防壁の手前まで続いており、それはそのまま壁の外側に抜けていた。

「くく……ユースケの仕業だな」

馬車で脱出されたとなればもう追いつけまいと、シンハは悠介の身柄確保は諦めた。

「まあ、一応そっちの搜索隊も出しておけ」
「ハッ」

「シン坊は相変わらず大雑把じゃのう」
「……婆さん、自分の仕事は済んだのか？」

中枢塔の跳ね橋まで下りて来て街の占領に向けた部隊指揮をしているシンハの所へ、塔の内部で調査を行っていたアユカスがやって来る。幼少時の呼ばれ方をされて嫌そうにしているガゼツタの王に、アユカスは『ほれ』と見つけ出した書類を差し出した。

「執務室も保管庫の位置も変わらなかつたから、直ぐ見つかったわ」
「ふん……やはり、フォンクランク領の襲撃騒ぎは神議いしぎ会が黒幕だったか」

「部隊編成指示に予算の許可書だけでは確固たる証拠にならんぞ？」
「分かっている。だが……これは使えるな」

上手く立ち回れば、当面の間はフォンクランクの動きを封じて白族帝国復興の地固めに集中出来そうだと、シンハは取り逃がしたノスセンチス神民議長達を利用する策を考える。

「まずはリシャの所へ使者を出す。逃げた神民議長共には別働隊を組織して追跡させる」

嘗ての王城を取り戻した白族の末裔たるガゼツタの王は、帝国の復活に向けて動き始めた。

「もうすぐ森に入ります、ここからは別行動となりますが、馬車はそのまま使って構いません」

「そっか、ここまでありがとう。助かったよ」

「いえ、我々こそ脱出する事ができたのは貴方達のお陰です」

「お互い様ってところか」

闇神隊と大使一行に、ノスセンテスの騎士団一個小隊はパトルテイアノーストの北東に広がる森の前で別れを告げる。

ガゼツタ軍が西側防壁に攻撃を開始した頃、宮廷区へ戻った悠介は騎士団となにやら揉めている部下達を見つけ、双方に事情を聞いてみたところ、イフヨカが中枢塔のある方角に複数、無技の戦士の気配を感じ取ったらしく、しかしその事を明かす訳にもいかず、闇神隊の護衛兼監視役を担っている騎士達に中枢塔の様子について訊ねていたのだが、騎士達は自国の最高機密に属する施設に関して探りを入れられているように捉えてしまい、不敬を窺^{たしな}めるような言動をした事にフヨンケが噛み付いて問答が起きていた。

悠介はとりあえず自分を含め部下達にもノスセンテスの内部を探るような意図はない事を伝えてその場を収めようとした。そこへ、中枢塔区画から応援を求める騎士が駆け込んで来た事で騒然となっ

た所に、シンハの中枢塔制圧を告げる広伝が響き渡ったのだ。

その場にいた者は皆一瞬、何が起きたのか分からない様子で呆然と佇んでいたが、晩餐会の会場から足早に戻って来た神議会の各神民議長やフォンクランク大使達の姿を見て我に返ると、慌しく動き始めた。

要人を保護をして安全な場所へ脱出しなければという事で、悠介たち闇神隊は大使一行を連れて、神議會を護る騎士達と共にパトルティアノーストからの脱出を試みた。

ガゼツタ軍が通りそうな通路を避けて居住区画に移動した一行はそこで馬車などを調達し、神議會は一般住民に偽装する事で難民に紛れ込み、同じく一般民に偽装した一部の護衛騎士と共に通用門から脱出。

闇神隊と大使一行はノスセンテスマまでやって来たルートを通ってフォンクランクへと脱出する為、調達した馬車に乗り込んで建物の中を派手に突っ切った。

街の外まで最短距離を行けるよう、カスタマイズで壁をぶち抜いて道を作るという目立つ方法を選んだのは、ガゼツタ軍の目をこちらに引き付けて神議會の脱出を援護するという意味もあった。

悠介が宙に何かを描くように指を彷徨わせ、『実行』という呟きと共に光の粒が舞ったと思ったら、いきなり前方の壁に大穴が開いて遠く防壁の外側にまで続く屋内トンネルが出現した時は、流石に騎士達も目を丸くしていた。

「あの……ユースケさん達だけで大丈夫なんですか？ 森には魔獣もいるって聞いてるんですけど……」

「大丈夫だと思うよ？ 来る時も問題なかったし、うちの部下達は

あんなんでも一応優秀だから」

「ちよつ　なんで俺を指しながらっ！」

闇神隊と大使一行だけで森に入る事を心配してか、不安そうに訊ねるラーザツシアに、悠介はフォンケを指しながら微妙な言い回しで笑いを取って和ませつつ、安心させるように振舞う。

屋内トンネル通過の際、難民の列に向かおうとしていたらしきラサナーシャとラーザツシア姉妹を見つけた悠介は、ラサナーシャもどうせ帰国するなら一緒に連れて帰ろうと声を掛けた。必然的に妹のラーザツシアも連れて行く事になったのだ。

神議会と合流する為にノスセンテスの北西部へと向かう騎士団と別れ、闇神隊一行は森の中を北東に進み、隣国トレントリエッタ領の国境を越えて上陸地点の半島部分まで北上した後、フォンクランクの港街へ迎えの舟を寄越すよう風技の伝達を飛ばす予定だ。

ちなみに、馬車は半島で乗り捨てる事になるので気兼ねしないようにと、御者役の騎士が一人同行している。

深夜の森中を移動するのは何かと危険を伴う為、森に少し入った辺りで地面の表面はそのままに、目立たない場所を入り口として、地中に馬車ごと隠せる空間を作った悠介は、そこで一夜を明かす事にした。

只の洞穴に全員寝袋で雑魚寝でも十分と言える状況にも関わらず、しつかり個室まで作ってしまう凝り性は日本人の性か。

闇神隊のメンバーや大使達は既に慣れたモノだが、同行する御者役の騎士やラサナーシャとラーザツシア姉妹は、悠介の特異過ぎる神技に驚きっぱなしであった。

明日からの移動に備えて寝静まる地下宿泊施設内にて、同室となった偽姉妹は携帯用油木の僅かな明かりの下でヒソヒソと言葉を交わし合う。ラサナーシヤはこのままフォンクランクに戻っても問題ないが、ラーザツシアには色々と問題がある。

フォンクランクの『偉いさん』の中にも、何人が面識のある者が居たりするのだ。主に『ミツバチ』としての仕事の関係で。

「まいったわねー、まさかこんな事になるなんて……」

闇神隊長の籠絡も何も、引き込み先の国が無くなってしまったのでは話にならないじゃないかと、ラーザツシアは上層部の体たらくぶりに愚痴をこぼす。尤も、今回は任務失敗の可能性が高かったので有耶無耶に出来そうな部分だけは期待していたりした。

「ラーザツシア様は、御家族とかいらっしやらないのですか？」

「こんな仕事してる工作人員にそんなの居るわけないでしょ、あと私の事はシアでいいわ」

場合によってはこれから先、ずっと姉妹を演じ続けていく事になるのだ。一々使い分けていたら疲れてしまつわと、手をひらひらさせるラーザツシア。

「……ねえ、フォンクランクってどんな所？」

「え？ ご存じないのですか？」

「知らない。私、パトルティアから出たことないもの」

「そうだったんですか……」

隣街くらいなら子供の頃に行った事はあるが、孤児の中から使える人材として選り出されてからは、指定人物を籠絡する為の技を仕込まれ、訓練と実践に明け暮れる日々。

相手の理想像を完璧に演じる技を磨く裏で、本当の自分がどれなのか分からなくなつて悩んだ時期もあった。ターゲツトに本気になるつてしまい、後に死にたくなるような酷い目にあつた事もある。

色々な経験を積んできたラーザツシアだったが、彼女の活動の場はパトルティアノーストという巨大な囲いの中だけだ。

「知つてるケド知らない。そんな感じなのよ、私の知識つて」

仕事柄、色々な情報を吸収し、知識も学んでいる彼女だが、それらは全て他者の視点や経験から書き記されたモノが殆どだ。唯一、薬の調合は仕事と関係なく趣味で嗜むうちに実力を伸ばした。

「頭で分かつててもさ、実際に経験すると何か違つてたりするじゃない？」

「確かに、そういう事はありますね」

やはり不安があるのか、やけに饒舌な印象を受けるラーザツシアに、話相手を務めるラサナーシャは親身になつて相槌をうつ。本来は上司と部下の関係にある二人だったが、『今だけは』と本当の姉妹のような雰囲気語り合つたのだ。

「ラサ」

「はい？」

「ありがとね」

「いいえ……」

パトルティアノーストから脱出したノスセンテスの政府勢力こと神議会は、難民の列から離れて湖沿いに行く北側街道の森に少し入った辺りで野営陣地を張ると、ブルガーデン方面から戻って来た特詮隊の工作部隊と連絡をつけて情報収集に勤しんでいた。

集められた情報から現状の分析を行い、パトルティアノーストの奪回と巻き返しを図る為の策を練る。

「状況は芳しくありません。現在パトルティアノーストは約三千のガゼツタ軍に占領されており、住民の大半は」

「住民の事などどうでもよい！ 我々の戦力とガゼツタの動向、各国の動きを報告しろ」

慣れない野営で満足に休息もとれなかったせいか、すごぶる機嫌の悪い様子の中等神議長以下、神議会メンバーは、簡易作戦台の上に広げられた地図を前に指示と共に唾も飛ばす。

「フォンクランクにはこれと言った動きはありませんが、まだ情報を得て間もない為と思われます」

ブルガーデンはガゼツタとの国境に神民兵団を展開している様子で、トレントリエッタは何時も通り沈黙しているとの報告がなされる。トレントリエッタに関しては全域を広大な樹海に覆われているという領土の性質上、難攻不落だが、それだけの国なので思考の外に置いた神議会メンバーは、フォンクランクの動向とガゼツタの今後の動きに注目する。

「闇神隊がこちらの手にあれば良かったのだが……」

「仕方あるまい、向こうの大使連れだったのだからな」

「フォンクランクには何らかの支援を求める声明を出すべきか」

如何にフォンクランクを巻き込もうかと策を捏ね繰り回しては唸る神議会の面々に、『ミツバチ』が闇神隊と行動を共にしているという情報がもたらされたのは、パトルティアノーストが陥落して二日目の夕刻の事だった。

「これは、なんと都合の良い巡り合わせだ！」

「うむ、我等が事前に敷いておいた謀がこのような形で結ぶとはな」
「早速その工作員に働いて貰うでしょう」

機運は我等に有りと普段の調子を取り戻した神議会のメンバーは、闇神隊と大使一行を利用したフォンクランクとガゼッタを争わせる謀を組み上げると、特詮隊の工作部隊に細かく指示を出し始める。

この森に野営陣地を張ってから、ノスセンテスの騎士団は神議会を護衛する為に周囲の警戒や慣れない情報収集など、これまで通り黙々と任務をこなしていた。

しかし、普段は目にする事も接する事も出来ない所謂『雲の上の人』である神議会を身近に見る事で、騎士達の心にある種の変化が訪れていた。騎士達はノスセンテスの中枢組織である神議会に対して、もつと神聖で威厳ある存在だと思っていた。

的確な統制指揮。平等な等民制社会。豊富な精製知識。歴史あるノスセンテスを永劫導く古よりの指導者達。

だがその実体は

『……これでは只の謀略家集団ではないか……？ いや、国家の運営に綺麗事ばかりでは……だが、しかし』

神議会から直接指示される任務の殆どを、特詮隊のような日陰部隊が賜っている事実。今まで公にはされていなかったが、神議会が騎士団よりも特詮隊を重宝しているという噂は以前からあった。

現状はそれを目の当たりにしてしまった騎士達が、みな内心で戸惑っているといった具合だ。

「では、そのように」

「うむ、失敗は許されんぞ」

騎士達の戸惑いを余所に、新たな任務を賜った特詮隊の工作部隊は、対岸にあるフォンクランクの港街に向けて出発して行った。

52話：神議会の陰謀（後書き）

予定通り進まない。。。；

53話・傳き蜜蜂の詩【前編】

神議会が組上げたフォンクランクとガゼツタを争わせる謀とは、闇神隊と大使一行をガゼツタ軍に偽装した特詮隊の工作部隊に襲撃させる事で、両国の確執を決定的なモノにするという割と単純な策略だ。

相手はブルガーデンの精鋭団やガゼツタの騎兵団を尽く退けたフォンクランクの最強部隊たる闇神隊。如何な百戦錬磨の実力を持つ特詮隊と言えど、まともに戦えば太刀打ち出来まいと予想される。

そこで現在、闇神隊と行動を共にしている要人籠絡工作員である『ミツバチ』ラーザツシアを使う。彼女は暗殺術の能力こそ期待出来ないものの、薬の扱いに長けている。襲撃の僅かな時間、闇神隊の動きを封じてくれれば良いのだ。

ヴォーメストの部隊が壊滅していなければ彼等を動かしていた所だが、今回の作戦においてヴォーメスト部隊の壊滅は返って有利な要素ともなりうる。

例え捕虜となっている彼がノスセンテスの策略に言及していたとしても、この状況下でノスセンテスから新たな工作部隊が送り込まれるとは思えない。神議会はそう読んだ。

フォンクランクとガゼツタが衝突する舞台を作り、自分達はフォンクランクに亡命政府を立てる。という計画だ。

「蛮族どもが如何に武力で我等を凌駕しようと、英知に勝る力は無

い事を思い知らせてやるっ」

特詮隊が先回りして港街に潜伏しようと月鏡湖を渡っている頃、闇神隊一行はトレントリエッタ領の半島にて、一夜を明かす野営の準備を進めていた。

北と南に伸びる森を西側に、辺り一面荒野では無いが何も無い未開拓の平地が広がっている。そんな風景の一部に光の粒が舞消えるのと、庭、屋上付き一戸建て十一部屋、厩舎付き車庫完備の宿泊小屋が出現した。

「今日はイフヨカが料理担当だっけ？」

「は、はい、ノスセンテスで買い込んだ調味料がありますから……美味しい食事になるよう、頑張ります」

「ほほう、それは楽しみですね」

「あゝ腹減ったぜー」

早速中で休もうかとぞろぞろ建物に入って行く闇神隊メンバーに大使一行。『どっから出した！』といった雰囲気です。暫し呆然としていたラサナーシャとラーザツシア姉妹に御者役のノスセンテス騎士の三人は、我に返ると慌てて後に続く。

「ねえ、ユースケって本当に何者なのよ？　こんな神技、聞いた事もないわよ？」

「私も……あまり詳しい事は伺った事が無いので」

ヒソヒソと言葉を交わし合う二人は、傍から見ると本当に仲の良い姉妹に見えた。

深夜

皆が寝静まるうかという頃、外の空気を吸いに屋上（と言っても二階だが）へ上がって来た悠介は、そこにレーザーシアの姿を見つけた。星を見上げながらボンヤリした様子の彼女は、何か考え事をしているように見える。

普段のレーザーシアなら、接近する人の気配に気付かない等という事は無かったのだが、今の彼女は見た目通りボンヤリと考え事をしていた。思いがけずパトルティアノーストという狭くて巨大な囲いの外へと出る機会を得た事で、今まで考えもしなかった『自由』について想いをめぐらせる。

このままノスセンテスを離れ、仕事の事も忘れて普通に暮らす自分の姿を想像してみるが、簡単なようでも中々上手く思い浮かべることが出来なかった。

ここまでの道中で交わした他愛無い会話。夕食の席で行う談笑。何れの場面でも常に周囲の動きを把握し、警戒を怠らず、接取物には何かを混入される事がないか気を張り巡らせ、同時に混入の機会も窺って普段から自分の技と感性を磨く。

身に染み付いた作業員としての在り方、生き方だった。

「普通って、どんななんだろう……」

「具体的には？」

「ん、だから普通の人の生活　　って！　　うひゃああああっ」

何気無く零れた呟きに質問を返され、流されるように返答しかけて我に返ったラーザツシアは、何時の間にか直ぐ傍にいた悠介の姿に飛び上がって驚いた。

「あ、アンタ何時の間に私の背後に！」

「いや、ついさっき。何かボンヤリしてる感じだったから声掛けちゃ悪いなと思って」

静かにそつと近付いてみたよ等と答える悠介に、ラーザツシアは思わずツッコミを入れる。

「それワザとでしょ！」

「うん」

しれつと肯定されて二の句が継げず、口をパクパクさせているラーザツシアの隣に並んだ悠介は、呆れたような戸惑ったような表情で固まっている彼女に、笑いかけながら言った。

「その方がいい」

「……なにが？」

「自然なほうがいいよ」

ハツと表情を強張らせるラーザツシア。対象ターゲットに指摘されて自分が演技を忘れていた事に気付くなど、気が抜けているにも程があると内心で自身を叱責した。そうして、何故だか羞恥の感情が湧きあがり、顔が熱くなっていく。

『な、なにコレ……なんでこんな』

感情のコントロールが利かず、焦れば焦るほど赤面が止まらない。レーザーシアにとって、こんな事態は初めてけいほうじゅつ閨房術を仕込まれた時以来だった。

「はっはっはっ やつと本来の君が見られたという事で、今日はこれでおやすみ」

「へ？ え？」

慌てるレーザーシアに『早く寝ろよ』と気さくな雰囲気で声を掛けた悠介は、僅かな光の粒を残して唐突に姿を消した。カスタマイズを使った建物の部分入れ替えによる移動術。範囲限定の条件付きだが、実質、瞬間移動である。

「な……なんなのよ……」

演技がバレた事に対してなのか、素の自分を見られた事に対してなのか、原因不明の羞恥心は理解不能な神技を見せ付けられた事で落ち着いた。

ここから先、ラサナーシャとの血縁を偽ること以外は演技無しでこの集団と行動を共に出来る事に、レーザーシアはなんだか気持ちいが軽くなったような気がするのだった。

明けて翌朝。皆が顔を合わせる食事の席にて。

「ラサ姉は胸の割りに身体が細過ぎるから、もうちょっと食べたほうがいいんじゃないの？」

「そ、そうかしら……?」

「ユースケもそう思うわよね?」

「そこで俺に聞くなっ」

昨日までと変りない状況の中、一つだけ昨日までと違った空気が流れていた。それは決して悪いモノではなく、寧ろ良い傾向に感じられる変化と捉えられたのだが、『何故?』という疑惑にも似た疑問の視線が某黒い人にチラチラと向けられている。

「……たいちよー」

「何かな? フヨンケ」

「なんかシアちゃんの雰囲気が違うんですけど」

「そうだな」

黙々と食事を進める悠介はフヨンケの疑問にそう惚けて見せつつ、ちらりとエイシャに視線を送る。

何時もはフヨンケの軽口などに睨みを利かせているエイシャだが、今回は追及しても良しと判断したのか表面上は知らん振りを決め込みつつ、聞き耳を立てている。その為か、追求の手は意外な所からも伸ばされた。

「あの……隊長」

「何かね? イフヨカ」

「昨日の夜、暫らく部屋に……居ませんでしたよね……?」

珍しく自分からこういった内容の話に参加する内気な緑髪の闇神隊女性衛士に、ぎょっとした表情を向けるフヨンケ。『イフヨカが

動いた……！』とか変な驚き方をしているヴォーマルが呟く。悠介もちよつと驚き気味になりながら普段のノリで返した。

「もしかして……いつも俺の気配を追ってるとか？」

「えっ？ いえ！ わた私はっ べ、別にそんな訳ではっ ラーザツシアさんも、出歩いてたみたいだったので……その」

悠介の切り返しにあっさり撃墜されてワタワタし始めるイフヨカの横合いから、今は聞き捨てならないとばかりにフォンケが追求を始める。

「ターイチョー」

「なんだよ」

「つまり、昨夜はシアちゃんと一緒だったと？」

「ちよつと間な」

ざわり……と大使一行や同行するノスセンテス騎士も含めた微妙なざわめきが朝の食卓を横切る。

『これもすっかり何時ものノリになったなあ』と何処か達観した様子の悠介は、食卓を囲む部屋に漂う微妙な空気を払拭すべく、ラーザツシアの変化について簡単に説明した。

「屋上でっ！ 星を見ながらっ！ なんと大胆な……今度やってみよう」

「やかましわっ」

「無理に曲解しなさんな！」

悠介とエイシャにダブルツツコミを叩き込まれて沈むフォンケ。

姦しくも穏かな一時、普段は堅苦しい宮中の作法に縛られている大使達や、周りが全員外国人なので少なからず窮屈な思いをしているノスセントスの騎士も幾分気持ち が和らいだ。

話題の中心であるラーザツシア本人は、そんな闇神隊の温かい雰囲気 に心地良さを感じ始めていた。

その後の道中も順調に進み、半島の最北端には三日目の夜に到着。港街へ迎えの舟を寄越すよう要請して湖畔で一泊する。釣りが出来たので食卓には魚料理が上がり、ここまで一緒に旅をして来た騎士とのささやかなお別れ会も催された。

「では、帰国の道中、お気をつけて」

「そつちも大変な状況だけど、達者でな」

彼は本隊と合流する為、ノスセントスの北西部へと向かうそうだが、そうして、パトルティアノーストを脱出してから四日目となる翌日の朝。馬車で去って行く騎士を見送り、悠介達一行は迎えに来た三艘の舟に分乗すると、港街に向けて月鏡湖を渡る。

「ラーザツシアは舟に乗るの初めてなのか？」

「う、うん……あつ 魚！ ホントに泳いでる」

舟の縁にしがみ付いて恐る恐るといった様子で湖面を覗き込んでいたラーザツシアは、泳いでいる魚が見えた事に子供のような反応を見せた。十数年来パトルティアノーストから出た事のなかった彼女にとって、知識でしか知らない外は本当に未知の世界なのだ。

悠介はそんな何処か子供っぽい雰囲気 のラーザツシアに対して『これが本来の彼女の姿なんだろうなあ』と微笑ましく見ていたが、

本当の意味での事情を知るラサナーシャは、彼女の在り方を不憫に感じていた。

「ここが……フォンクラクの港街」

見上げれば石の天井ではなく、常に大きな空が何処までも広がる『外の街』。暫しその景観に見惚れるラーザツシア。

活気溢れる港街の雰囲気には圧倒されるように呟いた彼女は、やはり知識として知っている本の情報とは違ふと改めて実感した。実際にその場に立つ事で肌を感じられる風の感触、行き交う人々の流れは街の鼓動を思わせ、まるで街全体が巨大な生物のようだ。

昼頃に港街へ到着した一行は、以前にも泊まった湖沿いの宿に部屋を借りてサンクアディエットに帰国の知らせを行い、ノスセンターでの出来事に関して連絡を取り合っていた。迎えの馬車隊が到着するまでは暫し港街で一休み出来る。

本国に帰って来られて、ようやく人心地付けた様子の大使達は、行きも帰りもしっかり護衛役を果たしてくれた闇神隊を労った。

「ここまで来ればもう安全だとは思いますが、あつし等が出発した後で一騒動あつたようですからね」

「サンクアディエットに着くまでは気を緩めないほうがいい」

「だな。つーことで、御三方も一応宮殿に着くまでは気を緩めないで下さい」

「ふむ……確かに、君たちの言うとおりだな」

ヴォーマルとシャイードの弁に頷いた悠介は大使達に気を引き締めるよう促し、彼等もそれに同意した。

「うおーっ シャーリーちゃんヴォー又ちゃん今行くぜー！」

約一名、風技の使い手で気を緩め捲っている闇神隊衛士が港街の通りを駆け抜けて行く姿も見られたが、悠介達と大使達は意図的に見なかつた事にした。彼は彼なりにそつち方面からの情報を仕入れてくるので、割かし公然と黙認されていたりする。

姉妹にあてがわれた部屋で、『姉』のラサナーシャは窓から街並みを眺めている。『妹』ラーザツシアに声を掛けた。

「シア、お買い物に行きましょう」

「え？ なにか買うの？」

「あなたの着る服を」

「ああ……そつか、そうよね。うん、行くっ」

あの夜、混乱の中から殆ど着の身着のまま出て来たラーザツシアには、生活に必要な衣類などの荷物が無い。というか、彼女は初めから個人的な所有物をあまり持っていないのだ。任務の度に、必要な物は申請すれば支給されていた。

街の店で自分の物を買う。そんな当たり前の事ですら、任務の中でしか経験が無い。何か気に入ったモノがあつても、次の任務で『別人』になる場合の邪魔になる為、特定のモノを所有する事は許さ

れなかった。

当然、給料のお金も所属する部署の経理担当官から、その時毎に必要な分を貰って薬品の購入などに当てていたのだ。

「……この買い物って、経費とか出ないわよね……？」

「任務じゃありませんから、私の財布から出しておきますわ」

「お、お世話になるわね……」

「うふふっ 気にしないで下さい」

港街の大通りに並ぶ露店を覗きながら、仲睦まじげに歩く美人姉妹。何せ素材は現役の唱姫と籠絡作業員である。二人と擦れ違う人々は老若男女問わず、誰もが振り返ってしまう。

後日、この時の話を聞いたフォンケが『荷物持ちやりたかった！』と、早々に街唱の所へ出掛けた事を激しく後悔したそうなの。

『 こちら西大通り前。例の作業員を見つけました 』

『 よし、接触はまだだ。感付かれないよう尾行して、ターゲット

トの配置を確認せよ 』

53話・傳き蜜蜂の詩【前編】（後書き）

人物表の更新はもちよつと後で。

54話：傳き蜜蜂の詩【中編】

「これなんか動き易いし、意外と温かいね」

「髪飾りも一緒に身につければ、映えると思いますよ？」

買い物から戻ったラサナーシャとラーザツシアの二人は、部屋で試着してみたり小物との組み合わせを試したりと、戦利品の整理をしながら他愛無い雑談を交わしていた。

任務と関係なく、自分の好みでお洒落をするという経験が殆ど無かったラーザツシアは、大通りに並ぶ露店での買い物や、こうして着飾る行為を楽しんでいると感じていた。だが不意に、楽しい気分になる事で不安も感じ始める。

「どうかしましたか？」

「……うん、ちょっとね」

サンクアディエツトに着いてからの事を考えると、要人籠絡工作員であるという自身の抱える問題は、ラサナーシャの現地フォンクランクでの上司である伯爵の存在もあり、誤魔化しようが無い。

宮殿関係者の中には元からノスセントスのシンパである者以外に、ラーザツシアが籠絡に関与した貴族も少なからず居る。籠絡と言っても、その手段は今回の悠介に仕掛けたような甘いモノばかりではなく、詐欺のようなエゲつないやり方もあるのだ。

『うつ……ヒック、ヒック』

『ハッ わ、私は一体何を……』

『困りますなあ 殿、いくら大国フオンクランクの宮殿に席を置く御仁とはいえ、酒に酔われてこのような無体をなされては』

『ま、待ってくれっ 本当に覚えておらんだ！ 国に抗議するのは』

商談などで個人的に訪れた宮殿関係者を薬で酩酊させ、狼藉を働かれた給仕を装う事で相手の弱みを作ってそれを握る。

そういった手段でノスセンテスに協力せざるを得ない状況に追い込まれた経験を持つ被害者から、ラーザツシアの事に関して追求を受ければ、姉妹として通しているラサナーシャも白を切る訳にはいくまい。

「それを思うとね……」

このままノスセンテスが滅んだ場合、伯爵が匿ってくれるとも思えず、場合によっては保身の為に抹殺しようと動く可能性もある。

「ここまで来ちゃった以上はもう、今更引き返せないし」

「そうですね……なるべく顔を見られないようにしながら、どこか近くの街に身を隠すくらいはした方がいいのかも」

一旦はサンクアディエットに入る事になるが、ラサナーシャの家に滞在する間、人に見られないよう気をつけて生活を続けつつ、折を見て郊外の街にでもこっそり移り住めば、宮殿関係者に見咎められる危険も減らせる。

この夜、晩くまで相談し合った二人は、ラーザツシアの身の振り

方について、イザとなつたら悠介に全て打ち明けた上で頼み込み、ヴォレット姫様の恩赦に縋ろうかという、かなり突っ込んだ内容にまで話が及んだ。

「まあ、幾ら人の良さそうなユースケだって、そこまでは無理ですよ」

「そう……でしょうか？」

「だって彼、フォンクランクの英雄なのよ？」

軍人に人情を期待しちゃダメよと、ラーザツシアは根が善人っぽい年上の部下に対して闇神隊長への過剰な期待を窘めるのだった。

闇神隊と大使一行が港街で過ごしている頃、サンクアディエットの囚人収容施設をラサナーシャの上司にあたる伯爵が、重要な取り調べを口実に訪れていた。人払いをした尋問室にて、伯爵は先日投獄された目の前に座る赤髪の男にノスセンテスの事態を伝える。

「ほお、あのパトルティアノーストがいとも簡単に」

「まだ神議会の半数以上が残った手勢と共に動いている、その内こちらにも何らかの接触がある筈だ」

伯爵は後ろ盾のノスセンテスが無くなった訳ではないので、取り調べで早まった発言は控えるよう釘を刺しに来たのだ。その意図を見抜いたヴォーメストは、自分もノスセンテスに滅んで貰っては困

るからと、上手くはぐらかして時間稼ぎをする事を仄めかした。

「ガゼツタかブルガーデンのイザツプナー派残党、或いは何処かの第三勢力が存在するように装えば、暫らくは凌げる」

「ふむ、なるほど。神議会にはその間にフォンクランクで亡命政府を立てて貰い、その勢力の存在を何処かにでっち上げるのだな」

伯爵はヴォーメストが示した策に頷くと、他の密偵達にも伝えておくと行って収容所を後にした。

「さて……君、取調官を呼んでくれないか」

「……なんだと？」

伯爵が帰った事を確認したヴォーメストは、彼を独房に移す為に入ってきた監視の衛士にそう要請すると、尋問室の机に居座った。

怪訝に思いながらも重要な証言をしたいと言うヴォーメストに、監視の衛士は取調官を呼びに行く。

暫らく後、尋問室にやってきた取調官と衛士数人に対して、ヴォーメストはこう切り出した。

「襲撃の指示を出したのは、ノスセンテスの神議会だ」

パトルティアノーストの陥落を知らされたヴォーメストは無技の村襲撃事件の黒幕がノスセンテス神議会の指示であった事を暴露。ブルガーデンから落ち延びて来た自分達を受け入れる条件として、特詮隊の工作部隊に編入されたのだと訴える。

実行部隊の指揮を執らされてはいたが、部隊の移動や管理にしか権限は与えられておらず、実際の指揮権は港街で討ち死にした副長

が握っており、元ブルガーデン精鋭団の自分達は任務中も常に監視されていたと説明した。

工作部隊の副長が監査役を担っていたのは事実であるし、元精鋭団の部下はもう残っていないのでこの偽称がバレる事はない。ヴォーメストはそう思っていた。

「それはつまり、君たちの行動は神議会によって受け入れを条件に強いられたモノであると、という意味かな？」

「……そうだ。貴殿やフオンクランクの人々に多大なる迷惑を掛けてしまった事は御詫びする」

証言の概要を纏めて問い質しながら尋問室に入って来るヒヴォデイルの姿を認めたヴォーメストは、心証の向上を狙って殊勝な態度を示し、信用と自身の利用価値を吊り上げる為の生贄を捧げる。

『何故、急にこれらの証言を行ったのか』という疑問に答える形で、情報というカードを切っていく。

「先程、私の取り調べに来た伯爵だが、彼は神議会と繋がりを持つ者なのだ」

ノスセンテスの息が掛かった密偵は他にも数人確認しており、自分も収容所にいる間も常に彼等から見張られていた事。神議会の暗躍と陰謀を知る自分は命を狙われており、彼等が何時自分を消しに掛かって来るかと警戒していた事などを話す。

「パトルティアノーストの陥落で彼等も動揺していたのかもしれないな」

伯爵は神議会が健在である事を挙げてまだノスセンテスの密偵に

影響力がある事を仄めかし『何も喋るな』と釘を刺しに来ていたのだと語るヴォーメスト。

「真実を白日の下に曝すなら、今がその機会であると判断した次第だ」

「なるほどね、筋は通っている」

そう言つて頷くヒヴォデイルの反応に、ヴォーメストは内心でほくそ笑んだ。だが『しかし』と言葉を続けたヒヴォデイルは、尋問室の扉を開いて外で待たせていた人物を中へと招き入れた。ヴォーメストの表情が僅かに強張る。

「この二人は、僕の家が所有する村を襲つた集団の一味だった者だ」
「……」

二人の若い男。一人は片腕が肘の所から無くなっており、もう一人は腰が、というより背中が変な曲がり方をしている。闇神隊と無技の戦士に葬られた筈の元部下達だ。

「おおっ お前たち、生きていたのか！ 死んだと聞かされていたぞ」

「……」

ヴォーメストは二人の元部下に対して咄嗟に火の団時代の目配せを行い、自分に合わせるよう合図を送る。

そうしてあの夜、ヒヴォデイルの追撃に出た三人にも監視の目が光っており、手を抜くような事があれば連帯責任で仲間全員の生命が危つくなる立場にあったという事情をでっちあげる。

「彼はああ言ってるが、君たち、間違いないかね？」

「……いいえ」

「団長の言ってる事は……全て出まかせです」

二人の元部下はヴォーメストの目配せに従う事は無かった。実は既にこの二人からはある程度の情報が聞き出されており、港街での一件と今回のパトルティアノースト陥落で彼等の所業は殆ど把握されていたのだ。

「この二人は、君にそそのかされてブルガーデンを脱出後、ノスセントスに亡命した事を認めたまよ」

「いや、それは……」

「それだけじゃない、君は港街の戦闘で部下を囷に一人で逃げ出すうとしていたようだが」

港街から引き揚げる際、戦闘の犠牲者を運ぶ馬車に衛士の遺体を乗せる作業が進められる中、武装集団の死体はそのまま近くの森などに埋葬する為、街の住民も総出で手伝って一箇所に集められた。

武装集団の死体はほぼ焼け落ちた大衆宿に集中していたのだが、宿から離れた民家の裏で二人分の不自然な死体が発見された。

宿の地下に近くの民家下まで掘られた抜け穴が見つかった事で、その二人は抜け穴を通して脱出を試みたのだらうという事までは推察出来る。しかし、戦闘中に彼等を見掛けた衛士はいない。

一人は首を落とされ、もう一人は胸を一突きにされて内側から焼かれていた。胸を一突きにされた死体の傷は、剣で付けられた強化系炎技による刺創だという事が判明している。

「僕達フオンクラク衛士の規定装備は槍なんだ、君は剣を使っていたね」

「……」

ヒヴォデイルはその死体を持ち帰ってシンハの猛攻から生き残った二人の元火の団団員に面通しを行い、同僚であった事を確認していた。

ヴォーメストを捕らえた時の状況を教えられ、そのヴォーメストの手に掛かって死んだと思しき同僚の死体を前に、生き残った元火の団団員の二人は、ブルガーデンを脱出してからの行動を詳細に自供したのだ。

ノスセンテスで特詮隊入りする所までヴォーメスト団長とは常に行動を共にしていたので、自分達の知らない所で裏取引があったとは思えない。彼等はそう証言した。

「さらに、先日こんなモノが宮殿に届いた」

「……まだ何かあるのか」

ヒヴォデイルがスツと懐から取り出し、掲げて見せたのは、ガゼツタの印が押された書簡だった。

パトルティアノースト陥落の報があった翌日、神議会が所有する伝書鳥にてノスセンテスから届けられたガゼツタ王からの書簡には神議会が行ったフオンクラクに対する謀の詳細、潜入させている密偵の詳細、繋がりのある貴族の詳細などが記されていた。

その中にはヴォーメスト部隊設立の内容に触れたモノもあり、ガゼツタとフオンクラクを争わせる無技の村襲撃計画を最初に持ち掛けたのは、ヴォーメストであった事も書かれている。

自ら手柄に繋がるチャンスを作り、それを成し得て申し上がる足掛かりとするヴォーメストの命運も、これで完全に尽きた。

「さて、これでノスセンテスの情報に関する君の利用価値はなくなつた訳だが……何か言う事はあるかね？」
「……………」

ヴォーメストは短く息を吐いて沈黙した。

パトルティアノースト陥落から五日目。港街に滞在する闇神隊は、適当に気を引き締めながら迎えの馬車隊が到着するまでの数日間をノンビリと過ごしていた。

「お、面白い物か？」

「うん、今日は私が夕飯の魚料理を担当したげるね」

「そりゃ楽しみだな」

裏で不安を抱えつつも、すっかり闇神隊の和やかな空気に溶け込み、常に自然体で接するようになったラーザシアは、闇神隊メンバーの皆とも良好な関係を築いている。彼女自身、ありのままの自分で居られる事に満たされるような気持ちを感じていた。

「ミツバチ」

「え？」

その日、一人で買い物に出掛けたラーザツシアは、不意に自分のコードネームを呼ばれて振り返る。路地前に佇む小さな女の子が、愛らしい笑顔を浮かべながらこちらをじっと見つめていた。女の子は童話のような歌を唄う。

「花から花へ、甘い蜜を探しましょう」

「……その身に、毒を忍ばせて」

「うふふっ やっぱりあなたがミツバチね？」

「あんた……特詮隊の？」

エルフヨナと名乗ったその女の子は、ラーザツシアに小さな包みを手渡しながら路地へと誘う。ラーザツシアには包みの中身が何らかの毒薬である事が直ぐに分かった。

てくてくと子供らしい動作で歩くエルフヨナの後に続いて、路地を進むこと暫らく。通りの喧騒が聞こえなくなる辺りまで来た所で、路地の影から冷たい気配を纏った男の声がノスセンチス諜報輻絡工員『ミツバチ』に指令を申し渡す。

「神議会からの指令を伝える」

「っー」

闇神隊、及びフォンクランク大使一行を無力化し、工作部隊の襲撃を援護せよ

「どう見る？」

「本人は脱走したつもりだったのかもしれないね」

ラーザツシアの姿が表通りの喧騒と人込みに消えるのを見送りながら、工作部隊の隊長は部下に意見を求める。指令を与えた時の反応を見るに、任務の延長で闇神隊と共に行動していた訳ではないらしい事が感じ取れた。もし、情など移っていた場合は厄介だ。

「裏切ると思うか？」

「あの女は確か、エルフヨナと同じ特待訓練を受けている筈ですから、裏切れないでしょう」

部下はそう言って、傍らで愛らしい笑顔を振りまいている女兒に視線を向けた。ノスセンテスの諜報部が新たに設立を模索し、研究訓練を行っていた『暗殺児部隊』。エルフヨナは今回、特詮隊に試験配属された試作暗殺児である。

無垢な笑顔も、愛らしい仕草も、全て仕込まれたモノであり、指揮官の命令には絶対服従、与えられた任務を忠実にこなす。意図的に情操教育が行われておらず、待機中の時は人形のように大人しい。自律的な行動が取れないよう教育されているのだ。

成長して情緒の発育が見られるラーザツシアも、心の奥深くに打ち込まれた楔のような服従教育の呪縛からは逃れられないだろう。そう語った部下の見解に、工作部隊の隊長は頷いて納得を示した。

買い物を買わせて宿に帰って来たラーザツシアは、闇神隊の襲撃を補佐するよう指令が下った事をラサナーシャに打ち明けた。

「ちえっ あゝあ、やっぱり今更普通の人生送ろうなんて虫が良すぎたかあ」

「シア……」

「あんたも覚悟決めなよ？」

今夜決行なので夕飯を終えたら部屋から出歩かないようにと注意を促すラーザツシアに、ラサナーシャは考え直すよう説得する。例え神議会が健在でも、現在のノスセンテスはガゼツタの占領下であり、自分達は今フォンクランク領の街に居るのだ。

祖国に忠誠を誓っているという理由からであれば、その信条は尊重出来る。が、しかし、ラーザツシアが指令に従おうとしているのは、忠誠心からではなく不安からだと言いつつ指摘するラサナーシャ。

ちくりと、針で刺された様に顔を顰めて目を逸らしたラーザツシアは、黙って背を向ける。

「ね、お願いシア。よく考え直して、ユースケ様に全て話してみましよう？」

「……ごめんね、ラサ」

「！っ んん……っ」

振り返ったラーザツシアは、背を向けている間に用意した半透明

の黄色い物体、ゼリー状に固められた蜂蜜の粒を素早く口に含むと、ラサナーシャの唇を奪い、舌で喉の奥へと押し込んだ。そのままベツドに押し倒して組み伏せる。

その行動の意味を理解したラサナーシャは、悠介達に危険を知らせなくてはと身を擦って振り解こうとするが、格闘訓練も受けているラーザツシアに抑え込まれたラサナーシャにはどうする事も出来なかった。

やがて、蜂蜜の粒に仕込まれた眠り薬は、ラサナーシャの意識を深い眠りへと落とす。

「ホントに、ごめんね……」

そつと、ラサナーシャの頬を撫でて呟いたラーザツシアは、エルフヨナに渡された包みを懐に忍ばせて部屋を出た。

「おおー美味そうだな」

「美味そうじゃなくて、美味しいのよ」

「はははっ　こりゃ一本取られたかな」

夕食の席では何時も通り、賑やかな雰囲気の中で皆が集まって談笑しながら料理を平らげていく。ラサナーシャは体調を崩したので早めに休んでいるという説明は、彼女の患う病気の事もあってか、心配しつつも皆納得していた。

「それじゃあ、私はお姉ちゃんの看病があるから」

「おう、何かあったら呼んでくれ」

「シアちゃんの料理、美味かったよー」

「こ、こんど……調味料の分量、教えて下さいね」

部屋に戻って来たレーザーシアは、ベッドで眠るラサナーシャを横目に出掛ける準備を整える。遅効性の痺れ薬を混ぜた料理は、残さず綺麗に平らげられた。腕によりを掛けて作った料理を綺麗に食べて貰うと、それが任務であっても嬉しく感じるモノだ。

しかし、今回レーザーシアの胸中に渦巻くモノは、料理を褒められた喜びでも、任務成功の達成感でもなく、言い表すことの出来ない恐怖と焦燥感。例えるなら、大きく口を開けた真つ黒な穴に向かって落ちていくような虚無感だった。

「……報告に、行かないと……」

何処かボンヤリとした足取りのレーザーシアは、ふらふらと宿の裏口から通りに出ると、夜の港街を路地沿いに歩き出した。

55話：傳き蜜蜂の詩【後編】

特詮隊がラーザツシアと接触する少し前

ノスセンテスの北東、森を通る狭い道程を護衛騎士団の馬車隊が駆け抜ける。

「ガゼツタ軍はまだ追って来ているか？」

「ハツ 神技の迎撃を恐れてか、距離を置いてますが、未だ追跡は諦めていないようです」

パトルティアノースト陥落の日から数日の間に、各地へ散らばる戦力を再集結させた彼等は正式なノスセンテス政府勢力の一団として、神議会と共にフォンクランクを目指し、ブルガーデン領を横断するルートを進んでいた。

途中、ガゼツタ軍の追撃隊に発見されて追跡を受けているが、ガゼツタは以前パウラの長城前で行われた一戦に干渉した事で、ブルガーデンから睨まれている筈だ。国境を越えてしまえば彼等も諦めるだろうと、ブルガーデンへの越境を急ぐ。

「前方に武装した人影多数！ 軍旗確認、ブルガーデン正規軍です！」

「我々に停止命令を発しています！」

「救援要請を返せ、ガゼツタの追撃を受けていると伝える」

事前の通告無しに領土を横断する非礼は詫びつつ、今は非常時である事情を汲んでもらい、ブルガーデン軍の援護を受けてこのままフォンクランク領まで突っ切る予定でいたノスセンテス政府勢力は、救援要請に対するブルガーデン側からの返答に愕然とする。

「て、停止命令に応じない場合、攻撃すると言ってますが……」

「なんだって？ 連中の指揮を執ってる奴は状況が見えていないのか」

神技人が支配する世界の転覆を狙う無技の国ガゼツタは、神技人国家共通の敵である筈だ。このままノスセンテスの領土が全てガゼツタに渡れば、カルツイオの勢力図は一気に塗り換わってしまう。

一時期は凄まじい勢いの発展をみせたとはいえ、ブルガーデンは大国と呼ぶにはまだまだの新興国。ノスセンテスという防波堤無しにガゼツタと国境を隣する事が如何に危険な事かは、素人にも分かる。

ノスセンテスの騎士団長はそう言って苛立ちを露わにするが、今の状況でブルガーデン軍とやりあう訳にも行かない。背後から迫るガゼツタの追撃隊を気にしつつも、神議會を乗せたノスセンテス政府勢力の馬車隊はブルガーデン軍の手前で全軍停車した。

すぐさま馬車の周囲を固めるノスセンテスの護衛騎士達と、彼等を半円形に包囲するブルガーデン精鋭団。そこへやって来たガゼツタの追跡隊は、何故かブルガーデン精鋭団と向かい合うようにノスセンテス政府勢力の馬車隊を包囲する。

当初、ノスセンテス政府勢力の騎士達は、自分達を中心にブルガーデンとガゼッタの両軍が睨み合っているのかと見ていたが、双方の代表が歩み出て一言一言、言葉を交わした様子に、最初から示し合わせていたような雰囲気を感じ取った。
そして、その推察は正しかった。

「武装解除っ？」

「まさか……ブルガーデンとガゼッタが組んでいたとは」

「信じられん……」

「いや、そもそも本当にあれはブルガーデンの精鋭団なのか？」

両軍と交戦してでもフォクランク領まで突っ切るべきかという意見も囁かれたが、ここまで完全に包囲されてしまっただけは神議會を護りながらの突破は困難であるという判断から、一時ブルガーデン側による身柄の拘束を受け入れようという結論に至った。

神議會の中等神民議長等はブルガーデン軍の指揮官に遺憾の意を交えながら投降に心じる事を伝えると、ノスセンテスの統治者的立場にある者として相応の扱いを要求したのだが

「貴殿達は一つ考え違いをしているようだ」

「……なんだと？」

神議會の待遇要求を突っぱねたブルガーデン軍の指揮官は、厳しい態度を崩さず言葉を続ける。

「我々は国家犯罪の首謀者を捕らえに来たのであって、交渉に来た訳ではない」

「それは、どういう意味か！」

「一軍の将風情が、立場も弁えておらんとは……」

「我等をノスセンテス神議會と知つての愚弄なれば、そなた等の女王へ直接抗議が行くモノと心得よ」

威丈高に言い放つ神議會の面々に対し、指揮官はリシャレウス女王直々の命令によつて神議會の身柄拘束に乗り出して来た事を説明する。まさか女王の指示によるモノだとは思つていなかった神議會の議長達は『何故ブルガーデンの女王が我等を！』と混乱した様子で狼狽を見せた。

「一体何を考えておるのだ！」

「よもやガゼツタの王と何か裏取引があつたのでは？」

「では、パウラまで御同行願う。我々の領内で暗躍した特詮隊の偽装工作について追求があるので、そのつもりで居られよ」

「……っ！」

フォンクランク衛士に変装してガゼツタの調査隊を急襲した特詮隊の極秘作戦に触れられ、神民議長達は表情を引き攣らせた。

ブルガーデン領内で活動する特詮隊の情報を得たりシヤレウス女王は、彼等が一度ノスセンテスの政府勢力と合流する為に領外へ出るの見計らつて精鋭団を出動させ、再び領内にやつて来る所を国境で待ち構えていたのだ。

情報を伝えたのはレイフォルドで、指示を出したのはエスヴォブス王だつたりする。フォンクランク軍を騙ったノスセンテスの工作部隊を捕らえさせる事でブルガーデンに花を持たせて、フォンクラ

ンク国民のブルガーデンに対する不信と猜疑を取り除く狙い。

それによってブルガーデンとの親密さを深め、同時にガゼッタへの牽制とする。シン八王からフォンクランクに伝えられた情報を直ちに選り分け、即日有効利用したエスヴォブス王の采配であった。

が、実はリシャレウス女王の所にはレイフォルドが伝えるよりも先に、ガゼッタの使者から同じ情報が届けられていた。

ヴォーメスト部隊に関する無技の村襲撃計画などの資料を書簡でフォンクランクに送る一方、ブルガーデンには直接使者を向かわせ、重要な情報を渡す見返りに捕獲したノスセンテス政府勢力から得た情報を優先的に流して貰うよう持ちかけていたのだ。

リシャレウスもその辺りは理解しており、シン八とエスヴォブス王、両方の顔を立てる立ち回りをした。ガゼッタ軍の動きに呼応して神議会を拘束、エスヴォブス王には情報提供の感謝と、拘束した神議会の引渡しで応える。

シン八が仕掛けたこの策は、早速その成果をもたらせた。

「闇神隊が狙われている？」

「ええ、どうやら特詮隊は既にフォンクランク領の港街に潜伏しているようでした。」

ノスセンテス政府勢力が拘束された際、神議会を護衛していた騎士達の中に、一刻も早くフォンクランクに伝えて欲しい事があると告発を訴えてきた者がいたという。

シン八は直ちにこの情報をフォンクランクへ伝えるよう指示を出した。ブルガーデンとガゼッタから恩を売る形で、ガゼッタはフォンクランクに自国、白族帝国の復国を認めさせる駆引きの一端とし

て、ガゼッタとブルガーデン双方から緊急情報が送られた。

急報を受けたフォンクランクは、闇神隊を迎えに出ている馬車隊を追う形でヴォルアンス宮殿から救援の衛士団が緊急出撃し、風技の伝達でも危険を知らせるよう対応が取られる。

ブルガーデンとガゼッタから緊急情報が届いた事に、エスヴォブス王は内心で『今回はガゼッタの王に先手を取られたな……』と、シンハの狙いを読みきっていた。今後はガゼッタの動向だけでなく、ブルガーデンとの接近にも気を配らなくてはならない。

「しかし、闇神隊の方は間に合うだろうか」

王の私室から月鏡湖の方角を見やったエスヴォブス王は、次いで愛娘が登っているであろう区画門広場の展望塔に視線を向けた。

悠介は隊服その他に付与された様々な補助効果により、常に快適な生命維持環境に身を置いている。

睡眠も短い時間で十分な回復を得られる為、早めに横になって深夜に起き出し、夜明けまでの静かな時間にカスタマイズ能力の開発に勤しむのが毎日のサイクルであり、それは旅先にあっても変わりは無い。

この日、悠介はラサナーシャが体調を崩したという事で、効果の高い治癒薬の精製に力を注いでいた。ノスセンテスで質の良い素材

を確保出来たお陰で『超回復剤』（悠介命名）の開発は順調に進んでいる。

「小腹が空いたな」

新陳代謝が良いせいかな数時間も作業をこなせば、あまり身体を動かさずとも空腹を覚える。何か夜食になるモノを貰おうと部屋を出た悠介は、静まり返った深夜の宿内に何となく違和感があるような気がした。

「……………今日は何時もより静かなのか」

闇神隊一行が宿泊している部屋の周辺には一般客を泊めておらず空き部屋が続いているが、それでも普段はフォンケやヴォーマル達の話し声なり、大使達の談笑なりが晩くまで聞かれていたものだ。

「ラーザツシア達姉妹に配慮してるのかもな」

そう思い直した悠介は、厨房に向かおうかと廊下に踏み出した所で

「たい……………ちょ……………」

「うおっ」

搾り出すような掠れた女の声が聞こえて足を停めた。暫らくその態勢で耳を澄ませていると、廊下の壁に並ぶ部屋の扉のうち、三つ程先にある扉の一つがギギギイと軋みを鳴らしながらゆっくりと開かれた。

「た……………たい……………ちょ……………」

「っ！ エイシャ？」

扉にしがみ付くような態勢でふらふらと現れたのは、寝衣姿のエイシャだった。膝をガクガクさせながら今にも倒れそうな様子の彼女に駆け寄った悠介は、身体を支えながら体調を気に掛ける。

「おいっ どうした、大丈夫か」

「か、からだか……なにかの……どくぶつ……」

「ちょっと待て、ゆっくり座って……コレ飲んでみ」

「んく……ん……」

青褪めた表情で手足を小刻みに震わせているエイシャをゆっくり座らせると、今し方出来上がったばかりの試作超回復剤を飲ませてみた。すると見る見る血色が良くなり、身体の震えも治まっていく。

「痺れ薬だって？」

「はい、恐らく水技で調整されたモノだと思います」

身体から痺れの取れたエイシャに事情を聞きながら、悠介は一度部屋に戻ってエイシャに飲ませた薬と同じものを複数持ち出すと、他の闇神隊メンバーや大使達の部屋を確認して回る。

エイシャはベッドで夜の読書中に身体の調子がおかしくなり始めた事に気付き、自らの水技で持って回復を試みたが全身に浸透した痺れには殆ど効果がなかった。

どうにか集中して腕だけ動かし、ベッド脇においてあった回復の

指輪を装備して補助効果を得ると『隊長に知らせれば何とかなる』の一心で部屋を這い出して来たのだ。

「そつち側から順番に頼む」

「はい！」

人数分の薬瓶を渡し、エイシャと手分けして一部屋ずつ訪ねてみると、大使達も含めて皆同じ様に動けなくなっていた。

「つと、ここはイフヨカの部屋か。イフヨカ、大丈夫か？」

「……………た……たい……よ……たす……け……」

女性隊員の部屋に入る事を一瞬躊躇した悠介だったが、イフヨカの助けを求める声にエイシャを待たず部屋へと踏み込む。イフヨカは丁度これからベッドに入ろうかとしていた時に身体が痺れ始めたらしく、うつ伏せ状態で床に倒れていた。

その姿を認めた悠介はすぐさま駆け寄って抱き起こすと、特に怪我をしている様子も無い事に安堵の息を吐きながら超回復剤の瓶口をイフヨカの唇にあてがう。

「ほれ、コレを飲めば治るぞ」

「……………あ……………ち……………はず……………か……………」

部屋の明かりが消えていて暗かった為、悠介は気付かなかったが、イフヨカは薄着の寝衣姿を見られたダケでも恥ずかしい気持ちに加えて、赤ん坊が哺乳を受けるような格好で腕に抱かれて薬を飲まされるという状況に、羞恥で顔を真っ赤にしていた。

一通り救助活動を済ませると、全員が悠介の部屋に集まって現状

報告を行い、状況確認を始める。その中で、イフヨカは身体が痺れている時にサンクアディエットから発せられたと思しき緊急連絡を、微かにだが捉えていた事を話した。

「闇神隊を狙うモノありか……」

「確かに、この事態は我々が狙われたと言える」

「身体の異常は痺れ薬で確定か？」

「ええ、効果と効きははじめの感覚からして、遅効性のモノかと思われます」

薬を風に乗せて対象に吸わせるような風技が使われた形跡は無いと、フヨンケとイフヨカが証言する。では何時接取したのかという話になり、各々が何時何処で何を口にしたのかを照らし合わせていく。

「あつしは夕食後、部屋に戻ってから何も口にしてやせんぜ」

「俺も自分で持ち込んだ酒くらいしか飲んでねーっすね」

「我々も……今夜は外で飲もうかという話をしている時に倒れたので」

「つまり、接取したのは夕食の時って事か」

夕食の調理を担当したのは、宿の料理人とラーザツシアだ。

「ラーザツシアが居ない？」

「はい、ラサナーシャさんはベッドで休んでいるのを確認しましたが……」

サンクアディエツトからの緊急連絡は、特詮隊の工作部隊もどうか把握出来る程度の精度でだが傍受していた。詳しい内容までは読み取れなかったものの闇神隊の警護を指示する伝達内容に、工作部隊は急遽作戦を変更。

先に港街の自警団組織を急襲して動きを封じる活動を行った彼等は、予定よりも少し遅れて闇神隊の襲撃に向かっていた。

「薬の効果はまだ続いているか？」

「問題ありません、アレは特別製ですからね」

朝まで身動き取れない筈ですよと答えた部下は『きちんと接取されていれば』と付け加えて、部隊の後ろをついて来る籠絡ミッパチ工作員と暗殺児エルフォナに視線を向ける。

任務の完了報告に来たラーザツシアは明らかに様子がおかしかった。やはりパトルティアノースト陥落に乗じて脱走したつもりだったのであると事と、闇神隊の者、籠絡対象に情が移っている事も考えられる。

籠絡工作員が籠絡対象に情を持ってしまった場合は、徹底的な教育を施す事で二度とそういう間違いを犯さないよう指導されるのだが、本拠を失ってしまった現状では適切な施設に送る事も出来ない。

『任務の後で我々が教育してやるか……』

部下達にも良い慰労になるだろうと、工作部隊の隊長はラーザツシアの今後の使い道について方針を定めた。

窓の明かりは幾つか灯っているが、普段と比べて静まり返った宿に裏口から侵入する工作部隊。

闇神隊一行が宿泊している一角には一般客もいないので、速やかに目的の部屋まで移動して暗殺を実行した後、適当に騒ぎを演出することでガゼツ夕兵に変装した姿を一般客や野次馬に曝しつつ撤収するという作戦だ。

「この上だ。一斑は右、二班は左、残りは大使を始末して来い」

工作部隊が目的地の二階へと繋がる中央階段前広間に差し掛かった時だった。

「うわっ」

「な、なんだ！」

「床が……っ」

階段を上がるうと踏み出した先頭の者が、突然足元に開いた穴に消えた。思わず踏み止まった後続者も、何故か斜めに傾く床板に足を滑らせて落とし穴に落ちていく。この宿は普通の一般宿であり、事前の調査ではこんな仕掛けは無かった。

「ちっ 待ち伏せか……！ 作戦失敗、直ちに撤退する」

構造物を自在に操ると噂に聞く闇神隊長の特異な神技を使った仕掛けである事は明白だ。次々と罠に嵌る部下達の救出を無事な者に指示しながら、工作部隊の隊長は後ろで立ち尽くしている籠絡工作^{ミッパ}

員を振り返りざまに斬りつけた。

「きゃっ」

「……伊達に作業員はやっていないか」

その一閃は彼女の服を僅かばかり切り裂くに止まった。殆ど無意識に避けてその場に尻餅をついたラーザツシアは、驚きと戸惑いの表情で工作部隊の隊長を見上げる。

「ど、どうして……」

「裏切り者には死を、そう習わなかったか？」

「ちが……裏切ってなんて……！」

「問答無用」

黒く塗られた暗殺仕様のナイフが振り上げられ、その切っ先がラーザツシアに向けられる。基本的に命のやりとりなどは専門外であるラーザツシアは、工作部隊長の殺気にてらられて震え上がった。ずるずると床を後退って逃れようとするラーザツシアだったが、工作部隊長は一步踏み出しただけで獲物を射程内に収める。

「闇神隊には貴様の死体をくれてやるとしよう、精々可愛がって貰うのだな」

「い、いや……」

「俺は生きてる女性の方がいいな」

割って入るような雰囲気で響いた若い男の声と共に、工作部隊長の視界が引っ繰り返った。

「っ！」

上下逆さまになった視界の先、中央階段の上でこちらを指差しながら佇む黒服の男を認めた工作部隊長は、暗殺対象ユースケが出て来た事をチャンスと捉えて攻撃の指示を出そうと考えた。

瞬時に自身の体勢を把握し、足に縄などがついていない事を確認すると、身体を捻って両手両足で床に着地する。どんな仕掛けで空中に投げられたのか、或いはそういう系統の神技を使う者が居るのか、闇部隊長の周囲に目を配ろうとして

「なにっ！」

彼の視界はまたもや逆さまになっていた。今度は対応出来ず、背中から床に打ち付けられる。が、次の瞬間、彼の視界には床が迫っていた。咄嗟に手足を伸ばして衝撃に備え、膝を打ちながらもまともに衝突する事は免れた。

と思ったら一瞬の浮遊感と共に、今度は天井が遠退いて行く。そして背中に衝撃。次の瞬間、床に向かって落ちていた。

「な、なんだこれは……っ　何が起きている！　俺は何をされているんだ」

その光景を、レーザーシアは呆然と見つめていた。彼女だけではない。階段の上からカスタマイズ攻撃を行っている悠介の傍らに並び闇部隊メンバーや大使達も、畏に囚われて動きを封じられた工作部隊の隊員達も、皆が呆然としながらも恐怖を覚える光景。

工作部隊長は天井から床に落下したと思っただけまた天井に現れて落下、床に落ちた瞬間にまた天井に現れて落下する。

悠介はカスタマイズで床板と天井板を入れ替える事で、延々と落下し続ける『エンドレスフォール』（悠介命名）なる攻撃を放っていた。ダンッ　ダンッ　ダンッ　という規則正しい落下音が鳴り響き続ける。

この異様な光景は、ほんの数分の出来事だったが、目撃した者達は数時間にも感じられた。

延々と落下させられ続けて目を回した工作部長は前後不覚状態でアツサリ御用となり、その部下達も『もはやこれまで』と観念したらしく揃って武器を捨てた。工作部隊全員の拘束が確認された程度その時

「ユースケは無事か！」

街道を約十二時間ほど馬をとつかえひっかえしながら、ぶつとうしで駆け抜けてきた衛士団が港街に到着。ヨレヨレながらも覇気を感じさせる勢いで宿に踏み込んで来たのだ。

「ようヒヴォデイル、元気か」

「……君は実に元気そうだね」

衛士団を率いて来たのはヒヴォデイルだった。前回のヴォーメスト捕獲等で経験を買われ、宮殿衛士の指揮で手柄が立てられるという事もあり、更に闇神隊に恩を売れる良い機会でもあるとして、上の者達も納得の理由で送り出した。

元々ヒヴォデイル本人にそんな裏心は無かったのだが、ここまで見事に事態の決着済みをつき付けられると、苦労して強行軍でやって来ただけに拗ねたくもなる。

「拗ねるなよう」

「す、拗ねてなどいないっ」

闇神隊長に宥められている臨時衛士団長殿を見て和む団員達。何時もの『闇神隊の空気』が場を満たす。一連の流れにより、神議会、ノスセンテスの残党による陰謀は阻止されたのだった。

「大丈夫か？」

「あ……」

悠介は座り込んでいるラーザツシアの前にしゃがんで手を差し伸べた。

「わ、私……」

「とりあえずさ……話は後で聞くから、今日はもう休んだ方がいい」

痺れ薬を盛ったのは彼女であるという結論はもう出ている。工作部長の言葉から察するに、ラーザツシアはこういう仕事に就いていたらしい事は分かった。

ラサナーシャが妹の仕事について何処まで知っているのかという問題もあるが、ラーザツシアの事は帰ってから決めようという話で闇神隊の中では一先ず決着が付いている。

「シア」

そこへ、眠り薬の効果が切れて目を覚ましたラサナーシャが起き出して来た。全員の目がそちらに向けられ、気を取られた瞬間、音

も無く広間に入り込んで来る小さな影。その存在に気付いたのは、床にペタン座りしていたラーザツシアだけだった。

毒蜂のコードネームを授けられる予定の小さな女の子が、ストロイの様な筒状の細い管を自らの口にあてがう。

「ユースケ！」

管が向けられている先を確認したラーザツシアが床を蹴る。悠介に向かつて放たれたエルフヨナの特種な毒針は、身を挺して庇ったラーザツシアに突き刺さった。

「なっ」

「シア！」

突然射線に入られて目標を仕留め損ねたエルフヨナは、きよとんしている所を直ぐに衛士達の手で取り押さえられた。

「おい、ラーザツシア？ 大丈夫か？」

「あ……ぐっ うあああああっ」

「いかん、身体を抑えろ！ 早く針を抜くんだ」

針の刺さった胸元を掻き篦るように押さえて苦しみもぐくラーザツシアの様子に、毒の症状だと見て取ったシャイードが珍しく声を荒げて指示を出す。直ぐに治癒系水技の使い手であるエイシャとラサナーシャも駆け寄って治癒を試みた。

「シア！ シア！ しっかりしてっ」

「なによこの針っ どうなってるの！」

胸元に刺さった針は何故か引いても抜けず、それどころかどんどん身体の中に入り込もうとする。

「はっはっはっ その針は絶対に抜けんよ、刺さったら終わりだ」

返しの付いた特殊な毒針だと、拘束されている工作部隊の隊長が勝ち誇ったように言い放つ。闇神隊長を仕留め損ねたのは残念だが、裏切り者で且つ、自分をいいようにあしらってくれた闇神隊長への意趣返しになるなら悪く無いと歪んだ笑みを浮かべる。

針の外側に塗られている毒が筋肉の伸縮を誘発し、針はどんどん体内に入り込む。半分ほど入った所で針の内側に仕込まれた猛毒が放たれる仕組みだ。全身を醜く腐らせる腐毒で、死に至るまで地獄の苦しみを味わう事になる。

無理に引き抜こうとすれば、肉に食い込んでいる返し部分が折れて中の毒がぶちまけられてしまう。

「我々を裏切った報いだな！ 精々苦しむがっ
」
「うるせえんだよ屑野郎」

嘲るような笑い声を上げる工作部隊長を殴り倒して黙らせたフヨンケが、手をぶらぶらさせながら『胸糞わりい』と吐き捨てた。

必死で治療を施すラサナーシャとエイシャ。針はジリジリとラーザツシアの体内にめり込んでいく。刺さっている箇所は肌は紫色に変色し始めていた。既にもがく力も尽きたのか、ラーザツシアはぐったりとして動かない。

絶望感が広がり始めた広間に、部屋まで薬を取りに戻っていた悠

介が階段を駆け下りて来る。

「隊長！ このままじゃあ」

「分かってる」

針に手を掛けようとする悠介の腕を、ラーザツシアが手が縋るよ
うに掴んだ。

「こ……ころ……して」

「やなこつた」

楽にして欲しいという死の懇願を拒否した悠介は、針をカスタマ
イズして返しの突起部分を消す。あっさり引き抜かれる針。毒針は
布で嚴重に包んで持ち帰る事になる。

頬に痣をつけて『はあ？』という表情を浮かべている工作部隊長
を尻目に、悠介は特別な薬を取り出した。

「臨床試験になっちまうけど、これなら何とかなる筈だ」

一つだけ試作しておいた治癒補助薬がベースの回復特効薬を飲ま
せて、治癒役の二人に傷周りの治癒を頼む。この特効薬は補助薬の
浸透性に加えて水技の治癒効果を増幅し、薬自体にも治癒効果があ
る。

紫色に変色していた部分は元の瑞々しい肌色に戻り、土気色気味
になっていた顔にも赤みが差して来た。毒の症状は落ち着いたよう
だが、体力の消耗が激しく、ラーザツシアは気を失うように眠りに
ついたのであった。

「ふう……もう大丈夫っぽいな、二人ともお疲れ」

「良かった……流石隊長です、凄い効き目でしたね」
「ユースケ様……」

必死に治癒を頑張ってくれた二人を労った悠介は、眠るレーザー
シアの前髪を何時ぞやのようにそっと撫でる。

「とりあえず、今はおやすみ」

56話：事後処理

無技の村襲撃事件から始まった一連の騒動は、ノスセンテスの事
実上の滅亡を持って終結を迎えた。

闇神隊と大使一行は迎えの馬車隊に乗り、サンクアディエットま
での帰路をノンビリと進む。

少し遅れて、捕虜を護送する衛士団が後に続いている。ラサナー
シャとラーザツシア、エルフヨナ達は揃って同じ馬車に乗っていた。
その周囲を並走する衛士は彼女達の護衛兼監視役だ。

襲撃騒ぎの後、悠介達はラーザツシアを部屋に運んで宿内に
仕掛けた迎撃用の罠を片付け、一段落した所でラサナーシャから重
大な話を聞かされる事となった。

「皆さんに、お話しなくてはならない事があります」

ラサナーシャは自身の秘事を打ち明けて皆に頭を下げ、今まで騙
していた事を詫びた。

「サンクアディエツトに戻ったら、大変な事になりますね……」
「だろつなあ……でも、それもこれも帰ってから考えよう」

宮殿関係者と深い交流を持つ唱姫がノスセンテスの密偵だったという告白は、ヒヴォデルから神議会と繋がりを持つ貴族が国内に多数存在していたという話を事前に聞いていたので、皆冷静に受け止める事が出来ていた。

それでも問題としては大きく、エスヴォブス王の人柄からして宮殿が粛清の業火に包まれるような事は無いにせよ、ノスセンテスの残党を押さえる為にかなり突っ込んだ間諜の洗い出しが行われると予想される。

「恐らく、相当数の人事異動があるだろう」

「まあ、暫らくバタバタするんだろけど、俺たちは端っこでノンビリしてよう」

悠介のお気楽な言葉に、フォンケやイフォカは同意を見せ、エイシャとヴォーマルは隊長らしいと肩を竦めた。シャイドは一人微妙な表情を見せたが、特に何を言うでもなかった。

そんな調子で悠介達がサンクアディエツトに帰還を果たしたのは、ザッルナーの水月の十七日目の事だった。

「よく無事に戻ったな、ユースケ。皆もご苦労であった」

「おかえりなさい、ユースケさん。皆さんもお疲れ様でした」

「ただいま、なんか二人の顔みたらホツとするな」

今回は親善大使として出向いた歴史ある大国が滅ぶという、あま

リイメージの良い出来事とは言い難い展開を経ての帰還だった為、派手な出迎えは控えられた。悠介もラサナーシャ達の事があるので、その方針には賛成した。

斯くして、スンとヴォレットから控え目な出迎えを受けた悠介達は、静かに任務終了が告げられたのだった。

「さーで、俺はとりあえず女の所でも顔出しにいくかな」

「今日はまだ事後処理の報告が残ってるからな、出すのは顔だけにしておけよ　　っと、姫様の御前で失礼しやした」

早速顔なじみの街唱を訪ねようとしているフォンケに少々お下品な表現で戒めようとしたヴォーマルは、エイシャからクワツと睨まれて無礼を謝罪する。が、下々で働く衛士達の俗な言葉にも慣れているヴォレットは、特に気にした様子も無いようだ。

『意味が分かってないダケだったりしてな……』

そんな何時もの雰囲気にも和みつつ、悠介は各々街や自室に散っていく部下たちを見送った。そうして自身も部屋に戻ろうとした時、不意に思い出した事があって部下の一人を追いかける。

「ユウスケさん？」

「ん？　何処へ行くのじゃ、ユウスケ」

「ちょっと野暮用」

悠介の部屋に運び込まれているソルザックが研究を進めたギミックモーター製品について、色々要望を話そうと考えていたヴォレットは、そう言っ走り去る悠介に不思議そうな表情を向けていた。

「シャイード」

「隊長？ 私になにか？」

「いや、なんつーかその……港街の宿でさ、今後の事とか話した時、難しい顔してたる？ それが気になつてな」

「ああ……その事ですか」

港街の宿で今後の成り行きについて話をした時、悠介の方針？ について一人、微妙な表情を見せていた事が気に掛かった悠介は、機会があればシャイードがあの時何を思ったのか訊ねてみようと思つていたので。

シャイードは悠介のフォンクランクに対する忠誠心などについて、普段からあまり感じられないのは何時もの事だが、今回の事態やこれからの展望についても他人事のような雰囲気になったと答えた。

「闇神隊、ユースケ隊長はこれまでの功績や姫様との親密さから考えても、国の進むべき指針に大きく係わる立場にある」

邪神という存在としての観点から見ても、邪神について詳しい事は分からないが敵対した勢力は尽く自滅ないし崩壊している。

悠介を取り込もうと動いたガゼツタやノスセンテスの場合『味方する』と明言したガゼツタは歴史の表舞台に現れ、工作部隊を送り込んだ神議会、ノスセンテスは、その長い歴史を閉じる事となった。建国されて五千年とも六千年とも言われる古い大国が、殆ど一夜で消え去つたのだ。

「大きな力と実績を持ち、権力とコネで高い発言力もある。なのに

国政に係わろうともしない」

「邪神の云々はともかくとして……他は立場上、偶々そういう状態にあるってただだからなあ」

「力ある者、得た者は、その力を使う義務と責任があると私は思う」

何かを成し得る能力を持ちながらソレを使わないのは『使わない』という行動を選ぶ相応の理由があるならば、それは義務を果たしていると言えるが、ただ使う気が無いというだけであれば、それは義務と責任を放棄した怠惰な選択だと、シャイードは語る。

「使われてこそ力、力は使う為にある。そして力を持つ者は、その力で成すべき事を背負って生まれて来る。私の持論ですが」

「シャイードは、俺に官僚でもやらせたいのか？」

「寧ろ、支配者になって頂きたいくらいですね」

「……危なく無いか？ その考え」

悠介の真剣な問いに、シャイードは『私的な幻想ですよ』と自嘲とも取れる控え目な笑みを返した。

闇神隊が帰還して三日目。サンクアディエツトでは今日までに摘発されたノスセンテスシンパのうち、裏が取れて処分が決まった者の異動や刑の申し渡し、執行等で司法関係者はてんでこ舞い状態だった。

投獄されていたヴォーメストは処刑、身体に重度の障害を残した元火の団団員の二人には無技人の清掃員に混じって街での労働奉仕、所謂強制労働が言い渡されている。ラサナーシャの上司にあたる伯爵もヴォーメストが処刑される前日に刑が執行されていた。

「流石に、これだけ短期間で大勢の処分がされたのは、父様の代では初めてじゃろうな」

「何せ歴史ある大国が滅亡してしまったのですから、周辺国への影響も大きくなります」

「まっこと、怖ろしい力よなあ」

「……俺を見ながら言うな」

ノスセンテスを滅ぼしたのはガゼツタを支配するシン八だと、自分の邪神属性は棚にあげて抗議する悠介。実際、こうも立て続けに『邪神』を敵に回した者が消えて行く様を目の当たりにしてしまっ

ては、そういう力が働いていると考えられても仕方が無い。
ヴォレットは初めて悠介と出会った時の自分の言葉が、あながち間違っ

「うーぶるぶる」

「お前な」

宮殿の皆が忙しく動き回っており、悠介もギミック製品開発という半分趣味の遊びにノンビリ興じている場合ではないと、ゴーカート作りを自重して薬品開発の方に力を入れている為、おもちゃが増えなくて不満気なヴォレットは悠介で遊んでいるのだ。

「それで？ 今日

はまた官僚共が集まってやいやい言っておったが、

まだ誰か処分されるのか？」

「今日の審議対象は」

薬のカスタマイズに勤しむ悠介に間接的なちよっかいを出しながら宮殿内の動き、ノスセンテスに関する事後処理についてクレイヴオルに訪ねるヴォレット。

ちよっかいを出されながらも、それが良い合間の息抜きになっている悠介は、クレイヴオルが告げた名前に作業の手を止めた。

「ラサナーシャ達の処分？」

「ふむ……あの唱姫とユースケが連れ帰った工作人員の女、それに無表情な子供じゃな」

ブルガーデンから引き渡された神議会関係者とノスセンテス騎士団、解散させられた特詮隊からは、思想的、能力的に使える人材を拾い上げて確保している。

ラサナーシャやラーザツシア、エルフヨナは其々の持つ能力はともかく、立場的に問題があった。

例えばラーザツシアの場合、彼女は殆どパトルティアノーストでしか活動していなかったとはいえ、多くの宮殿関係者やフォンクランクの豪商に顔を知られているし、彼等の人に知られたくない秘密を知っている。

彼女を利用しようと企む者、彼女に居られると困る者、はたまた彼女に未練を持つ者達がその内心を隠しつつ、処分について意見を戦わせているので、收拾がつかないのだそうだ。

処刑は重過ぎるし、追放は秘密が漏れる事を考えれば論外。暗殺児教育で情操の育っていないエルフヨナも含め、信用できる人間に預けて管理させるのが一番かという結論にまでは至っているのだが、

誰が誰を預かるのかという部分で揉めているのだとか。

「エルフヨナは……やっぱ先生のとこかなあ」

「ふむ、やはりユースケもそう思うか」

元宮殿上層の関係者としても、人としても信頼できる点では問題なく、ベルーシャという前科もとい前例があるので、暗殺者という特異な環境に身を置いていた者の扱いにも長けていると考えられる。

「それでは、その方向で話を進めようと思います」

「まあ、爺の名を出せば反対できる輩はおらんじゃろう」

「後はラサナーシャとラーザツシアか」

「ラーザツシアという娘の処分については話が拗れているが、ラサナーシャ唱姫の処分については概ね決まっている」

クレイヴォルの話によれば、ラサナーシャにはこれまでの唱姫としての功績と、今後ノスセントスの関係者洗い出しに協力する事で恩赦が与えられる事になっている。彼女を信望する宮殿関係者からの嘆願書もあつたそうだ。

無罪放免にする事は国の威信、権威に関わるので出来ない。なんらかの罰を与えなくてはならない。相応の罰が与えられた事を民に示す必要もある。

そんな訳で、国から援助が受けられる立場にありながら国を裏切っていた事は許されざる行為としての罰は与えられるのだが、その内容が極刑ではなく、なるべく穏便なものとして『打ち尻の刑』が挙げられていた。

「まあ、官僚達が考えたにしては妥当な所でしょう」

「うーん、しかしアレはなあ……」

気が乗らなそうなヴォレットに、最も穏便且つ、十分な罰が与えられたと民に示す事が出来る刑でもあると説得するクレイヴォル。そういう彼自身からも、歯切れの悪さからあまり気が進まないという内心が感じ取れる。

「それってどんな刑？」

「言葉通りじゃ。皆の前で尻を打つ刑なんじゃが」

断罪広場の刑台にて手足を枷で固定して四つん這いにされた受刑者は下半身を露出させられると、一番明るい正午から大勢の民衆に晒されながら執行人に尻を叩かれるという恥辱刑。

型としてはとにかく無様に見せる事なので、執行人は受刑者の首の後ろ辺り、背中を足蹴にするように踏みつける格好で民衆に晒す尻がよく見えるようにしながら交互に叩く。

執行されるまで受刑者の管理は執行人に任せられ、趣味の悪い執行人だと事前に大量の水を飲ませたりするなどして、刑の途中で失禁を誘発するよう仕向けたりもするそう。

貴族の娘などは羞恥のあまり途中で失神する者が殆どだが、舌を噛む場合もあるため、自殺防止に猿轡を噛ませる。

受刑後は恥ずかしくて素顔を晒したままでは街も歩けなくなり、社会的な立場も唱姫としての名声も失うであろうが、特殊な性癖を持つ者はいくらでもいる。職を失うこともないでしょうというのが打ち尻の刑を提案した官僚達の意見だった。

身体に傷も付かないし、苦痛も少ないだろうとは聞くものの、ヴォレット的には心に深い傷が残るのではないかと気にする。だが、通常ならよくて囚人を使つた陵辱刑の後、処刑されてもおかしくない立場。彼女を使つていた伯爵には既に極刑が下されている。

「ふーむ、そんな刑もやるのか……」

「言つておくが、父様が国王の代で恥辱刑が行われた事は無いぞ？
わらわが見たのは随分昔の事じゃ」

先代の王は、というよりも王を取巻く女性達による鎬の削り合いによつて、陰謀渦巻く宮殿内では度々『不義を働いた娘』が偶々何者かに目撃されたり、告発されたりという事があり、そういう者達は見せしめの恥辱刑に処せられていた。

側室達の機嫌次第では使用人の娘が不義を働く所を偶々目撃される例も少なくなかつたそうだ。エスヴォブス王が周りに妾的な女性を置かないのは、若い頃から宮殿内で彼女等を見てきた事が原因なのではないかという説もある。

「官僚共にしては妥当というがな、クレイヴォルよ、わらわには彼奴等がああ唱姫を独占しようと思つて企んでいるようにも思えるぞ？」

「まさか、流石にそれは穿ち過ぎなのは……」

「なあ、刑が執行されたつて事実さえあればいいんだな？」

ラサナーシャに科せられる刑罰の段取りについて二、三の質問を投げ掛けた悠介は、こんな事を口走つた。

「なら執行人は俺がやる」

「んな！」

56話：事後処理（後書き）

一話分に入りきらなかったので、事後処理の顛末は次話で。

57話：収束と諸問題

「エルー、先生の所へ戻るならコレ持って行きな」
「ん……」

ひよいと差し出された野菜入りの籠を両手で受け取り、トテトテと歩いて行く緑髪の女の子。子供の頃のスンが帰って来たようだと言顔を綻ばせたバハナが、その小さな背中を見送る。

先日、回復特效薬を箱詰めで運んで来た悠介がラサナーシャと共に連れて来た元暗殺児のエルフヨナ。解体された特詮隊から保護という形で身柄を確保されていた彼女は、悠介が引き取ってゼシャルドに預けられる事となった。

ゼシャルドの屋敷で過ごすエルフヨナは殆ど喜怒哀楽も見せず、非常に大人しい。持ち帰った野菜を洗って棚に仕舞うと、ベルーシヤに教わりながら慣れない手つきでお茶を淹れる。

時々ぼしょぼしょと言葉を交わす二人は親子にも姉妹にも見えた。暗殺者同士シンパシーを感じる部分もあるようだ。訓練で培った愛らしい仕草や表情は鳴りを潜め、何処かぎこちない雰囲気のエルフヨナだが、その瞳は好奇心に満ちて輝いていた。

ちなみに、エルフヨナの服はバハナがスンと自分のお古を繕ってくれた。

広間のソファーに腰掛けて出されたお茶を飲みながら、二人の様子をうむうむと眺めていたゼシャルドは、自室の棚に保管されて

いる回復特效薬について考えながら、先日の出来事を思い出す。

特效薬を用いたゼシャルドの治療によって、ラサナーシャの身体を蝕む朽病の腫瘍は完全に消えた。不治の病は癒されたのだ。

一生付き合っていく運命と諦めていた朽病との闘病生活から開放されたラサナーシャは、しばし啞然とした後、悠介とゼシャルドの二人に心の底からの感謝を示した。カルツイオから難病の一つが駆逐された瞬間でもあった。

「これで、多くの人が救われる事になると良いのう……」

ノスセンテスが独占していた薬の精製法は殆どガゼツタが握ってしまった。幾つか市場に流出したモノが各国の薬師に伝わっているが、回復特效薬の材料となる治癒補助薬の製法は流石に出回らなかったようだ。

「ルード」

「うむ」

「……」

茶菓子を受け取り、三人で静かにお茶を啜りつつ、今頃は断罪広場でラサナーシャに刑が執行されている頃かと思いを馳せる。

「何れはユースケもガゼツタに出向く事になる、か……。さてはて、上手くやっておると良いかの」

エスヴォブス王の統治下では実に珍しい、唱姫の恥辱刑を見物しようとする民衆が集まる中、刑台に立つ悠介の隣でラサナーシャは恥ずかしそうに顔を伏せている。訳あって猿轡は噛ませていない。

「じゃ、始めるか……いいですね？」

「はい……」

係りの衛士達がラサナーシャを刑台に固定していく。唱姫の力リスマか、罪人であるもかわらずその扱いは丁重だった。枷の状態を確かめ、準備が整った事を執行人の悠介に伝えた彼等が刑台から降りると、罪状が読み上げられて刑の執行が告げられる。

尻を突き出す様な格好で四つん這いに固定されたラサナーシャのスカートが、悠介の手で捲り取られようとした瞬間

「おいっ なんだよ！」

「見えねーぞっ」

刑台の周囲に光の壁が出現した。壁はドーム上に刑台を包み込むと、小さな光粒が舞い消えて石の壁となった。誰の仕業かは明白だ。断罪広場には戸惑いのざわめきに混じって当然の如く不満の声がある。しかし、それらの声は直ぐに治まる事になった。

バチーン

ひあぁんっ！

という壁の向こうから響く音と声が、見えない事で余計に妄想を

搔きたてる。スラリと立つラサナーシャの美しい姿と、その美しい唱姫が刑台に固定された倒錯的な姿が事前に晒されていたので、彼女の嬌声にも似た切なげな悲鳴に思わず聞き入る見物人たち。

不満の声は次第にどうか、一気に治まって行く。

通常、この手の刑では見物人の囁し立てる声や野次でガラの悪いお祭り状態になるのだが、下手に野次ると『静かにしろ！』と周りから睨まれてしまう為、騒ぐ事を目的に集まった若者達も大人しく耳を澄ませている一種異様な状況。実に変な光景だった。

中には生々しく響く声と音に、壁の厚みはかなり薄いであろう事を推測して穴を空けようと試みる者も居た。禁止しないよう悠介に言われていた衛士達はそれを黙認していたが、ギアホーク砦に立て籠もった時にも使った対神技防御でガチガチに固めてある壁だ。

ブルガーデンの主力精鋭が放つ高威力な風刃でも表面にちよつと傷がつく程度で跳ね返す強固な薄壁は、街の一般民が使う土技程度ではびくともしない。

ソルザック程の腕なら空けられなくもないが、彼はとても悩んだ末に穴を空けるのは断念した。

結局、刑の執行を視覚的には完全に封じ、声と音だけで『刑が執行された』という事実をもぎ取る悠介。反則というより詐欺みみたいなやり方だが、元々唱姫とあまり接点もない民衆にとっては権力者たちが懐く国家の威信などにもあまり感心が無い。

殆ど見世物的な催しだったので、刑の執行を終えると同時に壁が取り払われ、拘束の解かれた息も絶え絶えな様子のラサナーシャから放たれるなんとも形容しがたい、ねっとり絡みつくような『唱姫が濡れ場で纏う色気』という、一般大衆には一生掛かっても拝める機会も無いようなレアな気配を感じられた事で、見物人達は概ね

満足していた。

断罪広場から娼館に直行する若者が続出したとか。

本当に尻を叩いたか否かは、二人のみぞ知る。

「流石は唱姫って感じでしたね」

「お恥ずかしいですわ」

断罪広場から引き揚げる馬車の中で、悠介はラサナーシヤの本気演技に感嘆していた。喘ぎを演出するような下ネタ的な演技でも、本物には迫力が出るのだなあと実感させられる。猿轡を噛ませていなかったのは実はこの為だ。

「倒錯しそうでヤバかった」

「あら、私は構いませんでしたのに……」

冗談と分かっているにもかかわらずゾクリとした感触を伴う唱姫の流し目に、笑って誤魔化すしかない若い邪神はポリポリと頭を掻いた。

刑の執行報告に宮殿へ戻る途中、悠介は自分の屋敷に立ち寄ってスンとラーザツシアを馬車に迎える。スンはヴォレットのお相手、ラーザツシアは悠介の自室で薬品類を選び分ける手伝いだ。

「わ、私も宮殿に行くの？ ていうか入れるの？」

「勿論ですよ、ね？ ユウスケさん」

「当然」

ラーザツシアが直接フォンクランクに被害を与える活動に従事したのは一応、今回の件が初めてであり、その境遇を考慮すれば特詮隊の命令に従わざるを得なかったという心情も理解出来ると判断された。

それまでの工作活動については、フォンクランク側も隠しておきたい内容が殆どという事情も踏まえて、彼女の処分については今回最もその標的となっていた闇神隊長の裁量に任せられる事になった。

任せるといつても、悠介が放免にすると言えば無罪になる訳ではない。罪に対する罰の一環として悠介に扱いを任される。表面上を繕えばそういった表現になるが、母国を失って身元も身寄りも無くなった元工作員の捕虜に人権など配慮される筈もなく。

要するに、悠介に与えられた奴隷であり、煮るなり食うなり好きにして良いという意味での『裁量に任せる』である。奴隷の証である黒い腕輪を填めて悠介に払い下げられたラーザツシアだが、『悠介の所有物である事』が彼女自身の安全にも繋がっていた。

ラーザツシアの薬の知識は意外に使えるという事が分かっていたので、悠介は屋敷に連れ帰って製薬の助手にする事を表明している。それを持ってフォンクランクに貢献させる、という趣向で、実質放免扱いにしている事の体面を保っているのだ。

「で、本当に尻を叩いたのか？」

「叩いたんですか……？」

「……叩いたの？」

「分かってて聞くなっ」

宮殿の一室に集まった闇神隊とヴォレット達、大使役だった三人にヒヴォデイルと一部の衛士達は、今回の騒ぎも一段落したという事で、関係者だけを集めてのささやかな帰還パーティーを催していた。

皆にはルフク産キナ鳥の腿肉が振舞われている。先日、悠介がラサナーシャの治療とエルフォナを預けに行った時に、バナナから貰って来た上質の腿肉である。調理前にしっかりと叩いて解されているので、柔らかくてとても美味しいと評判だ。

銘々が料理に舌鼓を打ったり実酒に酔いしれたりしながら雑談に興じている中、難しい顔をしたクレイヴォルが悠介に声を掛けた。

「回復特効薬は、やはり治療補助薬が無ければ作る事は出来ないのか？」

「流石にね、補助薬は何か別格って感じだったから、他の薬じゃ代用は難しいんじゃないかな」

カスタマイズ画面で治療補助薬のステータスを確かめた時に見たレア度は、シンハの持つ白金の大剣や偽神器製作に使った重金属並に高かった。ちなみに、フォンケを実験に使った回復薬は水技で解析されて効果の近いモノが量産される事になっている。

「さらに効果を落としたモノを一般市場で売り出す予定になっているが、紛い物が出回らないかが問題だ」

「あゝ、モノがモノだけになあ」

水技の治療に近い効果を得られる回復薬は衛士隊にも常備される事になっており、市場に売り出す薬は魔獣退治などを生業にしている冒険者達に売れるだろうと、それなりの収益を見込まれている。

特に、水技の民が不足しているブルガーデンとの交易は盛んになりそうだと予想される。

「だが、回復薬のような道具を最も重宝にしそうなのは……」
「……ガゼツタ、シン八達か」

ノスセンテスが有していた貴重な薬品精製技術は現在ガゼツタが握っており、治癒補助薬の精製法もその中にある。

「当然、取り引きに使ってくるだろう」
「だろうね」

肉体派な戦士系であるガゼツタ軍にとって、回復薬は是非とも大量に手に入りたい道具だろうなど、悠介は頷いた。

「こりゃっ お前たち、祝いの席でなーにを難しい顔して話し合っておるのじゃ！」

「ユースケー、これ甘くして？」

「籠ごと持っていくなっ 一個づつにしろ」

「姫様、はしたないので両手に腿肉を振り翳すのはお止めなさい」

真剣な表情で話し込んでいた悠介とクレイヴォルを襲撃するヴォレットとラーザツシア。何故か二人とも意気投合したらしい。

悠介の屋敷に連れて来られた時はまだ、塞ぎ込み気味で『安心させておいて絶望に叩き落とされるのでは？』と警戒感も露わにしていたラーザツシアだったが、高民区の屋敷に無技人のスンが住人として普通に暮らしている様子を見てまず目を丸くした。

夜伽の強要もされず、自分の部屋まで与えられ、スンと話をして悠介の在り方を再認識したラーザツシアは『彼を信じよう』と決心した。それから、本来の姿であるう活発で明るい娘の素顔を見せるようになっていく。

ちよつと甘えんぼうな所は悠介も意外に感じていたりする。

「ねえ、ラサはこれからどうするの？」

近いテーブルで男性陣に囲まれていたラサナーシャに、ラーザツシアが声を掛ける。罰を受けた事により、『唱姫』としての仕事はもう続けられなくとも、街唱としてなら超高級唱謡いとして需要は十二分にある。

が、もし廃業するなら言い寄るチャンスとばかりに耳を敬っている緑髪の遊び人風衛士や、古風な装いをした黄髪の紳士が見守る中、ラサナーシャは少し照れるような仕草を見せながら自らの行きついた結論を語った。

病気を完治させ、人生最大の危機を救われたラサナーシャは、悠介に忠誠を誓う。

「私、ユースケさんに唱を捧げたいと思います」

「ん？」

呼んだ？ と隣のテーブルから振り返る悠介。数瞬の後

「えええええええー！！」

という合唱が、闇神隊と大使一行帰還祝いのパーティー会場に響いた。

「なんだ、なんだ？」

他の皆は驚きの声をあげるも、ラサナーシャの言った言葉の意味が分からない悠介は一人、何事かとキョロキョロしている。

唱謡いが『唱を捧げる』というのは、その相手に自分の全てを預けるという意味があり、今回の場合、ラサナーシャは自ら悠介の妾になると宣言したようなものだった。悠介がそれを受け入れるか否かは別にして、だが。

「こ、こやつ……唱姫を落とすおった」

「自覚ねえ誑しスゲエー」

フォンケに本気で尊敬されてしまう悠介だった。

「ユウスケさん、ちょっとお話があります」
「え？ え？」

その後、悠介は会場で一番大人しい少女にズルズルと何処かへ引っ張っていかれたそうなの。

57話・収束と諸問題（後書き）

ちょっと強引になりましたが、これでこの章は終わりです。

58話：不穏な気配

フォンクランクの南東にある小さな宿場街。西に月鏡湖が広がり、周りは森に囲まれている。トレントリエッタの国境に近く、湖沿いの街道を南に少し下ればトレントリエッタ領に入る。

北東に続く街道を進めば、中継点となる村を通ってトレントリエッタの首都『リーンヴァール』へと続く。この宿場街には規模こそ小さいものの、比較的用户の多い通商協会なる商人ギルドの支部があつた。

通商協会には最近、この街の近くで魔獣による被害の報告が多く寄せられていた。ただでさえノスセントスの滅亡で交易ルートが潰れてしまい、その再構築にガゼッタとの交渉を控えている大事な時期。

収益にも少なく無い打撃を被っていた通商協会は、首都サンクアデイエットに衛士団の派遣を要請する傍ら、迅速な対応を求める商人達の要望に応え、冒険者を募って独自の調査も進めていた。

「そろそろだな、あの木の布が目印だ」

「本当に魔獣なんぞと遭遇したのかねえ」

「フォンクランク領の街道は魔獣より盗賊団に気をつけるのが常識だからな」

「だがこの辺りはもうトレントリエッタ領に入ってるんだらう？」

「この国はこれだけ森ばかりだと、魔獣対策も難しいんだろうなあ」

調査隊に雇われた五人の冒険者グループはトレントリエッタの国境を少し越えた付近で馬車を停めると、森に分け入る準備を始めた。装備の確認をしながら、彼等は最近サンクアディエツトで売り出されている回復薬について評しあう。

「これがフォンクランク製の回復薬か」

「旧ノスセンテスから流出した精製技術でフォンクランクの薬師が製造、販売してらって話だ」

「随分買い込んだな」

治癒補助薬を始めとする主な治癒系薬品の製法はガゼツタが握っているのだが、やはり無技人国家であるが故の問題か精製技術が不足しているらしく、以前より市場に出回る数が激減している。

そんな情報を交えつつ、買い込まれた回復薬がメンバーに振り分けられていった。

「こいつは使えるのか？」

「使用感は悪くなかったな、効果の程はノスセンテスで売ってた回復薬の二割か三割増しって所だった」

「へえ、それでいて値段は半額か……確かに悪くないな」

「まあ、メンバーに治癒系水技が居れば使う事も無いだろうけどな」

緊急用と割り切って、使う時は惜しまず使った方が良さそうだと安価な回復薬をポケットに仕舞う。そうして準備が整うと、其々役割に応じた並び方で隊列を組み、森の中へと踏み込んでいく。

「無いと思うが、もし巣が見つかった場合は何時も通りの作戦で

殲滅するからな」

「目撃情報が全て正しければ、あながち無いとも言いきれんが」

「契約分の仕事をこなせば良いだけさ。こっちはとつとと済ませて、月鏡湖の財宝探しに行こうぜ」

森の中を少し進み、風技の索敵を行ってまた少し進む。周囲に潜む動物達の動きを観察しながら、不自然な波動や不審な場所が無いかを調べて回ること暫らく。

「っ……！ いるぞ、それも三匹近く反応した」

「こんな場所に三匹も固まってるのか……？」

「やはり樹海の奥から流れて来てる奴がいるのかもな」

「気をつける、近くに巣穴があるかもしれん」

狭い範囲に複数で固まって行動する魔獣の気配を確認し、冒険者達は警戒態勢を取りながら慎重に調査を進めて行く。索敵の風を感じ知っているであろう筈の魔獣はその場所から動く気配を見せない。

気配がする場所へと近付くにつれて、次第に奇妙な波動が混じるようになった。

「……？ おい、なんか変な波動を感じないか？」

「ああ、なんだろうな……これは」

「ちょっとヤバい感じだな、一度戻った方がいいかもしれんぞ」

まるで人為的に風技の伝達を攪乱するかのよう強い神技の波動が、辺り一帯を覆うように響き始めている。その現象に不穏なモノを感じた冒険者達は、一旦街道のキャンプまで引き揚げようと来た道を急いで戻り始めるのだった。

ヴォルアンス宮殿上層階の一室

悠介とヴォレットは何時もの部屋でスンの事について、クレイヴオルも交えながら話し合っていた。

「パーティーの最中に空き部屋へ引つ張り込むとは、中々大胆な事をすると思っただものじゃが……」

「そんな色気のある話じゃなかったんだよなあこれが」

ささやかな帰還パーティーの席で悠介を隣室に引つ張って行ったスンの『お話』とは、自分を闇神隊に入れて欲しいという内容だった。態々会場から離れたのは、皆の前で言い出すのが恥ずかしかったからだそう。

「余計に目立っておったがな」

「だよなあ……」

だが、あの天然ぶりがらしくて良いという見解の一致を見せる悠介とヴォレット。

「しかし、彼女は何故また急にそんな事を？」

「ん、実は」

ラーザツシアは薬の扱いや知識に長け、ラサナーシャも彼女が持つコネや情報網はかなりのモノ。闇神隊のメンバーも含めて、悠介の周りにいる者は皆、何かしら悠介の助けになっている。自分だけが役に立ってないと、スンは気持ち悪く焦らせていた。

以前、ルフク村にてスンと話した『能力に見合った仕事や立場を用意する』という言葉の実践について、しかしどうしたものかと考え込む悠介に、スンはできれば闇神隊に入れて欲しいと懇願した。

「なるほどのう……傍に居るだけで良い、という訳にはいかなんだか」

「スンは、大人しそうに見えて意外に行動派だからな」

考えてみれば、ゼシャールドの屋敷で暮らしていた時も村からそこそこの距離のある邪神の祠まで一人で御供えをしに通ったり、薪や木の実を採りに森まで出かけて行ったりと、街に出ずとも村の周りでは広い範囲で活発に動いていた。

村で親しくしていた近所の人や少し女傑の入ったバナナである事や、ゼシャールド自身も隠居した身と言いつつ、トンでもない偉業を成し遂げるような行動派の人なのだ。小さい頃からそんな二人を見て育ったスンが影響を受けない筈も無い。

「見事にヴォレットとは正反対だよな」

「うん？ どういう意味じゃ？」

「お前は表向き活発で豪胆に見える割に、内面は繊細で傷つき易い所がある」

サラツとそんな事を言われて、何故か顔を赤らめたヴォレットは、照れ隠しに空飛ぶお皿をぶつけた。二度ほど。

「ゴホンッ ……しかし、流石にそれは簡単にはいかんのう」
「やっぱそつだよなあ」

衛士という役職は王から賜っている立場に他ならない。幾ら英雄と讃えられる闇神隊長の悠介でも、等民制国家の軍事機関である宮殿衛士隊に相応な理由もなく無技人を所属させる事は、流石に問題がある。

更に今は時期も不味い。四大信仰発祥の地とも云われていたノスセントスが滅亡し、それを成した無技人^{ガゼッタ}国家の台頭が噂されてる現状で宮殿衛士隊に無技人を入隊させれば、王がガゼッタの猛威に怯えて媚びている等という批判も噴出しかねない。

「何か理由が必要なんだよな」

悠介はスンを闇神隊に入れる為の下地を作る良い案は無いかと、ヴォレット達に相談を持ち掛けた。

闇神隊メンバーを始め、悠介の周りにいる近しい人間は皆スンの事を知っているし親しい間柄とも言える。特に無技人である事を理由に蔑視するような空気も無く、一緒に仕事をする事になっても問題は無い。

「ふーむ、何か良い案はないか？ クレイヴォール」
「私に振りますか……そうですね、まずは」

クレイヴォールの提案により、スンを闇神隊の専属従者として登用

出来るように手を打ち、実績を重ねる事で正式に入隊出来るよう取り計らうという方法が検討された。

「多くの人々から支持を得られる民衆受けの良い任務を果たしていけば、反撥する者も抑えられるでしょう」

丁度今、衛士団の派遣要請に民衆の喜びそうな調査依頼が入っている事を挙げるクレイヴォル。

南東地域で魔獣の目撃報告や被害報告が上がっているというモノ。一昔前ならともかく、街の近くで魔獣の被害など今時ありえない。恐らく眉唾であるのが『魔獣退治』というネタは民衆受けする。

「魔獣退治ねえ」

「危くないのならば、それで行くか？ スンは弓を扱えるからのう」

「姫様、まずはエスヴォブス王から彼女を専属従者として登用する許可が得られなければ、話になりませんぞ」

既に決定事項化して自分も行きたそうな表情を見せつつ、後で土産話を強請る気満々な様子のヴォレットに、冷静なつつこみを入れている専属警護兼教育係殿。彼も大分染まって来ているのだが、自覚はあまりなさそうだ。

「許可しよう」

『一緒にお食事』とか『一緒にお散歩』などのカードを用意して父王に交渉を挑んだヴォレットだったが、スンの登用はあっさり許

可された。少々拍子抜けして首を傾げながら戻って来たヴォレットは、悠介とクレイヴォルにその事を報告する。

「周りの者を説得せねばならんだろうから、もっとゴネられると思っただかのう」

「ゴネるて……」

「王にも、何かお考えがあるのでしよう」

ともあれ、こうして闇神隊専属従者にスンを登用する事が決まった。

59話：スンの決意

丈夫で質の良い生地を使った白い従者服を身に纏い、バナナに貰った弓を背に少し緊張した面持ちのスン。闇神隊専属従者に登用されたスンは、そのまま同日闇神隊に下された『魔獣被害の調査任務』に同行する事となった。

スンの装備は悠介と同じく特殊効果を付与しまくった状態に固めであるのだが、スン自身はあまり装備の性能に頼るのは結局、悠介の力に頼っている事にならないかと気にする。

「それを言うなら、俺なんてカスタマイズした装備がなけりゃ実力なんか普通以下だぞ？」

「そうでしたね……」

「……肯定された……」

「え？ え？ どうしたんですか、ユウスケさん」

なにやら落ち込んだ様子で頂垂れては地面に異世界の文字を刻みつける悠介。悩みながらボンヤリ返事をしてしまったスンは、哀愁漂う謎の儀式を始めた悠介を慌てて宥めに掛かるのだった。

「タイチヨー、早速いちやついてる所わりーですが、出発準備整いましたよー」

「いちやついてねーよっ」

落ち込んでるんだ！ と半目のフォンケに反論しながら衛士隊馬車に乗り込む悠介と、その後続くスン。

「ははは、まあ装備の性能も使いこなせばこそ、己の実力と言えるんじゃない？」

「例え借り物の力であろうと、それで隊長の役に立てるなら問題はない」

深い見識を思わせる穏かな言い回しでフォローに回るヴォーマル。己が力に拘って役立たずを晒すくらいなら、自分は喜んで隊長に与えられる力を受け入れると、些か強い語調に傾倒を感じさせるシャード。

今回を機に闇神隊メンバーの衛士隊服にも活動に役立つ効果が幾つか付与されていた。特殊効果付与は簡単には出来ないという前提を崩さないよう、あまり目立つ効果は避けて地味に回復効果や治癒効果、防御力の向上などに止められている。

「そうですね……わたし、ユウスケさんの役に立てるよう頑張ります」

「そこで『皆の役に』じゃなく『隊長の役に』って辺りがスンちゃんらしいよな」

「えっ？ あ、えと、ごめんなさい！ じゃあ皆さんのお役に立てるよう頑張ります」

「混ぜっ返すなよフォンケ！」

今はまだ専属従者としてだが、スンを新たなメンバーに加えた闇神隊一行は、何時もの賑やかな雰囲気では他の衛士達から色々な意味

での注目を浴びつつ、フォンクランク南東地域に向けてヴォルアン入宮殿を出発した。

闇神隊が目的地である南東の宿場街に到着したのは、翌日の昼過ぎ頃だった。通り道となるルフク村に立ち寄った時は、スンの晴れ姿をゼシャールドやバハナ達に披露するなど、あまり緊張感の無い道中だったが、街に着いてからは少し様子が違った。

「なんだか物々しい雰囲気だな」

「傭兵の姿が多いですね……魔獣騒ぎに関係してるかは分かりやせんが」

「まさか本当に魔獣が出たってこたあねえーでしょうね？」

「ありえなくは無いが、盗賊団の類という線もある」

とりあえず詳しい状況を聞くこと、任務の依頼主である通商協会支部前に馬車を停める。

出発当日から闇神隊を包んでいた隊員旅行気分は払拭され、見た目こそ普段と変わりはないものの、皆の纏う空気が厳しいモノへと切り替わり、それを敏感に感じ取ったスンは密かに緊張を高めた。

「ようこそ、お越し下さいました。私、通商協会の支部長をやらせて頂いている者です」

「闇神隊の悠介です。魔獣の調査任務について、詳しい説明をお願いします」

支部長は最初、やって来たのが要請した衛士団ではなく、少数編成の衛士隊だった事に失望感を懐いていた。

が、よく見ると隊を率いている歳若い隊長は黒髪に黒尽くめの宮殿衛士隊に似た隊服を纏っており、何故か武装した無技の従者まで連れている。その統一感の無い編成に闇神隊の名が浮かび、本人から確認が取れた事で大いに歓迎の意を示したのだった。

通商協会支部の宿舎に用意された会議室にて、現状の報告がなされる。支部長は衛士団が到着する前に協会側で雇った冒険者を使い、独自に調査を進めていた事を説明した。

先日、その冒険者グループから救援要請が発せられたのを最後に連絡が取れなくなったという。

「私どもが雇った冒険者は魔獣の討伐も請け負う熟練者達でして…

…」

「ふむ……非常事態の可能性、というか間違いなく非常事態っぽいですね」

街からそう遠くない地点の調査で今回のような事態が起きた為、急遽街の防衛と冒険者グループの救援に傭兵を募ったのだそうだ。ただ、時期が時期だけに情報収集に長けた者の集まりが悪く、戦闘集団だけでは心許ないと中々出発できないでいた。

「集まりが悪いつて？」

「今はガゼッタの事がありますから、情報収集の出来る者は何処も雇い込みをやっておりまして」

需要に供給が間に合わない状態。要するに諜報をこなせる風技の傭兵が人手不足になっている。

闇神隊の任務は表向き『とある理由』から魔獣退治と宣伝されているが、実質は魔獣被害の真偽調査とその報告であって、今回のような事態は想定されていなかった。だが、危なそうだから一旦帰るという訳にもいかない。

「分かりました、我々がまず現地の調査を行いますので、そちらが雇った傭兵達は状況を見て動かすようにして下さい」

悠介はヴォーマル達と相談して連絡の取れなくなった冒険者グループを搜索し、状況次第では街の傭兵達も戦力にいれる方向で対処しようという事になった。いきなり実戦という事態もあり得るので、スンの扱いを考えておく必要がある。

「それでは、今日の所はこちらの部屋で御寛ぎ下さい。闇神隊の皆様のご活躍を期待しております」

夜、明日に備えて活動方針の細かい部分を話し合う為、闇神隊メンバーは悠介の部屋に集まっていた。とりあえず皆で意見を出し合って最善策を考えようと話す悠介に、フォンケが軽く挙手する。

「その前に隊長、一ついいですか？」

「ん？ 何かあるのかフォンケ」

「流石は『災厄の邪神』 つすね」
「やかましわっ」

次から次へと事件やら深刻な事態に巻き込まれる闇神隊の在り方を茶化すフヨンケ。こういう場面では大抵不真面目を注意するエイシャも、こればかりは戯言と言いつけられない部分があるので苦笑していた。

話し合い始めに肩の力を適度に抜いた闇神隊メンバー達は、調査活動での役割分担について議論を始める。誰が何をするかは概ね決まっているのだが、今回は荒事への対処について、スンの役割をどうするか。

「相手がもし盗賊の類だった場合、人を射った経験が無い者に射手をやらせるのは危険です」

「狙われ易いつてももありやすからね……狩りや訓練の経験は？」

「ヴォレット様と擬似鳥を射った事しかありません……」
「弓を覚えて直ぐの頃に街へ連れ帰ったからなあ」

狙いの正確さなど弓の扱い自体には問題無いものの、やはり実践経験の有無は大きい。装備品で能力の底上げはされているが、最終的にその力を正しく振るえるか否かは本人の力量、気持ち次第なのだ。

この話し合いの主題は結局スンをどう扱うかに絞られており、非常事態的な任務を前にした現在の闇神隊において、自身が如何に足手纏いになっているかを痛感するスンだったが、それでも街に置いて行くという選択をしない悠介達に気持ち奮い立つ。

「大丈夫です！ わたし、頑張りますからっ」

「……スン」

「まあ、本人にそれだけ気迫がありやあ大丈夫でしょう」

「俺等の部隊つて、攻撃担当の専門職が不足してますからねー」

「無技の民が武器を使った戦闘能力に優れている事は、既に実証されている」

スンのやる気宣言はヴォーマル達にも肯定的に受け止められた。

少し照れた表情になりながらも、スンは皆からの期待と励ましの言葉に真っ直ぐな瞳で応える。

「じゃあスン、明日からやれるな？」

「はい」

明日の任務から、スンは闇神隊専属従者として衛士隊では珍しい弓士を担当する事になった。

旧ノスセンテス中枢施設、パトルティアノーストの神義堂にて、深刻な表情で数点の書類を見つめているシンハ。アユウカスが研究棟施設で見つけて来たこの書類には、魔獣に関する実験の概要が記されている。

「これは……、これも神議会の仕事なのか？」

「いや、恐らく研究者達が資金繰りの為に独断でやっておつたのだと思うぞ？ 神議会の与り知らぬ事じゃろつて」

「しかし、これをやった連中は自分達が何をしているのか分かつているのか」

「何時の時代も、探求を始めると見境がなくなる研究者はおつたでな」

ついでに言えば、自分達白族の末裔が有している遙か昔の出来事『色付き達の衰退と白族繁栄に関する歴史』など、今の神技人達の中で意識している者は皆無じゃろつと補足する里巫女アユウカス。

「例の邪神ユスケが降臨する前の話じゃからして、一見邪神は関係なさそうに見えるがの」

「……違つのか？」

「邪神の存在が神議会の牛耳るノスセンテスを滅ぼす切っ掛けになつたのは確かじゃ、さすれば」

この書類にある研究内容がその研究者共々、それまでは裏で細々と活動が続けていた組織へ流出した事による研究成果の躍進。という、普通の神技人達にとっての大弊害。

「下手をすれば、二千四百年前の再現になるのう」

カルツイオの大地から当時の神技人である色付き達が大きく数を減らし、白族の繁栄の切っ掛けとなった黒い邪神かいぶつが降臨した時代。その再来が、里巫女によって予見された。

「……ガゼツタの王としては、喜ばしい事の筈なのだがな」

シンハは一言そう呟くと、難しい表情のまま溜め息交じりに神義堂の天井を見上げるのだった。

60話：天敵（前書き）

微グロありです。

60話：天敵

翌日、通商協会の支部前では出発準備を整える闇神隊に朝から商人達が便利用品の売り込みに群がっていた。彼等は通商協会系列の冒険者ギルドに所属する商人達で、闇神隊御用達の商品が出れば大いに儲かると張り切っている。

「こちらの商品なんて如何です？ 野宿のお供に最適な新製品、何処でも快適に眠る事が出来る冒険者の必需品ですよ」

革と布で編みこまれて丈夫に作られた寝袋。快適寝袋の複製品も既に冒険者達の間で流行っており、旧ノスセンテス騎士団が所持していたとされる本物の^{オリジナル}のような安眠効果はどうしても出せなかったが、品質は悪くない出来だという。

「あー、俺たち自前の持ってますから」

「元々隊長が作ったもんだしなあ」

「うわっ馬鹿！ しーっ！ しーっ！」

「なんと！ あの本物は^{オリジナル}闇神隊から伝わったものだったのですかっ」

それならば是非とも自分の所^{ちひ}に製造販売の委託をと積極的な商談交渉を持ち掛ける売り込み商人達。出発前に彼等の攻勢を躲す事で一苦労だ。結局、見かねた支部長が任務の邪魔をしないようにと注

意するまで出発準備が整う事は無かった。

「無駄に疲れた……」

「隊長、お疲れ様でした」

「お、お水どうぞ……」

「援護出来なくてごめんなさい……」

商人魂による苛烈な売り込みから逃れて馬車の中に隠れていた女性隊員三人衆から労われる悠介隊長なのであった。

宿場街を出発した闇神隊一行は、昼過ぎ頃にトレントリエッタの国境を越え、冒険者グループが消息を絶ったという調査区域に差し掛かった。街道の両脇は歪な形に生え伸びる木々が鬱蒼と生い茂っている。

「この辺りだな」

「隊長、あれを」

前方の街道脇に通商協会の馬車が放置されてある。傍らに見える焚き木の跡は、火が消えてから随分経っているようだ。

「近くに人は？」

「気配は、ありません……あ、でも森の方から微かに」

衛士隊馬車を放置されている馬車の前方につけると、全員が降車

して周囲の警戒にあたる。森を抜ける街道では鳥の鳴き声や虫の音などが割とよく聞こえるものだが、この辺りはシンと静まり返っていた。

「こいつあ……」

焚き木の周辺を調べていたヴォーマルが、複数の奇妙な足跡を見つけて皆に注意を呼びかけた。一見すると単なる野生動物の足跡に見えるが、長すぎる爪部分や足の大きさ、体重を示す沈み込んだ深さなどから魔獣の足跡だと推測できる。

「おいおい、まじかよ」

「魔獣か……結局ノスセンテス行きの際は遭遇しなかったけど、俺達だけで対処できるかな？」

「まあ、一匹くらいなら何とでもなりやすが……」

「この足跡を見る限り、複数、最低でも三匹はいると思われる」

これは予想以上に危険な状況かもしれないと、悠介は何時でも防壁を出せるよう予め安全地帯の準備を整えておく。

基本的にカスタマイズする地面の範囲を決めてブロック状に固めるマツプアイテムデータのコピー&ペーストを繰り返して、防壁を組む為の資材を作るのだが、それなりに大きな防壁を造る場合、材料にする地面のカスタマイズにも対応の時間が掛かるのだ。

「っ！　だ、誰か来ます……風技と土技の波動……多分、三人くらいです」

「ヴォーマル、誰すいか何頼む」
「了解」

エイシャとスンには馬車を背に周囲の警戒をさせ、イフヨカも二人の所まで下がらせつつ引き続き索敵の続行。シャイド、フォンケと共に迎撃態勢に入った悠介はヴォーマルに誰何を任せた。

やがて、木々の隙間から冒険者らしき風体の男が三人、這い出すように姿を見せる。

「止まれ、お前達の身分と所属を言え」

「え、衛士隊か？」

「俺達は通商協会に雇われた調査隊の者だ」

「こつちは怪我人が出てるんだよっ 救援に来てくれたんじゃないのか？」

彼等は消息が分からなくなっていた冒険者グループだった。伝達係りの仲間が負傷して、連絡が取れない状態にあつたらしい。振り返って指示を仰ぐヴォーマルに、頷いて応える悠介。とりあえず、エイシャを呼んで怪我人の治癒にあたらせる。

「魔獣と奇妙な波動？」

「ああ、最初は風技の索敵が何かかと思つたんだが……どうも違うらしい」

「あの波動に包まれてから、急に神技の調子がおかしくなつたんだ」

「炎技の灯りは消えるし、移動補佐の風も纏まらなくなつて……」

とにかくその場を離れてキャンプまで戻ろうとしていた所を魔獣に襲われ、応戦すべく振るわれた攻撃系神技も威力が上がらず、散り散りになりながらどうにか街道まで出られたものの、仲間のうち二人が行方不明。

キャンプの馬車近くを暫らく魔獣がうるついていたので、森に隠れて息を潜めていたのだそう。負傷した仲間はそこそこ深い傷を負っていたのだが、回復薬でどうにか凌いでいたという。

「風技の伝達を同じ風技で阻害するのなら分かるが、付与系や攻撃系の神技まで阻害されたつてのは……」

「そういう能力を持つ魔獣が居るつて事か？」

魔獣の事に詳しく無い悠介は普通にそういう種類の魔獣が居るのかと考えたが、ヴォーマル達は「ありえない」と首を振る。魔獣は変異の影響を受けた神技の属性を持つ事こそあれ、その属性の神技を行使する事は無い。

ましてや神技の阻害効果を持つ魔獣など、存在していればカルツイオ全土に普く全ての神技人に対する脅威として、各国が総力をあげて狩り尽くす筈だ。

今回の件には、恐らく他者の神技に阻害効果を持つ特殊な神技の使い手が居るのだらうと結論付けられた。

「魔獣に関してはブルガーデンの例がありやすからね、どうやってか手懐ける方法があるんでしょ？」

「何れにせよ、魔獣の調査に来た彼等が襲撃されたという事は、これまでの魔獣被害は組織的に行われた犯行と考えられる」

魔獣を使う盗賊団的な組織がこの付近に潜んでいる可能性を示すシャイードは、一度街に戻って応援を呼んだ方が良いと進言する。

だが、その推論には冒険者グループの三人が疑問を呈した。

「まっつてくれ、そんな組織がいるなら俺達だつて気付ける筈だ」

「確かにおかしな神技の波動は感じたが、人の気配は無かった」

「まだ仲間の二人が近くにいてもかもしれないんだ」

街に戻る前に仲間の搜索と、魔獣の巣と思しき場所の調査を訴える三人。彼等にも熟練冒険者としてのプライドと自負があり、シャイド達の推論にあるような集団が居たとは思えないと反論する。

「そうは言ってもねえ」

「隊長、どうします?」

一度街に戻つて傭兵達を動員するか、このまま行方不明者を搜索しつつ調査を続行するか、判断は悠介に委ねられた。

「うーん、これで良かったんだろうか」

「わたしはユウスケさんの決めた事に従いますよ? もつと自信を持ってください」

悠介は搜索と調査の続行を決めた。行方不明者二人に生存の可能性があるのなら、ここで一旦街に戻るより、一刻も早く見つけ出してやった方が生還の確率も上がるだろうという考えによる判断だ。

「あつしらも隊長の指示に従いますぜ」

「もとより、我々は隊長の部下なのだから、従うのは当然の事だ」

「まあ、イザとなったら隊長に皆でも出して貰って引き籠もっちゃまえば問題ねーっしょ」

「それは隊長の力に頼り過ぎよ……。でも、私も隊長の判断を支持します」

「わ、私も……」

斯くして、街道脇に拠点となるプチ砦を出現させた悠介は、怪我を負った冒険者とその付き添いを残し、案内役の冒険者と共に彼等が森の奥で感知したという魔獣の巣らしき場所へと向かった。

プチ砦を出現させた時の冒険者三人に見られた反応については概ね何時も通りで、特筆すべき事は無い。十数秒の彫刻化だ。

昼間でも薄暗い森の中、帰り道と方向を見失わないよう目印をつけながら進むこと暫らく、闇神隊一行は冒険者達が特に注意すべき場所として印を付けた木が見える位置までやって来た。

「この辺りからだ、魔獣の気配に奇妙な波動が混じり始めたのは「イフヨカ、どんな感じだ？」

「確かに……、魔獣の気配に混じるような、神技の波動を感じます。けど、何の神技なのかまでは……」

隊長の判別不能な神技の波動とはまた違う。もつと自然な性質を持つ、感覚としては神技の波動のだが、気配そのモノのようにも感じる奇妙な波動だと、説明するイフヨカ。

ここまで細かく表現出来たのは、イフヨカが無技人の気配を神技の波動のように感知できる能力を持つているからこそである。『無技人の気配』等と言う感覚的に比較出来る対象を知らない普通の神技人にはとにかく『妙な波動』としか表現できない。

「ふーむ、それってその魔獣から出てる波動で事じゃないのか？」

「あ……！　そうかもしれませんが、そんな感じがします」

そのやり取りを聞いたヴォーマルとシャイドが顔を見合わせ、何かを考え込む。先に口を開いたのはシャイドだった。

「もしかしたら、隊長の言っていた事が正しかったのかもしれない」
「ん？　どゆこと？」

「……あつしらは常識で考えてやしたが、隊長は尽くその常識を破つて来た方だった事をすっかり失念してやしたよ」

「まあ、普通は神技を阻害する能力を持つ魔獣とか、ありえねーって考えるよな」

フォンケが二人のフォローとも取れる発言で補足する。今まではそんな魔獣が存在するとは考えられなかったが、これから先もそうであるとは限らない。

或いは、樹海の奥ではそういう種類の魔獣が普通に生息していたのかもしれないし、偶々現れた新種なのかもしれない。

「街道周辺から追いやられた魔獣が、長年掛けて進化したとも考えられる」

何れにしても、放置すればとんでも無く厄介な事になりそうだと、一行はその魔獣の巣を殲滅する為に先へと進む。

巢に近付くにつれ、奇妙な波動も徐々に強くなっていくのが分かった。印の木を過ぎて暫らく進んだ辺りまで来た時、案内役の冒険者がこの付近で魔獣に襲われたと言って周囲の警戒を促す。

「…………… 隊長、神技が安定しなくなつてきやしたぜ」

「私もだ、上手く水球が形成できない」

「風が散らされちまう、これ以上の維持は無理だ」

ヴォーマルが腕に灯していた炎技の明かりは不安定に明滅を始め、シャイドも水技の制御に乱れが生じて攻撃用の水球を形作る事が出来ない、奇妙な波動による影響を報告する。フヨンケも移動補佐の風を維持できなくなつた。

「イフヨカとエイシャは？」

「か、風が乱れて…………… 風技の、伝達妨害に似てますけど…………… 神技の波動が、食べられてるみたいなの…………… へ、変な例えですけど」

「…………… 駄目です。私の方も、上手く力が纏まらないみたいで」

「ん…………… こりゃヤバイな」

悠介は自分の力はどうなのかとカスタマイズメニューを呼び出して確かめてみたが、画面に乱れも無く特に変わった様子はない。奇妙な波動の影響を受けているようには感じられなかった。

このまま進む事を躊躇うも、ここまで来ておいて引き返したのでは意味が無いという事で、全員が携帯している武器を装備して周囲を警戒しつつ更に奥へと踏み込む。案内役の冒険者が近くに仲間が居ないか呼び掛けてみたが、応える声は無かった。

奇妙な波動が強まる中、とうとうヴォーマルの炎技による明かりが完全に消えてしまった為、案内役の冒険者が鞆から取り出した不思議な淡い光を放つランプで明かりを確保する。

他のメンバーも皆、一切の神技が行使できない状態になった事を確認し、いよいよ調査の中止を考え始めたその時

「あつたぞつ　魔獣の巣だ！」

冒険者が指差した先、大きく刳り貫かれた木の根元に、鳥の巣にも似た蔓と小枝と葉で固められた魔獣の巣があつた。

「まさか本当にあつたとは……」

「あれが魔獣の巣なのか？　どんなのが住んでるのか想像つかないな」

周囲に潜んでいるかもしれない魔獣の襲撃に備え、非戦闘系のイフョカやエイシャを円陣の内側に入れるような形で隊列を組みつつ巣に近付いていく。巣の中の様子が窺える距離まで来た時、中でモゾモゾと動く棒状の物体が巣の枠から転がり落ちた。

「っー！」

「……いやー！」

エイシャとイフョカが思わず悲鳴を上げて眼を逸らす。スンも顔を強張らせて固まっている。先頭で身構えていたヴォーマルやシャイド、フヨンケ達は何時かの砦の中で見せた神妙な顔付きになり、案内役の冒険者の表情には絶望の色が浮かんだ。

魔獣の巣から転がり落ちたのは人間の腕。巣の中では芋虫のような姿をした魔獣の幼生が、角切りにされた人体の肉に齧り付いてい

た。ぱつと見ただけでも数十匹は蠢いている。肉塊を貪る巨大な蛆を思わせる魔獣の幼生。

その内の一匹が餌からあぶれたのか、先程こぼれ落ちた腕に齧りつこうと巣から這い出して来た所を、腕を調べていた冒険者にブーッの踵で踏み潰された。その腕は行方不明になっていた仲間のモノだったらしい。

「くそっ！ くそっ！ ふざけんなよ！ なんでこいつが……こんなヤツらに食われなきゃなんねーんだっ！」

腕の指先から遺品となった指輪を回収した冒険者は、吐き出すように叫びながら潰れた魔獣の幼生を何度も踏みつける。

「妙だ……。この巣は、おかしい」

皆が絶句している中、シャイドが巣の在り方や中に放り込まれている分割された人体と魔獣の幼生に不自然な点があると冷静に指摘した。巣の周囲に魔獣の縄張りを主張する跡などが無く、一つの巣に生息する幼生の数も多い。

また、巣の中に転がる人体も魔獣の爪や牙によって引き千切られたような状態ではなく、刃物のような道具を使って等分に切断されている事が見て取れる。この巣には人為的に作られた痕跡が窺えるというのだ。

「何者かが意図的にこの場所へ巣を設置して、幼生を飼育していると思われる」

よく見ると、巣の回りには無数の骨が散乱し、朽ちた人体の一部が転がっている。

「一体誰が何の目的で……」

「隊長、こりゃ早いとこ巢を片付けて街に戻った方がいいですよ」

「そうだな、伝達　は使えないんだっけ」

神技全般が使用不能状態なので、巢を焼き払うにも火を起こす所から始めなくてはならない。まずは巢の中に放り込まれている人体の回収と、魔獣の幼生駆除から始めようと活動を開始する闇神隊の面々。

一時の激晃の後、沈んでいる様子だった案内役の冒険者も、自分の仕事を果たす為にノロノロと身体を動かす。

ヴォーマル、シャイド、フォンケが短剣で巢の中の幼生を一匹づつ仕留めていき、冒険者は携帯用油木を組むと道具を使って火をおこした。

エイシャとイフォカ、スンは足元の枯れ木を集めて、その火にくべる作業を受け持ち、悠介は冒険者から借りたランプで巢を照らしてヴォーマル達の処理を手伝う。

ちなみに、このランプはトレントリエッタ領の街でしか取り扱われていない独自の技術が使われる一般的なランプで、ある植物と鉱石を組み合わせる事で発光させる火を使わない珍しいモノだ。

神技を阻害する奇妙な波動は今も続いており、止む気配も無い。冒険者達を襲った三匹の魔獣が何時襲ってくるかもしれないという緊張感の中、巢の処理作業が進められて行く。

そうして魔獣の幼生が全て処理され、巢の中から人体の残った肉片が回収されると、巢に浄化の炎が放たれる。その瞬間

「っ！　隊長、魔獣の気配が……！」

イフヨカは索敵の風が使えない状態なれど、辛うじて気配で魔獣らしき存在の大まかな位置を探り当てていた。先程からこちらの様子を窺うように遠巻きにあったその気配が、急速に近付きつつある事を警告する。

「み、右と正面、それに背後からも……………あれ？ うそ、どうして……………増えてる？」
「イフヨカ、落ちていて状況を詳しく説明しろ、ゆっくりでいいから」

どうにも不安定な言葉を呟きながら狼狽し始めるイフヨカを落ち着かせつつ、悠介はカスタマイズメニューの画面内で周囲に落とし穴の設置と防壁を作る準備を進めて行く。

「あ、あの気配の数が……………、増えたり減ったり……………急に位置が変わったり、なんだか変なんです」

「なあ、その子の索敵で大丈夫なのか……………？」
「ご心配なく、彼女は優秀ですんで」

見た目からして衛士らしからぬイフヨカの頼りない言動に、ヴォーマル達と並んで武器を構えている冒険者は心配そうな表情で問うが、悠介は『問題ない』と返して伊達に闇神隊のメンバーに就いている訳ではない事を主張した。

フォンクランクの最強部隊と謳われる闇神隊、それを率いるデイアノースの英雄がいうなら確かだろうと冒険者は納得した。肩に置かれた悠介の手を気にしながら、ちよつと赤面しているイフヨカ。

半分その場凌ぎのフォローだったのだが、あながち間違いでモな

い。今この場で、周囲に潜んでいると思しき魔獣の気配を探り出す事が出来ているのは、僅かな気配を神技の波動のように読み取る事が出来る彼女だけなのだ。

しかし、そのイフヨカを持ってしても、この奇妙な波動の中で正確な索敵を行う事は不可能だった。

「うっ……近くに居るのは、確かなんです……でも、気配がなんだか変で」

「落ち着けて、そういう風に攪乱するやつなのかもしれない」

視界も足場も悪い森の中、神技を阻害する波動によって敵の位置も規模も分からない。複数の魔獣に囲まれているかもしれないという状況にありながら、終始落ち着いた様子で未知の魔獣に対する推測までしてみせる悠介に、皆の不安が軽減されていく。

悠介は自身のカスタマイズ・クリエート能力に波動の影響が無い事や、装備品の鎮静効果等に加え、元世界でのゲームの知識によって『そういう系等のモンスター』という概念で魔獣という存在を認識しており、魔獣に対する既成概念が殆ど無い。

故に、カルツイオの人々にとつては非常識な存在に対しても『そういうモノなんだろっ』で済ませる為、受けるショックが少ない分落ち着いた対応が取れるのだ。何より、闇神隊の仲間を信頼している気持ちが悠介に毅然とした態度を取らせていた。

そして、そんな悠介をこの場で誰よりも信頼している人物が、この状況を打開する鍵となった。

「……！ そっっ」

ピュンッ と風を切る音を立てて、放たれた矢が木々の隙間へと

消えて行く。途端、一帯を覆っている阻害の波動が一瞬乱れたように揺らぐ。更に別方向へ放たれた矢が、木々の奥から獣の悲鳴を響かせた。

「こいつあ……隊長、神技が使えますぜ」

「阻害の波動が薄れていく」

無技人は神技人のように神技の波動を感じる事は無い。スンはこの状況下で一人、阻害の波動の影響を全く受けておらず、魔獣の気配を探るような事は出来なかったが、目視で木々の間に怪しい影を見つけてソレを射つたのだ。

阻害の波動が薄まった事で、全員の神技が行使可能になり、イフヨカの索敵も精度を増す。

「あ！ 居ましたっ あの木の間に二体、一体は向こうに離れていきます！」

「スン！ シャイード！」

「はいっ！」

「フォンケ、彼女の弓に補佐を」

スンは直ぐさま矢を番えた弓を構え、シャイードは水球を練りながらフォンケにスンの補佐をするよう指示を出した。付与系の風技は強化系程の効果は得られずとも、ある程度武器の扱いを補佐する事も出来るのだ。

勝手に指示を出した事を目で詫びるシャイード。

「ナイスフォローだ、シャイード。つーわけでフォンケ頼む」

「あいよっ 行くぜスンちゃん」

風の補佐を受けたスンの矢と、シャイードの練り込まれた水球がイフヨカの指定する場所へと撃ち込まれると、辺りを覆う障害の波動は完全に消え去り、魔獣の気配はトレントリエッタの樹海の奥へと遠ざかって行く。

「どうだ？」

「……もう、居ないみたいです」

ふと気が付くと、先程まで静まり返っていた一帯はまるで思い出したかのように、鳥の鳴き声や虫の音に溢れていた。

61話：曇りのち晴れの憂鬱

現場の街道脇には小隊を組んだ傭兵達が集まり、調査範囲について確認が行われている。不自然な場所に建ちながらも周囲の景色に溶け込んでいるプチ晝は、そのまま調査の拠点に使えらるゝとして、水や食糧が運び込まれていた。

「じゃあ、俺達は先に戻りますので」

「お疲れ様です！ 後の事は我々にお任せを」

傭兵部隊に調査活動の引き継ぎを済ませた闇神隊は、一路宿場街へと戻る夜の街道に衛士隊馬車を走らせる。冒険者グループはまだ現場で活動を続けるようだった。犠牲者の遺体回収、運搬などは明日以降に行われるらしい。

「スンは寝ちゃったのか？」

「はい、きつと緊張で疲れていたんだと思います」

エイシャに膝枕をされながら眠っているスンをそっと覗き込んだ悠介は、そこに安からな表情を見つけてホッと一息ついた。街に着くまで寝かしておいてやろうと思いつつ、軽く前髪を撫でる。

「あつ ええと、代わりましょうか……？」

「いやいやいや、そんな所に気を使わなくていいから。つか、恥

ずかしくて出来んわっ」

スンを膝枕するより寧ろされたいぞ等とおどけて見せる悠介。反対側の席でイフヨカが膝を揃えながらソワソワしていたが、悠介に気付かれる事はなかった。

深夜前、宿場街に戻った悠介達は明日の朝にでもサンクアディエツトへの帰途に就く予定で今夜はこのまま一泊する事になり、通商協会支部の宿舎にて遅い夕食をとりながら今日の事を振り返っていた。

「スンは良くやったと思うよ」

「同感ですな、いい働きだったと思いやすぜ」

「彼女の一撃が状況の流れを変えたとも言える」

「あ、ありがとうございます」

皆からの賞賛にもちもちと照れるスン。凄惨な現場を目撃した事も含めて、初任務でいきなり本物の魔獣、それもかなりの変り種との戦闘を経験するなど、何処か悠介と被る所に不思議な縁を感じられなくもない。

「しかし、あの魔獣……一体何者の仕業なのか」

「姿はよく見えなかったが、連係して動いてたように感じたな」

魔獣の話題が出たついで、シャイドとヴォーマルが人為的な巢と特異な能力を持つ魔獣について軽く考察を行い、神技そのモノを

阻害する力や、組織的な動きを見せていた事などから軍用に調教された魔獣かもしれないという話が展開される。

「軍用の魔獣なんてのもいるのか……」

「あくまでも、今回出くわした魔獣に関して、ですがね」

「結局、あの時の推察は両方当たっていたのかもしれない」

つまり、当初ヴォーマル達が考えていた『手懐けられた魔獣』と『それを扱う者の存在』に、悠介が指摘した『神技を阻害する能力を持った魔獣』という、今までなら考えられなかった要素が組み合わさっていた事になる。

ヴォーマルが挙げていたブルガーデンの例から言えば、魔獣を戦略的な要素として使えるか否かで考えた場合。単にその土地を荒らす目的でなら、何処からか捕まえて来た魔獣をその地に放つてやるだけでいい。

だが、何らかの戦略的な目的で使うとなると、敵味方の区別も出ず、どう動くかも分からないのでは扱い難い。ブルガーデンの工部隊がフォンクランクの牧場に放つていたと思われる魔獣も、どこまでコントロールされていたかは不明だ。

逆にいえば、そこが解決されたなら、魔獣は強靱な戦闘用獣兵として使えなくはない。

「それを試みている者が、トレントリエッタに居るかもしれないという事が」

なににせよ、ここから先は上が判断する仕事だろうと、悠介達は一先ずの任務達成を労い合ったのだった。

ザッルナーの風月の十二日目、夕刻

大勢の処分者を出したノスセンテス滅亡の余波も落ち着きを見せ始め、ガゼツタもこれといって大きな動きを見せていない今日この頃。サンクアディエツトに無事帰還を果たした闇神隊は、報告を終えて今回の任務を完了した。

メンバーはそれぞれ通常待機に入り、スンを屋敷に送り届けた悠介は宮殿の私室に籠って宿場街で購入した道具を弄り始める。

「スン！ ユースケ！ ん？ スンはおらんのか」

所用で席を外していたらしく、闇神隊が帰還した時に姿を見せなかったヴォレットが早速やって来ては部屋の中を見渡す。

「疲れてるみたいだったからな、先に屋敷へ帰しといた」

「ふむ、そうか……ご苦労であったな」

ぼりつと頬を一掻きしたヴォレットはそう言うと、悠介が弄っている道具に目を向ける。円柱形の筒に四角い傘を被せたような吊り金具付きのランプ。

見た目はよくある普通のランタンっぽいのが、灯す明かりは淡い薄青か薄緑色をした不思議な光を放っている。

「リーンランプじゃな、それをどうするのじゃ？」

「ほー、これってリーンランプっつーのか」

「なんじゃ？　もしかして知らずに買って来たのか？」
「ああ、なんか面白そうだったんで」

トレントリエッタ領の街では普通に使われている一般的なランプ。特定の木の皮に張り付く性質を持つ『太陽苔』と呼ばれる苔に『水石』という鉱石を合わせる事で発光する特殊なランプだ。一度の苔の取替えで十日ほど持ち、油の代わりに水を注す。

光源である太陽苔の張り付く木がトレントリエッタの樹海でも一部にしか群生しておらず、特定の環境下でしか育たない木なので、苔の採取場所が限られている。

また、名前とは裏腹に太陽苔は非常に乾燥に弱く直ぐに枯れてしまふ為、トレントリエッタ地方のような湿気が多い気候以外の地への運搬が困難であるという条件が重なり、あまり他国へは出回っていない。

そうだった理由により、リーランプは火を使わず安定した明かりを得られる安全且つ便利な道具でありながらトレントリエッタ以外では普及していないのだと、ヴォレットが詳しく教えてくれた。

珍しいモノ好きな性分のヴォレットだけに、以前取り寄せた事もあったらしいが、やはり太陽苔の入手が困難で、恒久的な部屋の照明には使えなかったそうだ。

「苔の栽培を試みている研究者も居るようじゃがな、上手く行っていないみたいじゃ」

「ふーむ、太陽苔か」

例の宿場街はトレントリエッタ領に近い街だったので、ランプの光源も手に入りやすく普通に使われていた。だが、どちらかといえば乾燥気味な風土であるフォンクランクのような地域で使うには、

常に一定数の苔を確保出来なければ難しい。

ちなみに、水石は割りとは簡単に入手できる。リーンプ以外に使い道が無いので、マニアックな道具屋くらいでしか扱ってないそうなの。

「うちの地下で栽培してみようかな。屋敷で暇そうにしてるラーザツシアにでも管理させて」

「ほほう、なかなか面白そうじゃな」

あまり外を出歩けない彼女の良い息抜きになるだろうし、薬品研究にも使えるかもしれないと、透明度の低いくすんだ筒の中で光を放つ太陽苔を眺める悠介。

栽培用のケース等を必要に応じてカスタマイズする事で環境を調える。ギミック機能を駆使すれば、温度や湿気を一定に保つというような事も難しくはない筈だ。

栽培が成功すれば、今の油木を使った明かりに取って代わる便利な照明として普及させる事が出来るだろう。

「今度またトレントリエッタに太陽苔の生態とか調べに行きたいな」

「そうじゃな……今は時期が悪いから、状況が落ち着いてからならどうにか出来るぞ」

「あーそっか、魔獣の事があつたからなあ」

「う、うむ」

任務の事は最初の触れ込み通り、魔獣退治になったので結果オーライかと呟く悠介。スンの活躍もそれとなく事件の概要に織り交ぜて報告してあるので、クレイヴオルが示した策の第一歩は上手く踏み出せたと言える。

「犠牲になった冒険者は、気の毒だったがな……」
「……ヴォレット？」

事件の犠牲者に配慮を見せるヴォレットに、悠介は若干の違和感を覚える。ヴォレットは以前、ギアホーク砦より生還した悠介と感情の行き違いによる軋轢が生じた経験から色々と学び、彼女なりに想う所があった。

今回の任務を安全そうだからと薦めた手前、実際はかなり危険な任務になった事を気に病んでいる部分もある。それを感じ取った悠介は、どう取り成したものと戸惑う。二人の間に、少し余所余所しい空気が流れた。

『……らしくないな』

悠介は空気を変えるべく話題を振った。

「あ、そうだヴォレット」

「？ なんじゃ？」

「そろそろ例のアレ、製作に入るからな」

ソルザックに研究開発を任せているギミックモーターの新しい試作機が近々出来上がると聞いた事を踏まえて、搭載する入れ物を作っておく。所謂、ヴォレット専用ゴーカートの製作。

「おお！ 遂にアレの完成品が出来るのじゃなっ？」

悠介が自走実験で作った動力付きソファアの事を思い出してか、わくわくした表情で瞳を輝かせるヴォレット。宮殿内の廊下を爆走

させる訳にはいかないので、訓練場のような場所を使おうと走行実験の計画を話し合う。

「俺の予想だと、ちょっと小走りするくらいの速度は出ると思うんだよね」

「おお〜〜楽しみじゃのう」

互いの余所余所しさは無くなっていた。

62話：風の暗躍

ブルガーデンの第二首都、要塞都市パウラ。その中枢施設である議会議堂の地下通路を歩きながら、レイフォルドは軽い調子で、傍らを歩く案内役の女性団員に声を掛けた。

「ここも少し雰囲気が変わったねえ。君もそう思わない？」

「そうなんですか？ 私は団に入ってあまり長く無いので、よく分からないです」

レイフォルドの事は既にブルガーデン政府上層のみならず、精鋭団の中でも『やり手の諜報活動家』として知れ渡っている。

その為、彼の案内役には組織の情報に疎く、レイフォルドも一目置く存在であるゼシャルド元神技指導官に縁深いとされている新人団員、プラウシヤが仰せ付かっていた。

今回、レイフォルドはエスヴォブス王から任務を受け、リシヤレウス女王の許可も得た正式なルートでこの施設を訪れている。

「この先です」

「ありがとう、ここからは僕だけでいいよ」

中枢施設の地下の地下、国家級重罪人や命を狙われる危険を負った身分の高い罪人を収容する地下独房区画。

イザップナーがパウラの最高指導官として政務を取り仕切っていた頃。フォンクラंकに対する挑発工作の中で、どうやったのかサックアディエットの牧場に魔獣を放つ事が度々あった。

公にはされていないが、ある程度命令に従う魔獣だった事が、嘗て風の団に所属していた者の証言で明らかになっている。

「やあ、お久しぶりです」

「……貴様か、何の用だ」

「ちょっと御伺いしたい事がありました、魔獣の飼い方 買い方 かな？ についてなんですけど」

魔獣の飼育。飼い慣らされた魔獣の入手経路について、レイフヨルドは獄中のイザップナーを尋問する為にやって来たのだ。怪訝な表情を向けるイザップナーに『神技を阻害する能力を持つ魔獣』の話聞かせる。

「調整魔獣か……」

「おや？ その反応と口ぶりから察するに、既に存在を知っていた？」

「あれは何処の出身かは知らんが、風技の商人から買い付けたものだ。当時はまだ神技阻害能力は低かったようだがな」

元々は比較的 안전한草食系の魔獣を使って適当に畑でも荒らしてくれればと思いい、魔獣の売買をしているという商人に取り引きを持ち掛けたのだが、捕獲した野生の魔獣ではなく飼育された魔獣だと聞いてイザップナーも驚いたらしい。

売り込みに来ていた商人は、何れ兵器として使える商品に完成させると言っていたそうだ。

「その商人の行方や背後関係は？」

「知らん。一応ヴォーメスト等に調べさせはしたが、ノスセンテス領に入ってから足取りが掴めなくなると言っていたな」

自分を裏切つて逃げた元腹心の名を口にして若干眉を顰めるイザツプナーだったが、その腹心が辿った一連の軌跡と後の顛末を詳細に聞かされると、複雑な表情のまま鼻で哂ってみせた。

「ふんっ……バカな奴だ」

必要な情報を聞き終え、そろそろ引き揚げようかと扉に向かうレイフォルドの背中に、イザツプナーが一つ思い出したように付け加えた。

「そういえば……あの商人、時々レントリエッタ訛りの言葉を使っていたな。貴様と同じ様に」

「……ふむ、なるほど」

『参考になりましたよ』と背中越しに答えたレイフォルドは、そのまま要人独房を後にした。

レイフォルドがパウラの地下に赴いていた頃、ヴォルアンス宮殿ではフォンクランク王室からレントリエッタに向けて送られた問

い合わせに対するトレントリエッタ側からの返答を議題にした会議が、王を交えながら行われていた。

その翌朝、食事の席にてクレイヴォルから事件に関する自国の動きや会議の内容などを聞き出すヴォレット。闇神隊の係わった件だけに、また何か大きな出来事に繋がるかもしれないと、情報収集に余念が無い。

「ノスセンテスのように国家が絡んでいるという事はないのか？」
「今の段階ではまだ何とも判断出来ません」

貴国の領内に魔獣の能力開発を進める外法集団がいるのでは？
という問い合わせに対するトレントリエッタ側からの返答は、『我が国にそういった研究活動を行う機関は存在しない』という内容と、この件に関する対策について。

「人間を餌に魔獣の飼育をするような集団は危険だという事で、トレントリエッタ政府も調査に乗り出すとの事です」

フォンクランクからの問い合わせと通商協会からの通報を受け、現在は全力で状況の把握に動いている最中らしい。

「単に道を踏み外した商人集団ぐらいなら良いのじゃがのう」
「今回の魔獣事件については未だ全容が明らかになっていませんので、調査結果が纏まれば規模も明らかになるかと」

街道で魔獣と遭遇するなど今時ありえない、という意識から見落とされがちだった被害報告も、改めて件数の洗い直しと内容の検証が行われている。

「当面は静観するしかないわけか……」

ヴォレットはそう呟くと、咀嚼していた鳥肉を飲み物で一掃して朝食を終えた。

一方、悠介は自分の屋敷でスン達と食事を取りがてら、リーンプの光源となる太陽苔の栽培について話し合っていた。悠介の奴隷であるラーザツシアも『あくまでも建て前としての奴隷』とする悠介の方針で、同じテーブルに着かせている。

「苔の栽培なんだけど、ラサにも手伝って貰っていい？」

「ああ、そうだな。彼女にも何かさせてあげたいし」

国家公認の唱姫は廃業したラサナーシャだったが、悠介に唱を捧げた事で王室から悠介に所属を移し、悠介個人が所有する唱姫としての立場を確立している。

彼女を買うには悠介を通さねばならず、悠介は本人が望まない限り客を取らせる事もしない為、現在はラーザツシアと同じく、割と暇そつに過ごす日々を送っているのだ。

栽培を試みていたという研究者の情報や、苔の入手にはラサナーシャのコネを活用する。今後、ラーザツシアとラサナーシャの二人にはリーンプの研究開発を手伝ってもらおう事になった。

「さて、それじゃあ今日も宮殿に出勤しましょうかね」

「あ、はい。直ぐに仕度してきます」

悠介が席を立つと、スンは闇神隊の従者服に着替える為に部屋へと上がっていった。

「行ってらっしゃいませ」

「行ってらっしゃい」

使用人とレーザーザッシアに見送られ、スンを連れて屋敷の馬車で宮殿に向かう悠介。新型ギアボックスの試作機は昨日の内にソルザックが宮殿まで届けてくれる事になっていたので、衛士隊の控え室が自室にでも運び込まれているだろう。

「スン、これ頼むな」

「分かりました。今回は土神隊員の方にですね」

土技の増幅効果を持つ指輪をスんに預ける。今日は神技の指輪を配る日だ。ノスセンテスから帰還して以降、各宮殿衛士隊員に神技の指輪を届ける役はスんに任されていた。

その効果なのか、宮殿内でスンの存在を疎ましく囁かれていた声も、今ではすっかり鳴りを潜めている。

スンに対するヴォレットの変わらない接し方と、まだ従者としてではあるが闇神隊の一員にも数えられるようになった事で、単なる『姫様の気まぐれ』等ではない事に気付き始めたのかもしれない。

「今日も弓の練習？」

「はい、バナナおばさんの弓とヴォレット様に貸して頂いた弓とで交互に射るんです」

命中補正の効果を付与してあるバナナの弓で感覚を掴み、通常の弓を使う事で地力を鍛える効率のよい修練法だという。

「あー、その手もあるなあ。俺も基礎体力以外に何か鍛えてみようか……剣とか」

「ユウスケさんが、剣ですか……？」

じーつと悠介の顔を見て、愛想笑いを浮かべながら小首を傾げるスン。想像できなかつたらしい。軽くへこむ闇神隊長殿。

「あつ あつ ごめんなさい！ そういう意味じゃなくて、だってユウスケさんってあまり猛々しい感じじゃないから」

「いや、それはそれで男としてどうかという問題が……」

馬車の座席で某真っ白に燃え尽きた拳闘士っぽく乾いている悠介に、くすりと微笑んだスンはそつと腕を握ると、若干身体を寄せながら耳元で囁きかけた。

「わたしは、ユウスケさんの事、頼りにしていますよ？」

「スン………ラーザツシアの入れ知恵か？」

積極的に触れ合おうとする自らの行為に照れて頬を染めているスンに、悠介はいきなり核心を突いた。

「えっ！ いえあのっ べ、別にこれは……」

「はあ~~~~もう、スンに妙なコト教えんなって言っとなきゃいかな」

「う……わ、わたしだって……そういう事に興味くらい、持つんです」

「ん？　なんか言ったか？」

ぼしよぼしよと車窓の方を向いて何事が呟いているスンに声を掛けるも、『なんでもないです』と拗ねた雰囲気で返されて悠介は首を傾げる。

高民区の通りを駆け抜けて行く悠介達を乗せた馬車。向かう先に見えるは陽光を浴びて輝くヴォルアンス宮殿。

サンクアディエットの一日は、今日もこんな風に始まるのだった。

63話：暦末の休暇初め

「わははははっ」

「姫様っ そろそろお稽古の時間です！」

宮殿衛士隊の訓練場にて、試作動力車に乗って楽しそうに走り回るヴォレットを追いかけて走り回るクレイヴォル。昨日、新型ギアボックスを受け取った悠介は早速木材を組み合わせて作った車体に搭載、現在ヴォレットが走行実験を行っている。

悠介自身がまだ乗り物の製作などに慣れていない事もあって、試作動力車は既存の馬車をそのまま小型化したような外観だ。

「今の馬車にそのままギミック動力を付けても使えなくはないか……」

「ユースケ殿！ 貴殿も手伝って下さい」

腕組みしながらヴォレットの駆る試作動力車を眺めつつ、今後の開発方針を検討していた悠介に、息を切らしたクレイヴォルが抗議を向ける。ヴォレットが面白がって逃げ回るので中々捕まえられないでいるらしい。

今回作られた試作動力車は、当初予想されていた『人が小走りする程度の速度』を上回り、『人が普通に走る程の速度』を実現していた。走って追いかければ並走は可能だが、そこから停止させるのは困難という微妙な速度だ。

車体が小さいので手を掛けようとすると中腰になり、走る速度が落ちて引き離される。無理に掴めばそのままバランスを崩して転倒引き摺られ兼ねない。というか、目の前でそれら一連の光景が展開された。

「……今度から外側に緊急停止装置でも付けておくか」

三メートルほど引き摺られて土塗れつちまみになった姿のクレイヴォルから御小言トルネードを食らっている涙目なヴォレットを横目に、車体後部の一部が破損した試作動力車を回収する悠介なのであった。

「ところで、そろそろユースケも休暇じゃな。来暦の舞踏祭はどうするのじゃ？」

「そっぴやそんなイベントもあつたな……」

着替えて席を外しているクレイヴォルの代わりにヴォレットを稽古事の教養部屋へ送り届ける悠介は、暦初めにあるお祭りの事を訊ねられてルフク村で収穫祭を過ごした時の事を思い出した。

あと数日で土の暦が終わり、風の暦を迎える。土の暦の初めに収穫祭があつたように、風の暦の一日目からは舞踏祭が催される。収穫祭の時よりも伴侶となるお相手探しの色合いが濃いお祭り、風の暦は結婚や婚約を交わす男女が多くなる暦だ。

「収穫祭の時は氣い遣わせちゃつたからな、今回は街まちに居ようか？」

「あ……氣持ちは嬉しいのじゃが、舞踏祭でわらわが特定の男性と共に居るのは不味いのじゃ」

婚約者候補組からのアピールが最も強くなる時期でもあり、一応、未来の夫を選ぶ側である者の勤めとして、彼等一人一人の資質を見定めるといふ名目で相手をしなくてはならないのだそうだ。

「めんどいのう」

「大変だな……」

はふうと憂鬱そうな溜め息を吐くヴォレットに、悠介は気休めかと思いつつも労いの言葉を掛ける。そうして、改めて目の前で赤毛のツートールを揺らす少女がこの国の時期王を迎えるお姫様なのだなという事を認識するのだった。

ヴォレットを送り届けた悠介は、試作動力車の走行実験に使った屋内訓練場とは別の場所にある屋外訓練場に顔を出す。ここでは投擲型の攻撃系神技を使う神民衛士隊員に混じって、スンが弓の練習に励んでいた。

「スン」

「あ、ユウスケさん」

白い従者服姿に少し大きめの弓を持ったスンが振り返る。

「でかい弓だな」

「はい、でも指輪のお陰で普通に引けるんですよ」

身長ほどもありそうな大弓を難なく扱う白髪の小柄な少女。 絵的

に『なんかいいなあ』と等と萌え気分が湧いた悠介は、知らず微笑みを浮かべていた。『優しい笑み』を向けられてどきまぎするスン。数日後に控える舞踏祭を意識して、こっそりラーザツシアから色々とレクチャーを受けているスンは、早速その効果が出始めているのかもと、乙女心を弾ませる。

スンが舞踏祭を意識するのには訳がある。カルツイオにおける女性の結婚適齢期は十六歳からになるのだが、今暦の前月初めに十八歳を迎えたスンは、正に適齢期の真つ盛りにあるのだ。

悠介の周囲には何かと魅力的な女性が多いという事で、以前よりも明確に異性として悠介を意識するようになって今のスンは、収穫祭で村の女性達に囲まれている悠介を眺めていた時に比べて焦りの気持ちも深くなっていた。

『美人じゃないし、可愛くもないし、これと言って取り得も無いし、お腹に酷い傷痕があるし、無技の民で田舎者だし』

そんな自分が今やフォンクランクの英雄と讃えられる闇神隊長ユウスケと並んでいられるのは、初めて邪神の祠で出会ってから、共に一つ屋根の下で暮らした日々の巡り合わせがあったからこそ。

ラーザツシアやラサナーシャ達が本気を出せば、自分なんかあつという間に視界から外れてしまふに違いない。闇神隊員のイフヨカも、気が付くと悠介の傍らに居たりして中々に侮れない。

これからも悠介の隣に立ち続けるには、他の娘たちこ以上の努力と積極的なアプローチを持って、ラーザツシアのアドバイスにある『既成事実』を勝ち取らなくてはならないのだ。胸中にそんな想いを膨らませていたりするスン。

なんだかとてもやる気に満ちて充実した雰囲気を感じている姿に『頑張ってるなあ』と感心しつつ、スンに元気を分けて貰ったような気分になった悠介は、邪魔しちゃ悪いからと訓練場を後にした。

「じゃあ、また帰る時に」

「あ……はい、それじゃ」

あまり話が出来ず、ちょっとションボリしながらスンは弓の練習を続けるのであった。

「俺も色々頑張らないとな」

屋外訓練場を出た悠介は、空いた時間でも利用して自身に宿る邪神の力を更に磨いていく事を考えた。

先日、馬車の中で話したスンの反応からして、シンハのように剣を振るう姿は自分に似合わないという事が良く分かったので、素直にカスタマイズ能力を開発する。

まずは最初に作ってからあまり使う機会も無かった戦闘用のカスタマイズデータをメニュー画面に呼び出した。

「落とし穴と防壁だけじゃあイマイチだよなあ」

屋内ではともかく、この前の任務のように野戦を強いられる状況になると、自身の周囲のみにしか効果の無い現在の戦闘用マップアイテムデータだけでは心許ない。

仕様も専守防衛型なので、攻撃手がいなければ只管相手が落とし

穴に落ちるのを待つしかないというのも問題だ。

「ここは発想を変えていくか」

新たな自分の『武器』を創り出すべく、悠介は捻り出したアイデアを戦闘用マップアイテムデータに反映させる作業を始めるのだった。

ザッルナーの風月の十九日目

休暇に入り、衛士隊の控え室でお土産の仕分けをしていた悠介は、舞踏祭だけは街に下りたくないフォンケや、家に居てもする事が無いヴォーマル達と雑談に興じながらスンが来るのを待っていた。

「隊長とスンちゃんはルフク村に帰省っすか」

「ああ、なんか俺がいるとヴォレットのお勤めにもかえって負担が掛かりそうだし、先生にも相談したい事があるからな」

その代わり、年末の自由祭では目一杯遊びに連れ回すので覚悟しておくようにと言われている。

「ゼシャールド氏に相談つてのは、例の魔獣の事ですかい？」

「そんなトコだ」

悠介の屋敷の使用人達にも休暇が与えられており、留守中屋敷を

管理するのはラーザツシアと使用人の中でも舞踏祭の趣旨に縁のない既婚者や高齢の者たち数人だ。太陽苔の栽培関係でラサナーシャにも自由に出入りする事が許されている。

「あ、そついや余所の街まで出る奴が結構いるつてんで、馬車乗り場が混雑してたなあ」

「早くしないと、使える馬車が無くなつちまいやせんかね」

『一台確保しておきやしようか』と腰を上げかけたヴォーマルを手で制した悠介は、馬車は使わないのでゆっくりしててくれと、ララの美酒が入った安酒の瓶を渡す。何処から取り出したのか、すかさずカップを用意するサポート上手なフォンケ。

馬車を使わずにどうやって村まで行くつもりなのかと、ヴォーマルは疑問に思っていたが、フォンケはどうせ隊長の事だからとあまり気にしていないようだ。

「おまたせしました、ユウスケさん」

「お、来たか。それじゃ行こうか」

ヴォーマル達に『良い休暇を』と軽く挨拶を向けて、悠介は衛士隊の控え室を後にした。一応、街の出口までは馬車を使って下りる為、地味な街服に着替えたスンを伴い宮殿の馬車乗り場へと向かう。何時ぞやのように御土産袋を満載したおばちゃんのような格好の闇神隊長殿と、何に使うのか長めの木板を二枚ほど担いだ専属従者ユウスケの組み合わせは、尽く廊下で擦れ違う人々の首を傾げさせた。

「本当にこんな所でいいのですか？」

区画門を越え、展望塔広場を過ぎて街の外周までやって来た悠介達は、そこで馬車を降りて運んでくれた御者さんに礼を言う。御者は不思議がりながらも、馬車の利用者が待っている宮殿へと帰って行った。

「さてと、じゃあ街道まで歩こうか」

「はい」

ルフク村に続く一本道となる街道の前まで歩いて来た二人は、そこでスンが担いできた長板を地面に降ろした。ど真ん中は街道を行く馬車と鉢合わせしかねないので、端っこの方にベタリと敷く。

悠介は地面に敷かれた板の端に立つと、カスタマイズメニューを開いて移動用マップアイテムデータを呼び出し、二・五メートルほどの木板二枚を一枚に繋いだ。

そこから更に立ち位置となる足場を残して細く長く、約十メートルの細板にカスタマイズする。

「ユウスケさん、荷物持ちます」

「ああ、頼む」

ここからはカスタマイズ操作に集中する必要があるので、スンの申し出に頷いた悠介は荷物を全て任せる事にした。

悠介がよっこらしよと持っていた荷物を、ひよいと軽々受け取るスン。装備に付与した特殊効果による力の底上げが無くとも、スンの方が悠介より腕力は上だったりする。

「途中で多少跳ねるかもしれないから、足元に気をつけてな」

「はい、大丈夫です」

「よし、そんじゃ行ってみようか」

以前、パウラの長城前で使った足場を入れ替えての転移、サンクアディエツトのような構造の街でなら、床石の入れ替えで瞬時に何処へでも移動できるというカスタマイズ能力の性質からイメージした連続瞬間移動法。

『シフトムーブ』と名付けたこの移動法は、先ず、立ち位置の足場を細板の後ろの端から前の端へと移す事で、瞬時に細板の長さ分だけ前方に移動する。今回の場合は約十メートルの移動。

次に、足場を中心にして後方に残された細板部分を足場の前方へと移動させる。これで元の位置より十メートル先にて、細板の後ろの端に立った最初の状態に戻る。そうしてまた足場を前方に伸びる細板の端へと移動。これを延々と繰り返すのだ。

マップアイテムのカスタマイズにマクロ機能のような便利な機能は元のゲームにも付いていなかったので、全て手動で足場移動、実行反映、細板移動、実行反映と繰り返し返さなくてはならない。ミスをしなければ一秒で一回の移動が可能である。

実行ボタンは意識で押し、足場の移動と細板の移動は両手を使ってカスタマイズメニュー画面の操作を繰り返す悠介。荷物を持ったスンは悠介の背中にぴったりくっついて静かにしている。

『移動、実行、移動、実行、移動、実行、移動、移動……あ、ミスった』

『凄く忙しそうだし、話し掛けない方がいいかな……』

段差や起伏の多い場所では少々使い難く、まだまだ調整と工夫が

必要な移動法だが、上手く使いこなせれば時間と距離を大幅に短縮する事が出来る。基本的に静止した状態で移動しているので慣性も付かず、そういう意味では安全な高速移動である。

一つだけ難点があるとすれば、カスタマイズの反映による光のエフェクトが掛かりっぱなしになるので、とても目立つのだ。

「おい！ 見ろよアレ」

「うおっ なんだありゃ！」

「ディアノースの英雄じゃないか？」

「あの光は一体……」

『キラキラと輝く光の風に乗った闇神隊長と無技の従者が、東の街道を滑る様に駆け抜けていった』という噂がその日の内に広まり、噂それを耳にしたヴォレットが『新しい乗り物が出来たならわらわも乗せろー』と宮殿の上層階から叫んでいたとか。

64話：舞踏祭【前編】

「やっと着いた……やっぱり衛士隊馬車の方が早かったな」
「でも、乗り物も無しでこんなに早く着くなんて、凄い事ですよ」

途中休憩も挟みつつ、悠介達がルフクの村に到着したのは昼を少し過ぎた頃だった。時間にして凡そ五時間の道程。ちなみに、五時間近く延々と同じ作業を繰り返す事に関しては、MMO準廃人だった悠介にとつてどうという事もない作業であった。

「ユースケにスン、そろそろ帰ってくる頃だと思ってたよ」

「ただいま、バハナおばさん」

「こんちゃーす」

スンの闇神隊専属従者登用を聞いていたバハナは、どうせなら従者服姿で来れば良かったのにとスンの髪を撫でる。

馬車で来なかつた事もあり、二人が帰って来た事に気付いたのは村の入り口付近にいた人達だけだったが、ゼンヤードの屋敷前に着く頃には村中に伝わって皆が集まっていた。

「なんか人増えているような気がするな」

「新しい建物も見えますね」

「ふふ、アンタ達の活躍でみんなこの村に集まって来てんのさ。余

所の村から越してくる家族もいたりしてね」

ルフク村は悠介の仕官による優遇処置に加えてゼシャールドの存在もあり、フォンクランクに深く貢献する英雄クラスの人物が二人も関わっている村として結構名前が知れ渡っていた。

そこへ更に、村出身のスンが勇名轟く闇神隊の専属従者に登用されたという事もあって、国内外からの注目度も増している。

「ま、今の所はこれといって問題も起きてないし、賑やかになっていい傾向だと思うよ」

「そつすか……」

以前は林のあった辺りが切り開かれて新しい建物が並ぶルフク村の光景を眺めながら、悠介はここも少しずつ変わっていくのだろうなあと、幼少の頃に遊び場だった空き地が中学生になる頃には全て消えていた昔の記憶に思いを馳せた。

大きな街ではあまり気にならなかったが、発展すれば人が増え、人が増えれば他人も増える。あと半年もすれば、ほぼ村人全員に行き届いていた帰省時の御土産も、身近な知り合いにのみ配られるようになるのだろう。

「村の発展と希薄な人間関係のジレンマか……」

「ユスウケさん？」

謎の呟きに小首を傾げるスン。悠介は何でもないと笑みを返してゼシャールドの屋敷へと足を向けた。

「ただいま、先生」
「お久しぶりっす」

「うむ、よく戻ったのう」
「……おかえりなさい」
「おかえり……」

相変わらず飄々として元気そうなゼシャールドにメイド服姿が板について来たブルーシャ、村服姿のエルフォナが揃って二人を出迎えてくれる。エルフォナは表情の変化こそ乏しいものの、纏う雰囲気は人見知りする子供のソレのように自然体だ。

舞踏祭の日に向けて村でも祭りの準備が進められており、中にはブルーシャにアタックする事を公言している猛者もいるとか。もつとも、それは村人ではなく村に駐在する衛士隊員だったりするのだが。

「そう言えば、収穫祭の時は色々あったようじゃの」
「あー、ありましたねえ……」
「……ありました」

収穫祭でスンが幼馴染みだったタリス青年に襲われた時、自分は村の娘達に包囲されて殲滅され掛かっていた事を思い出して、少し情けない気分になる悠介。

すっかり気を張ってスンの事も守ってやらねばいかんぞ？ と笑うゼシャールドに、悠介はなんだか娘を想う父親を前にしたような緊張感を懐くのがあった。

その後、夕食を経て一息付いた所で悠介は調整魔獣の事件について話すと、ゼシャルドに意見を求める。

「ふむ。ブルガーデンに売られていた魔獣と、お主達が見た魔獣が同じ者の手によって作られた魔獣なのかが気になるのう」

「魔獣の飼育をしてる集団が複数いるかもって事ですか？」

「或いは、集団の本隊は一つで飼育するグループが幾つか存在するとかじゃな」

「ああ……なるほど、色んなやり方をグループ毎に試す、みたいな感じですか」

悠介達が見た、森に巣を作って飼育する方法が以前から行われていたのなら、もっと前から被害報告や目撃情報が上がっていてもいい筈だ。被害報告が急激に増えた時期からして、最近やり始めたのであろうと推測できる。

「まあ、それでも不自然ではあるがの」

態々目立つやり方をしたのは、飼育が目的ではなく実験目的であった可能性もあるとゼシャルドは指摘する。魔獣被害の調査に来た者を相手に、配置した巣と魔獣で何処まで持たせられるかという性能実験であった可能性。

「ん〜、どっかで聞いたようなシチュエーションだ……」

悠介は昔プレイしたゲームにそんな感じの展開があった事を思い出していた。

「……………」
「……………」
「……どうしたの？」

ベルーシャが何か言いたそうにしているエルフヨナの気配に気が付き、声を掛ける。悠介とゼシャールドの話を聞いていたエルフヨナは、暗殺児の訓練施設にいた頃、そんな魔獣について話し合う研究員達がいた事を覚えていた。

「ふむ、やはりノスセンテス絡みかのう」

「古い国だっただけあって、色々出てきますねー……」

一度、ガゼツタに旧ノスセンテスの研究グループで魔獣の研究を行っていたような組織が無かったか、問い合わせてみようかと提案する悠介。

ゼシャールドも邪神関連でガゼツタには警戒したいが、悠介の関心を惹きたいガゼツタ側から、何らかの情報があるなら引き出せるかもしれないと、その提案には肯定的な考えを示した。

「休暇明けにでもヴォレットに相談してみます」

「そうじゃの、まだ情報が集まりきっておらんし、そう結論を急ぐ事もあるまい」

ゼシャールドはそう言って魔獣の話締め括った。

「大分話し込んでしまったのう、今日はもう休んだ方が良いじゃろう」
「そうですね」

明日の前夜祭と明後日の舞踏祭に向けて、この日は早めに休む事

となった。

「よし、なんとか舞踏祭には間に合いそうだ」

ザッルナーの風月の二十日目、舞踏祭の前日。フォンクランクの街道をルフク村に向かって北上する若者の姿があった。

「しかし、その娘は今サंकクアディエツトに住んでるんだらう？
村に帰ってなかったら無駄足になるぞ」

「大丈夫ですよ。村にはゼシャーールド先生も居るし、彼女はこ
う祭りの日はちゃんと家に帰る筈ですから」

例え街での暮らしに慣れてしまったとしても、村で世話になった
人達との関係を蔑ろにしたりするような娘ではないと言い切る青年
に、男性は感心したように頷く。

「そうか、流石は幼馴染だな。相手の事をよく理解しているって所
か」

まだ見掛けも歳若い青年と、少し落ち着いた感じのする壮年男性。
無技の民である事を示す白髪を靡かせ、地味なマントの下に白い甲
冑を隠した二人組。街道の端をその鍛え抜かれた強靱な足腰を持っ
て駆け抜ける彼等は、無技の戦士であった。

「スン……もう直ぐ会いに行くからな」

駐在する衛士隊員も混じって祭りの準備が進められているルフク村。広場を中央の会場として、他の開けた場所にもテーブルや椅子が設置されていく。交流場となる中央会場で相手を決めた者同士が、其々の場所で愛を語らせるようになっていく。

殆どの場合、舞踏祭で相手を見つけるといっても、既に決めていた相手と皆の前で手を取り合っただけで、私たちが恋人同士です』と宣言するような形になるのだが、偶に複数の相手と付き合っている人物が誰か一人を選ぶといった場面もある。そういうイベントでは予想だにしていなかった相手を選ばれたり選ばれなかったりというドラマが発生するので、普段は陰口を叩かれる対象である二股三股当たり前な誑し男も、この時ばかりは舞台男優のように脚光を浴びるのだ。

もちろん『伴侶が欲しい、でも特定の相手が居ない』。そういう男女を結びつける役割も、舞踏祭は果たしている。

「ふう、飾りつけはこれで全部だね」
「お疲れ様」

広場で担当場所の飾りつけを終わって一息つくバハナと、それを労う手伝いのスン。梯子を片付けながら他の場所の進み具合を眺めつつ、雑談に興じる二人。

「今回もバハナおばさんがお肉を捌くの？」
「うんにゃ、あたしゃお酒持って巡回する役だよ」

村の彼方此方に設置されたテーブルを巡って恋人達の語らいを補佐すべく、酒を振舞う巡回役。トラブルの早期発見なども役割に含まれている。今年の舞踏祭は例年よりイベントが多そうだとバハナは言った。

ルフク村の人口が増えている事もあるが、駐在する衛士隊員の中に村人と深い関係になった者がちらほら居るのだとか。他にも、ベルーシャを狙っている衛士隊員が数人。

「んー……でも、ベルーシャさんは先生べったりというか……」
「あっはっはっ 確かに」

玉碎祭が見られそうだねえと笑うバハナは、あと二、三年もすればエルフォナも年頃の娘に成長するだろうから、今から楽しみだと広場の隅を飾り用の花束に埋もれながらちよこまか歩いている緑髪の小さい姿に目を向けた。

周囲に居る他の大人たちからも微笑ましい眼差しを向けられているエルフォナは、ふと建物の間に出来た路地というよりも隙間に視線を向けて立ち止まる。

「エル？ どうかしたのかい？」

じいっと隙間の一点を見つめて動かない姿に、訝しんだバハナが声を掛けた。エルフォナは視線をそのままに、隙間を指差して一言
呟く。

「戦士、二人……」

彼女の見つめる隙間の奥からガサゴソという音が聞えて来た。ついで、なにやら愚痴るような声が近付いて来る。

「まさか衛士隊がいるとは思わなかった、この辺りが変わってなくて良かったよ」

「この村も色々あったようだからなあ、しかし俺にはきつい抜け道だなこりゃ」

「え……っ　タリス？」

村の出入り口を守る衛士隊の警備網を掻い潜り、建物の隙間から広場に現れたのは、ガゼツタに亡命したタリスだった。子供の頃によく使っていた抜け道を通って来たらしい。もう一人、彼の後ろに頭一つ分は大きい無技人の男性が立っている。

突然の事に戸惑う村人達を余所に、タリスは飾り付けられた広場にスンの姿を見つけると表情を輝かせて走り寄ってきた。

「スン！　帰って来て早々君に会えるなんて、やっぱり俺達の絆は

」

そのままスンを抱き締めようと手を広げた所で、間に入ったバナナに阻止される。

「エル、先生たち呼んできな。急いでね」

「ん……」

スンを背中に庇いながらそう言って促すバナナに、エルフヨナは短く返答して身を翻すとゼシャルドの屋敷に向かって走り出す。流石に訓練を受けた元暗殺見候補の身体能力は伊達ではなく、あつ

という間に人ごみの中を駆け抜けて行った。

「バハナさん、邪魔しないで下さいよ」

「あんた、何しに戻って来たんだい」

「もちろん、スンを迎えに」

「はあ？」

ガゼツタに亡命して戦士としての訓練を受けながら過ごしていたタリスは、村の外の世界で色々なモノを見聞きし、色んな人々と交流を重ねる事で、心身ともに少しずつ成長していった。生来の女癖の悪さも落ち着きを見せ始めている。

亡命当初は異国の綺麗な女性達に声を掛けるなどしていたタリスだったが、次第にそういつた誑し自慢のような感情が薄れ、真剣に将来伴侶となる相手の事を考える内、スンが如何に自分にとって理想の女性像を体现していたかという事に気付いたのだ。

「それで、態々舞踏祭に合わせてスンを攫いに来たと？」

「正確には舞踏祭の時期が来てしまったから、急いで来たんだけどね」

タリスとバハナのやり取りを聞いて、ざわざわと噂話を始める村人達。広場には知らせを受けて駆けつけた衛士隊の姿もあったが、バハナが話している青年は元村人であるらしいという事もあって、もう一人の無技の戦士を警戒しつつ様子を見ている。

「スン、一緒にガゼツタへ行こう」

「嫌です」

即答。だがタリスもそれは予想していた事らしく、些かの怯みも見せず無技の民を中心とした統治が行われるガゼツタでの暮らしが如何に素晴らしいかを語って説得を始めた。背後に立つ無技の戦士が腕組みをしながら、うんうんと頷いている。

「スン！」

「ほほう、タリス坊主に無技の戦士とは」

そこへ、エルフォナにブルーシャも伴った悠介とゼシャルドが現れた。フォンクランクの若き英雄と、老いたりして衰えを感じさせない元宮廷神技指導官の登場に、野次馬の人垣が開いて彼等を広場の中央へと通す。

「ユウスケさん！ 先生っ」

スンは悠介の傍らに駆け寄ると、何時ぞやのゼシャルドの背に隠れた時のように、黒い隊服を纏う闇神隊長の背中に隠れる。それを見たタリスは若干頬をピクリとさせたが、堂々とした態度で悠介達に向き直った。

「ふむ、別にシンハ王の差し金という訳でもなさそうじゃのう」

「今回の帰郷は俺の独断で個人的なモノですよ先生」

タリス本人とバハナからも大体の話を聞いて事情を把握する悠介達。タリスの里帰りとフォンクランク入りに協力した白族（無技）の戦士は、若者の恋愛を応援する気分で許可を出したそうなの。

無技の民にとってガゼツタが如何に住みやすいかという宣伝にもなる事を見越した上での判断であろうと、ゼシャルドは当たりをつけた。

「心意気はともかくじゃ、スンはガゼツタ行きには応じないのではないかの？」

「理由は分かってます」

諦めた方が良いのでは？ と促すゼシャルドの言を制したタリスは、悠介に向き直るとビシツと指差しながら糾弾するような言葉を向けた。

「道中で聞いた。スンを危険な戦いの場に引き込んだそうじゃないか」

「え？ いや、それは……」

「軍に所属させるって事は、何時かスンの手を血で汚す事になるんだ。俺なら絶対スんにそんな事はさせない」

「そりゃ俺だってそうはならないように考えてるけどさ」

スンの闇神隊専属従者登用について事情を説明しようとする悠介の言葉を遮り、タリスは自分の本気を示すべくフォンクランクの英雄たる悠介に勝負を挑む。

「彼女に相応しい男はどちらか、決着をつけよう。スンは俺が守る」

広場に詰め掛けている人々から『おお……』と言うどよめきが上がった。ガゼツタの戦士となったタリスが、村娘スンを賭けて闇神隊長に勝負を挑んだ、という舞踏祭に相応しい余興に期待が向けられる。

「あんなキャラだったっけ？」

「え、えーと……」

「面白そうじゃないの、あたしもユースケの実力を見てみたいねえ」

「もうっ バハナおばさんまで……」

タリスが現れた時は警戒心を露わにしていたバハナも、態々ガゼツタからスンの為に帰って来た事や、村に居た頃に比べると随分引き締まった顔付きになって成長を感じさせる彼に、少しだけ感心を懐いていた。

バハナの的に、こういうシチュエーションは好みであったりもするようだ。

『ま、例えタリスが勝ったとしても、スンはユースケを選ぶだろうケドね』

明日の舞踏祭に向けて二人の決闘の場を作ろうと、飾り付けが終わった広場を一部改修する作業が進められる。悠介は宮殿衛士が私闘に応じてても良いのだろうかと気にしつつも、断れそうにない雰囲気には肩を落とし、スンに励まされていた。

「ベルーシャや、回復剤の用意をしておいてくれんか」

「……はい」

明日は舞踏祭本番の日、偶にはこういうのも良かろうと、ゼシャードは政治的戦略などを抜きにした二人の若者の戦いを傍観する事にした。一応、両者の怪我に備えて薬と治癒の準備も調べておく。

「しんぎんぎんぎん」

65話・舞踏祭【後編】

舞踏祭当日

悠介は一応、ルフク村に駐在する衛士隊の伝達係を通じて、タリス達がガゼツタから訪れている事は伏せつつ、スンを巡る事情で私闘に依じてもしも良いかとヴォレットにお伺いを立ててみたところ、『絶対勝て』という有難いお言葉を賜わった。

「ヴォレットらしいというか……」
「ほっほっほっ 今日が舞踏祭でなければ、見物に来ていたかもしれんのう」

ゼシャルドの言葉に十分あり得ると同意しながら、悠介は決闘の準備が整えられている広場へと向かう。既に多くの村人や衛士達も集まっており、悠介が現れると歓声が沸いた。

スンは勝者を祝福する役として羽飾りのついた衣装を着せられ、決闘の会場を良く見渡せる場所でバハナと並んで座っている。

会場の片端には白い訓練兵の甲冑に身を包んだタリスが、連れである正規兵の甲冑を纏った無技の戦士に何かアドバイスを受けている様子で立っていた。会場入りする悠介を意識したような視線を向けてつつ、無技の戦士の言葉に時折頷きを返している。

沢山の角材が山のように積み上げられている自陣側に立ってカス

タマイズメニューを開いた悠介は、先日弄っていた戦闘用マップアイテムデータを呼び出し、用意してもらった角材で使用出来るか否かを確かめた。

『ん、これなら大丈夫そうだ』

元々は足元の地面を材料にカスタマイズして使う戦闘用マップアイテムなので、予め材料が用意されているなら更に安定する。上手くいかなかった場合も想定して、御馴染みの防壁や落とし穴のデータも準備しておく。

「双方、準備はよろしいですか！ それでは、中央までお進み下さい！」

進行役の声に従って会場中央に歩み出る悠介とタリス。両者の名前と肩書きが観衆に告げられる。

片や、フォンクランクにその名を知らぬ者はないとまで言えるディアノースの英雄、闇神隊長の悠介。片や、ルフクの村出身で無名の見習い戦士、ガゼツタ白刃騎兵团訓練兵タリス。

闇神隊の専属従者に登用された村娘のスンを巡って、その幼馴染であった青年、無名の見習い戦士がディアノースの英雄に挑むという、如何にも大衆受けしそうなシチュエーション。

決闘会場の広場は、舞踏祭に相応しいこの催しに期待する観衆の熱気で包まれていた。

死亡に至るような致命傷を与えない事。審判の制止と指示に従う事。どちらか片方が意識を失うなどした場合はその場で決着。等々、幾つか注意事項の説明を終えて、両者は自陣へと戻っていく。

自陣に戻った悠介はカスタマイズメニューを開いて戦闘用マップアイテムデータを弄りながら、メニュー画面越しに相手の様子^{タリス}を覗き見た。タリスは身長程もある大剣を受け取り、ブンツと一振りして具合を確かめている。

悠介に用意された角材と同じく、昨日の内に削り出されたモノらしい。木製だがかなりの重量がありそうだ。

「……ああ、なんか既視感があるなと思ったら、シンハの構えに似てるのか」

「俺はシンハ様の強さに憧れて、白刃騎兵団入りを申請したからな」

ガゼツタ軍の人材選別では実戦経験の浅い者や、訓練を受けた事の無い亡命者は初心者グループとして白刃槍兵団に組み込まれるのだが、訓練場を視察に来たシンハの振るう烈火の如き豪快な剣捌きに惹かれ、タリスは白刃騎兵団入りを希望したという。

「遠慮はしないからな、ユースケ。あんたに勝って、俺の本気をスンに認めて貰う」

「うーん、そういう事じゃないと思うんだけどなあ……」

シンハによく似たスタイルで大剣を下段に構える気合い十分なタリスに対し、悠介は何処か煮え切らないというか、気が進まないような様子で適当に片手を前に翳し、半身に構える。

これはこれで悠介の何時ものスタイルなのだが、観衆にはディアノースの英雄が格下を相手に『余裕』を見せていると映った。

「タリスー！ 舐められてっぞーっ 気合い入れていけよー！」
「英雄に一泡吹かせて見せるー！」

シチュエーションからしてお約束な野次が飛ぶ。益々やる気なさそうにダレている悠介とは対照的に、タリスは身体中に力を漲らせていた。『闇神隊長は接近戦が苦手らしい、距離をあけるな』そうアドバイスを受けている。

『開始と同時に、一気に懐へ飛び込む！』

「んも〜、ユースケったら……スンの祝福が掛かってるってのに、ちっとも気合い入ってないじゃないか」

特等席から二人の対峙を眺めているバハナは、悠介のやる気なさがげな態度にやきもきするように呟く。

「ユースケさんなら大丈夫ですよ、多分」

「スン、ユースケの戦い方ってどんななんだい？」

「えーと……、実はよく知らなかったり……」

「……あんたもユースケを信頼してるのやら危機感が無いのやら……」

スンが纏っている衣装の羽飾りを弄りながら、バハナは溜め息を吐くのだった。

「始め！」

審判の合図と共に、開始の布が振り下ろされた。同時に、引き絞られた弓より放たれる矢のような勢いで飛び出すタリス。訓練兵用の軽い造りとはいえ甲冑に大剣を装備しているにも関わらず、その突貫速度には凄まじいモノがあった。

訓練では基本的な剣術よりも先ず、足腰を徹底的に鍛えられる。慣れ親しんだ生まれ故郷の地である事も、タリスの身体を躍動させる力の足しとなっているようだ。

タリスと悠介の立ち位置は大体十メートル程の距離をおいてあるのだが、タリスは開始の合図から僅かな間に半分近くまで距離を詰めていた。

とりあえず穩便に済ませられるよう、落とし穴を作って防壁で誘導しようとカスタマイズメニューを操作していた悠介は、そのあまりの勢いに気を取られてすっかり操作ミスを犯してしまう。

「あ、間違えた」

余所見をした瞬間、落とし穴用のマップアイテムデータを誤ってメニューから閉じてしまい、落とし穴分の土を材料にして作る予定だった防壁が構成不能になってしまったのだ。

真っ直ぐ突っ込んでくるタリス。仕方なく、悠介は戦闘用マップアイテムデータ・タイプEを予定より早く実行、反映させた。悠介の背後に積まれていた角材が光に包まれて消えていく。と同時に、巨大な人型が出現した。

「な……っ！」

地面から生えたような全身鎧プレートアーマーつばい外観のそれは、頭部の辺りまでで高さが八メートル近くある巨人の上半身だった。

突然現れた甲冑巨人に思わず足を止めていたタリスは、巨人が腕を振り上げる動作を見せた事で我に返る。対神技戦の基本。どんなに強力な神技攻撃でも、それを放つ神技人自身は無技の戦士の敵ではない。

悠介が神技で動かしている巨人なら、本体である悠介を叩く事で止められる筈だと判断する。

『あれだけのデカブツなら動きも鈍い筈！ 当たらなければどうって事はない』

タリスは甲冑巨人の腕が振り下ろされる前に本体を仕留めるべく地を蹴った。次の瞬間、凄まじい衝撃に意識ごと身体を撥ね飛ばされた。

宙を舞ったタリスが地面に叩きつけられるのとほぼ同時に、甲冑巨人の胸部から上半分が光の粒を残して消え去り、悠介の周囲に防壁が出現する。

「あつぶねえ」

悠介はすんでの所で甲冑巨人の一部を防壁にカスタマイズする事が出来た事に安堵の息を吐く。

甲冑巨人にはギミック機能で左右のパンチから鉄槌を落とす三段攻撃コンボが設定されており、鈍重そうな見た目に反してその攻撃速度は約三秒で一巡するほど速い。

ギミックスイッチをOFFにしても間に合わない判断した悠介は咄嗟に、角材で構成されている甲冑巨人の一部をメニュー画面で

出しっ放しになっていた防壁データの材料へと転換したのだ。

最初の一撃で吹っ飛んだタリスに三段目の鉄槌が入れば、命に関わる大怪我をさせる所だった。

素早い攻撃を繰り返す巨大なゴーレムの出現には度肝を抜かれたらしく、観衆はもとよりタリスの同行者である無技の戦士も、啞然とした表情でしばらく固まっていた。広場の隅で観戦していたエルフوناが無表情で瞳をキラキラさせている。

「流石に今のは驚いたわい……」

タリスの治癒に駆けつけたゼシャルドは、土技の民が運搬作業などにゴーレムを使っている所は見た事があったが、それはもつとノツソリ動くモノで、人間が格闘術を行うような動きをするゴーレムは見た事が無いと言う。

だが悠介は小声で、恐らくその土技で作られたゴーレムの方が甲冑巨人より使える筈だと、タイプエエの仕様を語る。

「まだ色々問題も残ってるんですけどよね、このタイプエエ」

滑らかな動きをして見せた甲冑巨人だが、その実ギミック機能で設定された動きを繰り返すだけの固定砲台的な造りになっており、攻撃対象を認識している訳ではないので、正面から来る相手にしか対応していない。

回り込まれると簡単に攻撃範囲から逃れられてしまうのだ。その場合は防壁を駆使して相手を誘導しつつ、甲冑巨人の角度変更などで対処する事になる。

敵味方が入り乱れる乱戦には使えず、遠距離からの攻撃には只の只、戦術面での汎用性はあまり高く無い。もっぱら、見た目のイン

パクトで固まってる隙にコンボを叩き込んで初撃の効果を狙う奇襲攪乱型。ぶっちゃけ『動く張りぼて』とも言える。

その張りぼてに吹っ飛ばされたタリスの治癒が進められるなか、係りの村人達によって担架が運ばれてきた。

「どうですか？」

「うむ、打ち身と擦り傷じゃの。これくらいなら大した怪我ではないわい」

そりゃ良かったと、悠介はゼシャールドの屋敷に運ばれていくタリスを見送り、広場に設けられた観覧席を振り返る。

「ほら、行つてきな」

「う、うん」

バハナに促されたスンが席を立つ。祝福の娘が勝者の元に歩み寄り、羽飾りの王冠を被せて祝福が成された所で、勝敗が着いた事を思い出した観衆から惜しみない拍手が贈られた。

闇神隊長ユースケの力の一端を間近で実感した事により『英雄の二つ名は伊達ではない』、そんな認識が村人やルフクに駐在する衛士達、そして無技の戦士と見習い戦士の胸に刻まれる事となった。

皆からの歓声を受けて頭を掻きながら控え目に応えている悠介に、バハナは何処か安心したような眼差しを向けていた。

舞踏祭二日目の早朝

もつと修練を積んで来ると言い残して生まれ故郷を後にしたタリスは、ガゼツタへの帰路を駆ける道中、昨日の晩にゼシャールドから向けられた言葉を思い出す。

ゼシャールドの屋敷のベッドで意識を取り戻したタリスは、悠介の神技に全く太刀打ち出来なかった自分の実力に失望していた。だがそれでも、スンを軍属に就かせている悠介の事を認められないでいた。

回復の経過を診に来たゼシャールドに、タリスがそんな自分の胸の内を打ち明けたのは、やはりスンと同じく幼少の頃からお世話になったゼシャールドを信頼し、尊敬しているからこそであった。

『確かにユースケの強さは思い知った、でも……納得出来ない。スンの為にも、俺はもつと力を付けて今度こそ』
『ふむ。じゃがのうタリス、お主はスンの気持ちを考えて事はあるかの？』

スンの為というその考えは結局、自分の願望、気持ちの押し付けになってると指摘され、タリスは考え込む。

『まあ、スンが戦いの場に出る事を快く思わない気持ちも理解はできるがの』

無理に危険な世界へ踏み入らなくとも、悠介の隣に立つ方法は幾

らでもあつたであろうに、闇神隊に所属して悠介の傍にいる事を選んだのは、自立を望むスンが自分で考え、出した答えだ。

スン自身が庇護される立場に甘んじる事を否定した。悠介はその気持ちを尊重し、応えた。

『どちらがスンの事をよく考えているかのう』

『……………』

明確な答えを出せないまま、タリスは燦る想いを胸に、まだ薄暗いフォンクランクの街道を南下して行くのだった。

祭りの初日は決闘イベントで舞踏祭の雰囲気も吹き飛んだので、二日目から本格的な求婚祭りとなり、村の中央会場では若い男女が其々の想い人に『結婚して！』と迫る勢いで告白合戦が行われている。

スンと悠介は昨日の一件からルフク村公認カップルになってしまったので、デイアノースの英雄に挑むような勇者もおらず、またスンを押し退けて悠介に言い寄れる程の自信家もおらずで、二人は静かな時間を過ごしていた。

とは言え、玉砕する者、結ばれる者、悲喜交々な空気が暴風のように吹き荒れている村の中では落ち着かない。二人して森に出掛けた悠介とスンは、ぶらぶら歩いている内に初めて出会った邪神の祠までやって来た。

「なんか、懐かしいような気分だな……」

今は村人の誰かが時々手入れをしているらしく、油木の明かりもちゃんと火を灯している。奥の石室まで入り、天井画を眺めて感慨に耽る悠介。この世界で初めて目覚めた場所だ。

「そっぴや、スンには感謝しないとな」

「なにがですか？」

スンがお供えモノの生地を置いていてくれなかったら裸で外に出る破目になっていたと話す悠介に、道端でその裸と邪神のシンボルを直視してしまった時の事を思い出して赤面するスン。

「普通逆な気がするけどなあ」

赤面しているスンが何を思い出しているのかを悟った悠介は、照れ隠しにそう言って笑った。

「逆？」

「いや、ああいうハプニングは大抵、男の方が女の子の裸を見ちゃったりするもんじゃないかなと……」

「……ユウスケさん、やらしいです」

「なぜにっ!!」

油木の炎が揺れ、温かみのある柔らかい灯りが照らす石室の中に、二人の笑い声が反響する。不意に声が途切れ、訪れた静けさの中、石の台座に腰掛けたスンがこんな事を言った。

「……み、見たい……ですか……？」
「え」

両手を胸元で重ねて、俯き加減にちらりと視線を上げたスンは、顔を赤らめながらもう一度はつきりと口にする。

「わ、わたしの身体……見たいですか？」
「……………」

一瞬言葉に詰まった悠介は、スンの言葉を正面から受け止められず、斜めに躲した言葉を返そうとした。

「それって、またラー」

「ラーザツシアさんに言われたからじゃありません！」

強い語調で放たれたスンの声が石室内に響き、悠介の口を噤ませる。

「わ、わたしが相談に乗って貰ってたんです。どうすれば、ユウスケさんの気を惹けるかなって……………」

「俺は……………」

思わぬ告白に混乱する悠介。猫を被っていないおやじ状態な女性や猫を被っている女優状態の女性には耐性のあつた悠介だが、本気の想いをぶつけて来る女性と向き合った経験は殆ど無かつた。こんな時、何と言えばいいのか分からない。

悠介の沈黙を拒絶と捉えたのか、スンが哀しげな声で呟くように訪い掛ける。

「やっぱり…………わたしなんかじゃ、ユウスケさんの相手は…………務ま

りませんか？」

「いや、そんな事はないって！ そうじゃなくてさ……なんつーか」

自分が邪神である事。この世界の人間ではない事。『世界に災厄をもたらし、消える』という伝承。悠介はそういう部分が気になって、なかなか好きな人を作るといっつか、深い関係になる事に躊躇があるのだと説明した。

「何時か言い伝えの言葉通りに消えてしまうのかもしれないって思うとさ……」

残される人の事を考えてしまい、そういった関係を築く事に踏み出せないのだ、と。

「……やっぱり、ユウスケさんて何処が変わってます」

「そうかな」

「いつか消えてしまつかもしれない……だったら尚更、自分の生きた証を残そうとする筈じゃないですか」

「うーん、俺の育った時代ってそういう感覚が希薄なところがあったからなあ」

顎に手などを当てながら、元世界の世間で感じていた価値観に思いを馳せる悠介は、しゅるり……という衣擦れの音に意識を引き戻される。その目に飛び込んで来たのは、スンの白い素肌と艶かしい肩甲骨。

「スン……？」

「あの大きな塔とか、砦とか……ユウスケさんの痕跡はこれからも、この世界に沢山残っていくと思います」

揺れる灯りに照らされた陰影が、浅い呼吸に上下するスンの滑らかな起伏を浮かび上がらせる。

「わたしにも……ユウスケさんの痕跡を……あなたを、刻み付けて下さい」

一糸纏わぬ姿になったスンは恥ずかしそうに伏せていた顔を上げると、真っ直ぐな瞳で見据えながら、その身で悠介を求めた。

夕方、村に帰る道を行く二人。

「ほんっと、ヘタレですんません……」

「もうっ いいんですよ、そこまで気にしなくても」

心底情けないといった雰囲気で頂垂れている悠介に、クスクスと笑いながら隣を歩くスンは、優しい慰めの言葉を掛ける。

結局、デアアノースの英雄はスンの誘惑空間を鼻からの出血で打ち破るといふ、色々台無しな結果を出して倒れ伏した。悠介は落ち込んでいたが、スンはそれ程気にしていない。

勇気を出しての告白と誘惑の結果が、別の意味で鮮血の結末だったのは残念だが、少なくとも、悠介は自分の裸と誘惑によってあなってしまったのだ。スンは自分の女としての魅力に、少しは自信が付いたといったところである。

「また機会がありますよ、きっと」
「ははは……は……」

流石は戦士系の一族だな。等と軽く現実逃避している悠介であった。

ちなみにその頃、ゼシャールドの屋敷では。

「感覚が、薄いとな？」
「……背中の、下の方が……」

「ふむ、ここかの？」
「……あっ……」

元気な工口爺と溶けた氷娘が乳繰り合っていたそうなの。

66話：災厄の影

フォルナーの火月の五日目。

ヴォルアンス宮殿の上層階では、朝からヴォレットの楽しげな笑い声が響いていた。

「ぶわっはははははは」

「スン……」

「ご、ごめんなさい」

スンの誘惑に鼻血を出して倒れた事がヴォレットにバレた悠介。現在絶賛笑われ中である。

舞踏祭と休暇も終わり、スンと悠介は昨日の夜サンクアデイエツトの屋敷に戻って今日からの衛士隊活動に備えていた。

今朝、宮殿に出勤するなり決闘の話の指輪を聞かせるとヴォレットにせつつかれたのだが、今日は神技の指輪を配る日だったので、悠介は決闘を特等席から見ていたスンに話し相手を任せて、宮殿衛士隊の控え室まで自分で指輪を届けに出向いた。

控え室にいたヒヴォディルから休暇中の事や舞踏祭でのヴォレットの様子などを聞き、帰って来たら邪神の祠での出来事まで話が進んでしまっていたのだ。

「しかし、ソーか。ユースケは鈍かった訳ではなかったのだな」

二重の意味で女と距離をとっていたのかと納得しながら、ヴォレツトは腹筋の辺りを擦っている。

「そんな事より、例の話はどうなるんだ？」

とりあえず話題を変える努力をする悠介。調整魔獣の研究について、旧ノスセンテスの研究組織に関する情報を探りにガゼツタまで赴くという悠介の提案。

「ん〜それなんじゃがのう……とりあえず父様に相談してみるから、明日まで待て」

「気が進まなそうだな」

「流石にな。ガゼツタが今後どう動くか、まだはつきりしておらんし……あの男は油断ならん」

悠介が直接ガゼツタに出向くという提案には難色を示すヴォレツトだったが、ガゼツタから情報を引き出す事については賛成なので一応、悠介の提案も交えながらエスヴォブス王に話をしてみるという。悠介の努力は報われたようだ。

「ブルガーデンからの問い合わせ？」

女王リシャレウスの名で送られてきた書簡には、元最高指導官の余罪追求という名目で旧ノスセンテスの研究組織の中に魔獣の研究を行っていた組織が存在していなかったかという内容の問い合わせが綴られていた。

シンハは最近トレントリエッタとフォンクランクの国境付近で起きた事件の情報などを踏まえ、この書簡はフォンクランク側からブルガーデンに依頼したモノでは無いかと推察し、アユウカスもその説に頷く。そしてそれは当たっていた。

結局、悠介のガゼッタ行きは見送られる事になり、フォンクランク王室からブルガーデンのリシャレウス女王を通じてガゼッタに問い合わせを試みるという方法が採用されていたのだ。

リシャレウス女王がシンハ王と個人的に親しい間柄にあるという部分を見越しての策である。

「調整魔獣の情報を求めているのなら、それを利用しない手はないか……」

「例の研究者達について教えるのかえ？」

「いや、情報は渋る。代わりに色々煽ってやるのさ」

「ほうお、シン坊も考えるようになったもんだ」

里巫女アユウカスはシンハが何か悪手を打ったり、未熟を露呈す

るような行動を取ると幼少の頃の呼び方でちやかすので、この呼ばれ方をするとシンハは大抵嫌な顔をする。

「……それより、何時までここに居るつもりだ婆さん。早く里に帰れよ」

「ワシの家はここじゃからして」

遙か昔このパトルティアノーストの中枢に住んでいた事もあった里巫女は、そう言つて手をひらひらさせながら空中庭園の散歩に出掛けて行った。その背を見送るシンハは、何年経とうが彼女からすれば周りは皆子供なのだろうかと、内心で呟く。

『見た目がアレだから余計に納得いかんがな……』

シンハは溜め息を吐きながら書簡の返答に手紙をしたためるのだった。

「リシャレウス様、ガゼツタの王から手紙が届いておりますが……」
「手紙？」

旧ノスセンテスの研究組織に関する問い合わせに対して、リシャレウスの元に届いたガゼツタからの返答は『心当たりはあるが、公表するのは差し控えたい』という内容であつた。

正式な書簡ではなく、シンハ王の私書という形で届けられた事に、リシャレウスは今回の問い合わせに際してフォンクランク、エスヴ

オブス王からの依頼があつた事を見抜かれていると悟る。

「……？ これは、どういう意味なのかしら」

手紙の片隅には『災厄の再来に備えられたし』という謎のメッセージが添えられていた。

これらの内容は直ちにフォンクランクへと伝えられ、ヴォルアンス宮殿の官僚達は『知っているが教えない』という実質的な隠蔽とも取れるガゼツタの返答に、ガゼツタは調整魔獣を兵器として使うつもりなのではないか？ という意見が大勢を占めた。

だが、ガゼツタとの敵対を明確にすべきかについては其々意見が別れた。

「やはり討伐軍を組織すべきだ！ ガゼツタが国力を付ける前に叩かなくては、手遅れになる！」

「そう事を荒立て無くとも良からう、ガゼツタとて折角手に入れた国土をみすみす戦火で荒らして疲弊させるとも思えぬよ」

「然り。無技の民は土地の開拓一つとっても我等神技の民の数倍は手間が掛かる。国家を維持するだけで精一杯だろうさ」

「そんな悠長な事をつ！」

ガゼツタ討伐を唱える開戦派は謎のメッセージを神技人国家への攻撃予告と捉えた。ノスセンスの滅亡を神技人社会の災厄とし、調整魔獣を使って再びその災厄を起こす事を示唆したモノだと訴える。

開戦否定派は『災厄』の解釈には同意を見せたものの『再来』に関してはガゼツタの攻撃予告などではなく、今後予想されうる調整魔獣の被害を皮肉っているのだらうという考えを示した。

神技人の脅威となり得る調整魔獣を作りだしたのが神技人研究者である。事は既に疑いなく、嘗てブルガーデンの破壊工作によってフォンクランクの牧場に放たれていた魔獣が調整魔獣の原型であつたらしい事から、それらの事実を指して皮肉を効かせた忠告である。

開戦派の中でも特に過激な発言をする者達からは、無教養で野蛮な無技共にそんな持って回った言い方で皮肉を込めるような真似が出来たものと、開戦否定派のガゼツタに対する捉え方を過大評価だと批判する声が上がっている。

が、無技人が無教養であるとする認識こそ無教養であると知っている開戦否定派ゼシャルドの弟子達はそれらの批判を黙殺した。

謎のメッセージについては宮殿官僚達の間でそんな風に取り扱われていたのだが、レイフォルドを伝つての情報網からメッセージの内容を耳にしたゼシャルドは、別の解釈を懐いた。

「シン八王……彼奴らは災厄の邪神について色々知っておるようじやからのう」

ガゼツタのどこかにある白族の里には、三千年に及ぶ邪神の歴史が記されているという。

パウラの長城前でシン八が悠介に語つた内容や、邪神に関するガゼツタ側の見解などから『災厄の再来に備えられたし』の意味を考察したゼシャルドは、カルツイオの歴史に嘗て現在の状況と似たような事態があつたのでは？ と推察した。

『災厄の再来』が果たして邪神を指しているのか、或いは調整魔獣を指しているのか。前者ならば、何かを切つ掛けに悠介が邪神と

して目覚める事を示唆しており、尚更悠介をガゼッタに近づける事は避けたい。

後者の場合、過去に降臨したらしい邪神の中に、調整魔獣のような存在がいた事を仄めかしているとも考えられる。

「白族、無技の民が繁栄した時代とは如何なる世界だったのであるうか……？」

フォルナーの火月の九日目。

「やっぱ難しいか」

「うん……環境はこれでもいいと思うんだけど、何か要素が一つ足りないっぽい？」

悠介邸の地下に作られた培養施設。レーザーシアが中心となって進めていた太陽苔の栽培は、今一步の所で行き詰っていた。

「苔が張り付くっていう木が鍵なんじゃないかって事で、トレントリエッタに行きたいな」と

「……旅行の口実にしてるんじゃないだろうな？」

「ぎくりっ！」

「ははっ まあ、ヴォレットに聞いてみるよ」

すっかり打ち解けあっている悠介とレーザーシアは、何時もこうして砕けた調子で接している。

ソルザツクの店に出向いた時など、屋敷の外ではレーザーシアが悠介の世間体に気を遣って畏まった話し方をするので、彼女の内外でのギャップが話のネタにもなり、悠介に懐かしい家族の空気を思い出させてくれるのだ。

悠介にとって、スンヤヴォレットとはまた違う意味で大切な人となりつつあるレーザーシアだった。

「うむ、トレントリエッタなら構わんぞ」

「そっか。じゃあ早速準備に入るよ」

調整魔獣に関するトレントリエッタの疑惑も薄れていた為、トレントリエッタ行きには割とアツサリOKが出された。

これにより、闇神隊は太陽苔の産地であるトレントリエッタの姉妹都市『デリアルディア』に向かい、太陽苔の張り付く木を調査する、という任務を賜わる事となった。今回、専属従者であるスンの他に、調査の助手としてレーザーシアも同行させる。

「わらわのリーンランプが使えるようになるのを期待しておるからな」

「栽培に成功したら宮殿中の灯りをリーンランプに切り替えられるぞ」

「おお！ それは楽しみじゃ」

今日も試作動力車で屋内訓練場を走り回っているヴォレットは、

デリアルディア
姉妹都市の土産話も楽しみにしているぞと言って笑った。

トレントリエッタの樹海の奥。蔓草の生い茂る木々の折り重なる中に、白っぽい岩が突き出ている。一見すると樹海の至る所で見られるただの岩石なのだが、その突き出た岩の根元には武装した神技人の警備兵らしき人影があった。

「そろそろ交代だな」

「ああ、やつとまともな飯が食べそうだ」

「俺は当分無理だ……肉とか絶対、吐いちゃう」

「あんなもんは慣れだよ、慣れ」

自然の洞穴を加工して造られた地下研究施設。ここでは生物兵器の開発や、特殊な薬を作り出す研究が行われている。

元々は新薬の臨床試験として人体実験を行う極秘研究施設だったのだが、偶々捕らえた魔獣から何か新しい薬を精製できないかという研究を進める過程で、実験中の薬を投与された魔獣に特殊な能力が備わる事を発見した。

これを発見した研究者はその後もう少しづつ実験と研究を重ね、魔獣を催眠状態にして簡単な命令に従わせる術を編み出すにまで至ったのだが、施設の趣旨から外れた研究だったので予算が貰えず、自費による細々とした活動で研究を継続させていた。

一時期は研究資金を稼ぐ為に同志を募って曰くつきの商品を専門

に扱う闇商人を雇い、獣兵の実験モデルとしてコツソリ隣国に販売するなどもしていた。

本国ノスセンテスが滅亡してしまつてからは、脱出の際に掻き集めたありつたけの機材と資金を持ち込んでこの極秘研究施設に引き籠もり、連日実験を繰り返しては『魔獣兵』の完成を目指している。

非人道的な研究を行っていた彼等は故国が滅んだ今、自分達の受け入れ先など無いと認識していた。それならばこそ、生きて行く為の糧と居場所を、自分達で確保しなくてはならない。

強力な魔獣兵、調整魔獣の研究開発は、国を失つた自分達の生存を賭けた『事業』なのである。

伝統と格式を謳う神議会の支配統制という庇護から解放された彼等は、武力を調べて資金を蓄える為に、闇商人組織というアドバイザ配者の下で、僅かに残っていた倫理の箍も外れてしまったかの如く研究に没頭していた。

頑丈な檻が並ぶ魔獣研究室の一室にて、目の下に隈を浮かべてぶつぶつと呟きながら薬品の仕分けを行っている研究員に同僚が声を掛ける。

「おい、食事に行くぞ」

「これを……ああ……直ぐ行く……検体の標本……脳の萎縮が……」

この研究員は担当している野外育成の調整魔獣に異常行動が見られたという報告を受けて、連日その原因を調べる作業に従事してい

た。

二十日程前に届けられた報告によれば、巢の一定範囲内に近付くモノを攻撃するように調整してある魔獣が、その時は何故か巢に火を放たれるまで動こうとしなかったという。

仕方なく調整魔獣に命令を送る『魔笛』を使って巢に火を放った冒険者グループらしき集団を攻撃させたものの、弓などの武器で反撃されて神技阻害の波動が乱れ、返り討ちにあってしまったそうだ。

ここ数日、徹夜で作業をしているらしい彼のうわ言のような返答に、だめだこりゃと頭を振った同僚は一人で食堂に向かった。魔獣に投与する調整用の劇薬が入った薬瓶を移動させようとした研究員は、扉の閉まる音に気を逸らす。

「あつ」

研究資金が足りなかった頃から使われている安物の入れ物は、床に落とした瞬間粉々に砕け散った。幸い、中身は少なかったため床に劇薬の水溜りを作る事は避けられた。だが、幸いなのはそれだけだった。

『このくらいであれば、水で薄めながら拭き取れば問題ない』思考力の低下したボンヤリした頭でそんな事を考えた研究員は、拭き取り用の布と水差しを持って中腰になると、気化した劇薬を吸い込んでしまった。

「……………う……………う……………ふ……………ふへへへへ」

薬の中毒で強烈な幻覚症状に見舞われ、興奮状態に陥った彼は、鬱積した疲労とストレスによって開放に執着する行動を見せ始める。

閉じているモノが我慢ならず、戸棚や机の引き出しなどを片っ端から開いていく。

「うっうっ……開放だ！ 解放なんだ！ うっ……嫌なんだよっ も
う！」

朦朧とした彼の視界に、調整予定の魔獣を繋いである沢山の檻が映った。

「かい……ほう……」

67話：リーンヴァールの夜景

フォンクランクの東海岸沿いからトレントリエッタに向けて南下する街道を、二台の衛士隊馬車が駆け抜けていく。

前に行く馬車にはヴォーマルを御者に悠介、スン、ラーザツシアと何故かレイフォルドが乗車しており、後ろに続く馬車はシャイードが御者を務めて、エイシャ、フォンケ、イフヨカ、それにソルザツクが乗り込んでいた。

悠介達がラーザツシアを連れてトレントリエッタのデリアルディアに行くと言ったソルザツクは、それならルディアの水石鉱山で採れる鉄鉱石が欲しいからと同行を求め、鉱石採掘という名目で付いて来る事になった。

流石に一台の衛士隊馬車で九人を運ぶのは荷物の関係からも無理があったので、二台用意して分乗する事にしたのだが、メンバーの都合上、高速走行に必要な水技による馬の体力回復や風技の移動補佐はどちらか片方に偏ってしまう事になる。

その為、当初は移動補佐での高速走行は諦め、馬具に回復効果を付与してほぼ無休憩で走行できるようにする事で、一日の移動距離を稼ごうと計画していた。

それでもトレントリエッタの首都、リーンヴァールまでは四日ないし五日は掛かると予想されていた。そこへ偶々宮殿の馬車乗り場を通りかかったレイフォルドが移動補佐役を申し出てくれたので、彼もメンバーに加わる事になったのだ。

総勢十名の大所帯となった闇神隊一行は、初日にフォン克蘭クの東端にある港街で一泊し、二日目の昼を過ぎる頃にはトレントリエッタとの国境にさしかかろうとしていた。

「国境を越えれば直ぐリーンヴァールが見えてくるよ、この分だと夕方前には着くだろうね」

「レイフォルドはトレントリエッタにも詳しいのか？」

「それなりには」

「ふーん」

移動補佐を行いながらも悠介との会話を難なくこなすレイフォルド。悠介はこれだけ長い時間レイフォルドと行動を共にするのは今回が初めてだなあと、何だかレアキャラのレイイベントにでも遭遇している気分になった。

ふと、馬車の隅っこでスンと並んで居眠りをしているラーザツシアに視線を向ける。

サンクアディエツトを発つ時、それまで楽しそうな様子を見せていたラーザツシアは、馬車乗り場でレイフォルドの飛び入り参加が決まってから随分大人しくなったというか、彼を警戒するような素振りを見せていた。

「前の職業柄、勘の鋭いところがあるんだと思うよ？」

「まだ何も言っただけだし……つか思考を読むなっ」

悠介の視線の先から考えている事を読み取ったレイフォルドは、ラーザツシアが自分を警戒する理由をそれと無く語る。やはり裏の仕事に携わっていた者には、同類の持つ気配のようなモノを感じる

のだろうと。

ラーザツシアの勅はレイフォルドを危険人物であると認識したよ
うだ。

「荒事は専門外じゃなかったっけ？」

「僕自身が手を下すことは殆どないけどね。間接的なやりようなん
て、幾らでもあるからねえ」

相変わらず掴み所の無い飄々とした雰囲気でそんな事を言い放つ
レイフォルドの姿に、確かにこういうタイプが一番怖いのかもしれ
ないかと、悠介は内心でラーザツシアの警戒に納得するのだった。

そんな会話が交わされる中、国境を越えた闇神隊一行の前方にリ
ーンヴァールの街が見え始めた。

街中が淡い幻想的な灯りに包まれたトレントリエッタの首都、リ
ーンヴァール。領土の大半を深い樹海の森に覆われるトレントリエ
ッタは、旧ノスセンテスに次ぐ古い国家である。国民は風技の民が
圧倒的に多い。

「童話の国みたいな感じだなあ」

「綺麗ですねー」

「……………」

蔓や木の根、大きな葉っぱ等が目立つリーンヴァールの街並み。

悠介はまるで御伽噺に出て来る妖精^{エルフ}たちの隠れ里のようだという印象を持ち、スンはリーンプの輝きに溢れた光景に感嘆する。ラーザツシアは只管感動しているらしく静かだ。

「風が……凄く、洗練されてる……」

「へえ、そうなの？ やっぱり風技の民が多い国だと違ったりするのかしら」

「隊長ー、宿行きましよう宿っ 早いとこー休みしてーです」

「娼館に行きたいって気持ちが出てるぞ」

街中を吹き抜けていく伝達の風がとても繊細だと感心するイフヨカに、エイシャが相槌を打つ。フォンケは何時も通り、幻想的な街並みの事よりもこの街の唱謡いの事が気になるようだ。ヴォーマルに突っ込まれている。

風技の民の気質なのか、森に囲まれて閉鎖的に見える国のイメージとは裏腹にトレントリエッタの民は意外と開放的で、身も心も自由な人々が多い。賭博的な娯楽も盛んだ。

また、国王が頻繁に代わるので王族という家柄はあるといえれば数え切れない程あるのだが、無いといえば無いと言えるほど彼等の政治的な影響力は低い。そもそも血生臭い政争とは無縁の、元から権力なぞ持つ気も無い一族が殆どである。

国王が代わるのは何れも国政の失敗で経済が大きく傾いた場合などに、時の王から『後は任せたぞ』と押し付けられた者が新しい王となり、国を導いてきた。現国王であるグリフザツ八王は、歴代のトレントリエッタ王の中でも長く続いている方だった。

執政能力は並だが、いい加減な部下達を寛大な心で赦す懐の深さと、何事も慎重に進める地味で堅実な性格が幸いしている。

「そのこの通りを右に入れば、高級宿場通りだよ。王宮にもこっちの方が近いからね」

「……詳しいな」

見通しの良いとは言いがたかったリーンヴァールの大通りを行く闇神隊一行。レイフォルドの指示に従って手綱を引くヴォーマルは、一言呟いて右の通りに馬車を進めた。

高級宿場通りの宿を借りた悠介達は、闇神隊の代表として隊長の悠介にヴォーマル、それに案内役のレイフォルドと連れ立って王宮へと向かう。一応、外国で調査活動を行うにあたって、トレントリエッタ国王に挨拶と親書を渡す事になっている。

「さて、相変わらず公式な挨拶の仕方とか全然分らんのだが……」
「ああ大丈夫、大丈夫。基本的な交渉とかは僕がする事になってるから、ユースケ君達は親書を渡してくれるだけでいいよ」

そう言っただけで何時もの微笑を向けるレイフォルドに、悠介は内心で『やっぱり最初から仕組まれてたか』と肩を竦める。飛び入り参加というのは建て前で、この調査隊に正式なメンバーとしてレイフォルドの存在を含めない為の口実なのだ。

宮殿の馬車乗り場からだが、レイフォルドは『闇神隊が道中、現場判断で道案内に拾った者』として、彼の詳細は公式な記録には残らない事になる。エスヴォブス王辺りから何か特命でも帯びて来ているのかもしれない。

「ほんとに親書渡しただけで終わったな」

闇神隊メンバーの待つ高級宿に帰って来た悠介は、皆の集まる広間に向かいながら隣を歩くヴォーマルに話を振った。レイフォルドはトレントリエッタ王と何やら込み入った話があるらしく、一人王宮に残っている。

「ま、楽なのは歓迎しやすがね」

「ヴォレットの父ちゃんも中々食えない人だからなあ」

ヴォーマルはエスヴォブス王を『ヴォレットの父ちゃん』呼ばわりする悠介に噴出したりしつつ、明日以降の予定について行動の確認を行う。ラーザツシアを中心にした苔の張り付く木を調査するグループと、ソルザツクの鉱石採掘に付き合うグループ。

「この国の住人は兎も角、出稼ぎ労働者の多い街じゃ治安もあまり良いとは言えやせんからね」

植物採取と鉱石採掘という二種類の仕事場が常に需要を持つデリアルディアには、各国からも多くの労働者が集まっているという。仕事に食いあぶれた傭兵などもいて、中には強盗紛いの手段で他人の成果を横取りしようと狙う者もいるらしい。

「なら鉱山組にはシャイードとフォンケを付けよう、レイフォルド

も付いてくれるなら心配ないと思う」
「妥当な人選ですな」

ルディアの開けた高台にある水石鉾山は坑道に入り込むなりしない限り、道に迷う事もない。デリアの太陽苔が採取出来る森は街の近くとはいえ昼でも薄暗い樹海の奥。灯り役のヴォーマルと伝達役にイフォカの同行は必須だ。

宿の広間に到着した悠介は、集まっている皆に明日以降、デリアルディアで活動するにあたっての人事編成を告げた。

「という訳で、シャイードとフォンケはソルザックさんの護衛を頼む」

「了解した」

「そりやいいですが、アイツも一緒なんすか……」

シャイードは一言で承諾と頷きを返したが、フォンケは了承しつつもレイフォルドの同行を気にして見せた。

ブルガーデンとの関係改善以後、宮殿でも偶に見掛ける事があって味方である事は分かっているものの、今回の任務で長く接した結果、ラーザツシアと同じく何か警戒感を持ってしまおうそうな。

「確かに、私も彼には何か底知れないモノを感じる瞬間がありますね」

珍しくソルザックも話に加わり、しかしだからこそ味方としては心強いとフォローを入れる。それについてはフォンケも同意見のよ

うだ。

その後は人事の確認も滞りなく進み、図らずもレイフォルドの警戒されっぷりが明らかになるオマケが付いて終了した。

夜

「まだ起きてたのか」

「あ、ユースケ……」

宿の屋上に設けられた憩いの場にて、リンヴァールの夜景と星空を眺めていたラーザツシアは、悠介に声を掛けられて振り返る。昼でも幻想的な灯りに包まれた街並みは、夜になると一層その美しさに磨きがかかる。

「凄く綺麗」

「ああ、確かにこりゃ凄いな」

街中に灯るリンランプの光が煌々と輝き、曲がりくねった大通りを幾つかの光が行き来している様は、街の脈動を思わせる。カルツイオでもここでしか観られない光の夜景に、悠介は懐かしい気分になった。元の世界の夜景を思い出してしまうのだ。

「どうしたの？」

「ん？ なにが？」

「なんだか今、寂しそうな顔したじゃない」

「え、そう？」

『自覚ないです』とおどけて見せる悠介に、ラーザツシアは少し首を傾げると、徐に悠介の身体を抱き締めた。いきなり何事かと戸惑う悠介だったが、背中をとんとんと叩かれて気持ちちが和らいでいく感覚に肩の力が抜ける。

思春期を過ぎる頃から忘れていた、誰かに抱き締められる事がこれほど心地良いという事を思い出す。とても安心する。暫らくラーザツシアに抱かれながら、悠介は静かにリーングヴァール夜景を眺めていた。

「……………落ち着いた？」

「別の意味で緊張しそうなんだが」

悠介の答えにクスリと笑ったラーザツシアはそつと身体を離す。

「ユースケはさ、ちょっと頑張り過ぎてるんじゃないの？」

「えー……………そうかなあ、割とノンビリやってると思うんだけど」

「そのノンビリだって、意識してやってるじゃない」

「……………」

一度は悠介の在り方を見誤ったラーザツシアだが、人の本質を見抜く眼と感性には非常に鋭いモノを備えている。悠介に感じる異質感は、その特異な神技によるモノだけではなく、悠介自身が周囲に馴染みきっていない事を、彼女は見抜いていた。

上辺だけでも友好的に差し障り無く、自然に接する生き方は、元の世界では当たり前にならず日常だったので、悠介は自身でも気付かない内に、周囲から求められる自分像を演じている部分があったのだ。

「私はさ、色んな”私”を演じてたから、分かるんだ……その人が本来の自分でいるか否かってこと」
「そっかー……つってもなー」

『本来の自分』などという概念は結局、自分で『こつだ』と認め
た自分がソレに当たるのなら、周囲の求めに応じた自身によって構
築される自分像であれば、それもやはり『自分自身』であるとも認
められるのではないか？ 悠介はそんな疑問を返す。

「？ ユースケの言ってる事、難し過ぎてよくわかんない」
「うをいっ」

自分から話題を振っておいてそれは無いだろうとズッコケながら
ツッコミを入れる悠介。ラーザツシアはそんな悠介に笑い掛けると、
くるりと振り返ってのウィンクを放ちながら言った。

「私は、どんなユースケも受け入れるよ。ご・主・人・サマッ」
「ぐっは……」

見事に悠介のオタ気質部分へ直撃させるラーザツシアなのであつ
た。

68話・デリアルディアの受難

翌日、闇神隊一行はデリアルディアへ向けてリンヴァールを出発した。何時の間にか王宮から戻っていたレイフォールドには、皆で朝食をとっている時にルディアの鉱山行きの話をして、了承を得ている。

「そっいや、昨日は王様と何話してたんだ？」

「近頃の景気とか世間話かなあ」

「さいですか」

駄目もとで聞いてみたが思った通りの外した返答に、悠介はやっぱ教える訳無いよなあと納得する。当のレイフォールドは本当なんだけどなあ等と言って笑っていた。

リンヴァールからデリアルディアまでの道程は、地元の住人が使う岩山を抜けるルートと、通常の街道を行くルートがある。切り立った崖を通る岩山の道は慣れないと危険なので、闇神隊は安全な街道を進んでいた。

尤も、調整魔獣の騒ぎがまだ解決していない以上、街道の安全性にも疑問が残るところだったが。

一度国境を越えてフォークランク領の街道を進み、再びトレント

リエッタ領に入る辺りで昼の休憩を挟んで、デリアルディアに到着したのはそろそろ夕方になるつかという頃だった。

「わぁ、ここがデリアルディアなのね」

馬車から身を乗り出したラーザシアが、ぐるりと周囲を見渡して感嘆する。街道を挟んで発展する二つの街。山側と森側で建物の雰囲気は違っていている所に、街の人々の芸術的な趣向が窺えた。

デリアルディアの中央通りは街の発展に伴って拡張された街道がそのまま使われており、商隊の馬車や露店も多く並んでいる。

「すつごく、賑やかですね」

「賑やかというか……やけに騒いでるような気がするんだが」

「武装している者が多く見られる。恐らく傭兵だろう」

「やっぱり、例の魔獣騒ぎのせいかしら……?」

街の雰囲気にななる賑やかさ以外の物々しさを感じて疑問を口にする悠介に、シャイドは出稼ぎ労働者の多い街にしては武装したまま移動する集団が目立つ事を指摘した。調整魔獣の被害に備えているのでは? と、エイシャが補足気味に呟く。

リンランプの明かりが灯り始めた大通りをゆっくりと進む闇神隊一行の衛士隊馬車。他国の正規軍が使う馬車が珍しいのか、街を行く人々から少なからず様々な視線を向けられる中、悠介達が街の様子について話している所へ声を掛けてくる者がいた。

「よお! あんた達も来たのか」

傭兵団らしき集団の一つから手を振りながら駆け寄って来たのは、調整魔獣との戦闘が行なわれた森で行動を共にした冒険者グループの一人だった。仲間の死を嘆きながら魔獣の幼生を踏み潰していた姿は、まだ皆の記憶に新しい。

「暫らくぶりですね、元気そうでなによりです」

無難な挨拶を返す悠介に冒険者は笑顔を見せると、後ろを振り返って仲間らしき集団に『ほらな』と言うようなゼスチャーを見せた。彼の仲間たちはフォンクランクの衛士隊馬車に近付こうとする彼を『ヤバイからよせ』と止めようとしていたようだ。

「なあ、やっぱりあんた等も魔獣施設の調査に来たのか？」

「魔獣施設？」

「違うのか？ てつきり奴等の殲滅に動いたのかと……いや、幾らなんでも早過ぎるか」

「話が見えないんだが……」

一体何の事かと首を傾げる悠介達に、彼は今この街で起きている出来事を説明してくれた。彼の話によって、街の物々しい騒がしさの理由が明らかになる。

昨日の深夜過ぎ頃、街に一人の男が転がり込んできた。酷く負傷していた男は治療を受けている間、息も絶え絶えに自分が居た調整魔獣研究施設の事について語り始めた。その内容は人々の恐怖と不安を煽り、好奇心や功名心も刺激するものだった。

興奮状態に陥った研究員の一人が魔獣の檻を次々と開けて回り、

逃げ出した魔獣が施設の人間を襲い始めて施設内は大混乱に。

調整処置の済んでいない魔獣には彼等が魔獣を操る為に使っている『魔笛』も通用せず、寧ろ魔笛の波動が目印となって魔獣達を呼び寄せてしまい、魔獣の暴走を食い止めようと魔笛を使った者は尽く食い殺されたそうだ。

生き残った研究員達は施設を緊急閉鎖して脱出するも、既に何匹かは施設の外に逃げ出しており、森でそれらの魔獣に襲われて仲間が散り散りになった。

何とかデリアに辿り着いた男は、自分の探究心から始めた研究がとんでもない災厄を招きかねない事態に発展する事を危惧しながら、調整されていない魔獣と共に調整魔獣が野に放たれてしまった事を伝えて息絶えたという。

「普通の魔獣なら神技で対抗できるけど、調整魔獣って奴を相手にする時は武器で戦わなくちゃならない」

魔笛があれば調整魔獣は無力化できるが、魔笛を使うと付近の魔獣を呼び寄せてしまう危険を伴う。だが、調整魔獣を自由に操る事が出来るといふ道具ならば、相当な価値が付けられるだろう。

同じく、かなり危険だが閉鎖された施設内にも、それなりに高価な機具などが置いてある筈だ。

そんな訳で、今この街には情報を聞きつけた冒険者や傭兵団が一攫千金を狙って集まって来ているのだという。同時に、街の人々は魔獣の被害に備えて彼等を雇い込んだりもしている。

単に物々しいというだけでなく、賑やかなだけでもなく、賑やかで且つ物々しいという騒がしさの原因は、魔獣退治に出向いてきた

者と宝探しに来た者、彼等を当て込んで込んで商売に来た者達が入り乱れて混沌とした現状を作り出しているからなのだ。

「なんとまあ……あの事件の続きに出くわせるとは」

「一応、本国にも知らせておきやすぜ。とにかく宿を取りやしよう」

そう言っつてイフヨカに目配せしたヴォーマルは、そろそろ後ろが支えて来たことを気にした。歩行速度で話しながらノロノロと進んでいた衛士隊馬車の後方には、傭兵団馬車やら商隊の馬車がぞろぞろ列をなしている。

流石にフォンクランク正規軍の衛士隊馬車、それも噂の闇神隊が乗っている馬車に道を開けると苦情を浴びせる事は躊躇われたらしい。

「うわっ すんませーん！ 直ぐどけますからー！」

車窓から顔を出して頭を下げ下げ宿場の並ぶ通りへ馬車隊を進ませる闇神隊の若い隊長に、後方で立ち往生を喰らっていた馬車の御者達が思わず畏れ多いとばかりに頭を下げ返していた。

「いやあスマンスマン、長話で足止めさせちゃったみたいだな」

「いえいえ、貴重な情報をありがとう」

高級宿場通りは一般的な宿が並ぶ通りに比べて人影も少なく、後続車を気にしなくてもよくなった悠介は、重要な情報を教えてくれた冒険者ともう少し会話を続けてみる事にした。

「あの時の怪我してた人とか、もう良くなったんですか？」

「ああ、怪我はあれから直ぐ治ったみたいだよ。あいつ等とは別れ

ちまったから、その後はどうなったか知らないが」

「え、別れた？ って……ああ、その場限りのパーティーメンバーだったって事ですか」

「いや、五、六年は一緒にやってたかな……宝探しが主な活動だったんだけどな」

神妙な表情になる冒険者に、やはり半数近い仲間を失った事が関係しているのかもしれないと推察する。あまり触れるべきではない、そう配慮して話題を変えようとする悠介だったが、冒険者は神妙な表情を険しくしながら言葉を続ける。

「月鏡湖なんか探ったって意味ないんだよ……っ まだ魔獣がいるかも知れないってのに、あいつ等ときたら……」

「え、えーと……じゃあ傭兵団に入ったのって、最近なんですなー」
「そうなんだよ！ やっぱり専門家が集まった傭兵団なら効率良く殺せるからさあ」

ここに至って、悠介を始め闇神隊メンバーの誰もが、彼の言動と雰囲気違和感を感じていた。初対面となるラーザツシアやソルザツクも、言葉の端々と表情に滲み出る狂気の影を感じ取っている。

「おっと、いけね！ 仲間が心配するから俺は戻らせて貰うよ、またな！」

元冒険者の彼はそう言って手を振ると、大通りの方へと駆けて行った。

「……うーむ」

「隊長、こつちもそろそろ宿に着きやすぜ」

唸る悠介。闇神隊一行に暫らく微妙な空気が流れたのだった。

予め連絡を入れておいた宿に入り、先程の調整魔獣に関する情報について対策会議を開く悠介達。

闇神隊の貸切状態になっている小規模なれど立派な造りをした宿の広間にて、集まった皆が大きな長テーブルで向かい合う。レイフヨルドは一人、壁を背にして廊下付近に立っていた。

「魔獣の事は気に掛かるけど、今回は苔の調査って名目で来てるんで、明日からの活動は予定通り行なおうと思うんだけど」

「事件には積極的に関わらない方針って事ですかい？」

「そうなるな」

「いーんじゃねーすか？ 無理に首突っ込む事もねーですし」

フォンクランクに送った情報に対する返答は、早くとも明日の昼過ぎくらいまでは掛かると思われる。他国領での出来事、任務でもない危険な事件に態々こちらから手を出す必要もなかるうという事で、皆は悠介の方針に賛成した。

とりあえず現状で話し合っておくべき事はないかと意見を求めると、ソルザックが拳手を向ける。

「これだけ大勢の傭兵や冒険者が集まっている状況は当初の予定に無かった事だと思いますが、まず考慮すべきは」

闇神隊の噂を知る者の中には手っ取り早く己が名声を得んとして決闘を申し込んで来たり、挑発を仕掛けて来たりする輩もいると思われるので、喧嘩やトラブルなどにも巻き込まれないよう十分に注意する必要があると対策を促すソルザック。

それについては尤もだとして、街を出歩く時は常に三人以上で行動する事を決めておく。

「まあ、隊長は問題なさそうですね」

「ああ、隊長ならば大丈夫だろう」

「ええ、隊長は安心だわ」

ヴォーマルとシャイドとエイシャが立て続けにそんな言葉を重ね、イフヨカもこくこく頷いた。テールルの端でポトルを傾けていたフォンケが『ぶふっ』噴出しているのを横目に、悠介は『そのお墨付きは何なんだ』と三人に訊ねると

「だってユースケに手を出そうとしたら、決まって相手が自滅するじゃない」

ラーザツシアがそう答えて皆を頷かせた。

「え、えーと……ユースケさんは悪くないです、よ？」

「……スンはいい子だなあ」

スンの天然に癒される邪神なのであった。

69話：根立ち木の森

一夜明けたデリアルディアの街は、昨日の混沌とした騒がしさから落ち着き、周囲を傭兵と冒険者のグループが警戒する厳戒態勢をとっていた。

南西方面、ガゼツタ地方から街を目指していた商隊が殆ど辿り着いていないという通商協会の発表があったのだ。

この事態を受けてトレントレット政府は、施設から逃げ出した調整魔獣が広がらないよう、軍を出して一帯を封鎖する方向で動き始めた。同時に、各国へ向けて正式な緊急事態の通達が行なわれる。

闇神隊が現地から送ってきた情報という形で既にデリアルディア周辺の状況を察知していたフォンクランク、ヴォルアンス宮殿では、日を置かずしてトレントリエッタ政府から出された緊急事態を知らせる通達に、どう支援するかという会議が朝から行なわれていた。

「しかしまあ……流石にここまで続くと笑えんのう」

物置に仕舞っておいたリーンランプを引っ張り出して部屋で磨いていたヴォレットは、行くところ行くところで事件が起きている気がする、悠介の邪神属性に呆れるやら感心するやらな呟きを零す。

同じ頃、ルフク村にて村人達や駐在する衛士隊に魔獣への警戒を呼び掛けていたゼシャールドも、似たような事を想っていた。単なる偶然か、はたまた本当に邪神としての性質が、燻り出すように災厄を呼び起こしているのか。

「余所の村から避難してくる人々の受け入れも考えねばならん」「うーん……土地はまだ余裕あるけど、住む家が間に合わないねえ」

『ユースケがいれば助かるんだけどねえ』などと悠介の超高速建築^{カクタマイズ}を当てにするような事を言うバハナに、ゼシャールドは『うむ』と一言だけ、呟くように答えたのだった。

ガゼッタの中枢として定着し始めたパトルティアノーストの旧神義堂では、トレントリエッタからの通達に合わせて警備の兵を森の周辺に展開する指示を出していたシン八王が、密偵からの別情報に何故もつと早く知らせなかったと叱責を飛ばしていた。

闇神隊がデリアルディアに向かっているという情報は、魔獣施設周辺の諜報が重視されて後回しとなり、シン八の耳に入ったのは一日遅れとなったのだ。

デリアルディア周辺に流出している魔獣の規模が流石にやばいという事で、邪神^{ユースケ}の援護に向かう事を決めるシン八。

邪神^{ユースケ}の資質を見定める段階であった頃ならともかく、二千年ぶりに白族帝国の巨城と領土の一部を取り戻し、邪神の力も確認している今、ガゼッタの繁栄を維持して行く上で鍵となる悠介を失う訳には行かない。

情報を出し渋った結果、みすみす危険地帯に闇神隊を行かせてしまった事で、下手を打ったと悟る。

「上手いもんだな」

本来なら施設の情報をもっと詳しく調べてからその内容を小出しにしつつ、トレントリエッタとフォンクランクの動きを探り、双方の戦力を測りながら、どのくらい調整魔獣の調査に本腰を入れてくるのかを見極めるとというのがシンハの狙いだった。

「明確な戦略意図も無く情報を出し渋って相手を操ろうとしても、そう上手くは行かぬモノなのじゃよ、シン坊や」

「……だったらあの時にそう教えてくれ」

「それでは教訓にならんじゃるが」

カツカツと笑う里巫女に、シンハは溜め息を吐いた。

デリアルディアは一応神技人国家の街であり、国のトップと繋がりのあるブルガーデンや色々と脇の甘いフォンクランクに比べれば、それなりに街の警備も厳しい。森の中を勝手に通り抜ける事と、街に近づく事とはまた別なのだ。

「明日発つぞ、今回は俺の側近も連れて行く」

「なんじゃ、また王自ら出向くつもりかえ？ 少しは副長達の胃の事も考えてやったらどうじゃ」

「邪神ゴスケの信頼を得る意味でも部下任せには出来んし、魔獣が相手だ、相応の腕を持つ者でなければ命を落としかねん」

「幾つになっても落ち着かん奴じゃのう、玉座で大人しゅう踏ん返り返っておればええのに」

辛辣な言葉とは裏腹に楽しそうな笑みを浮かべた里巫女は、無用な争いを避ける為にも抜け道案内に自分も付いて行く事を告げる。

「会つのか？ ユースケに」

「なあに、ちよいと覗いてみるだけじゃよ」

「……わかった」

デリアルディア高級宿場通り

「それじゃ、お昼に一度集合するって事で」

悠介達は太陽苔の採取場所であるデリアの森へ向かう組と、ルディアの水石鉱山に向かう組とに分かれてそれぞれ出発した。

厳戒態勢の街中では、傭兵団や冒険者達が幾つかのグループに分かれ、調整魔獣研究施設の完全閉鎖と魔笛の入手に向かう準備を整えている。大手の傭兵団と一時的に契約して連れて行って貰うフリーの冒険者達は、施設での宝探しが目的のようだ。

「おい見ろよ、闇神隊が出るみたいだぜ」

「いや、ありゃあ太陽苔の調査に来てるだけらしいぞ」

街を出発する闇神隊が施設の封鎖に向かう訳ではないと知った幾つかの冒険者グループは、同行しようかと待ち構えていたら当てが外

れてしまい、がっかりした様子を見せている。

傭兵団と組んだグループの中には闇神隊の勇名に懐疑的な者もいて、色々と口さがない噂も流れた。

「なんだか物々しきは昨日以上だな」

「騒ぎが落ち着いた分、武装集団は目立ちやすからね」

早朝で露店も少ないから余計にそう感じるのだろうと、朝靄の通りを炎技で照らすヴォーマルが手綱を引きながら答えた。馬車の中では、まだ眠たそうにしているラーザツシアがスンと凭れ合うようにして半分眠っている。

「イフヨカはしっかり起きてるな」

「あ、はい……普段から、朝は早かったので」

「あゝルフク村の生活とあんま変らなそうだよな、無技人街の生活って」

「そうですね……水汲みから食事の支度から、全部自分でしなくちゃいけませんし」

薄暗い森に行く採取場所までの道程をゴトゴトと馬車に揺られながら、悠介はイフヨカとの他愛無い雑談を楽しむのだった。

ボンヤリとした光に包まれる空間。太陽苔の採取場所は湿地帯のような場所に根が絡み合って上へ伸びたような姿の特殊な木が水面

から生え出ており、その木の表面や周辺がまだらに光っている。

木から剥がれ落ちた太陽苔が水面を流れて広がり、そこから放たれる光がこの辺り一帯を包み込んでいるらしい。

「これはまた、幻想的な光景だなー」

「ホントに……凄く綺麗」

女性陣は軒並み感嘆の溜め息でその光景に魅入っている。闇神隊の案内役を任されて緊張気味だった作業員の若者は、最近では珍しくなった彼女達の反応に嬉しそうな表情を見せながら、太陽苔の生態や苔の張り付く木に付いて説明を始める。

「この木は”根立ち木”といって、その名の通り殆ど根っこだけで出来てるような木なんですよ」

「へー」

リーンプは太陽苔と水石を合わせる事で、ある程度の光度を調節出来るようになっており、水石が発光の鍵とされている。

根立ち木には水石と同じ成分が地中から吸い上げられて含まれているらしく、太陽苔は根立ち木から養分と共にその成分を取り込んで発光する。根立ち木は太陽苔の光を得て光合成を行なっているのだ。

「なるほど、共生関係にあるわけか」

「ええ、根立ち木はどういう訳かこの辺りでしか育たないので、この一帯の地質に何か秘密があるのだろうと言われてます」

つまり、太陽苔の栽培を安定させるには、根立ち木が苔に与えている養分を解析して人工的に作り出すか、根立ち木を栽培できる環境を整える事が条件となる。

「水石を砕いて土にするとか、この辺りの土を持っていくとかは……」
「あー、それは今までに栽培の研究をしてらした方達も試していたようですが」

何れも上手く行かなかつたらしい。特に、この辺りの土を持っていくやり方は今の採取環境を破壊しかねないという事で反対する者も多く、植木鉢二つ分程くらいしか掘り出す事は許されなかった。

「まあ、そりゃそうだよな」

「……ご理解頂けて何よりです」

闇神隊の隊長は地面を広範囲に渡って加工する神技を使うらしいと聞かされていた案内役の若者は、問答無用で「ごっそり持って行かれやしないかと内心冷や冷やしていたのだが、良識ある対応を返されてほっとしていた。

「どうだシア、何か分かりそうか？」

「んー、ここの水源は？」

「えーと、もう少し奥へ入った所に湧き水があるんですよ。月鏡湖と繋がってるんじゃないか、なんて言われてますが」

「湧き水かあ……」

木や土だけでなく水質も一緒に調べたいというラーザツシアの提言により、太陽苔の張り付いた根立ち木の一部に土、この付近の水、それに水源である湧き水とその道中の土も採取する方向で活動を始める。

悠介は試しにカスタマイズメニューで土や水のステータスを調べてみたが、硬さや粒度を調節するスライダー群の中に太陽苔や根立ち木を育てる養分らしきモノが幾つか並んでいた。

この養分の素となる物質があれば、それらを材料にして普通のよく似た土に混ぜ込み、カスタマイズでここにある土と同じステータスにする事でこの群生地と同じ環境を作る事が出来るかもしれない。

「一応データのコピーだけしとくか」

恐らくかなりデリケートなバランスで成り立っているであろうこの場所を、下手に弄くって生態系に影響を及ぼすような事があってはいけない。悠介は水と土のステータスを記録すると、そつとカスタマイズメニューを閉じた。

「ユースケー！ こっちの奥の土も採取したいから、容器持ってきてー！」

明かり係りのヴォーマルを引き連れて岩に生す別種の苔や付近に生える植物を調べつつ、木々の間から手を振るラーザッシア。

「はいよー って、もう手持ちの容器がないぞ」

「あ、わたし取って来ますね」

「悪いな、手間掛けさせちゃって」

持って来た容器は既に埋まっているぞと困る悠介に、すかさずスコンが馬車まで容器を取りに走ってくれる。

奴隸の証である黒い腕輪を付けた少女に荷物運びを要求され、無
技の従者に申し訳なさそうな態度で礼を言う若き闇神隊長を、案内
役の若者は何だか妙なモノを見てしまったような戸惑いの表情を浮
かべていた。

70話：疑惑の欠片

「そっちはどうだった？」

「いや、中々良い石が手に入りましたよ」

一通り活動を終えて一旦デリアルディアの宿に戻った悠介達は、遅い昼食をとりながら互いの活動成果を報告し合う。

ソルザックは目的の鉄鉱石を十分に集められたので、鉱山の配送業者に依頼してフオンクランクまで運んで貰えるよう手配も済ませているそうだ。

悠介達の調査活動も採取した土などを持って帰って屋敷の地下で研究を進めるだけなので、今回の任務は殆ど達成されている。

「さて、本当なら任務が終わった後は適当に観光でもして帰還する予定だったんだけど……」

「今の状況じゃあノンビリ観光なんざ出来やせんな」

「リーンヴァールでなら、それなりに落ち着けるんじゃないですかね？」

「用が済んだのに、何時までも居座る訳に行くまい」

結局、立場的な事も踏まえて危険地帯に長居は無用との結論に達し、明日一で帰国の途につくことが決まった。撤収作業、という程の大荷物がある訳でもなかったが、携帯食糧や水などを馬車に積み込んで帰国の準備を始める。

夕暮れ時。街に帰って来た傭兵団や冒険者の先発隊には多くの死傷者が出ており、魔獣施設周辺は予想以上に危険である事が知れ渡った。そんな中、帰り支度を進める闇神隊をあからさまに『怖気づいた』と批判する者も出始める。

が、悠介達は最初に決めた通り、徹底スルー作戦で侮辱も挑発も無視してトラブルを回避していた。

夜に入り、闇神隊メンバーは就寝までの自由時間を思い思いに過ごす。エイシャとイフォカはシャイードとフォンケを連れて裁縫店などを見て回り、ヴォーマルとソルザックは宿の酒場で酒盛り。レイフォルドは何処に消えたのか部屋にも姿が見えない。

悠介はスンとラーザシアを伴って宿場通り近くの露店巡りをしていた。

「じゃあ後は御土産に何か買って帰ろうか」

「ヴォレット様に渡すなら、光るペンダントなんてどうでしょう？」

「あの姫様、そういうの好きそうだもんね」

リンランプの構造自体はそれほど複雑では無い為、ペンダントサイズまで縮めたアクセサリー型リンランプなどという如何にも狙った御土産品が露店に並んでいる。発光時間はあまり長持ちしないが、一応苔の詰め替えも出来るらしい。

和やかに買い物を楽しむ悠介達。とそこへ、近くの酒場から出て来た酔っ払いが目立つ黒の隊服を見つけて絡み始めた。

「うお？ てんかのアンシンたいちよーどのは、むぎとどれえは

べらせてカンコーきどりつてかあ〜」

「スン、シア、向こうを回ろう」

「はい」

「そうね」

酔っ払いは訳が分からんと苦笑しながら、悠介は通りの反対側を見に行こうと二人を促す。今日は帰り支度で買出しをしていた時から、態々近くで聞こえるように噂をする者達を数人見かけたが、放置しておけば特に害はなかった。

ソルザックが忠告していたとおり、魔獣施設の攻略に向いてきている傭兵団や冒険者の中には名を上げる事に躍起な者もあり、手っ取り早く名声を得んとする彼等の挑発には、闇神隊長ユースケの力を見定めようとするような節が見られた。

それでも、タリス青年のように正面切って悠介に決闘を挑んでくるような輩はいない。野心家も理想家も、理性ある者は大抵、慎重に事を進めようとす。そして、理性の働かない者は軽はずみな行動に出易く、またソレを他者に利用され易い。

「をーい、にーげんのかあ？ おお？」

「ねえ……ついて来るわよ？」

「うーん、酔っ払いはなあ」

「困りましたね……」

これでは落ち着いて買物も出来ないなあと困っている悠介達の様子を遠巻きに窺う者達が数人、彼等は酔っ払いが何かやらしかしてくれる事を期待して囁し立て始める。注目を浴びた事でエキサイトする酔っ払い。

悠介達に直接的な侮辱に当たらないギリギリの挑発を行なうも全く相手にされなかった彼等は、噂の闇神隊長が実際にどんな力を持つのか、噂のみでは測りようが無く、決闘を挑む場合に備えての攻略法も立てられないでいた。

巨大な壁を出したとか、一瞬で砦を建てたとか、部隊ごと瞬間移動した、といった噂ばかりで、どのように戦うのかがサツパリ分からない。少しでもその力を見せてくれれば、そこから噂の内容と照らし合わせて具体的な戦術などを推測する事が出来る。

だが、彼等のそんな思惑は酒場から出て来た酔っ払いの仲間によってあっさり散らされた。

「おい、何やってんだ、席にもどれよ。団長がデリア産の美酒を奢ってくれるそうだよ」

「おおっ いいねえ〜でりあのみしゅはさいこーらろっ」

呂律の回らない舌に千鳥足でいそいそと酒場に戻っていく酔っ払い。それを見送り、悠介達に向き直って軽く謝罪の言葉を口にする革鎧姿の男は、元冒険者の彼だった。

「すまなかつたな、あいつの友人が今日の斥候から帰って来なくてさ……ちよつと深酒してるんだ」

「そっか……。いや、事情は分かったし助かったよ」

理解を示す悠介に、元冒険者の彼は感謝の意を示して頷いた。先日、大通りで話した時のような狂気は感じられず、彼の危なげな気配は特定の話題などに誘発されるモノなのかもしれないと、悠介は推察した。

「闇神隊はこのまま帰国するのか？」
「まあね、一応任務は済ませたから」

元冒険者の彼は少し考えるように沈黙すると、徐にこつ切り出す。

「……なあ、無理にとは言えないけど、良かったら魔獣退治に手を貸して欲しいんだ」

「それは……」

やはり同時に複数の魔獣を相手にすると、戦闘集団である傭兵団でも梃子摺る上に、神技阻害能力を持つ調整魔獣が混じれば、これまで積み重ねてきた対魔獣戦術の定石が全く通用しなくなってしまうらしい。

斥候部隊が壊滅的な死傷者を出した事で、各傭兵団や冒険者グループは何れも今後の活動に対して慎重になっているそうだ。

「もちろん無茶な頼みだつて事は分かつてる。だけど、もしかしたら正式に任務が下るかもしれないだろ？」

彼は調整魔獣と戦つて無傷でそれを撃退した功績を持つ闇神隊がいてくれれば、尻込みしている団員や他のグループを奮い立たせる事にもなるので、是非とも参加して貰いたいのだと言う。

「この魔獣騒ぎも早く片が付かれると思うんだ、考えておいてくれよ」

そう言い残して、元冒険者の彼は自分が現在所属している団の待つ酒場へと戻って行った。

「うーむ」

悠介としては仲間を危険な目に合わせたくはないし、自分も危ない事には近付きたくないのだが、彼の願いを無下にするのも悪い気がした。見ていて危なっかしい空気を孕んでいる所も気になる。

とは言え、既に帰国する事が決まっているのに今更こんな話を持ち出しても皆を戸惑わせるだけだしなあと悩む。

「みんなに話してみる？」

「わたしは、ユウスケさんの決めた事に従いますよ？」

「んー、でもなあ」

話しておくべきか、話さないでおくべきか、それが問題だ。などと唸りながら宿場通りまで戻って来た悠介達に、物陰から声を掛けてくる者がいた。

「おや、今お帰りかい？」

「レイフォルドか……つか、なんでそんな隙間にいるんだ」

悠介は建物と建物の間から出て来る自称森の民にツッコみつつも、丁度良い相談相手が現れたと彼の意見を聞いてみる事にした。レイフォルドを前にすると未だ警戒感で緊張した様子を見せるレーザーシアをスンに任せて、二人を先に宿へと帰す。

「そうだねえ、無理に義理立てする事もないとは思っけど」

カルツイオ全体の脅威になつる可能性もある調整魔獣の件だけに、彼等と協力しあつてみるのも一つの手かもしれないねえと、珍しく煮え切らない言い方をするレイフヨルド。

「そこを判断しきれんから相談してる訳なんだが……」

「あつはつは、そうだったねえ。ふむ、じゃあ少し踏み込んで考えてみよう」

調整魔獣の脅威は始まつたばかりで、今の所はまだトレントリエツタ領の一部地域という局地的な範囲に限られている。が、今の場所には世界を股に掛けて活動する多くの傭兵団や冒険者達が集まっているのだ。

ここで動いておけば、闇神隊の活躍を目撃した彼等の情報網を通して、トレントリエツタのみならずカルツイオ全ての国々、人々に對しても好印象を与えられるだろう。

「ユースケ君の活動を通して、世界に良い影響を与えられるかもしれない」

「世界に……」

悠介の耳から心へ、スーツと入り込んでくる様なレイフヨルドの言葉。頭の中で『世界に良い影響を与える』というフレーズが繰り返される。

「っ！」

突然、キンツ というガラス板が割れたような音が響き、悠介の

ボンヤリしていた意識が覚醒した。自分がボンヤリしていた事に、
たった今気付いた悠介が目をぱちくりさせる。

「なにを……っ　してるんですか！」

少し怯えの入った、しかし普段の彼女からは滅多に感じられない
怒気の籠もった険しい表情を浮かべ、通りの角からキッと睨みつけ
るような視線をレイフォルドに向けていたのは、イフォカだった。

レイフォルドが悠介に『幻惑の風』を使っている事に気付いたイ
フォカは、咄嗟に伝達妨害にも使われる『攪乱の風』をぶつける事
で、その催眠効果を打ち消したのだ。

「あれ、これはちよつと予想外だったなあ」

まさか君がそういう行動に出るとは思わなかったと、レイフォル
ドは何時もの微笑を見せる。イフォカが近くにいる事には気付いて
いたが、気弱な所がある彼女のこと、例え幻惑の現場を見ても様子
を窺うだけで何も出来ないだろうと思っただけらしい。

宿内に響いた救援を求める広伝によつて何事かと飛び出してきた
闇神隊メンバーは、イフォカから事情を聞くと其々の神技や武器を
持ってレイフォルドを威嚇する。

つい先程、顔を合わせたばかりだったスンとラーザツシアの二人
も、迷わず弓を構えるスんにレーザーツシアが矢尻を強化して補佐を
行なった。

「まあまあ、みなさん落ち着いて。今回はちよつと事情があつたん
だよ」

割と緊迫した状況なのだがレイフォルドは慌てた様子も見せず、実はトレントリエッタの王と相談して闇神隊の力が借りられるならばと、頼まれていた事を告げる。その説明にはヴォーマルが突っ込んだ。

「ちよつと待て、あんたはフォンクラランク側の人間じゃないのか？
何故トレントリエッタの為に動く」

「トレントリエッタの為、と言うよりも、そうした方がフォンクラランクの益になるからさ」

「闇神隊が事件に関わる事で、フォンクラランクの利益になると？」
「まあ端的に言えば、そういう事だね」

闇神隊主導で事件の解決を図る事が出来れば、トレントリエッタに恩を売りつつ闇神隊の、ひいてはフォンクラランクの名声を更に高めていく事になるといふ、レイフォルドの説明に一応の納得は見せるヴォーマル達。

だが幻惑の風、いわゆる催眠術的な方法で悠介を操ろうとした事実は見過ごせない。警戒の眼差しを緩めない部下達とは裏腹に『今のが催眠術か』とあまり危機感の無い様子で頭を搔いていた悠介は、ふと思いついて訊ねる。

「まさか……森で仕官するよう勧めた時も？」

「いや、あの時はそんな細工はしてないよ」

実際、自分で悩んで彼女にも相談して決めたでしょ？ とスンに視線を向けるレイフォルド。釣られてスンを見つめた悠介からの目配せに、スンはあの当時レイフォルドとは顔を合わせていなかった事を告げる。

「ふむ……しかし、こういうやり方ってヴォレットの父ちゃんは許可してるのか？」

「サラツと痛い所を突いてくるねえ」

ヴォレットが聞いたら怒りそうな気がするんだがと問う悠介に、レイフォルドは肯定とも否定ともつかない苦笑を返した。そうして、裏にある事情を仄めかすように言葉を続ける。

「うーん、出来れば闇神隊自ら魔獣施設の封鎖に関わってくれた方が、色々上手く行くんだけどなあ」

「どういう事だ？」

「エスヴォブス王は、君の力と存在を高く評価しているって事だよ」

それを聞いたヴォーマル達は、これはエスヴォブス王の意向なのか？ と若干の動揺を見せた。

レイフォルドが王から何らかの特命を帯びているであろう事は皆の推測する範囲内であったが、危険な仕事になると分かっていて調整魔獣の件に関わらせようと画策した事は、考えようによっては『切り時』と判断されているとも思えなくもない。

国内外から色々甘いと評されるエスヴォブス王だが、その実、周圀にそう思わせる偽装力に、必要な処置を講ずる場合は些かの躊躇も置かずに行なえる、まさしく賢王と呼ぶに相応しい狡猾さも合わせ持っているのだ。

闇神隊長が自ら調整魔獣の件に関わり、もし殉職するような事になった場合。命令を出していないエスヴォブス王に民衆の非難が向けられる事は無く、王は何時ものように『危険な魔獣に挑んで散った勇敢な英雄』を称えて国民を纏める材料とするだろう。

そんな闇神隊メンバーの心中を敏感に察したレイフォルドは、彼等の疑念を拭うべくフォローを入れた。例によって悠介はよく分かっているらしく、皆の様子に首を傾げていたが。

「今のは言葉通り受け取って貰って大丈夫だよ、王は闇神隊になら任せられると判断してるのさ」

「それなら……なぜ直接、任務として命令を出さない？」

シャイードの尤もな疑問に少し考える素振りを見せたレイフォルドは、幻惑の風を警戒しているイフォカを見てクスリと笑うと、降参ポーズで少しぶつちやけてしまう事にした。

現地で魔獣施設封鎖に協力する事を本国に伝える。エスヴォブス王がそれを許可する。闇神隊の活躍如何によって、現在こちらに向かっているトレントリエッタ軍の負担を大幅に減らす事が出来る。

クリフザツ八王はフォンクランクに感謝の意を表明して両国の友好を謳い、済し崩しのだが自然な流れでフォンクランクとの軍事同盟を宣言する。

魔獣施設周辺一帯の封鎖という目的で派遣されていたほぼ無傷のトレントリエッタ軍は、そのままガゼッタと繋がる二つの街道に魔獣の拡散を防止する為、付近一帯の監視という名目で拠点を設けてそこに駐留させる。

その裏には、フォンクランクとトレントリエッタによる街道封鎖に近い交易制限によって、今後ガゼッタの力を少しずつ削いで行くという狙いがあった。今現在ガゼッタが有する軍事力以上の武力拡大や保持を難しくする事で、侵攻を封じ込めるのだ。

フォンクランクとトレントリエッタによる一連の動きを気取られないよう、調整魔獣の事件を上手く利用するつもりだった。

「それと、ユースケ君に危険な仕事をさせてヴォレット姫にそっぽ向かれないようにする為の工作かな」

闇神隊が自ら動いたという事実を作りたかったのは、エスヴォブス王の画策を隠す意図があったりする。

「娘の機嫌を損ねると口を聞いて貰えなくなるって嘆いてたからねえ」

「それは……親バカといひかなんといひか」

悠介が王に遣える普通の衛士であつたなら、王から直接『密命』という形で任務を賜わつていたのであるが、色々な意味で普通ではなかつた事が、今回のような持つて回つたやり方になつたのだといふヨルドは説明した。

「でもまあ、そういう理由があるんなら無視する訳にもいひかないなあ」

悠介は本当に危なそうなので余り関わりたくはないのだけれど、フォンクランクの宮殿衛士として立場や給料も貰つてる以上、それが王の意向なら出来うる限りの事はするよと、傭兵団や冒険者達に混じつて施設封鎖に協力する事を告げる。

「経緯はどうあれ、あつしらは国に遣える衛士ですからな」

「隊長が決めた事に従うまでだ」

「ま、やり方は気に入わねーけど、仕方ねーわな」

「隊長が、そう決めたのでしたら……」

「わたしは何時でもユウスケさんに着いて行きますよ」

闇神隊メンバー達もそう言うって悠介の判断を支持した。そうと決まれば、街や宿に滞在期間を延ばす手続きをしたり、馬車に積み込む荷物を一部入れ替えたりと、明日からの活動に備えて仕事が増える。

ソルザックとラーザツシアは採取物の事もあるので先に帰らせる事となり、レイフォルドが責任を持って二人を無事にサンクアディエットまで送り届ける事を約束した。

「戦いにはお役に立てなくて申し訳ない」

「みんな気をつけて、必ず無事に帰って来てね」

先に帰国する事を気に病むソルザックと、皆の無事を祈るラーザツシア。二人は翌日の早朝、レイフォルドと共にリアルディアを出発して行った。

斯くして、闇神隊は調整魔獣施設の封鎖活動に参加する事となった。

「えーと、特定の波とか……揺らぎを伴った響き方をするように、風を動かして……それで、催眠状態にするんです」
「ふむふむ」

厳密には風技でなくとも行なえるが、風技で行った方が周囲からの雑音を遮断するなどコントロールもできる分、他の神技よりも効果は高いと説明するイフヨカ。

「要は耳から入ってくる音の波に秘密がある訳か。常にフィルターが掛かるようにしとけば大丈夫かな？」

イフヨカから『幻惑の風』の性質について教えて貰い、隊服に防対策を施して地道に隙を潰していく悠介であった。

71話：魔獣施設への道

「隊長、また別の傭兵団から使者が訪ねて来てますが」

「少数編成の冒険者グループが配下に加えて欲しいそうですぜ」

「あの……小間使いに、雇って欲しいって人が、来てますけど」

闇神隊が魔獣施設の封鎖に動くという話は瞬く間に街中へと広がり、同行を願い出る者や共闘の使者を送ってくる大手傭兵団、冒険者グループが後を絶たなかった。

悠介達も色々と準備を整えなければならなかったので、彼等との話し合いはまた後日という事で一旦引き揚げて貰う。

「あからさまな寄生は弾かないと駄目だろうなあ」

「寄生？」

「ああ……えーと、必要な実力が伴わない分不相応な仕事に他の人達の力を当てにして加わる人、みたいな？」

「なるほど、言い得て妙ですな」

ちょっと口汚かったかなと思いつつ元世界のネットゲーム等でよく使われていた言葉の意味を説明する悠介に、ヴォーマルは面白そうな表情で頷いて納得した。

翌日、闇神隊が宿泊する高級宿の広間では各傭兵団や冒険者グループの代表が集まり、先発隊が持ち帰った貴重な情報を元に施設ま

でのルートを相談するなど、魔獣施設の攻略に向けて会議が行われていた。

闇神隊は共闘条件に『一定量の情報提供』を挙げる事で相手の実力を大まかにでも測り、共闘希望者を篩ふるいに掛けた。

この場合、先発隊を送り込める程の人材を持つ大手ばかりが残る事となる為、小規模グループからは不満の声が上がったが、『我々は慈善事業で来ているのではない』という一喝で沈黙させた。

ちなみにこの一喝、悠介ではイマイチ迫力が足りないという事で、シャイードが担当している。

一方で、共闘条件を満たしている大手傭兵団や冒険者グループの中からは、仲間が命を賭して集めた情報を簡単に教えていいのかと反撥する者も出たが、例の元冒険者が闇神隊は噂だけの集団ではないと証言。

彼の所属する傭兵団もそこそこの名のある中堅だったので、闇神隊の実力に懐疑的だった者達からもある程度の信頼を得た。

進攻ルートを決めてメンバーを選出。見つけた宝の分け前なども話し合う。悠介は交渉や議論など会議の進行を殆どヴォーマル達に任せると、決まった事の確認や検討すべき提案などの説明を受けて最終的な判断のみを行い、決定する。

「それじゃあ、この条件で進めて行きやすぜ？」

「うん、それで頼む。つか、その辺りの事は全部任せよ」

こういった活動の経験が無い悠介は素人が下手に口を出さない方が良いだろうと考え、経験豊富な部下達に丸投げ状態のだが、重要な仕事を任された部下としては上司の信頼に応えんと大いに張り切り、良い条件で交渉を進める事に成功していた。

施設で魔笛や製薬資料などの貴重品が見つかった場合は、闇神隊が優先的に確保出来るという条件で各傭兵団、冒険者グループとの最終的な共闘契約が結ばれる。

その他、細かい取り決めを行なって今日の会議は終了。明日からの活動に備えて解散となった。

「ふ〜、これで一段落ってところか」

「まあ、後は実際現場に出てからですな」

「当日は勝手に付いて来る者も出ると思われる」

「いいんでねーの？ 今回は味方の数も多いんだし」

「皆さんお疲れ様です」

各代表達が引き上げて少し閑散とした印象を覚える広間にて、伸びをしながら一息吐いている悠介達にスンとイフヨカがお茶を淹れしてくれる。エイシャは宿の厨房に夕食の支度を頼みに行った。

「明日から魔獣退治かー」

「共闘作戦になりやすからね、隊長の護りがあれば彼等の先発隊みたいな事にはならないでしょう」

「あーそれと、スンちゃんも隊長の傍から離れないようになー」

「え？ あ、はい、気をつけます」

今の、顔見知りの間でこそ、スンは無技人である事に関係なく普通に仲間として溶け込んでいるが、外部の人間も同じように振舞ってくれるとは限らない。実際この宿で部屋を借りる時も、初めはスンだけ客室ではなく使用人部屋に案内されている。

直ぐに気付いた悠介がスンにも部下達と同じフロアに部屋を用意するよう抗議した時にこんなやり取りがあった。

「え？ でも無技の従者ですよ……？」
「それは、俺の隊の方針に対する挑戦か？」

宿の案内人はごく普通の対応をしたダケだったが、まだまだこの世界の価値観、常識に馴染みきっていない悠介は元世界からしてこういった人種差別的な現実を目の当たりにする事にも慣れておらず、少なからずショックを受けた。

その為、少し角の立つ言い方をしてしまい、相手を大層恐縮させてしまった事には悠介も反省の念を懐いている。

「スンの服、もうちょっと弄っておこうかな……」

「スンちゃん、タイチヨーが今夜はスンちゃんを弄るっていつてるぞー」

「えっ！」

傭兵団や冒険者グループがお近付きの印にと贈って来た良酒に酔いの進んでいるフォンケの頭を、悠介とエイシャとヴォーマルがスパースパースパーン　ぺちつと無言で引っ叩いた。少し遅れた音はイフヨカの一撃である。

「やれやれ……」

こんな何時もの雰囲気で過ごす闇神隊の仲間溜め息を吐きながらも、今度からは自分もツッコミに参加しようか等と考え始めるシヤードなのであった。

翌日、昨日の話し合いで決めた通りのメンバーで魔獣施設に向けてデリアルディアを出発する闇神隊と共闘する傭兵団に冒険者グループ。調整魔獣との戦闘に備えて、なるべく武器を使った近接戦闘が得意な者と治癒を行える者を多くした構成だ。

やはりシャイードが懸念していた通り、少し距離をおいて付いて来る小規模グループの姿も見えるが、イザとなったら彼等とも連係すれば問題ないだろうと見過す事になっている。

死んだ研究員の話では、街からそう遠くない場所に施設へと繋がる通路の出入り口があるらしい。森の地下を抜ける隠し通路で、そこから施設本棟までは結構な距離があるそうだ。

闇神隊を中心とした調査団一行は、街から最も近い場所にあるとされる隠し通路の出入り口へと向かう。

先発隊はその付近で魔獣の集団と戦闘になり、多くの死傷者を出した。施設本棟までの通路上にも、多数の魔獣が徘徊している可能性は高いと思われる。

街を出発して暫らく。森の中で昼食をとり、僅かに踏み均された跡の残る道無き道を奥へ奥へと突き進み、そろそろ陽が落ち始めたかという頃、調査団一行は目的地付近の森に到着した。

「いるぞ！ 反応があった」

「こっちもだ、やはり出入り口付近に集まっているようだな」

さっそく索敵の風で複数の魔獣を確認。非戦闘員を内側に配置した防御陣形を整えて臨戦態勢に入る。

「後ろにいるグループもこっちに呼んでくれ、固まって行動した方がいいと思う」

悠介はこのまま離れて行動させるのは危険なので、調査団に付いて来ている小規模グループも合流させるよう指示を出した。

共闘する傭兵団や冒険者グループの中には甘い対応だと怪訝な表情を見せる者もいたが、闇神隊メンバーはそれが悠介の在り方であると分かっているので、すぐさま指示に従い、後方をうるちよろしいいた小規模グループを呼び寄せに動いた。

こっそり進んでもどうせ神技の波動で互いにバレバレなので、だったら堂々と襲撃に備えて進んだ方が良いという悠介の判断に従い、皆で一塊になって慎重に進む。

何時でも迎撃行動に出られる態勢で進んだ甲斐あってか、魔獣は気配こそあれど一定距離から近付いて来る様子は無い。

「やはり獣は獣だな。調整魔獣が混じった事もあるんだろうが、先発隊は構え過ぎたのが裏目に出たようだ」

「ああ、しかし流石はフォンクランクの最強部隊……あんたとこの団員が言ってた通り、噂は伊達じゃなかった訳だ」

皆の気持ちにも余裕が出始めたらしく、傭兵団や冒険者グループの間でそんな囁きが交わされる。基本的に森を徘徊する動物達は猛獣も含めて大抵が臆病な存在だ。こちらが力を誇示していれば、群れを形成した魔獣も襲撃を躊躇するのだろう、と。

やがて調査団一行は施設に繋がる隠し通路の出入り口に到着した。

「ここか」

「なるほど、こりゃぱつと見じゃ気付けやせんな」

「な、なんだか……血生臭くないですか？」

擦じれて絡み合った木々の根元に、ぽっかりと開いた低い入り口。扉は破壊されているらしく、それっぽい残骸が大量の落ち葉と血痕を付着させて入り口の付近に散らばっている。幽霊でも出てきそうな暗澹とした雰囲気エイシャが呻いた。

既に陽は沈んでおり、リーンプと炎技の明かりで照らし出された僅かな範囲以外は漆黒の闇が広がっている。

「このまま進むべきか、一旦ここでキャンプにすべきか……」

「我々はまだ活動に問題はない」

「休むにしても、中で安全を確保してからの方がいいと思う」

「ここまで移動しかなかったからな、俺達もまだ十分いける」

闇神隊長の問いかけに、傭兵団や冒険者グループの代表はこのまま前進する事を支持した。それならばと、悠介は通路内で安全を確保した後、キャンプに入るという方針で『このまま前進』を決定したのだが、そこで思わぬ足止めを食う事となった。

「うわっ」

「ちよつとこれは……」

通路に下りて直ぐの所に、魔獣によって食い散らかされたのである。研究員らしき死体が散乱しており、酷い死臭が鼻を突く。まとも息をする事も出来ない。傭兵、冒険者問わず、真っ先に逃げ出

す女性隊員達。

とてもじゃないが進めないという事で、まずは通路の換気を優先した。フォンケが中心となり、付与系風技使いが風の膜を駆使して死臭の掃き出しに掛かる。小規模グループの中に付与系風技使いが多かったので、作業は順調に進んだ。

「あれは洒落にならん」

「ですな、ギアホーク砦の時も酷かったです、この辺りの気候柄か腐敗の進み具合が違うようです」

ギアホーク砦でも使ったマスクを皆に配りながら、換気が終わるのを待つ悠介とヴォーマル。シャイドは攻撃系水技使い達と共に通路入り口の洗浄を行なっている。エイシャを始め治癒系の水技使いは具合が悪くなった者を介抱して回っていた。

「魔獣の様子はどうか？」

「あ、隊長……。えと、殆ど動かないと言っか……。少しづつ居なくなってるみたいです」

索敵係りのイフヨカ達に声を掛けると、遠巻きにこちらを窺っている様子だった魔獣は徐々に数を減らしているらしい。

「こっちの数が多いから、どっかに逃げたのかな……？」

「そうかも、しれませんがね」

逃げた魔獣は放置しておけばまた街道を行く旅人達に被害を出し兼ねないが、そちらは封鎖作戦に動いているトレントリエッタ軍の討伐活動に任せておけば問題ないだろう。

「ユウスケさん、入り口の清掃と換気が終わったそうです」
「分かった、直ぐ行く」

作業の完了を知らせに来たスンにそう返答して、悠介は隠し通路の入り口へと向かった。

この隠し通路は元々あった自然の洞穴を整備して使っていたものらしく、壁や床、天井などは一応、土技によってしつかり平面に固められているが、床石などは敷かれていない。

その為、悠介が当初こつそり考えていた床石の入れ替えによる瞬間長距離移動、屋内用シフトムーブで一気に施設まで移動するという手段は使えない事が分かった。

周囲をカスタマイズメニューで調べてみても、外にいる時と同じ程度の範囲にしか干渉出来ないようだ。

「地道に歩いて進むしか無いか」

「こつという時こそ、隊長がヴォレット姫に作ってる乗り物とか使えねーんですかね？」

「ああ、なるほど。小型の移動用車両とか便利だよな」

燃料いらすの永久機関なギミックモーター部分以外は全てデータ化しておく事で、本体を構成する為に必要な材料さえあれば、何処でも組み立て可能なのだ。かなりコンパクトに持ち運ぶ事も出来る。闇神隊の備品として使えるよう申請しておくよと、悠介はフォンケのアイデアを高く評価した。『楽をしたい』という気持ちと発想は、時に発明を加速させるモノなのである。

所々に魔獣の糞が落ちていりらしく、獣臭が漂う地下通路をぞろぞろと列をなして進む調査団一行。予想されていた通路内の魔獣には、今のところ一度も遭遇していない。

「やっぱりこつちが大集団だから近付いてこないのかもしれないな」
「この通路、途中にも幾つか出入り口があるようですから、居たとしてもそこから抜け出してるのかもしれないやせんね」

気構えていた分、少々肩透かしな気分になったが、安全に進めるのならそれには越したことはない。そろそろ休息に入ろうかと悠介が各代表達に声を掛けようとしたその時

ヴオオオオオオオオ

「っ！」

「なんだ？」

「今のは魔獣の声か」

「……僅かに金属音が聞こえる、誰か戦ってる奴がいるんじゃないか？」

通路の奥から魔獣の遠吠えのような声が響き、何者かが戦闘を行なっているらしき音が聞こえて来た。すぐさま索敵の風が放たれ、この先で何が起きているのかが探られる。

「この感じ……っ た、隊長！ 調整魔獣です」

「状況は？」

「た、戦っている人は四人くらい……？ 魔獣は三体います……あ、今一体倒れました」

今のイフヨカは細かい気配を選び分けて感じ取る感性が備わっているダケでなく、隊服に付与された各種補助効果によってもかなり能力が底上げされた状態にある。

調整魔獣の放つ神技阻害の波動により、イフヨカ以外の伝達系風技使いは正確な現場の状況が掴みきれず、戦闘が行なわれているであろう凡その場所と魔獣の存在、戦っている者の存在くらいしか分からなかった。

一見、頼りなさ気に見えてやたら精度の高い索敵を行なうイフヨカに感嘆する彼等は「これが闇神隊か……」と、エリート衛士に対する羨望の眼差しを向けていた。実際は見た目通りの娘^こだったりするのだが、彼等に分かるう筈も無い。

防御陣形で本隊を残し、素早く編成された救援の攻撃部隊が現場に急ぐ。悠介を中心にスン、エイシャ、フヨンケ。前衛として傭兵団の腕利き三人と冒険者グループからも二人。傭兵三人のうち一人は例の、元冒険者の彼だ。

フヨンケの移動補佐で通路を疾走する救援攻撃部隊。やがて前方に見えて来た床に転がる複数の燃える松明。揺らめく炎がその一角を照らし出し、魔獣と戦っている者達の影を壁に踊らせる。唸りを上げて振るわれた大剣が、魔獣の一体を斬り飛ばした。

その瞬間、一帯を薄く覆っていた阻害の波動が消え去った。仕留められたのは調整魔獣だったらしい。

「あれは……無技の戦士じゃないか！」

「ガゼッタの人間か？ 何故こんな所に……」

「ほう、こんなに早くここまで辿り着けるとはな」

傭兵達の声に振り返った無技の戦士が、白金の大剣を一振りして血糊を払いながら感心したような素振りを見せる。無技の戦士の登場に戸惑う前衛組の背後にて、聞き覚えのある声に思わず顔を見合わせる悠介達。

と、その時、叱責するような甲高い声が通路内に響いた。

「油断するな、まだ残っておるぞ！」

「子供？」

悠介が声の聞こえた方向に視線を向けると、壁際に民族衣装っぽい衣服を纏った女の子が立っていた。エルフォナと同じ年くらいに見えるその小さな女の子に、魔獣の一体が襲いかかる。

「　　つ　実行！」

咄嗟にカスタマイズの届く影響範囲内でシフトムーブを使って前衛組を追い越し、ほんの数メートル分だが距離を稼いだ悠介は、女の子の近くまでダッシュしつつ防壁を出して魔獣を囲む。

「片面開けるぞ！」

攻撃の指示と共に防壁の一部を開くと、強化された矢や神技が次々と撃ち込まれる。

「……ユースケ？　なるほど、そついう事が」

悠介の存在を確認したシンハは一瞬驚いたように目を睜ったが、
何かに納得するように呟いた。

72話：里巫女

無技の戦士を警戒している傭兵団と冒険者グループの前衛組に後方で待機させてある本隊へ戻るように指示を出すと、本隊に残っている闇神隊メンバーをこちらへ呼び寄せる伝言を頼んで、悠介はシン八達と向かい合う。直ぐにヴォーマル達も駆けつけた。

「暫らくぶりだな、ユースケ」

「だな。にしても……王様が何やってんだ、こんなところで」

シン八は以前までに会った時と同じ見慣れた大剣に軽装という出で立ちで、珍しく仲間を連れていた。

普通の長剣を握る無技の戦士らしき男性は、舞踏祭での決闘騒ぎでタリスの付添い人が装備していた甲冑と同じ型のモノを身に着けている。彼の背後には双子っぽい良く似た顔を持つ青髪の女性と緑髪の女性。それに先程の子供。

「お前達が近くの街に滞在していると聞いてな、神技人に魔獣の群れは辛かるう。少し間引いておいた」

闇神隊の援護に来たというシン八に、それは隊長ユースケに近づく為の口実ではないのかとシャイードが鋭い視線を向けながら疑問を呈す。

「……ガゼツタは調整魔獣の事を隠蔽しようとしていたようだが？」

調整魔獣についてはブルガーデンからの問い合わせに対する『知っているが教えない』という返答により、ガゼッタは調整魔獣を兵器として使う算段なのではないかと見られている。

今回シン八達が自らここまで足を運んだのも、闇神隊の援護では無く、闇神隊から調整魔獣を隠す意図があるのではないか、と。

「ああ、そういう手もあるな」

「……」

シャイードの指摘をくくと笑ってさらりと流すシン八。闇神隊メンバーとシン八達のグループが睨み合う形で空気が重くなり掛けた所に、悠介の尤もで且つ少し外れた問いがその場を収める。

「つーか、こんな危ない所に子供連れってのはどーなんだ？」

悠介の言葉に複雑な表情を浮かべたシン八が、壁際で欠伸をしている件の人物へ視線を向けようとした時、通路の後方から調査団の本隊が上がって来た。

「ユースケ殿！」

ガゼッタ
「連中とやり合うなら加勢しますよっ」

「いやいやいや、ちょっと話してただけだから、取り合えずみんな落ち着いてくれ」

血気盛んな傭兵達を下がらせ、彼等が暴発しないようヴォーマルとシャイードに抑え役を頼むと、悠介はシン八達に向き直る。

「で、話を戻すけど……シン八達は俺たちの援護に来てくれたって事でいいのか？」

「正確には、お前のだかな」

「ふむ」

シン八の実力も然ることながら、近接戦闘における無技の戦士の強さは折り紙付きだ。調整魔獣を相手にする場合、彼等ほど頼りになる前衛役はいないだろう。

傭兵団、冒険者グループの中にはノスセンテスを祖国に持つ者もいて、彼等はガゼッタに対する明確な敵意を示していたが、悠介はそんな彼等をどうにか説得し、シン八達との共闘を承諾させた。

今のところ、シン八がガゼッタの王である事を知るのは、この場で闇神隊メンバーしかいない。これについては一応、そのまま秘密にしておこうと決めた。下手に知られば、先ず間違いなく命を狙おうと動く者が現れる。

「じゃあ先ずは互いの情報交換から始めようか」

シン八達は魔獣施設の本棟近くから通路に入り、ここまで通路上の魔獣を駆逐しながら進んできたらしい。施設は一応封鎖されていて、中に入る事は出来なかったと証言する。

施設の状態に関する具体的な情報が示された事で、胡散臭げに様子を窺っていた傭兵団や冒険者グループも、それらに係わる手持ちの情報を出し始めた。

「例の研究者の話だと、緊急避難通路の一部が封鎖し切れていないって事らしい」

そこを出入り口にして施設内が魔獣の繁殖場となっている可能性放って置けば施設全体が巨大な魔獣の巣となり、まさに難攻不落の魔獣要塞と化す。

「早めに施設内を浄化して、残った全ての出入り口を封鎖した方がいいだろう」

「ガゼツタ側は施設の事を何処まで把握してるんだ？」

「研究内容と施設の規模程度だな。詳しく調べようとしていた矢先に、現在の状況が発生したのだ」

なるほど、と皆が納得する。ガゼツタも施設内部については殆ど詳しい情報を持っておらず、今のところは正規の調査団も出していないという事なので、施設内のお宝は手付かずで残っている可能性が高い。

貴重品は闇神隊が優先的に確保する事になっているが、大規模な施設であるだけに、実験器具やら備品などの小物でも十分な稼ぎを得られる事が期待できると、トレジャーハンターな冒険者グループはテンションを上げているようだ。

色々と情報を取り交わされた所で今日はもう少し先まで進もうという話になり、一旦この場で休憩に入る事となった。悠介は防壁でこの通路一帯を封鎖して安全地帯を作り出すと、椅子やらテーブルやらも作って皆に寛ぎの空間を提供する。

防壁の天井付近にギミック機能を使った換気扇を設置する事で、

血や獣臭も和らげている。魔獣の徘徊する危険な隠し通路は、何処かの街にあるそこそ立派な食堂や酒場のような憩いの場になった。冒険者グループの何人かが集まっては『地底探検に使える』等と話しながら、天井付近で羽を回転させている換気扇を珍しそうに見上げていた。

「あ、闇神隊長の神技って……」

「うーむ、フォンクランクの英雄の力……実は用兵に特化した神技なのか……？」

悠介の力を見定めようとしていた傭兵団長達は、これまでに聞いていた『巨大な壁を作る』『皆を一瞬で構築する』『部隊を転移させる』といった噂と、実際に間近でその力を見た事により、闇神隊長の神技は敵を圧倒する攻撃系統や複数の効果を併せ持つ特殊系統のような単純なモノではないと捉えた。

環境を整えて味方を補佐する神技、それもかなり広い範囲に亘って戦略レベルで揮われるべき力。

『系統で表すならば総合系統といった所か……』

奇しくも傭兵団長達が至った推論は、全ての神技を宿すと表したゼシャールドと同じ所に行き着いた。

各グループが其々個別のテーブルに着く形で一箇所に集まり、身内の雑談や議論を交わしている中、闇神隊はシン八達と今後の活動について話し合っていた。

この調査団は闇神隊を中心として成り立っているので、共闘する

相手との細かい交渉は悠介達の役目でもある。

「ここから施設までは魔獣の襲撃もないだろう」

「そういや、ここまで魔獣を倒しながら来たって話だったな」

「それもあるが、理由は別の所じゃ」

シンハとの会話に割り込んでくる民族衣装っぽい装いの女の子。

少し紫掛かった艶のある白髪を背中に流し、切りそろえられた前髪から覗くあどけなくも深く大人びた光を携える瞳。名は『アユウカス』と聞いた。

悠介は口調や物腰から彼女の事をヴォレットのような立場に在る子なのかな？ と捉えた。先程からの様子を見る限り、シンハの側近らしい三人は、この女の子に対して敬意を示すような態度で接している事が窺える。

「それは、例えば？」

「お主じゃよ」

椅子からひよいと飛び降りて傍に歩み寄って来たアユウカスは、悠介の眼を覗き込むように見上げながらぴつと指差す。

「お主の存在が、魔獣たちを遠ざけておるようじゃ。どうやらシン坊の取り越し苦労だったようじゃな」

「おい、どういう意味だ婆さん」

「ば、婆さん……？」

悠介はアユウカスの言葉も気になったが、それよりも先ず『小さな小さい女の子に婆さん呼ばわりは無いだろう』とシンハの暴言に突っ込んだ。反論しようと口を開き掛けたシンハだったが、服の裾

を引いてそれを制したアユウカスが先に答える。

「詳細は略すが、ワシはこう見えても三千四歳じゃよ？」

「……え？　さん……ぜん……？」

アユウカス・イクドウト。彼女は嘗てカルツイオに降臨した古い邪神の力を受け継ぎ、白族の末裔たちと共に里巫女として悠久の時を生きて来た存在である。三千年に及ぶ記された邪神の歴史とは、彼女自身の事だった。

何かの冗談かと目で問う悠介に、シンハは事実である事を告げる。

「俺がガキの頃から今の姿で里に住んでたからな。俺の親父も、祖父も、みんなガキの頃は世話になってたらしい」

「三代前の王は成人してからも世話してやってたがの、色々」と

くっくと笑うアユウカスに、シンハは何か嫌な事でも思い出したかのような顔をしてそっぽを向いた。俄かには信じ難い話に、暫し啞然となる悠介達。

「話を戻すがの、お主の邪神としての存在が魔獣たちを怯えさせておるのじゃよ」

アユウカスの話によれば、邪神とはこの世界の『意思』神のような存在が、世界に変革をもたらせる為に呼び寄せる使者なのだという。魔獣は邪神の波動に『意思』の存在を感じ取り、本能で畏れるのだらう、と。

「まあ、お主の能力が周囲のあらゆる物に干渉する力であった事が、邪神の波動を深く感じ取らせる事に繋がったのじゃらう」

「えーつと……じゃあ、もしかして街からここまで魔獣が襲って来なかったのって」

「お主がおったからじゃ。ここの魔獣たちは人馴れしておるでな、お主らが連れている集団程度では餌としか見んと思うぞ？」

先程の戦闘でも、アユウカスに襲い掛かっていた魔獣は邪神の接近に怯んで動きが鈍っていたらしい。

悠介は魔獣を止める事に必死だった為、その時は気付かなかったが、冷静に考えてみると幾らシフトムーブを使ったとは言え、確かに普通なら間に合うタイミングではなかった気もする。

「ふつ……ある意味予想通りだったが、根本的に違っていたか」

あの時、シンハは悠介率いる闇神隊がいたからこそ、傭兵団達がここまで辿り着けたものと思っていた。概ね合ってはいるが、悠介の力に護られながら魔獣を退けての進撃ではなく、悠介の存在そのものが魔獣に道を開かせていたのだ。

それを聞いたシャイドが、以前の事件で疑問に感じていた事の答えを見出す。

「そうか……あの時、巢を焼き払うまで魔獣に動きが無かったのは、隊長がいたからという理由だったのか」

初めて調整魔獣との戦闘を経験したあの森での出来事。そう考えると、親善でノスセンテスを訪れる際や、脱出してからも魔獣と遭遇する事が無かったのは、単に運が良かったという訳では無かったのかと思えてくる。

僅かな時間で邪神の事が色々分かり、自分の存在や役割についてももっと聞きたいと思う悠介だったが、調査団の参加者達からそろ

そろ出発しようという声があがる。

悠介がそちらに気を取られた瞬間『詳しく聞きたくばワシの家を訪ねて来るが良い』等と囁きを残してスツと闇神隊から離れるアユカス。彼女が現在住む家は、パトルティアノーストの中枢塔最上階、旧神議堂である。

「うーむ……」

「中々に鮮やかと言いやしょうか……少なくとも、あの見掛けはアテになりやせんな」

「三千歳つてのも、あながち吹かしじゃねーっばいつすね」

しれつと悠介をガゼッタに誘って行ったアユカスに、闇神隊メンバーは感嘆と共に警戒感を懐くのであった。

椅子やテーブルを床に戻し、防壁が取り払われて出発の準備が整えられている中、シン八に向けて両手を伸ばすアユカス。

「なんだ？」

「ここからまた施設まで歩かせる気か？　ワシの歩幅を考慮せい」

しんどいのでだっこしろという要求だった。さつと周りを見渡すと、三人の側近は『自分達の仕事は護衛ですから』と言わんばかりに適度な距離を置いて通路の先を向いている。ガゼッタの王は側近達の背に恨みがましい視線を向けつつ溜め息を吐く。

「あんだ不死の身だろうが」

「不死身でも疲れるもんは疲れるんじゃ、いいからはようだっこせ

い
「

シンハは渋々アユカスを抱き上げると、悠介達からの視線に気付かない振りをしてしながら施設へと向かう通路を歩き出した。

「……なあ、シンハ」

「言っな……」

73話：施設制圧作戦

地下通路で一夜を明かした闇神隊率いる調査団が魔獣施設の本棟に到着する頃。ヴォルアンス宮殿の最上階、王の私室にて密談を交わすエスヴォブス王とレイフォルド。

「どうやら、僕たちは彼の事を誤解していたようですよ」

ルフク村近郊の森から観察を始め、先日のデリアルディアでの一件によりレイフォルドが導き出した答え。悠介はただ『力』を与えられたダケの一般人である事。各地に残る古い伝承などから『邪神』は『力』として利用できる事が分かった。

「その事は」

「ええ、まだ誰にも言っていないです。ですが……既に知っていた勢力がありますね」

「ガゼツタか……」

「それにブルガーデンの女王も。もつとも、こちらは源流から分派した勢力の流れを汲んでいると思われませんが」

それで彼等の行動も合点がいったと、エスヴォブス王は深く息を吐く。レイフォルドが悠介に幻惑の風を使ったのは、別にエスヴォブス王の指示という訳ではない。

施設封鎖に動くよう勧める任務は受けていたが、あくまでも説得

という形をとる事を前提にしていたのだ。レイフォルド個人の邪神という存在に対する好奇心から、ちょっと試してみたら簡単に掛かってしまったというのが本当の所であった。

何処かの世界から喚ばれた『邪神の力』を持つだけの一般人であると見られる悠介に、ゼシャルドが危惧しているような『邪神の覚醒』なる要素が無いとは言い切れない。

今後は軽はずみな干渉は控えるようにと、レイフォルドに念を押ししたエスヴオブス王は、悠介の周りに置いている警護も兼ねた監視の数を増やす方針で固めた。

悠介邸の隠し通路は早々に塞がれてしまっているので、屋敷の専属衛士をさり気無く増やす方向で。

「ガゼツタに連れ去られて洗脳でもされたら大変ですもんねえ」
「……色々和最悪な例えだ」

「神ならざる神を駒に覇権を競うカルツイオの歴史、貴方はもう既にその一幕を刻んでいる」

「望むと望むまいと、か……。今更ゼシャルドを頼る訳にもいかぬしなあ」

女王リシャレウスが言っていた四大神信仰の真実。炎神ヴォルナー、水神シャルナー、土神ザツルナー、風神フォルナー。

其々の神技を象徴する存在が、神などではなく信仰が造られた当時の、神技人代表者であった事。ノスセンテス神議会の祖先でもある四大神信仰の創始者達は、神技の民にその力の概念を与えてくれた存在である邪神ヴィ・ザードを謀殺する事で、自分達が指導者となり、神技の民を導く為の神と信仰、四大神信仰を造り上げたのだ。

邪神の力は、時代の覇者を生み出す為に利用される。それは敵として、味方として、到達点として、出発点として、護るべきものとして、倒すべきものとして、時代とその邪神によって、様々な在り方をしている。

「ユースケは如何なる存在として降臨した邪神なのか」

昼前、魔獣施設に到着した調査団一行は、一度地上に出て施設探索の準備に取り掛かっていた。根拠地の設営は施設内の安全が確保された場所に設けられる事となったので、施設の外側は適当に入り口付近の雑草などを掃って休む場所を確保してある。

悠介は到着して直ぐ施設の大まかな規模を把握していた。この施設も自然の洞穴が使われているが、地下通路に比べると人の手が加えられた部分が多く、人工的な通路や部屋などを通してカスタマイズメニューから施設全体の形を見通す事ができる。

「隊長、各隊の準備完了だそうですね」

「分かった。区分けして入り口を開けるから、最初の部隊に伝えてくれ」

攻略の手順としては、カスタマイズメニューで把握できている全ての出入り口を封鎖。施設内を一定範囲ごとに塞いで探索を進めて行く。人工物で繋がっている部分以外はどうなっているのか分からないので、そういう場所はシン八達に頼る事になる。

まず一階の通路を入り口から奥の突き当りまで探索範囲とし、そこから左右に伸びる通路は壁を作って封鎖。探索する通路沿いの部屋も個別に塞いでおく。通路の安全を確保した後、通路沿いの部屋を一部屋づつ探索して行くのだ。

全員は入りきれないので、各グループがローテーションを組んで順番に受け持つ事になる。小規模グループには安全の確保された部屋の残り物を漁るか、一時的に何処かのグループに入れてもらう事で、勝手に動き回らせない処置を取った。

「一階正面通路の安全確保、確認できやした」

「ん、じゃあ手前の部屋から開けてこうか」

「安全確保ー、なんか見張り役の休憩室だったらしくて、ロクな物がねえーとかボヤいてましたぜ」

「ははっ じゃあ次」

闇神隊は指揮部隊として地上から悠介が施設内の区画封鎖、開放を行い、ヴォーマルとフォンケが現場との往復で伝令役を受け持つ。悠介が指揮を執っている間、他の闇神隊メンバーとシン八達は周辺の索敵と警戒に当たっている。

邪神の波動によって魔獣が寄ってくる事は無いと分かっているが、何事にも絶対は無い。警戒を怠らないのは基本だ。

そんな調子で正面の通路、通路沿いの各部屋と探索済みエリアを広げて行き、施設一階の大部分はこれといったトラブルも無く探索をし終えた。残る左右の通路を調べ終えれば、一階フロアを整備して施設地下階を探索する為の拠点とする。

「隊長、どうも右側の通路に魔獣がいるらしいですが、数は二体前後と思われやす」

「右側か……こっちは地下に繋がる階段があるんだよなあ」

安全を喫し、まず右側通路の階段を封鎖。左側の通路を開いて安全を確保後、そこに部隊を配置。正面の通路にも部隊を配置した状態で右側通路を開き、魔獣を討伐する。

「そんな手間を掛けずとも、俺達が出れば直ぐに終わると思うが？」
「自重してくれ……」

悠介はシンハの申し出を丁重に断ると、あまり目立たないでくれと自重を促す。ガゼツタを敵視しているグループは説得で共闘に応じたとはいえ、彼等は決して納得している訳ではないのだ。あまり刺激はしたくない。

シンハ達を地上の警戒に回したのも、それが理由の大半であった。

「とはいえ、万が一ヤバイ状況になった時の事を考えて一応、正面の通路には待機しておいてくれよ」

「ふっ いいだろう」

右側通路の防壁前では調査団として初めての対魔獣戦闘という事で、特に腕に覚えのある者が集まって準備をしている。悠介達も施設に入り、如何なる状況にも対応できるよう態勢を整えながら、攻撃部隊が配置に就くのを見守った。

予想では左側通路に配置された投擲型の攻撃系神技使いによる一斉攻撃で仕留められるだろうと見られている。たとえ遠距離攻撃で

仕留めきれずとも、かなりのダメージは与えられる筈なので、弱った魔獣に前衛がトドメを刺せば討伐完了だ。

「攻撃部隊の配置、完了しました」

「よし、じゃあ開くぞ」

悠介の合図と共に防壁が光に包まれ、小さな光粒を残して掻き消えた。暗い右側通路の奥から魔獣の唸り声が聞えて来る。目標の位置をはつきりと確認出来るように、最初は炎技による攻撃が放たれた。

二発程の火炎弾を追うように風刃が唸りを上げ、少し遅れて水球や氷柱状の氷塊が次々と撃ち放たれていく。

「来るぞっ」

「後ろの奴に気をつける！」

狭い通路に二体の魔獣。その巨体故に先制の一斉射は殆ど手前にいた一体に命中し、後ろにいるもう一体はほぼ無傷の状態で攻撃部隊に突進を仕掛けて来た。迎え撃つべく武器を構えた前衛が神技による強化を行い、彼等の後方からは第二射が放たれる。

駆け込んできた魔獣は通路の床に爪痕を引きながら体勢を低くして火炎弾や風刃を躲すと、一気に跳躍して飛び掛ろうとした。

「おおおおお！」

「おいやめるブルムっ 無理に突っ込むな！」

左側通路に向かって跳躍する魔獣目掛けて正面通路から飛び出して行ったのは、元冒険者の彼だった。

仲間の制止を振り切り、魔獣の横腹に斬りかかる。しかし、勢いのついた巨体と丈夫な毛皮に阻まれ、彼の剣は僅かな斬り傷を負わ

せただけで弾かれた。そこへ、最初の斉射を受けて手負いとなっていたもう一体の魔獣が迫る。

「早く下がらせる！　そこに居たんじゃ神技を撃てない！」

「うおおおおおつ」

「くそ……っ　援護するぞ！　手負いの奴を牽制しろ」

勢いを削がれた無傷の魔獣は着地して身を翻すと、自身に斬り付けて来た非力な獲物を標的に定めた。正面から果敢に斬りかかる暴走した元冒険者の彼、ブレムザップを援護しようと、その背後に迫る手負いの魔獣を牽制しに入る仲間の団員達。

通路の交差する少し開けた空間でたちまち乱戦となり掛けるが

「シンハ！」

「おうつ」

悠介の要請を受けたシンハと彼の側近である無技の戦士が動いた。無技の戦士は傭兵団員達が神技を撃ち込む隙を狙って槍でチクチクと魔獣の動きを封じている所へ飛び込むと、盾で魔獣の鼻面を打ち払いながら脳天目掛けて長剣を叩き下ろした。

強烈な一撃を受けてがくりと沈む魔獣を更に盾ごと体当たりで押し返すと、魔獣は”お座り”のような体勢で腰が落ちる。

「今だ」

すかさず身を引く無技の戦士に合わせて複数の神技が撃ち放たれ、手負いの魔獣にトドメを刺した。

一方、ブレムザップが斬り掛かっている魔獣は突き出される剣先を爪で叩き落としながら、今にも牙を突き立てんと体勢を低く取り

つつ飛び掛るタイミングを計るように身体を揺すっていたが、不意に危険を察知してその場から飛び退く。

「ほう、こいつは慣れているな」

白金の大剣で斬りかかったシンハは、魔獣の機敏な動きを見て人間との戦闘経験があると睨んだ。

人は道具を生み出し、それらを使うことで動物たちに比べると脆弱である身体を守り、非力な腕力で強大な猛獣に立ち向かえる力を得る。だがそれでも、刃を通さない毛皮に鉄の甲冑をも穿つ牙を持つ魔獣に対して、人間の身体は脆く壊れ易い。

施設にいた警備兵が相手だったのだろうか、人との戦いに慣れた魔獣は人間の脆さ、非力さをよく分かつていた。足でも腕でも、その強靱な顎と牙で一噛みすれば、それだけで殆ど戦闘不能に追い込めるのだ。

シンハが床にめり込んだ大剣を引き抜いて構え直す間、魔獣はグルルと喉を鳴らしながらゆっくりと距離を詰める。

この横槍を入れて来た波動を感じない人間は、脆い身を守る為のゴツゴツした皮さえ身に着けていない。何処に噛み付いても、肉を噛み千切ってそれで終わる。魔獣の思考を表すならば、まさにそんな感じであった。

「うおおおおお　ぶっ」

標的をシンハに切り替えた魔獣にまたも斬り掛かろうと飛び出したプレムザップは、シンハの腕の一振りの後方へ弾き飛ばされた。もんどり打って転がる彼に、仲間の団員達が駆け寄る。その瞬間、床を蹴った魔獣が一気に跳躍してシンハに飛び掛った。

「ぬん！」

ブオオツという風を切る音を鳴らしながら大剣を振り上げ、空中の魔獣を捉えたシン八は、そのまま天井目掛けて力任せに斬り飛ばす。魔獣は非力な人間の中にも『例外』が存在する事を知らなかった。

天井に叩きつけられるという未知のダメージに慌てた魔獣が、じたばたとバランスを崩しながら落下する。そこへ、振り上げられていた大剣から叩き込まれる渾身の一撃。ズシンという衝突音と共に、魔獣は床に縫い付けられていた。

僅か二太刀。ブレムザップの暴走が無ければ一太刀で仕留めていたかもしれない無技の戦士の力に、ガゼツタを敵視する者達は皆緊張の表情を浮かべた。

ガゼツタと敵対するという事は、無技の戦士と対峙するという事。『あんなのとやり合えるのか?』と。

「おい！ 俺の獲物を横取りするな！」

「ブレムよせつて！ 落ち着けっ！」

一瞬静まり返っていた通路に響く怒声と、それを諫める傭兵団員達の声。シン八達の援護で魔獣は片付いたが、今だ興奮状態にあるブレムザップの様子に、他の傭兵団や冒険者グループから訝しむ声のざわめき上がり始めた。

仲間の傭兵団員が必死に抑えているブレムザップの所まで歩み寄ったシン八は、彼の仲間が何か言う前に彼の頬を一発張った。瞬間、訪れる静寂。張り詰めた空気の中、シン八は側近と共に正面通路を戻ってくる。

「お疲れ……というか何と言うか」

「ふっ この程度、どうという事はない……が、味方にそのような者を入れておくのは拙いんじゃないのか？」

「んーまあ、危なそうな雰囲気はあったんだけどな」

どうやら落ち着いたらしいブレムザップと、彼を囲むようにして通路を下がらせて来る傭兵団員に視線をやる悠介。

他の闇神隊メンバーも彼の事情を少なからず知っているので、皆を危険に晒すような暴走を見せたとは言え、一方的に責め切れない心情に何とも言い難い表情を浮かべていた。

その後、魔獣の死体も処理され、安全が確保された施設の一階を地下階探索の拠点として改装を始める。各グループの為に部屋分け等を行なっている悠介達の所へ、ブレムザップが所属する傭兵団の団長が先程の騒ぎについて謝罪に訪れた。

「本当に申し訳なかった。今後は戦闘で前に出さないようにするので、我々をこの調査団から外さないで欲しい」

傭兵団長の話によると、彼には以前から危うい部分を感じてはいたが、熟練した元冒険者である彼は団の戦力としても腕は良い方なので、戦闘時の暴走気味な所には今まで目を瞑ってきたという。

今回のような錯乱した暴走は初めてだったので、団員達も戸惑っているそうだ。

「まあ、無理もないのかなあ」

「どの道、遅かれ早かれ魔獣と戦えばあなっていたんでしょ」

後で本人にも詫びを入れに来させると言っブレムて団員達の元へ戻って
いく傭兵団長。そこへ、シン八達がやって来て元冒険者の彼が抱えブレムサツ
る事情を訊ねて来たので、悠介は例の森での出来事を掻い摘んで話
した。

「要は覚悟が足りんのだな。戦いに身を置く以上、仲間との別れも
当然想定しておいて然るべき事だ」

「ん、そう簡単に割り切れるもんでもないと思うけどなあ」

結構厳しい考えを口にするドライ思考なシン八に、悠介が唸る。

そんな二人の話を聞いていたアユウカスが、囁くように呟いた。

「親しき仲間、大切な人を失う哀しみは簡単には癒せぬし慣れぬモ
ノじゃ。心を狂わせるなりして誤魔化すほどの」

永く生きる者が背負う運命ひため。延々と繰り返される離別。その哀し
みを知る者の、重みある言葉だった。

「ところで、そろそろ腹が減ったのう。夕飯はまだかいな？」

「……………」

「……………」

74話：探索一日目

魔獣施設にて調査団が夕食の準備を始める少し前。サンクアデイエットの高民区ではラーザツシア達が帰国している事を聞いていたヴォレットが、今日のお稽古事を終わらせた足で悠介邸を訪れていた。

突然の姫様ご来訪に悠介邸の使用人達はバタバタとお出迎えの準備で走り回っていたが、形式ばった出迎えは不要だとしてズンズン屋敷の奥へと進んで行くヴォレット。

「シア！ いるか」

「あーっ 今扉開けちゃ駄目！」

地下研究室の扉に手を掛けた体勢で一時停止するヴォレット。扉の向こうからはごそごそと荷物を動かす音が響いている。

この地下研究室前に繋がる階段では、ここまでで良いぞと案内を外された使用人達が、ヴォレットに対するラーザツシアの応対に顔を引き攣らせていた。

「いいわよー」

「うむ」

入室許可を得て扉を開けたヴォレットは、固まっている使用人達に適当な茶菓子を用意するよう言いつけて地下の研究室、苔の培養部屋へと入っていった。

根立ち木の森から採取してきた土や苔、水などが入った容器が並ぶ培養部屋。それらをほおほおと眺めながら、さっそく土産話を要求しようとしたヴォレットに、ラーザツシアは少し周りを気にする素振りをみせる。

『人払いを求めている』そう捉えたヴォレットは、茶菓子を持って来た使用人達を直ぐに下がらせた。

「誰も近付かぬよう、階段の上を見張っておるのじゃ」
「かしこまりました」

「さっすが姫様」

「で、どうしたのじゃ？ なにかあったのか？」

ラーザツシアはデリアルディアでの出来事、レイフォールドが悠介に『幻惑の風』を使った事や、闇神隊が調整魔獣の事件に自ら関わるよう勧められた事など、一連の出来事を詳しく話した。

帰国の道中『無用な混乱トラブルを避ける為』と、レイフォールドからはソルザック共々今回の件に関する口止めをされていたのだが、闇神隊に組み込まれた神技兵という立場にあるソルザックと違い、ラーザツシアは悠介個人の奴隷なので、レイフォールドの口止めなんか知らないわとばかりに彼の所業を暴露する。

「ふーむ、彼奴がのう……」

「ユースケは魔獣の事件に関わる気なんてなかったみたい」

「わらわも魔獣討伐に動くというユースケの判断は少し意外に感じておったが、そういう事じゃったか」

父王エスヴォブスの画策もあつた事を知り、ヴォレットは腕組みをして考え込む。

「シアよ、此度の事よく話してくれた。今後もユースケの周りで不穏な動きがあれば、包み隠さずわらわに教えてくれ」

そう言つてお茶を一口、リーンヴァールやデリアルディアの街並みなど、トレントリエッタの土産話はまた今度という事で、ヴォレットは早々に悠介郎を後にした。

宮殿に戻つたヴォレットは、クレイヴォルを部屋に招くと『ここだけの話じゃ』と前置きしてラーザツシアから聞いた話は伏せたまま、レイフォルドの活動に関する情報を求めた。

何にでも興味を持つ姫様の事、神出鬼没で何かと謎の多いレイフォルドに興味を持つても不思議ではない。そう結論付けたクレイヴォルは深く考えずに自分の知る限りの情報で答えた。

「私も彼については余り詳しく無いのですが　今朝は王の私室に呼ばれていたようでしたな」

「密談か？」

「さて、その辺りの事は……。まあ、彼は度々王から密命を受けて動いてるようですから」

諜報の報告なり相談なりはよく行なわれているようですと答える

クレイヴォル。『ふむ』と暫らく考え込んだヴォレットは、徐に口を開くと、こんな事を問いかける。

「のう、クレイヴォル。闇神隊に所属している今の衛士達を、宮殿衛士に取り立てる事はできると思うか？」

「宮殿衛士に、ですか？ 何故また急にそのような？」

「これだけ功績をあげている闇神隊の隊員を、いつまでも神民衛士の身分に置いておくのは問題かと思つての」

「うーむ……、確かに彼等の功績は高いとも言えますが……」

宮殿衛士に取り立てられるには、相応の身分と高い神技力が求められる。闇神隊メンバーは確かに多くの功績をあげている優秀な衛士ではあるものの、総合的な神技力は平均を下回り、身分は何れもほぼ一般民。

「その功績もユースケ殿の力あつてのモノですから、正直なところ厳しいと言わざるを得ないですな」

「そうか……。うむ、では別の手を考えるとしよう」

その後、夕食を済ませてリーンプを磨き始めるヴォレットを見て、クレイヴォルは『何時もの好奇心と思いつきによる発言だろ』と、この時は特に気にする事なく部屋を後にした。

一方その頃、魔獣施設一階に設けられた根拠地では夕食の準備が

進められ、場所を開ける為に施設の備品を移動する作業が行われていた。夕食の準備といっても簡易食を持ち寄って皆で食べるだけなので、椅子とテーブルを用意するだけである。

そんな中、隅の方でテーブルを運んでいるスンに声を掛ける者がいた。探索済みの部屋で残り物を漁っていた小規模グループの数人彼等はある部屋の棚の隙間に何かを見つけたのだが、人手が足りなくて動かせないので手伝いを募りに来たのだという。

偶々近くで作業をしていたスンに声を掛けたのだそうだ。無技人の身体能力に力の指輪その他の効果で実は闇神隊の中でも一番腕力があるスンは、自分に力仕事を期待される事は当然のように考えていた。故に、彼等の要請を不自然だとは思わなかった。

振り返ると、悠介は明日の事で各グループのリーダー達と軽く打ち合わせ中。施設一階の安全は既に確保されているのだ。悠介の仕事を邪魔してはいけないと思ったスンは、自分の判断で彼等の手伝いに応じる事にした。

『なあおい、やっぱりまずいんじゃないか？』

『ばっか、何心配してんだよ、相手は無技じゃないか』

『でも闇神隊の従者だぞ？』

彼等のそんなヒソヒソ話に気付かず、スンは施設入り口付近にある監視役の休憩室だったらしい部屋までやってきた。部屋には手伝いを募りに来た三人組の仲間が二人ほど立っており、スンを見て少し驚いたような表情を浮かべる。

「えっと……どの棚ですか？」

「え？ ああ、その壁際のやつなんだけど……」

彼等の一人がそう言って少し傾いた重厚そうな木製の大棚を指し示しながら、後から部屋に入ってくる三人組に歩み寄ると、声を潜めつつ抗議を向ける。

『おい、どういふ事だ！ 闇神隊の従者じゃないか』

『だからっ どうせ無技なんだからいいじゃねえか、後でちよつと借りましたって黄晶の二〜三本払っとけば』

『青晶くらいは取られそうな気がするなあ……』

『普通に街で野良唱買ったほうが安いじゃねえか』

彼等は性処理目的でスンを誘い込んだのだが、闇神隊の従者に手を出すのは拙いんじゃないかという意見と、無技の女従者という時点でそういう役割も兼ねているのだから、後で利用料を払えば問題ないだろうという考えとで密かに揉め始める。

大手集団が組み合う通常の遠征隊なら、街唱の一人や二人は雇い込みで同行しているものだが、この調査団は大手でも精鋭ばかりが集められた集団で、皆が皆真面目腐っついていて面白みが無い。

せめて一日の終わりに女を抱いて眠りたいと、相手をしてくれそうな娘を物色してみたものの、傭兵団、大手冒険者グループ、何れも腹筋が割れていそうな猛々しい娘しか居なかった。

ガゼツタから来た者達は論外で、闇神隊関係者も当然除外される筈だったのだが

『他にそれっぽいのも居ねえんだから仕方ないだろ』

馬鹿正直に唱謡いを頼んでも、自分達のような弱小グループでは断られる可能性が高い。なので少々強引なやり方だが事後承諾という形で借りる事にしたのだと説得する。昂る欲求は抑えられない、

背に腹はかえられないという事で納得する彼の仲間たち。

それじゃあ早速頂こうかと、スンを背後から抱き寄せに近付いた彼は、頭に強烈な一撃を受けて早めの床についた。

「あ！ ごめんなさい、大丈夫ですかっ」

そこには壁際の大棚を持ち上げたスンの姿。棚を持ち上げた時に少しバランスを崩してしまい、仰け反った拍子に丁度うしろに立った男の脳天を棚が直撃したのだ。ある意味、身長差が生み出した悲劇だった。

彼の仲間達は大の男が二人掛りでも動かすのがやっとだった大棚を一人で持ち上げているスンに驚き、啞然としていた。一応、この大棚を移動させたかったのは本当だったりする。

ちなみに、スンがみせた怪力は先日デリアルディアで出発前の話し合いをした後に、悠介がスンの従者服をカスタマイズして『力の指輪』の他に『力のベルト』『守りの従者服』等を追加した効果である。

大棚を別の場所に立てかけたスンが倒れた男を介抱しようとしたその時、部屋の外から怪訝な色の混じった声が掛けられた。

「おい、そこで何をやってる」

「あ、あんた……傭兵団の……」

「いや、ちよつと唱謡いに従者を借りようかなと……」

翳った表情に鋭い眼つきをしたブレムザップが、彼等の言葉を聞いて更に表情を険しくする。スンは自分が唱謡いに呼ばれたと聞いて目を睨り、驚きと共に顔を赤らめた。思わず介抱しようとしてい

た倒れている男から距離を取る。

「お前等……その娘こが闇神隊長の恋人だと分かっててやってるのか？」

「はい!？」

「こ、恋人!」

目を丸くした彼等からの注目を浴び、今度は別の意味で顔を赤らめているスン。対照的に、さーつと青褪める小規模グループの冒険者達。まさか闇神隊長の想い人だとは思わなかったと慌てふためく。

「すす、すみませんでしたっ 申し訳ないです!」

「こ、この事はどうか内密に……!」

次々頭を下げては懇願し始める彼等に、スンはどう対応すれば良いのか分からずオロオロしていたのだが、ブレムザップが助け舟で間に入って取り成してくれた。

闇神隊長への報告は免れないが、言いだしつぺが意図せず『制裁』を喰らっている事や、未遂だった事も含めて寛大な処置に止められるよう求めるブレムザップに、スンは頷いて了承した。

その後、闇神隊の元に戻ったスンから事情を聞いた悠介は、後で何らかのペナルティーを与えるという事で話に決着を付けた。淡々と処理する悠介に、もう少し怒ってくれてもいいのにと何となく寂しい気持ちになるスン。

と思っていたら、冷静で見えるように見えてカスタマイズで設置するテーブルや椅子の大きさが巨人サイズだったり前衛芸術的なオブリエになっていたりというミスを連発する悠介に、スンはついつい笑ってしまうのだった。

「隊長、落ち着いて下さいよ」

「いや、落ち着いてるよ？ 大丈夫大丈夫」

「すげー怖えーんですけど」

「まさしく混沌だな……」

「あ、でも……この椅子とか、お洒落かも……」

「イフヨカ、あなた……」

流線形が暴走したようなデザインの椅子を気に入った様子で撫でているイフヨカに、エイシャが微妙な表情を向けていた。

「迷惑を掛けてすまなかった」

夕食の後、調査団全体で就寝の準備が整えられている中、闇神隊に詫びを入れに来るブルムザップ。先程のスンの事もあったので、謝罪と受け入れはスムーズに行なわれた。

やはり暴走の原因は以前の事件で失った仲間の事で、魔獣を前にすると感情を抑えきれなくなるらしい。

「ん、なんとか自制できるよう頑張ってみてくれよ」

「ああ……、もうあんな無様な真似はしない」

彼は去り際、闇神隊の近くに寝床を作っているシン八達を見つけ

て何か言いたそうな瞳を向ける。

「なんだ？ 言いたい事があるなら言え」

「……俺は、もっと強くなりたい」

「ふん……今の仲間と話し合え。全てのケジメをつけてから、何時かガゼツタに來い」

ガゼツタ流の戦闘術でしっかり鍛えてやるというシンハに、ブルムザップは静かに頷いて去っていった。

「マメな王様だな」

「ふっ」

人材確保に余念の無いガゼツタ王は、闇神隊長の揶揄に余裕の笑みを返すと、その大柄な身体を寢床に収める。添い寝と称して潜り込んで来た里巫女を煩わしそうに腹に乗せつつ休息に入るシンハ。側近達は交代で見張りに付くようだ。

「俺も寝よつと」

そう呟いて悠介も闇神隊印の快適寢袋に潜り込む。魔獣施設の探索はこうして一日目を終えるのだった。

75話：魔獣施設封鎖

探索二日目。

地下階の探索も一階と同じく、防壁で分けられた通路の安全を確保した後、封鎖しておいた部屋を順番に開けていくやり方で進められる。地下階の部屋は殆どが研究室なので、お宝も多いただろうと期待されていた。

階段を下りて直ぐの所では、黒く固まった血溜まりの中に壊れた魔笛を発見している。

索敵の風で調べた結果、地下階には全部で八体の魔獣が確認されており、その内の二体は調整魔獣で一番奥の突き当たりにある食堂らしき部屋を徘徊しているようだ。

「巣穴の反応もあるようですね」

「食堂に巣穴か……なんか嫌な予感がするなあ」

通路には所々に夥しい量の血痕と遺体を引き摺ったのであろう痕跡があり、何れも奥の食堂部屋に続いている。例の森での事を考えると、ここで犠牲になった研究員等が餌として巣に放り込まれている状況を想像してしまう。

「今回はシン八達にも最初から出て貰いたいんだけど」

「かまわん。寧ろその方が手っ取り早いだろう」

一階通路にいた二体の魔獣。その討伐は予想以上に難しかった。ブレムザップの暴走を差し引いても、投擲型攻撃系神技の斉射と強化系神技の前衛だけでは倒しきれなかった可能性が高い。

昨日の一件でガゼツタを敵視するグループもシン八達の力を認めており、下手な真似に出る者もないだろうという判断の元、無技の戦士を前衛に組み込む。

「それじゃ、今日も怪我人を出さないように皆で頑張りましょうー！」

闇神隊長の勇ましさの欠片も無い軍人らしからぬ鼓舞、なかどうなのかも分からない掛け声に『お、おーっ？』と疑問系の氣勢を上げて答える調査団の参加者達。斯くして、魔獣施設の地下階探索が始まった。

ちなみに、この地下階も最初の隠し通路へ入った時と同じく血と獣の臭気が酷かったのだが、施設には沢山の通風孔があったので、そこにギミック機能で回る換気扇を設置して強制排気。空気の入れ替えを済ませてある。

探索は順調に進み、魔獣もガゼツタ組を前衛に添えた事で特に危険な場面もなく無難に討伐されていった。通路の安全が確保されると各研究室の探索が始まる。

「さっきの部屋ですが、何か危険な薬品が撒かれてるようですね」

「軽度の幻覚症状らしいっすね」

「そっか、危ないから塞いでおくかな」

沢山の檻が並ぶ部屋に入った冒険者の一人が突然錯乱して倒れるなど、多少のトラブルはあったものの、昼前頃には地下階にある殆ど全ての研究室を制圧、安全が確保された。

「残るはここだけか」

「やはり食堂で間違いないようですね、入り口にプレートが残ってやすぜ」

「あー、俺も嫌な予感がしてきた」

食堂部屋は檻が並んでいた部屋に次いで広い部屋となっている。

ここにいる魔獣は調整魔獣なので、神技による攻撃は効果が期待できない。その為、主に前衛組とシン八達が制圧の要となる。

配置に就こうとしていたシン八は、ふと味方の後方に視線をやる。悠介に提案を持ち掛ける。

「ユースケ、奴を前衛に就かせてやってくれないか？ 責任は俺が持つ」

「責任持つって言われてもなあ……まあ、本人が大丈夫って言うならいいけど」

悠介はそう言って、シン八が視線を向けていたブレムザップを振り返る。今日は探索開始の時からずっと後方に下げられていたブレムザップは、少し驚いた表情を見せていたが、闇神隊長と無技の戦士の視線に『やれる』と力強く頷いて応える。

彼は昨日の夜、傭兵団の仲間今回の仕事が終わったら団を抜けてガゼツタに赴く趣を伝えていた。

シン八と無技の戦士を中心に前衛組で固めた突入隊が防壁扉の前に立ち、戦闘準備が整えられる中、索敵用の小さな穴から魔獣の正

確な位置を探り出して防壁を開くタイミングを見定める。

「一体は、正面の奥に……もう一体は、入り口の近くを徘徊してます……あ、奥に移動し始めました」

「二体揃ったら合図をくれ、そのタイミングで開く」

やがてイフヨカからの合図で防壁が開かれると、シンハと無技の戦士が真っ先に飛び込んで行き、ブレムザップが後に続く。一瞬遅れて前衛組も突入を開始した。後衛組みからは炎技使いが食堂部屋内部を炎技で照らし出す事で、突入隊を援護する。

「いいか、剣は敵を倒すモノでも味方を護るモノでもない、振るうモノだ」

「え？」

「剣で敵が倒れるのも、味方が護られるのも、剣を正しく振るった結果に過ぎん」

「……」

「俺の動きをよく見ておけ、その目に焼き付けろ、頭に叩き込め、そして身体で覚える！」

「お、おうっ」

シンハはブレムザップに実戦指導を宣言すると二体の調整魔獣に対して猛然と突進、烈火の如く豪快な剣捌きで斬りかかった。迎撃に出た魔獣が牙を剥いて飛び掛かる。一閃。シンハの薙ぎ被いで碎かれた魔獣の牙が宙を舞う。

薙いだ勢いのまま身体を半回転させて上段からの斬り下ろしに繋げると、頭を強打された魔獣はその衝撃を殺しきれず、床に打ち付けられた顎がゴツンと跳ねる。

そこから更に身体を捻って逆回転で勢いを増した大剣が斬り上げるように振るわれ、魔獣の首はあっけなく撥ね飛ばされた。

ブルムザップはそのあまりに苛烈な剣戟に戦慄した。彼だけでなく、この場に居合わせた『シン八が本気で振るう剣』を初めて目撃した者達皆が圧倒され、言葉を失っていた。

もし、あの剣が人間に振るわれたならば、それこそ原型も留めなような肉塊にされてしまうのではないかと。

「おーおー、シン八張り切ってたな」

「あの、ユウスケさん……驚かないんですか？」

「隊長……なんでそんなに平然としてられるんです？」

一人普段通りの様子で感想など述べている悠介に、スンとエイシヤが疑問を口にする。闇神隊のメンバーも他の調査団参加者達と同じく、シン八の剣に圧倒されていたのだ。

神技人国家である大国フォンクランクの衛士である以上、何時かガゼッタと対峙する時が来るかもしれない。ガゼッタ軍戦士の皆がシン八程の使い手では無いであろうにせよ、危機感が無さ過ぎるのではないかという想い。

「前に一回見た事あるからな、夜ヒヴオデイルんとこの村に行った時」

『ああ……！』と、闇神隊の皆はあの時の事を思い出した。ヴオームストが率いていたらしい武装集団による無技の村襲撃事件で、悠介とシン八は共闘した事があったのだ。シン八が仕留めた賊は、生き残った者も含めて何れも悲惨な有り様だった。

悠介がカスタマイズで復元しなければ、文字通り肉塊と化して身

元の判別も不可能になっていたかもしれない。

そんな話をしている間に、残りの一体も無技の戦士とプレミアムザップを始めとする前衛組の手で片付けられた。

食堂部屋の奥、厨房付近に作られていた巣が処理されると、この部屋も直ちに塞がれる事となった。予想通り、巣の周りには夥しい量の骸が散乱しており、換気扇で排気を行なっていて尚、死臭と獣臭が酷かった為だ。

地下階から緊急避難路として地下通路に繋がる出入り口は全て壁にする事で内側から塞ぎ、魔獣施設全体の封鎖を進めて行く。

トレジャーハンターな小規模グループの冒険者達が地下階の残り物を漁っている中、闇神隊の前に貴重品が集められる。発見された魔笛は壊れていたモノも含めて四つ。何かの薬品研究資料が数点。闇商人が指揮する商売の顧客リストらしき書類。

「闇商人ってどんな存在なんだ？」

「普通は店に並べられないような曰くつきの品とか、違法品を取り扱う連中全般を指しやすね」

「盗品の買取やら中には墓荒しとかやる奴も居るらしっすねー」

「商品の仕入先に盗賊集団との繋がりがあるといっ噂も聞きます」

ここで研究者達を困っていた闇商人は、組織として結構大きな規模を持つ集団であった事が分かっている。例の死んだ研究者が残した証言から、闇商人達だけで構成された組織ではなく複数の盗賊団

からなる一つの共同体として存在していたらしい。

「問題は、それだけの規模を持つ組織が施設を放棄して逃げた後、何処に身を隠したのかという部分ですな」

可能性として一番あり得るのは、トレントリエッタ領のデリアルディア辺りに労働者を装って潜伏か、或いは樹海の森の何処かに隠れ里のような集落を形成している事も考えられる。

トレントリエッタの樹海に行くには伝達系風技が必須なので、森を飛び交う伝達の風に怪しいモノが混じっていないかを調べれば、何か掴めるかもしれない。闇商人達の行方については、今後のトレントリエッタ軍の働きが期待される。

『トレントリエッタ軍といえば』

街道に拠点を設けて交易制限でガゼッタの力を削ぐトレントリエッタとの共同戦略があった事を思い出した悠介は、話題に出し掛けて口を噤む。ちらりとシン八に視線を向けると、こちらの視線に気付いた様子もなくアユウカスと何か話していた。

フォンクランクの衛士という自分の立場からしても、流石にこの情報を教える訳にはいかない。

「しかし、ガゼッタか……」

「ん？ 何か言ったか、ユースケ」

「別になんも」

片眉を上げて小首を傾げているシン八に、悠介は『王様本人が剣一本で余所の国を渡り歩くガゼッタの政治体制はどうなっているんだろう？』などと思いつつも、それで上手く回っているならそ

う国なんだろうと納得しておく。

『当分ガゼツタには行けそうにないしなあ』

治癒補助薬の精製に必要な物資が削られて市場に薬が出回らなくなれば、今以上に値段が高騰するであろう事は簡単に予測できる。いっその事、レーザーシアに頼んで治癒補助薬に匹敵するレア度の高い新薬を開発して貰うという手もある。

「とりあえず、帰ってから考えるか」

集められた貴重品の中から闇神隊の取り分として、魔笛と薬品の研究資料と闇商人組織の顧客リストだけ拾うと、残りは放棄。実用の器具や調度品の類はそれぞれ調査団参加者達のグループで分けられる事になった。

欲の無い闇神隊に感嘆する各傭兵团やトレジャーハンターな冒険者達は、さっそく皆で取り分の相談を始めた。ちなみに、スンにちよっかいを出したグループはペナルティーとして、本当に最後の余り物しか貰えない事になっている。

「魔笛はこっそり懐に入れてる輩もいるでしょうな」

「だろうなあ」

わいわいと戦利品の争奪戦が行なわれている様子を眺めながら、声を潜めつつ魔笛のネコババについて指摘するヴォーマルに、悠介もあり得ると頷く。調べれば分かるであろうものの、身体検査をしてまでそれを咎めようという気は無かった。

「撤収準備！」

戦利品の分配も終わり、調査団は引き揚げの準備に取り掛かる。全員が施設の外に出た事を確認後、最後の出入り口をカスタマイズで壁に変える。調査団が結成されて四日目の昼下がり、魔獣施設は完全に封鎖された。

調査団の参加者グループが次々と地下通路に向けて移動を始める中、施設脇にある小道で旅支度を整えているガゼツタ組。

「シン八達も引き揚げるのか？」

「目的は果たせたからな」

悠介が声を掛けると、シン八はそう言って白金の大剣を背中に担いだ。

「そっか、じゃあここでお別れだな」

「ああ。また会おう」

今回殆ど言葉を交わさなかった双子っぽい神技人が揃って悠介に会釈すると、無技の戦士と共に森へと続く小道を進んで行く。彼等の後に続いていた里巫女がふいに振り返ると、三千年仕込みの笑顔を見せながら悠介を誘う。

「どうじゃ？ 良い機会じゃからして、少しガゼツタで遊んで行かんか？」

「遠慮しときます……」

アユウカスの誘いを丁重にお断りしたりしつつ、悠介はガゼツタ

に帰国するシン八達を見送った。

「ユウスケさん、出発準備、整いました」

「ん、それじゃあ俺達も帰ろうか」

『はい』と頷くスンと並んで、悠介は地下通路の入り口で待つ闇神隊メンバーの元へと歩き出した。

「どうだった？」

「共鳴は出来た。じゃが……仕組みがさっぱり分からん」

樹海の獣道に行くシン八達一行。シン八の片腕に乗っているアユウカスは、悠介の神技について自身の持つ邪神との共鳴能力で得られた情報を掻い摘んで話す。

今までに見たことが無い系等で、干渉する物体を自分にしか見えない幻影で操るような力だったと語った。

不老不死という邪神の力を宿しているアユウカスだが、彼女自身は邪神ではない。遠い昔、今のアユウカスよりも永く生きた邪神から、当時病に侵されていた自分の身体と引き換えに得た永遠の命、邪神から譲り受けた力が不老不死という性質である。

邪神モドキであるアユウカスは、その身に宿す邪神の性質から、同じ出所の力を持つモノを感じ取る事が出来る。

「興味深い力じゃったが、使い方を学ばねばどうにもならんな」
「……そうか」

フォルナーの水月の二日目、ヴォルアンズ宮殿に闇神隊率いる調査団が無事任務を果たしてデリアルディアに帰還したとの報告が入った。調査団は解散し、闇神隊は帰国の途についているという。

「そうか、ではユースケ達が戻るのは明後日じゃな」

闇神隊の吉報に上機嫌で鼻歌など歌いながら、今日届いた闇神隊用の荷物を開けて出来栄えを確かめているヴォレット。

先日、クレイヴォルに現在の闇神隊メンバーを宮殿衛士に取り立てられないかと質問したヴォレットは、流石にそれは難しいという返答を得て別の方法を考え、闇神隊の正式隊員として昇格させる事を思いついた。

元々は悠介をギアホーク砦の建設任務に送り出す際、体裁を取り繕う為に神民衛士隊からとりあえずという形で適当に選ばせた衛士達であり、闇神隊の所属となっ**て**はいるが、身分は神民衛士のままなのだ。これを『闇神隊衛士』に取り立てる。

ヴォレットは一応、宮殿衛士に取り立てられないかという趣で父王エスヴォブスに相談を仕掛**け**、無理だと言われて妥協する形で闇神隊正式隊員への昇格を認めさせた。

スンの正式隊員入りは見送られたが、他のメンバーは帰国次第正

式な闇神隊員として登用される。今日届いた荷物は、彼等に与えられる闇神隊の隊服であった。御揃いの黒い隊服。悠介のシンプルな隊服と比べると甲冑を纏う分、少しゴツくなりそうだが。

「これで闇神隊にも独自の戦力が調うわけじゃ」

身分的には神民衛士よりも上で、宮殿衛士よりは下となる。神民衛士をある程度自由に動かす事が出来て、一般民から神技兵を徴用する権限も持つ。

「……しかし、何故そのような？」

「ん？ 何となくじゃな。 備えあらば憂い無しなのじゃ」

自信に満ちたその瞳は何時もと変わらないようであり、何か別の輝きが含まれているようにも見える。

不意に、クレイヴォルは将来、この国でヴォレット姫とエスヴォブス王が対峙するような事態が起きないかと不安を懐き、直ぐにその妄想を振り払った。

フォンクランクを治め、サンクアディエツトに君臨する王家の歴史には、しばしば軍事力を持った王子達の謀反騒ぎも起きている。だが、それらの背景には何れもその時代の王と王子達の間を生じていた不和が解消されず、増大していったという原因があったからだ。エスヴォブス王とヴォレット姫の間にそのような影がある筈もない。

『考え過ぎだな……先日の、余計な事を聞いてしまったせいだろう』

”神ならざる神を駒に覇権を競うカルツイオの歴史” 故意か偶然か、レイフォルドが王に語った邪神の存在理由なる内容は、クレイヴォルも耳にする事となっていた。現在、邪神はエスヴォブス

王の権威の下、ヴォレット姫の手にある。

クレイヴォルはこの話を耳にして直ぐ後に、ヴォレットが闇神隊の強化と戦力増強を思わせる言動を行なった為、色々と繋げた考え方をしてしまったのだらうと自省した。

「早く帰ってこんかいの〜」

「姫様、あまり弄ると皺になりますよ？」

闇神隊の隊服からマントを広げてはさばさやってるヴォレットに注意を促すクレイヴォル。

悠介達が帰国したのは、それから三日後の事であった。

76話：風の一族

ヴォレットが闇神隊を集める時によく使用する上層階の一室、何時もの部屋にて、新しい隊服を纏った闇神隊メンバーは今後の通常任務活動についての説明などを受けていた。

「なんとというか、やたら怪しい集団っぽいな」

帰国した悠介達はヴォレットから闇神隊メンバーの昇格を伝えられ、『闇神隊に所属する神民衛士』だったメンバーに正式隊員として御揃いの隊服が支給された。

ソルザックは衛士では無い為これまで通りだが、任務に同行する時はマントだけ闇神隊のモノを纏う事になっている。隊服が統一された事で黒い集団と化した闇神隊は、傍から見ると実に怖そうだ。白い従者服のスンが余計に目立つ。

「つーか、イフヨカがエライ事になってるようだが」

「ふむ、少し大き過ぎたか。なあに、後でユースケが調整してやれば良い」

隊服のサイズが大き過ぎて襟に半分ほど顔が隠れているイフヨカは、昇進で更にお給金が上がってほくほく顔だった。

「これで誕生祭のパレードでも堂々と宮殿衛士隊の一隊として行進できるのう」

「ああ、確かに今までのスタイルだとそういうイベントの時は困ってたかもしれないなあ」

炎の暦一日目から始まる誕生祭には、新年を祝うお祭の中で軍事パレードが行なわれる。

この時は普段民衆が目にする機会のない宮殿衛士隊の行進があるのだが、鮮やかな色合いの豪華な隊服を纏って行進する各宮殿衛士隊の列に、バラバラの隊服で続く闇神隊という図はちよつと想像したくない。独りでぽつんと行進に参加するのも勘弁願いたい。

「今後はお前達もユースケの下で衛士隊の指揮を執る立場じゃ、それを心得ておくようにな」

街の巡回など神民衛士の仕事はそのまま引き継がれるのだが、ヴォーマルやシャイド、エイシャは指揮官、副官として行なってきた仕事をほぼそのまま続けるだけなのであまり変化がないのに対し、イフォカとフヨンケは低等民の下っ端衛士というこれまで殆ど指揮される側の立場にあつたので、少々勝手も違ってくる。

「まあ、楽も出来そうだし、何とかなるっすよ」

「わ、私が、部隊の指揮なんて……ど、どうしよう」

「大丈夫よイフォカ、ちゃんと教えてあげるから」

その後はクレイヴォルから闇神隊員に与えられる権限の説明などが行なわれて、新生闇神隊の説明会は恙無く終了した。一応、全員の隊服にはカスタマイズによる強化や補助効果を付与しておく為、各人の隊服は一旦悠介に預けられる事になった。

「今日はこれだけで一日終わりそうだな……あ、そうだ、イフヨカは服のサイズ合わせるから、一緒に部屋まで来てくれ」

「え？ あ、はい」

「じゃあ甲冑はわたしが運びますね」

スンにも手伝って貰いながら、予備を含めて五人分の隊服十五着と甲冑を自室へと運ぶ。宮殿で悠介の自室に呼ばれるのは初めてとなるイフヨカは、少し緊張した様子で二人の後に続いた。

「部下にイタズラするでないぞー」

「んな事したらスンに絞められるわ」

ヴォレットのからかいに軽口を返しつつ、部屋を後にする悠介。

本日の闇神隊の活動はこれで解散となった。

それから数日後、宮殿衛士と神民衛士の中間に位置する事で衛士隊組織全体の動きがよく見えるようになった新生闇神隊。通常任務の活動も安定し始めた今日この頃。悠介は太陽苔の栽培状況やその他の近況を報告しにヴォレットの私室を訪れた。

「ほう、そうか。上手くいっておるのならトレントリエッタ遠征も無駄ではなかったな」

「やっぱ土とか水に秘密があったっばいよ、それに根立ち木の性質な」

「それで、街中のランプをリーンプに取り替えるのはいつ頃になりそうじゃ？」

「ん、実用には最低でもあと半年くらい掛かるつってたぞ」

そんなに掛かるのかとヴォレットは少し残念そうに溜め息を吐いた。この部屋の一部で使用しているリーンプの太陽苔は悠介邸の地下研究室で栽培されたモノを使っている。

少量なら安定的に供給できるが、一般民に普及させて補えるだけの供給を生み出すには栽培の規模からして全く足りていない。

「栽培法が完全に確立したら、太陽苔の栽培場所に地下の街を使いたいと思ってるんだ」

「ふむ、なるほどのう。地下の有効利用というわけか どうじゃ？ クレイヴォルよ」

「良い案だと思います。以前から不法就労者の溜まり場にしておくには勿体無い空間だという話は出ていましたし」

クレイヴォルのお墨付きもあり、今の内に場所の確保など話を通しておこうという事で、太陽苔栽培の話は一先ず落ち着ける。

魔獣施設から持ち帰った薬の研究資料はラサナーシャのコネを頼って使えそうな研究者に協力して貰っており、今暫らくは解析待ち。太陽苔の栽培が軌道に乗れば、ラーザツシアにも新薬開発の研究に回って貰う予定だ。

「あと、ソルザックさんの新型ギアボックスが完成しそうだから、本格的に小型移動車両の開発に入ろうと思う」

「闇神隊の備品にする予定のやつじゃな。わらわの動力車はまだ完成せんのか？」

「それも同時にやる予定だよ」

悠介は移動用小型車両の構想を思い描いた時から、動力車開発の根本的な見直しを考えていた。今までのような行き当たりばったりな作り方ではなく、設計に方向性を持たせて規格を統一し、基礎部分の構造を纏める方針。

走行に必要な動力部分と、乗車部分とを切り離す事で、中身は同じ性能のまま外側のデザインだけ自由に換えられるようにする。走り追求したシンプルな外観にするもよし、見栄えを重視してきらびやかに飾った豪華な車室を組むもよし。

「基本形さえ決まっちゃえば、後は応用で色んな型のモノが作れると思うんだ」

「うーん無茶苦茶楽しみじやのう、期待しておるからなっ」

闇神隊が任務で使うモノともなれば、相当に高い走行性能が求められる筈だ。屋内訓練場を走り回る現在の試作動力車でも十分に楽しめているヴォレットは、馬車のように街中を走り回れる動力車を想像してわくわくと気持ちを躍らせた。

ニコニコ顔のヴォレットとは対照的に、そんな高性能動力車で逃げ回られた場合の事を想像してゲンナリするクレイヴォル。今でも訓練場で試作動力車を乗り回して遊んでいるヴォレットを捕まえるのは一苦労なのだ。

「大丈夫だって、ちゃんと掴み易い場所に緊急停止装置付けとくよ
うにするから」

「それで迅速に捕まえられるなら結構なのだが……」

一度変わってあげましようかとジト目を向ける専属警護兼教育係

クレイヴォル

殿に謹んで遠慮申し上げる悠介。二人のそんなやり取りに、ヴォレツトは明後日の方を向いて口笛など吹くのであった。

宮殿上層階、七階と八階にある宮殿衛士隊の控え室。普段から主に使われているのは七階の控え室で、八階の控え室は各衛士隊長が会議を開く席として使う事がある。その控え室から若い炎神隊員と並び出て来る緑髪の男。

「まあ、僕の方でもそれとなく探っておくよ」

「宜しく願いますね。ですが、くれぐれも用心なさって下さいよ〜」

掴み所の無い何時もの微笑でそう促すレイフォルドに、婚約者候補組という宮殿衛士隊の中でも特に高い身分を持つ者で構成された一派をコントロールする立場にあるヒヴォデイルは、任せておきたまへと胸を張る。

レイフォルドが一部で故意に流した情報により、闇神隊長ユースケに対して急速に接近しようとする者が居ないかを探り出す。

歴史上カルツイオに降臨した全ての邪神がそうであったとは限らないが、少なくとも、悠介のようなタイプの邪神はこの世界の覇権を握る鍵となる事が分かった。この機に国内から叛逆の芽を全て摘み取り、フォンクランクを悠久の大国へと導く足掛かりとする。

確証は無いが、建国が五千年前とも六千年前とも謳われるノスセ

ンテスがあれ程永く続いたのも、歴代の指導者達はその時代、その時代において、邪神の適切な扱い方を心得ていたからではないかと思われる。

今時代、ノスセンテスの指導者達は邪神の扱いを誤ったのだ。レイフォルドはそう解釈していた。

『さて、次は下街の方かな』

ヒヴォデイルと別れて宮殿を後にしたレイフォルドは高民区の裏通りから低民区の貧民街を目指す。闇商人に関する情報を探る為だ。闇神隊に付き添ってトレントリエッタに赴いた時、彼は魔獣施設にも関係する別の件で、闇商人の動向について調査していた。

デリアルディアで魔獣施設の封鎖に関わるか否かを悩む悠介達の前に現れた時、妙な所から出て来たのは、街の裏通りで情報屋を探っていたからだったりする。

そういえば……あの商人、トレントリエッタ訛りの言葉を使っていたな、貴様と同じ様に

パウラの地下にある要人独房で、イザップナー元最高指導官から向けられた言葉。レイフォルドはこの時、トレントリエッタのとある一族を思い浮かべていた。

基本的に人畜無害。平和主義者で快樂主義的な性質の者が割合を占めるトレントリエッタ王侯貴族の中において、常に野心的な一面を見せていた変り種の一族。エルフォドラ家とその傘下の貴族達。

覇権主義による国民統制を主張し、トレントリエッタをカルツイオの列強大国に押し上げる事を謳って軍備拡張を叫んでいた彼等は、

結局、野心的であった事が『この一族に国を任せれば必ず面倒な事になる』という先見の一致した時の国王達から疎まれ、遂に王座を手に入れる事無くトレントリエッタの王宮から姿を消した。だが、滅んだ訳ではない。

リーンヴァールを訪れた際、一族のその後を追ってみたが、ようとして行方を掴めなかった事が気に掛かる。レイフォルド自身による追跡調査で見つからなかったという事実が彼の心に警鐘を鳴らすのだ。

『なぜ見つからないのか？』
見つからないように処置を取っているからだ、と。

そうして調べて行く内に、闇商人とエルフォドラス家の繋がりが見えてきた。魔獣施設を警備していた兵のモノと思われる甲冑の欠片に、エルフォドラス家の傘下にあつた貴族家の紋章が刻まれていたのだ。その家は主に一族の私設軍として活動する傾向が強かった。

宗家がリーンヴァールを去り、散り散りになつた傘下の家の者が傭兵家業に身をやつしていたとしても別段おかしくはないが、関係する一族全ての行方が分からない現状はやはり不自然である。

そんな中で見つかったエルフォドラス家と深い所縁のある家の紋章。一族の私設軍的な役割を担っていた彼等が魔獣施設の警備をしていた。そこから導き出される推論として、施設を取り仕切っていた複数の集団からなる共同体の正体。それなりの規模を持つ組織とは

『闇商人の元締めはエルフォドラス家一族。潜伏理由は現トレントリエッタ王室の転覆……いや、カルツイオの覇権が目的か』

幾分、推測に飛躍を混ぜつつも、レイフォールドは概ね正しい所を突いているだろうという確信があった。

あれほどトレントリエッタの覇権主義国化に拘っていた一族が、ある日を境に突然揃って姿を消したのだ。地下に潜って王座の奪取を企みながら力を蓄えているのでは無いかと考えてもおかしくはない。

エルフォドラス家が邪神についてどれだけ把握出来ているかは分からないが、フォンクランク内に闇商人と通じている者がいた場合、必ず邪神の力、世界の覇権を握る鍵となる存在に興味を持った彼等が、その顧客を通じて近付こうとする筈。

ブルガーデン、ノスセンテスの覇権主義的な指導者は、邪神を保護するフォンクランクと敵対して淘汰された……ガゼツタはこれから対峙するとして、次はトレントリエッタに潜む覇権主義者が邪神に関わるうとしているのが、今現在の状況であると考えられる。

実質、ガゼツタのシン八王もパウラの長城前で淘汰され掛かっていたのだが、彼にはイザツプナー元最高指導官やノスセンテス神議会とは決定的に違う所がある。それは邪神と明確な敵対をしなかった事だ。

邪神に詳しいと思われるガゼツタが、悠介を自国に招こうと画策していた事も分かっている。

『やはり、ユースケ君は味方につける事で益をもたらせる邪神なのかもしれないな』

闇商人の元締めと思しきエルフォドラス家一族。たかだか地下組織の一つとはいえ、その組織力は侮れない。そういつた事情を踏まえ、レイフォールドはフォンクランク国内から叛乱分子と共に闇商人

の影を一掃すべく暗躍するのだった。

77話：エルフォドラス家の野望

トレントリエッタの樹海に隠されたとある集落、ログハウスのような家が建ち並ぶ中に蔓草で偽装されている一際大きな建物。首都リンヴァールに見られるような立派なお屋敷の一室にて、この屋敷の当主である女性が憂鬱そうに溜め息を吐く。

「はぁ……」

「また溜め息ですか？ お嬢様」

「あんまり溜め息吐くと、不幸になるらしいですよー？」

首都に住んでいた頃からの付き合いで彼女の幼馴染でもある付き人、ウエルシャとリフヨナの二人が何時ものように構ってみせる。

先代当主、エルフォドラス伯が一族を挙げてこの地に潜伏し、トレントリエッタの覇権を狙う地下組織『風の刃』を設立してから三年余り。当初は闇商人達の大元締めとして商隊の護衛や新たな流通を開拓して活動を支援するなどしつつ、細々と資金稼ぎを行なっていた。

だが近年、ノスセンテスとある研究者が調整魔獣の研究費を工面して欲しいと依頼して来た頃から、闇商売の活動とは別に盗賊団紛いの活動も行なうようになり始めた。現当主であるヴォーレイエは、その事を快く思っていない。

ヴォーレイエは最近よく思う事がある。晩年の父は狂っていたの

ではないか、と。

「 闘争こそが民の、人間の生きる意味だ！ 闘争なき世界など死する世界である！」

腑抜けて落ちぶれたトレントリエッタに闘争の光を取り戻すのだと、死の数日前に行なわれた演説で一族に向けて訴えたエルフォドラス伯は、決起の日は近いと言い残して病に倒れた。

指導者を失った風の刃は解散分裂の危機に立たされるが、これまでエルフォドラス家を支えてきた御三家がエルフォドラス家令嬢であるヴォーレイエを後継者として担ぎ上げる事で、一族郎党を纏め上げた。

以後、御三家の当主達がそれぞれ総務官、財務官、軍務官として就任する事で組織の管理統制を担うようになっていく。

そうだった事情から、エルフォドラス伯の娘であるヴォーレイエは名目上、先代の後継者として組織の長という立場にあるが、実質的には御三家の当主、三務官が組織全体の実権を握っており、組織の運営に対する彼女の発言力は無いに等しい。

盗賊紛いの行いで多くの民を苦しめる今の組織のやり方に、何度か方法を改めるよう訴えたヴォーレイエだったが、フォートレス総務官の応対は何時も変わらず、聞き分けの無い子供をあやす様な返答ではぐらかすばかり。

「はあ……アタイは何でここに居るんだろうねえ」

「そりゃあ、お嬢さまがいないと、組織がバラバラになっちゃうからでしょー？」

「アタイが居なくなっちゃって、三務官だけでやってけるじゃないのさ」

「人を動かす為には、時に象徴という存在も必要なのですよ」

どこかのほんとした佇まいを見せるリフヨナは、見掛けそのままのノンビリした口調で何の捻りもない『普通の答え』を返し、彼女とは対照的に真面目で気難しそうな雰囲気纏うウエルシヤは、あるいみ身も蓋も無い、彼らしい回答で応えた。

ヴォーレイエ自身も自覚している事なので、今更その答えに気分を害する事は無い。

「そうは言っけどさあ、アタイにも何か」

「おじょーさまー!」

頬杖を付いたヴォーレイエが何時もの愚痴を口にしかけた時、勢いよく開かれた扉から無技の青年が駆け込んで来た。黒い腕輪を填めているその青年は、勢い余って入り口付近にあつた椅子などを蹴散らしながらヴォーレイエが肘をつくテーブルの前まで走り寄る。

「オドっ 部屋に入る時は静かに歩いて入りなつて何時も言ってるだろ」

「あああつ スンマセン! でも、おじょーさまに早くお伝えしたい事があつて!」

やれやれと椅子を片付けているウエルシヤの視線の先で、平謝りのオドを叱るヴォーレイエは何処か楽しげな微笑を浮かべていた。

「神の使いだつて?」

「らしつす!」

オドが持つて来た話の内容は、フォンクランクには己が遣える者を世界の覇者に導く力を持つ神の使いがいるというモノだった。

また何処からそんな胡散臭い話を持つて来たんだと半目を向けるヴォーレイエに、オドは闇商売の顧客にいるフォンクランク有力貴族が、その者の気を惹く為にか珍らしい品は無いかと掘り出し物の情報を求めて来たらしい事を説明する。

「財務官直属の商隊管理部で働いてるヤツから聞いたんで、間違いないっす！」

「オドがからかわれたって事はないか？」

「財務官……アイルザツ八殿は情報を何より重視しますから、いい加減なデマを組織内に流すような真似は許さないでしょう」

「根拠はあるって事よねー」

フォンクランクといえば、この頃噂でよく聞く闇神隊という最強と謳われる部隊の存在がまず思い浮ぶ。つい最近もトレントリエツタ領まで調整魔獣の調査に出向いて来ていたようだ。

「まあ神の使いとやらが本当かどうかは兎も角、ここんとこフォンクランクのツキっぷりは確かに興味深いね」

「行くんですかー？ フォンクランク」

「軍務官が戻られてからの方が宜しいかと」

「はんつ 人手不足で困ってるって時に護衛なんかゾロゾロ連れて行けるかって。供はアンタ達だけで十分さ」

どうせ他にする事もないのだ。屋敷に籠って愚痴に塗れているよ

りは健全だろうと、ヴォーレイエはフォンクランク見物に出掛ける事を決めた。当てにはしてないが、オドの言う神の使いとやらがもし居るなら、どうにかして連れ帰りたい。

「支度しなっ 直ぐに発つよ！」

「すぐ準備するっす！」

「アンタは留守番だ」

「えええー！」

言い出したら聞かないお嬢様だからなあと心得ている付き人の二人は、旅支度を整えに席を立った。部屋を後にする彼等の背後では、留守番を申し渡されたオドが『連れてって下さいよー』とゴネている。

「駄目だ、今は色々と時期が悪い。多分、無技に対する風当たりも強そうだ」

「それって、ガゼツタの事すか？」

「それもあるし、元々フォンクランクは身分に厳しいって話だからね」

子供の頃からヴォーレイエの周りで慣れ親しんでいた事もあつてか、オドは一般の神技人に対して警戒感が薄い。この集落のように、一族の関係者で固められた環境内なら彼女の奴隷であるオドに手を出す者もないが、外に出た場合はそうもいかない。

ガゼツタに国を滅ぼされて周辺国に逃れたノスセンテス出身者の、無技人に対する敵意と恨みは割と根深い。奴隷の腕輪を填めているとはいえ、余所者の奴隷相手にならちよっかいを出される危険性も

ある。立場上、なるべく目立たないように行動したい。

「それに、お前が一緒だと飯の減りが早い」

「あ、それはオレも自覚あるっす」

でへつと頭を掻いて照れるオドに、別に褒めちゃいないよと突っ込むヴォーレイエ。彼女が小さい頃に父親から買ひ与えられたオドは、奴隷という立場を明確にしつつも、ヴォーレイエにとって友達のようなもあり、家族のようでもある存在であった。

「じゃ、アタイはちよつと総務官の所に顔出してくるから、荷物の準備を頼んだよ」

「はい」

旅の支度をオドに任せ、ヴォーレイエはフォンクラクまで出かける旨を伝えるに、フォートレス総務官の執務室へと向かった。

ヴォーレイエが集落を発った日の夕方、今日の会議を行なう為に総務官の執務室を訪れたアイルザツハ財務官は、部屋を見渡して軍務官の姿が無い事を確認すると、昼間の出来事について話を向ける。

「とつとつ神だのなんだの言い始めたぞ、アレはそろそろ放り出しても良い頃では無いか？」

「おやおや、軍務官殿には聞かせられない言葉ですね」

組織の現状と今後の方針について議論を行なう三務官会議は、ベネフォスト軍務官が封鎖された魔獣施設周辺の調査と、事故で失った兵の補充活動からまだ戻らない為、総務官と財務官の二者で行われていた。

勇猛果敢で義理堅く、前当主エルフォドラス伯爵への忠義を愚直に守り、現当主であるヴォーレイ工嬢の意向を尊重しようとするベネフォストと違って、フォートレスは組織の維持とエルフォドラス伯が目指した理想実現に心血を注いでおり、アイルザツハは世界の覇権に匹敵する経済力でこの世の全てを牛耳る為に、とにかく儲けて組織を拡大する事ばかり考えていた。

「組織構成員の大半は既に我々側に付く事を承諾している。使える魔獣兵も揃った事だし、頃合だとは思わんかね？」

デリアルディアに集まった傭兵を雇い込む事で、リーンヴァールを攻めるのに必要な兵力も十分確保出来ていると話すアイルザツハに、それは軍務官殿の仕事では無いのかと苦笑するフォートレス。

「仕方あるまいよ、忠義忠義でお飾りの機嫌ばかり伺っている先見の無い勇敢なる軍務官殿には任せておけんから、儂が要らん苦勞をしてるんじゃないか」

丁度良い具合に、トレントリエッタ軍の正規兵半数以上が、上街道と下街道の拠点にそれぞれ駐留している為、首都リーンヴァールは現在手薄状態にある。動くなら今が絶好の機会だというアイルザツハの主張に、フォートレスは事を起こした場合の戦略を思い描く。

フォンクランク、ブルガーデン、ガゼッタ、トレントリエッタ、其々の現状と今後の動向をシミュレートした結果、深い成功のイメ

ージを掴む事が出来た。ヴォーレイエ嬢が今このタイミングでフォ
ンクランクに向かった事も、成功のファクターとなる。

「では、レイエお嬢様には我々『風の刃』が覇道の第一歩を飾る花
として散って頂く事にしましょう」

「おお！ では、遂に我等の立つ時がっ」

フォートレス総務官が決起を表明した事に、アイルザツハ財務官
は歓喜の声を上げて立ち上がった。ヴォーレイエ嬢には風の刃を創
設したエルフォドラス伯の意志を継ぐ者として、決起後、数日の内
にフォンクランク領辺りで討たれて貰う。

それにより、当主を失った一族は三務官を組織の指導者に添えて
活動を継続、首都リーンヴァールの陥落を持って亡き伯爵と令嬢の
悲願を果たすというのが、フォートレスの考えた計画だ。シナリオ軍務官が
戻る前に、直ぐにでも刺客を用意して放たなくてはならない。

「なるほど、事が動き出してしまえば彼女も自分ヘネフォストの役割に邁進して
くれるという訳だな？ それにしても手際ヘネフォストのよい」

「概要は以前から考えていたモノですよ。問題は、何時どのような
条件で使うかという部分でした」

資金と戦力、絶対的優位に立てる調整魔獣の獣兵実用化。大国フ
オンクランクからの介入を牽制できるガゼツタの存在。現在の状況
は作戦決行に必要な条件が揃う、まさに全てが上手く噛み合った状
態であると言える。

「レイエお嬢様の不在については、軍務官殿への説明で 誰
だ！」

「っ！」

ガタンと音を立てて執務室前の廊下を走り去る足音。僅かに開かれた扉が軋みを立てる。索敵の風に神技の波動が感じられなかった事を確認したフョートレスは、今走り去った人影は無技人だと悟る。集落に居る無技人はヴォーレイエの奴隷であるオドだけだ。

「お嬢様の奴隷に、今の話が聞かれました」

「僕の部下を追跡に出す！」

「では、迅速に処理をお願いします。こちらも刺客の準備を急がせます」

自分の護衛役を呼び付けたアイルザツハは、集落から逃げ出した無技を追い掛けて始末するよう命令を下す。オドの事を知っている者は顔を見合わせて躊躇いを見せたが、彼等の中にもヴォーレイエ嬢を巡って内面に軋轢を抱えた者がいる。

「無技で奴隷の癖に何時もお嬢様と親しげにしている邪魔な奴」
そついう想いを燻らせていた護衛役が任務を買って出た。

「鬪争こそ生の証。我が主よ、貴方の御令嬢は見事に鬪争の種を撒いておりました。全ては、もう動き始めている……」

フョートレスは内心で熱くエルフヨドラス伯爵を称えながら、表面は至って冷静に、淡々と段取りを進めて行くのだった。

フォルナーの水月の十日目

この日は宮殿衛士隊の屋外訓練場にて、闇神隊の備品扱いとなる移動用小型車両の性能実験が行われていた。

すっかりとした造りの車台に強力な動力ユニットを組み込んだ二人乗り四輪車と、実験で作った二輪車。座席は鞍のように跨いで乗る型のモノが縦に並んでいる。

一応サスペンションも付いているが、材料の都合上簡単なモノにしてある為、路面追従性や乗り心地はあまり良くない。

「うおおーっつとっつ！ 曲がれー」

「うひょーっ いったすよコレ！ かなりいい感じっすねー！」

ギョルギョルと車輪を空転させて訓練場の土を巻き上げながらパワースライドのような走り方でコースに設定した角を曲がって行く悠介とフォンケを乗せた移動用小型動力車。

ヴォレットに作った試作動力車の倍近い速度で安定した走りを実現しており、性能実験は概ね大成功と言えた。ちなみに、時速で表すと約二十五キロ前後といった所だ。

まだまだ馬車の代わりにはならないが、魔獣施設に向かう地下通路のような現場で移動する時などは重宝しそうな乗り物である。

「早くっ 早くわらわも乗せるー！」

「まてまて、ヴォレットにはちゃんと専用のを作るから」

「えーい、こんな楽しそうなモノ見せられて待つてられるかっ」

「うわっ ちよっ 姫様、待つてっ いててて」

訓練場コースを二週ほどして戻って来た悠介達に、飛び掛るといふ表現がしっくり来るような勢いで小型車両に飛び乗るヴォレット。

蹴落とされてもがくフォンケをエイシャたちが面白そうに笑っている。

「それっ 行くのじゃ！ さっきのをやって見せてくれ」

「しょうがないなあもう」

悠介の後ろに乗ったヴォレットがしつかと腰に手を回して、走れー走れーと唱えている。それを苦笑しつつ、悠介は先ほどよりも少し慎重に小型車両を発進させた。実験走行でフォンケを乗せていたのは、風技の移動補佐を反映させた走りを見る意味もあったのだ。

風技による補佐なしで何処まで安定した走りが出るのか、ヴォレットという怪我をさせる訳には行かないが安全第一の慎重走行では納得してくれない大事な御転婆姫を乗せての走行実験は、クレイヴォルがお稽古の時間ですと迎えに来るまで続いたのだった。

「ふーやれやれ、途端に静かになっ たな」

「うふふっ ヴォレット様、満足そうでしたな」

「お疲れ様でした、隊長」

お稽古が終わったらまた乗りに来るであろう事は予想出来るので、今の内にヴォレット専用車両を作り上げておくかと、カスタマイズメニューを開いて九割ほど完成している車両のデータを呼び出す悠介。材料は殆どの部分が木製である。

移動用小型車両は、動力ユニットや一部の金具を使う部分以外は、全て現地調達で賄えるよう設計しており、材料にする木の状態や種類によっては、車体を組上げてから改めて強度などのカスタマイズを施す事になる。

「ありや？ フヨンケは？」

「アレに乗ってるみたいですよ？」

「隊長ー！ 俺こっちの方が好みかも」

車体を傾けつつコーナーを曲がるなど、初めての二輪車にしては中々上手く乗りこなしているフヨンケ。四輪車に比べると若干速度も落ちるのだが、その辺りは風技の移動補佐で調節できるようだ。バランスを取り易いという意味でも移動補佐の恩恵が光る。

「ふむ、小回りも利くし相性も良さそうだな。二輪車はフヨンケに使わせようか」

ここ数日、ヴォルアンス宮殿には、少し騒がしくもノンビリとした平穏な時間が流れていた。午睡のまどろみのように静かで穏かな日々は、得てして嵐の前触れである事も珍しくなく。

三日後、トレントリエッタからもたらされた急報により、平穏は破られる事となった。

78話…トレントリエッタ動乱

ガゼッタのパトルティアノースト、旧神義堂では『風の刃』という組織が送り込んで来た使者について議論が交わされていた。

彼等は近い内にトレントリエッタで現政府の転覆を目的とした反乱を起こす事を示唆しており、フォンクランクとトレントリエッタが現在行なっている対ガゼッタ戦略の詳細、交易制限によるガゼッタ弱体化計画を暴露した。

「連中の目的は何だと思う?」

「我々に支援を求めている訳ではなさそうでしたが……」

「ああ、だが……俺達が動く理由になるだけの情報を態々渡していったという事は、それを期待していると考えていいだろう」

「トレントリエッタの反政府組織は、我々の介入を誘っている?」

『風の刃』がガゼッタを利用しようとしている事は明白だが、交易制限で流通が滞れば地味に効いて来るのも確かだ。

「ここは連中がどう引っ掻き回すつもりなのか、見定めてやるのもいいだろう」

「では、彼等の策に乗るのですか?」

「ああ、だが……」

ただ相手の思い通りに動いてやるつもりは無いと、シンハは各国に潜伏させている密偵に連絡を取るよう指示を出し、トレントリエッタとの国境に騎兵団を移動させるよう命令を下す。

「まずは諜報だ、どんな些細な噂も見逃すな。フォンクランクとトレントリエッタの情報を徹底的に集める」

トレントリエッタの南西部には南の海岸線を行く下街道と、北の月鏡湖に沿った上街道がガゼッタ領に伸びている。

現在この両街道にはフォンクランクとトレントリエッタによるガゼッタの封じ込め戦略として、街道封鎖に近い交易制限を掛ける為の拠点が設けられており、首都リーンヴァールから派遣された正規兵がそれぞれ駐留している。

フォルナーの水月の十二日目、深夜

「敵襲ー！ー！」

拠点の宿舎に見張り役の怒鳴り声が響く。交代で眠っていた者は飛び起き、食事をとっていた者は口に含んだ実を咀嚼しながら食堂テントを飛び出す。

上街道はガゼッタとの国境に近く、故に、トレントリエッタ軍兵士の駐留するこの拠点が襲撃されるとするなら、それは街道封鎖を懸念するガゼッタ勢力の仕業だろうと思われる。

「敵の規模は！」

「哨兵からの連絡はどうしたっ」

「伝達妨害を確認 いや、違う……これは」

「おい、なんだこの波動は」

周囲を照らし出していた炎技の明かりが掻き消され、索敵や武器の強化を行なう神技も不安定になり、拠点一帯を奇妙な波動が包み込む。やがて森の奥から複数の足音が近付いて来た。人の足音だけではなく、獣が駆ける足音も混じっている。

「魔獣の襲撃だー！」

「傭兵も混じってるぞ、コイツ等一体何者だ」

「神技が使えないっ 例の調整魔獣か！」

「首都に応援の伝令を……っ」

神技阻害の波動を受けて混乱する拠点駐留部隊に、風の刃軍の魔獣兵と傭兵部隊が襲い掛かった。拠点前に展開していた迎撃部隊の中で攻撃系神技を中心に使う者は無力化されたも同然となり、刀剣を振る傭兵達に撫で斬りにされていく。

「武器を取れ！ 接近戦の出来ない者は建物に避難させる！」

「街道側から新たな部隊接近！ 魔獣多数！」

強化系神技で武器を扱う者は反撃である程度の抵抗を見せたが、傭兵と互角に戦ってもそこを魔獣に襲われれば一溜まりもない。

上街道の拠点襲撃は深夜から明け方に掛けて行なわれ、調整魔獣の神技阻害と傭兵部隊の波状攻撃による奇襲を受けた拠点駐留軍は、一夜にして壊滅させられたのだった。

フヨルナーの水月の十三日目

「港街か、ここは活気があっていい所だねえ」

「オド君も連れて来てあげれば良かったかもしれないねー」

ヴオーレイエ達が樹海の奥深くにある集落を発ってから四日目、一行はフオンクランク領の港街に到着した。街の通りには地元民である無技人達が行き交う姿も普通に見られ、当初思い描いていた無技に対する排除感のような空気は感じない。

「うーん、首都と地方じゃ少し違うのかもかもしれないし……」

「そーかなー、サンクアディエツトでも最近は無技人が街で働いているらしいって、前の宿場街でも聞いたよ〜？」

ぼりぼりと頭を掻きながらリフヨナの指摘を躲そうとするヴオーレイエは、宿を探しに行っていたウエルシャが戻って来る姿を見つけて、これ幸いと話題の転換を図る。

「安くていい宿はあったかい？」

「……良い場所の部屋が取れました。お嬢様、リフヨナ、急いで宿に向かいましょう」

「？ 何かあったのかい？」

「詳細は後ほど。とにかく、今は速やかに移動をお願いします」

ウエルシャの只ならぬ雰囲気にリフヨナと顔を見合わせたヴォーレイエは、表通りから路地に入る彼の後に黙って続いた。

窓から月鏡湖の湖面を見渡せる安宿の二階部屋にて、ウエルシャは港街を訪れている通商協会の商人関係者から得たという情報を話す。

今朝方、トレントリエッタの上街道にある拠点が武装集団に襲撃されて駐留していたトレントリエッタ軍部隊が壊滅。『風の刃』を名乗る組織がトレントリエッタ政府に対し、エルフヨドラス家当主の名で宣戦布告の声明を出したという。

「な、なんだいそりゃ！ アイツらなに勝手な事を……っ」

「シツ　　声を抑えて下さい」

「その情報って確かなの？　確認は？」

「これから真偽と詳細を確認に行きます。二人はなるべく出歩かないよう、ここで待機していて下さい」

まだ情報が錯綜しているらしく、細かい点など不明な部分を調べて組織の者と連絡を付けるべく、ウエルシャはこの街に潜む闇商人の元を訪ねると言って部屋を後にした。

風の刃本拠地集落、総司令部となるフォートレス総務官の屋敷では各方面から入る情報を分析し、次の行動に移る時期を計っていた。西の国境ではガゼッタがこちらの思惑に乗ってくれたらしく、街道に兵を集結させているという報告が届いている。

「下街道拠点の駐留軍はガゼッタの動向を警戒して動けません、上街道の拠点を放棄し、次の段階に移りましょう」

「うむ。次はデリアルディアの攻略だな、リンヴァールからの援軍が来る前に落とさねばならんが……軍務官」

「二個大隊……半日あれば落として見せよう」

「では、軍務官殿の部隊をデリアルディア攻略に向けて予備の一隊を下街道の拠点牽制に、残りを首都攻略に向けて移動させます」

ガゼッタ軍を動かす事で下街道の拠点到駐留している部隊を警戒させて動きを封じる事に成功した風の刃軍は、上街道の拠点から部隊を退かせつつ、ベネフォスト軍務官率いる二個大隊でデリアルディアに攻撃を開始。

デリアルディアに駐留していたレントリエッタ軍の守備隊は元々数が少なく、防衛もままならないと判断した指揮官はデリアを放棄してルディアの鉾山に立て籠もり、鉾山道ルートを使ってリンヴァールからの援軍を待つという籠城作戦に出ようとした。

しかし、予めルディアの鉾山に潜伏していた傭兵部隊が風の刃軍の攻撃と同時に行動を起こして鉾山を占拠。退路を絶たれた守備隊は鉾山の入り口でベネフォスト部隊との挟撃にあい、壊滅してしま

う。

宣言通りデリアルディアを半日で占拠したベネフォスト軍務官は、リンヴァールからの援軍を迎え撃つべく街道に部隊を配置した、ように見せかけてトレントリエツタ軍の目を惹き付ける事で、首都攻略に向けて進軍するアイルザツ八財務官指揮下の本隊を援護する。

リンヴァールの王宮では右往左往する官僚達と次々もたらされる凶報に、クリフザツ八王が頭を悩ませていた。

「デリアルディア陥落！ 現在街道に一個大隊規模の敵部隊が展開されています」

「……一日と持たなかったか、援軍に向かわせた部隊で対処出来そうか？」

「正面の街道に行く部隊と鉦山道の部隊とで挟撃できればなんとか

「申し上げます！ 鉦山道の岩山が切り崩され、通行不能！ 落石で援軍部隊の半数が脱落しました」

その報告に官僚達が色めき立つ。岩山を通る道である鉦山道は日々の生活に必要な物資を大量に運ぶための、リンヴァールとデリアルディアを繋ぐ大事な輸送路なのだ。

それを潰してしまうとは何たる愚行をと憤りを見せる官僚達に、クリフザツ八王は冷静になるよう宥める。

「ここで不満を言ったとて何にもなるまい。それよりも敵勢力の正

「確な規模は掴めんのか？」

「残念ながら……」

今現在、確認出来ているのは上街道拠点を襲った部隊とデリアルディアを占拠している部隊、それに下街道の入り口にある宿場街近くにもそれらしい部隊が目撃されている。何れの部隊も傭兵が大半を占めているとの事だった。

「ふむ……。一国に対して宣戦布告の声明を出すほどの組織だ、どれくらいの戦力を揃えておるやら」

「王よ、フォンクランクに救援を求めてみては？」

「デリアルディアに向かわせた援軍は、一度呼び戻した方が良くありませんぞ」

「鉱山道が塞がれたという事は、そこから首都の背後を突かれる心配はないという事か……。もしや、敵勢力の狙いは」

纏まりの無い意見をバラバラに述べる官僚達の言葉の中から幾つか的を射ていそうなモノを拾い上げ、クリフザツ八王は首都防衛とデリアルディア奪回に向けて指示を出す。

「同盟国フォンクランクに救援を求める伝達を放て。デリアルディアへ向かわせた部隊は国境で待機。鉱山道の復旧を急がせよ」

「恐れながら王よ、鉱山道は塞がれたままにしておいた方が良いのでは？」

地理的に街道を通る正面からリンヴァールを攻めようとすれば、フォンクランクの援軍に側面や背後を突かれる事になるのだ。

その官僚の意見によれば『風の刃』が直接デリアルディアに軍を送り込まれる事を嫌って鉱山道を塞いだと考えるなら、元から『風

の刃』にリーンヴァールを攻める意思は無いのではないか、デリアルディアの分離独立が目的なのではないかという。

「考えられぬ話ではないが、嫌な予感がするのでな。国境を渡らず直接首都を狙える道を態々塞いで見せた所に畏の意図を感じるのだ」

深い洞察を見せるクリフザツハ王の返答に、その官僚は頭を垂れて恭順を示した。が、内心ではミスリードに失敗した事を、亡き当主に詫びていた。彼はエルフォドラス家一族の一派であった。

『油断は誘えなかったが、概ね予定通り。フォンクランクの介入より先に首都を陥落させる事が、この闘争の成否を握る鍵だ』

トレントリエッタ政府からフォンクランクに向けて発せられた救援要請を受け、ヴォルアンス宮殿では直ちに派遣する援軍部隊の編成と指揮官の選定に入っていた。

それに先駆けてトレントリエッタとの国境に派遣されている斥候部隊から、ガゼッタに不穏な動きがあるという報告がもたらされる。

「トレントリエッタ領の半島にガゼッタの軍が集結している」と？

「奴等、月鏡湖を渡って来る気なのか？」

「それと、これは港街の自警团组织から上がって来た報告ですが

」

『風の刃』を設立したエルフョドラス家の当主が、港街に潜伏中であるという垂れ込みがあったのだそうだ。

「ふむ……攪乱の可能性は？」

「ありえます。ですが、ガゼツタの動きも気になります」

港街にも部隊を派遣すべきだと主張する諜報部隊長の進言に、宮殿官僚達も同意を見せる。トレントリエッタに派遣する援軍部隊と港街に派遣する調査団の人選には、やはり闇神隊長の名が筆頭候補として挙がった。

以前までなら、姫様の腰巾着にこれ以上の手柄を立てさせてなるものかとはかりに、派遣候補として名が挙がっても反対する者が多かったであろうが、無技の村襲撃事件絡みでヴォーアス家の家督を救い、各門閥家からも認められた頃から、悠介の活躍は国の誉れとして喜ばれるようになっていた。

最近では魔獣施設封鎖に貢献して各国に勇名を轟かせた事も大きい。エスヴォブス王は少し考えると、トレントリエッタに派遣する援軍部隊、港街に派遣する調査団の人選をそれぞれ発表した。

「今度の任務は港街の調査と防衛じゃ。場合によってはトレントリエッタの援軍に向かう事もあり得る」

宮殿の二階、普段あまり使われない方の神民衛士隊控え室にて、集まった闇神隊メンバーに新たな任務を説明するヴォレット。

港街には闇神隊を指揮部隊として編成した調査団が派遣される事

になり、トレントリエッタへの援軍には各宮殿衛士隊員から統率力に優れた人材を部隊の指揮官に任命して派遣する衛士団を結成、援軍総指揮官に炎神隊員のヒヴォデルが抜擢された。

「今回の人事、エスヴォブス王もかなり思い切った方策に出やしたね」

「そうなのか？」

宮殿衛士でも副官以下の隊員を指揮官に任命して戦場に送り出す。身分と神技力の高さにしが見所の無かった宮殿衛士隊に経験を積ませる事で、総合的な戦力の底上げを狙っているのではないかとヴォーマルは分析する。

「ま、あの王様の事ですから、十分な勝算があつての作戦なんですようけどね」

「ふーむ」

「今度の事でガゼッタの封じ込め戦略が破綻したからのう、父様も事を構える覚悟を考えたのやもしれん」

エスヴォブス王が積極的な戦力の増強を図る事に多少の違和感を覚えつつも、これもまた戦争回避に軸をおいた策なのだろうなあという見解を懐く闇神隊の面々とヴォレット達。

その傍らで、クレイヴォルは以前忘れようとしたエスヴォブス王とレイフォルドの会話を思い浮かべていた。

『神ならざる神を駒に、世界の覇権を競うカルツイオの歴史　か

……』

ふとヴォレットに視線を向ける。闇神隊のメンバーと楽しそうに

語らう炎の姫君。

『なんとなく』という理由で闇神隊所属の神民衛士隊員だったメンバー達を正式な闇神隊員へと引き上げた事で、彼等は専属従者のスンや神技兵のソルザックを除く全員が、自らの権限で神民衛士隊を編成して動かす事が出来る立場となった。

この数日間、闇神隊メンバーはそれぞれ『自分の衛士隊』を持ち、指揮する能力を養っていたのだ。

『そこへ来て今回の任務……港街へ派遣する調査団は、恐らく闇神隊メンバーの配下にある衛士隊で構成されるだろう』

この任務で闇神隊と衛士隊の結束が固まれば、ヴォレットの言葉通り、闇神隊は独自の戦力を手に入れたと言える。単なる偶然なのか先見の才によるモノなのか、或いは、これも『邪神』のなせる業なのか。

「という訳でクレイヴォルよ、細かい説明は任せたぞ」

「……では、説明します。港街での主な任務ですが」

ヴォレット姫とエスヴォブス王の対峙という他愛無い妄想を思い出して一抹の不安を懐きつつ、クレイヴォルは任務の詳細を告げていく。闇神隊の調査団と、ヒヴォデイル援軍衛士団が共にフォンクランクを出発したのは、翌日の早朝。

フォルナーの水月の十六日目の事であった。

79話：炎帯のヴォーレイエ

リンヴァールとデリアルディアを繋ぐ岩山の道は途中で二つに分かれており、片方は岩山の隙間を縫うように進む曲がりくねった山道で、もう片方は切り立った崖沿いに岩肌を削って作られた道である。両方の道はそのままルディアの鉱山道に繋がっている。

現在、風の刃軍によって山道は岩で塞がれ、崖沿いの道は広い範囲に渡って切り崩された為、完全に通行不能。鉱山道の復旧を指示されたトレントリエツタ軍は、崖沿いの道を諦めて山道を塞いでいる岩の除去作業を行っていた。

「しかし、風の刃だっけか？ 連中も無茶するよなあ」

「まったくだよ、この崖にまた道を作ろうと思ったたら、どれだけ掛かる事やら……ん？」

「どうした？」

「いや、いま何か動いたような……」

夜通し行なわれている山道の復旧作業をサボって、崩れた崖沿いの道まで様子を見に来た工兵の二人は、道が無くなって真っ暗な空間が続く崖の先で、何かが揺れているのを目撃した。

なんだろうと目を凝らす二人の目の前に、鈍く光る先端を持つ細長いモノが飛んでくる。

「うわあっ」

「な、なんだ！」

それは鉄杭が結び付けられたロープの先だった。勢いよく風を切る音を鳴らしながら飛んで来た鉄杭が、崖道の岩壁に突き刺さる。同時に強力な神技の波動が広がり、風の塊が鉄杭に打ち付けられた。しっかりと杭が岩壁に打ち込まれた事を確認するように二、三度ロープが引かれ、シャラシャラと金具がぶつかり合う音がロープを伝って流れてくる。

「お、おい……これって」

「まさかっ　ここに橋を架けようってのか！」

工兵の予想通り、ロープを伝って流れてくる大量の輪っか型金具に結び付けられた折りたたみ式の足場が、杭の打ち込まれた端まで来ると一斉に開かれ、人一人分しか渡れそうにない程度の小さな吊り橋が渡された。

そうして、誰かが渡って来るようにガチャガチャと揺れ始める小さな吊り橋。二人の工兵のうち攻撃系土技を扱う方が橋を落とそうとするも、何故か神技の力が上手く纏まらない。

「こりややばいっ　本隊に伝達を飛ばせ！」

「風が妨害されて　いや違う……これは」

何とか橋を落とそうとナイフを使ってロープの切断を試みている二人の視線の先で、吊り橋を駆け渡ってくる魔獣が牙を剥きながら跳躍した。

深夜、リーンヴァール王宮は蜂の巣を突付いたような大騒ぎになっていた。

断たれていた筈の鉾山道から調整魔獣を中心にした少数部隊の奇襲があり、山道の復旧作業に当たっていた工兵隊とも連絡が取れず、急遽、敵部隊の迎撃と工兵隊救出に向かわせた部隊も、神技阻害の波動に攪乱されて街の入り口まで後退を余儀なくされた。

更に、国境で待機させていた部隊からも敵軍本隊と思しき大部隊の接近を確認したという伝達の後、連絡が取れなくなっている。

これまでに分かっている事は、風の刃軍は部隊の編成に偏りが見られる事と、一部隊ごとに必ず魔獣兵が混じっており、神技阻害の波動で神技戦闘を封じてから傭兵の突撃による接近戦という戦法を常套にしている事だ。

トレントリエッタ軍側は、魔獣兵の神技阻害に対抗する術を持っていない事が致命的であった。

「フォンクランクからの援軍は……」

「救援の要請を出してまだ間もない、昨日今日で到着するわけがなかるう」

クリフザツハ王はリーンヴァール周辺の索敵と、敵部隊について明らかになっている情報をフォンクランク側に送るよう指示を出す。魔獣施設を封鎖した闇神隊のいるフォンクランクなら、敵の調整魔獣部隊にも対抗策を持っているかもしれない。

「恐れながら王よ、フォンクランクにあまり多くの情報を与え過ぎれば、悔りから我々の足元を見られはしまいかと……」

「その懸念も分かるがな、残念ながら我々の現状は交渉や駆引きを

考えていられる立場にないのだ」

まだ背後から少数による奇襲を受けただけとはいえ、実質首都に攻め込まれている状況。なりふり構ってはられないのだ。

国境を跨ぐ街道で陣を張っていたトレントリエツタ軍部隊を退け、風の刃軍の本隊は首都リンヴァールへと迫っていた。上街道拠点から退いてきた部隊がデリアルディアに入り、入れ替わりに本隊と合流を果たしたベネフヨスト軍務官の部隊が先頭に立っている。

「いやはや、流石は軍務官殿、鮮やかな手並みの用兵でしたな」

「……これが私の仕事だ。それよりも、レイエお嬢様とはまだ連絡が付かないのか？」

「ええ、流石に伝達も慎重に行ないますので。ですが、ガゼツタ軍が動いている事から見て、お嬢様は交渉を成功させたようです」

「……そうか。それならば良い」

フョートレス総務官の説明に、一応の納得を見せるベネフヨスト。自分に相談もなく、あまりに急な旗揚げを訝んだ彼女だったが、ヴォーレイエお嬢様にもエルフヨドラス伯爵の血が流れているのだ。これも一族の性がなせる業かと理解を示していた。

夜の闇に乗じて進軍する風の刃軍本隊。遠く大地の先に輝くりー
ンヴァールの街明かりに、眼を細めるベネフヨスト。これからの戦

いに集中し始めた軍務官殿の様子を、アイルザツハは頼もしそうな表情で見つめながら、内心でほくそ笑んでいた。

フォルナーの水月の十七日目

サンクアディエツトを出発した闇神隊率いる調査団は、ブルガーデンに繋がる街道の分岐点を過ぎた辺りで休憩に入っていた。ルフク村を経由して海岸線方面を進むヒヴォデイルの援軍衛士団とも連絡を取り合いつつ、トレントリエツタからの情報にも気を配る。

「援軍衛士団は、もう直ぐ海岸の街に入るそうです……ルフク村のゼシャルドさんも、元気だったそうですよ」

「そっか。しかし先生の近況を知らせてくるとは、あいつにしては中々気が利くな」

ヒヴォデイル援軍衛士団から送られてきた定期連絡の報告をイフヨカから受け取りつつ、悠介はカスタマイズメニユーの中で戦闘用マップアイテムを弄っていた。防壁や落とし穴にも色々なバリエーションが欲しいと、既存のデータを基に改良を重ねて行く。

今回悠介達が引き連れている調査団は、闇神隊メンバーが其々管理している八人編成の衛士隊が五隊分と、ディアノース砦に向いた時にも与えられた悠介の直属となる衛士、二十人の計六十人。

スンを含む闇神隊メンバーを合わせると総勢六十七人という大所帯なので、流石に休憩で全員収容できるような宿舎は作れなかった。

「ユウスケさん、フォンケさん達が戻ったそうですよ」
「んー、今行く」

フォンケは例の二輪車で街道の少し先を調べに出ていた。態々斥候を出すまでもないのだが、港街に潜伏しているらしい風の刃という武装組織の長や、対岸で集結しているガゼツタ軍の動向を考えるならば、街道に罾や待ち伏せなどの危険が潜んでいないか、進軍に慎重を喫す事は無駄ではない。

というのは建て前で、実際は二輪車の高速走行をすっかり気に入ってしまったフォンケが、走る為の口実が欲しかったという色々無駄と問題のある理由での斥候であった。だが仕事はしっかりこなすフォンケ。

「とりあえず森の出口まで見てきましたが、特に異常はなかったですね。普通に旅商人ともすれ違いましたし」

「そっか、ご苦労さん」

二輪車を動力ユニットと一部の金具に解体し、車体部分は木片に変えて片付ける。フォンケは程よい疲労感を感じさせる満足気な様子で、一緒に走った衛士隊の部下を連れて休憩用の馬車へと入って行った。

ちなみに、フォンケが編成して管理している衛士隊は全員が女性衛士だったりする。

「隊長、約八名を除いて調査団の回復処置は終わりました」

「お疲れさん、その約八名は今し方帰って来たから、そっちも頼むよ。もう少ししたら出発しよう」

治療や解毒など回復系専門の水技使いで構成される衛士隊を引き連れたエイシャは、呆れ半分の苦笑顔を返すと指示された馬車へと向かった。基本的に、闇神隊メンバーは隊服その他に付与された補助効果で疲れる事は殆ど無い。

そういった面で余裕がある分、今回のような大勢の部下を引き連れての移動では部下達の体調管理に気を配りながら進む事が出来る。上司の気遣い、心遣いに痛み入る衛士達の忠誠度はうなぎ登りに増していった。別に狙ってやった訳ではないが。

「ではー、しゅっぱー」
「た、隊長!」

何時ものやる気なさげな出発の合図を発しかけた悠介に、イフヨカが慌てたように声を掛ける。

「どうした?」
「い、今、緊急連絡が……トレントリエッタの、リーンヴァールが……陥落したそうです」

何処かノンビリしていた全員の表情に緊張が走る。こういう時、真っ先に適切な行動を取れるヴォーマルが情報の詳細を訊ねた。

「風の刃からの声明はどうなってる? クリフザツ八王の身柄や生死は?」

「詳細は、まだ分からないとの事です……闇神隊と調査団は、このまま港街へ向かうようにと、指示が出ています」

「うーむ……」

「ちょっと、早過ぎやすね」

とにかく港街まで移動しようという事でこの場を出発した闇神隊と調査団。九台が連なる車列のどの馬車にも、神妙な顔付きで話し合っている衛士達の姿が見受けられた。闇神隊メンバーが乗る馬車の中でも、リーンヴァール陥落について議論が交わされる。

「余程相手軍が強かったのか、トレントリエッタ軍が弱かったのか」
風の刃

「ヒヴォデイルの大将はどうなるんすかね？」
「向こうも首都が陥落したとなると、迂闊に近づけないわな」
「下手すりゃリーンヴァールから攻撃を受け兼ねやせんからね」

なににせよ、これで状況がどう転ぶか分からなくなったと、ヴォーマルはリーンヴァール陥落による影響を懸念する。もし、月鏡湖の対岸に集結しているガゼツタ軍が風の刃と連係して動いていたとすれば、この機に乗じてフォンクランクに侵攻してくる可能性もある。

エスヴォブス王が闇神隊を港街に差し向けたのは、シン八王が邪神との敵対を避ける傾向にある事を見越しての人選なのだ。

「万が一の時は、隊長の力を頼りにしてますぜ？」
「プレツシャー掛けないでくれ……」

シン八なら大丈夫だと思っただけだなあと呟きつつ、戦闘用マップアイテムデータ弄りに没頭する悠介。その後、ヒヴォデイル援軍衛士団からは、一旦海岸の街に駐留して国境付近に斥候を出しつつ様子見に入るとの連絡が届いたのだった。

フヨルナーの水月の十八日目

港街に潜む闇商人を訊ねたウエルシヤは、今回組織が起こした行動について、組織内部の一部強硬派による扇動で引き起こされた暴走であるらしいと聞かされた。突発的な事だったとはいえ、組織には強力な魔獣兵の存在もあり、拠点の襲撃が成功してしまった。

エルフヨドラス家当主の名で宣戦布告までされてしまったのはもう、後に退く事も出来ず、やむなく三務官達が協力して組織全体の指揮を執り、トレントリエッタ政府との全面戦争を避けるべく落とし所を模索しているのが現状なのだという。

「まったく、馬鹿な事をしでかしてくれたもんだよ……」

「ベネフヨストさまが不在だったのも、暴走を防げなかった原因かもしれないねー」

「更に不味い事に、お嬢様がこの街に居るといふ噂が流れているようです。それと、闇神隊がこちらに向かっているらしい」

「ええっ あの最強部隊がー！」

それは早く逃げないと慌てるリフヨナに、闇神隊の本命は恐らく対岸に集結しているらしいガゼツタ軍への牽制だろうと推測して見せるウエルシヤ。

だが、フォンクランクはトレントリエッタの救援要請に対して援軍を出しているそうなので、組織の首謀者と思しきエルフヨドラス家当主が港街に潜伏しているという噂が闇神隊の耳に入れば、当然身柄の逮捕拘束に動くだろう。

「だったらー、早く逃げないとー！」

「いいから、落ち着きなつて……で、対策は？」

「この街の闇商人が、我々の脱出に協力してくれる事になっていきます」

夜に移動するのは怪しまれるかもしれないので、行商人を装い昼間の内に街を出る。途中で街道を外れて湖に移動し、そこから用意された小船で岸沿いに進んでトレントリエッタ領までの脱出を図る手筈だという。

「直ぐに出ます。私は一階の裏口に居ますので、二人とも準備が整い次第、下りて来てください」

「それじゃあ、とつと準備を済ませちまうとするか」

「結局、観光どころじゃなかったねー」

来て早々宿に閉じ籠り、殆ど外出もできなかった事を愚痴りながら、ヴォーレイ工達はフォンクランク領から脱出すべく旅の支度を整え始めた。

調査団部隊の足並みがしっかり揃っていた為か、予定よりも早く港街に到着した闇神隊は、港街の自警団と共同利用する事になる大型宿舎が並んだ通りに馬車を乗り入れ、荷物を降ろして滞在の準備に入っていた。

「隊長、トレントリエッタに関する、新しい情報が届いています」

イフヨカの報告によると、風の刃軍の部隊は調整魔獣と思しき魔獣兵を中心に、大多数を傭兵で構成した奇襲攪乱型の編成となっているらしい。戦闘に入れば殆ど全ての神技が行使不能になるようだ。

「調整魔獣か……」

「やはり、魔獣施設を運営していた組織……と、見るべきですかね？」

「そう考えた方が自然だろうなあ」

現在、援軍衛士団が駐留している海岸の街には、魔獣兵との戦闘に備えて魔笛を届ける部隊が向かっているそうだ。実は施設で回収した魔笛は悠介がコピーして量産してあったりする。

材質はよくある金属を使った製品だが、特定の音波を出す為の構造はかなり複雑で細かく、ソルザック並に腕の良い土技職人でも簡単には複製出来ないであろう作りになっていた。

物の形を弄る事に掛けては反則の域にある悠介のカスタマイズ能力を使えば、複製になんの問題も無かったが。

「魔笛か、こつちも用意していた方がいいかもな」

「それでは、私たちは周辺の索敵に行つて来ます」

「あいよ、ご苦労さん」

報告を終えたイフヨカは数人の部下達と街周辺の索敵に散らばっていった。他のメンバー達もそれぞれ情報収集に走ったり街から確認出来る対岸の様子を探りに行ったりと、自分達の仕事をこなしている。

自警団の幹部達とも挨拶を済ませて直属の衛士を交代で宿舍周辺

の警備に就かせた悠介は、とりあえず早急にやらなければならぬ事も一通り終わって時間が空いたので、スンを連れて少し街を歩く事にした。

「スンは港街に来るの初めてだよな？」

「はい。実は、街を歩いて見たくてウズウズしてました」

「はははっ それなら自由に散歩してもいいよ？」

「いえ……、ユウスケさんと一緒に歩いて見たかったですから……」

少し照れるようにはにかみながら、そんな事を言うスんに、悠介も照れがうつって頭を掻いた。

「そ、そっか」

「はい」

黒髪に黒の隊服、黒で統一された闇神隊長と、白髪に白い従者服、白のイメージに包まれた専属従者。手など繋いで港街の通りを行く白と黒のコントラスト。仲睦まじく、と言った表現がしっくり来る雰囲気であり歩く二人は、色々な意味で目立っていた。

しばらくぶらぶらと散策していた二人が少し開けた静かな街外れまで来た時だった。街道に繋がる街の出入り口付近に、何かズダ袋のようなモノが転がっているのを見つける。よく見ると、それは人だった。

「……っ ユウスケさん！」

「ああ、酷いなこりゃ」

全身斬り傷や痣だらけ、血と泥に塗れた状態でうつ伏せに倒れている青年。髪の色から無技人である事が分かる。酷い有り様だが、まだ息はあるようだ。悠介はスンにエイシヤ達を呼んで来て貰うよう頼むと、手持ちの回復薬で傷の治癒を試みた。

「ねーねー、さっき擦れ違った無技の女の子ってさー」

「闇神隊の従者ですね」

「まったく、アンタの予想じゃ昼過ぎに来るんじゃないのかい？」

協力者との待ち合わせ場所を目指す行商人に扮したヴォーレイエ達は、闇神隊が予想外に早く到着した事で、時折擦れ違つる衛士達に冷や冷やした想いを懐きながら足早に通りを抜けて来た。

そうして街外れまでやつて来た時、街の出入り口にしゃがみ込んで何やら作業をしている黒い隊服を纏つる男の姿が目に入る。もしかや出入り口を抑えに来ているのかと緊張するヴォーレイエ達だったが、男の足元に転がる物体を見て思わず目を瞠つた。

その男によつてごろりと、仰向けに転がされた人物は身体中に酷い怪我を負つており、痣で腫れ上がった顔はヴォーレイエ達がとてもよく知る、ここに居る筈のない無技の青年だったのだ。

「オド！」

「いかんっ　リフヨナ、お嬢様をお止めしろ！」

「お嬢さま、ダメ！」

リフヨナの付与拘束を己の神技力で弾き返したヴォーレイエは、二人の制止を振り切って飛び出した。

無技の青年を介抱する悠介は、回復薬の応急治療で背中細かい傷や腫れなどが目に見えて引いたのを確認すると、仰向けにして正面の治療に移ろうとした。と、その時

「オド！」

「ん？」

「てめえっ よくもアタイのオドを！」

背後から響いた叫び声に悠介が振り返ると、腕に螺旋の炎を纏わせながら突進してくる女性の姿。前髪の一部にメッシュのような緑色が映える長い赤髪が印象的だ。

「うおう！ なにごとっ」

ゆっくり観察する間もなく、女性の腕から放たれた螺旋の炎が生き物のように伸びて来た。咄嗟に足元の土を防壁にカスタマイズする悠介。既に地面から壁を出現させる防御行動は一瞬で行えるまでになっている。

「壁が……？ くそつ こんなモノ！」

防壁にぶつかつた炎の帯は弾き返されるように跳ね上がると、なんと防壁を迂回して壁裏の悠介に向かつてきた。が、狙いは適当らしく、攻撃目標ゆっすけから大きく逸れると地面に焦げ跡を作つて消えた。

ヴォーレイエの神技は炎技と風技を織り交ぜた攻撃系神技で、風の帯に炎を乗せて操る事が出来る変幻自在な炎の帯。再び螺旋の炎を腕に纏つたヴォーレイエは防壁の裏側に走りこんで行く。

「おい、ちよつと待て！ 何で俺を攻撃するんだ」

「惚けんじゃないよつ オドは馬鹿だから、何か失礼をやらかしたのかもしれないけど……それでもこんな酷い仕打ちは許せない！」

放たれる炎の帯を横に走つて躲すと、そのまま距離を取つて攻撃主を防壁で囲むなり落とし穴に落とすなりしようかと考える悠介だったが、炎の帯が追尾してくるので中々集中出来ないでいた。

「とりあえず落ち着けて、お前は多分勘違いしてるぞ」

「うっせえ！ 無技だつてアタイらと同じ人間なんだ！ それを

」

どうやら倒れていた青年の知り合いらしいが、頭に血が上つていて話を通じないようだ和理解した悠介は、相手の隙を作る為に少ない資材で組める攪乱用のギミックデータを呼び出した。使う資材が少なければ、それだけカスタマイズと反映も短い時間に行なえる。

以前ネタで作つてはみたが、使う機会もなかった攪乱用ギミックオブジェを、怒れる緑メッシュな赤髪女性の足元に反映させた。

「実行」

ウネウネウネ

「うわわっ なんだいこりゃ！」

『うねうね土塊』と名付けた長さ五十センチ、直径二十センチほどの土塊が、うねうねと芋虫ダンスのような動きを見せる。

いきなり足元に現れた謎の物体に、思わず飛び退くヴォーレイエ。集中が途切れた為に、炎の帯が四散する。その隙を逃さず、悠介は素早く新しい防壁データを呼び出すと足元に気を取られている彼女を囲むようにカスタマイズを実行、反映させた。

「な……っ」

足元から伸びる光が粒と舞い消えた瞬間、自分が檻の中に閉じ込められている事に唖然とするヴォーレイエ。

この新型防壁も一枚に使われる資材の量を減らす事で、同じ範囲内の地面を資材化しても通常の防壁より数枚多く出す事が出来る。檻のような格子状の防壁で囲んでヴォーレイエの動きを封じた悠介は、彼女と話をする前に無技の青年の介抱を優先する事にした。

「ま、まで！」

「待たない、つか急がないと手遅れになったら大変だ」

「は……？」

格子防壁の中から炎の帯を飛ばそうとしていたヴォーレイエは、うねうね土塊に脅かされた事と檻に囚われた事で冷静さを取り戻し、思い掛けない悠介の言葉に疑問の声をあげる。

仰向けで気を失っているオド青年に回復薬を景気よくダダバ浴びせると、小さい傷や腫れが徐々に消えて行く。ポカンとした表情でその様子を見ていたヴォーレイエは、自分がとんでもない勘違いをしていた事に気が付いた。

格子防壁の中で赤らめた顔を俯かせているヴォーレイエの傍に駆け寄ったウエルシャとリフヨナは、治癒活動を進める悠介の後ろ姿に警戒の視線を向けつつ、ヴォーレイエを助け出すべく防壁をナイフで削ってみたり、持ち上げようとしたりと手を尽くす。

が、格子防壁はビクともしなかった。実際は強力な攻撃系神技をぶつけるなり、重量のある鈍器などでぶっ叩くなりすれば結構あっさり崩れる土製防壁なのだが、二人はそこまで派手な神技や武器を持ち合わせていない。

「お嬢様、お嬢様の神技で何とかありませんか？」

「え、アタイの炎帯でかい？ で、でも……」

「あの人、閻神隊の隊長だよー、私たちの正体がバレたらまずいよー」

ヒソヒソと格子越しに話し合うヴォーレイエ達。そこへ、まだ傷だらけだが意識の戻ったオド青年が駆けつける。目を覚ました彼は、檻に囚われたような状態にあるヴォーレイエの姿を見つけると周囲の状況も目に入らず、自分の怪我也忘れて格子防壁に縋り付く。

「あああつ お嬢様あー！ なぜこんな事にいい！」

「お、オド……」

「オド君……」

「ある意味、似てるのかな？ あの二人」

一番冷静そうに見えた青髪の男性にそう声を掛ける悠介。闇神隊長に声を掛けられたウエルシャは、内心の動揺を抑えつつ苦笑を返す。まずはオドの治癒に礼を言い、お嬢様の暴走を詫びて早々にここから立ち去らねばならない。

「先程はうちのお嬢様が失礼しました、彼はお嬢様が大事にしている奴隷でして」

「隊長ー！」

「ユウスケさん！」

ヴォーレイエを格子防壁から出して貰うべく交渉を始めようとしたウエルシャは、街の通りからこちらに向かって来る黒い一団を見て、暗澹たる気分になるのだった。

『う、うまく誤魔化せるのだろうか……』

80話・三者会談？

「す、すまなかつたね……オドの事、恩に着るよ」
「いいよ、それだけ彼の事を心配したんだろうし」

格子防壁を土に戻してヴォーレイエを解放した悠介はオド青年の治癒をエイシャ達に任せると、ここで何があつたのか聴取に入った。オドの怪我は明らかに人の手によって負わされたモノだ。

盗賊の類か、或いは他人とのトラブルか、暴行を働いた者が街にいるなら対処しなくてはならない。

複数人の衛士による水技の治癒でみるみる傷が癒えていくオドの姿に安堵したのも束の間、悠介達が闇神隊である事を思い出したヴォーレイエは、青褪めながらウエルシャとリフヨナに視線を向ける。二人も似たような顔色をしており、この場をどうやって切り抜けるか思案している様子だった。

『とにかく、私たちの正体を知られないようにする事が第一です』
『でも、オド君はどうしてここまで来たのかな？』

ヒソヒソ声で言葉を交わす二人。確かに、怪我は盗賊の類にでも出くわしたモノだとして、何故こんな所までやって来たのかと、ヴォーレイエは疑問を懐く。

「そっぴやオド、アンタ何でここに？ 一人で来たのかい？」

「そ、そうだ！ フョートレス総務官とアイルザツ八財務官がおじよーさまを亡き者にしようと企んでて……っ それでオレ！」

自分の目的を思い出したオドは、総務官と財務官の密談、ヴォーレイエの命が狙われている事などを捲くし立てた。

その事を知らせる為に集落を出たオドは、途中追ってきた財務官の部下と戦闘になるもどうにか撃退。風技の移動補佐も水技の治療も持たない彼は、傷を負った身体に無理を押しして不眠不休の強行軍で港街を目指し、辿り着いた所で行き倒れたのだ。

その説明を聞いた悠介は首を傾げ、ヴォーレイエ達は二重の意味で硬直する。

「フョートレス総務官にアイルザツ八財務官……？ どっかで聞いたような」

「……例の組織、風の刃を取り纏めてるっていう敵軍幹部の名ですか」

ヴォーマルの補足に『ああ』と納得した悠介がポンと手を打つ。顔を見合わせる闇神隊メンバー達。そして

「あほー！」

「うわああんっ ごめんなさいー！」

オドはヴォーレイエに殴られた。グーで。付き人であり、友人でもあるウェルシャトリフヨナは『終わったな』と天を仰ぐのだった。

「で、結局どういう事よ？」

この場で詳しい事情を問い質す悠介に、観念したヴォーレイ工達は自分達の立場と今ここにいる理由、それにオドが知らせてくれた情報も合わせて正しく現状の再確認を行なう。

風の刃を設立した一族、名ばかりとはいえ組織の長的な立場にあるエルフォドラス家の現当主ヴォーレイ工。それを支える御三家であった三務官が、実質的に握っている組織の実権のみならず、指導者としての立場と名も得んが為に今回の騒動を仕組んだ。

「組織が掲げる理念として、トレントリエッタの覇権を握るという話は一応、設立当初からの目標にありましたか……」

「ほんとなら十年、二十年掛けて戦力を蓄えながら組織をおっきくしていく筈だったんだよねー」

調整魔獣という強力な魔獣兵を得た頃から、組織の雰囲気も好戦的に変わり始めたのだと、ウェルシャ達は語る。

ヴォーレイ工嬢は以前から組織の過激な行動、盗賊紛いの活動に批判的だったので、三務官は組織内から対立する要素を一掃する為に今回の決起に合わせて令嬢の暗殺を企んだのだらうと、ヴォーレイ工を庇護する意図も籠めながら再確認した現状を纏めた。

自分が本当に組織のお飾りでしかなかった事を強く認識させられたヴォーレイ工は、終始俯いたまま、黙って耳を傾けていた。

と、その時

「つまり、組織の長がその組織からはぶられた訳か」

街外れの一角に集まる黒い一団。闇神隊の醸し出す威圧感にも臆せず、しれっと悠介達の輪に割り込んで声を掛けて来る者がいた。

「シンハ!?」

「暫らくぶりだな、ユースケ」

悠介が月鏡湖を振り返ってからイフヨカに視線を向けると、イフヨカはふるふると首を振った。シンハの他に無技の戦士が近くにいる事を示す気配は感じられないという。

「また一人で来たのかよ……」

「ふっ」

『風の刃』の創設者であるとされるエルフヨドラス家当主が、フォンクランク領の港街に潜伏しているという情報を掴んだシンハは、ガゼツタに使者を送って来た真意を組織の長から直接確かめるべく、港街へ兵を向かわせていたらしい。

「対岸の半島に集結させてるのは、白刃騎兵团だったのか」

「そうだ。風の刃がフォンクランクにも仕掛けるつもりなのかと思っ
つてな」

組織の長が自ら敵情視察かと思いきや、ただの観光。しかも組織
内で殆ど発言力を持っていなかったとは、流石に読み違えたとシン
ハは自嘲する。

「じゃあガゼツタは風の刃と組んでる訳じゃないんだな？」

「ああ、特に関係した訳では無いが、街道の拠点に駐留する軍の目
的を聞かされていたのでな。俺たちなりに動いてみせたのさ」

尤も、風の刃がフォンクランクとトレントリエツタの対ガゼツタ
戦略を知らせに使者を送って来たのは、ガゼツタが軍を動かすであ

るう事を期待しての策であると、承知した上で動いて見せた事は認めるシン八。

「まあ、連中の部隊配置から見て、俺たちが動かずとも然程変わりはしなかっただろうがな」

このまま街外れで立ち話を続けるのもアレなので、場所を移す事にした悠介達は自警団の大型宿舎が並ぶ区画までぞろぞろ移動すると、闇神隊が借りている宿舎の広間にてテーブルで向かい合う。

あの場に居合わせて先程までの事情を知る調査団の衛士達は、いいのかなあと目の前の光景に戸惑いを隠せない様子。

「あれって確か、ガゼツタ国の王だよな？」

「赤毛の女は例の組織を作ったエルフョドラス家の当主だって言うてたぞ」

フォンクランクと同盟を組んでいるトレントリエッタを襲った風の刃が、宣戦布告の際に使った声明の人物、エルフョドラス家当主ヴォーレイエに、ガゼツタのシン八王を交えて、闇神隊長の悠介らがお茶など啜りながら話し合っている状況。

ひそひそと囁きあう衛士達と同じ戸惑いを、お供の二人と傷の癒えた奴隷の彼も感じていた。

「こちらの椅子にどうぞ」

「お気遣い感謝します」

「ありがとー」

「あ、どもっす」

奇妙な三者会談が行なわれている様子を広間の壁際で眺めていたウエルシャ達に、椅子を並べて勧めてくれる闇神隊の従者。

汚れや綻びの無い綺麗な従者服に、肌や髪の色艶も健康的な無技の従者である少女は、一目で大事にされている事が分かる。黒い隊服を纏った闇神隊員達はこの奇妙な三者会談にも平然とした表情を見せており、他の衛士達と比べて余裕が感じられた。単なる慣れだが。

「……闇神隊の、闇神隊長の器というモノを感じますね」

「うん……おつきいよねー」

もし、無技人を平等に扱ってくれる人物ではなかったら。もし、オドを助けてくれていなかったら。もし、ヴォーレイエの暴走を赦してくれていなかったら。このような席は設けられず、フォンクランク、ガゼッタ、トレントリエッタの情報も錯綜していたであろう。大国フォンクランクの最強部隊と謳われる闇神隊長の人となりを感じ、『英雄』の呼び名に納得する二人。

「彼なら、お嬢様を悪いようにはしないかもしれない」

「慈悲、掛けてくれるといいよね……」

少し安堵の気持ちを抱いたウエルシャは、先程から困ったような表情のヴォーレイエがおいででおいでと手招きしている姿に苦笑しつつ、彼女の補佐をする為に壁際の椅子から立ち上がるのだった。

会談の席ではヴォーレイエに呼ばれたウエルシャが、彼女の代わりに組織の構成や内部構造について説明し、魔獣兵の運用や幹部ク

ラスの人物に関する詳細な情報が明かされていった。

その中でも、三務官のうちベネフヨスト軍務官だけはヴォーレイ工を気に掛けていた事や、オドの証言内容から今回、組織が起こした行動についても詳細を知らされていなかったのではないかと見られ、投降を呼び掛ければ説得に応じる可能性が示される。

「組織の中で真つ当な軍人といえば彼女と直属の精鋭部隊だけです。個人の實力も然ることながら、用兵の腕もかなりのものです」

「風の刃軍は魔獣兵の他は殆ど傭兵で組まれてるんだったな」

大方の情報も集まり、悠介は闇神隊として本国やヒヴォデイルの援軍衛士団に送るべき情報と今はまだ知らせるべきではない情報とをヴォーマル達と相談しつつ選り分けてイフヨカに伝達の指示を出す。風の刃の活動と、推測できる全戦力の規模、旗頭の所在などなど。

「実質的にリーダーは総務官のフォートレス、と見ていいのかな？」

「ええ、恐らく彼自身は参謀的な役回りを装ってアイルザツ八財務官を指導者に見立てていると思われませんが」

組織の全てを取り仕切っているのはフォートレス総務官であろうとウエルシャは指摘した。

「うしっ 分かった。一応これで今日の会談は終了って事で、みんなお疲れさん」

会談終了を宣言し、宿舎の周りを固めていた衛士達に通常の巡回警備に戻って貰うよう指示を出した悠介は、ヴォーレイ工達を暫らく闇神隊が泊まる宿舎の部屋に匿う事を告げる。

「空き部屋あるよな？」

「二部屋ほど空いてやすぜ」

「じ、じゃあオレはおじよーさまと……」

「お嬢さまと私が同室するからー、オド君はウエルと一緒にの部屋ねー」

スンが彼等の案内役を務め、さあさあ行きましようとうとヴォーレイ工の背中を押しつつ階段に向かうリフヨナ達。闇神隊長ユースケの寛大な処置と待遇に頭を下げて謝意を表したウエルシャは、がっくり肩を落としていたオド青年を促しながら階段を上っていった。

現在、広間に残っているのは悠介と、ヴォーマル、イフヨカ、エイシャ、それにシンハという顔ぶれだ。

シャイードは湖の周辺に怪しい者が潜んでいないか、ヴォーレイ工を狙う刺客の警戒に当たっており、フォンケは例によって諜報活動に出かけている。というか、今さつき出掛けた。何となく間が空いたような沈黙を感じ、悠介はシンハに適当な話題を振ってみる。

「しかし、なんでまた態々王様が自ら出向いて来てるんだ？」

「ああ……実のところ、場合によっては確保した街道の拠点からそのままトレントリエッタを攻める事も想定していたのでな」

トレントリエッタ進攻も視野に入れていたなど軍事機密な事をさりりと口にするシンハ。実際その時の為にフォンクランクを牽制しておく意味もあったのだという。反応を窺うようなシンハのチラ見目線に『で？』と返す悠介。

あまり驚かれなかった事をつまらなそうにしながら、シンハは港街に闇神隊が向かっているという情報も聞きつけたので、下手に部

隊を送り込むよりもすっかり顔馴染みになっている自分が出向いた方が得策と判断した事を語った。

「いや、まあ……確かに、白刃騎兵团そのまま送り込まれるよりはマシだけど」

「気にするな、何時ものことだろう」

「そこはもう少し気にして欲しいんですがね」

まだ明確な敵対を示していないとはいえ、ガゼッタとフォンクランは国家の根幹を成す思想的背景から対立軸にある。あまり軽々しく国内に入り込まれるのも、変に噂などが立つ事を考えれば色々よろしくないと忠告するヴォーマル。

「ふっ ならば入り込まれぬよう、脇を締めておくことだ」

「それが出来りゃあ、苦労はしないんですがねえ……」

ただでさえ神技の波動が無いせいで存在を捉え難い無技の民。訓練された無技の戦士が気配を消しながら近付いて来るのを、どうやって察知すればいいのか。溜め息で頭を振るヴォーマルに、シンハは珍しく労うような口調で言葉を掛ける。

「……ある意味、神技を持つ者の弊害だろう」

神技人社会では誰もが当たり前前を持つ神技の波動。それは有るモノとして生活をし、生きてきた人間にとって、ある筈のモノが無い場合にどう対応すれば良いのか分からなかったり、対処法が発達していなかったりするのでも致し方ない。

特に、ここ数千年は神技人社会が世界の中心となっていたのだから。

「持つ者と持たざる者が……」

そろそろ部下達の所に戻るといふシン八を、監視と称して月鏡湖の棧橋まで見送りについて行く悠介。

「トレントリエッタはどうなるんだろっなあ」

「そういえば、首都が陥落したそうだな」

リンヴァールが陥落したという知らせがあつて以降、新しい情報も入って来ていない。海岸の街に駐留するヒヴォデル援軍衛士団の方では、現在も斥候を送りながらの様子見が続いている状態らしい。

「ガゼッタとしてはトレントリエッタの政府が変わろうと別に困りはないのだが、風の刃が覇道を目指しているとなれば話は別だ」

ガゼッタに牙を剥くつもりなら、完膚なきまでに叩き潰してやるさと笑うシン八。その様子を容易に想像出来てしまふ所に、笑うべきか悩むべきかと唸る悠介。そうこうしている内に、二人は月鏡湖を見渡せる棧橋までやって来た。

「婆さんが会いたがつていたぞ、偶には遊びに来ないか？ 親善大使でも構わんぞ」

「親善大使は無理だろう。それに俺はロリコンじゃな……いや、三千歳だから年上なのか……いやでもアレはなあ……」

『ロリコンってなんだ？』と首を傾げるシンハに、悠介は面倒なので『何でもない』と流した。意味を説明されていれば、シンハは祖父の事を思い出して厭な顔を見せていた所だろう。

「ああ、それと……調整魔獣の拡散には気をつける事だ」

シンハはそう言い残すと、舟に乗って向こう岸の半島へと帰っていった。ちなみに、船頭付き渡し舟は閻神隊名義で賃借したモノだ。

「泳いで渡ろうとするなよな……まったく」

小さくなって行く渡し舟を見送った悠介は一言呟くと、踵を返して来た道を戻る。

ヒヴォデイルの援軍衛士団から『クリフザツ八王を保護した』という緊急連絡が入ったのは、この日の夕食時の事であった。

81話・宿場街での出来事(前書き)

ちよつと妙な表現があります^^；

81話：宿場街での出来事

ヒヴォデイル援軍衛士団がリンヴァールから落ち延びてきたクリフザツ八王を保護した事により、現在ヴォルアンス宮殿で緊急対策会議が開かれている。その間、闇神隊は何時でもトレントリエツタ領に向けて発てるよう準備を進めていた。

夕食後の会議ではヴォーレイ工達の身柄について今後の扱いをどうするか話し合われた。

彼女達の事情や組織との関係も分かっている以上、単なる捕虜として扱うよりも、組織内にいるヴォーレイ工派を味方に引き込む形で揺さぶりを掛けるような利用法が検討される。

風の刃は傭兵がいなければ魔獣頼みの少数勢力なので、ヴォーレイ工が三務官の行動をエルフォドラス家に対する不義と見做し、組織構成員に投降を呼びかける事で風の刃内部に動揺を誘う事が出来れば、それなりの影響を期待できる。

「っていう案が出てるけど、どうする？」

「どうするも何も……アタイ達に選択の余地なんかはないよ。アンタの決めた事に従うさ」

「そっか」

その後、闇神隊からの提案をエスヴォブス王が許可。先日、国境

にて風の刃軍本隊との戦闘で壊走した部隊の生き残りも、リーンヴァールから共に脱出してきた兵とを合わせて軍の再編成を行なっているクリフザツ八王もこれを承諾した事で、エルフヨドラス家当主の参戦は非公式ながら闇神隊の作戦行動として認められた。

ヴォーレイエ達には一族代表の贖罪として、クリフザツ八王の首都奪回に協力するという立場を与える方針で決まった。

翌日、ヒヴォディル援軍衛士団がトレントリエッタ解放軍と共に海岸線の街道をリーンヴァールに向けて進軍開始。

闇神隊以下、調査団も国境に近い宿場街を経由してリーンヴァールに街道を繋ぐ中継地点の村を目指し、ヒヴォディル援軍衛士団とトレントリエッタ解放軍を支援する。

ヴォーマルとウエルシヤの読みでは、デリアルディアから迎撃の部隊が出るかもしれないという事だった。

「デリアルディアの部隊は二個大隊で傭兵の数は凡そ四百八十、魔獣兵は揃っていれば十二という所でしょう」

「てことは、首都にいる傭兵は千ちよいつてところ……援軍衛士団と解放軍合わせても、四分の一に届くか届かないかだな」

「傭兵は全て戦闘員として戦える所が脅威ですが、流石にそれだけの数を今後も維持して行くのは無理だと思われやすがね」

「フオートレス総務官は、恐らく首都に残った予備役や軍属を取り込む心算でいると思われます」

もし風の刃軍が彼等を取り込む事に成功すれば、推定で二千人近い兵力を補充できる、が

「まあ、国民性が昔と変わっていないければ、誰も呼びかけに応じないでしょうけどね」

「ああ……なんか分かる気がする」

頻繁に国王が変わる理由や玉座の引き継がれ方を聞くと、革命やら反乱やらの闘争とは無縁な人々である事がよく分かる。援軍衛士団、トレントリエッタ解放軍との連係など今後の大まかな戦略を練りつつ、闇神隊と調査団一行は国境近くにある宿場街に到着した。

リンヴァールの王宮に設けられた風の刃総司令部にて、各方面から届く情報の分析を進めるフォートレス総務官。そこへ、傭兵達の給金支払いと首都防衛に向けて契約更新を済ませたアイルザツハ財務官がどかどかと足音を響かせながらやってきた。

「まったく 予定外の出費だ！ このままの数で傭兵共を雇い続ければ、来暦まで資金がもたんぞ！」

首都に残るトレントリエッタ軍の取り込みが上手く行かず、軍資金の消耗に頭を痛める財務官はそう言って悪態を吐く。

クリフザツハ王が健在である事と、海岸線からフォンクランクの援軍部隊が国境付近まで出張ってきている事に加え、どうやら闇神隊が動いているという情報が抑止力となっっているらしく、官僚達でさえ積極的に三務官側へ付こうとする者は殆どいない。

新たな時代に精強トレントリエッタ帝国としての躍進をと、鼓舞する演説もあまり手応えはなし。現在は様子見状態のようだ。トレ

ントリエッタ民の日和見気質に怒りを顕わにする財務官。

「逆に言えば、闇神隊を叩いて我々の力を誇示する事で、国民も我々側に付くと考えられます」

「……出来るのか？ 実験中だったとはいえ、調整魔獣を初見で返り討ちするような奴等だぞ」

「出来なければ我々は敗北しますよ。勿論、勝算はあります」

フォンクランクの力を借りて首都が奪回されれば、トレントリエッタはフォンクランクの軍門に降る事となり、フォンクランクの厳正な規律によって支配され、今までのような自由は制限されると噂を流す。

対ガゼツタで結ばれた軍事同盟も、クリフザツ八王がトレントリエッタの統治をマル投げする為の口実で、遠からず国の主権は売り渡されていた。風の刃はそれを阻止する為に今回強引な決起を行なったのだ、としてフォンクランクとの対立姿勢を示す。

「その上でフォンクランクの援軍とクリフザツ八王の解放軍を防ぎつつ、闇神隊を叩き潰してみせれば、国民は必ず立ちます」

幸い、闇神隊はガゼツタ軍の上陸を牽制する為に港街へ急行した際の少数部隊しか連れておらず、海岸線から下りてくる援軍とリーンヴァールで合流しようとしている事が分かっている。

「首都（トレントリエッタ）の防衛は魔獣兵と傭兵で持たせる事ができます」

魔獣施設から流出した魔笛もそう多くはない筈。正確な使い方が分からずとも吹けば調整魔獣の動きを阻害する事の出来る魔笛だが、現在リーンヴァールにいる魔獣兵は五十体。五つ六つ程度の魔笛で

は焼け石に水だ。

「軍務官殿には首都の一個大隊と組織の精鋭を預け、デリアルディアの駐留部隊も使つて闇神隊迎撃の指揮を執つて貰います」

「ふむ、デリアルディアの部隊も使うのか。フォンクランクの最強部隊とはいえ百にも満たない相手に精鋭を加えた約三個大隊……」

これならやれるか？ と、アイルザツハは部隊編成を思案する。確認出来ている闇神隊の戦力は精々七十前後、こちらの部隊も先の戦闘で消耗しているとはいえ、三個大隊に精鋭を加えれば九百三十は下らない。これなら魔獣兵が少なくても勝てる。

「よし、では一先ずこちらから分隊を出して闇神隊の足止めをしよう」

その間にデリアルディアの二個大隊とリンヴァールから軍務官の一個大隊に精鋭を加えた迎撃部隊を出して合流させ、然る後、分隊が足止めしている闇神隊に総攻撃を仕掛ける。

分隊の役割は馬車の高速走行を邪魔すれば良いので、魔獣兵部隊を使えば風技の移動補佐を阻害して効率よく足止めができる筈だ。

「闇神隊は明日にもリンヴァールと街道を繋ぐ村に入るでしょう。恐らく、その村との中間付近が戦場となります」

「かなり際どいタイミングだな、とにかくデリアルディアの部隊を急ぎこちらに向かわせて、軍務官に出撃要請だ！」

アイルザツハは来た時と同様にどかどかと足音を響かせながら総司令部を出て行くこととしたが、フォートレスがそれを呼び止める。

「ひとつ気になる事が……、レイエお嬢様に放った刺客が戻りませ

ん」
「うん？　そういうば、無技の小僧を追わせた部下からも報告が来ておらん」

すっかり忘れておったわと大笑いするアイルザツハに、フォートレスは表情を変えず『もしヴォーレイ嬢が生きていた場合』の弊害を挙げて追っ手と刺客について確認をとった方が良いと促す。

「構成員の中にはまだ、お嬢様を組織の頭と考えている者もいます。特に、軍務官殿の耳に余計な情報が入るのは……」

「むっ　確かにそれは不味い！　直ぐに手配させる」

総務官の指摘に表情を変えたアイルザツハはそう言うと、今度こそ総司令部の部屋を出て行った。

以前、魔獣被害の調査という名目で訪れた通商協会の支部がある国境近くの宿場街にて、闇神隊と調査団は明日からの強行軍に備えて英気を養っていた。

予定では明日の朝早く宿場街を出発、中継地点の村で早めの昼食をとりつつ、ヒヴォディル援軍衛士団と連絡を取り合いながら足並みを揃えて街道を進み、リーンヴァールに攻め入る事になっている。

「援軍衛士団が解放軍を中心にまず先攻し、側面からあつしらの部隊が突入する手筈になってやすね」

「突入つってもこっちの戦力って、攻撃に参加できる人は四十人く

「らいか？」

「ええ、ですから殆どは隊長を護る為に周りを固めるのが仕事になりやす」

「それって」

最初から悠介の力が中心になる事を前提にした作戦だとヴォーマルはぶつちやける。調整魔獣の脅威は魔笛の量産で払拭されているので、後は数の問題であった。

魔獣施設関連で一時期かなりの数の傭兵がデリアルディア周辺に集中しており、風の刃はその時に片っ端から雇いこんでいたらしい。フォンクランク国内から傭兵を集める手立ても考えられたが、資金が掛かる事も然ることながら、そもそも傭兵にとっては殆ど仕事の無いフォンクランク国内には、元からあまり数も揃っていないのだ。

「うーん……パウラの時みたいに資材がありやあ何とかなるだろうけど、攻めるのは難しそうだなあ」

「まあ、あつしらの役割は敵の注意を引き付けて本隊を支援する事ですから、防衛と攪乱は隊長の得意分野でやしよ？」

ヴォーマルは『頼りにしてやすぜ』と悠介の肩に手を置いて笑った。

『頼りにしてる、か……』

「……ユウスケさん？」

夜、閑散とした宿場街の広場にて、少し多めの雲が流れる夜空を見上げていた悠介はスンに声を掛けられて振り返る。

「ん？ どうしたスン、眠れないのか？」

「いえ、ユウスケさんを見掛けたので……少しお話しませんか？」

人気の無い宿場街の通りを、悠介はスンと並んでぶらぶらと歩く。ここ暫らくバタバタしていた為に、ゆっくり話す時間もとれなかったので、決戦になるかも知れないという明日を控えた今夜くらいは、二人で語り合つて過ごすのも悪くない。

適当な場所まで歩いて来た所で徐にカスタマイズ実行。お洒落な網目デザインのベンチを出して二人で腰掛ける。

「なにか、悩み事ですか？」

「そう見える？」

「はい」

「そっか」

短いやり取り。他愛無い会話の中に垣間見える、互いに向け合った信頼感。吹き抜ける冷たい夜風が二人の距離をほんの少し近寄らせるなら、スンは思い切つて大胆な選択肢を選んで行く。

「わたしには隠さず話してください。わたしも、ユウスケさんには、全部……教えますから」

『全部』のところであつたと赤くなつた辺りに、何を思い出しているのか理解した悠介も赤くなつたり落ち込んだり。そうして気持ちを解された悠介は最近よく思っている事、自分の立場についてポツポツと語り出す。

本来であれば宮殿で適当にヴォレットの相手をしながら自分探しのよつな見識を深める日々を送る筈だったが、何時の間にかやら英雄と呼ばれて戦場に立ち、軍人として部下に期待されるなど、平穩とは言いがたい環境に身を置いている。

「前にさ、シャイードに言われたんだ」

何かを成し得る能力を持ちながらソレを使わないのは『使わない』という行動を選ぶ相応の理由があるならば、それは義務を果たしていると言えるが、ただ使つて気が無いというだけであれば、それは義務と責任を放棄した怠惰な選択だ、と。

自分がこの世界に召喚されてから世界が大きく動いている事は、様々な事象から実感出来る。自分が来る前は、世界の何処かで色々な陰謀が蠢いていたとしても、それはまだ表面に噴出する事無く影に潜んでいた筈だ。潜んだまま消えていたモノもあるかもしれない。邪神の性質なのか、何もせずとも周囲で事件が起きて巻き込まれるし、自分からそれに関われば更に大きな事件に繋がる。

「ヴォーマルから作戦内容を聞いた時に実感したんだ、自分には覚悟が足りていないって」

「覚悟？」

起きた事には対処するし、車作りや苔の栽培、薬の研究など、身の回りの範囲では積極的に活動しているつもりだったが、『世界』

に対しては消極的だ。あくまでも狭い範囲にしか視野を向けていない。

無技人を保護する条例の策でさえ、元々はイフヨカの身の上話から始まったモノで、この世界の常識に挑んだ訳ではない。ヴォレットが話に乗ってくれなければ、何も起こせなかっただろう。

「結局さ、偶々そうなったってだけなんだよ」

ブルガーデンではただ砦や壁を作っただけだ。色々工夫は凝らしたが、与えられた任務の範疇を超えるモノはひとつも無い。ノスセントスでは何もせず逃げただけ。襲ってきた相手に対処しただけで、シン八達の侵攻を積極的に防ごうとはしなかった。

魔獣施設の封鎖も、自分から動いた訳ではない。そうして振り返ると、自分はただ流されているだけなんだという事に気付いた。

『共に世界を知り見識を深めて行こうじゃないか』などとヴォレットに言ってみせた割には、世界を知ろうとしていない、関わろうとしていない。今回の戦いでも、自分の力を中心にした作戦として掛けられている期待には答えるつもりもある。

だが、それは求められた役割を演じるに過ぎない。勿論、 magari なりにも国に仕える身分である以上は、勝手な行動は慎むのが当たり前だとは思うものの、このままフォンクランクの英雄として流された生き方をしていて良いのかなと、ふと思うのだ。

「なんだかんだ言ってもさ、自分で何か起こすのが怖いんだよ…俺は」

ここまで胸の内を打ち明け、溜め息と共に再び空を見上げた悠介を、スンはそっと抱き締めた。ふわりとした感触に包まれ、悠介は独白で熱くなっていた思考を落ち着かせる。

「スン？」

「ユウスケさんは、ちゃんと頑張ってますよ」

「そうかな」

「そうです。それに、無理に何かしなくてもいいんだと思います」

悠介の胸に顔を埋めながら、スンは言葉を続ける。

「邪神だからとかは関係ないです。ユウスケさんはユウスケさんとして、思うように生きればいいんですよ」

「そっか、はは……ちよつと気負い過ぎてたかな」

悠介は『自然に在ればいい』という、何時か自分がレーザーザッシアに言った言葉を思い出し

「……また、そうやって無理に笑ってみせるんですね」

何時かレーザーザッシアからも言われた言葉を思い出して、ぎくりと身体を硬直させた。意識して求められる自分像を演じる、それは自分が自分として在る事とは、やはり違うのだ。

「……」

「難しい、ですよ。ユウスケさんが、ユウスケさんらしく生きるって言うても」

スンは少し身体を離すと、頬を赤らめながら落としていた視線を上げ、悠介の瞳を見つめてそっと手を伸ばす。スンの細い指が悠介の頬を包み込むように捉えた。

「えーと、あの？」

「ユウスケさん、自分で言ってますけど、本当に積極的じゃないですし……だから」

ゆっくりと顔を近づけてくるスン。その唇に目が釘付けとなり、悠介は鼓動が激しくなっていくのを感じた。それは自分の鼓動なのか、カスタマイズ能力に捉えたスンの鼓動なのか。互いの鼻が触れ合う所まで顔を寄せた所で、スンはそっと目を閉じる。

しつとりと熱の籠った息遣いを、互いの唇に受ける距離で止まってきたま、スンは動かない。悠介も動けない。頬に感じる熱い指先の鼓動が、自身の鼓動と共鳴する。スンの閉じられた目に薄っすらと浮かんだ涙が一粒零れ落ち、それが悠介の背中を押した。

白い従者服の背中に回された黒い隊服の腕が、その小柄な身体を抱き上げるように引き寄せる。それは闇が光を覆うかのよう。

「ん……」

これは一時的な逃避かもしれない。

『だけど、今はそれでも……』

悠介は暫しの間、スンの柔らかな体温と、優しい香りと、甘い唇の慰めを受ける事にした。

82話・目覚めるは闇か光か【前編】

翌日、予定通り早朝に宿場街を出発した闇神隊と調査団一行は、まだ朝と呼べる時間内に中継地点の村まで移動を済ませていた。

午後からの戦いに備えて水の補給や早い昼食をとっている所へ、ヒヴォデイルの援軍衛士団から首都を出た少数の部隊がそちらに向かっているとの内容で連絡が入る。

デリアルディアの部隊が街道を上がって来ている事も確認されているので、恐らくリーンヴァール防衛に呼び寄せたデリアルディアの部隊がスムーズに移動出来るよう、牽制の部隊を差し向けて来たのだろうとヴォーマル達は分析した。

「俺らが斥候に出ましようか？」

「そつだな、他に伏兵がいなくても限らないし」

移動補佐と伝達系で固めたフォンケの衛士隊は、斥候部隊としての有用性が非常に高くなっている。悠介は移動用小型動力車を組上げると、フォンケの部隊に街道の先を探って来て貰う事にした。待っていましたと、部下を後ろに乗せて二輪車に跨るフォンケ。

「それじゃあ、一つ走り行って来ますぜ！」

「無理するなよー？」

リンヴァールの街並みを風の刃が設置した無粋な防壁越しに見渡せる北門前に、海岸線沿いの街道を下ってきたヒヴォデル率いる援軍衛士団と、クリフザツ八王が自ら指揮するトレントリエッタ解放軍が隊列を組んで部隊を展開している。

防壁の向こう側では傭兵部隊が忙しく動いている様子が窺える。まだ迎撃態勢が整っていないのなら、今の内に一当てやって手応えを確かめておこうかと考えるヒヴォデル。

援軍衛士団の各部隊を指揮するのは、宮殿衛士隊からそれぞれ抜擢された今回が初陣になる者達ばかりなのだ。いきなり本格的な戦闘に入る前に、小競り合いで場慣れさせておく必要がある。

ジリジリと部隊を前進させて神技の射程範囲まで寄せて行く援軍衛士団。その動きを見た風の刃軍も防壁の向こう側に弓を持った傭兵の姿が見られ始めた。風の刃軍は魔獣兵の神技障害を常套にしているので、遠距離攻撃は主に弓などの武器を使う。

そこへ、解放軍の斥候からリンヴァールの西街道に出撃している部隊を確認したとの知らせが入った。デリアルディアから上がった部隊とも合流し、三個大隊規模で移動しているという報告。

「我々の背後か側面を突く作戦でしょうか？」

「いや、西の街道からはユースケ達が迫っている筈だ……もしかしたら、闇神隊が狙いなのか？」

ヒヴォデルは街道を移動中であろう闇神隊に警戒を促す連絡を

入れようとするも、昼前までは届いていた伝達の風が届かないと聞いてそれを確信した。一つ森を挟んだ街道に伝達が届かないという事は、森の中から付近に伝達妨害がなされていると推測する。

「多分、朝方出て行った少数部隊の仕業かもしれないな」

伝達係りと移動補佐の数人で分隊を組ませ、急ぎ海岸の街まで移動しながら闇神隊に呼び掛けるよう指示を出したヒヴォデイルは、現在リーンヴァールに残っているであろう風の刃の戦力を分析してどう攻めるべきかを考える。

「首都に残っている部隊は二個大隊規模の傭兵か、僕らの凡そ二倍の数に相当するな」

だが勝算はある。少なくとも四倍の兵力とやり合うよりはマシになった。緊張している同輩の宮殿衛士指揮官達に自分の戦場体験談を聞かせて鼓舞したヒヴォデイルは、解放軍と連係しつつリーンヴァール奪回に向けての攻撃を開始した。

闇神隊が中継地点の村を出発して程なく、先行していたフォンケの斥候部隊が神技阻害の波動を感じて引き返してきた。魔獣兵が街道の途中に潜んでいるようだという報告を受けた悠介は、とりあえず闇神隊メンバー全員と調査団の半数に魔笛を持たせる。

「ゆ、ユースケ殿……それは本物の魔笛ですか？」

「ん？ ああ、一応複製品なんだけど、ちゃんと本物と同じ波長が出てるって風技でも確かめてあるよ」

「複製……」

対魔獣兵に備えて、イザとなつたら自分達が持っている魔笛を差し出そうと考えていたウエルシャは、内部の形状が複雑な魔笛を僅かな期間でこれほど大量に複製されていた事に驚いた。

フォンクランクには相当に腕の良い土技職人が大勢揃っているようだ、大国の底力に感嘆する。実際は悠介が個人で複製したのだが、まだ悠介の力の全容を知らない彼等には想像もつかない話であった。

リンヴァール北門防壁前

「おいっ どういう事だ！ 奴等ずっと神技を使い捲ってるじゃないか！」

「さつきから魔獣の動きがおかしいぞ！ ちゃんと仕事しろってんだっ」

「向こうの連中がこっちより多く魔笛を使ってるんだよ！ 奴等の魔笛を射落としてくれっ」

「出来るかっ そんな器用な真似！」

防壁前の攻防には闇神隊の足止めに放った数体を除く全ての魔獣

兵が投入されているのだが、ヒヴオデイルを始め援軍衛士隊の指揮官は全員が魔笛を所持している。絶え間なく笛を吹き続ける事で魔獣兵の指揮を狂わせ、無力化に成功していた。

風の刃軍はここまで魔獣兵の神技阻害に頼ってきた戦術が裏目に出た。神技の撃ち合いになればフォンクランク衛士団の火力は高く、武器を使う強化系の多い傭兵達は遠距離からの神技攻撃で防戦一方に。

神技阻害で接近戦に持ち込み、数にモノをいわせた波状攻撃という突撃戦法を封じられた傭兵部隊は狙い撃ちされ放題になっている。たちまちトレントリエッタ解放軍の本隊に門前防壁まで押し込まれてしまう風の刃軍。

「ええい、貴様等とにかく門を死守しろ！ 絶対に奴等を入れるんじゃないぞ！」

「財務官殿、何処へ？」
「フォートレスの所だっ 直ぐ戻る！」

魔獣兵を無力化されるという予想外の事態に驚き、防衛に徹するよう指示を出したアイルザツハ財務官は、闇神隊の迎撃に向かわせた部隊の一部を呼び戻せないかとフォートレス総務官のもとを訪れる。

「少々不味い展開ですね」
「少々所じゃないぞ！ 奴等一体どうやって魔笛を……」

「魔獣兵の無力化も痛い所ですが、先程入った情報ではレイエお嬢様が闇神隊と行動を共にしているそうです」

「はあ！？ なんだそれは、訳が分からん！」

組織の詳しい内部情報が渡っている可能性は高く、こちらの戦力に後が無い事も知られている事が懸念される。

ともかく首都を奪回されては話にならないとして、フョートレスは西街道を移動中の三個大隊から半数の兵を戻すよう伝達を飛ばす。攪乱された魔獣兵は図体からして邪魔になってしまつので一旦下げ、まだ上回っている数の有利でどうかしようという事になった。

「闇神隊の足止めは成功していますので、後は軍務官殿に任せましよう。首都の防衛に徹し、呼び戻した部隊の到着を待つて下さい」

「よし、分かった！」

西街道に行く闇神隊と調査団一行は、フヨンケ達が神技阻害の波動を感じた付近で馬車の速度が落ち始めた。

担当衛士達から移動補佐の風技が乱れるとの訴えが上がり、この近くに魔獣兵が潜んでいるらしい事を確認する。戦える者は降車して馬車の周囲を固めつつ、襲撃に備える闇神隊と調査団。

しかし、一向に襲ってくる気配が無い事から『敵は我々の足止めをしているのではないか』という推測がなされる。

「あつしらが参戦に遅れば遅れるほど、風の刃軍に準備を整える時間を与えちまいやすな」

「じゃあ、ここは強行突破しなくても速度が出ないんじゃない意味無いな」

通常速度の馬車には森の中を行く魔獣の足でも十分に追いつける筈なので、このまま妨害を受け続けるとリンヴァールに到着するまでに半日以上は掛かってしまう。周囲に潜む魔獣兵を討伐して神技阻害の波動をどうにかしなくてはならない。

「全員で笛を吹いて阻害の波動が薄れたら、イフヨカの索敵で位置を確認して、討伐隊を向かわせる。で、いいかな？」

「妥当ですな。あつしとシャイードの部隊にフォンケとエイシャの所から何人が組み込んで討伐に回ろうと思いやす」

悠介直属の衛士隊は馬車の周囲に配置してイフヨカの部隊とヴォーレイ工達や車両の警護にまわす方針で決まった。速やかに部隊の編成が行なわれ、それぞれが配置に就いた事を確認すると、街道周辺の森に向かつて一斉に魔笛が吹かれる。

森に潜んで神技阻害を行っていた魔獣兵は、魔笛から放たれる波長に乗った意味不明の命令に反応して一瞬混乱状態に陥った。

「……街道左側、前方に二体、側面に三体、内一体は更に奥……風技の波動が二、街道右側、側面に一体、歩行速度で移動中」

索敵に集中するイフヨカは阻害の波動が乱れた瞬間に周囲の情報を索敵の風で拾い集め、正確な敵の位置情報を告げる。風技の波動が二つ見つかったのは、恐らく魔獣兵を操っている魔獣使いのモノだろう。

ウエルシャによると魔獣部隊の編成は魔獣兵二体に魔獣使い一人となっているので、もう一人近くに潜んでいるかもしれない。

「左側の森からだ！」

「了解！ あつしらは側面を行きやすぜ」

「頼む、シャイードは前方のを」

「了解した」

魔笛を吹きながら森へと突入するヴォーマル部隊とシャイード部隊。悠介はスンと並んで右側の森にいるらしい一体を警戒する。ヴォーレイ工達も協力を申し出てくれた。少し不安定なようだが、螺旋の炎を腕に纏わせている。

魔獣を制御しようとする魔獣使いの笛と、それらを上回る数の笛から放たれる波長によって混乱する魔獣は、耳の裏をガリガリ掻いたり、頭を地面に擦り付けたりして意味不明の命令内容が重なる波長にストレスを溜め込む。

まともに戦えば一体でも非常に厄介な魔獣だが、完全に動きを封じた状態なら普通の猛獣と大差ない。

「そこっ！」

「いつけえ！」

スンが放った矢を追うように炎の帯が木々の隙間へと消えて行く。奥の方で魔獣の悲鳴が響き、周囲を微かに覆っていた阻害の波動が完全に消えた。『森に火い付けるなよ？』などと心配する悠介に『火力の調整くらい出来る』と軽口を返すヴォーレイ工。

周囲に潜んでいた魔獣兵は程なく討伐され、生き残りの魔獣使いは森の奥へと逃走した。恐らくリーンヴァールに撤退したのだろう。

「上手く行きやしたね」

「だな、直ぐに出発の準備を」

「隊長！ 援軍衛士団から、緊急連絡が……っ」

阻害の波動が消えて伝達妨害が解除された事で、海岸の街方面に

移動しつつ伝達妨害の隙間を探りながら闇神隊と連絡を取ろうとしていたヒヴォディル援軍衛士団の伝達分隊から警戒を促す情報もたらされた。三個大隊規模の部隊が西街道に向かっているという。

「三個大隊……」

「て事は、九百近くかよつ　流石にやべーんじゃねーすか？」

「風の刃軍は五個大隊と聞いている。リンヴァールに残った戦力は二個大隊、援軍衛士団と解放軍の凡そ二倍程度か」

「こりゃあ、先にこつちを潰そうって魂胆ですな」

これで先程撃退した魔獣部隊が、足止めに特化した少数編成だった事にも合点がいったと納得するヴォーマル。

しかし、状況はかなり厳しくなった。戦うのは無謀。さりとて、このまま闇神隊が撤退すれば、今こちらに向かっている部隊はリンヴァールに取って返して援軍衛士団と解放軍の攻撃に向かうだろう。

背後を急襲される危険のあるヒヴォディル達も、退路を断たれる前に撤退を余儀なくされる。

サンクアディエツトから急遽増援が出されても、到着するまでに三日は掛かるのだ。闇神隊に残された選択は、敗北必至覚悟で撤退か、敵部隊の最低でも半数を引きつけたまま三日間持ち堪えるか。

三日間持ち堪えようと思ったら、敵部隊の半数を引き付けるといふ条件がある以上、砦に立て籠もるといふ選択肢は無くなり、十倍以上の敵を相手に常時攻勢に出るなどして不眠不休の戦闘を続けなくてはならない。が、そんな事は実質不可能だ。

最早撤退以外の道は残されていない。闇神隊の撤退は援軍衛士団

と解放軍の敗退に繋がり、それは風の刃に対するトレントリエッタとフォンクランクの敗北を意味する。

『どうする？』

流石にこれ程の事態になると、ヴォーマル達も迂闊に意見を口に
する事は出来ない。この部隊で一番偉い立場にある悠介が、責任を
持つて判断しなくてはならないのだ。黙り込んで考える悠介を、静
かに見守る闇神隊メンバー達。

決断を迫られる悠介を励ますように、そつと手を握るスン。

悠介は考える。戦略や戦術の指揮なんてシミュレーションゲーム
でしかやった事が無い。敵も数が多すぎると、虎の子のカスタマイ
ズ能力も資材が無いのでは足止めも捕縛も出来ない。パウラの時の
ようにはいかない。

パウラの長城のような大量の資材

俯いていた悠介は、足元の土で何か動くのを見つけた。ブーツ
で掘り返されたのか、石ころのような土の塊が幾つか転がっている。
その隙間を、糸ミミズのような環形動物がうねうねと這って行く姿。

「っ！」

それを見た瞬間、ハツとなる悠介。カスタマイズメニューを開い
てその場で操作、少し移動してまた操作。

闇神隊長が神技を使う際に見せる独特の儀式を始めた事で、突然
の行動を訝しむ衛士達。彼等の戸惑いを余所に、悠介は何かを確信
したように力強く拳を握って高揚した笑みを浮かべる。一瞬、周囲

のざわめきが消えた。

悠介はその勢いのままスンを一度ギュッと抱き寄せて赤面させたりしながら、闇神隊メンバーを振り返って自らの決断を告げる。

「これならイケる」

一定範囲の地面をカスタマイズして資材にする。ここまでは何時もと変わらない。資材化した一定範囲の地面から、離れた場所と同じく地面を資材化。その間を棒状にカスタマイズして延ばした資材化地面の一部で互いに接続し、グループアイテム化する事に成功した。

今まではA地点の地面と、離れた場所にあるB地点の地面を其々カスタマイズして資材化すると、それらは個別に資材A資材Bとして扱われていた為、宿舎やプチ砦などを造る時は一定範囲毎に資材化したモノを継ぎ足していく方法を取っていた。

土台は資材AからC、外壁は資材DからF、内壁は資材GからI、といった具合にだ。

今回思いついたのは、資材化したAからCを予め一個のグループアイテムとして纏めてしまう事で、一度に広範囲に渡ってカスタマイズの反映が出来るようにする事。最初に手間は掛かるが、一度グループアイテム化してしまえば後は楽だ。

宿舎やプチ砦を地面から造る際、建てる時は資材の追加や継ぎ足しである程度の時間が掛かるものの、解体する時はほぼ一瞬で済むのは、建物にした時点で一個のアイテムとして扱われていたからだ。今まで資材を予めグループアイテム化してから使うなどという面倒な事を態々する必要が無かったので、この方法は盲点だった。

撤退せず迎え撃つ事を宣言した悠介は、非戦闘員と護衛の衛士を馬車と共に後方に下げて作戦の準備に入った。ヴォーマル、シャイード、ウエルシャを呼び集めて細かい部分の修正などで意見を求める。

調査団の衛士達は闇神隊長ユースケを信じて自分達の仕事に取り掛かった。

「なるほど……それはまた、大胆な作戦を考えやしたね」

「だが、隊長の力でなら可能だと思う」

「私は部外者なので、ユースケ殿のお力がどれ程のモノなのかは存じませんが、作戦に必要な情報なら何なりとどうぞ」

「じゃあまず」

街道の幅は通常の馬車が擦れ違える程度の広さなので、武装した兵士を横一列に並べた場合、五人もいればギユウギユウ詰めになる。部隊として配置するだけなら森にはみ出しても一向に問題はないが、九百人もの兵を輸送するとなるとそう簡単にはいかない。

この付近の森は地形が平坦とは言い難く、切り開かれた街道しか馬車を走らせられないので、一度に運べる人数も限られる筈だ。そういった事情から敵側は一定の場所に兵を集めて、そこから徒歩で移動してくると思われる。

敵が部隊を集結させるであろう付近を割り出し、遭遇地点を予測する事から始める。あまり時間は残されていない。

そうして作戦の準備が進められていく中、朗報とは言い難くも少しは状況の好転に繋がるかという知らせが入る。こちらに向かっていた三個大隊のうち、約半数がリーンヴァールに引き返していったという解放軍斥候からの情報。

イフヨカが拾った情報によると、リンヴァール北門での攻防で数に劣る援軍衛士団、解放軍が風の刃軍を押ししているそうだ。やはり魔獣兵の無力化が効いているらしい。

「魔獣兵に頼り過ぎた結果でしょう」

ウエルシャが神妙に呟いた。

「よし、これで大体の遭遇地点も分かった。行くぞ、フヨンケ」
「はいよっ 待ってました！」

フヨンケの運転する移動用小型二輪動力車に跨り、悠介は街道の先へと大仕掛けの仕込みに走り出す。その間、ヴォーマル達には作戦行動に向けて部隊の予行演習を任せる。上手くいけば完全勝利、失敗してもそう酷い事にはならないだろう。

『さあ、ここが俺の力^{チート}の見せ所だ』

83話・目覚めるは闇か光か【中編】(前書き)

ちよつと短めです。

83話・目覚めるは闇か光か【中編】

予測遭遇地点の近くまで移動した悠介はそこから街道の資材化作業を開始した。地面から染み出すように光の粒が舞い上がっては消えるという光景が繰り返される。道幅一杯まで約六百メートルに渡って資材化された区間を丸ごと罨として使うのだ。

戦闘区域となる広範囲資材化地帯から数百メートル離れた後方にも同じ規模の広範囲資材化地帯を作り上げる。双方の広範囲資材化地帯を繋ぐ為に、小規模な資材化地帯を中継地点として間に並べながらの作業。

そうして出来上がったのは、両端に六百メートルずつの広範囲資材化地帯を持つ全長二千メートルにも及ぶ資材化街道だった。

「よし、どうにか間に合った。後は作戦通り頼むよ」

「了解！ これより配置に就きやす」

東側の広範囲資材化地帯の始まりと終わり付近に目印の柱を立てて、そこに陽動の部隊を移動させる。主に遠距離攻撃の神技を使う者と移動補佐に伝達係りで編成された小隊二十四名。

適度に遠距離攻撃で牽制しつつ、移動補佐でさっさと逃げられる部隊編成だ。指揮はヴォーマルに任せられた。

ヴォーマルの囷部隊を資材化街道の入り口となる東側広範囲資材

化地帯の始まり部分に布陣させ、悠介はその終わり付近に立つ。そこから八百メートルほど西側に入った辺りに残りの衛士達が待機する。これで、全ての準備が整った。

西側広範囲資材化地帯、中継地点、闇神隊調査団本隊、中継地点、悠介、東側広範囲資材化地帯、囃部隊、という配置である。

森の中から、悠介達の様子を窺っている影が呟く。

「どつやら、戦うつもりのようなねえ」

十五人編成の傭兵部隊が間隔を開けつつ街道をぞろぞろと移動する。二十個小隊、約四百人の傭兵部隊と共に、ベネフォスト軍務官の直属精鋭八十人が列を成す。先程から索敵の風がこちらに向けられており、攻撃目標である闇神隊が近いと思われる。

「足止めをしている筈の魔獣部隊に伝達が届かないようですが……」
「神技阻害の波動も無いようだ」

恐らく全滅したか、迎撃を受けて撤退したか。何れにせよ、足止めの部隊はその役割を果たしたとベネフォストは評価した。それを示すべく、先頭に行く傭兵部隊から闇神隊と思しき小隊を前方に発見したとの警告が上がったのだ。

「敵部隊、およそ二十　攻撃、来ます！」

「ほう、この数を相手に挑むつもりか。しかし、まだ神技の射程外

だな」

大部隊との遭遇に焦ったの攻撃か、それとも作戦としての一環なのか、街道の先に布陣していた小隊は神技の一斉射を行なった後、じりじり後退を始めた。

こちらは接近戦に偏った編成のうえ魔獣兵もいないので、距離を詰めるまでの間に余計な被害を被らないよう、防御系神技を扱う傭兵を前方に集中させながら進軍速度を速めていく。すると、敵の小隊もこちらの進軍速度に合わせて後退速度を上げていった。

「うん？ 彼等は退却するつもりなのか？ 統制の取れた動きをしている以上、壊走している訳では無いようだが……」

折角の遠距離神技攻撃も射程ギリギリの距離からでは全くダメージにならない事は、相手にも分かっている筈だ。こちらの進軍速度に合わせて後退しながら攻撃を行なうにしても、距離を開け過ぎていては徒に消耗するばかりで何の効果も得られない。

「我々を引き付けておくという作戦なのでは？」

「ふむ……リーンヴァールの戦況を考慮しての作戦、という事が。だが、態々相手の思惑に乗ってやる必要はないな」

「では、突撃させますか？」

「情報では闇神隊とその指揮下の部隊は七十前後と聞いている。この先、後方に彼等の本隊がいる筈だ」

闇神隊の本隊が何か仕掛けていたとしても、現在交戦中の小隊を巻き込むように雪崩れ込めば迂闊に攻撃できないであろう。闇神隊長が使う超高速建築という神技について思案したベネフォストは、出し惜しみ無しの全軍突撃を敢行した。

「全軍、移動補佐にて突撃せよ！ 前方に砦や塔が現れても慌てるな」

サンクアディエツトの展望塔、ブルガーデンとの攻防、調整魔獣実験区域での活動、これまでに集めた闇神隊に関する情報を分析し、闇神隊長が戦力差を補う為にとるであろう戦術で考えられる迎撃方法は、その場で瞬時に拠点を建造する力から推測するに、街道上に砦や塔を建てて、建物の上から神技攻撃を仕掛けて来るという、常識では考えられない方法が挙げられる。

「例え拠点を設けていたとしても、一気に寄せてしまえば閉じ籠ることしか出来まい」

殆ど撤退状態に入っている交戦中の小隊を犠牲に出来る指揮官であれば、こちらも多少の痛撃は受けるであろうが、そこまでだろう。後は包囲して少しずつ切り崩していけば良い。

闇神隊という大物相手に戦功が立てられるとあってか、雄叫びを上げながら突撃する傭兵部隊は、逃げて行く小隊を飲み込む激流のような勢いで突き進む。が、あと少しという所まで追いついたかと思いきや、小隊は光の粒を残して忽然と姿を消してしまった。

「な、なんだ！」

「消えた？」

「いや、あそこだ！」

「何時の間に……なんだ今のは」

傭兵部隊の先頭集団は突撃の勢いは落とさずも、あと数メートル

という距離に捉えた筈だった闇神隊の小隊が、遙か前方を移動している事に戸惑いの声を上げる。そうして、街道の先で二隊に分かれた陣形を敷く小隊。その間に立つ人影

「フォンクランクの英雄だ！」

「闇神隊長が出て来たぞ！」

予定通り、ヴォーマルの囷部隊をシフトムーブで広範囲資材化地帯の終わり付近まで移動させた悠介は、約百メートルほど先から地響きを立てながら突撃してくる傭兵部隊と対峙する。

囷部隊の役割は、風の刃軍の部隊を広範囲資材化地帯の上まで誘導する事だった。森に分け入って回り込もうとする部隊を出さないよう、微妙な距離を保ちつつ牽制しながらの後退。もう少しで追いつけると思わせるのがポイントだ。

「正直、怖ええ」

カスタマイズメニューの画面越しに見ても、街道を埋め尽くすような数の傭兵部隊の突撃には恐怖を覚える。悠介の背後に布陣する囷の役目を果たしたヴォーマル達も、あれ程の大部隊に追われた事に皆息を乱し憔悴の色を浮かべていた。

しかし、今や敵部隊の大半は広範囲資材化地帯の上にいるのだ。

そこはすなわち邪神の掌上。悠介はスツと指先を宙に滑らせ、カスタマイズ画面を操作した。

「……実行！」

フォンクランクの英雄、闇神隊長という敵の大将を目前に捉えた事で、いっそう突撃に勢いを増す傭兵部隊。討ち取ればカルツイオ中に己が名声を轟かせる事になる。

何か神技を使おうとしているらしく、前方を指差すようにして腕を振るう闇神隊長の姿に警戒感を懐くも、これだけの数を相手に何が出来るとか、我先に武器を構えて突っ込んで行く傭兵達。

「っ！」

「壁が！」

突然、街道の両端に高さが二メートル以上はありそうな壁が出現した。尋常ではないのがその長さで、傭兵部隊の先頭集団から最後尾の辺りまで伸びている。不穏な気配を感じ取ったベネフォストは、咄嗟に退避命令を出した。

「下がれ！ 壁の範囲から出るのだ！」

「全軍っ 後退せよ！」

部隊の後方を続いていた直属の精鋭と、最後尾付近にいた傭兵達が慌てて引き返す。その直後、壁に挟まれた街道上が光に包まれた。そうして小さな光の粒が舞い消えると同時に、傭兵部隊の姿が唐突に消える。

「うわあー！」

「なんだこりゃっ どうなってる！」

「壁……？ いや違う、穴だ」

「い、何時の間に穴ん中に落とされたんだ？」

見れば深さ二メートルはあるかという穴、というよりも溝。街道のあった場所に伸びる巨大な溝、その中にひしめき合う傭兵達の姿。予め仕掛けておいた罠だとしても、一個大隊規模の部隊を丸ごと飲み込む落とし穴など、ありえない。

更に街道の両脇に生えていた壁が光って消えたかと思うと、巨大溝を塞ぐように格子状の蓋が現れて傭兵達の頭上を覆っていく。まるで縦穴式の牢に捕らわれたような形となった傭兵部隊。

「これは……」

「ぐ、軍務官殿！ 傭兵部隊が……っ」

「慌てるな、まだ我々の方が数で勝っている。直ちに救出隊を編成して攻撃隊が牽制している隙に」

判別不能な神技の波動が一带に広がる。動揺する部下達を落ち着かせて、傭兵部隊の救出と闇神隊長への牽制を指示しようとしていたベネフォストは、思わず見通しの良くなった縦穴牢が続く街道の先に視線を向ける。背後に小隊を控えさせた黒尽くめの人物。

彼は先程と同じく、こちらを指し示すように向けていた腕を振るう。すると、街道を埋め尽くす縦穴牢が光に包まれ、小さな光の粒が舞い消えて辺りに静寂が訪れる。森の奥から響く鳥の鳴き声と、吹き抜けていく一陣の風。街道の先で、漆黒のマントが翻った。

「……っ」

「……ばかな」

そこには変哲の無い街道があるばかり。縦穴や、その中に捕らわれていた傭兵部隊の姿は、何処にも見当たらない。怒号もざわめきも、甲冑の擦れ合う音や時折武器がぶつかると金属音も、全てが初めから存在していなかったかのように、その場から消え失せた。

『ふう、上手くいったか……』

悠介の考えた作戦とは、資材化した街道を大規模な捕縛用の罠に見立てて敵部隊を一斉捕縛、無力化する事だった。

東側の広範囲資材化地帯に敵部隊を誘い込み、まずは両端に防壁を出す事で逃げ道を塞ぐ。それから地面を水路のような箱型の溝にカスタマイズ。全長六百メートルの箱に閉じ込めた後、西側の広範囲資材化地帯と入れ替えたのだ。

傭兵部隊が送られた西側の広範囲資材化地帯には、万が一彼等が天蓋や壁を破って出て来ようとした場合に備えて、闇神隊と調査団の半数以上を見張りとして配置、巡回させている。

尤も、箱の内側も格子防壁の蓋もそれなりにしっかりと固めてあるので、そう簡単に脱出される心配は無いといえる。

最初は資材化した街道の上にプチ砦を乗せて、瞬間移動する移動要塞を持って安全に敵部隊を引き付けるといった構想も浮かんでいた悠介だったが、流石に資材も時間も足りなかったのでヴォーマル達に囮部隊をやって貰ったのだった。

振り返ると、囮を頑張ってくれた衛士達の中からグツと拳を突き

出して作戦の成功を称えるヴォーマル。悠介もそれに頷き返して、残った風の刃軍部隊に向き直った。

静かになった広範囲資材化地帯の向こう側に、敵部隊の指揮を執っているらしき人物の姿が確認出来る。

女性特有のボディラインが強調された露出度の高い甲冑に、豊満な胸の膨らみ。腰下に広がる豊かな緑髪が特徴的だ。恐らく彼女がヴォーレイエから聞いていたベネフォスト軍務官だろうと当たりをつける悠介。

「ヴォーレイエ達をこっちに呼んでくれ」

「了解、伝達係り！」

悠介がベネフォスト軍務官を説得すべくヴォーレイエ達を呼び寄せている間、風の刃軍部隊では、三百人以上の兵が一瞬で生き埋めにされたと青褪める残った傭兵達と、軍務官直属の精鋭達が意見を対立させる等して揉めていた。

「やっぱり闇神隊と戦うなんて無謀だったんだ！俺は降りる」

「待て、それでは契約違反だろう！」

「あんな化け物を相手にするなんて契約になかったじゃないか！」

「闇神隊と対峙する事は最初から知らされていた筈だ！」

喧々囂々の議論が交わされる中、命あつての物種だと逃げ出す者も出始める。彼等の言い分も理解できるので止めないベネフォスト。

彼女は傭兵と部下達の議論は捨て置き、街道の先で漆黒のマントを翻して佇む黒髪の男に熱い視線を向けていた。

武人としての心が震えるのだ。ゾクゾクとした感覚に奮い立ち、じりじりと湧き上がる高揚感を抑え込みながら、彼女は呟いた。

「戦いたい……」

83話・目覚めるは闇か光か【中編】（後書き）

ベネフヨストのイメージは『プリウスオンライン』の『ロン・フェ
ミナ』だったりします。

84話・目覚めるは闇か光か【後編】（前書き）

ちよつとグロ表現があります。

84話：目覚めるは闇か光か【後編】

リーンヴァール奪回に奮戦するヒヴォデル援軍衛士団とトレントリエッタ解放軍。魔獣兵を無力化された事で崩れた風の刃軍は、武装したトレントリエッタの民兵に背後から急襲を受けて混乱し、遂に門が破られた。

街に雪崩れ込む解放軍と合流するトレントリエッタ軍の予備役や軍属達。日和見していた彼等も『やっぱりクリフザツ八王の方がいいや』といった軽い感じで決起、リーンヴァールの王宮を包囲している。もはや首都奪回は時間の問題となっていた。

「軍務官からの援軍はどうなつとるんだ！」

「呼び戻した部隊はこちらに向かっているようですが、西門を民衆に制圧されているので王宮の防衛には回れないでしょうね」

しかも、まだ真偽は定かでは無いが軍務官の本隊は闇神隊の計略によって壊滅したとの情報が飛び交っている。何れにしても更なる援軍は期待できない。戦況は絶望的だった。

「……貴様、なぜそんなに落ち着いていられるんだ」

「ふふふ、これは異な事を。御覧なさい、あの怠惰とした民達が実に生き生きとしているではないですか」

フォートレスは街を見渡せるベランダに立つと、王宮を取り囲ん

では時折自軍の兵と神技を撃ち合っている民衆を見下ろし、これこそ闘争を是とするエルフォドラス伯爵の求めていたトレントリエッタの民の在るべき姿だと、両手を広げながら彼等を称える。

「素晴らしい、実に素晴らしい。我々は伯爵の願った民の闘争心をしっかりと呼び起こせたのですよ」

「奴等を支配できねば覇権も糞もないだろう……我等の栄光はどうなる」

「覇権？ 栄光？ そんなモノは付随要素に過ぎません。民衆の闘争心を喚起する事、それこそが我々に与えられた使命でした」

「……………」

そしてそれは達成されたと、ベランダに立つフォートレス総務官の姿に気付いて撃ち放たれた地上からの風刃を躲しながら、彼は普段見せる事のない恍惚にも似た笑みを顔に張り付かせる。

アイルザツハは何処か危うげな気配を纏うフォートレスの様子に、追い詰められて気でも違ったかと正気を疑った。普段より感情を表に出さない男なので、フォートレスが日頃から何を思っていたのかは想像もつかない。

「とにかく……このままではギリ貧だ、僕は脱出の手筈を整えるぞ」
「ふふふ……………」

民衆の氣勢が上がるリーンヴァールの街並みを、フォートレスは満足そうに見下ろしている。

『駄目だこいつは』

アイルザツハは頭を振ると、足早に総司令部の部屋を後にした。

闇神隊と風の刃軍部隊の対峙する西街道。部隊を丸ごと地面に飲み込むという闇神隊長の振るった悪夢のような神技から辛うじて全滅を免れた風の刃軍、ベネフォストの部隊は、街道の真ん中で一人立つ闇神隊長を前に一歩も進めないでいた。

風の刃軍部隊はベネフォスト直属の精鋭八十人に加え、報酬と名声欲しさに留まった傭兵六十余人。

数の上ではまだ闇神隊を凌いでいる。だが迂闊に近づけない。一定距離まで近付けば生き埋めにされるという認識により、攻めるに攻められず、さりとて退く訳にもいかず、暫しの睨み合いが続いている。

先程の現象は街道に仕掛けられた大掛かりな罠と、闇神隊長の神技によるモノであろうと考えられていた。

進軍中、部隊の半数をリーンヴァールに戻す切っ掛けとなった魔獣兵の無力化。魔笛が大量に複製されていた事実からフォンクランクには優秀な土技の民が多くいると判断されたのだ。まさか全て闇神隊長一人の力によるものだとは思ってもよらない彼等だった。

何せ見通しのよい街道にあれ程大規模な仕掛けを用意した闇神隊のこと、他にも罠が仕掛けられているとすれば、森の方がより危険だと考えて街道の外から包囲しようと思う者はいない。

「軍務官殿、ここはやはり撤退しかないのでは？」

「……撤退は無い」

「し、しかし」

「……ない」

じつと視線の先に立つ闇神隊長をみつめていたベネフヨストは、先程の現象を深く思い返し、頭の中で検証し、あのような大規模な仕掛けはもう打ち止めなのではないかと考えた。少なくとも、三百人以上が埋められた街道上に更なる仕掛けがあるとは思えない。

闇神隊長が今あしてこちらを威嚇するように一人街道に立っているのは、時間稼ぎの策略か。もしそうであれば、時が経てば経つほど相手の策を成功に近づけてしまう。背後に控えている小隊の火力は侮れないが、今ならまだ戦力差は五倍近くもある。

「正面から挑んでも十分勝機はあるか」

「」

ベネフヨストが攻撃命令を出そうかと考えたその時、闇神隊長がスツと腕を振るった。思わず身構える風の刃軍部隊。見ると、何時の間にか闇神隊長の隣には旅装束姿の男女三人に無技の青年一人が立っていた。

「あれは……レイエお嬢様？」

ヴォーレイエ達を中継地点の資材化地帯からシフトムーブで移動

させた悠介は、前方の部隊を指揮している人物がやはりベネフヨスト軍務官であった事を確認すると、ヴォーレイエに説得を依頼する。転移初体験で啞然としていた彼女達はなんとか気を取り直して、それを了承した。

「じゃありフヨナ、声を頼むよ」

「はい」

広伝でヴォーレイエの声を届けてベネフヨスト達に投降を促す。

リフヨナは本職の伝達係りに比べると若干範囲の狭くなる特殊系風技使いのだが、身内を使った方が訴えもより効果的であろうというウエルシャの進言に従った人選だ。

すると向こうからもベネフヨストの声が届けられた。

「申し訳ありませんがお嬢様、ここで私が折れる訳には行かないのです」

現在リーンヴァールでは仲間がフォンクランクの援軍衛士団とクリフザツ八王の解放軍相手に苦戦している状況であり、決起の始まりがどうであれ、既に事は動いている。一時の感傷に流されて背中に護る仲間を裏切る事は出来ない、申し訳なさそうに答える。

その心苦しそうな返答からベネフヨストの心中を一つ読み取ったヴォーレイエは、恐らく誤解しているであろう自身の境遇を訴えた。

「ベネフ聞いてくれ、アタイは自分の意志で闇神隊に協力してるんだ、どちらかと言えば保護されてる身なんだよ」

ヴォーレイエは闇神隊長に保護された経緯、自分達が港街に向かった動機と、街で聞かされた組織の決起理由などを説明した。その内容はベネフヨストが総務官や財務官から聞かされていた組織の決

起内容と随分違っている。

「……………それでは、お嬢様は捕虜になっている訳ではないと？」

「

「違う。それに、オドから聞いたんだけど、総務官と財務官は……………アタイの事を消そうとしてたらしい」

街道に響きあう広伝でのやり取り。ヴォーレイエの話聞いた風の刃軍は、組織構成員である直属の精鋭にこそ動揺を隠せない者の姿も見られたが、傭兵達にとっては雇い主の内情など他人事なので、概ね静かに成り行きを見守っていた。

「そうでしたか……………あの二人には後で報いを与えねばなりませんね。しかし、やはりここを退く事は出来ません」

「………なんでだい！」

「先程も申し上げましたように、始まりがどうであれ既に事は動いているのです」

今こうしている間も組織の戦いは続いているのだ。ここで自分が事情の裏を知ったからと矛を収めては、今日まで組織の為に戦い、散っていった者達に申し訳が立たないという。

「………ここで死んだ者達があまりに犬死にです。後は、武人の本懐……………とても申しましょうか」

これほどの策を弄してきた闇神隊長とは是非戦ってみたいと、薙刀のような矛を立てながら本音を口にした。

「どうやら説得は上手く行かなかったようだ、悠介の周りにヴォーマル達が集まってくる。」

「後ろの部隊を呼びやすか？」

「うーん、今それやると益々衝突が避けられなくなるような」

「まだ百以上の兵力、それも風の刃では精鋭と呼ばれる戦闘員が丸々残っているらしいという事で、正面からの衝突を何とか避けたい悠介だったが、彼女は一度技を交えなくては聞かないだろうとウエルシヤが口添えをする。」

「組織内でも意見が対立すれば、とりあえず決闘で解決しようと思案する方なので……」

「……どういうタイプの人か把握したよ」

これは落とし穴や格子防壁で捕らえても降参しないタイプだと認識する。一応、広範囲資材化地帯は傭兵部隊を閉じ込めた方と入れ替えたもう片方のこちら側がまだ使えるので、戦闘になっても同じ手で一時的に拘束は出来る。

だが、土から起こした防壁の強度は然ほど高くはなく、幾らしっかり固めておいても破ろうと思えば力づくで破れるのだ。

後方に移動させた傭兵部隊も、いつその事に気付いて穴から出て来ようとするかもしれない、見張りに立たせている非戦闘系の衛士ではそれを防ぐことが出来ない。一瞬にして捕らわれた事で戦意喪失状態に陥っている今の内に、事を終わらせる必要がある。

「出来るだけ早めに決着付けるようにしないとな」

宙に指を這わせ始めた悠介にヴォーレイエが心配気な表情を向けた。彼女にとつてベネフヨストは姉のような存在でもあり、出来れば死なさないで欲しいという懇願が見て取れる。

悠介も殺伐とした戦いの雰囲気はやはり苦手なところであり、穏便に済ませられる方法があるならソレを選ぶ。先程の広伝でベネフヨストの人柄に部下を大事にしているような節を感じ取れたので、そっち方面から攻めてみようかと考えた。

「リフヨナさん、俺の声も広伝頼んます」

「あ、はい」

思案した結果、悠介は少しネタバレをして戦いを躊躇するよう仕向けようと画策した。さつき消えた者達は死んでいない事、自分の神技で離れた場所に閉じ込めているだけだという事をバラし、しかしここから先は同じ手が使えないので手加減出来ないと示す。

「戦うつつもりなら、死を覚悟をして欲しい」

死んだと思っていた仲間が実は生きていたが、ここから先は間違はなく死ぬぞと忠告されれば、仲間の生存に喜ぶ心理が命を賭してまで戦いを続けようという気持ちを消極的にする筈だと睨む悠介。しかし

「隊長、隊長、あの手合いにそれじゃ逆効果ですぜ」

それは雇われ者にしか通用しないとヴォーマルが指摘する。ベネフヨストから返答の広伝が響いた。

「 誉れ高きフォンクランクの英雄と戦える事を、私は誇りに思う 」

「 ……あれ? 」

「 あー、ちよつと遅かったようで 」

『 今度から先に相談するよ 』と反省する悠介であった。

ヴォーマルの指摘通り傭兵部隊は退いて行き、ベネフォストもそれを了承しているのか特に混乱もなく部隊の再編成が行われる。傭兵部隊の指揮に入っていた組織の構成員も部隊の解散に伴い、ベネフォスト直属の部隊に組み込まれる。

残ったのは数人の腕利き傭兵とベネフォスト直属の精鋭戦闘員、合わせて九十人ほどであった。

こうなったら仕方が無いと、カスタマイズメニューで準備を整えていた悠介はヴォーマルの小隊とヴォーレイ工達を残して前に出る。負ける気は無かったが、上手く行かなかった時はシフトムーブで逃げる事も出来るのだ。

気負わずも慎重に。悠介は自分が思ったより冷静でいられる事に少し驚きを感じていた。

初めてカスタマイズ能力で戦った時は、緊張と興奮に加えて怒りで周りが見えていなかった事もあり、随分と格好悪い戦い方だったが、あれから色々と経験を重ねて来た結果なのだろうと感慨に耽る。スンの初キスもそれなりに影響しているのかもしれない。

苦笑し、雑念を振り払った悠介は、風の刃軍部隊に向かって歩き

ながらカスタマイズメニューを意識で操作した。

ゆっくり歩いて来ると思ったら突然、半ばまで瞬間移動する闇神隊長に、思わず怯む風の刃軍精鋭戦闘員達。

対照的に前へと踏み出すベネフォスト。既に二度、部隊規模で人が瞬間移動する所を目撃しているのだ。確かに驚くべき現象だが、彼女にとっては『それが闇神隊長の神技なのだろう』という認識で決着が付いている。今更怯むような事ではない。

「風の刃軍務官、ベネフォスト……参る」

静かに名乗りを上げたベネフォストは愛用の長柄を振り翳して風の刃を纏わせた。薙刀のような武器に纏わせた風の塊を、薙ぎ払って撃ち放つスタイル。纏わせた風の刃はある程度の伸縮をコントロール出来るので、近接戦闘でも高い効果を発揮する。

どちらかといえば、炎神隊長のクレイヴオルが扱う炎槍に近い強化系神技のようだ。

地面に飲み込まれないよう、街道の端ギリギリの場所を突撃してくる風の刃精鋭部隊。狙いは悪くないな等と思いつつその様子を眺めながら、悠介はカスタマイズメニューに出してある戦闘用マップアイテムデータを反映させた。

突如出現する高さ十五メートルほどの円柱形をした塔と、その周囲に甲冑を纏った巨人の上半身が三体。舞踏祭でタリスとの決闘に使ったタイプEEに、ディアノース砦を造った時に建てた見張り台がベースの防壁であった。

ちなみに、見張り台型防壁は中に空洞が無く、天辺の部分にしか人が入れるスペースは無い。シフトムーブで出入りする仕様だ。

「こ、これが……闇神隊長の力！」

暫し足を止めて塔と三体の巨人を見上げたベネフォストは、足元で光の粒が舞った事に気付くと直ぐにその場から飛び退いた。傭兵部隊を掻き消した穴かと思いきや、先程まで立っていた辺りの一部地面がグルグルと回り始める。

其処そこかしこ彼処に小さな渦が発生したような、何とも奇妙で不気味な光景。街道脇から回りこませていた精鋭部隊の戦闘員達が回転する地面に足を取られて転んでいる。そこへ、甲冑巨人が腕を振り上げて叩き降ろした。

「うわー！」

「正面から行くな！ 回り込めっ」

「くそっ このゴーレム何でこんなに速いんだよ！」

甲冑巨人の繰り出す攻撃がその巨体からは想像出来ない程の速さで精鋭戦闘員達に襲い掛かり、直撃を受けた戦闘員が森まで吹き飛ばされて木に激突し、吹っ飛んできた仲間に巻き込まれて団子状態で気絶する者など、纏めて十数人が薙倒されては地面に転がる。

悠介の考えた戦法は見張り台型防壁の上から戦況を窺いつつ回転床で攪乱して足止めした所を甲冑巨人で殲滅して行くというやり方カスタマイズ操作で一体ずつ甲冑巨人の角度や方角を調節して、向かって来る精鋭戦闘員と対峙させるのだ。

甲冑巨人の攻撃で動きが止まった者は、穴と格子防壁による縦穴牢に捕らえて戦闘区域の外へと除けてしまう。これは敵戦力の排除というよりも、倒れた彼等を敵味方の区別を行わず、わけ隔てな

い攻撃を繰り出す甲冑巨人の猛威から護る意味もある。

戦って倒れた者だけを戦闘区域から離脱させるやり方なら、ベネフヨストも、彼女と志操を共にする者達も納得するだろうと考えた。

「巨人の背後に取り付け！ 移動補佐は使つな、足を取られる！」

ベネフヨストは回転床が移動補佐などで身体を軽くしている者以外には殆ど効果をもたらせていない事を一目で見抜くと、巨人の死角に回り込みながら攻略するよう指示を飛ばす。

それらは直ちに実行され、回転床に足を取られる事が無くなった精鋭戦闘員達は移動補佐が無い分、動きは若干鈍るが、先程までよりも安定した立ち回り見せ始める。

カスタマイズ画面のマップアイテムを忙しなく操作している悠介は、回転床と甲冑巨人の弱点を一発で見破られた事に『流石は戦闘大好き人間だなあ』と中々失礼な感心の仕方をしていた。

しかし、回転床には実はもう一つ役割があった。街道上に引くラインの如く縦横に並べられた回転床は、その上に在るモノの正確な位置を把握する為のグリッド線になっているのだ。

何人かに取り付かれた甲冑巨人が背後から削られ始めたので、壊される前に一旦資材に戻して別の場所から二ヨキ二ヨキと出現させる。それも一塊になった戦闘員の背後という絶妙な位置へ。これもグリッド線があるからこそその配置操作であった。

削られた分を多少は土に戻されたが、全長六百メートル、深さ二メートル、幅六メートル分の巨大資材。まだまだ余裕がある。

「はあぁー！」

甲冑巨人が鉄槌を振り下ろした直後の、僅かな隙を狙って腕を駆け上ったベネフォストが、渾身の一撃を巨人肩口に叩き込む。刺し込まれた刃が纏う風圧で土が削られ、亀裂が広がって行き、やがて自重と耐久力の限界を超えた巨人の左腕が肩から砕け落ちた。

片腕になった甲冑巨人はその状態からでもギミック機能によって攻撃動作を行なうが、バランスが保てず倒壊してしまう。戦闘員達から歓声が上がった。悠介は塔に張り付いている傭兵を引っぺがす作業をしていたので、そちらに手が回らないでいた。

闇神隊長の操る巨人を一体屠った事で、弥が上にも士気を高めるベネフォストの精鋭戦闘員。残り二体も勢いに乗って倒してしまおうと氣勢を上げるが

「実行」

「な………！」

「っ！」

複数の光の柱が立ったかと思うと、新たに八体もの甲冑巨人が出現した。道幅の都合上、数を揃えても戦闘に使えるのは一番前にいる一体だけになるのであまり意味は無いのだが、それでも威圧効果は十分だった。先程までの威勢が目に見えて失われる戦闘員達。

「怯むな！ これほどの戦力を出したという事は、それだけ相手が焦っているという事だ。それに、この数では返って自由に動けまい」

冷静に、部下達を鼓舞する為の希望的観測に推測できる事実を交えて沈みかけた戦意を奮い立たせるベネフォストは、自ら実践して

見せるべく巨人が動き始める前に、手前の巨人を躲してその背後に控える巨人へと跳躍する。

無防備に棒立ちしている巨人に一撃を叩き込もうとした瞬間、攻撃目標が消え失せた。驚くのも束の間、視界の先で今し方消えた巨人の更に後ろに並んでいた巨人が腕を振り上げる。

「っ！ しまっ」

空中で身動きの取れない状態のベネフォストに、甲冑巨人の打ち下ろすような鉄拳ならぬ土拳が叩き込まれた。

「ぐっ ガハッ」

「軍務官殿ー！」

凄まじい圧力に息が吐き出される。空中での一撃と地面に叩きつけられた衝撃で、身体中の力がごっそりと剥ぎ取られたような感覚。トドメの鉄槌を振り上げている巨人を視界に収めながら、「これで終わりか……」と胸中で呟くベネフォスト。

しかし、甲冑巨人が振り上げた鉄槌を落とす事は無かった。

クリフザツ八王の解放軍、リーンヴァール王宮を奪回せり。

その報せはトレントリエッタ中の街や村、周辺国に向けても発信され、ここ西街道で対峙する両軍にも届けられた。

暫しの後、各方面へ情報の確認を済ませた闇神隊長とベネフォスト軍務官、両者同意の下に戦闘の終結が宣言される。後方の広範囲資材化地帯に捕らえてある傭兵部隊にも伝達妨害を解いてこれらの情報を確認させ、部隊の解散を持って西街道の戦いは終わった。

「やれやれ、無事に終わったか」

見張り台型防壁の天辺で一息吐いた悠介は、付近一帯を埋め尽くすように生えた甲冑巨人を片付け始める。甲冑巨人の材料に使われた事で広範囲資材化地帯の一部は陥没したような穴が出来ていたのだが、甲冑巨人が消える毎にその穴は埋められていった。

やがて街道は元の変哲の無い地面が続く道へと姿を戻した。西側の広範囲資材化地帯で解放された傭兵集団は、そのまま中継地の村を通ってそれぞれ港街なり宿場街なりへと散らばって行くそうだ。仕事が終わればとっとと退散^{オサラバ}という訳である。

後方の監視任務を終えた闇神隊メンバーや調査団本隊の衛士達が悠介の周りに報告をしに集まり、傭兵部隊の指揮をしていた風の刃構成員も約五十人程が武装を解除された状態で引き揚げて来た。

同じく、悠介と戦っていた精鋭戦闘員達も武装解除され、戦闘区域の外に移動させられていた負傷者の回収に向かっている。甲冑巨人と戦った精鋭戦闘員は実に半数近くが重軽傷を負って動けなくなっていた。

自らも深いダメージを負いながら水技の治癒で応急処置を済ませ、戦闘後の処理を指揮していたベネフォストは、これで殆どの仕事を終えたと判断して闇神隊長に視線を向ける。少し離れた所で部下の衛士達に囲まれているフォンクランクの英雄。

彼等の傍でこちらを気にしながら佇むヴォーレイエと、付き人の二人に奴隷の青年。

「ユースケ殿」

声を掛けられた悠介が振り返ると、風の刃構成員の集団を背に残して一人歩み出たベネフヨストが、見ようによっては扇情的とも言える露出の高い、一部砕けた甲冑を纏いて凜と立ちながら口上を述べる。

その内容は自身の敗北を認め、今回、組織が引き起こした騒乱に關して部下の助命を請うモノであった。

「部下達は私の命令に従っただけだ。責任は全て私にある」

ベネフヨストはそう言っただけで自らの首にナイフを宛がった。驚いた彼女の部下達が慌てて声を上げる。

「軍務官殿！」

「ベネフヨスト様、お待ちを！」

「来るな！ 私はお前達を使って多くのトレントリエッタ兵を殺めた、その報いを受けねばならないのだ」

制止に入ろうとする部下達を一喝して黙らせたベネフヨストは、静かに闇神隊長へ向き直ると、レイエお嬢様の事を頼みますと最後のお願いを託して穏やかに微笑んだ。自決を前にして全ての覚悟を済ませた者の安らかな表情に息を呑む一同。

「待てベネフ！」

「お嬢様、どうかお元気で」

「実行っ！」

間一髪、シフトムーブで瞬間移動した悠介がベネフヨストの腕を掴んで自害を止めた。突然目の前に現れた悠介に、一瞬驚いた彼女

の力が緩んだ事でどうにか間に合った形だ。ベネフォストは少し困ったような顔を向ける。

「……ユースケ殿、どうか逝かせては貰えないだろうか？ 武人の情けとして、誇りある死を私に」

些かの迷いも無い瞳に、悠介はどうか自害を思い止まるよう説得を試みる。何か良い引き止めネタは無いかと思考をフル回転させて咄嗟に口から出た言葉は、如何にも現代人らしい理由の内容だった。それはヴォーレイエを弁護する人間が必要だという主張。

「部下は助かってても、このままじゃヴォーレイエが組織の全責任引つ被って処刑されちまうかもしれないぞ！ それでいいのか？」

「それは……だが、しかし」

ベネフォストの瞳に迷いの色が浮かぶ。絶るように向けられる視線の意味を理解した悠介は、自分の立場をぶっちゃけてもう一押し。

「言つとくけど、英雄とか呼ばれてたって俺は所詮、宮殿で働く衛士の一人でしかないんだからな」

自分の一存で庇いきれるものではないと諭す。風の刃、エルフォドラス家一族が犯した罪は重い。ヴォーレイエがそれら組織の活動にどれだけ係わっていたのか、係わっていなかったのか、組織でも上の立場にいて詳しい内情を知る者の証言が必要だ、と畳み掛ける。

「……わかった」

ナイフを握る手から力が抜け、ベネフォストは自害を諦めた。

本当は非公式ながらエスヴォブス王とクリフザツ八王に事情を認められて首都奪回に参加している時点で、そこまでの咎は問われな
いであろう事は分かっていたが、ベネフォストの自害を止める為に
敢えて不安を煽った悠介の策は功を奏したようだ。

咄嗟の機転に、ヴォーレイエやお供の者からも感謝され、部下達
からも立派だと感心されて照れる悠介。

「ありがとう、ありがとう！ アンタほんとにいい奴だよ！」

ぶんぶん握った手を振りながら涙ながらに謝礼を口にしたヴォ
ーレイエは、次いでベネフォストに飛びついた、と表現した方が正
しい勢いで抱きついた。痛むであろう身体の傷の事を微塵も感じさ
せず、それを受け止めるベネフォスト。

「お疲れ様でした、ユウスケさん」

「はは……ほんと疲れたよ」

苦笑を向けつつ、スンと視線を交し合う悠介。

この後、風の刃組織の構成員達は一旦リーンヴァールに收容され
て取調べなどを受ける事になっている。調整魔獣の事などが絡むの
で、フォンクランク側からも組織の重要人物に関しては情報と共に
引き渡しを求める意向のようだ。

動けない程の重傷者は闇神隊と調査団の馬車に乗せ、戦いを終え
た両軍一行はリーンヴァールへ向けて移動を始めた。

闇神隊を先頭にして去って行く集団を見送り、森の影から様子を

窺っていたレイフォルドが街道にひょいと降り立つ。

「ユースケ君が勝っちゃったみたいだねえ」

エスヴォブス王は闇神隊を警戒した風の刃軍がどう動くかまでは読んでいた。悠介が戦いに積極的で無い事も踏まえた上で、理想としては敵軍の大部隊を前に撤退を選び、一度事実上の敗北を招いてくれる事を期待していたのだ。

援軍衛士団と解放軍は退路を断たれる前に海岸線の街道を撤退させつつ、今度は神技兵も加えたベテラン衛士が指揮する大軍を送り込むという計画を練っていた。

闇神隊にはサンクアディエツトで休養をとらせる傍ら、緒戦の敗戦責任を一部被せる事で上がり過ぎた名声を調節し、宮殿内で目立たずとも鋭角になり始めた反闇神隊派勢力の溜飲を下げる。

表立って批判できなくなっている現状、水面下で反闇神隊派同士の結び付きが強くなってしまつのを解す狙いがあった。

「何だか吹っ切れた様子だったし、これからどうします？ 炎壁の賢王殿」

絶体絶命の危機に晒された悠介が、神技の大技を披露して一気に成長を見せたのはギアホーク砦の時と同じパターンである事に気付いたレイフォルドは、予想の範囲を軽く踏み越えられて頭を抱えるエスヴォブス王を想像しながら帰還の徒についた。

十数頭の魔獣兵と魔獣使いの兵一人を連れて、崖下の暗い海岸線を逃亡するアイルザツハ。

「おい、何をぐずぐずしとるんだ！ 逃げ」

王宮に乗り込んで来た解放軍を嬉々として迎え撃つべく指揮を執りに行ったフォートレスを見限り、抜け道を通ってリーンヴァールの東海岸に脱出したアイルザツハは、このまま南下してルディアの鉱山を目指す道程を進んでいた。

そこから少し街道を進んで森に入れば、トレントリエッタの調査部隊が到着する前に組織の集落に入れる筈だ。

集落に残したありつたけの財産を抱えて暫らく身を隠せばいい。魔獣兵と闇商人の流通網に自分の商才があれば幾らでもやり直しが利く、アイルザツハはそう算段を付けていた。

「一匹遅れているぞ！ もたもたするなっ グズな奴め！」

腹を空かせている魔獣兵は少し魔笛の間が空くと、あっちへフラフラこっちへウロウロと動き回り、魔獣使いの兵は上手く統率がとれない状態に苦労していた。そもそも魔獣使い一人に付き、扱える魔獣兵は三体が限度なのだ。通常、作戦行動などでは二体を操る。移動させるだけなら問題無い筈だと無茶な要求を突きつけるアイルザツハに、魔獣使いの兵は不満を募らせる。

「大体、こいつ等のせいでこんな事になったんじゃないか……」

日々ノンビリと過ごしていた気楽な集落生活が終わり、殺伐とした逃亡生活を強いられているのは、事を起こした三務官のせいだと

考え始める。唾を飛ばしながら早く来いと急かすアイルザツ八元財務官。組織が潰れた以上、彼は組織の元幹部というお尋ね者だ。

『……こいつの首を持っていけば』

仄暗い光を瞳に携えた魔獣使いは、徐に魔笛を吹いた。

「痛い！ 痛てててっ おい、何やってる！ ちゃんと操らぎゃあああ止める！ おいつ やめ……がふっ」

餌にありつけた魔獣兵達がガツガツと血肉を貪る中、魔獣使いの兵はこれを持って出頭しようとアイルザツ八の首を拾った。すると、その首にも齧りつく魔獣兵。

「おいおい、これは駄目だ。まだそっちにあるだろうが……」

そう言っただけでも、魔獣兵はグルルと喉を鳴らして放さない。暫らく引つ張り合いを続けたが、魔獣兵の方が当然力は上だ。

仕方なく魔笛で恭順させようと笛を手に取った魔獣使いは、その瞬間ぐいと引つ張られてつんのめった拍子に魔笛を落としてしまう。笛は海岸のゴツゴツとした岩の隙間に入り込んだ。

「ああっ なんてこった！ ええいもう、そっちを先に食べよっ」

このまま手を放せば自分の身の安全を保障してくれるアイルザツ八の首が食われてしまう。そうはさせじと首の髪の毛を鷲掴みにして全力で引つ張り合いをする魔獣使いと魔獣兵。そこへ、腹六部といった感じで他の魔獣兵が集まって来て魔獣使いに食いついた。

「痛てて！ こらっ 俺は違う！ 俺に噛み付くなって！ おい止

めろっつば、俺はちが
「

ゴキリと音がして、魔獣使いの手から力が抜けると、引っ張り合
いをしていた魔獣兵は尻餅をつきながら自分の餌を手に入れた。岩
肌^イに打ち寄せる波が海岸の一部を染める赤を洗い流していく。

空腹を満たせた災厄の影は、闇が支配する海岸線を何処へともな
く消えていった。

85話：女王の提案

トレントリエッタでの動乱が終結して数日。リーンヴァールから帰国した闇神隊と調査団、援軍衛士団の衛士達も通常任務に戻り、凱旋に賑わっていたサンクアディエットの街並みも普段の活気ある落ち着きを取り戻し始めた頃。

交易を行なう商人達の間で重要な問題が持ち上がっていた。魔獣施設の封鎖と付近の魔獣討伐で解決された筈の調整魔獣問題。

初めは盗賊団らしき集団の食い散らかされた死体が、トレントリエッタ領付近の街道近くで頻繁に発見されるようになった。

それらは恐らく賞金首として現在各国に手配されている風の刃組織の元幹部、アイルザツハ財務官がリーンヴァール脱出の際に持ち出したとされる魔獣兵の仕業であろうと見られていた。

そのうちに商隊が街道で調整魔獣の群れに襲われるようになり、各地で被害が続出。通商協会も協力してトレントリエッタ軍の調査隊と情報を集めた結果、最近の魔獣被害は複数の群れを形成した調整魔獣によるモノである事が分かった。

突然増え始めた魔獣被害。調整魔獣は幼生から魔獣として育て、繁殖する術を仕込まれていた事や、通常の魔獣と違って群れを作る習性を持つ事などが重なり、時が経つごとに加速度的な勢いで増えていく。

一箇所に留まらず彼方此方移動する調整魔獣の群れに対応が遅れ

つつも、各国は揃って何とかしようと、それぞれ討伐隊を組織して活動を始めている。傭兵達にとっては危険だが実入りの良い時期が続いていた。

この頃になると、そもそもこんなモノを作りだしたノスセントス人が悪いという風潮が広まり、一部でノスセントス出身者が吊るし上げにあつような事も起きるようになった。

トレントリエッタに関しては同盟国である事に加え、魔獣兵を運用した風の刃組織に自国を荒らされたとあつて、同情的に批難の声は抑えられていた。祖国が滅亡して後盾の無い元ノスセントスの住人達が割りを食わされているといった具合だ。

「おいつ お前等はここで商売するな！」

「なんだと？ ここは自由に露店を出せる場所だ、お前達に文句を言われる筋合いはない」

「てめえらのトコが作った魔獣のせいで品物が届かねえんじゃねえか！」

「上のやってた事なんか知るかつ」

露店で売り子をやっている若い男女に、店を畳めと迫る数人の地元民らしき男達。最近の低民区表通り露店市場では、時折このような光景が見られる。

因縁をつけられている旧ノスセントス地方からの移住者は、こういった風潮が広まり始めた当初こそ地元住民との衝突を避けて身を引くなど肩身の狭い思いをしていたのだが、この頃は単なる場所取

りの口実で横暴な祖国叩きを続けられる事に反撥心を募らせており、暴力沙汰になる事もしばしばだった。

また、低民区を巡回する神民衛士が恫喝など不正行為を働く者の取り締まりに積極的でない事も、両者の溝を深める一因になっている。オロオロと不安げにしている売り子の女性を庇うように一步も退かず、因縁をつけて来た集団と対峙する移住民の若者。そこへ

「この指輪ください」

「え？ あ、は、はいっ 緑三つになります」

「おい兄ちゃん、てめえなに買って」

周囲の空気を読んでか読まずか、並べられた商品からアクセサリを購入する男が一人。露店場所を横取りしようとしていた集団は、その客に文句を言おうとして固まった。

甲冑部分の少ない特徴的な仕様、黒い宮殿衛士の隊服を纏った黒髪の男が、緑晶貨を支払いながら振り返る。

「あ、あんた……闇神隊の……」

「闇神隊長の悠介だけど、この店で買い物して何か問題でも？」

たった一人で数百の軍勢を蹴散らした、という多分に誇張も混じった噂に名高いフォンクランクの英雄、闇神隊長の勇名は今や一部で畏怖の対象とされる程に響き渡っている。善良な市民には頼もしい存在であり、無法を働くならず者には恐怖の象徴。

周りの野次馬達が何かを期待するように控え目な野次を飛ばす。チンピラ集団を微かに応援する野次は、彼等が闇神隊長に喧嘩を売って討たれる所が見たいという何とも現金な動機によるものだ。

闇神隊長が絡んだ事で近くに居た衛士達が慌てて騒ぎに駆けつけ、

商売の妨害を働いたチンピラ達を摘発に動く。

「お前らちゃんと仕事しろよー」

「も、申し訳ありません……」

明らかにトラブルを見過ごしていたと思われる衛士達に軽く睨みを利かせた悠介は、治安活動に従事する衛士達に意識の引き締めを促す必要があるなど、ヴォレットへの報告内容を心に記す。

絡まれていた露店の男女は悠介に会釈をして感謝を示すが、その表情は微妙に硬く複雑な心境を表していた。

ノスセントスからの移住者達の間では、闇神隊に対する評判はどちらかと言えば懐疑的である。それというのも、サンクアディエツトの街中で実しやかに囁かれている「闇神隊長は無技の民を特別視している」や「ガゼツタと繋がりがあがる」などの噂。

パトルティアノーストの中枢がガゼツタの潜入部隊に占拠され、ノスセントスが一夜にして滅んだのは、実は闇神隊長の手引きだったのではないか等という過激な陰謀論も飛び出している。

尤も、そういった噂はあくまでも酒場の隅など裏でひっそり囁かれている類のものであり、表立って闇神隊を疑うような声は無い。

「さてと、新しい動力装置の具合を確かめに行くとするか」

購入した安物の指輪に神技の増幅効果を付与しながら、悠介はソルザックの店に向かった。

ブルガーデンの第一首都コフタ。シャルナー神殿からコフタの地下宮殿に王宮を移したりシヤレウス女王は、ガゼツタのシン八王宛てに綴った親書を読み直しながら今後の政策と戦略に想いを馳せる。リシヤレウスは度々シン八に親書を送っては、彼女が推し進める亡き父王の目指した理想、五族共和の構想を持ち掛けていた。

フォンクランクのエスヴォブス王には既にディアノース砦にて行なわれた会談の席で話を通してあり、世界の安定と平穩を望むエスヴォブス王はこの構想実現の提案に前向きで、トレントリエツタのクリフザツ八王も特に四大神信仰や等民制度に拘っていない。

五族共和構想を実現しようとした場合、四大神信仰の影響が強いフォンクランクでは早い段階で国民への説明が必要になるであろうが、トレントリエツタは国民性からして反対者も少ないと思われる。

最大の障害となったであろうノスセンテスが滅亡している為、後はシン八王が提案に同意してくれば、五族共和構想の実現に向けて四大国が連携し、円滑に進めて行く事が出来るであろうと睨んでいる。

『シャルナーの神器』を手に入れてから、リシヤレウスはその恩恵を最大限に使って活動を続けてきた。何しろ疲れない。集中すれば朝から晩まで数日ぶつとついで修学に励む事も出来るのだ。

お願いですから休んで下さいと双子の女官に諫められたりしつつ、食事と諸々の生理現象の処理以外は全て政務と修学に費やし、籠の中の鳥として飼い殺しにされてきた数年分の知識を吸収していった。

「これでいいわ……。シン八も最近は返事をくれるようになったし、きつと分かってくれる筈」

手紙の包みを閉じて封をし、女王の印を押す。親書は直ちに伝書鳥でガゼッタのバトルティアノーストへと送られた。

バトルティアノーストの中枢施設最上階にある旧神義堂、その周囲に広がる空中庭園を歩く小さな人影。邪神の奇跡をその身に受け継ぎ、三千年の時を生きるガゼッタの里巫女アユウカス。朝昼晩とこの庭園を散歩するのが彼女の日課となっている。

ブルガーデンから飛来する伝書鳥は大抵この庭園に下りてくる為、最近ではリシャレウスからの親書をアユウカスがシン八に届ける役を担っていた。

「リシャ嬢から恋文が届いておるぞ」

「親書と言え」

「似たようなもんじゃろが」

「……………」

かつかと笑いながら散歩の続きに出かけるアユウカスの小さな背中を溜め息で見送り、シン八はリシャレウスの印が押された手紙の封を切る。内容は何時も通り、五族共和構想の実現について。その他、自身の近況や世界の動向に対する見解など。

シン八は返事を書く場合もあれば書かない場合もあるが、五族共和構想に対する返答を避けて他愛の無い話題の返事を書いていると、少々文通染みてきた感もある事を気にしていた。

パトルティアノーストを取り戻して以降、国内の様子を観るにつ
け、以前はガゼツタ内部に見る大多数の無技人の中の神技人に対し
ては、少数故に謙虚であるから同胞として認められているという程
度の認識だったのだが、現在は元ノスセンテス人も取り込み、無技
人も神技人も同格平等的に皆肩を並べ、大手を振って歩いている。
元からガゼツタ人であった者とそうでない者との間で多少の軋轢
や戸惑いは見られるが、特に問題となる程ではない。

シン八自身も邪神絡みで彼方此方出かけて他国の神技人達と触れ
合う内に、彼等も単に生まれた国の環境によつて価値観や思考を左
右されていたダケだと思えるようになった。なので、リシャレウス
の提案も悪くないような気もするという所まで気持ち傾いていた。
ガゼツタ内でシン八と対立する融和派も、この構想になら賛成だ
ろう。

「白族の誇りか、新しい時代か……」

とは言え、これまで白族帝国の復興を掲げて邁進してきた覇者へ
の道。今更方針を変えて融和に転換すれば、ガゼツタの根幹を揺る
がせる事になりはしないかという不安もある。反対派が多数出た場
合、融和派の抑え込みに比べて激しい抵抗が予想される。

と、そこまで考えて、シン八はリシャレウスの提案を受け入
れること前提で考えている自分に気が付いた。

「……おまけに、この俺が不安を懐くとはな」

遂に自分も持つ者の失う不安を得てしまったかと自嘲しつつ、シ
ン八はこの先に広がる新しい時代に向けて如何に国の舵取りをする
か、選択の岐路に来ている事を実感するのだった。

86話：特別討伐隊

深夜

ヴォルアンス宮殿の一室にて、集まった面々が声を潜めながらあれやこれやと議論を交わす。ヴォーアス家に次ぐ名門と呼ばれる家の者や宮殿官僚、神民衛士隊の管理に就く者など、様々な身分の貴族達が集まっている。

彼等は立場や身分は違えど、目的を同じくする同志として集う者達だ。その目的とは闇神隊長を失脚させる事。時折このような会合を開いては、今後の対策や謀を話し合っていた。

「姫様に見合う身分の要求は無かったようだが、流石にあそこまで武勲を上げる相手となると直接的な手出しは危険過ぎるな」

「本人をどうしようという方法は元から選択肢に無い事だ。やはり周囲から切り崩して行くのが妥当だろう」

闇神隊長がヴォレット姫の庇護下にある限り、本人にプレッシャーを掛けようとしても全く気にした様子もなく、本当に分かっているのではないかと思える程の余裕を見せられてしまう。

馬車乗り場などで順番を譲らせて格の違いを思い知らせようとしても、どうぞどうぞと譲って直ぐに次の馬車へと移ってしまう。廊下で擦れ違ふ時も、こちらが譲らせる前に端に寄って道を開ける。

ハナから張り合う気が無いといった態度だが、姫様の懇意を一身に集めている事からして、些細な格の誇示など無意味と考えている

のかもしれない。そうして格の誇示を躲されたこちらは相手にされていないと下々の者に笑われ、何故か闇神隊長の株が上がるのだ。今はおくびにも出してないが、このまま行けば間違いなくヴォレット姫の寵愛を得て次期国王の座に手を掛けて来るのは目に見えている。変わり者を装い、無技の娘を想い人であるかのように振舞って隠れ蓑にしているようだが、我々にはお見通しだと彼等は繰り返すを重ねる。

「まったく忌々しい」

「問題は奴が英雄と謳われて一人際立っている事だと思う。これをどうにかするには、やはり対抗馬が必要だ」

「闇神隊の功績に並べる程の手柄を上げられるような者が、果たして見つかるのか……？」

当の闇神隊長はガゼッタの不穏な動きを牽制する為に出撃して早々、港街に潜伏していたエルフォドラス家当主、ヴォーレイエの身柄確保に成功し、リーンヴァール解放戦では三務官の一角、風の刃組織最強とされる軍務官ベネフォストを撃破。

しかも少数で五倍以上の敵を相手にして、味方に一人の負傷者すらも出さず勝利した事ですます名声が高まっている。

「我々で作ればよい」

「どうやって？」

「今は大衆の注目を惹き付けるのに最適な問題があるだろう」

「……魔獣被害の事が」

成る程と頷く面々。援軍衛士団に参加した衛士達から腕の立つ者や功績を上げた者を引き込み、活躍させる事で闇神隊の功績に対抗

できる存在を作り上げる。一人で無理なら複数人で挑めば良い。

魔獣退治ならば一般大衆の注目を浴び、ヴォレット姫の関心も呼ぶ事が出来るかもしれない。更に各国で討伐隊が組織される程の被害が出ている現状、うまく成果を上げれば国内外にも名声を響かせ、注目を集められる。

大衆に限らず、人々はそれが有り触れたモノであれば何時でも新しいモノを好む。全く新しい考えや価値観などに対しては躊躇や反撥も招くが、人々を導く無敵の勇者的なありふれた存在ならば、新たな英雄は歓迎されるものだ。

「闇神隊長以上の英雄達を祭り上げるといふ訳か」

「その通り。幸いな事に、例の調整魔獣に関しては確実に討伐を成功させられる要素がある」

「魔笛か……。しかし、あれは闇神隊長の神技でなくては簡単には複製できないと聞いたが？」

「複製させれば良いではないか、奴に断る理由は無いだろう」

闇神隊長えいしゆに代わる新しい英雄を作り出す手伝いを、闇神隊長にやらせる。その発想はここに集う者達の琴線を大いに奮わせた。

反闇神隊派の者達による一方的な『最高の意趣返し』が画策されている頃、悠介は自宅の部屋で新しい乗り物のアイテムデータファイル作りなどを進めながら、昼間ソルザックに聞いた街の色々な噂や商人達の話などを思い返していた。

闇神隊が旧ノスセンテス地方から移住してきた人々の間であまり評判がよろしく無いらしいという話は、悠介も致し方ないと思っ
ている。

シンハ達が襲撃を仕掛けた日、パトルティアノーストの宮廷区にいた闇神隊は中枢塔を奪回、防衛する力を持ちながら協力もせず
自国の大使を連れてさっさと逃げ出したと思われるようだ。

脱出そのものは当時の神議会メンバーである中等神民議長達からの要請に
応えたモノなのだが、積極的なガゼツタ軍との対峙を意識的に避けていた部分も
あるので、噂はあながち間違いでもない。

ガゼツタの潜入部隊を手引きしたのでは？ という噂はガゼでしか無い
とは言え、度々シンハと親しげに話している所を色々な人に目撃されて
いるので、疑いを懐く人が居てもおかしくないと考えていた。

何れにせよ、これらの噂や印象は昼間の露店市場でのような不正が
しつかり取り締まられるようになり、移住者達の暮らしも楽になれば
自然に消えて行くモノとして楽観視している。

もう一つ、魔獣被害の話で気になる情報があった。討伐に必須となる
魔笛は一応、ガゼツタを除く各国の討伐隊に幾つか無償で貸し出されて
いるのだが、明らかに調整魔獣と思しき魔獣の中に魔笛の行動阻害効果
を受けないモノが混じっているらしいという。

まだ詳しい事は分かっておらず、単に群れの中に普通の魔獣が混じっ
ていただけという可能性もある。真偽は不明だ。

「シンハが言っただけ調整魔獣の拡散に気をつけろって、この事だった
のかな……」

神技阻害の能力を持たない魔獣であっても、群れを成した魔獣が非常に
厄介な存在である事は、魔獣施設の一件で良く知られている。悠介は
今後も被害が増えていくようであれば、何か討伐用に武器を

作る事も視野に入れようかと考えていた。

討伐用の武具といつても、神技人が神技に頼らず武器で魔獣に太刀打ちできるよう補助効果を付与しただけのモノになるが。

「神技の指輪との兼ね合いが面倒になるよなあ」

既に今更感はあるものの、穏やかな日々を得んが為にと特殊効果の付与された道具は簡単には作れない事しているので、何か作っても出すタイミングが重要だ。簡単に強大な力を得られる道具など、下手に大量生産すれば争いの原因にもなり兼ねない。

「ふっ……」

カスタマイズ画面の中に浮かぶ試作列車のデザインを微調整しながら、悠介は何時かこういう乗り物や玩具ばかり作って平和に過ごせる日が来ればいいなあと、すっかり夜明けが遅くなったカルツィオの空を窓越しに見上げた。

「……こんな夜更けに何を一人で黄昏てんのよ」

「どうわっ」

いきなり背後から声を掛けられて飛び上がる悠介。夜食を持ってきてくれたラーザツシアが、何やら切なげに憂いた表情で窓を見上げている悠介に夜明けのツッコミを入れた。

態々気配を消して部屋に忍び込んで来た事は内緒である。

数日後、ヴォルアンズ宮殿の自室にて色々とカスタマイズ画面内のアイテムを弄っている悠介の所へ、何時ものようにやって来たヴォレットが何やら特別な仕事を申し付けてきた。

「魔笛の大量発注？」

「うむ。なんでも特別討伐隊とやらを編成して特に魔獣被害の多い地域に送り込むのだそうじゃ」

魔獣被害の拡大による流通の停滞を懸念した宮殿官僚や、交易商人の斡旋などを主な収入源にしている貴族達によって短期的な討伐強化計画が立てられ、既に人員の募集も掛けられているらしい。

「リーンヴァール解放戦に出た者にも声を掛け捲つてるようじゃな」「ふーん。まあ、魔笛は材料も揃つてるし直ぐに揃えられるから用意しとくよ」

各国で討伐隊が動いているのに魔獣の被害はあまり減つた様子が無い現状、ここらで挺入れでもするのだろうと、悠介は魔笛の発注を了承した。うむと頷いたヴォレットは伝えるべき用事も済ませたので、悠介の部屋に來た本来の目的に移る。即ち玩具ガラクタ漁り。

最近では魔獣被害の問題を除いて特に大きな事件も無く、ガゼツタの動きを睨む情勢にも不穏な気配は感じられない。平穩で安定した日々が続いている事もあり、宮殿にいる間の悠介は以前のように実験も兼ねたガラクタ作りをやっていた。

未だ空飛ぶお皿を越えるお気に入りの携帯型玩具は現れないが、時々面白いモノが手に入るので毎日小まめにチェックしに來ているヴォレットは、部屋に置いてある乗り物らしき台座に興味を示す。

「で、これは何じゃ？ 新しい乗り物か？ 見たところ随分と細長い車体をしておるようじゃが」

「それは今構想中の列車って乗り物の試作車両、の台座」

「ほほう、列を成す車とな？」

「ああ、連結して決まったルートを走らせる輸送車両な」

鉱山にあるトロツコを街中で走らせるようなモノだと説明すると、ヴォレットは『な〜んだ』とつまらなそうに試作車両の台座から興味を外した。ヴォレットとしては運搬作業に使うような堅実で地味な乗り物などよりも、もっと刺激のあるモノが欲しい。

「もつと面白いモノはないのか？」

「安全第一だからな、これが上手くいったらジェットコースターでも造ってやるよ」

「むむ！ なんだか分からんが面白そうな響きじゃなっ」

「安全面考えるとあんま過激なのは無理だけどな、結構楽しめると思うぞ？」

ぐりんぐりん回転するような絶叫系でなくとも速度と高低差、急カーブの組み合わせでそれなりに楽しいコースターは造れるだろうと想像するユースケは、遊園地のような娯楽施設があってもいいかな等と色々新しい構想の下地を思い浮かべた。

「ふふっ わらわはユースケと居ると楽しくて仕方がないぞ。ずっとこんな平穏が続くと良いのにな」

「……そうだな」

嬉しそうな微笑みを向ける炎の姫君に、悠介は何となくしんみりとした雰囲気でも相槌を返した。

翌日、悠介は複製した魔笛の受け渡しに宮殿敷地内の屋外訓練場までやって来た。整列している特別討伐隊の衛士達はまだ数も疎らだが、人数が揃い次第トレントリエッタ方面の街道へ出発する予定のようだ。

特別討伐隊を組織した者達の代表である宮殿官僚が魔笛の受け渡しに応じるべく悠介の前に現れたが、何故か付いて来ていたヴォレットに気が付くと、魔笛そっちのけで恭しい挨拶を始める。

「おおう、これはこれは姫様に御足労して頂けるとは感激の至り、選ばれた衛士達一同を代表して」

「ああ、よいよい、あまり畏まるな。わらわはユースケにくっ付いて来ただけじゃ」

当の悠介は、彼等も覚えを良くしようと思死なんだろうなあと自分が蔑ろにされている事を歯牙にも掛けない様子で、ヴォレットへの御機嫌麗しゆう云々から始まる貴族貴族した挨拶セットが終わるのを待っていた。

「おっと、これは失礼した。姫様のお気に入りである英雄殿を御待たせしてしまうとは申し訳ない」

「終わったかな？ 官僚さんも大変ですねえ」

皮肉を籠めた言葉を浴びせる宮殿官僚に素で返す悠介。一瞬、宮殿官僚の頬が引き攣る。

反閻神隊派の悠介に対する認識は、偶々ヴォレット姫の珍しいもの好きな性分を満足させる特殊な神技を宿していたが故に懇意にされ、その神技を持つ特性によって偶々事が上手く運び、偶々武勲を重ねるに至った運の良い成り上がり者、だ。

『姫様の我侷』と『賢王の親バカ』による色々すつ飛ばし捲って簡略化された任命式のグダグダな有り様からして、どう見ても高貴な者とは思えない神技が珍しいだけの田舎者を荣誉ある宮殿衛士に迎える、その事に反撥心を募らせた者達の総意である。

ヒヴォデイルを家督とする名門ヴォーアス家と縁深い家の者や宮殿衛士隊員達の間では、元宮廷神技指導官のゼシャルドが保護した氏と親しい人間である事に加えて、神技の指輪を配布している効果もあってか、悠介に対する認識は悪いものでは無くなっている。

が、その事がまた反閻神隊派の反撥心と猜疑心を招くという悪循環を作っていた。彼等が実際に宮殿周りで目にする閻神隊長の姿は、とても戦場で並み居る敵兵を薙倒す猛者とは思えない、姫様の道楽に心える優男そのままなので、数々の武勲に未だ懐疑的な者も居る。

閻神隊に就いている衛士達も、ヴォーアス家を始めとする閻神隊長肯定派の貴族達も、大衆を心理的に誘導するエスヴォブス王の策に乗って姫様のお気に入りを英雄と持ち上げる事で、姫様の関心を引こうとしているのではないか。彼等はそんな風に思っていた。

「では、確かに受け取りましたぞ。これで調整魔獣も衛士達の敵ではありませんな」

「ん……その事なんですけど、魔笛の効かない魔獣が混じってるって噂があるんで、十分注意するようにお願いします」

魔笛で動きを封じられるのはあくまでも魔獣兵として使われていた調整魔獣であって、通常の魔獣には通用しないのだ。過信は禁物だと念を押す悠介に、代表者の宮殿官僚は指揮官に伝えておくだけ返すと、特別討伐隊の衛士達に魔笛の配布を始めた。

「大丈夫かなー」

「なあに、実際に戦うのはリーングヴァール解放戦の経験もある衛士達じゃ。無理はせんじやろう」

心配するなと悠介の背中を叩いて腕を取ったヴォレットは、宮殿の馬車乗り場を目指して歩き始める。今日は薬品作りと太陽苔の栽培を進めているラーザツシアの様子を見に、悠介邸の地下研究室を訪れる予定なのだ。

「そついえばユースケよ、お前に唱を捧げた唱姫とは遊んでおるか？」

「ぶつ　せめて元気にしてるか？　とかにしるよ」

ラサナーシヤも栽培研究の助手として時折ラーザツシアの研究室で水質を弄ったり解析をしたりと活動しているが、彼女の本領が発揮されるのは広いコネを使った情報収集、諜報活動である。

任務上、主に低民区での活動を中心に行っている悠介は、見聞きする情報にも偏りが出る為、最近はラサナーシヤが中民区以上の区画に住む人々の噂話などを集めては悠介に世情を伝える情報源となっていた。

「大体、不意打ちだったとはいえスンの気持ちにも応えられなかった俺が女遊びとか……」

出来る訳無いだと、鮮血の結末を思い出して段々声を沈ませる悠介。今度こそ大丈夫、きっとやれるとか呟いている。

「あー……すまん、そう落ち込むな。ワザとじゃ」

「やっぱりか！」

「わははっ」

宮殿内で悠介に敵意を懐く勢力が着々と策略を進めて行く中、本人は呑気に割と楽しい時間を過ごしていたりするのだった。

87話：宮中の敵対勢力

フォルナーの風月に入り、太陽が真昼頃の僅かな間にしか昇らない夜の季節を迎えたカルツイオの大地。

サンクアディエツトの街では魔獣退治に出撃した特別討伐隊の話題が、意図的な吹聴による不自然な勢いで大衆の間にも広まり始めた今日この頃。低民区の展望塔広場前には珍しい乗り物を見物しようと大勢の人だかりができていた。

「準備はいいか、ソルザック」

「こっちは何時でも行けますよ」

複数の車輪を持つ細長い車体、試作列車の公開試験走行を進める悠介とソルザック。他の闇神隊員とその部下達も手伝いに集まっており、当然の如くヴォレットも炎神隊を護衛につけての『御忍び』で見物に来ていた。

この前、悠介から列車について鉦山にあるトロツコのようなモノだという説明を受けた時は、イマイチ興味が沸かなかったヴォレットだが、部屋に置いてあった縮小モデルと比べて実際に走らせる試作列車は大型馬車を連結したような大きさに中々に迫力がある。

特に、街中を走るといふ点に興味を懐いて見物に下りてきたのだ。何れは宮殿の外で走らせたいと思っているヴォレットの専用車両は、警備面などの問題で今の所は宮殿敷地内の訓練場施設でしか乗り回せない事になっていた。

当初、線路を敷いて走らせようと考えていた悠介だったが、今後
も街の拡張を行なう度に敷き直しをしなくてはならなくなる事や、
線路上に立ち往生する馬車やら人込みやらの問題を考えて今回は見
送られた。線路上を走る乗り物はジェットコースターが先になりそ
うだ。

試作列車は全長約六メートル、全幅二メートルの一両編成、十輪
車両。十の乗客席に運転席が一つ。八基のギミックモーター動力を
使って時速約二十キロ近くまで出せる計算で設計している。

路面電車の小型版をイメージして作られた箱型の車体。線路敷き
を見送ってハンドルで方向転換が出来るよう作り変えた時点で、列
車というよりもバスに近い乗り物になっていた。

理想は各区画門と街の出入り口、牧場方面や露店市場など、街の
中心的な場所と住宅街を繋ぐ手軽な移動手段として定着させる事。

一応、サンクアディエットの街中を走る乗り合い馬車のような仕
組みはあるものの、料金もそれなりに高く、低民区の一般民に利用
される事は滅多に無い。金持ちは自前の馬車を持っているので、街
中の移動を対象にした乗り合い馬車は殆ど使われていないのが実状
だ。

安価な大衆の足として住民の活動範囲を広げる事ができれば、街
の活性化にも繋がる。

「それじゃ、試験走行開始ー」

悠介の合図で運転席に座るソルザックがギミックモーターのスィ
ッチを入れる。一瞬、ガクンと揺れた車体がゆっくりと前進を始め
た。複数のギミックモーターによって奏でられる唸るような機械音。
見物する人々は耳馴染みの無い不思議な駆動音に耳を敬てた。

三段切り替えのギアを上げて徐々に速度を増す試作列車。引く馬も無しに一般の馬車並みの速度で走る珍しい車体に、人々から歓声混じりのざわめきが上がる。そのまま展望塔の周りを二週ほどして元の位置でゆっくり停車。最初の試験走行は上々の結果だ。

「思ってたより安定してたな、曲がる時はどうだった？」

「かなり自然に曲がれましたね、これなら横倒しになるような事はないでしょう」

次は客が乗っている状態での足回りと安定性を調べる実験を行なう。重くなれば安定性も増しそうだが、慣性も強く働くので方向転換中に横転する危険性も増す。加減速時、停車時の車体や車輪、軸に掛かる負荷など、実際に試してみなければ分からない要素は多い。

「じゃあ、のっけから十人いつとくかな。乗せる人は」

「乗るぞ！ わらわが乗る！」

「却下、安全が証明されるまで自重してくれ」

「ええ〜〜！」

試作列車が展望塔広場を一周する頃には乗りたくてウズウズしていたヴォレットだったが、あっさり却下されて頬を膨らませる。

ゴーカートモドキな小型車両なら多少ぶつかろうが暴走しようが然程の危険もない。しかし、これだけ大型の車両ともなれば万が一という事もある。元いた世界で自動車事故の怖さというモノを知識でだが知っている悠介は、慎重に進めて行こうと決めていた。

結局、闇神隊のメンバーを含む衛士を規定人数分乗せて十数回走

行、重量オーバー気味で走らせるなどの実験を重ねて何処に影響が出るかを調べ、車輪の強度を少し調整してから試験走行を終了。最終的な量産型の仕様を定める。

「後は運転手を雇って、街中で営業運転させる許可待ちだな」

「この街は広いですからね、きつと需要は伸びますよ」

それなりの利益も見込める事を期待するソルザック。今はまだ整えられた石畳の上くらいしか満足に走れないが、開発を続けていけば少し整地された街道くらいならば普通に走らせられるようになるであろう手応えは掴んだ。

大衆用の交通機関として事業化するなら、運転手や車両の整備をする人、経理を担当する人に伝達係りなど、大勢の人を雇って管理しなくてはならなくなる。そういった事業の元締め役を任せられる人材は、ラサナーシャのコネで紹介してもらえば問題ない。

「じゃあ今日はこれで解散という事で、みんなお疲れさん」

公開試験走行の終了が告げられ、衛士達はお疲れ様でしたーとそれぞれ通常任務に戻って行く。広場に集まった見物人達も、動力車に興味のある者は残り、他は露店を見に行ったり仕事に向かったりと街に散らばって行った。

「あつしらも一旦宮殿に戻りやすが、隊長はどうしやす？」

「俺はこれで戻るよ」

衛士隊馬車の御者台上がって引き揚げ準備に入っているヴォーマルの問いに、悠介は試作列車を指し、次いで反対側に視線を向けた。視線の先では、護衛の炎神隊に囲まれたヴォレットが『のせるーのせるー』と目で訴えながら乗せるオーラを放っている。

「了解しやした」

ヴォーマルは納得の笑みを返しながら馬車の手綱を軽く引いた。

宮殿までの帰り道を試作列車に乗ってノンビリと進む。運転手はソルザック。悠介はスンやヴォレット、クレイヴォル達と客席に座っている。試作列車の後方には護衛の炎神隊員達を乗せた衛士隊馬車が続いていた。

「うむ、ちと遅いが馬車とは違った趣きがあって面白いのう」

「街の観光にも使う予定なんだそうですよ？」

試作列車の窓から早くも夕闇に包まれ始めた街の風景を眺めているヴォレットと、その話し相手を務めるスン。薄暗い車内。一つ後ろの席に並び座る悠介とクレイヴォルは、最近の情勢について意見を交し合っていた。

話題となるのは魔獣被害に関して、先日出撃した特別討伐隊の活動状況。

「今朝港街に到着したという連絡が入ったので、本格的な活動は二日後くらいからになるそうだ」

「随分急ぎ足だな、向こうの討伐隊との連係とか大丈夫なのか」

「いや、彼等は単独で動くらしい。急ぐのも出来るだけ早く手柄を上げたいのさろう」

何故またそんな危険なやり方をと首を捻る悠介に、クレイヴォールは『貴殿に対抗しているのだ』と若干眉を顰めながら、特別討伐隊の編成に絡む背後の存在に触れた。宮殿内で実しやかに囁かれる反閻神隊を掲げた一派の存在。

「古参の重鎮達には未だ貴殿の事を認められない方も多くいる。宮殿に新しい血を入れるにも、家格と序列を重要視する御仁達がな」
「まあ、それは分かるけどね」

長年宮殿に仕えて王家に貢献し、苦勞して現在の地位を手に入れた彼等にとつては、ヴォレット姫に気に入られたと言っただけで宮殿に召抱えられ、あまつさえ他の者には機会さえ与えられなかった『敵兵の討伐』によってあれよあれよと英雄に祭り上げられた馬の骨だ。

「普通にいい気はしないだろうしさ」

「せめてゼシャルド氏が貴殿の後見人でもあったならば、少しは違つて来るのだろうが……」

悠介がカルツイオに降臨した時、フォンクランクはブルガーデンとの攻防の真つ最中で、ゼシャルドはブルガーデン側の作業員を釣る為に密命活動中だった。色々と時期が不味かったのだ。

何れにせよ、悠介自身は政務などに関わる気は無く、この試作列車のような発明？ を使つて社会に貢献しながら平穩に暮らして行く事を目標にしているの、特別討伐隊が手柄を上げて背後にいる反閻神隊派が安心出来るなら、それに協力する事もやぶさかではないという構えだった。

「この前ちらつと聞いたんだけど、何かブルガーデンの女王が中心になつて色々纏まりそうなんだろう？」

「その話は、王と極僅かな側近しか知らぬ事の筈だが」

「ああ、実はレイフォルドから聞いた。極秘だけどクレイヴォル隊長となら話題に出しても良いってさ」

「彼か……。確かに、王は例の構想に前向きな姿勢を見せている。問題はやはりガゼツタの動向といった所のようだ」

無技人国家が神技人国家と共存する事が出来るのか。ガゼツタの選択如何で五族共和構想の実現はもとより、四大神信仰とそれに伴う等民制度にも大きな影響が予想される。

ガゼツタが対立を選べば、神技人と無技人の対立がまず明確になり、その場合フォンクランクは五族共和構想の最終段階である四大神信仰の放棄を行なわないので、四大神信仰に絡んだ等民制と非等民制の対立によってフォンクランクとブルガーデンの関係も微妙にトレントリエッタは国境を接するガゼツタの脅威に対抗する為、フォンクランクとの同盟を深めて等民制度を維持する事になり、ブルガーデンとは対立する立場にならざるを得ない。

ノスセンテスが健在だった頃と違い、今やガゼツタもフォンクランクに次ぐ大国と言って良い。リシャレウス女王の持つ理念からして、ブルガーデンとガゼツタが組むような事も考えられるのだ。そうなるともう、対立の連鎖が止まらなくなる。

「シン八、今の領土で納得してくんないかなあ」

「あの野心的な男が、果たして現状で満足するかどうか」

ヴォレットとスンが楽しげにお喋りをしている後ろで、悠介とクレイヴォルの割と真面目な話は、試作列車が宮殿に到着するまで続けられたのだった。

公開試験走行から数日。乗り合い動力車の事業構想を纏めて書類の提出などを済ませた悠介は、前照灯や車内の照明にリーンプの使用を思い付いたので、必要な太陽苔が手に入るかどうか、苔の栽培状況を聞きに一旦自宅に戻ってラーザツシアの研究室を訪れた。

「あれ？ ユースケ」

「よう、ちよつと様子見に来たよ」

「あら、ユースケ様」

「お、今日は来てましたか」

地下研究室にはラサナーシャの姿があった。彼女がレーザーシアを手伝いに悠介邸を訪れるのは、宮殿に出勤する悠介とスンが屋敷を出た後になるので、普段は意識しなければあまり顔を合わせる機会がなかったりする。

「丁度良かったですね。実はユースケ様のお耳に入れようと思っていたお話が……」

「もしかして、良くない話？」

「ええ、かなり」

うわあと肩を竦めた悠介は、作業台を挟んで二人と向かい合い席に座る。ラサナーシャの話とは、先日クレイヴォルにも聞いた宮殿内の反閻神隊派勢力に関する内容であった。クレイヴォルの話では、そういう一派の存在を確認をしている段階で、まだ詳しい実態までは把握できていないという事だったのだが

「一派を纏めているのはイヴォール家のヴォルダート侯爵のようですわ」

「えらい具体的な名前が出て来たなオイ」

「ラサのコネって宮殿官僚から路地裏の浮浪者までホントに幅広いもんねー」

ラサナーシャの持つ情報網は個人的な付き合いのある貴族や使用人、裏の仕事に携わる者達と交流を持つ唱謡いなど、実に多種多様。局地的にならレイフォールドの諜報力をも凌駕する程の情報収集力を誇る。

ヒヴォデイルのヴォーアス家に次ぐ名家であるイヴォール家は宮殿内での発言力も高く、表立って王と意見を対立させる事は無いが、王の政策に不満がある時は幅広い派閥を利用して圧力を掛けるような事もしばしばだという。

「へへ、中々やり手な人なのかねえ」

宮殿衛士隊を中心に上流階級の者ばかりで占めるヴォーアス家の派閥と違い、イヴォール家は宮殿勤めでも家格の低い貴族家や、神民衛士隊の管理に回される貴族とは名ばかりのような弱小貴族家の者も自身の派閥に取り込んでいる。

そうして口利きをしてやるなどの優遇と工作で宮殿のあらゆる部署に己が息の掛かる者を就かせているのだ。

「ユースケ様のお屋敷で働く使用人達にスン様の事を知らせないよう工作したのも、ヴォルダート様の指示だったと噂されています」

「敵に認定」

「はやっ」

侯爵に喧嘩売る気？ と嘘っぱく驚いてみせるレーザーシアに、冗談だよと思わせ振りな笑みを返す悠介。腹芸モドキなコミュニケーションを見せる仲の良い二人に『あら羨ましい』などと可愛く拗ねて見せるレーザーシア。

重い話を重い雰囲気が続けると気持ちが悪くなるからと、互いにわざとらしい振る舞いでおどけて見せる事で、少しばかり話題の空気を軽くしたりする。この辺り、相手の気持ちを読む事に長けるレーザーシアとレーザーシアが悠介に配慮してくれていた。

「しかし、そうか。結構面倒なのに睨まれてるんだなあ」

「いつそ本当に敵対認定しちゃえば？ 邪神効果で自滅するんじゃない？」

「いやいや、そりゃ不味いだろう。宮殿の中樞で柱になってるような人が潰れたら国が傾きかねわ。つか、邪神効果とかないから」「ヴォルダート様が掌握なさっている部署では水面下でヒヴォディル様の手の者が関係者の籠絡に動いているようですよ？」

本当にやたら踏み込んだ情報だなと感心しながら、悠介は穩便に侯爵一派の気に入らない奴リストから外して貰う方法でも考えようかと知恵を絞る。

当面は特別討伐隊が上手く手柄を立てて良い気分になってもなっていないとすれば、そうそうちよっかいも掛けて来ないだろうと思いたい。

「消極的ねー。まあ、ユースケらしいけど」

「俺は平和主義者だからな」

「え？」

「え？」

きよとんとした表情を向けるラサナーシャとラーザツシア。軽くへこむ悠介。

「いぢめられてるのか俺は、いぢめられてるのか」

「あつははははっ もうっゴメンってば、そんな拗ねないでよお」
「クスクス、ごめんなさいユースケ様」

夕焼け色の昼下がりに、悠介邸の地下研究室に響く笑い声。傍からは美人姉妹といちゃついているようにしか見えない闇神隊長に、執事長のザツフィスが宮殿から至急戻るようにと知らせが届いた事を伝えに来た。

「お急ぎ下さい、こちらに馬車を用意させてあります」

「ああ、ありがとう。しかし、いきなり何だろうな？」

「なんでも先程、特別討伐隊が壊滅したという一報が入ったとお話です」

「え……まさか」

悠介の呟きに、詳しい情報は宮殿にて説明がなされるでしょうと答えたザツフィスは、一礼しながら馬車の扉を閉じた。

88話：対策会議にて

太陽の出ている時間が短いこの時期、森を抜ける街道は昼間でも薄暗く、夕刻になれば夜中と変わらない程の暗闇に包まれる。

港街からトレントリエッタとの国境近くにある宿場街へと移動中だった特別討伐隊は、街道脇で休憩していた所を魔獣の群れに急襲されたのだという。まさかフォンクランク領内で魔獣の襲撃に遭うとは思っていなかった特別討伐隊の衛士達は完全に虚を衝かれた。

衛士として一人一人の実力は水準以上だが、短期間で編成された寄せ集めでもある特別討伐隊は統制面にも問題が残っており、神技阻害の波動で風技の伝達や広伝による指揮が封じられていた為、命令系統が混乱して組織的な迎撃行動が遅れてしまう。

なんとか態勢を立て直して反撃に出ようとした時には、既に三分の一近い衛士が魔獣の牙に倒れていた。

更に悪いことは続き、調整魔獣に対しては絶対的な効果を持つ切り札であった筈の魔笛が、明らかに神技阻害の波動を放っている魔獣の群れに全く効果を及ぼさなかったのだ。夜道の如く視界の悪い街道で魔獣の群れを相手に神技の恩恵も受けられず乱戦状態。

結局、港街方面から宿場街へと向かっていた傭兵団が偶々現場を通り掛かり、生き残っていた衛士達は彼等の援護を受けてどうにか港街まで撤退する事が出来たのだった。

結構な資金をばら撒いて腕利きの衛士を集め、下々の大衆にも散々宣伝をして戦果を期待しつつ送り出した特別討伐隊が一度も討伐を果たせず逃げ帰ってきた事で、今回の魔獣被害対策を企画したヴォルダート侯爵は面目丸つぶれである。

だが、ここまで盛大に転んでタダで起きるほど潔くもなければ愚かでもない侯爵は、すぐさま詳しい情報を集めて分析し、今回の結果と状況を如何に有利な方向へ転換させるかと考え、策を練った。

「では、ユースケ殿がわざと特別討伐隊に粗悪品の魔笛を用意したと、貴殿等はそう主張なされるのか？」

「そういう噂を耳にした、という話だ。事実、大損害を被ったのは魔笛が効果を発揮しなかったからだと聞いている」

「発注された相当数の魔笛を随分と短い期間に用意したという事ですからなあ、ちゃんと品質を確かめたのか疑問が残りますな」

「確か低民区で事業を行なう為に別の作業を行なっていたとか。用意された魔笛が真面目に作られたモノなのか、些か……」

王の御前で開かれる対策会議にて、集まった各方面の関係者達が今回の事態にどう対処すべきかと議論を交わす中、ヴォルダート侯爵の派閥に属するイヴォール派の宮殿官僚や衛士隊関係者から闇神隊長の仕事に対する疑念が示される。

優秀な衛士を多数失った事はフォンクランクにとって小さくない痛手でもあり、責任の所在も問われるこの会議で殊更に闇神隊長を糾弾しようとする論調にはヴォルダート侯爵の思惑が透けて見えるも、敢えてそこを指摘する者は居ない。

当の侯爵は腕組をして目を閉じ、黙して議論に耳を傾けているが、この場にいる誰もが議論の方向性に彼の意図を感じていた。

そこへ、急遽自宅から宮殿に呼び戻された悠介が、クレイヴォル炎神隊長から事情の説明を受けながら会議の場へと現れた。何故かくっ付いて来ているヴォレットの姿に、居並ぶ会議の参加者達から戸惑いのざわめき上がる。

闇神隊長がヴォレット姫のお気に入りであることは周知の事実。その姫様の前で率先して闇神隊長を糾弾すれば、自分達に対する覚えが悪くなってしまうという不安から先程までの論調で糾弾を向ける事に躊躇するイヴォール派の面々。

領袖リョウシュの判断を仰ぐかのように向けられた自身の派閥ハワクに属する者達からの視線に応えてか、今まで黙って会議の進行に意識を向けていたヴォルダート侯爵が徐に口を開いた。

「姫様、今は重要な会議中ですぞ。クレイヴォル炎神隊長殿は姫様をしつかり補佐して頂きたいですな」

ちゃんと行動を管理して教育係りの義務を果たせと、暗に退出させるよう促すヴォルダート侯爵に対して、返答に窮するクレイヴォールが言葉を選んでる隙に、ヴォレットは自身も会議に参加する旨と理由を告げる。

「闇神隊とユースケはわらわの管轄にある衛士じゃからな、闇神隊の活動についての議論ならわらわも聞く必要があるのじゃ」

「遊戯の話ではありませんぞ、姫様」

「特別討伐隊の事じゃろう？ 魔笛が通じなかったそうじゃな。安心せい、公私は弁えておる」

糸も理もなく庇護するつもりで来た訳では無いと言って壁際の適当な椅子に腰掛けるヴォレット。普段のちよっと変わった嗜好を持

つ我俣御転婆姫というイメージとは少々纏う雰囲気の違っている炎の姫君に、この場に集う一同は戸惑いの色を深くする。

ヴォルダート侯爵は無駄かと思いつつもエスヴォブス王に抗議の視線を向けてみるが、思った通り王はスツと手を翳して『かまわぬ』の合図を返す。軽く嘆息し、気を取り直した侯爵は先程までの議論の内容を、今度は自らの言葉で直接当人に問い質した。

「さて、もう聞いていると思うが……貴殿の作った魔笛が調整魔獣に効果をもたらさなかった。どういう事が説明して貰えるかね？」

他の作業にかまけて製作の手を抜き、適当に作った粗悪品を寄越したのではないかという問いに、悠介はハッキリと否定する。

「魔笛が粗悪品って事は絶対に無いと言えます。どうして効果がなかったのか分かりませんが」

そういう魔獣が居るらしいという噂はあったので、特別討伐隊は運悪くその魔獣に出くわしてしまったのではないかと推論を立てる悠介に、ヴォルダート侯爵は魔笛の品質を問題にした方が攻め易いと判断して粗悪品が混じっていないなかったと何故言い切れるのかを追求した。

「絶対に無いと言い切れる根拠を示したまえ」

「そうですね……ちょっと失礼」

悠介は会議のテーブル上に置かれている空になった陶磁器のカップを幾つか集めてカスタマイズを施す。

通常、土技を使って加工品の再調整を行なう場合、磁器のような焼き物であれば表面の装飾部分を削るなり、少しサイズを変えられ

る程度で、カップを皿にするような大幅な形の変更はかなり難しい。

悠介のカスタマイズ・クリエートは、その物体が元からそういう形状をしていたかのように『存在』を書き換えてしまう能力である。光の粒が舞い消えると、陶磁器のカップは真四角な立方体に姿を変えた。

初めて闇神隊長の神技を間近で目にした者達が思わず目を瞠る。ヴォルダート侯爵も少し驚いた様子を見せていた。

「俺 自分の神技は寸分変わらず複製する事が出来るので、意図的に違うモノを作ろうとしない限り絶対に同じモノが出来ます」

そう言っただけで悠介が立方体^{キューブ}を積み上げると、縦に積み重ねられた正方形のキューブはまるで初めから長方形の物体として存在していたかのようにぴったりと重なり、その表面も非常に滑らかな艶を出している。この通り、中身も同じ精度で再現できるので、魔笛の複製に不備は無いと悠介は言い切った。

「……」

重ねられたキューブを手に取り、唸る侯爵。ただの立方体なのだが、刃物でスパッと切り取ったような表面を持つ非常に精度の高い立方体は芸術品にも思えた。ヴォルダート侯爵の掌で玩ばれるキューブに、宮殿官僚の一人が物欲しそうな視線を向けている。

視線に気付いた侯爵が彼の前にキューブを置くと、いそいそと手にとって眺め始めた。この官僚には時折珍しい美術品や工芸品の類を都合してやれば、指示にも従うし資金も出す。扱い易い男だが、少々日和見気質な所に問題も残る輩だった。

キューブになった陶磁器のカップは宮殿の備品なのだが、自分の

口添えて彼に与えようと画策するヴォルダート侯爵は、新しい美術品の取り寄せが一つ浮いた事を頭のメモに書き記しつつ、闇神隊長に対する追求に次の手を考える。

「魔笛については一応それで納得しよう。では魔笛の通じない魔獣の噂についてだが、何故事前にその情報を伝えなかったのかね？」

「笛渡す時に伝えましたよ？」

「それについてはわらわが証人になるぞ、ユースケは確かに気をつけるようにと何度も念を押しておった。そうであろう？」

あの日、訓練場にて魔笛を受け取った官僚は、ちらりと見やった侯爵からの目配せに気付いたが、闇神隊長とヴォレット姫の証言に対する真偽を求められて惚ける事が出来ず、それを認めた。一瞬、侯爵から射抜くような視線を当てられてビクリと肩を揺らす。

「つまり……事前に警告を受けておきながら何の対策もしていなかったと、いう事で良いのか？」

じつと会議の様子に耳を傾けていたエスヴォブス王が壇上の玉座からそう訊ねる。受け取り担当だった宮殿官僚は顔を上げられないすかさずヴォルダート侯爵がフォローに入った。

「王よ、今回の事態は移動中の不意を突かれた事に起因します。確かに油断と怠慢による失態の誹りは免れませぬが」

魔笛が通じない調整魔獣の存在については正確な情報が必要でしょうと今後の対策に議題を戻し、ついでには魔笛と調整魔獣に関する調査を行なう為、参考人として風の刃組織の元魔獣使い等をトレントリエッタから呼び寄せる提案を挙げる。

この提案は即日承認され、後日トレントリエツタからヴォーレイ工を始めとする元風の刃組織の構成員が呼ばれる事となった。闇神隊長の糾弾に失敗したヴォルダート侯爵は早々に対策会議を切り上げ、次の手に移る。

「態々御足労を掛けさせてしまったが、会議はこれにて終了だ。また後日にも風の刃構成員の取調べに協力して頂ければ助かる」
「そうですね、ヴォーレイ工達とは面識もありますし協力しますよ。今日は皆さんお疲れ様でした」

宮殿に呼びつけられ、殆どイチャモンとも言える不躰な質疑を向けられたダケで終わってしまった対策会議に対して不満気な表情一つ浮かべず、出席者達に労いの声さえ掛ける闇神隊長の姿に余裕を感じたヴォルダート侯爵一派の面々は内心に苦々しい思いを懐いた。闇神隊長がヴォレット姫を伴って現れた時点でこちらの先手が潰され、姫がこの場に居座る事を認められた事で尻込みした者達によって糾弾ネタの幾つかが封じられた挙句、最後には切り返されて自分達の非が明るみになるという結果に愕然とする。

『この男……やはり計略の類に長けているのか。油断ならん』

今回の会議で反闇神隊派以外の同席者達に闇神隊長に対する不信を懐かせる事には失敗したが、当面の目的は闇神隊長の周囲から切り崩して行く事である。まだまだ先は長い。闇神隊長の失脚を狙う活動は始まったばかりなのだ。

ヴォルダート侯爵は闇神隊長の身辺を探らせている子飼いの諜報員が、有益な情報を掴んで戻る事をじっくり待つ事にした。

当の本人は心証アップで敵意回避！ などと難易度の高い作戦を
目論んでいたが、こちらでも成果はあがらなかったようだ。

89話：唱姫の暗躍？

フォンクランクの要請に従い、トレントリエッタから護送される元風の刃組織の関係者がサンクアディエットの街に到着したのは、対策会議の日から五日目の事であった。ヴォーレイエと共に呼ばれたのはベネフォスト元軍務官と部下の魔獣使いだった構成員である。

ベネフォストに関しては悠介がヴォレットを通じてエスヴォブス王からトレントリエッタ側に助命を嘆願し、受け入れられていた。

組織の中でも彼女のカリスマは高く、生かしておいた方が良いと判断されたらしい。現在、組織の元構成員達はルディア鉱山で強制労働に服しており、ベネフォストはその纏め役を担っている。

ヴォーレイエはリーンヴァールに残っていたエルフォドラス邸で付き人の二人に奴隷の青年も加えてほぼ軟禁生活。これは所謂ベネフォストに対する人質のような意味合いを持つ。実質的に無駄な牽制なのだが、何事にも慎重なクリフザツ八王の備えであった。

ちなみに、フォートレス総務官は戦死しており、アイルザツ八財務官は行方不明となっていた。

「よっ、久し振り」

囚人収容施設でも比較的身分の高い者を収容する棟にて、闇神隊長との再会に緊張した面持ちで臨んだヴォーレイエとベネフォスト

だったが、本国に居てもあの時と全く態度の変わらない様子の悠介に脱力しつつ安心を懐く。

内と外とでがらりと性格を変える人間は珍しくなく、それが英雄クラスともなれば、表の輝かしい功績の裏に冷徹で、時に残忍な面を併せ持つような人間もいる。

フォンクランクの英雄を取巻く噂の中には、少なからずそういった面を覗わせるような内容も聞いていたので不安があったのだ。

「ちゃんと生きてて感心感心」

「ふふ、貴殿も元氣そうで何よりだ」

「アンタ、気さくな所は変わらないんだね」

「まあな。つか堅苦しいのが苦手なだけだけ」

友達のような挨拶を交わす闇神隊長と元風の刃組織の参考人に、取調官や警備の衛士達は戸惑った様子で顔を見合わせていた。が、それも束の間『まあ闇神隊長だしなあ』と納得する。悠介の在り方も衛士達の間ではだいたい認知されてきているようだ。

宮殿を挟んでヴォーアス家とは対面に位置するイヴォール家、ヴォルダート侯爵の屋敷では、闇神隊長の身辺を探らせていた諜報員が奇妙な噂を持ち帰っていた。それは闇神隊長ユースケの正体について。

ガゼッタに潜り込ませている密偵経由の情報で、ガゼッタでは邪神という存在が現人神として実在している事が実しやかに囁かれて

おり、その特徴が闇神隊長の姿に合致するのだという。

それだけならば下らない大衆酒場の噂で済まされる所だが、闇神隊長と邪神を繋ぐ逸話が自国フォンクランクやブルガーデン、更にはトレントリエッタや滅亡したノスセントスにもあったとなれば、流石に只の戯言と切り捨てられない。

「パウラの長城戦、サンクアディエットの地下街、ノスセントス神議会、魔獣施設封鎖活動……か」

ノスセントス神議会の邪神に関わる情報はかなり詳しく纏められており、今まで表に出てこなかったのはエスヴォブス王が隠蔽したのだろうと結論付けた。内容が内容だけに、侯爵も王の判断は正しいと認められる。

「しかし、これはまだ使えんな」

もっと詳細が明らかになるまで迂闊に触れない方が良いと判断した侯爵は、引き続き邪神に関する情報も集めるよう指示を出した。

ヴォーレイエ達から調整魔獣の仕様について詳しい説明を受けつつ、トレントリエッタ側の調査内容も参照した結果、魔笛が通用しない調整魔獣の実態が明らかになった。それは実に単純な理由で、調整はされているが調教を受けていない魔獣だったのだ。

魔獣施設にて調整処置を受けた魔獣はその後、魔笛で指示に従う

よう暗示的な調教を施し、魔獣兵として完成する。魔獣施設で事故が起きた際、逃げ出した魔獣の中にはまだ調教が施されていない調整済みの魔獣が多数混じっていたのだ。

神技耐性が高く、神技阻害能力を持つ調整魔獣に繁殖行動の訓練も受けている魔獣兵が加わり、ある程度の能力を引き継いだ第二世代型の魔獣が増えているというのが、トレントリエッタ側の調査内容とフォンクランクが集めた情報を審議して出された答えであった。

今までの偶発的に出現していた単体行動が基本になる通常の魔獣と違って、第二世代型は最初から魔獣として生まれ、魔獣として育てられる。頻発する魔獣被害は調整魔獣たちの繁殖、子育てに必要な食糧の確保が目的ではないかという見解が示された。

「魔獣兵連れて逃げたって人は絡んでないのかな？」

「財務官は行方不明扱いとはなっているが、今まで魔獣の群れに魔獣使いの姿は目撃されていない。恐らく繋がりはないだろう」

アイルザツハ財務官がリンヴァール脱出の際に持ち出した魔獣兵は十数体、魔獣使いは一人か二人程しか連れていない事が分かっている。現在確認されている魔獣の群れを操れるだけの人員が居ないし、そもそも魔笛が通じないのだ。

「それって……もしかして永遠に行方不明？」

「トレントリエッタ側はそう見ている」

財務官達が向かっていたのは組織の集落と思われ、そこへ行くには魔獣施設の近くを通る事になる。

魔獣の潜む森で魔笛を吹けばその魔獣達を呼び寄せてしまう。幾ら十数体の魔獣兵を従えていても、森で魔獣の群れに襲われたなら

ば　という事である。実際には森に辿り着く前に魔獣兵の餌となつてしまったのだが、それを知る者はいない。

何れにせよ、これで魔獣の討伐はかなり難しくなつたという事が分かった。更なる対策を考えなければならぬだろう。

「やっぱ武具の製作も考えないと駄目かなあ」

ヴォルダート侯爵一派に睨まれているらしい現状を思えば、正式な要請があるまでは勝手に動かない方が良さだろう。アイデアを練るだけに留めておくのが無難だ。囚人収容施設から宮殿に戻る間、悠介はそんな事をつらつらと考えていた。

ヴォーレイ工達が帰国し、フォンクランクとトレントリエッタが共同で発表した現在の魔獣被害に対する考察と見解がカルツイオ中に広まる頃、低民区で乗り合い動力車事業の運営を許可された悠介は、営業開始の宣伝と人員の募集を始めた。

試作列車は素直に路線バスをイメージした動力車として仕様を見直し、外観なども少し調整して色々な備品を取り付けてある。人員にはまず街中でのトラブルに対処できる神民衛士から雇う方針を進めていた。

一方、衛士隊の間では闇神隊長が特別討伐隊に参加している対立派閥の者を謀殺する目的でわざと不良品の魔笛を渡したらしいなどの噂が流されていたが、衛士の大半は闇神隊長寄りでは眉唾物

という認識を向けている。

これはヴォーマル達を始めとする闇神隊員の指揮下に入った衛士隊員繋がり、闇神隊の雰囲気や隊長コトスゲの人柄などが正確に伝わるようになった事が大きい。狙ったモノなのか偶然なのか、ヴォレットの事前策が功を奏した形だ。

宮殿衛士の間でも、名家筆頭であるヴォーアス家が嫡男、ヒヴォデイルが悠介寄りである事に加えて、神技の指輪の事もあってか概ね噂には懐疑的であった。

反闇神隊派は衛士達の間で不穏な噂が広まっているとして、これを理由に闇神隊長の査問を提案したが、賛同する者は少なく査問会を開くには至らなかった。

しかし提案が流れる事は彼等にとって織り込み済みで、要は『査問の提案があがった』という不名誉な事実を重ねることで、悪い噂が流れ易い下地を作るのが目的という、長期的な印象操作の一環で進められたモノであった。

これらの動きに対し、悠介自身は情報戦のノウハウなど分からないので特に行動を起こすでもなく普段通りに過ごしている。その実、周りの人間が対策を考え、そのアドバイスに従った行動を心掛けていた。とはいえ、本当に普段通りの生活を続けているだけである。

反闇神隊派、所謂イヴォール家の派閥に与する者達は、必ずしもヴォルダート侯爵の理念に賛同している者ばかりではない。

イヴォール家に恩義を持つ者や、経済的な理由を抱える者、中にはラサナーシャの事で悠介に個人的な嫉妬の念を持つが故にといった者まで様々だ。そこに付け入る隙がある。

何時もと変わらない活動を行なう闇神隊。その裏では、反闇神隊

派に対する反撃的な揺さぶりが仕掛けられていた。

ヴォルダート侯爵一派の動きや内情に関してはラサナーシャの諜報がかなり正確に掴んでおり、彼女は悠介とヴォレットからも許しを得た上で反闇神隊派の切り崩し工作に動いている。

「あんま危ない事はしてくれるなよ？」

「うふふっ 心得てますわ」

悠介の心配を余所に、少しめかし込んだラサナーシャは中民区のとある貴族の屋敷へと交渉を行いに向かうのだった。

フォルナーの風月の十四日目

数日後に闇の暦を迎えるカルツイオの大地。サンクアディエツトの街も至る所に油木の篝火が焚かれ、朝から夜の様相を呈している。いつも多くの人で賑わう区画門前の展望塔広場では、普段の倍以上の人々で溢れ返っていた。

闇神隊による公開試験走行が行なわれた日から密かに話題となっていた乗り合い動力車が、遂に営業運転を開始したのだ。

「やはり初乗りはわらわが務めねばなっ！」

「まあ、それも宣伝になるかな」

用意された動力車は二台で、最初の内は展望塔広場から街を半周

ほどした地点にある牧場方面まで直通で行き来する車両と、その区間を各停車地点で一時停車しながら走る車両とで様子を見ながら問題点を模索し、今後の課題などを纏めつつ運営していく予定だ。

リンランプの前照灯が点ると、見物客から感嘆の声が上がった。夜の季節にも対応した珍しい車内の照明が、動力車という全く新しい乗り物の先端的な雰囲気演出する。

「ユースケは乗らんのか？」

「俺はここで伝達からの報告を纏めなきゃならんのだよ」

「うーむそうか、では仕方あるまい。わらわはスンと楽しんで来るぞ」

「行って来ますね、ユースケさん」

「おう、氣い付けてな」

ヴォレットの護衛にスンとクレイヴォル、炎神隊員数人、伝達係りにイフヨカの部下を同乗させた一号車が牧場方面に向けて出発する。続いて出発する二号車には偉い人も乗っていないので定員一杯まで一般客が乗り込み、最初の停車地点に向けて走り出した。

展望塔広場から篝火の揺れる街並みへと溶け込む乗り合い動力車の灯り。感慨深げにそれを見送る悠介の隣に、奴隷の証である黒い腕輪を付けたサイドポニーなラーザンシアが並び立つ。

「リンランプの調子もバッチリね」

「悪いな、無理させちゃって」

「大丈夫よ、私結構丈夫なんだから」

動力車の照明として使うリンランプに必要な太陽苔は、どうにか栽培した分で賄えた。

ラーザツシアが連日研究室に籠って頑張ってくれた結果である。太陽苔を乾燥させないように輸送する為の容器も出来ているので、イザという時はトレントリエッタから取り寄せる事も出来る。

「動力車に使う分は十分採れると思うけど、もし足りない時はトレントリエッタから輸入しましょ」

「だな」

和やかに会話を交わす二人。この時、悠介は気付いていなかったが、ラーザツシアは瞳に薄っすらと涙を浮かべていた。

眠気や悲しみによるモノではない。ほんの半年前までは考えられなかった自由、想像の中になかった生活を、本当に遣り甲斐のある仕事を通して実感し、噛み締める事が出来る喜び。それは感謝の涙だった。

『ありがとね、ユースケ……』

「ん？」

「うん？ どうしたの？」

「いや、気のせいか……」

はてなと首を傾げつつ肩を竦めて伝達係りに車両の様子を訊ねる悠介を、ラーザツシアは特別な眼差しでみつめていた。

闇神隊長が始めた事業が一般大衆や神民衛士の間でも受けている

らしく、ちつとも流言が広まらない事にヴオルダート侯爵は苛立ちを募らせていた。今夜は会合を行なう日なので何時も通り宮殿の一室にやって来た侯爵は、集まっている者達を見渡して疑問を口にす
る。

「何人が顔が見えないようだが、まだ揃ってないのか？」

「いえ、これで全員です。先刻ここに居ない者達の従者が来て、自分達は降りると……」

「まさか、向こうについた訳ではあるまいな」

「そうとも……言えるかもしれません」

抜けたのは神民衛士隊を管理する立場にいる者や、交易商人の幹旋などを生業にしている者達だった。

ラサナーシャの巡らせた策によって乗り合い動力車の運航管理に神民衛士隊の管理者を就かせ、経営の管理には商人達の幹旋業に携わる貴族から人員を雇い入れる事に成功した。

彼等はイヴォール派の中でもヴオルダート侯爵とは特にこれといった縁もなく、宮殿の各部署を抑えるのに必要な頭数を揃える為、下階層に勤める適当な人材をと派閥に引き入れられた弱小貴族である。

イヴォール派に属している事はそれなりの恩恵にも肖ることが出来ていたのだが、闇神隊の事業はそれ以上の富を彼等にもたらせた。乗り合い動力車はどこまで乗っても一人一回緑晶貨一本という安さで、一般大衆にも気軽に利用できる。

物珍しさも手伝ってか初日からかなりの盛況ぶりを見せ、半日も経たない内に料金箱が一杯になってしまい、途中で交換しなくてはならないようなトラブルが起きた程であった。

露店市場が閉められる夕刻以降も利用者の客足が途絶える事はなく、毎日仕事場と自宅を行き交う街の人々の暮らしとも密接に繋がった乗り合い動力車の利便性は、今後も発展し続けるであろう手応えを感じさせるモノだった。

そんな訳で、将来的にみても闇神隊長に付いた方が得だと判断した彼等は、今後、反闇神隊派の会合には出席しない事を選んだ。

「あの動力車とかいう輸送事業、それ程までに儲かっているのか」「所詮は下階層の有象無象ですな、目先の利益に目が眩んだのでしよう」

「今まで口利きをして貰っていた恩を忘れるとは、全く度し難い」「まあ、今後我々に睨まれる事は避けたいでしょうからな、率先して我等の情報をもらすような事はありますまい」

この場に集う反闇神隊のスローガンで席を並べている者達は、今回の離脱組みに対する愚痴を一通り吐き出して気が済んだのか、次の手、今後の活動方針を考えようと議論に入るのだった。

闇の暦が近づくことに夜の季節は深まり、カルツイオの大地は終日夜の闇に包まれる。討伐が更に厳しくなった魔獣の被害は止まる事を知らず、増していく一方。

そんな環境下、商人達は魔獣の襲撃を恐れて遠出を控えるようになり、遠方との交易が減る事で次第に市場の流通も滞り始めた。

特別討伐隊の壊滅を教訓にし、今度は万全の態勢で討伐隊を組織しようという意見が、ここ最近の宮殿内で活発に議論されている。真っ先に候補として名前の挙がっている闇神隊を魔獣討伐に出す事に関しては、反闇神隊派の中でも意見が割れていた。

実力は本物なのでこれ以上の功績を与えたら手が付けられなくなると主張する慎重派。

魔笛が通じないのは本当なのだから、どうにか危険な所へ送り込んで抹殺できればと考える急進派。

慎重派の意見はとにかく闇神隊にこれ以上活躍の場を与えないようにしつつ、自分達に与する英雄を祭り上げるといふ従来のやり方を推し、急進派は逆にどんどん働かせて国に貢献させ、使い潰してしまえばいいと主張する。

双方の意見を最終的に取り纏めるヴォルダート侯爵は、どちらの方法も現状では難しいと判断していた。

魔獣被害の深刻な現状は戦功を上げる好機とも言えるが、特別討伐隊の失敗で優秀な人材が集まり難くなってしまったのが痛い。それ以前に、魔笛が通じない神技阻害能力を持つ魔獣に対する有効な討伐法も確立されていないのだ。

闇神隊なら何とかしそうではあるが、何とかされるのは自分達も困る。新たな魔獣討伐法をしっかりと確立した上で、華々しく任務で散ってくれるのが最も理想的な展開だ。などと妄想めいた願望に逃避するのも愚かな事。

「……今は暫らく様子を見るしかあるまい。皆、今日はこれまでだ、次の会合は闇の暦の三日目とする。以上だ」

闇の暦の一日目は自由祭の始まり日。それぞれの家でも祭りの準備が行なわれるであろう事に配慮した日程を告げ、ヴォルダート侯爵は会合部屋を後にした。

フォルナーの風月の十九日目、休暇に入った悠介はスンと連れ立ってルフク村への御土産を買いに街へと繰り出していた。自由祭は特にテーマがある御祭りではなく、一年の総決算を皆で労い合い、飲み食いを楽しむ忘年会のような御祭りだ。それが二十日間も続く。闇の暦は一日から五日までを火刻日、六日から十日までを水刻日といった具合に四分割して風刻日まで数える。悠介は火刻日をルフク村で過ごし、水刻日は自宅悠介邸で、土刻日からは宮殿で過ごす予定だ。

宮殿衛士達の休暇は土刻日いっぱいまで終わり、翌暦の誕生祭で行

なわれるパレードに向けて準備を始める事になる。

「さて、次は」と

「エルちゃんのお洋服も見ませんか？」

「お、そうだな」

エルフォナにも新しい街服を買ってやろうと露店市場を後にした悠介達は、中民区に上がって洋服店を目指した。低民区の雑多とした活気ある通りとは違って変わり、閑散とした雰囲気さえ感じる中民区の店舗が並ぶ商店街。よく見れば閉めている店もちらほら。

「今日はお店の人も休みをとってるんでしょうか？」

「いや……多分、品不足じゃないかな」

中民区で売られる商品はそれなりに値の張る高級品も多い。サンクアディエットには一定以上の品質を保ちつつ大量生産を行なえるような産業態勢が整っておらず、衣服や陶磁器などはトレントリエッタや以前はノスセンテスからも取り寄せられていた。

今は魔獣被害の影響で交易が麻痺している為、完全オーダーメイドの高民区店舗やフリーマーケット的な面も持つ低民区の露店市場と比べて、外からの取り寄せに頼っている店が多い中民区店舗は商品の仕入れに厳しい状態が続いている。

「また近いうちに魔獣退治とかの任務があるかもな」

「そうですね……」

とりあえず開いている店でエルフォナに似合いそうな子供服を幾つか購入し、地平線に僅かな間だけ太陽が顔を出す真昼頃にはルック村へと続く街道まで下りて帰郷の準備に入った。

前回、舞踏祭での帰郷には試験的にシフトムーブを使ってみたも

の、思ったよりも時間が掛かったので今回は素直に乗り物を使う。

「今日はこれで帰ろうと思う」

「これって、動力車ですか？」

衛士達に街道の入り口まで運ばせておいた資材からカスタマイズで組上げた箱型の車体。乗り合い動力車に使っているギミックモーター動力の試作改良版を積んだ試作一般乗用車両だ。通常の馬車よりも少し速い程なので時速は約三十キロ前後。

長時間の移動で尻が痛くならないよう座席には応接間などに置くソファーを使っている。車体の前方に取り付けられた二つの前照灯と車内のリーンプランプに灯を入れ、後部の荷台に御土産などを積み込んで座席のソファーに身を沈める。ちなみにシートベルト付きだ。

「じゃあ行くこうか」

「はい」

暗い昼の刻。出発と何時もの気合いが入ってない掛け声で試乗用車を走らせる悠介。前回はシフトムーブの仕様上、休憩の時からいにかスンと話す事が出来なかったが、今回はほぼ直線の街道を安全運転で進むだけなので気楽に雑談も楽しめる。

ゴロゴロと音を鳴らして回転する車輪。スンと悠介はルック村までの道程およそ四時間、二人っきりのドライブを満喫したのだった。

中間地点での休憩中、ちょっとイチャついてみたのは内緒である。

一日中夜が続く闇の暦。街でも村でも皆が飲めや歌えと楽しむ自由祭。そんな御祭り期間のある夜、宮殿の一室に集まった反闇神隊派の面々は会合の席にありながらも少し浮ついた雰囲気が見て取れた。

彼等にとつても、一年の総決算である自由祭は子供の頃からの特別なお祭りだ。幾つになっても気分の高揚を感じざるを得ない。

しかし、そんな彼等を冷や水でも浴びせ掛けるかのごとく凶報で高揚から醒めさせたのは、少し遅れて会合部屋に現れたヴォルダート侯爵だった。闇神隊に関する新たな情報を手に入れたのだが、それに付随してとんでもない計画が進行中である事を掴んだ。

「それは……まことで……？」

「間違いない、確かな情報だ」

「しかし、まさか王がそのような……」

「私も俄かには信じられなかったが、エスヴォブス王においては有り得ないとも言い切れぬ」

ガゼツタから送られてきた邪神に関する情報は次のような内容だった。

ガゼツタは邪神を古の一族『白族』繁栄の救世主と崇めている。

闇神隊ユースケ長は邪神としてガゼツタの王から度々招待を受けているらしい。

ガゼツタが闇神隊と対峙しないのはその為である。

「邪神に関しては私も未だ半信半疑だが、ノスセンテスが最高機密として扱っていた事からして、闇神隊長が本物の邪神である可能性

は高くなった」

「王は、その事を？」

「エスヴォブス王は早い段階で邪神の事を知っていたようだ」
「なんと」

そして進行中のとんでもない計画とは、エスヴォブス王が等民制度の根幹である四大神信仰を否定する構えで政策を進めようとしているらしい事が判明した。

自由祭の浮ついた空気に人々の口も軽くなったのか、ディアノース砦で行なわれたリシャレウス女王との会談内容が漏れたのだ。そこから五族共和構想なる計画が女王の近辺より探り出されたという。

「しかし、その計画に我らが王も係わっているという根拠やその信憑性は？」

「残念ながら、ある。エスヴォブス王に関しては全て状況証拠ではないが、女王の計画なる語句が王の側近周りから聞かれている」

宮殿の中でも王に近い極僅かな者にしか知らされていないであろう事までは掴めていた。

「うーむ、しかし災厄の邪神伝説が絡んでいたとは……」

「闇神隊長は今どこに？」

「無技の村に帰っていると聞く」

「もしか、ゼシヤールド殿も関係が？」

ハツとなつて顔を見合わせる面々に、それはまだ分からんと早計な判断を戒めるヴォルダート侯爵。とにかく、これで闇神隊長を強く糾弾するネタは掴めたが、内容が内容だけに慎重な対応が求められる。一つ間違えれば王を糾弾する事にも繋がり兼ねない。

「分かっていると思うが、今日知りえた内容は他言無用である。エスヴォブス王は決して甘い方では無い事を心得ておくように」

邪神については様々な噂で相殺されると睨んでか比較的に機密度は低く、多少情報が表に出ても構わないという姿勢が見られたが、五族共和構想は危険だ。自分達はその情報を掴んでいる事を知られれば、肅清もありうる。

それを聞いて顔色をなくす会合の参加者達。普段の温厚なエスヴォブス王を見ていれば俄かに信じ難い事だが、ノスセンテス滅亡時に行なわれた大肅清は記憶に古くない。

「今後、我々の活動は邪神の排除という名目で闇神隊長の糾弾を通じて、裏で進められる五族共和構想を潰すことを目的とする」

具体的な活動はこれまで通り消極的だが噂の流布を持って闇神隊長の立場を貶める方法を使う。噂の内容は今までのようなでっぴちあげなものではなく、もう少し踏み込んだ内容に組み直して、広める為の工作人員も増やす方針で決まった。

闇神隊長は災厄をもたらせるという邪神であった事に加えて、ガゼッタの手先であると糾弾。エスヴォブス王は邪神の脅威を防ぐ為、ガゼッタよりも先に取り込んで御そうとしていた。闇神隊の功績は全て邪神がもたらせた災厄の上に成り立っている。

「この内容を中心に、ブルガーデンの女王とガゼッタの繋がりを指して両国に対する不信感も募らせる」

同時に、それらの出来事全てに邪神の存在があった事を強調して

闇神隊長に猜疑の目を向けさせるのだ。

曰く、ブルガーデンの女王はガゼッタの王と結託している。パウラの戦闘で侵攻してきたガゼッタ軍を放免にした事実からして、邪神に手柄を立てさせる為の策略だったに違いない。といった内容を酒場などで広める。

ノスセンテスについてはあまり触れず、それまでガゼッタの侵攻を防いできた歴史ある大国ノスセンテスが、何故か闇神隊長の滞在中に一夜で滅ぼされてしまった事を強調。

トレントリエッタの動乱はそれを起こした組織の当主が早い段階で闇神隊と行動を共にしていた事。リーンヴァール解放戦では多くの死傷者を出したのに、闇神隊が戦った部隊には殆ど被害が出ていないのは不自然すぎる。と、識者も食いつき易い陰謀論を展開する。

『全てはギアホーク砦の事件から、あれも邪神の陰謀だったのだ！』

邪神が係わった一連の出来事で最も益を得ているのは、邪神とガゼッタである。ガゼッタは魔獣施設封鎖の時に闇神隊を援護する為、無技の戦士を送り込んでいたらしい。知り合いの傭兵に聞いた。

このままでは何れフォンクランクもノスセンテスのように滅ぼされるのではないか、現に今はヴォレット姫が誑かされている。

等の主張や噂を吹聴して回らせる。大衆酒場でのやらせ会話に始まり、ピラを使った怪文章を中民区に撒き、それを拾って来た者から宮殿内にも広がるよう画策。一般衛士や使用人達の間でそれらの噂がなされても、強く咎めず軽い注意で済ませるようにする。

「我々反闇神隊派は反邪神派として、五族共和構想を目論むリシャレウス女王とその理念に歩み寄るエスヴォブス王を牽制する」

なるべくエスヴォブス王を国王に戴いたまま、四大神信仰を否定する五族協和構想を潰したい。ヴォレット姫を担ぎ出し、エスヴォブス王が闇神隊長を処分しなくてはならない状況を作りあげるのだ。

万が一の場合に至っては四大神信仰を否定しようとするエスヴォブス王と対立する覚悟も持っておくようにと、ここに集う者達に促して、ヴォルダート侯爵は今日の会合に終了を告げた。

暗闇に包まれたカルツイオの大地。篝火と月明かりに照らされながら街中が連日浮かれる自由祭では、陰で蠢く者達も動き易い。邪神降臨、世界の破滅というセンサーシヨナルな話題は瞬く間に広まっっていく。

「イフヨカ、そっちはどうだった？」

「無技人街の方でも、これを拾った人は、結構いました……」

「どうも中民区の彼方此方では撒いてるっばいな、街唱の間でも大分広まってるらしい」

「隊長はまだルフク村だったな」

連絡を入れるべきかというシャイードの提案に、どうせ明日には戻るのだから今は自分達で情報を集めて、隊長が戻った時に詳しく知らせるほうが良いだろうと判断するヴォーマル。今は集めた情報

を纏める事に集中する。

「ヴオレット姫も暫らくは公務で動けない筈だ」

「出来るだけ俺たちで対処しとくしかねえって事っすか」

「私、清掃業務に出る人達に、ピラを見かけたら集めるよう言っておきます」

「そうしてくれ、こっちはヒヴオデイル殿にも協力を仰げるよう動いてみる」

急速に広まり始めた闇神隊長ユースケと邪神の噂に対し、闇神隊員であるヴォーマル達が真っ先に行動を始めていた。一般衛士の中では以前から闇神隊長を巡る妙な噂は不自然に広められている事を感じ取っていたので、今回もその流れで噂には懐疑的ではあった。

しかし、以前と比べてかなり具体的な時事と絡んだ内容である事や、怪文章に見られる指摘にはそれなりに説得力があり、また祭りの効果もあつてか拡散する速度が非常に早かった事も、人々の心に『皆が知っている』という連帯感をもたらし、噂の信憑性を少なからず高めていた。

怪文章の中身は、身の危険を考慮すれば表立って主張する事が出来ない大事を、大勢の人に報せる為にこのような手段を用いたという形で、筆者不明の邪神に関する告発的な内容が綴られている。

その概要は

闇神隊長は言い伝えにある災厄の邪神である。

ガゼツタは邪神を無技の民の救世主としている。

邪神はガゼツタの手先である。現に無技の民を特別扱いしているではないか。

ブルガーデンの女王はガゼッタの王と繋がっている。ブルガーデ
ンが等民制を否定しているのはその為だ。

邪神は神技人社会の破壊を狙っている。ガゼッタもそれを狙って
いる。

フォンクランクの中枢に入り込み、フォンクランクの国力を使っ
てガゼッタを助けながら他の国に圧力を掛けていく。

四大神信仰発祥の地であるノスセントスが真っ先に滅ぼされた。
トレントリエッタでは動乱が起きた。

そして今や神技の民にとって天敵とも言える調整魔獣が蔓延^{はつり}つて
いる現状を、諸君等はなんとみる。

といった内容で纏められていた。

「やれやれ、今までは外が相手だったからまだ良かったが……」

下手をすれば内戦にさえ繋がりがねないと、ヴォーマルは高民区
の通りを歩きながら溜め息を吐いた。

自由祭の火刻日をルフク村で過ごした悠介は、闇の暦の六日目、水刻日の初めにスンを連れてサンクアディエツトに戻って来た。

村を立つ前にヴォーマル達から連絡を受け、邪神の噂に関連して街で不穏な動きがあると警告を受けていたので、街に入る手前で試作乗用車を解体して目立たないよう無技人街から低民区に入り、自宅悠介邸前までシフトムーブで移動した。

「お帰りなさいませ、ユースケ様、スン様」

「ただいま」

何時ものようにザツフィスの出迎えを受けて邸内に入ると、闇神隊のメンバーにラーザツシアとラサナーシャも顔を揃えている。ヴォーマル達は昨日から徹夜で活動していたらしく、ゆらりゆらりと舟を漕いでいるエイシャの隣でイフヨカがテーブルに突っ伏していた。

「よっ 皆お疲れさん。なんかまた面倒な事になってるんだって？」

「ええ、今回は国内の事なのであっしらもちよっと焦り気味ってとこです」

「いやもう、流石にここまで来ると軽口もでねえっすよ」

「俺のせいじゃ無いと言いたい所だが、言えないのが切ないな」

皆を労いながらテーブルに並べられているピラに目を通す悠介。その間、スンはルフク村から持ち帰ったキナ鳥の腿肉を厨房に運び、使用人達はお茶と軽い食事の用意を始める。悠介はとりあえず脱落している二人を客間に運ばせると、現状の詳しい報告を求めた。

祭りに乗じて広められた邪神と闇神隊に関する噂は、事実を悪意漬けにしたような内容ではあるが、一つ二つの間違いに同じくらいの事実も絡めた情報で、解釈次第ではそう認識されてもおかしくないような部分もある。

「疑って見ればこうなるって感じの内容だよな、よく調べてある」「ラサナーシャ達からも聞きやしたが……やはりイヴォール派の作業なんでしょうかね？」

「だと思っぞ？ ヴォレットは何か言ってたか？」「姫様はまだ公務が忙しいらしく、連絡は取れずじまいです。とりあえずヒヴォデル殿に協力を要請しておきやした」

ヴォレットの婚約者候補組を仕切っているヒヴォデルなら、公務中のヴォレットとも連絡をつけてくれるだろう。彼女自身が動けずとも、クレイヴォールを代理に寄越して対処に動くぐらいはやりそっうだ。

対処といっても反闇神隊派に対しては非公式の集団だけに実態もはっきりしておらず、また証拠も無いので抗議を向ける事も叶わず、精々がピラの取り締まりや流言に対する警告程度の活動しか出来ないのだが。

「やれやれ、何がそんなに気に入らないのかね。まさか邪神云々を本気にしてって事はないよな」

「名家の出つてのは、すべからく序列つてものを気にするもんなんですよ。家柄云々つてところでしょいな」

「家柄ねえ……三代くらい王家に仕えてりゃ文句も無くなるってか」

別にこれといった野心がある訳でもなく、無茶な要求をしている訳でもなく、それなりに苦労しながらそれなりの貢献をしているにも関わらず、こつも邪魔にされるのでは正直な所、面白くない。理解は出来るが納得は出来んと、珍しくぼやき気味な悠介だった。

「隊長、キレて街潰すのは勘弁つすよ？」

「怪獣か俺は」

闇の暦の十一日目

自由祭も中盤に入り、そろそろ祭りを切り上げて仕事を始める者や、逆にこれから休暇と祭りを楽しむ者、最終日まで遊び倒すつもりでいる者など、多少の中ダレも見られるものの街は変わらず盛り上がりを見せている。

そんな中、ヴォルアンス宮殿上層階の一室にて不機嫌な表情で腕組みをしている炎の姫君が、クレイヴォル専属警護兼教育係りからの報告に鼻息を荒くしていた。

「まったく！ せっかく面倒な務めも終わって、これからユースケで遊ぼうと思っておったのに」

一文字間違えて無いか？ と、隣でツッコミを入れている悠介は辛味の味付けを施したララの実を齧りながらカスタマイズ画面に出してある乗用車両のデータを弄っている。

ルフク村との往復に使った試作乗用車両は、途中で何度か修理が必要になるほど壊れ易い箇所が明らかになったので、その部分の修正を行なっていた。

常時酔っ払い状態の人々が溢れる自由祭では街中が活気に満ちて華やかさに包まれる反面、喧嘩などのトラブルや強盗、泥棒といった犯罪も溢れる。

一応、神民衛士達が交替で警備に就く事になっているが、毎年の事ながら人手は全く足りていない。実はサボる者が多いせいだったりするのだが。

悠介と自由祭の街を観て回るつもりでいたヴォレットは、クレイヴォルから『闇神隊長は災厄の邪神だった』という噂が飛び交う街中を下手に連れ歩けば、酔った勢いで絡んでくるような輩が出る事も予想されるとして、警備上の問題により自重を促された。

当の悠介は街に出られない事には納得している様子で、宮殿が屋敷に引き籠もっては動力車開発などに勤しんでいる。今日も特に宮殿まで出向く必要はなかったのだが、ヴォレットと過ごすという約束を守るような意味合いで顔を出していたりする。

「父様も父様じゃ、ユースケを快く思わん者共を宥める為に、悪評の取り締まりを緩めておる等と言う話も聞いたぞ」

「その噂に関してはレイフォルド殿が否定しておられたようですが」

「どうだかの、疑わしいものじゃ」

レイフォルドに対してはデリアルディアでの件もあって、イマイチ信用していないヴォレット。ソレを口にする事はないが、最近どうにも齒切れの悪さを感じる父王に対しても少々疑惑の目を向けていた。

王の私室にて、お怒りモードなヴォレットの様子を伝えられたエスヴォブス王は、一つ溜め息を吐いて椅子の背凭れに身を預ける。

邪神に関する噂については彼も少し困り気味だった。宮殿の上層に仕掛け人がいるので、取り締まりにも殆ど成果が上がらない。が、あまり強く取り締まって余計に反撥を招くのは不味い。

ヴォレットの懐いている疑惑どおり、エスヴォブス王は闇神隊長を誹謗する流言に対してある程度までは黙認する事でヴォルダート侯爵らの不満を発散させる、所謂ガス抜きをさせていた部分があった。

本来であれば、先のリーンヴァール解放戦で闇神隊の撤退が全軍退却という事態を引き起こし、その責を問われた闇神隊長は左遷的にヴォレットの傍らに戻され、その後の援軍第二陣で戦功を得る者の振り分けをして宮殿内の勢力を平穏なバランスに調節する予定だった。

だが、闇神隊は勝ってしまった。突出していた英雄は突出し過ぎてしまったのだ。そして予想通り、以前から闇神隊長の身分にそぐわぬ異常な功績を危険視していたヴォルダート侯爵一派が、反闇神隊派として非公式集団を結成、活動を始めた。

「これでユースケがガゼツタに気を向けた場合、困るのは我々なのだがなあ」

どう対処したモノかと悩むエスヴォブス王。邪神伝説の噂は本人に全くそういう危険な兆候が見られない事に加えて、闇神隊員とその部下である神民衛士達との繋がりや、闇神隊長自身がよく中低民区に顔を出して住人達と交流している事から、少し経てば直ぐに立ち消えるモノと見て放置している。

問題なのは、ブルガーデンとガゼツタに対して不審を懐かせるような内容が一緒に組み込まれている事だ。

ブルガーデンに関しては、ようやく友好国として認識され始めたばかりで、まだまだ以前からの遺恨が残る部分もある。ガゼツタとは明確な衝突は無いものの、やはりノスセンテスを滅亡させた無技能人国家という点で国民の印象も微妙なところだ。

これから五族共和構想を実現させて行く上で、両国との関係は一般民レベルから良好にしておく必要がある。

「噂の一部分だけをあからさまに取り締まる訳にもいきませんからねえ」

「まあ、ガゼツタの事は何れ絡めて来るだろうとは思っていたが…リシャレウス女王との繋がりにまで踏み込むとはな」

ガゼツタのシン八王とブルガーデンのリシャレウス女王。両者が幼少の頃より馴染みの関係である事は、一応、世間的にはあまり知られていない事ではあるが、少し調べれば掴める程度の情報でもある。

恐らくは闇神隊長がこれまで立てて来た功績の全てを、邪神の災厄と絡める為に色々調べて噂に信憑性を持たせようと画策したのだ

ろ。ばら撒かれた怪文章に見られる一部の事実などから、そのように結論付けるエスヴォブス王。

しかし、彼はここで一つ判断を誤っていた。身内に対しては見識が甘くなるという地味に危険なウィークポイントを持つエスヴォブス王は、外敵に対してであれば見抜いていたであろう。『闇神隊長の噂』の裏に隠された意図に気付けなかった。

反闇神隊派の狙いが、リシャレウス女王と極秘に進めている五族共和構想の実現に向けた政策の妨害である可能性にまでは考えが至らなかった。王の極秘外交にそこまで探りを入れているとは思わなかったのだ。家臣を信用し過ぎるといって甘い点である。

「いつそのこと、ユースケ君が居てくれないと困る状況に踏み込んでみませんか？」

「神ならざる神を駒に覇権を競う、か？ 私のガラではないな」

エスヴォブス王は悠介を覇権争奪の駒に使う事を否定した。レイフォルドの提案を装った^{けしか}嘘けに対して、例え既にその一幕を刻んでいようとも、進んで世界を手に入れようとは思わないと明言する。

「欲がありませんねえ」

「私は欲深い人間だよ。無いのは甲斐性ぐらいさ」

昔ゼシャルドに言われた事を自嘲で口にする賢王に、肩を竦めて見せるレイフォルド。魔獣の被害も増え続けているので、とりあえずそちらの方にも何か手を打たなければならぬ。問題は山積みであった。

「ああ、娘の笑顔で癒されたい……」

「今はむつつり顔しか見せて貰えないと思いますよ」

「いや、あれはアレで可愛いものだぞ？」

「……」

賢王の親バカぶりには流石のレイフォルドも苦笑しか返せなかったという。

92話：誕生祭のパレード

闇の暦の十六日目、風刻日

街はまだまだ自由祭が続いているが、前暦末からの休暇も終わった宮殿衛士達は来暦に控える誕生祭のパレードに向けて準備を始めていた。

各衛士隊はそれぞれ独自の演出と飾りつけを施したパレード用の豪華絢爛な衣装を纏い、ヴォルアンス宮殿を出発して低民区の区画門前広場まで行進する。今年は展望塔広場が折り返し地点に選ばれていた。

悠介達も準備に入っているのだが闇神隊は正式隊員数が少なく、何か作るにしても他の隊と比べて製作速度やら演出イメージの具現率やらが反則の域なので、誕生祭のパレードについてはノンビリ進めている。

闇神隊が今掛かりつきりになっている事は『闇神隊長と邪神』に関する噂の沈静化。特に、ばら撒かれるビラの收拾やビラ撒きの犯人探しなどを行なっているが、成果は今のところ芳しく無い。

魔獣被害に関してはガゼッタが最も安全な地域になっているようだ。その事実も『闇神隊長は災厄の邪神、ガゼッタの手先』説の糾弾ネタに使われている。

レイフォルドが反闇神隊派に情報を流している密偵の洗い出しに

動いているが、元々はフォンクランクの密偵で且つ他国に放たれている者は独自の諜報網を持つなどしている為、なかなか全容を掴めないでいた。

味方の立場に属するからこそ、こちらの事もよく知られているのでそう簡単には情報を漏らさない。尻尾を掴ませないのだ。

「やあ、パレードの準備は進んでるかい？」

「レイフォルドか……まあ、ぼちぼちだよ」

すっかり闇神隊用控え室の様相を呈している下層階の神民衛士隊第二控え室にて、集められたピラを積み上げてあるテーブルの端でパレードに使う小物作りをしている悠介は、ぶらりとやって来たレイフォルドに目で挨拶を向けた。

レイフォルドはピラ一枚をひょいと手に取り、少し眺めて元に戻すと、徐に用件の一つを口にする。

「王が魔獣被害の対策をどうしようかって悩んでるよ、何か便利な道具とかないかな？」

「ん〜依頼があれば強化装備みたいなのは作れると思うけど、十日縛りを無くしたらまた面倒な事になりそうな気もするんだよなあ」

特殊効果を付与した装備品を作れるのは十日に一度程度　という設定にして神技の指輪を各宮殿衛士隊の衛士達に少しずつ作り与える事で、一応平穏な日々を維持していたのだ。

短期間で強力な武器を作れる事が知られば、只でさえ偉いさん一派に睨まれて面倒な状況に陥っているのが、更に厄介な事になり兼ねない。

「そうかなあ、君を味方につけた方が絶対安泰だって印象付ければ、

君に対する考えを改める者も出て来るかもしれないよ？」

「それはどういう」

「おいつ！」

二人の会話を遮るような怒声が響く。ツィテールの髪を揺らしながらズカズカと大股で部屋に入ってきたのはヴォレットだった。

じろりとレイフォルドを睨みつけ、悠介に妙な事を吹き込むなど両者の間に凜と立つ。おやおやと驚いたような表情で両手を広げて見せたレイフォルドは、貴族流っぽい礼を残して退散していった。

相変わらず掴み所の無い微風の如く鮮やかな去りっぷりは、気が付くと居なくなっていたかのような錯覚を覚える。

「まったく、油断ならん奴じゃ」

「追い返しちやって良かったのか？」

王様からの非公式な任務だったのかもしれないぞと気にする悠介に、ヴォレットは闇神隊が魔獣施設封鎖に関わる事となったデリアルディアでの一件を挙げて、二度とあのような真似はさせないと語気を強めた。

「そっぴやレーザーシアから聞いてたんだっただな」

「あやつを通じて父様が何か言ってきたも、応じる事はないぞ」

「いや、王様の依頼は蹴っちゃ駄目だろう」

「構わん、お前はわらわの衛士なのじゃ」

よいな？ と顔の前で人差し指を立てて念を押したヴォレットは、スンと弓射りの約束をしている訓練場へと向かった。ここには小物作りの様子を見に立ち寄っただけだったのだが、悠介に何やら持ち

掛けているレイフォルドを見つけて割って入ったのだ。

「いやあ、すっかり警戒されちゃってるなあ」

「うおっ　びっくりした！　部屋出て行ったんじゃなかったのかよ
っ」

ヴォレットを見送った悠介の背後にいきなり現れる自称森の民。
部屋を出て直ぐ隠し通路から戻って来たらしい。

「で、どうかな？　君に反感を持つ者の意識を変えてみるっていうのは」

「ヴォレットには世話になってるもんでね」

悠介の答えに『それは残念』などと然して残念そうに見えない微笑を向けて、レイフォルドは今度こそ部屋から退出して行った。

ヴォルアンズ宮殿の馬車乗り場から少し離れた場所にある宮殿敷地内の厩舎と、向かい合うように建ち並ぶ倉庫群。普段この倉庫は衛士達が使う馬車の保管や修繕、点検などを行なう工場として使われている。

誕生祭の時期になると、パレードで使う馬車の飾りつけ等が行なわれ、各隊に与えられた倉庫内は行進中の演出に関する打ち合わせや練習に励む宮殿衛士達で賑わう。

「補給用の水はこの位置で、下に桶を置いておけばいいと思うわ。

多分半日は持つ筈よ」

「後は実際に点灯してみないと分からないな」

闇神隊が使う倉庫にて、パレード用に組んだ動力車に飾り付けの仕掛けを施していく悠介と、助手のラーザツシア。

火、水、土、風という四大神を元にした特定のシンボルを持つ他の隊と比べて、コレといった明確なテーマを持たない闇神隊は、悠介のカスタマイズ能力を存分に活かした仕掛けを持ってパレードに臨む事にした。

「でもこれ、すっごく目立つんじゃない？」

「だろうな」

パレードの見物人達がどんな反応を見せるか、今から楽しみだと二人してウシシ笑いを向け合う。当日はラーザツシアも見物に出られるよう、ラサナーシャと悠介邸の専属衛士達にも頼んである。

立場上あまり外出する事ができないラーザツシアは、誕生祭のパレードをとて楽しみをしていた。

ヴォルナーの火月の一日目

闇の暦を過ぎ、自由祭が終わった翌日からは誕生祭に入る。新年を祝う祭りでもある誕生祭は、晶貨と同じ材質で装飾が施されたヴォルアンス宮殿の最上階部分が地平線に昇る真昼の太陽を浴びて赤く輝き、それを合図として祭りの始まりが告げられる。

朝早くより、宮殿の厩舎前に並ぶ倉庫群から各宮殿衛士隊の豪華に飾り付けられた馬車が運び出され、同じく特別な装飾をあしらった馬達を繋いでいく。行進に参加する衛士達もそれぞれの隊を表す普段より三割り増しくらい派手な隊礼服を身につけている。

鮮やかな赤いマント、宝石の埋め込まれた留め具部分から伸びる鳥の尾羽のような長い羽飾りを揺らし、細かい装飾が掘り込まれた儀礼用の槍を掲げる炎神隊。

水色に近い青のマント、甲冑というよりローブのような裾の長い礼服を纏い、パレードの演出で使わらしい小道具を手に馬車へと乗り込む水神隊。

土色のマントに艶のある高級革鎧をベースにした隊礼服、馬の代わりに土技で造りだしたゴーレムを三人がかりで操り、馬車を引かせる土神隊。

緑色のマント、動き易そうな装飾控え目の隊礼服を纏い、やはりパレードの演出で使わらしいモノを詰め込んだ蓋付きの桶を抱えて馬車に乗り込む風神隊。

そして闇色のマント、甲冑部分に掘り込まれた細かい装飾模様の金色が良く映える闇色の隊礼服。低民区で稼働中の乗り合い動力車をベースにしたオープンカースタイルの動力車に乗り込み、行進の最後尾に続く闇神隊。

高民区から中民区を過ぎる辺りまでは行進というよりも移動で、

低民区に入る辺りから本格的な演出を含めた行進に入る。王族は今年
の折り返し地点である展望塔広場に設けられた壇上にて、区画門
から行進してくる宮殿衛士隊の列を眺める事になる。

壇の周囲は護衛の衛士隊が固めているが、展望塔広場には見物の
一般民衆達も大勢集まっていた。

ちなみに、展望塔は明日まで一般民を出入り禁止にしており、各
階や屋上部分に詰める監視役が広場の様子を窺っている。狭くて動
き難い檣を建てるより楽で使い易いと、監視役は例年よりリラック
スして仕事に打ち込めていた。

「来た！ 宮殿衛士隊の行進だっ」

「今年も派手だなあ、まるで炎の川が流れて来るみたいだ」

「区画門に近付かないように！ 下がって道を開けなさい！ そっ、
座り込まないように！」

「はいはい下がって下がって！ 危ないから押さないよう もっ
と下がれつつってんだろ！ はい下がってー！」

区画門の向こう側に見え隠れする宮殿衛士隊の行列。先頭集団で
ある炎神隊は槍の先に炎を纏わせ、松明のように掲げながら展望塔
広場に入って来た。衛士隊の行進は王の御前を通る辺りで最大の演
出を披露するのだ。

「おおっ ようやく来たようじゃ。ユースケ達は一番後ろじゃから、
ここからではまだ見えんな」

「あ、あの……ヴォレット様？ 私達、本当にここに居ていいんで
しょうか……」

「構わん構わん、父様にもちゃんと話は通してある」

王族が観覧する壇上では、正面の大きな椅子にエスヴォブス王が座り、隣の席にヴォレット、その傍に設けられた椅子にラサナーシヤとラーザツシアが緊張した面持ちで腰掛けていた。彼女の達の背後にも護衛の衛士がずらっと並んでいる。

広場を埋め尽くす人込みの中を、何かと有名人でもある元唱姫と闇神隊長の奴隷を歩かせるのは自由祭で広まった噂の事もあって色々問題も起きようと、二人のパレード見物を悠介から聞いたヴォレットが特別に自分の後ろへ控えられるよう取り計らったのだ。

ラーザツシアは初めての祭り見物を王族の傍らという特等席で見られる事に緊張しつつも、区画門から行進してくる宮殿衛士隊の列に期待の眼差しを向けた。闇神隊が乗るパレード用動力車の飾り付けは自分も手伝ったので、出来栄えと反応がやはり気になる。

クレイヴォル隊長を先頭に進む炎神隊は壇の前に差し掛かると、槍の先に灯してある炎技の出力を上げて噴水のように炎を吹き上げた。火の粉が舞い、派手に飾り付けられた馬車からは炎の塊が次々と空に向かって打ち上げられる。周囲から拍手と歓声が沸いた。

次に壇の前を通る水神隊は、舟のイメージで飾り付けを施してある荷馬車型の馬車に乗り、持ち込んだ小道具の瓶から水技で治癒効果の籠められた沢山の泡を発生させて周囲に振り撒いた。治癒効果に実用性は無いが、泡を浴びると少し元気が湧いたような気分になる。

水神隊が通り過ぎた後、区画門から現れる巨人の姿に民衆からどよめきがあがった。普段、一般民があまり目にする事のない土技で

作られた土木用のゴーレムが土神隊の馬車を引く。派手さは無いが身長四メートル近い石の巨体が馬車を引く姿は、中々に迫力があつた。

ズシンズシンと足音を立てて土神隊の列が通り過ぎると、次に現れたのは風神隊。馬車に飾り付けられた風をイメージする細長い布が風技の風に吹き上げられ、空に向かって伸びるようにはためく。そうして壇の前に差し掛かると、とっておきの演出を披露した。

「おお、さすが毎年パレードの最後を飾っていただけあるのう」
「すごい……」

色とりどりの花びらが広場に舞う。風の膜に取り込んだ沢山の花びらをつむじ風で巻き上げて作り出す花吹雪の柱。風神隊の馬車上では、風の膜とつむじ風を起こしている隊員に混じって他の隊員が桶一杯に集められた花びらをせつせと花吹雪の柱に注ぎ足している。夜の街並みに舞う沢山の花びらという幻想的な光景に、人々から感嘆の溜め息がこぼれた。

去年までは風神隊がパレードの最後を締め括り、王からの有難い御言葉に続くのだが、今年は新設された闇神隊がいる。良いものも悪いものも含めて何かと噂の絶えない闇神隊。初パレードではどんな演出を見せてくれるのかと人々の注目が区画門に集まった。

そうして現れたのは黒い塊。乗り合い動力車に似た箱型の車両で天井が無く、小さなリーンプランプが車体の前後左右に四つ灯っている。乗っている隊員も一人を除いて闇色で統一されている為、そこだけ切り取られたかのような黒い塊がゆっくりと広場を進む。

「うーむ、まっくろじゃな」

「上手く仕掛けが動けば、姫様もびつくりしますよ？」

漆黒の車体にポツポツと小さな光が灯る。夜空に浮かぶ星のように淡い光を放つそれは少しずつ数を増やしながら瞬きを始めた。

おお……というざわめき。車体全体にちりばめられたような光の瞬きが広がり、やがて消えてしまったかと思うと、それらは一斉に点灯した。無数の青白い光の点が整然と並び、順番に点滅を繰り返すことでまるで動いているかのように錯覚させる。

「お、おおお！ これは凄い！ こんな今まで見た事がないぞっ」「良かったあ上手く動いてる。でも、こうやって見ると……本当に凄いねこれ」

「綺麗……あれが、シアの言ってたデンシヨクという仕掛けなの？」「うん、ユースケが住んでた所にああいう仕掛けの飾りがあったんだって」

これは以前、デリアルディアでヴォレットのお土産に買ったペンダント型リーンプランプを元に、ギミック機能で仕掛けを施した小型リーンプランプを大量に作製し、車体に貼り付けて電飾のような効果を狙ったものだ。

実際にランプの光自体を点滅させるのは難しいので、小型リーンプランプに遮光装置シャッターを取り付け、ギミック機能を使って開閉させている。内側には赤や青、黄色といったフィルターも取り付けてあり、一定数シャッターを開閉すると切り替わる仕組み。

次々と色を変えながら車体を流れる光に、見物の民衆のみならず警備の衛士達や、既に壇前を通過して広場の一角にて待機している各宮殿衛士達、壇上の王族を世話する使用人も含めて皆が目を奪われていた。

「受けてる受けてる」

「そ、外から見たかったような……気もするかも」

「あはは、同感だわ」

動力車の中では運転席のヴォーマルをシャイードが補佐し、フヨンケは車体を風の膜で包んでランプの仕掛けに塵が挟まったりしないようコーティング。エイシャとイフヨカは太陽苔の状態を監視するソルザックを手伝って、ランプに補給する水差しに水を注いでいる。

悠介とスンは並んで一段高い場所に立ち、車体の周囲を見渡しながら次の演出に入るタイミングを計っていた。

「ユウスケさん、シアさんとラサさんがあそこに」

「うお、またヴォレットが氣い利かせてくれたのか」

ヴォレットがぶんぶん手を振っているのでこっちも振り返す。隣に座るエスヴォブス王にも何処と無く楽しそうな雰囲気が見えた。ラーザツシアとラサナーシャも控え目に手を振ってくれる。

「うし、頃合だな。最後の仕掛け、いくぜい」

「がんばってください」

カスタマイズメニューを開き、現在乗車中のパレード用動力車を画面に呼び出す。光が流れる動力車の上でスつと腕を振るう闇神隊長の姿に、周囲の観衆はなんだろうと注目した。次の瞬間、動力車の下部から次々と光の粒が舞い上がる。

「連続カスタマイズ」

車体の下枠、バンパーのようにグルリと囲む縁の部分にカスタマイズを施し、実行する事でエフェクトを発生させる。これを連続で行なえばエフェクトが掛かりっぱなしになるという、以前ルフク村への帰郷で使った連続シフトムーブを元にした発想である。

展望塔広場に嘗て無いほどの歓声があがった。

パレードの見物で展望塔広場に人が集まっている為か、普段は何処でもそこそこ人通りのある低民区も今日は少し閑散とした印象を受ける。そんな低民区の貧民街から更に裏通りに入った場所でひっそり佇む怪しげな店。

棚に陳列されているのは、野良唱達がよく購入していく非法の避妊薬や出所不明の回復薬など、取り扱う商品も怪しいモノばかり。通常の店では売り出せないような商品を取り扱う、所謂ここは闇商人の店であった。

「だんな、ホントにこんなモノ使う気ですかい……？」

商品の質や効果には問題ないが、足が付いたら絶対ヤバイという代物を買って行こうとする男に、店の主は気が進まなそうな表情を見せた。普段はどんな客が何を買って行こうが干渉しない彼だったが、流石にこの商品だけは色々和不味い。

「今後も商売を続けたくば、忘れろ」

「分かってやすよ……だんなの口利きがなきや、オイラも今頃は独房の中でやすから」

「それも忘れる」

商品の包みを懐に仕舞った男はそう言つと、足音も立てず店を出て行った。

93話：夜の季節と夜明けの胎動

新しい年を迎えたカルツイオの大地。ヴォルナーの水月までは夜の季節が続き、太陽が高い位置まで昇るようになるには更に二十日、土月まで待たねばならない。

魔獣による被害は尚も続いており、人的被害は以前よりも抑えられているものの、それは交易商人が活動を控えているからであつて各国の討伐活動による効果が表れている訳ではない。

唯一、ガゼッタの領内だけは無技の戦士による働きで安全が確保されているが、他国との交易ルートがブルガーデンとの国境に位置する山岳地帯の街を通る狭い街道しかなく、この街道もブルガーデン側に入ると森に潜む魔獣の群れから狙われる危険性が高くなる。

魔獣被害が流通に及ぼす影響でガゼッタにも物が入り難くなり、また旧ノスセンテスの遺産とも言えるガゼッタ産の薬品類も、他国では手に入り辛くなり始めていた。

パトルティアノーストの中枢塔、旧神儀堂の執務室にて、シンハは現在進めている街の建設計画と魔獣被害への対策に関する報告書や企画書をとつかえひつかえしながら、終わりの見えない睨めっこを続けている。

「難儀しておるのか？」

「ああ、ちよつとな」

「どれ？ ふむ、他国への魔獣討伐隊派遣か……ええように利用されるだけじゃろうのう」

「だろうな……だから許可は出せんのだが、このままでは国内が物資不足で干上がってしまう」

奇しくも、フォンクランクとトレントリエッタが計画していた交易制限によるガゼツタの弱体化作戦が魔獣被害によって為されてしまっている形だ。

大抵の事は神技の力でこなせてしまえる神技人国家と比べて、領土の開発を行なうにも街の建設を行なうにも、それを進める為の道具から揃えなくてはならないガゼツタでは、必要な物資の量が倍近くに増える。

例えば、土地の開拓で邪魔になる岩を砕きたい場合、神技人は土技を使えば素手で処理出来てしまうが、幾ら神技人よりも身体能力に優れるとはいえ、無技人にそんな真似は出来ない。岩を砕く為には相応の道具が必要になる。

道具は使えば磨耗していつかは壊れるので、新しい物に取り換えなくてはならない。また、優秀な土技職人なら一人で短時間の内に済ませてしまえる土木作業も、無技人だと数人掛かりで取り掛かる事になり、作業人数が増えれば必要な食料なども増えてしまう。

そんな訳で、交易商人が減って流通が滞ると、一番影響を受けるのはガゼツタだったりする。山岳地帯で細々とやっていた頃ならともかく、今は旧ノスセンテスの領土を丸ごと手に入れ、無技人、神技人を問わず人口も大幅に増加しているのだ。

「まあ、とつとと周囲の国も飲み込んでしまえば手っ取り早かった

ろつにな、機を逃してしまったのう？」

「……そこは仕方あるまい。ユースケの事もある」

「シン坊や、そこで邪神のせいにしてもリシャ嬢を摘めなかった事の言い訳にはならんぞ？」

「……………」

バツが悪そうに顔を顰めて溜め息を吐くシンハ。アユウカスに誤魔化しは通用しない。

フォンクランクが魔獣施設の問題でトレントリエッタを向いていた絶好の機会に、リシャレウス女王との口約束を律儀に守ってブルガーデンに攻め込まなかったのは、例え本人がそれを認めなくともシンハが霸王への道から降りてしまった事を意味する。

あの時点でブルガーデンを手に入れておけば、トレントリエッタの動乱はフォンクランクの枷となり、ガゼツタは占領したブルガーデンの統治安定と次の戦に向けて準備を整える時間を得る事も出来た。

「ま、ワシは御主等ガゼツタ王の選択に口出しはせんからの。お前さんがそうすると決めたのなら、それで良い」

「婆さん……………」

孫を見守るような優しい眼差しを向けられ、自分は里巫女に認められたのだろうかと思ひ上げる想いを胸に懐き

「例えそれが、リシャ嬢の恋文に絆されたのだとしてもな」

「……………婆さん」

かっかとお笑われ、やっぱりからかわれたダケかと肩を落とすシンハなのであった。

気を取り直して、企画書と報告書に目線を戻すがゼツタの王。魔獣被害の影響で物資不足に陥っている現状への対策を練るシンハは、国内の神技人を重要な役職に就ける幾つかの人事を緩和する案と、根本的な流通の拡大を狙った建設事業を計画していた。

特に建設事業の方は、シンハが動乱のどさくさにトレントリエッタの半島を半分占領して進めていた港街の建設計画で、直接フォンクランク領の港街と交易ルートを結ぼうというものである。

神技人の最大国家であるフォンクランクとの交易を深めるガゼツタの港街建設計画は、五族共和構想を意識した事業とも言えた。

「陛下、フォンクランクから新しい情報が届いておりますが」
「もってこい」

各国に潜ませてある諜報より定期的に届けられる書簡を受け取り、その内容に目を通して片眉を顰めるシンハ。フォンクランク国内で闇神隊を排除しようする動きが、ここ最近になって特に活発化しているという。

「邪神の事を知っているエスヴォブス王が、今更ユースケの排除に動くとは思えんな」

「うむ、やるならもっと早い段階で速やかに処分しとるじゃろつな」

宮殿関係者の中でもかなり上の方から工作の指示が下りているようだ、エスヴォブス王の意向ではないと推測する。

流布されている噂の中にはガゼッタの邪神に対する立場や、ブルガーデンとの関係についても幾つか公にされていないような内容が含まれており、ガゼッタ内部にフォンクランク側の密偵、それもエスヴォブス王の配下ではない者が潜んでいるか、関係者に情報を流している者が居るであろう事を窺わせた。

「洗い出しと引き締めが必要だな……」

難しい顔で呟くシンハの背後で、アユウカスが机に紙とペンを用意していた。

「リシャレウス様、ガゼッタの王から書簡が届いておりますが……」
「シンハから？ まあ、一体どういう風の吹き回しかしら」

コフタの地下宮殿に届けられた書簡を側近から受け取りつつ小首を傾げるリシャレウス。何時もはリシャレウス女王からシンハ王宛てに親書を送り、その返事が届く場合もあるという程度のやり取りで、シンハ王の方から手紙を送って来る事は稀だ。

また何か緊急の事態だろうかとシンハからの手紙に目を通したりシシャレウスは、その内容に目を細める。

「ガゼッタの王は何と？」

「……フォンクランクの内部に、不穏な動きがあるようです」

手紙にはフォンクランク側にリシャレウス女王とエスヴォブス王

の極秘会談や、シン八王との伝書鳥を使った交流などにも探りを入れていた者がいるらしいという内容が記されていた。

最近フォンクランク国内で闇神隊長を誹謗する噂が広まっているという話はブルガーデンにも聞こえて来ているが、その中で闇神隊長は災厄の邪神であるとする噂にシン八王とリシヤレウス女王の繋がりを絡めるといって、少々不自然な内容がある事を指摘している。

フォンクランク貴族の中に成り上がりを忌避する者達がいたとして、闇神隊長を疎ましく思った彼等が、闇神隊長を貶めるべく彼の事を調べるうち、その正体が邪神であったという事実に行き着いたと考えれば、災厄をもたらす者として闇神隊長を危険視するのは理解出来る。

ガゼツタと邪神に纏わる情報も、フォンクランクに引き渡された旧ノスセンテス神議会の老人達辺りから多少は知られているであろう。だが、邪神とガゼツタに対する警戒感が、ブルガーデンの不審を煽る理由に繋がらない。

フォンクランクが介入したパウラの長城戦にて、ガゼツタから事実上の侵攻を受けた事もあるブルガーデンは、表向きガゼツタとは敵対未満だが友好未満といった微妙な関係を装っている。

ブルガーデンの等民制否定は四大神に神格の差異は無いとする論を元にした主張であり、神技人社会の中心となる四大神信仰を否定している訳ではなく、一般的に見て神技人社会の終焉と白族繁栄を謳うガゼツタとは相容れない立場の国である事は明確にしてあるのだ。

あくまでも表向きは、ではあるが。

フォンクランクの貴族が災厄どころか益ばかりもたらせている邪神を出しにしてまで、今更ブルガーデンに対する民衆の不信感を募

らせたい理由があるとするれば、五族共和構想が関係しているであろう事くらいしか思い浮かばない。

「エスヴォブス王との会談内容やシンハに宛てた親書の事を知る者となれば」

リシャレウスはシャルナー神殿の関係者が怪しいと睨む。コフタは人の出入りに敏感なので、見慣れない者や怪しい動きをする者がいれば直ぐに分かる。イザップナーの失脚後、王室周りの人事にはしつかり気を配って信頼できる者達で固めてある。

シャルナー神殿は元々国の管轄外にある施設で政務に携わる事もなく、単なる信仰の受け皿ではない。

故に四大神信仰が否定される事でその存在価値を落とし、神殿の存続が危ぶまれる事を考えるならば、地下宮殿にも出入りしている神殿関係者の中に五族共和構想の実現を阻止したいと願う者が出てもおかしくはない。

「では、神官の身柄を抑えますか？」

「いえ……まずは神殿に出入りしている側近周りの者から調べて下さい」

静かに指示を受けた女王付きの女官マーシャとサーシャは、御意と頷いて女王の執務室を後にした。

一人になったリシャレウスはもう一度シンハからの手紙を読み返す。素っ気無く用件しか書かれていないが、今回の件を知らせてくれたという事は、シンハが五族共和構想に乗り気な姿勢を見せ始めたという事でもある。リシャレウスはそれを喜んだ。

フォンクランクの上層にいる反邪神派の動きは気になるところだが、魔獣問題に決着が付けば当面の間は平穩が訪れる筈。その間に四大国による五族共和構想を進めていこうと考える。

悠介が本物の邪神である事は、闇神隊が魔獣施設の封鎖に動いていた頃にエスヴォブス王から直接会談の中で、シンハからは書簡の中で教えられた。

やっぱりそうだったのかといった感じで受け止めたりシヤレウスは、以後、邪神の扱いについても意見を交わし合っている。ただし、エスヴォブス王とシンハ王が直接密書をやり取りする事は無い。両者の意見はリシャレウス女王を通じて交わされる。

シンハは相変わらず邪神をガゼツタに招きたがっているし、エスヴォブス王は平穩な世界で人々から英雄の記憶が薄れていくように、一人の宮殿衛士として日々静かな生活に埋没させていきたいと思っているようだ。

色々が目立つ道具を作ったりもするようだが、平和であれば利用されるのは本人ではなく道具で済む。邪神に対するリシャレウスの見解は、どちらかといえばエスヴォブス王寄りの考えであった。

ちなみに、四大国の一つながら極秘会談を持ち掛けられるでもなく、密書のやり取りを行なうでもなく、ほぼ忘れ去られている状態なトレントリエッタのクリフザツ八王だが、本人も別に気にしていないので特に問題はなかったりする。

邪神と五族共和構想の存在を知ってから反邪神派として五族共和構想の阻止に向けた活動を行なっているイヴォール派勢力。何時もは宮殿の一室で行なわれている定期会合だが、今日は特に信用のおける者だけがヴォルダート侯爵の屋敷に呼ばれていた。

「諸君、いよいよ例の構想を阻止する為の詰めに入る。ここからはかなり危険な賭けとなるが、覚悟は出来ていような？」

「無論です。神技人社会の根幹である四大神信仰を否定するなど、とんでもない」

「座して邪神の魔手に蹂躪されるくらいなら、多少の危険を冒してでもこちらから打って出るは道理」

「我等はヴォルダート侯の判断を支持いたしますぞ」

口々に支持を表明する配下の同志達に頷いて応えた侯爵は、今後の活動方針と計画の概要を説明し始める。

未だ夜の季節が続くヴォルナーの火月初旬の事であった。

94話：刺客

その日、クレイヴォルは各宮殿衛士隊員達が集う上層階の控え室を訪れていた。

「あれ？ 隊長殿がここに顔を出すなんて、珍しいですね」

「ああ、姫様に気を使われてしまったな」

何時もはヴォレットの私室で専属警護兼教育係りとして御小言を申し上げながら世話を焼いたりしているクレイヴォル。今日は昼過ぎまで闇神隊長ユースケと専属従者スンが傍についているという事で少し息抜きの時間を賜わったのだ。

「姫様もユースケ殿が来られてから随分お変わりになりましたね」
「まあ……確かにな」

以前は何時も退屈を口にしては、何か面白いことは無いかと周囲の者達を我侭で振り回していたヴォレットだったが、この頃は色々と思慮深い行動を見せるようになって来ている。ような気がすると、最近は何の調子もよい炎神隊長殿は表情を緩めた。

クレイヴォルが適当なテーブルに着くと、特に気心の知れた部下達が集まって来ては隊長殿に美酒を勧めつつ雑談に興じ始める。

「ユースケ殿と言えば、自由祭に入ってから急に闇神隊を敵視する勢力が活発化しているようですね」

「低民区の方じゃ氏の暗殺を狙ってるなんて噂も聞くって、うちの
使用人達が話してましたよ」

「……お前達、滅多な事を言うものではない」

「すみません……ですが、実際よく耳にしますよ」

暗殺という言葉にピクリと眉を動かしたクレイヴォルは、部下達
の言動に自重を促す。肩を竦めて平謝りの彼等はしかし、ここ最近
のサンクアディエットには一般住民達も何か不穏な空気を感じとっ
ているようですと続けた。

「なんでも災厄の邪神伝説がらみで元ノスセントス人達が復讐を企
んでるとかなんとか」

何と無く街に漂う不安げな雰囲気は、恐らく流通の滞りで徐々に
品物が出回らなくなり始めているのを感じているのかもしれない。
只でさえ差別的な扱いが見られる元ノスセントス人の中から、とち
狂って凶行に及ぶ輩が出ないとも限らないと彼等は語る。

「ノスセントスから来た連中は闇神隊に懐疑的なようだし」

「ああ、闇神隊が滞在中だった時にあっさりガゼッタの侵入部隊が
ノスセントスの中枢を陥落させたからって話な」

「そうは言っても、奴等の指導者だった神議会が周辺国にやった事
を思えば、なあ……」

「お前達、その辺にしておけ。宮殿衛士隊に身を置く者が、そのよ
うな低俗染みた噂を軽々しく口にするものではない」

真面目な隊長殿に叱られた彼等は今度こそ口を噤んだ。しかし、
クレイヴォルは『低俗染みた噂』と切って捨てた言動とは裏腹に、

反闇神隊派が暗殺という直接的な手段をとる可能性について考えを巡らせていた。

もし闇神隊長や闇神隊のメンバーを狙った暗殺事件など起きれば、ヴォルダート侯爵一派が真っ先に疑われるであろう事は彼等自身がよく分かっている筈だ。そこまで浅はかであからさまな行動に出るとは思えない。

また、ソレを見越してヴォルダート侯爵等を貶めようとするような対立一派も今の所、思い浮かばない。

『元ノスセンテス人を煽って暴発させる狙いだろうか……？』

数々の戦功を上げた英雄と称えられている闇神隊長だが、その実、本人は決して高い戦闘力を有している訳でも類稀なる戦術知識の持ち主でもなく、ほぼ一般人である事をクレイヴォルは知っている。邪神としてカルツイオに喚ばれた異世界の若者。その身に宿す特異な神技によって強化された装備品の力で、一般衛士以上の身体能力や神技耐性などは備えているが、彼自身は本来戦いとは縁のない人間なのだ。

『もしも、反闇神隊派がそこまで掴んでいたとしたら』

一般民でも徒党を組んだり、不意を突けば暗殺は可能であると考えたとしたら。クレイヴォルはそこまで考察を重ねて頭を振った。邪神としての特異な神技以外は只の一般人であるという事まで掴んでいたなら、今頃は魔獣の討伐に闇神隊の出撃を強く推している筈だ、と。

『しかし、警戒はしておくべきか……』

「隊長殿？」

「急用が出来た。皆、あまり羽目を外し過ぎないようにな」

部下達が用意してくれたグラスの美酒を飲み干し、クレイヴォールは宮殿衛士隊の控え室を後にした。

クレイヴォールがヴォレットの私室に戻って来ると、悠介とスンを交えた三人は何やら床に広げた地図のようなモノの上で遊んでいた。ディアノース砦の遊戯室に置いてあるカルツイオルレットの小型版を回しながら、地図の上に人型の小物を三つほど並べている。

「うん？ なんじゃ、戻って来たのかクレイヴォール。何かあったのか？」

「ええ、姫様にも少しお耳に入れておきたい事がありました……それは、何をなさっているのです？」

「スヴォロクという遊びじゃ。ユースケの国にあった伝統的な遊びなのだそうじゃ」

「スゴロクな」

ヴォレットに『戻って来たのなら混ぜられ』と強制参加させられたクレイヴォールは、与えられた自分の駒をルーレットで出た数字に合わせて地図上の陣地に進め、何故か出発地点に戻されてヴォレットに大笑いされたりしつつ、先程の部下達から聞いた噂話を切り出す。遊戯に付き合いながら暗殺云々などという重い話題を扱えるあた

り、以前の彼と比べて思考に柔軟さが窺える。

「あ、暗殺……ユウスケさんをですか？」

「自分の事ながら、穏やかじゃないな」

「しかしまた随分と突飛な話じゃの、例の一派絡みか？」

「侯 例の一派も絡んでいるかもしれませんが、風評から派生した全くのデマかもしれません」

それでも一応、注意は怠らない方が良いと警戒を促し、”三つ進む”と書かれた陣地から駒を進めるクレイヴォル。

”ルーレットを回す悠介は心配そうな表情を向けている”一回休み”中のスンに大丈夫だよと微笑み掛けると、暫らくは普段より三割り増しくらいの防護装備で過ごす事を考えつつ、出た数字分だけ自分の駒を進めた。そしてスタート地点に駒を戻した。

「わははははっ ユウスケ、お前もか！」

「うーん、ゴール直前のトラップ多過ぎたかな……」

夕焼けのような茜色の空が広がる昼下がりに。宮殿の衛士食堂で昼食を済ませた悠介は、一旦自室で追加装備を装着すると日課の街歩きに出掛ける為、一階の出入り口まで下りて来た。

ちなみに、スゴロクの勝敗はヴォレットが上がり直前のトラップでスタート地点に戻される陣地を二度も踏んでしまい、なんとクレイヴォルに逆転されてしまった。哀しみに打ちひしがれたヴォレット姫は現在、お昼寝の時間を使って不貞寝している。

「ユウスケさん」

「おう」

今日は試作乗用動力車の街乗りテストも済ませておきたいので、低民区の外周付近をぐるりと流す予定だ。開発中の試作乗用動力車は誕生祭のパレードで使った既舎前の倉庫に置いてある。

スンを伴っているのは乗用動力車が二人乗りという仕様上、テスト走行も定員一杯で行なった方が良いという判断によるものだ。という建て前を使ったデートであった。

「今度、シアさんやラサさん達も誘ってあげて下さい」

「そうだな……あの二人にも息抜きさせてやらないとな」

それから数日、ヴォルナーの火月の十一日目

「あ、隊長」

「おう、イフヨカが」

所々場所の空いている露店市場を歩いていた悠介は、何時か見たような両手に荷物を抱える私服姿のイフヨカと遭遇した。丁度買出しから帰るところだったようなので、悠介は以前のように荷物を半分持ってやるとイフヨカの家まで並んで歩く。

「しかし何時も大荷物だよな」

「ええ、近所の人達の分も……買ったりますから」

「ああ成る程、イフヨカなら自由に露店市場まで出入りできるもんな。みんなから頼られてるわけか」

「えへ、そうなんですよー」

嬉しそうにニコーと笑うイフヨカ。隊服を着れば補助効果のお陰で大荷物でも楽に運べるのだが、その為だけに非番の日に闇神隊服姿で歩くのは憚れるからと、今日は私服姿なのだそう。

「でないと、ズルになっちゃいますからね」

「うっ 俺の立つ瀬が……」

そんな調子で和やかに談笑しながら、篝火が点々と並んだ無技人街前の通りまでやって来た時、ふいにイフヨカが小首を傾げる。

「ん？ どうした？」

「あ、いえ……あそこに居る人、何してるのかわかって……」

イフヨカの視線を追うと、防護溝を渡す小さな橋の近くで壁を背にして立つ一般民らしき青髪の男を見つけた。

誰かと待ち合わせでもしているのか、腕組みで壁にもたれて無技の街並みを眺めている。低民区でも普通に見掛ける事はあるものの、基本的に中民区で暮らす中等神民である水技の民が、無技人街への入り口にあたるような通りにいるのは珍しい。

悠介達が小さな橋に差し掛かると、無技人街の奥から神民衛士隊員の格好をした黄髪の男が現われた。彼は橋の前で悠介とイフヨカに会釈すると、端に寄って道を開けつつ壁際に立つ青髪の男に手を

振っている。無技人街の建物を補強に来た土技の衛士かもしれない。

『青髪の男は連れか、もしかしたら同僚かな』

自分達と同じ様に、非番の者と任務中の者が一緒に行動しているのかもしれない。悠介がボンヤリと考えたその時

「動くな！」

「！……きゃっ」

土技の衛士がいきなりイフヨカを引き寄せてナイフを押し当てる。と、人質にとって悠介と対峙する。突然の事に身構える悠介。驚きと恐怖に表情を凍らせたイフヨカがハッと息を呑む。

「た、隊長！ 後ろっ」

「っー！」

悲鳴のようなイフヨカの警告に振り返ると、こちらに手を翳した青髪の男が白い冷気を漂わせる氷槍を宙に浮かべ、今にも放たんとする態勢に入っていた。咄嗟に防壁を作ろうと意識の操作でカスタマイズ画面を開く悠介。

『材料不足？ しまった、橋の上だからか！』

無技人街には街のような石畳も敷かれていない為、通常の地面から防壁を作る場合は一旦資材化して材料にしなくてはならない。一度のカスタマイズで資材化出来る範囲はあまり広くないが、防壁を作る程度なら十分な量を得られる。

しかし、いま悠介が立っている場所は防護溝を渡す為に掛けられた小さな木製の橋だ。カスタマイズ能力の届く範囲内が殆ど空洞状

態なので材料はこの橋の分しか得られない。そしてこの橋では防壁の材料に足りない。

青髪の男が氷槍を放った。鋭い氷の槍が三本、冷気の尾を引きながら飛来する。橋の下を通る防護溝は飛び込んで怪我を負う程の深い溝ではないので、橋から飛び降りれば躲せる直線的な攻撃なのだが

「隊長！ 避けて下さい！」

『避けたらイフヨカに当たる！』

土技の衛士はイフヨカを盾にするような態勢で背後から首に腕を絡めてナイフを押し当てているのだ。悠介が避けると、真っ直ぐにしか飛ばない氷槍はそのままイフヨカの華奢な身体に突き刺さる事になるだろう。

「……しょうがないな、これは つがは……！」

「っ！」

正面から氷槍の直撃を受けた悠介の身体はその衝撃で吹き飛ばされ、イフヨカと彼女を人質にしている土技の衛士も巻き込んで橋の向こうへと倒れ込んだ。

衛士隊の甲冑を装備している土技の衛士は転倒のダメージも少なく直ぐに立ち上がると、仰向けに倒れている闇神隊長の状態を見て青髪の男と頷きあう。そうして荷物の下敷きになっているイフヨカに止めを刺す事無く、速やかにこの場を立ち去った。

「う……た、隊長……」

強かに身体を打ち付けてしまったイフヨカはモソモソと散乱する荷物から這い出すと、身体を起して悠介の姿を探す。そして

「ひ……っ　たい、ちょう……そんな……」

見開かれたイフヨカの瞳には、未だ冷気が立ち昇る氷槍を胸元から生やした闇神隊長が、仰向けに倒れている姿が映っていた。

「隊長……！」

「はいよ」

「ひゃあっ！」

むくりと起き上がる悠介。縋り付こうとしていたイフヨカは飛び上がった尻餅をついた。

「え？　あ？　た……あの？　え？」

「あゝ痛てて……止められたけど普通に痛てえわこれ」

悠介が胸元から生える氷槍を払うと、隊服の表面に少し張り付くような氷の粒を残しながらボロボロと崩れ落ちる。追加装備で神技耐性や物理耐性などの防御力を上げ捲った特別製の隊服は、至近距離から撃ち込まれた氷槍を通す事なく弾き返した。

突き刺さったと思われる氷槍の先端部分は、隊服の表面で碎けて残りの部分がそのまま張り付いていたのだ。

「た、隊長……良かったです……」

「ああよしよし、心配掛けたな」

えぐえぐと涙を流すイフヨカの髪を撫でて慰めつつ、よっこらしよと立ち上がった悠介は、散乱した荷物を拾い集めながらイフヨカに伝達を頼んだ。とりあえず、皆に伝えて先程の刺客？ を捕らえなくてはならない。

「さっきの二人の顔、覚えてるか？」

「は、はい……ひつく、おぼえてます……ぐす」

苦笑しながら『よしよしナデナデ』と宥める悠介。

暫らく後、所々解読不能な救援を要請する伝達を受けた闇神隊メンバーが駆けつけ、事情を聞くと部下達を連れて街中へと散らばって行く。悠介はヴォレットに報告と指示を仰ぐ為、一度宮殿に戻る事になった。

「流石に死んだかと思っただよ」

「縁起でも無い事言わないで下さい、隊長」

心配そうに叱るエイシャの治癒を受けながら、悠介は『わりいと肩を竦めて見せるのだった。』

95話：裏事情？（前書き）

10/06/27、加筆分追加。

95話：裏事情？

悠介が宮殿に戻ると、ヴォレットがスンとクレイヴォルも伴って極秘の会議などで使う何時もの部屋で待っていた。攻撃系水技の氷槍を至近距離で受けながらも軽い打撲で済み、ピンピンしている悠介の姿を確認した三人はホツとした表情を浮かべている。

「ユウスケさん……無事でよかったです」

「大事無かったようで何よりじゃ」

「ああ、このまえ気を付けるように言われて追加装備で防御力の底上げしてたからな、助かったよ」

「しかし、よもやこの様な事態が起きてしまうとは……」

事件を公にするか否かはエスヴォブス王が判断する事になるので、それまでは現在街に散らばって犯人探しをしている闇神隊メンバーやその部下達も含めて口外しないようにとクレイヴォルは念を押す。

「今日はもう屋敷に戻って休め。スン、お前も一緒に戻るが良い。クレイヴォルはわらわと来い、父様に少し話がある」

厳しい表情を浮かべたヴォレットは手短にそう告げると、クレイヴォルを連れて部屋を出て行った。悠介は帰っちゃっていいのかなと少し迷ったが、ここは上司の指示に従う事にする。

「帰ろうか、スン」
「はい」

馬車乗り場には連絡を受けた悠介邸の専用馬車が迎えに来ており、悠介はスンと共に帰宅の途についた。

時刻的にはまだ夕方にもなっていない頃だが、太陽は既に地平の彼方へと沈んでしまっているので、閑静な高民区は夜の街並みと変わらない静けさに包まれている。

ゴトゴトと馬車に揺られながら窓越しの景色を眺めている悠介に、スンは何となくいつもと違うような雰囲気を感じて声を掛けた。

「ユウスケさん？」

「……………ん？ どうした、スン」

「あ、いえ……………なにか考え事してたのなら、ごめんなさい」
「んにゃ、ただボーっとしてただけだよ」

そう言って笑う悠介。その微笑みに違和感を覚えたスンは、何故だか居た堪れない気持ちになった。口を嚙むと沈黙が重く、何か話していなければとスンは言葉を続ける。

「でも、ユウスケさんって本当に凄いですね。何時も冷静で落ち着いているし」

「うーん、状況について行けて無いだけだったりして」

「そんな事ありませんよ、部下の皆さんにもしっかり指示を出して

たじゃないですか」

「あー、ヴォーマル達は一を言えば五・三は分かってくれるからなあ」

微妙な数字の評価にスンはくすつと吹き出した。何時もと変わらない調子の悠介に、先程の違和感は気のせいだったのかもしれないと思いつく。寧ろ暗殺騒ぎなどに対する自分自身の動揺が、悠介から感じる印象に影響を及ぼしていたのかもしれない。

スンは知らず自身の腹部に残る古い傷痕の辺りに手をやっていた。

「ユウスケさんは強いですね。わたしは……命を狙われるのなんて、怖いです」

「……俺だって普通に怖い」

「え？」

「怖いよ」

そうやって先程のように微笑む悠介の眼を見て、スンはハッと息を呑んだ。やはり違和感は気のせいではなかった。

以前トレントリエッタの動乱鎮圧に援軍として参戦した折、国境近くの宿場街にて決戦を明日に控えた夜に、街の片隅で聞いた悠介の独白。あの時にも見せた眼だ。

「ユウスケさん……」

スンは悠介の頭を抱え込むようにして抱き締める。最初は戸惑った様子でモゾモゾと落ち着きなく動いていた悠介だったが、やがてその抱擁を受け入れて身体の力を抜くと、絶るようにスンの胸元に収まった。スンの香りに包まれながらその体温と鼓動を感じる。

倒すべき敵（・）がそこにいるならまだいい。敵を倒せば安心できる。安心を得る為の条件が分かり易い形で見えているなら、脅威を排除する事に集中して没頭していられる。その間は、不安も恐怖も一先ず置いておけるのだ。

だが実態の掴めない脅威は対処に困る。何をすればいいのか、どうすれば大丈夫なのか、安心できる方法が分からない。だから、心に慰めが必要だ。不安の原因を排除できないのなら、別の何かでそれを和らげる。

暫しの間、大人しく抱かれていた悠介は、そのままの体勢でゆっくり上体を起こすとスンの細い腰に手を回した。

「…………ユウスケさん？」

そつと座席に組み敷かれ、困惑するスン。馬車の中はちよつと横になつても大丈夫という位にはそこそそ十分な広さを誇つてはいるが、足も伸ばしきれないし今は移動中で多少揺れてもいる為、眠るにしても安定性が悪い。

「あ、あの…………」

「……………」

一休みするのは屋敷についてからの方が良いのでは などと惚けた事を口にしよつとしていたスンは、従者服の胸元を止めるボタンをぶちぶちと外し始める悠介に、内心の焦りを誤魔化しきれなくなつてきた。

『え、ええつ　ここで！？　ま、まだ心の準備が……っ』

外は夜のように暗いとはいえ現在は昼間。通りに行く馬車の中で、スンは何かに取り憑かれたかのような眼をした悠介を拒絶する事が出来ず、『どうしよう、どうしよう』とうろたえている内に服の胸元を開かれ、控え目な膨らみを護る布地が露わにされた。

躊躇無くそれを捲り上げた悠介は、より深く体温を感じる為に口付ける。

「んっ　あ……」

悠介の唇で直に触れられたスンはビクリと一瞬身体を硬直させると、緊張と羞恥に肩を震わせながらも吐息をこぼす。その時、通りに転がる小石でも踏んづけたらしく、車輪が跳ねて馬車が大きく揺れた。瞬間、我に返る悠介。

ハッと顔を上げた視線の先、スンの瞳に僅かな怯えの色を見て、急速に萎んでいく征服欲と膨らむ罪悪感。

「！っ……ごめん」

慌てて身体を離れた悠介は、あられもない姿にしまったスンから目を逸らした。乱された胸元を直しながら起き上がったスンも、恥じらいからか、シヨックからか、座席の端で顔を俯かせる。屋敷に着くまでの間、二人は一言も会話を交わす事はなかった。

「うー……あー……」

自室でベッドに突っ伏して良心の呵責に苛まれていた悠介は、部屋に響いたノックの音に扉を振り返る。

「ユースケー、起きてるー？」

「シア……？」

半分ほど開かれた扉の向こうから、ひょいと顔を覗かせるサイドポニーなラーザツシア。悠介が起きている事を確認するなり部屋に入ってきたラーザツシアは、ススツとベッド脇まで移動して耳元で囁く。

「スンを馬車の中で押し倒したんだって？」

「う……」

やはりその事かとバツが悪そうに顔を背ける悠介に、にやりと笑みを浮かべたラーザツシアは半開きの扉に向かって声を掛けた。

「スンちゃん、いらっしやーい」

「なのぬー！」

変な驚き声を上げている悠介を尻目に、ラーザツシアはおずおずと部屋に入って来たスンを手招きして呼び寄せると、悠介の隣に座らせた。スンは俯いている為、表情は分からない。

「……」

「お、おいシア、一体なにを……」

「うふふ、気まずいでしょ」

「ムチャクチャ気まずいです」

勘弁してくださいと頂垂れる悠介は、スンの顔をまともに見られないでいた。どこか楽しんでる感のあるラーザツシアは、雰囲気のままに真面目な声で諭すように語る。

「ごつうのはね、早めに処理しといた方がいいのよ」

「処理て……また何を企んでるのやら」

「企むだなんて程の事じゃないわよ。とりあえず、三人で夜のお茶会をしましょう」

「まだ昼なんだけどな、一応」

普段から心に懐く口に出せない想い、お互いの気持ちをきっちり確かめ合う。相手をもっとよく知る為のコミュニケーション。

「丁度いい機会だから、二人とも少し本音で話してみるのも良いと思うわよ？」

悠介は消極的だし、スンは遠慮がちなので二人つきりだと互いに一歩引いてしまい、中々突っ込んだ話も出来ないだろうとラーザツシアが二人の間に入る事で気持ちと言葉の橋渡しをするのだ。

「話し合いね……」

「あれ？ なになに？ 何か違うこと期待してた？」

「シテナイヨ」

そんな悠介とラーザツシアのやりとりに、スンがくすりと笑みをこぼした。双方の気持ちがほぐれたようだと確認したラーザツシアは嘗ての諜報家業で身に付いた聞き上手の聞き出し上手な話術を駆使し、二人の背中を押すべく持てる技術と知識を揮う。

「それじゃあ、始めましょうか。まずは、乾杯〜！」

「乾杯からかよっ　つか、なんで酒があるんだ」

「くすくす……酒盛りですな」

この日、悠介邸の主の部屋では夜遅くまで三人の話し合いが続いていたそう。

暗殺騒ぎがあつた日から数日

悠介邸では朝から公爵家の嫡男が訪ねて来たとあって、普段より緊張気味な様子の使用人達が慌しく動き回っている。そんな屋敷の主は普段と変わりなく、何時のものノンビリした雰囲気あつしで客人と部下達を迎えると、重要な会議に使える部屋へと案内した。

「そつえば、君の屋敷に来るのは初めてだったねえ。ちょっとこじんまりし過ぎにも思うが」

「お前んとこと比べるなつて」

今この部屋に集まっているのは、炎神隊のヒヴォデイルと悠介直属の部下であるヴォーマルを始めとした闇神隊員に専属従者のスン。闇神隊所属の一般神民であるソルザック。一応奴隷なラーザシアに元唱姫のラサナーシャ、という顔ぶれ計十一人。

暗殺未遂事件の犯人に関する情報と今後の対策について、尋問に立ち会ったヒヴォデイルから話を聞く為に呼ばれたのだ。

ちなみに、ヒヴォデイルが取り調べに立ち会う事になったのは、ヴォレットがエスヴォブス王に直訴したからである。

彼なら専属警護の任を背負うクレイヴォルと違って宮殿外で個人的に悠介と交流できる自由があり、今回のように悠介邸まで出向いて色々話す事も出来るからだ。

その後、犯人は直ぐに捕まった。低民区の貧民街に怪しい二人組みが潜んでいるという街唱達からの垂れ込みがあつたらしい。

青髪の男は元ノスセス人で闇神隊に懐疑的な感情を持っており、土技の衛士は壊滅した特別討伐隊の戦死者に知り合いが居た。フォンクランクの英雄についてくだを巻く二人が酒場で意気投合していた所へ、反闇神隊派の使者を名乗る男が闇神隊長の暗殺を持ちかけて来た

「と、というのが最初の証言だっただけどね」

「偽証だったと？」

調べてみたところ、青髪の男がノスセス人であった事は間違いなかったのだが、特別討伐隊の戦死者に土技の衛士が言う知り合いなどは存在しなかった。

暗殺の依頼に態々反闇神隊派を名乗るのも不自然だとして厳しく追及した結果『反闇神隊派を名乗る男に話を持ち掛けられた』と証言するよう言われていた事を白状したという。

「捕まっても罪には問われなから大丈夫だと、言われていたそうなんだ」

「言われたからといって、簡単にそれを信じた訳でもあるまい」

シャイードの尤もな疑問に頷いたヒヴォデイルは、信ずるに値する何かがあったのだらうと語ると、少し神妙な表情になる。話を持ち掛けて来た男の特徴から、レイフォルドと同じ王から直接密命を受ける密偵の姿が浮かんだのだそうだ。

現在その男は仕事で国外に出ており、諜報活動中であるらしい。

「それって……」

「まさか、王が……？」

しんと静まり返った会議部屋に、驚愕と困惑の表情を浮かべたエイシャとイフォカの呟くような問いがこぼれる。

皆に注目を向けられたヒヴォデイルは一つ溜め息を吐くと、その後更に厳しく問い詰められた犯人の二人は、依頼の男がエスヴォブス王の密命である趣をにおわせていたと自白した事を告げた。この事は暗殺未遂事件も含めてまだ公にはされていない。

「ま、王は否定してるけどね」

目下のところ暗殺の依頼を持ち掛けた男を特定する調査が進められており、数日中にはまた双方の尋問を行なう予定なのだそうだ。

「隊長と侯爵一派をいっぺんに片付けようとした……て事ですかね？」

「もし本当にエスヴォブス王が指示したのだとしたら、そういう事になるのかなあ」

「俄かには信じ難い」

「僕もだよ」

流石に事態が重過ぎたのか皆が黙り込んでしまい、今後の対策を

話し合おうにもこれでは議論にすらならない。まだ確定した訳ではないとはいえ、リアルディアでの件があっただけに『もしか……』という想いがある。

「あの、ちょっといいですか？」

「ん……？ なにかな？」

普段あまり交流もなく、ヴォレットとは悠介繋がりで親しいとはいえ自身の立場を考えるなら、公爵家の嫡男を相手に何時ものノリでは話せないと遠慮がちに手を上げて発言の許可を求めるラーザシア。その細腕に黒い腕輪が鈍く光る。

ヒヴォデイルは一瞬戸惑う表情を見せたが直ぐに改め、自然体で意見を促した。

「えっと、その犯人がどんな様子だったかを御聞かせ頂きたいのですが」

最初の証言の時と、後の証言の時とで態度が変わらなかったか。ラーザシアの質問の意図がいまいち良く分からないヒヴォデイルだったが、尋問の様子を思い出して答える。

「終始同じ調子だったかな、特に酷く怯えてる様子もなかったと思うね」

「では、なぜ王の密命である趣をにおわせていたという自白の信憑性が高いと判断されたのですか？」

「そりゃあ最初の証言と比べて矛盾や曖昧さが無かったからさ」

「……それ、おかしいと思います」

皆がラーザシアの言葉に注目する。元籠絡工作員の彼女は、犯

人の自供にある最初の証言『反閻神隊派を名乗る男に話を持ち掛けられたと証言するように言われていた』と言う部分の違和感を指摘した。

その供述で行けば、最初の『反閻神隊派を名乗る男』を証言するよう指示を出したのも、エスヴォブス王の策略であつた事になる。

「そのの……何処がおかしいんだい？ 確かに王がユースケの排除に動いたとを信じたくないのは理解できるが……」

「そうじゃなくて、あの王様ならそんな下手を打たないでしょつて事を言つてんのよ！」

察しているような雰囲気で見当違いな返答を寄越す公爵家の坊ちゃんにイラつと来たらしく、ラーザツシアは普段の口調に戻りながら自らの感じた違和感と、エスヴォブス王に関する認識などから導き出した推論を説明する。

「もし、本当に王様が仕組んだのなら、最初の証言に曖昧さや矛盾が生じるような事はさせないと思うの」

悠介暗殺未遂で反閻神隊派を一掃するつもりだったとしても、あの王様が仕組んだのならもつと周到に準備している筈。王様に悠介を暗殺するメリットがない事や、やるならば素人を雇うような不安定なやり方よりも確実な方法が他に幾らでもある。

レイフォルドの事は信用していないが、彼から聞いた王様のヴォレット姫に対する親バカぶりは誕生祭のパレードで感じた限り本当だろうから、この期に及んで反閻神隊派勢力が邪魔だからと態々姫様のお気に入りでもある悠介を危険に晒すような事はしないだろう。

ラーザツシアはそこまで語ると、一つの結論を示した。

「反閻神隊派の仕業に見せかけた王の策略と思わせる反閻神隊派の

謀略じゃないの？」

静まり返った部屋で皆が顔を見合わせる。ラーザツシアの理路整然とした説明を経ての結論は諸手で飛び付きたい内容ではあるが、反閻神隊派、ヴォルダート侯爵らが果たしてそこまで危険な謀略を仕掛けて来るだろうかという迷いもある。

そこへ、執事長ザツフィスから新たな来客が告げられた。

「ユースケ様、ヴォレット姫様が御見えになられました」

「ヴォレットが？　じゃあ直ぐに案内　　つてもう来てるし」

「皆揃っておるな。丁度良い、大事な話がある」

扉の前で控えていたザツフィスが頭を垂れながらスツと身を引くと、クレイヴォルを引き連れたヴォレットが現れた。ヴォレットは何時もの紅いドレス姿だが、クレイヴォルは専属警護兼教育係の官僚服ではなく炎神隊長の隊服姿だった。

部屋に集う面々を見渡したヴォレットは上座にいる悠介の所へずかずかと歩いて行くと、徐に腰掛けて話を切り出す。

「今回の騒動と父様の事じゃ」

はっと息を呑む声。空気の引き締まるような緊張感が場を包み込む。クレイヴォルは難しい顔でヴォレットの後方に立った。

「なぜ俺の膝に乗る」

「細かい事はよい」

『空いてる椅子がなかったのじゃ』と悠介の膝に乗ったヴォレッツ

トはテーブルの端をぺしつと叩いた。

いきなり悠介の膝によじ登り始めるヴォレットに、ぼかんとなっていたスンは我に返って予備の椅子を用意しようと席を立ち掛けるが、ヴォレットは『よいよい』とそれを制した。会議用の椅子より座り心地は良いらしい。

せつかく引き締まっていた空気は緩み、緊張感は四散した。クレイヴォルは益々難しい顔になって眉間の皺を増やしたのだった。

ヴォレットの話に先立ち、先程レーザーシアの推論によって出された結論を聞かせると

「なんじゃ、同じ結論が出ておったのか」

炎の姫君はひよいと肩を竦めてそんな事を言った。態勢上、身体を密着させている悠介はヴォレットが『説明が省けて良かったわ』と息を吐きつつ肩の力を抜いたのが分かった。

「ヴォレットもその結論に辿り着いたのか？」

「当然じゃ、わらわはアホではないぞ」

そう言っつて片目を瞑って見せながら、ヴォレットは今朝自分の所に『闇神隊を率いて砦に立て籠もり、王に抗議してはいかがか』等と綴られた手紙が何処からか届けられた事を明かす。事件を公にする事で大衆を味方につけて闇神隊を庇護すると言っつ計画案。

「彼奴ら、わらわの事を誑かし易いと思っつておる」

「ああ……まあなあ」

悠介の相槌に、納得するな！ と突っ込むヴォレット。げしげしと足をバタバタさせて踵で悠介の脛を打つ。闇神隊一同から生暖か

い眼差しが向けられるなか、ヴォレットがじゃれ始めたのでクレイヴォルが代わって話の続きを説明し始めた。

反閻神隊派の狙いはヴォレット姫が抗議の立て籠もりをやれば、それを理由に『閻神隊長が姫を誑かして謀反を企てた』とやるつもりだろうと推測している。流石に王族の姫君とて国王に対して技を向けるような行動を取ってしまったら、子供の我侷では済まされない。

不本意ながら、クレイヴォル炎神隊長ではヴォレット姫の暴走を止められまいと思われているであろう事も付け加える。

この前の特別討伐隊壊滅という事態に際して悠介が対策会議の席に魔笛の説明で呼ばれた時、ヴォレット姫の行動を全く抑えられなかった事や、これまでも勝手に御忍びに出たりする姫の行動が目立っていた事などから懐かれているであろう印象を推察した。

「他にも色々例はあるが、姫様が本気で行動すれば私には止められないという認識を持たれていると思われる」

悠介の立場からして姫に言われれば従うであろう事も予測しての事だろう。姫様個人でさえ抑えられないクレイヴォルが、閻神隊長を配下に行動するヴォレット姫を止められる筈もない。

そうして姫君の行動を国内外に大々的に広められれば『英雄の反乱か』と大騒ぎになり、収めるには何らかの処罰が必要になる。

「なんでそこまで俺を排除したがるんだ、やっぱり先祖代々の身分が云々なのか？」

「それもあるうが、それだけならここまで画策しようとはすまい」

うんざりしたように問う悠介に背を預けながら、ヴォレットはもつと深刻な問題が絡んでいると答えた。

「恐らく連中は焦っておる。等民制度が廃止されるかもしれない事に。自分達の身分、権力が脅かされる事にな」

「ああ……そういう事が」

「どうゆう事です？」

例の構想について知っている悠介はピンと来たが、他の者達は何の事か分からない。戸惑う闇神隊メンバー達を前に、クレイヴォルを見上げたヴォレットは『良いな？』と確認を取ると、例の構想、五族共和構想なる計画の存在を明らかにした。

「どうも父様はブルガーデン女王の提唱する五族共和構想に前向きでいるらしいのじゃが」

四大神信仰の否定による等民制度の撤廃、神格に基づいた身分差をなくし、全ての神技人、無技人を同等な存在として平等に扱う五族共和構想。エスヴォブス王はこの構想実現に同調する姿勢を見せている。

その事が反闇神隊派の知る所となり、同時に邪神の事もある程度知られている節がある。そこから、王が四大神信仰を否定しかねない状況なのは、邪神の影響では無いかと思われる可能性が推察されるのだという。

「それで排除したがつてるのか」

彼等にとって一大事なのは分からなくもないが誤解も甚だしい、

とんだとばつちりだと脱力の納得をする悠介。

「しかし……そこまで分かってても、一連の騒動が反閻神隊派による工作であるという証拠が無いんじゃねえですかい？」

「確かに、シアちゃんの推論も姫さん達の推測も納得は出来るけど……肝心な決め手になる部分がなあ」

腕組みをしながら唸るヴォーマルが疑問を呈し、頭の後ろで腕を組んでは天井を眺めているフォンケもそれに同意した。犯人の二人に対する監視を増やした方が良いのではないかと、シャイードが口封じを懸念して提案する。

「それに関しては既に手を打ってある」

「ここへ来る前に収容施設へ寄ってクレイヴオルの部下を置いてきたのじゃ」

故に今日は炎神隊長の隊服姿なのだと、ヴォレットが補足を入れた。

「ふーむ、証拠か……。そういえば、犯人の二人ってそれ以上の事を知らないなら口封じの必要ってあるのか？」

「うむ、知らないか否か、まだ隠している重要な情報を持っているやもしれんという事だな」

慎重を喫して取調べに当たるのだと説明するヴォレット。後は宮殿内で反閻神隊派の動きに注視しながら情報を集めるぐらいしか出来る事もあるまいと、ヴォレットが今後の方針について纏めに入る。そこへ、これまで静かに会議の成り行きを見守っていたラサナー

シヤが控え目に口を挟んだ。

「ヴォレット様、よろしいでしょうか」

「ん？ なんじゃ、ユースケの唱姫よ」

まあ！ と本気なのか演技なのか赤らめた頬を両手で抑えてみせたりしながら、ラサナーシヤはラーザツシアに犯人の二人を会わせてみてはどうかという提案をした。彼女の観察眼ならば、犯人にまだ何か隠している事があれば見抜けるのではないかと。

「ふむ、どうじゃ？ ユースケの奴隷よ」

「こら」

ちゃんと名前で呼べと後ろからヴォレットの髪をみよーんと引っ張ったりする悠介。ラーザツシアは二人のじゃれあいにも自分も混ぜて貰えている事を理解して内心に嬉しい気持ちを抱きながら

「人を見る目には自信あります」

そう言うてにっこり微笑んだ。

96話：邪神の提案

囚人収容施設の監獄から尋問室へと連れ出される二人の囚人。投獄された当初は『罪に問われない』などという暗殺依頼者の言葉を信じてか、何処か他人事のような振る舞いを見せていたが、何度も尋問を受けるうち自分達の犯した罪を自覚し始めたらしく、この頃は殊勝な態度を見せるようになっていた。

この日はこれまでに供述してきた証言内容の裏付けと洗い直しに伴い、各内容の最終確認を行なう事が告げられていた。

「なんでこんな事になったのかなー……」

「お互い馬鹿やっちゃったな」

本当に大それた事をしてしまったなあと自嘲気味に言葉を交わす二人。そんな彼等の待つ部屋の外が俄かに騒がしくなり始めた。何か通路で揉み合っているような様子で、いつも自分達の尋問を行なっている取調官の慌てたような声が、扉の向こうから響く。

「お待ち下さい、あの者達はまだ取り調べの最中で　　うわあああ

あ！」

「駄目！　落ち着いて下さいっ　今処分してしまっは　　」

バタバタと争うような音が近づき、尋問室の扉が勢い良く開かれる。そこに現れた人物を見て、囚人の二人は顔を引き攣らせた。部屋に踏み込んで来たのは漆黒の隊服を纏う黒い髪の男。氷槍を撃ち

込まれても怪我一つなかったという不死身の英雄、闇神隊長。

二人を見つけた闇神隊長がスツと手を翳すと、判別不能な神技の波動が部屋中に広がって行く。

『ひい……っ』

『こ、殺される……！』

硬直した二人が死を覚悟したその時、若い取調官らしき女性が果敢にも闇神隊長の翳した腕にしがみ付き、取り調べ中の囚人を手を掛ける事は許されないと必死に諭す。

「もう少し待って下さい！ 必ずこの二人から背後の人間を聞き出しますから！」

自分の腕にしがみ付いた若い取調官をじろりと睨みつける闇神隊長。若い女性の取調官はその視線を真っ直ぐ見詰め返す。固唾を呑んで見守る囚人の二人。やがて、部屋に満ちていた特殊な神技の波動が納まり、闇神隊長は翳していた腕を下ろすと

「半日だけ待つ」

そう言い残して尋問室から出て行った。勇敢な若い取調官は胸に手を当てながらホツとしたように息を吐き、壁際で固まっている囚人の二人を振り返って告げる。

「先任の取調官が来られなくなったので、今日はわたしが貴方達の取り調べを担当します。よろしいですね？」

「は、はい……」

「よろしく、お願いします」

収容施設の休憩室で例の二人を担当していた取調官とお茶など飲みながら取り調べが終わるのを待っていた悠介は、若い取調官に扮したラーザツシアが戻って来たので労いの声を掛けた。

「おつかれ。どうだった？」

「うん、大体予想してた通りだった」

とりあえず宮殿でヴォレット達も交えながら調査結果の報告をするという事で、ラーザツシアは官服を着替えに更衣室へと向かった。その間、悠介は担当の取調官に今日の事は他言無用で頼むと実酒など贈って恐縮されたりしている。

クレイヴォルからも話を通されているので態々口止めする必要は無いのだが、先程の演技が面白かったのでサービスだ。

ヴォルアンス宮殿の上層階。極秘会議にも使う何時もの部屋にて、ラーザツシアが囚人の二人から感じ取れた違和感など、調査結果を纏めた報告がなされていた。

「何らかの精神操作とな？」

「ええ、事件に関する部分でだけ反応が微妙に束縛を受けているように感じたの」

決められたあらずじに沿って証言するように暗示を掛けられているような違和感。ラーザツシアは供述を取る際、元籠絡工作員仕込みの話術を持って世間話や談笑を交えながら話題の合間に事件の事に触れるような聞き出し方をしていた。

事前に担当取調官や悠介との演技によって相手の感情を乱してあり、信頼も得た状態なのでその誘導効果も高い。

「話題の振り方次第で内容は同じでも多少は発言がぶれるものなのよ」

彼等が持つ話し方の癖を見抜き、どういつ話題の振り方をすれば、どんな反応を示してどう答えるか。同じ内容でも怒りながら否定するか、驚きながら否定するか、哀しみながら否定するかを観察する。

他の話題に関しては概ね予想した通りの反応を見せていた彼等が、事件に関する証言部分だけは感情にぶれが感じられない。特定の話題に対して同じ反応を示す事は訓練で出来なくも無いが、件の二人がただの一般人と一般衛士である事は確認されているのだ。

「暗示だとしても感情がぶれないって事は、本人も気付かないうちに意識が引き摺られてる程の相当強力なモノだと思う」

単に特定の情報や認識を刷り込まれ、そう思い込まされているだけなら、感情が抑え込まれるような状態にはならない。怒ったり哀しんだりしながらでも、一つの認識を保つ事は出来る。

あまりに強力な暗示は、そこに思考の余地すら残されない。本人の性格や感情を押し退けて働き掛けるので、普段の生活や意識にまで影響を与える弊害がある。無理に解くのも危険だ。

「ふーむ、それだけ強力な暗示を掛けられる者となると……絞り込めんのか？」

強力な暗示を扱える者という手掛かりから背後の人間を突き止められないかと問うヴォレットに、クレイヴォルは首を振って答える。密偵などの任務として暗示を受けている訳ではない以上、彼等に暗示を施して記憶操作を行なう為には相応の施設と期間が必要だ。

「彼等が何時頃、どれだけの期間を持って暗示を施されたのかが分からなければ、特定は難しいのではないかと」

拉致されて無理矢理暗殺者に仕立て上げられた、という事も考えられ、それこそ暗殺の噂が囁かれ始めた時期まで遡って二人の足取りを追うくらいの調査をしなくてはならない。せつかく手掛かりが得られても、ここで行き詰まりかと皆が消沈しかけたその時

「面白そうな話してますねえ」

突然、この部屋に招かれていない人物の声が控えめに響いた。風の波動も気配も感じさせず現われたレイフォルドに、イフォカとラーザツシアは警戒の眼差しを向ける。

「出たな自称森の人」

「森の民だつてば、自称だけど」

「この部屋は人払いをして見張りも立ててあつた筈じゃが……さて、随分と怪しげな隙間風が吹き込んで来たものじゃな」

「風は何処にでも吹くものですよ、姫君」

して何用か？ と皆からの視線に問われたレイフォルドは、今日ここで話し合われていた内容に関係する興味深い情報を持って来た事を告げた。

以前、調整魔獣の件でフォンクランクに呼ばれていたヴォーレイ工達をトレントリエツタまで護送した際、レイフォルドは彼女達から闇商人の取引ルートを聞き出し、その情報を元にまだ自分の見つけていなかった国内に潜む闇商人を特定。密かに客層などを監視していたらしい。

概ね利用客を把握した辺りで闇商人に接触、摘発を見逃す代わりに情報を吐き出させた。その結果

「誕生祭のパレードがあつた日にね、強力な洗脳薬を買って行った者がいたらしいですよ。相手は誰かまでは分かりませんが」

旧ノスセンテス研究所の関係者から手に入れたという曰く付きの代物。強い幻覚作用と暗示効果を生む洗脳薬。調整魔獣の調教などに使われていたモノだそう。

ちなみに、その店の顧客名簿に並ぶ貴族の名はほぼ全てイヴォール家の派閥に属する者達らしい。

「それって……」

「十中八九、反闇神隊派の者じゃろな」

「その薬を使って短期間で暗示を施したって訳ね。もしかしたら……犯行の実行中は催眠状態だったのかも」

魔獣を従わせる為に使われるような洗脳薬で施された暗示を解くのは、容易ではないだろう。囚人の二人からこれ以上の情報や証拠を引き出すのは困難というより、ほぼ不可能と判断して良い。

「なんじゃ、結局またここで行き詰まりか」

「犯人の黒幕も大体検討がついてるってーのに、証拠がねーからどうしようねーって事っすか？　なんかツマンネーですわね」

「フォンケ、姫様の御前よ？　言葉遣いに気をつけて」

悪態を吐いたフォンケを何時もの調子でエイシャが叱る。しかし彼女の不満気な表情にも、隊長ユースケの置かれた理不尽な状況に納得出来ないという心情が垣間見える。

相手は侯爵家。疑わしくとも明確な証拠が無ければ査問を要求できる筈も無く、また場合によっては例え証拠があつたとしても目を瞑らなくてはならない事態にもなり得る。そんな身分にある者だ。

「暗殺と姫様の扇動が失敗した以上、暫らくは動きを控えるかもしれませんが……」

「まあ、何れにせよユースケの周囲には常に気を配るようにせねばならんのだ」

護衛として最低でも二人以上の部下を連れて行動させるなど、悠介の活動範囲や今後の過ごし方について考えるヴォレット。中低民区を歩いて下々の声を聞いて回るといふ任務も、事態が落ち着くまでは自粛した方が良くかもしれない。

「それでしたら、あつしの隊から使えそうな者を出しやすぜ」

「私は直接隊長の護衛に就かせて頂ければ有難い」

「伝達は外せねーでしょうから、そっちは俺とイフヨカの隊で用意できるっすよ」

ヴォレットの提案をクレイヴォルが検討し、闇神隊メンバーの部下から護衛の人員を選出するなど意見が取り交わされる中、腕組み

をして煮え切らない表情を浮かべた悠介が唸る。

「うーん……」

「どうした？ ユースケ」

「いや……俺が邪神だと分かったから過激な行動に出るようになったって事は、今後もずっと狙われ続けるって事だろう？」

対症療法的な受け身の対策ばかりでなく、もっと根本的な解決を図れる策が欲しいと考える悠介は、いつそこちらから打って出ようと提案して皆の目を丸くさせた。

「やられっぱなしは面白くないしな」

「そ、そうは言うがなユースケよ……」

久々に好戦的な態度を見せる悠介に、ヴォレットは珍しく言いよどむ。その言葉を引き継いだクレイヴォルは、幾ら英雄の名を博し、姫様の後ろ盾もあるとはいえ、打って出るには些か立場に差が有りすぎると難色を示した。

「相手は国内で最大勢力の派閥を誇る門閥イヴォール家が当主、ヴォルダート侯爵だ」

「隊長、あつしも流石に分が悪いと思いやすぜ」

「大衆は隊長に味方する奴のが多いと思うけど、宮殿内じゃ向こうの勢力のほうがでけーっすからね」

「別に直接やりあおうって訳じゃないさ」

口々に考え直す事を促す皆に苦笑しつつ、悠介は反閻神隊派と対峙する事無くヴォルダート侯爵らに一泡吹かせる方法を思いついた

とニヤリ笑いを浮かべて見せた。

顔を見合わせる面々。部屋の調度品と化していたレイフォルドが思わず気配を乱し、そこに居る事を思い出させる。

「この前うちに集まって話した時、五族共和構想の話題が出たろ？アレを利用するのさ」

悠介はエスヴォブス王が五族共和構想に前向きである事を念頭に、自身の安全を図りつつ反閻神隊派を混乱させる策を語った。

97話：決断とお説教

ヴォルアンス宮殿、王の私室にて。クレイヴォルと悠介を伴って謁見に訪れたヴォレットは、悠介の策を提案として進言し、エスヴォブス王を絶句させた。

「父様、どうかわらわとユースケを信用して欲しいのじゃ」
「いやしかし、流石にそれは……」

この時期に闇神隊を親善大使としてガゼッタへ送るというまさかの発想。闇神隊長とガゼッタの繋がりが囁かれ、魔獣被害による流通の停滞で不景気にも苛まれ、街を包み込む不穏な空気に民衆の間にも閉塞感が漂い始めている。

そんな矢先に起きた闇神隊長の暗殺未遂騒ぎ。とりあえず公にはしていないが、緘口令を敷く程の情報統制も行なわれていないので、事件の調査を進めていれば宮殿関係者の間にくらいは情報も広まるものだ。

衛士達の間にも不安が広がっている今の状況で闇神隊をガゼッタに行かせるなど、幾らなんでも色々とタイミングが不味過ぎる。

「ユースケよ、何故に今ガゼッタへ赴こうと思うのだ？」

まさか本当にガゼッタへ亡命するつもりでは無かるうと僅かな不安も懐きつつ、エスヴォブス王はとりあえず本人に提案の真意を訊ねてみる事にした。

ヴォレットに同行して態々王の私室にまで顔を出したのだ。余程強く推すつもりで進言させたのである。事は推察できる。

「理由の一つは保身です」

さらっと答えた悠介の後ろ頭をぺしつと叩いて、せめてもう少し言葉を飾れと耳打ちするヴォレット。そうは言われても貴族貴族した言葉の言い回しなど全く心得ていない悠介は、ぶっちゃけてしまった方が信用も得られるのではないかと言い訳染みた反論をした。

「ええい、それでもじゃっ　もうちつとは格好つけようと思わんのか！」

「下手に凝った言い回し方して全然違う意味に取られたら、余計にややこしくなるじゃないか」

「姫様、ユースケ殿、王の御前ですぞ」

見兼ねたクレイヴォルが諫めに入ってフォローするも、エスヴォブス王は天真爛漫なヴォレットの姿に『よいよい』と目尻を下げていたりする。気を取り直し、悠介はガゼツタ行きを提案する理由について説明を続けた。

「もう一つの理由というか、多分こつちがメインになると思っていますが、五族共和構想の実現に向けてシン八を説得するって所です」
「ほっ……」

スツと目を細めて闇神隊長を見つめるエスヴォブス王。その耳元では微かに空気が震え、王にしか聞こえない『声』がこの提案の概要や悠介の言葉に偽りが無い事などを説明していた。声の送り主はここに姿を見せていない自称森の人である。

ガゼツタのシン八王が五族共和構想に歩み寄る姿勢を見せ始めているらしい事は、リシャレウス女王と定期的に取り交わしている伝書鳥を使った密書の内容で明らかにされている。

闇神隊長がその事を知っていたかどうかは不明だが、確かに『邪神』本人が出向いて五族共和構想に協力するよう説得すれば

『シン八王も構想参加を承諾するやもしれんな……』

ヴォルナーの水月の三日目

「一体、王は何を考えておられるのだ！」

「まさかこのような決定をなされるとは……」

宮殿上層階の一室。急遽招集が掛けられて集まった反邪神派による会合の席で、ヴォルダート侯爵は珍しく声を荒げながら机を叩く。他の参加者達も軒並み信じられないといった表情を向け合い、困惑の色を見せていた。

闇神隊が親善大使としてガゼツタを訪問する。サンクアデイエットの街は今朝、宮殿から公式発表された話題で持ちきりだった。宮殿関係者達の間でも大多数が寝耳に水だったらしく、昼過ぎ頃まで情報が錯綜して混乱していた程だ。

ヴォレットの進言を受け入れたエスヴォブス王は、ヴォルダート侯爵等が情報を掴む前に出来るだけ短い期間で事を進めようと、即日ブルガーデンに伝書鳥を飛ばして、ガゼッタへの親善大使訪問申し入れを依頼した。

リシャレウス女王を通じてシン八王に打診されたエスヴォブス王の申し入れは、翌日ガゼッタから歓迎の親書を携えた伝書鳥が飛来した事により、闇神隊のガゼッタ行きは僅か二日余りで決定事項となった。

今現在ガゼッタが陥っている状況の打開に向けて、是非とも悠介の力を借りたいと思っていたシン八にとっても、願っても無い申し入れだったのだ。あまりに急いで歓迎の親書を認めため、アユウカスの落書きした紙が混じっていた事に気付かなかつた程だ。

悠介率いる闇神隊はガゼッタ行きが決まったその日のうちに慌しく準備を済ませると、まだ夜も明けきらない篝火の揺れるサンクアディエットの街を発した。宮殿前の見送りはヴォレットとクレイヴォル、それにヒヴォデイルの三人だけだった。

「闇神隊は発表がされる前に出発していたとか」

「今からでは刺客を立てても追いつかんか……」

「そもそも刺客を向けた所でどうにか出来る話でもない」

邪神とガゼッタの関係上、絶対に無いだろうと思っていた闇神隊のガゼッタ公式訪問。王の意向でガゼッタと友好を築こうとしている事が発表されているので、邪神の陰謀と批難するのも難しい。

今まで流してきた怪文章もギリギリの内容だったのだが、今回の親善大使を送る決定に対して邪神の陰謀説を唱える事は、王が邪神、即ち闇神隊長に操られているかのような意味合いになり、国王に対

する不敬として完全に取り締まり対象の範囲に入ってしまう。

「……………五族共和構想か」

「ヴォルダート侯？」

「これは例の構想を進める為の策だ。王は闇神隊長を使ってガゼツタを説得し、交渉の席に付かせるつもりなのだ」

「そ、それではっ 何としても闇神隊を止めなくては！」

慌てる会合参加者達だったが、闇神隊は公式発表がなされる一日前に街を出発しており、既に二日以上経過している。今頃は港街から月鏡湖を渡ってトレントリエッタの半島に上陸を果たしているかもしれない。

「もはや間に合わん……………こうなれば、ガゼツタが説得に応じず今後も対立の姿勢を維持するよう期待するしかないか」

「向こうから仕掛けて来るように手を打ってみては？ 例えば、無技人街を焼き討ちしてガゼツタの敵愾心を煽るとか……………」

「ばかな……………相手に正当な宣戦理由を与えてどうする。それに無技の焼き討ちなど行なえば、こちらの士気が下がるだけだ」

「無技を特別扱いしている闇神隊長が、向こうに味方しないと限りませんからな。あの連戦連勝の戦功と武勲を誇る英雄が」

その指摘に、今更の如く闇神隊が敵に回るかもしれない事に思い至り、顔色をなくしていく面々。元々彼等の目的は闇神隊長の失脚であり、権力中枢から遠ざける事にあった。

闇神隊長がフオンクランクに多大な益をもたらせている事は、今や皆内心では認めている所だ。だが、あまりに早い出世速度。元宮廷神技指導官との繋がりを経て姫君の寵愛から始まり、公爵家嫡男

の籠絡。ノスセンテスの諜報員だった唱姫の籠絡。

無技の民を保護する条例など、ガゼッタの台頭という現状を予測していたかのような行動に、もしや全て計算ずくで行なわれていたのではないかと危機感を懐いた所へ、トレントリエッタの旧家組織による動乱騒ぎ。

その旧家令嬢にして当主であるヴォーレイ工嬢を何時の間にか自軍に引き込み、風の刃軍との戦いに協力させて大勝を掴んだ。

「……今後の事を考えておく必要がある」

「と、申されますと？」

「ガゼッタの説得が成功し、五族共和構想が公に発表された場合、必ず反撥する者と歓迎する者との間で争いが起こるだろう」

そうなれば反対派の速やかな排除を名目に闇神隊が動く事も考えられる。その時に備えて味方を確保する根回しや、軍備も整えておかねばならないという侯爵の言葉に、自分達が首謀者となる『内戦』を思い浮かべて、一同は顔を青褪めさせた。

彼等のそんな空気を読み取ったヴォルダート侯爵は、早合点しないようにと注意を入れておく。

「多少の内乱は避けられまいが、別にクーデターを起こそうという訳ではない。我々の守るべき権利を主張する為の準備だ」

エスヴォブス王を国王に戴いた体制を維持することは大前提である。隣国トレントリエッタと違い、フォンクランクは国王がコロコロ代わって国を保てる程ノンビリした国民性でも土地柄でもない。意外に野心的な輩も少なく無いのだ、実力はともかくとしてだが。

何より、ガゼッタが本気でカルツイオの覇権を目指して侵攻を始

めた場合、唯一の対抗出来る神技人国家がフォンクラクなのだ。そこを考えれば、五族共和構想にもガゼツタを大人しくさせる事で幾分脅威を削り、平穏な時代を維持できるメリットはある。

「我々の今後の活動は、五族共和構想の推進が決定的となった場合に備え、出来る限り現状の権利を維持する事である」

闇神隊長の失脚を狙う反闇神隊派から反邪神派として五族共和構想の阻止を掲げていた侯爵一派は、五族共和構想の実現による改革後の権力維持活動へと軸足を移していった。

月鏡湖に張り出したトレントリエッタ領の半島、今はガゼツタが半分ほど自国領に組み込み、フォンクラクの港街から丁度対岸にあたる付近に新たな街の建設を計画している。

以前、棧橋代わりのプチ岬を作った場所に上陸した闇神隊は、そこでシン八王と白刃騎兵団の出迎えを受けた。少し離れた場所に野営テントが張られており、その周辺一帯には大きな岩や腰高の雑草を掃う程度に整地された資材置き場が設けられている。

「よく来たな、ユースケ。ガゼツタはお前達を歓迎するぞ」

「つーか、流石にこんな所で出迎え受けるとは思わなかったよ」

「こりゃシン坊、親睦を図る前に形だけでも外交の体裁を繕わんか」

「アユウカスさん、こんちやっす」

闇神隊がガゼツタを訪れるという事で、態々国王が自ら精鋭を率いて上陸地点まで迎えに来たらしい。つくづくガゼツタの王は行動派なのかと呆れるやら感心するやらな悠介達。アユウカスに言わせれば『何時まで経っても落ち着きの無い子じゃ』なのだそう。

「ほい、うちの王からの親書。所で、この辺りってトレントリエツタ領じゃなかったっけ？」

「うむ、確かに受け取った。この前の動乱に乗じてな、半分ほど頂いたのだ」

厳肅さの欠片も無い調子で親書の受け渡しを行いつつ、この付近の開拓を進めようとしているガゼツタの活動について訊ねる悠介に、どさくさで占領した事を答えるシンハ。どうせ手付かずで放置されている地域なので、ガゼツタが有効利用するのだという。

「……そう言えば港街でヴォーレイ工達と会った時、対岸に白刃騎兵团連れて来てたつってたな」

よくよく考えてみると、シンハから親善大使の名目などでガゼツタを尋ねて来ないかと誘われたのは、あの時だった事を思い出す。

殊更ガゼツタとの繋がりを叫んで風評を揚げようとする反闇神隊派への意趣返しとして、本当にガゼツタへ親善大使として赴く事で慌てさせてやろうという案を思い付いたのは、その事を何処かで覚えていたからかもしれない。

「実は、ユースケに折り入って頼みがある」

「あ、俺もシンハに頼みたい事があるんだ」

「シン坊、ユースケも、お主等そんな場所で会談を始めるつもりか」

プチ岬の見える湖の畔にて、闇神隊が舟から降りた時のまま立ち話を続けている状態。シンハも悠介もあまり格式や作法に拘らない類の人なので、国王と大使という立場を考えず互いの目的について話し合いを始める両者に、アユウカスが待ったを掛けた。

アユウカス自身も儀礼的な事には寛容な人なのだが、けじめを付けるべき所ではしっかり付けよう弁えなくてはならないと叱る。

「特に邪神ユースケ、お主の国の上流貴族等がお主を疎ましく思うのは、そういう所から睨まれているのではないか？」

「う……」

「お主にとっては下らん事で言い掛かりを付けられたように感じるかもしれないがの」

礼節を重んじる相手に、それを軽んじる行為を示せばどう思われるか、その辺りの事も良く考えて行動した方が良いと諭され、確かにそれはその通りだと反論できない悠介は一汗たらりと頂垂れた。

「ユースケの部下、お前達もユースケを慕うなら諫めるべき所はしっかり諫めてやらんか」

悠介がこことは価値観の違う世界から来た事は知っておるのじやろうかと、御小言の矛先が自分達に向けられて思わず背筋を伸ばす闇神隊メンバー達。見かけは十二歳の子供だが、その実三千年の時を生きる里巫女の説教は有無を言わさぬ威圧感があった。

「ば、婆さん、もうそのくらいでいいだろう。一応フォンクランクの親善大使だぞ」

シンハもアユウカスの御小言は普段のからかい以上に苦手らしく、バツが悪そうに頭を掻きながら宥めに掛かる。里巫女として、代々ガゼツタの王となる者を見守り、幼少の頃から躰けなどの世話を担って来たアユウカスには頭が上がらない。

「シン坊も少しは王らしく振舞う事を覚えねばならんぞ、リシャ嬢の計画に乗るつもりならばな」

「……分かつている」

「リシャ嬢の計画……？ それつてもしかして」

「ブルガーデン女王の計画、五族共和構想じゃ。お主もその事でシンハを説得に来たのじゃろ？」

某専属警護兼教育係ばりの御小言ハリケーンを吹き荒れさせたアユウカスはそう言つて笑みを見せると、闇神隊一行を野营地の中でも一際大きい中央テントへと誘^{いよな}つた。

シンハは闇神隊の案内をアユウカスに任せて一足先に野营地に戻ると、部下達に歓迎の準備を申し付けている。

「大丈夫ですか？ ユウスケさん」

「ああ、なんか久々に目上の人から叱られてくすぐったいような気分だよ」

心配そうな表情を向けるスンに、悠介は苦笑を返す。経緯はどうあれ、自分達は国の顔を担ってガゼツタの国王と重要な交渉を行なう目的でここまで来ているのだ。確かに気を抜き過ぎていたと反省する。

国内でも周囲の人間との接し方、特に宮殿関係者を相手にする時はもう少し態度を見直した方が良くかもしれない。

「いや、あの見た目はあてにならねえって思ってたやしたが……」

「あんなチビツこいのに、やたら迫力あったっすねー」

「人間中身が重要とは、良く言ったものだ」

「ははっ 確かに。シンハもあれで結構さらっとヤバイ条件とか絡めてきそつな強かな相手だもんな、氣い引き締めていかない」と

月鏡湖の畔で適当に始められ掛けたガゼッタ王とフォンクランク大使の親善会談は、白刃騎兵団の天幕に場所を移して少しは厳かに行なわれたのだった。

「あ、そうだ。シンハ、これってどういう意味なんだ？ うちの王様も解読出来ないって頭捻ってたぞ？」

何かの暗号だったのか？ と、悠介はエスヴォブス王から預かってきた紙を取り出して見せる。親善大使の申し入れを歓迎する親書に混じっていた一枚。犬のような生き物の隣に女の子、緑の大地に色とりどりの花が咲いているような絵が描かれている。

「これは……」

「ん？ 一体何が書かれてあ　っ！ な、なんでお主がそれを持つておるのじゃ！」

ひよいと覗き込んできたアユウカスが、絵を見るなり顔を真っ赤にして叫んだ。

「え？ アユウカスさん、これ知ってるんですか？」

「い、いや……これはその……」

「婆さんが時々描いてる落書きだな」

「わーっ わーっ 言うでない！」

謎の暗号かと思われた絵はアユカスが嗜む絵画だった。悠久の時を生きるガゼッタの里巫女は『不覚』と呟いて顔を伏せたまま絵を引っ手繰ると、一目散に逃げていったのだった。

「……絵、お上手ですねとか、言った方が良かったかな？」

「それは止めておけ……」

98話・ガゼッタの港街（前書き）

10/07/02、加筆分追加。

98話：ガゼッタの港街

シンハの頼み事とは魔獣被害が招いた流通停滞によるガゼッタの窮状を打開する為、フォンクラノクの港街と直接交易を結ぶという計画の遂行にあたり、港街の建設に『邪神の力』ユースケを貸して欲しいという内容だった。

悠介達の目的であるガゼッタの五族共和構想への参加についても既に了承する心算だったシンハは、何時リシャレウス女王にその旨の返答を出そうかと検討していた所だったので、丁度良いとばかりに交換条件として扱われる事になった。

ガゼッタはフォンクラノクから親善大使として派遣された闇神隊長の説得に応じ、シンハ王の名において五族共和構想への参加を表明。その見返りに、闇神隊によるガゼッタの港街建設支援が行なわれる。というシナリオだ。

「えーと、あとは……これにも署名かな？」

「ああ、こつちの書類は一旦リシャの所へ送ってエスヴオブス王の下へ届けられる事になる」

夜、野営地での会談で早々に互いの目的をほぼ達成し合った悠介とシンハは、幾つかの公式書類に署名を記しながら建設する港街の規模や闇神隊の滞在期間などを話し合っていた。

「隊長、本国との連絡も完了しやしたぜ」

「お、ご苦労さん。今日はもう皆休んでくれていいよ」

「分かりやした。それじゃ、お先に失礼しやす」

ヴォーマルはそう言うのと敬礼を残して天幕から出て行った。白刃騎兵团野営地の一角を借りて闇神隊用の宿泊施設を作っている。スンを含む闇神隊メンバーは揃ってそちらで休ませる。

普通に建てれば土技の建築職人を集めても数日は掛かりそうな宿舎を一瞬で出現させる悠介の能力には、シン八が大いに期待を寄せる。出来れば大型の交易船なども作って貰いたい所だ。

「そついや月鏡湖って、でかい船浮かべると沈められるとかいう話があつたよつな」

「湖底に沈む神聖帝国の事か？ あれはただの迷信だ。……と、婆さんが前に言っていた」

「そつか。アユウカスさんが言うなら、そうなんだろうな」

「実際に沈んだ街はあつたらしい、その街が沈んだ影響で暫らくは湖面を行く船が渦に引き摺り込まれる事はあつたそつだが」

その現象はもう千八百年以上前に治まっているのだと聞いたそう
な。

「ふーむ、流石は三千四歳……いや、今年でもう三千五歳か。色々知ってるんだなあ」

「細かい事までは殆ど忘れてしまっているようだがな、大まかな時代の流れや大きな事件は覚えているそつだ」

特に邪神絡みの事はよく覚えていらしい。悠介は今度は是非ゼシヤールド先生に講義をお願いしたいものだ、氏の邪神研究の事な

ど思い出しながら手元の書類を片付けていった。

翌日、野営地を豊んだ白刃騎兵団は一旦パトルティアノーストに引き上げ、悠介達闇神隊が港街建設の下地作りを行なう間、旧ガゼツタ領の山岳地帯から切り出した建設用資材の運搬作業と、その路線作りの護衛任務に就く。

旧ノスセンテス時代のパトルティアノーストが陥落した時に住民の大半が逃げ込んだ街、現ガゼツタ領の中央付近にある中規模の街が山岳地帯の石切り場に近く、現地で作業員を募って切り出された石材は街道を通ってパトルティアノーストに運び込まれる。

そこからこの半島にある港街建設予定地まで輸送される事になるのだが、まだパトルティアノーストと半島の湖畔付近までを繋ぐ道が作られていないので、新たな街道構築も同時に行なわれるのだ。

運ばれる資材の量も然る事ながら多くの軍民が動員される大規模な事業となるので、シンハが全軍の陣頭指揮を執る。かなりの長距離を移動する事になるシンハの為に、悠介は闇神隊の備品である移動用小型車両の貸し出しを決めた。

「運搬用の動力車も開発しときや良かったなあ」

「この乗り物だけでも十分だ、感謝する。街の建設は任せただぞ」

石材が届き始めるのは早くとも十日後くらいになる。悠介とがっちり手を握り合ったシンハは、新しい街道作りで森を伐採する工兵

部隊の指揮を執りに、港街建設予定地を出発していった。

「さて、まずはこの付近一帯を資材化して整地する事から始めるか」

ざっと周囲を見渡した悠介は、カスタマイズメニューを開いて地面の資材化作業を開始した。

三日ほど掛けて建設予定地の地面を整えた悠介は、諸々の資材が届くまでに建築物の資料を揃えておこうと一旦湖を渡り、フォンクランクの港街で参考にする建物を物色してはデータファイル化して保存、デザインを弄るなどのカスタマイズ作業を行なった。

カスタマイズ画面の中で整地した地面の上に建物のデータを置くなどして街の全容を確かめられるので、建設用の資材が届けば直ぐにでもガゼッタの港街を組上げる事が出来る。

「うーん、もうちょっと埠頭を長めにした方がいいかなあ」

「のうユースケや、この船着場にある櫓はなんなのじゃ？」

「これは灯台。目印みたいなもんですよ」

画面の中に映し出される港街の全景を指し、アユウカスがあればこれ質問しつつ建物の配置や通りの道幅などにアドバイスを示す。

当初、悠介は自分にしか見えない画面内の港街全景を、紙や地面に書き起こして皆から街づくりのアドバイスを貰おうと考えていた

のだが、僅かな護衛と共に港街建設予定地に残ったアユウカスがカスタマイズ画面を視認出来ると分かり、彼女に意見を求めている。

邪神モドキであるアユウカスは邪神の一定範囲内にいる間、共鳴効果でその邪神の能力に触れる事が出来るのだ。

「それにしても、お主の力は実に変り種よの。モノに干渉する能力ならばコレまでも何度か見た事はあるが」

こんな風に幻影で改変した姿を現実反映させるような系統は初めて見ると、アユウカスは自分で展開したカスタマイズメニューを眺めながら顎に指など当てている。

悠介も自分以外の人間がカスタマイズメニューを開いている姿を第三者の視点で見るのは初めての事だったので、見える人が傍から見るとこんな風になっていたのかと、アユウカスが開いているカスタマイズメニューを珍しそうに覗き込んでいた。

「して、これはどうやって使うのじゃ？」

「あ、使い方までは分からないんですか？」

「まずこの文字らしき紋様が読めん」

「ああ、それは」

「隊長、隊長」

アユウカスの小さい指が『これっ』と指し示すメニュー項目を読み上げようとした悠介に、ヴォーマルが待ったを掛ける。

「あつしにゃあ何がどういう風になってるのか分かりやせんが、今の会話って隊長の神技の使い方やしょ？」

そういうのは迂闊に教えない方が良いのでは？ との指摘に、悠介もハツとなる。アユウカスの幼気な見た目に、同じモノを見て触れる事の出来る相手を得た喜びでつついっつい初心者プレイヤーの世話を焼く引率者プレイヤーモードに入り掛けていた。

「ちっ 良い部下を持っておるのう」

「ははは……」

「うーわ、油断も隙もねえよ……。スンちゃん、タイチョーの事ぢやんと見張つとかないと、子供婆さんに誑かされっちゃうぜ？」

「え？ は、はい、気をつけます」

分かっているのかいないのか、フォンケに睨けられたスンは悠介の傍らにピタリと張り付いてみたりするのだった。

湖で網を引いて漁を行なっている小さな漁船を眺めながら、食後のまったりとした時間を過ごす昼下がりに。

デザートとして用意した甘味ララの実に美味しい美味いと齧り付いているアユウカスの見た目無邪気な姿に和みながら、悠介はふと気になっていた事を訊ねた。アユウカスが古の邪神から力を引き継いだ存在であるという話。

「前に魔獣施設の地下通路で言っていましたよね、不老不死だとか。カスタマイズ・クリエートが使えるのって、やっぱりその力で？」

「うむ、一応そういう事じゃ。……邪神の事が気になるのかえ？」
「ええまあ。邪神の役割とか、災厄が何なのかとか、その辺りのことが」

「そうじゃのう、お主には少し話しておいてもよからう」

アユウカスは以前、魔獣施設へ向かう地下通路で悠介達に語った内容から更に踏み込み、これまでカルツイオに降臨した邪神の事や、その役割について語り始める。

「邪神のもたらす災厄というのはじゃな、文字通りの災厄を示す場合もあるが」

時代の節目となる大きな変革を指したモノも多いのだという。凶暴なる怪物に破壊と殺戮の限りを尽くされ、その爪痕によってもたらされる変革。人智を超えた神の力を揮い、指導者として人々を導く変革。

「端的に言えば、邪神の役割とは世界の姿を変える事のようにじゃ。方法は厭わずにな」

「なぜ変革をもたらせようとするんです？ それに、俺が選ばれた理由とか……」

「さてのう、それは神のみぞ知るといふ所じやろう。適当に選んでおるのか、お主が邪神となる資質を備えておるのか……じゃがまあ、大抵は文明が行き詰った時にとんでもない災厄が起こされておるなあ」

「行き詰まり、ですか……」

新しい事を始める為の下地として古いものを破壊する存在。それが邪神なのだとアユウカスは語った。

「ま、ワシの経験上からの単なる推測に過ぎんがの」

創造の為の破壊。アユウカスがこれまで見て来た邪神は皆在り方や形は違えど、それまで続いて来た世界の姿に影響を与える存在だったという。遙か昔、白族が繁栄する切っ掛けとなった黒い邪神も、それまでの世界の在り方を大きく変える災厄をもたらせた。

「無技の祠に黒い邪神像が祀ってあるじゃろ？」

「ええ、ありましたね。人だか怪物だか分からない形のが」

「あれは今から大体二千四百年くらい前に邪神として降臨した怪物を模ったモノじゃ」

当時のカルツイオは今でいう神技の民や無技の民といった人種的な隔たりはあまり無く、また国という概念も曖昧で集落や街といった規模の国家が民族単位で乱立していた時代。その邪神は人間に寄生して卵を産みつけ、繁殖していくタイプの怪物だった。

「あの黒い怪物は顕術^{けんじゆつ}　いわゆる神技の事じゃが、それが一切通じぬ相手でな、しかも顕術を使う者に好んで寄生しておった」

寄生された人間は三日ほど経つと体内で繁殖した怪物の幼生に身体を内側から喰い尽され、溢れ出した怪物の幼生がまた別の人間に寄生する。成体になった怪物は昆虫のように全身が黒色の硬い殻に覆われて、並みの攻撃では歯が立たない。

怪物の成体は群れをなして村や街を襲い、捕獲した人々に卵を産みつけて人里近くに放逐する。卵を産み付けられた人々はそれと知りながらも、恐怖から他の村や街に助けを求めて逃げ込み、大惨事を引き起こす場合もあった。

そうして多くの顕術使いが犠牲になり、黒い怪物は爆発的に数を増やしていったのだ。

「うわー……調整魔獣より性質が悪いですね」

「一応人型で知性もそれなりに高いようじゃったからのう」

世界中が混乱に陥る中、黒い怪物に唯一対抗出来たのは当時顕術けんじゅつの力を身体強化に特化させていた一族、白族の戦士達だった。

彼等を中心に人間側の一斉反攻作戦が行なわれ、寄生された人間はもとより襲われた村や街も徹底的に隔離する事で怪物の増殖を抑え込み、ようやくカルツイオから邪神の怪物を駆逐できた頃には、世界中から顕術使いの姿が消えていた。

後に『顕術使いが怪物を呼び寄せ被害を拡大させた』等として糾弾される立場となった顕術使い達は、白族から色付きと呼ばれて迫害され、更にその数を減らして行く事になる。その一方で怪物を駆逐し、世界を救った一族として白族の繁栄が始まった。

「シンハが言ってた白族帝国ってヤツですか」

「うむ。まあ当時はそれこそ蛮族みたいな連中じゃったからのう、黒い怪物に負けず劣らず急速にその勢力を増していったのじゃ」

ワシもよく乱暴されたわいと笑うアユウカスに、悠介はどう反応すれば良いのかと困って曖昧な笑みを返した。百年ほど掛けて白族が一大帝国を築き上げた頃、当時の帝王トルイヤードに見初められたアユウカスは、王の巫女として傍で仕えるようになったのだという。

「ま、二代三代と続く内に王宮も民も欲と権力に溺れた者達の跋扈で腐敗していったがの」

その二百年後、白族帝国の揺るがぬ栄華に停滞していた世界は、やがて降臨した邪神ヴィ・ザードによって変革の時を迎える。

神技の概念を与えられた顕術使いの末裔である色付き達の決起。永い栄華の時代を経て享楽に墮落し、戦闘民族としての気概を失っていた白族は神技の力の前に成す統べなく敗退し、白族帝国は滅亡した。

決起の首謀者達は民を纏める為のプロパガンダとして四大神信仰を提唱し、神技人の支配する新しい時代が始まったのだ。

「虐げられていた者達に同情するあまり、後先考えずに強い力を与えてしまったと……ヴィは悔いておったな」

四大神信仰が今の形で定着するまでもに紆余曲折があり、神技人同士の抗争が広がって暫らくは戦乱の時代が続いたらしい。

その後カルツイオに降臨した邪神はそれなりの災厄を引き起こしでは世界を震撼させたり、新しい概念をもたらせるなど、小さな変化を通じて世界になんらかの影響を与えていった。

「巨大な怪物じゃったり、獣の頭を持つ半獣じゃったり。無数の男を虜にして戦の元凶となった娘もおったのう」

「傾国の美女ですか……」

邪神そのものが何かを引きこす場合もあれば、邪神を巡って人々が争う事もあった。そんな中で、邪神ヴィ・ザードの事をよく知るノスセンテスの指導者達は、邪神を上手く扱って順当に勢力を拡大し、四大神信仰を世界の隅々にまで定着させていったのだ。

何れにしても、邪神という存在は『この世界の意思』に与えられた特殊な力も含めて様々な破壊と創造に彩られていた。

「そこへ行くとお主は本当に変り種じゃな。壊すのではなく変えて

しまつ、まるで変革そのものを力にしているようじゃ。そういう力を望む発想こそが、お主の邪神に選ばれる資質だったやもしれんの」

「ははは……」

実は直前までプレイしてたゲームのシステムなんですよとは言えない悠介であった。

数日後、パトルティアノーストから森を切り開いて作られた新しい街道を通つて、大量の石材が港街建設予定地に運び込まれて来た。悠介は効率よく作業を進められるよう、資材置き場に積み重ねた石材を片っ端からグループアイテム化で一塊にしてゆく。

「まずは足元全域……もう一日あれば取り掛かれるかな？」

「ふむ、まだ資材が足りん状態なのか」

カスタマイズ画面内には港街モデルから建物が省かれた石畳の部分が広がる街の全景が映し出されている。

街の敷地内一帯はほぼ全域が石畳敷きで、車道と歩道を分けた作りの大通りや、建物の土台部分と階段、ギミック機能を使った噴水などの設備も一纏めにしてある。何せ広範囲なマップアイテムデータなので、今日届いた分の石材では全く足りない。

「今ある分だけでも区分けして使えんのか？」

「出来なくはないですけど、分けると繋ぎ目に微妙な段差とかでき

るんで、後で修正するのが面倒ですし」

「ああ、なるほどの」

ふむふむと頷いたアウカスは見よう見まねで使い方を覚えた自分のカスタマイズメニューを弄っては、悠介が資材化して固めた地面の範囲と規模を確かめている。

まだ特殊効果付与や対象を変形させる操作は覚えていないが、悠介は時間の問題ではないかという気もしていた。と、その時

「ユウスケさん！」

「ん？ スン、どうし　ぐほっ」

バタバタと駆け寄って来た勢いのまま全力で悠介の胸に飛び込むスン。漢の意地でしつかり踏ん張ってスンを受け止める悠介。

どうにか押し倒されずに済んでホッとしている悠介の背中にするりと回り込んだスンは、漆黒のマントに隠れるようにしがみつく。一体何がどうしたのかと自分のマントの下に隠れるスンを脇腹越しに覗き込んだ悠介は、聞き覚えのある声に振り返った。

「スン！　待ってくれっ　俺の話聞いてくれ！」

「出たな、バハナさんに迫って前歯折られたルフク村の誑し青年」

すぎーっとヘッドスライディングを決めるタリス。

「ノリいいな、タリス君」

「あ、あなたな……」

思いがけず昔の恥ずかしい黒歴史を暴露されて動揺したタリスだったが、今はスンの方が大事だと気を取り直すと、悠介のマントか

ら半分顔を覗かせて警戒しているスンに意識を戻す。

「スン、俺まだ見習いだけど白刃騎兵団入りが出来たんだ。同じル
フク村の出身者として、是非君の祝福が欲しい」

訓練兵から正規兵見習いに昇格したタリスは今回、工兵部隊の護
衛としてこの港街建設予定地まで来ているらしく、闇神隊による港
街建設支援の話聞きつけてスンを探していた彼は、資材置き場で
作業を手伝っているスンの姿を見つけて意気揚々と声を掛けた。

しかし、何故か猛ダッシュで逃げられてしまい、ここまで追いか
けてきたのだ。

「祝福って羽飾りのわっか被せるアレか……。スン、祝福が欲しい
って言ってるぞ？」

「…………やです」

悠介の背中に張り付いてマントに隠れたまま、スンはふるふると
首を振る。拒否されて若干哀しそうな顔を見せるタリス。肩を竦め
た悠介は改めてタリスの姿を観察し、スンが何故ここまで怖がつて
いるのか凡その検討を付けた。

「まあ、その格好がというか…………随分がたいが良くなってるみたい
だからかなあ」

悠介から見て、村で初めて顔を合わせた時のタリス青年は少し線
が細く感じなくもない爽やか君な雰囲気だったが、舞踏祭で帰郷し
た彼は如何にも訓練で鍛えられていると分かる引き締まった体格を
していた。

そして正規兵見習いとなった今のタリスは、一言で言えばマツチ
ヨ君。白い鎧から生える剥き出しの二の腕など、太目の荒縄を束ね

て捻ったような筋肉が戦士の腕だと自己主張している。

スンにしてみれば一度は自分を襲った相手であり、ここまで筋骨隆々な姿になって以前のような距離感の接し方で迫って来られたならば、怖いと感じても致し方ない所であった。

「怖がつちゃってるから仕方ないわな、今回は諦めた方がいいんじゃないか？」

「……あんたが、スンにそうさせてるんじゃないだろうな」

穩便に御引取り下さいな対応をする悠介を、タリスはじろりと睨みつけて猜疑を向ける。彼自身の心情的には、スンを軍属に就かせている事に納得していないが故に悠介の事もまだ認められないのである。

不穏な気配を感じ取ってか、離れた場所で悠介達の様子を窺っていたヴォーマルは、フォンケに目配せしてタリスの動向に注視するよう促す。フォンケは女絡みの喧嘩か修羅場かとちよつと楽しそうな様子で風技の波動を練り始めた。

シャイドがさり気無い動作ながら、あからさまに悠介の後方に立つ事でタリスの視界に入って見せる。その挑戦的な視線に喧嘩上等で表情を険しくするタリス。意図せず睨み合う格好になってしまい、悠介は困ったように頭を掻く。

俄かに重くなる周囲の雰囲気、エイシャとイフォカは不安げな表情を浮かべてスンを背に庇う隊長ユースケと若い無技の戦士を交互に見やっている。

「こりゃ、そこな若者。私情で大使殿の従者を追い回すとは何事か、末端の見習い戦士風情がそのような振る舞い無礼と心得よ」

「ん？ なんだ、このちびっこいのは」

無益な対立を見兼ねて割って入ったアユウカスに、タリスは訝しげな視線を向けた。が、次の瞬間

「見習い、齒あ食い縛れ！」

「っ！」

横合いから一気に距離を詰めてきたアユウカスの護衛、白刃騎兵団の正規兵がタリスの横面を殴り飛ばす。もんどり打って地面に転がるタリス。いきなりの鉄拳制裁に重くなっていた場の空気が凍り付く。

「っ……」

「貴様、シン八様が自らお出迎えになつて歓迎を示した大使殿に対する不敬にも加えて、里巫女様に対する不躰なその態度はなんだ」

「さ、里巫女……？ アユウカス様！？」

「なんじゃ、ワシを知らなかったのか。そういえば今年はパトルテイアの奪還やらなんやらで忙しかったからのう」

祭りの神事などで新兵達を祝福する儀にも顔を出していなかったのうと、邪神降臨による激動の時代を実感するアユウカス。呆然とするタリスを尻目に、護衛の正規兵はアユウカスと悠介達に見習いの仕出^{して}かした非礼を詫びた。

「体育会系だなあ……つか、ちょっと可哀相だった気もするが」

しょんぼりしたタリスが皆に謝罪して自分の所属する部隊へと帰

って行く後ろ姿を見送りながら、悠介はポツリと呟いた。

99話：災厄の終わりに向けて

続々と運び込まれる大量の資材。敷地一帯を覆う為に必要な資材が揃ったので、悠介はさっそく石畳の敷き詰め作業を開始した。作業といっても予め作っておいたマップアイテムデータを呼び出し、一塊に纏めた石材を材料にして建設予定地に反映するだけである。

「実行」

ぼちつと実行ボタンを押すと、辺り一面に光のエフェクトが広がりはじめた。資材置き場に積まれていた大量の石材が光に包まれて消えて行く。薄暗い湖畔に現われる光の大地。その場にいた誰もが目を奪われる幻想的な光景。

暫しの後、光の粒が舞い消えると、広範囲に渡って敷き詰められた石畳の床が広がっていた。まだ建物が無いので街の中心を街道まで抜ける広い大通りや噴水のある広場、プチ岬が並ぶ埠頭、縦横に路地が伸びる宿場通り予定地など、街の端から端までが見渡せる。

建物を建てる前に細かい部分のチェックをする為、敷地内は一応まだ立ち入り禁止だ。悠介はアユウカスと連れ立って街中を散策し、実際に歩いてみて街の雰囲気を感じながら、広場や通りの休憩場所にベンチを設置するなど微修正を加えていく。

まだマップデータの閲覧しか出来ていないが、カスタマイズメニューを出せるアユウカスが協力してくれると作業効率も良い。

「ほう……これは見事なものじゃな」
「どうも。このくらいなら朝飯前ですよ」

網目状のお洒落なベンチや、ギミック機能を使った広場の噴水を間近で見て感嘆の眩きを漏らすアウカスに、悠介は軽く笑って答える。そこへ、白い従者服姿のスンが手を振りながら二人の所に駆け寄って来た。

「ユウスケさん、アウカス様、朝食の準備が出来ましたよ」

「ん、今行く」

「おお、飯か」

本当に朝飯前だった。

空になった資材置き場に再び石材が山積みになる頃には、ガゼッタの港街建設を聞きつけてか広大な石畳が広がる建設予定地にチラホラと旅の行商人や交易商人等の姿が見られるようになっていた。港街が完成すれば、各建物にはガゼッタの交易商人が優先的に入れる事になっている。

トレントリエッタやフォンクランクからも見物に来た気の早い他国の商人達は、建物の空きや敷地内の余った土地があれば是非、入居なしの店舗を構える許可が欲しいと交渉を持ちかけて来ているようだ。

ガゼッタの港街には通商協会の支部を置く段取りで進めているので、彼等には通商協会の活動が始まってからそちらで正式な手続きを踏んでくれと通達が出された。

「サンクアデイエツトの様子ですが、隊長がこっちで港街の建設やつてる話は商人達を中心に広まってるようですね」

「通商協会が動いてるみたいですねー。この前から敷地近くの街道脇で露天やってる連中は、抜け駆け狙いってところでしょ」

「そっか。例の一派の動きとかは分かるか？」

「はい、今の所は特に動きは、ないそうです」

悠介郎の関係者に対する護衛にはヴォーマル達の部隊からそれぞれ選出した衛士を付けているので、何かあれば直ぐにヴォレットが動いてくれるし、連絡も来るように手配してある。

闇神隊によるガゼッタの港街建設支援について、反闇神隊派に何らかの行動を起こすような兆候は今のところ見られないようだ。

「対岸の港街にも商人が大勢集まって来てるみたいですね」

「ふーむ、なら港の部分だけでも利用可能にしようか？ 直ぐにでも交易再開できるように」

「ほうほう、埠頭の先行開港か。良いかもしれんもの、ガゼッタの代表として支持するぞ」

「舟が足りねーですよ舟が、元々渡し用の小さいやつしかねーっしよ」

物を運ぶにも人を運ぶにも、今フォクランクの港街にある舟では数も規模も足りない事をフォンケが指摘する。

「ああ、そう言えばそうだったな。じゃあちよつと大きめの船でも二、三隻造っておこうか」

「……隊長が言うつとすげー簡単な事みたいに聞こえるっすね」

「まあ実際、隊長にとつちや簡単な事なんだろうけど……」

「では、ワシも手伝つとするかの」

そろそろ太陽の昇っている時間も長くなり始めた今日この頃。朝食を終えた悠介は一緒にいる事が当たり前になりつつあるスンと、カスタマイズ能力の使い方を覚える気満々なアユカス、それにソルザックを伴って近くの森まで木材の調達に向かうのだった。

閻神隊がガゼッタの港街建設支援を始めてから十四日目。

悠介は大型の運搬用いかにギミック機能で自走機能を付けた交易船二隻を湖に浮かべて渡しに使わせ、まだ建物や施設のない平坦な港街の埠頭を一部の商人達に開放して少数ながらフォンクランクの港街との直接交易を開始させた。

特に流通の滞っていたガゼッタ産の薬品類が優先的に扱われる。

ガゼッタに不足しているフォンクランク製の丈夫な陶磁器や金物がこちら側の港街に届けられると、その材料となる良質の土や鉄などが折り返し向こう側の港街へと送られた。

帆も櫓も使わず進む不思議な船を目の当たりにした商人達からは

早速、通商協会を伝って闇神隊長に造船の依頼やら受付販売など取り扱い全般の委託申し入れやらが殺到したが、悠介は今回のような交易船は暫らく造る予定は無いと全て断った。

造船業もそれに関連する多くの人々に仕事を与え、街の活性化に一役買う大事な要素なのだ。

「俺の力で折角の需要を潰してしまう訳にはいかないからなあ」

「中々考えが行き届いておるのう。感心なことじゃ」

悠介が交易船を造る様子を一度見ただけで、対象を変形させる力スタマイズとギミック機能の一部だが使い方を覚えたアユウカスが、戯れに木の枝から小さな船の置物などこしらえながら悠介の判断を評価した。

「……とうとうそんな使い方まで覚えてしまいましたか」

「ふふ……安心せい、どうせお主の近くにおらねば使えん力じゃ」

直接交易による商隊の第一陣がサンクアディエツトに到着する頃にはガゼツタの港街建設に必要な資材も揃い、諸々の施設が建ち並んで街全体が完成すると、一斉に移動してきた商人達によってフォクランクとガゼツタの港街は人と物で溢れかえった。

今まで滞っていた分、互いの国内に燻っていた大量の輸出用商品が一気に市場へと流れ込み、枯渴しかかっていた流通は怒涛の勢いで潤いを取り戻す。両国間の直接交易が本格的に動き始める様を見届けつつ、闇神隊は一旦パトルティアノーストへと移動した。

一応ガゼツタの王宮にて形式的にだがシン八王との謁見を済ませて置く為だ。それが終われば即帰国の予定である。

流石に親善大使が相手国の首都にも訪れず、殆ど未開拓だった港

街建設予定地の野営地で短い交渉と建設支援作業だけして帰るとい
う訳にはいかない。

「うーん、せつかくここに来るならシアも連れて来てやれば良かったかな」

彼女を囲う檻では無くなった故郷を見せてやるのも一興か。皆の
ような構造の城塞都市、その広い通路を宮廷区画に向かう馬車に揺
られながら呟く悠介。

「四大国が皆仲良くなるなら、きつとまた来る機会もありますよ」

初めてのパトルティアノーストにきよろきよろと興味津々な様子
のスンは、悠介の呟きにそんな言葉を掛けて微笑んで見せる。確か
にその通りだなと悠介も微笑み返した。

「あゝなんか久し振りっすねー、ルヴォマーヌちゃんとかシャイヤ
ちゃんとか元気にしてるかなー」

「今回は直ぐに帰国する予定なんだから、ふらふら遊びに行くんじ
ゃないぞ?」

「前に来た時は宮廷区画までしか入れなかったが、謁見は神義堂で
行なわれるらしいな」

「二千年以上も昔の古代建築ですよ! この街だけでも凄いのに、
古代文明の遺産と言われる中枢塔の空中庭園……実に興味深い」

ヴォーマルに街唱遊びは控えるよう釘を刺されているフォンケ。
ノスセントス時代は王族の者ですら立ち入りを許されなかった神義
堂にそれなりの興味を持つシャイードと、中枢塔に入れる事をかな

り楽しみにしているらしく興奮を隠せないソルザック。

エイシャとイフヨカは以前来た時に利用した化粧品店がまだ残っているのか気になっているようだ。

宮廷区画にある来賓用の中でも最高級の部屋を宛がわれた闇神隊一行は、陣頭指揮から戻ったシン八王との謁見を済ませてバタバタと慌しく帰国の途に就くまでの二日間を、それなりに有意義に過ごしたのだった。

ヴォルアンス宮殿の上層階にある宮殿衛士隊宿舍の一室にて、まだギミック機能を備えていない作り掛けの試作品を弄っていたヴォレットは、主の居ないこの部屋をぼんやりと見渡す。ガゼツタからの連絡では、後二日もすれば帰国するとの事だ。

「ここでしたか、姫様」

「クレイヴォルか」

「例のお話について、王が御呼びです」
「うむ」

頷いたヴォレットは何だかよく分からない形をした道具らしきモノをテーブルに戻すと、一度振り返ってから悠介の自室を後にする。悠介を親善大使としてガゼツタへ送るにあたり、ヴォレットは父エスヴォブス王と重鎮達も交えて一つの約束を取り交わしていた。

閻神隊長がシン八王との交渉に成功して大きな功績を立てた場合、^{ユースケ}イヴォール派の動揺を抑え、もしくは暴走を牽制する為に、婚約者候補組の中から一年前倒しで正式な婚約者を選定する。

各名家から選出されている婚約者候補達の中には当然イヴォール派に属する家の者も含まれており、彼等は閻神隊長がヴォレット姫の婚約者という立場に就く事を恐れ、それに足る身分を得る事に懸念を懐くという面で意見の一致を見ている。

姫様のお気に入りである英雄とは対立しない方が良い。公爵家の家督で今や戦功もある自分が居る限り大丈夫。下手にちよっかいを出して我々が姫様の不興を招こうモノなら、相対的に閻神隊長と姫様の距離は近くなってしまふ。

これまでは候補筆頭にあつたヒヴォデイルが彼等を説得してどうにか上手く取り成して来たが、今回の閻神隊によるガゼツタ親善訪問がもたらせた成功は、婚約者候補組がヒヴォデイルに見ていた対閻神隊長への優位性すら霞んでしまふ程の功績である。

流石にこれ以上はヒヴォデイルにも彼等の不安を抑えきれないだろうと判断された。

「しかし、成功も成功、大成功な結果じゃったのう」
「そうですね」

宮殿の廊下を並び歩きながら、ヴォレットとクレイヴォールは閻神隊のガゼツタ親善訪問がもたらせた結果を語り合う。

ガゼツタとフォンクランクの直接交易によって両国の景気が良くなつてしまい、閻神隊長をガゼツタ絡みで誹謗する流言はサンクア

ディエットの街から跡形も無く吹き飛んだ。

フォンクランクの英雄はガゼッタとの外交を成功させて多くの富をもたらせたと、またもや民の間で名声が高まる。特別討伐隊の失敗以降、魔獣被害に有効な対策も打てず流通は滞る一方で、街中に閉塞感が漂っていただけに、そこからの開放感は何倍にも増した。

更に、五族共和構想への参加を表明したシン八王は、その意思を示すべくガゼッタから各国に魔獣討伐隊の派遣を決定。無技の戦士達の働きによって魔獣問題は一気に終息へと向かいつつある。おかげでガゼッタに対する民衆の不信や猜疑心も拭われていった。

識者ぶった民は、闇神隊長は前々からガゼッタと水面下で色々交渉していたに違いないとか、以前の噂はそれが関係していたのだからうとしたり顔で語っては酒場の聴衆から喝采を浴びたりしている。

「わらわの相手は、やはりヒヴォディルかのう」

「……血筋、家柄、功績共に申し分ないかと」

淡々と答えるクレイヴォル。

今年で十五歳を迎えるヴォレットはそうかと呟き、小さく息を吐いた。

100話：ワールド・カスタマイズ・クリエイター（前書き）

10/07/05、微加筆分追加。

100話：ワールド・カスタマイズ・クリエーター

闇神隊がガゼッタから帰国して数日。四大国の王全員の意味が確認され、世界で同時に新体制への移行を発表する計画が進められている。まずは五族共和制を敷く為の取り決め、各国共通のルール作りを行なわなくてはならない。

改革を進めながら徐々に等民制を解除して行き、四大神信仰の真実も少しずつ明るみに出してゆく。計画の基礎部分はリシャレウス女王が既に構築してあるので、それを元に各国がそれぞれ最適なやり方へと調整していくのだ。

「五族共和制でも身分制度が無くなるわけではない事を、早い段階で分からせなくてはな」

「それについては、探りを入れに来た各家の者達に握らせてますよ」

炎技の民というだけで優遇されてきた高等神民からは反撥を招きそうだが、これまでの環境が急に変わる訳ではない。四大神信仰について、その成り立ちに関する真実が明らかにされるだけで、別に弾圧される訳でもないのだ。

下手に異論を唱えれば、維持できるであろう現在の優雅な生活を失う事にもなり兼ねないので、殆どの貴族は公布に従うだろう。中等神民以下でそれなりの身分を持つ者は最も数が多く、彼等の殆どは四大神の神格判定が取り払われる事で得をする立場にある。

「ヴォルダート侯らは大人しくなると思うか？」

「なるでしょう。特に、姫様の婚約発表は効果も大きいと思いますよ?。」

「まあ……そつちはまだ、決まった訳ではないのだが……」

「おや? 既に決定事項となっていた筈ですが?」

ヴォレットを話題にすると途端に歯切れが悪くなるエスヴォブス王に、レイフォルドは肩を竦めて苦笑を見せる。新しく王妃を迎えるなり、妾を囲うなりして次期国王となる男児を産ませれば手っ取り早くて済む話なのだが、そこは甲斐性無しの王と謂われる所以か。

「そんなに気に病むのでしたら、逆の攻め方をしてみればどうですか?」

「逆、とは?」

「姫様に婚約者を決めさせるのではなく、ユースケ君に婚約者を発表させるか、いつそ結婚させるかすれば同じ事でしょう」

将来ヴォレットの伴侶に悠介が選ばれるかもしれない事を恐れるあまり闇神隊長を目の仇にする勢力。彼等の活動で国が乱れる事を阻止するのが目的ならば、現段階でヴォレットの相手を決めるよりも、選択肢から悠介が外れるようにすればいいとレイフォルドは語る。

「幸い、ユースケ君には相思相愛の相手から片思いに恋慕、奉仕者と一通り揃ってますからねえ」

「豪儀なものだな……」

「姫様の婚約者候補組も、あれはアレで独自のグループとして成り立っています。そろそろ遊ばせておくのは勿体ないかもしれませんよ」

「ふむ……今解散させるよりは新体制への移行で混乱を抑える役割も果たさせられるか」

娘を想う父親の顔から政務者の眼に戻ったエスヴォブス王は、各名家の嫡男が顔を揃える候補組の有用性に新しい使い道を見出した。彼等にも国政に係わる仕事を与えてやれば、名家を担う者としての自覚を促し、自信にも繋がり、自尊心も満たせてやれるだろう。

「いつもスマンな、レイ」

「いえいえ、こっちも楽しく働かせて貰ってますから」

ニコニコと何時もの掴み所の無い微笑を浮かべるレイフォルドは、内心で想う。

『まあ、ユースケ君もあなたと同じくらい女性には甲斐性の無い人ですけどね』

悠介邸の客間にて、それぞれワインとお茶を片手に向かい合う炎神隊員と闇神隊長。悠介はガゼッタから帰国後、ヴォレットの様子が何処となくおかしい事に気付いていたが、ヒヴォデイルからヴォレットの婚約者選定の話が聞かされて合点がいった。

「なるほどなあ、そういう事情があったのか」

「一応まだ正式には発表されていない事だけだね、僕ら候補組にも

色々情報が流れてる」

表だって行動を起こす者はいないが、婚約者候補組の貴公子達は皆浮き足立っているらしい。

「姫様は納得しているというより、王族として諦めてる感じだけど……君はどうするつもりだい？」

「どうするって言われても……」

自分にどうこう口出しできる問題でも無いんじゃないかと答える悠介に、ヒヴォデイルは大袈裟な身振りで呆れて見せる。ヴォレットに課せられた一年前倒しでの婚約者選定は、謂わば闇神隊の活躍、悠介の台頭が原因でもあるのだ。

正式に婚約が決まって相手の家と繋がりを持てば、今までのように自由な振る舞いはかなり制限される事になる。

「当然、君の任務である下々の者達について見識を深めるなんて事も出来なくなるね。君はそれでいいのかい？」

「……」

「まあ、もし僕が選ばれたなら君と姫様の活動に理解を示して見せる事は出来るけど、やっぱり宮廷内での体裁を考えるとね」

色々控えて貰わなくてはならなくなるだろうねと言って、ヒヴォデイルはワインを一口含む。次期国王を迎える者としてヴォレットに求められる役割は、王族の血筋を持つ高貴な姫君で在る事なのだ。民に眼を向け、国を理解し、世の理を知るなど不要。寧ろ余計な知恵を持つ事は政務に口出しされ兼ねないとして疎まれる。腕組みをして考え込んでいた悠介は、ふと疑問に思った事を口にした。

「それって理解は示しても活動から得られる知識とかが活かされないなら、結局意味が無いんじゃないか？」

「少なくとも、僕は姫様の意見を無下にするような事はしないよ。このヒヴォデイル・ヴォーアスは何時だって姫様と君の味方さ」

言われた方が恥ずかしくなるような事をさらりと云つてのける公爵家の嫡男。言った自分に酔っている風にも見受けられるが、そこは何時も通りだ。それはさて置き、悠介は心の中に何か釈然としないモノを感じ、浮かない表情で考え込む。と、そこへ

「こんにちは、ユースケ君」

「……偶には玄関から入れよ」

窓辺のカーテンが揺れて自称森の民が現われた。

悠介とヒヴォデイルが向かい合う長テーブルの奥に腰掛けたレイフォルドは、姫君の婚約者選定について少し突っ込んだ話をした。

実はエスヴォブス王もあまり気が進まない様子だった事や、今回の婚約者選定はあくまでも宮殿内の状態を狙った結果に導く為の手段であり、その目的を達成出来るなら他の方法を使っても構わないのだと説明する。

「ユースケ君が他の誰かとの婚約を正式に発表するか、或いは結婚してしまえば、姫様の婚約者選定は見送って貰えるよ」

「どづいっつっちゃ？」

反閻神隊長を掲げる彼等が最も恐れているのは、このまま悠介の存在が権力の中枢に浸透して行き、やがて国の頂点に立ってしまうかもしれない事なのだ。悠介の異常な出世速度に関してはやっぱりかみこそあれど、それだけで暗殺騒ぎにまで至る理由にはならない。

本物の邪神であるという情報も幾らかは知られているようだが、常日頃から等民制による身分を軽視し、無技の民を優遇するような行動が見られる悠介に、自分達の権力、高貴なる立場を奪われてしまつのではないかという危機感が彼等の反撥を招いているのだという。

要は閻神隊長とヴォレット姫が婚姻を結ぶような事態にならない事を証明すれば良いのだ。

「みんな怖がつてるのさ、君がこの国の在り方を根底から覆してしまつ事を」

「んな大層な……俺はただ静かにノンビリ暮らしていければ良いとしか思つてないぞ？」

「君が幾らそう主張してみた所で、君を恐れる彼等は誰も信じない。何故なら彼等自身、自分の主張と違う事をする人達だからね」

「僕達仲良くしようねって笑顔で肩組んで手を握りながら、互いの足を踏み躪りあつてるみたいなの？」

悠介のやけに具体的で情景が浮かんでくるような例えに『そうそう、そんな感じで』と笑いながら頷くレイフォード。結構笑い事ではない位に身近な事であったりしたりしたせいか、ヒヴォデイルは微妙な表情を浮かべていた。

「それで俺の婚約発表ないし結婚で安心させるって訳か……でもなあ」

反閻神隊派を納得させる事で今後の身の安全を確保し、静かな生活を送りたいという自身のささやかな願望も達成出来る事は分かる。しかし、先程ヒヴォデルと話していたヴォレットの抱える問題については結局、先延ばしにしかならない。

「相手を決められないのなら相談にのるよ？」
「うーん」

今悩んでいるのは自身の婚約や結婚云々の事ではないのだが、それを説明しようかしよまいかと考える悠介に、ちゃっかり先程の二人の話も聞いていたレイフォルドは、それに関する助言も口にした。

「悪い方法じゃないと思うよ、君にとっても、これから成長していかなくちやならない姫君にとってもね」
「どつという意味だ？」

「君の婚約が結婚で姫君の婚約者選定期間が伸びれば、あと一年は自由に振舞える。その間に色々知る事も出来るだろう？」

悠介が既婚者となっても今の立場に変わりはないので、これまで通り閻神隊はヴォレット姫直属の宮殿衛士として活躍を望まれるだろう。その猶予期間に、これまでと少し趣向を変えた付き合い方をすればいい。

一年後の婚約者選定を滞りなく行なえるよう、王族としての自覚を促す付き合い方。悠介が王女に仕える部下の一人として振舞えば、悠介自身も今まで距離を置かれていた婚約者候補組や他の宮殿衛士達との壁が取り払われ、親睦を深める切っ掛けにもなる。

「君は特別扱いを公言されちゃってるからねえ」

「いやまあ、そこは確かにそうだけど……ヴォレットは王族としての自覚とか、ちゃんと持つてると思うけどなあ」

「行動が伴わなくちゃ、まだ自覚しているとは言えないなあ。快活な所はあの姫君の美点だとは思っけどね」

しかし同時に問題点でもあるとレイフォルドは指摘する。下々の存在についても積極的に知ろうとするヴォレット姫の好奇心や行動力は、彼女の立場的にはマイナス要素となってしまうているのだ、と。これから一年間、主従の線引きをしっかりと固めて、次期国王を迎える者としての自覚を促していく。俗世を知り、見識を深める為の情報収集である闇神隊の『特殊任務』も、その過程で無くして行けば良い。

「聡明な姫君の事だから、王妃にそういったモノは必要とされてない事も理解して諦めも付くだろうし」

その言葉に、黙って耳を傾けていた悠介はピクリと頬を揺らす。一瞬の硬直した気配を敏感に感じ取ったレイフォルドは、説明の何処かに何か失言があったかと悠介の様子を観察する。

悠介は腕組みをした姿勢で難しい表情を浮かべ、先程からの説明に複雑な想いを懐いては、じっと考え込んでいた。

『結局は同じ事なんじゃないか……？』

展望塔で涙を浮かべていたヴォレットの事を思い出す。ギアホーク砦から生還して数日経ったある日、ちょっとした気持ちのすれ違いによるトラブル。太陽と星空の下、共に世界を知り見識を深めて

行くつじやないかと頷きあつた。

あの時から共に励んできた『世の中の色々な事を知るべき』活動、そのヴォレットの気持ちや決意が全て否定されてしまう。

「なんか、気に食わないな……」

どうやらヴォレット姫の身の振り方が最初から決められている通りで、幾ら見識を深める努力をしようが、物事の理解を進めようが、何も変わりはないという現実には納得がいかないらしいと、悠介の真つ直ぐな不満を見抜いたレイフォルドは微笑ましい気分になった。

「そうは言っても、彼女は王女様だからねえ」

「王女様か……王女、王女……王城、往生……」

レイフォルドの示した内容は至極当然の事であると認識しながら、悠介とヴォレットの気持ちも理解できるヒヴォデルは、居心地の悪さにすっかり沈黙してしまっている。

そんな時、来客を告げるザツフィスの控え目な声が響いて微妙な静けさが漂う客間の空気を緩和させた。客間の扉が開かれると、挨拶に訪れたラサナーシャが会釈して水色の髪をさらりと揺らす。

「こんにちはユースケ様。あら、御機嫌ようヒヴォデル様」

「やあ、麗しの唱姫殿。相変わらずその美しさに一片の陰りもなく」

ラーザツシアの研究を手伝いに来たらしいラサナーシャに、ヒヴォデルは何時もの調子で挨拶を返す。レイフォルドは職業柄が自身をこの場に居ないものとして静かに目配せを送ると、察しの良いラサナーシャは自称森の民を視界の外へとやった。

そして悠介は、装飾の控え目なドレス姿が映えるラサナーシャの佇まいをぼおつと見上げた後

「女王様……」

「はい？」

ふと、リシャレウス女王を思い出して呟いたのだった。

ヴォルアンス宮殿の上層階にて、私室に籠もって自分の婚約者とすべく貴公子の選定資料を片肘に頬杖をつきながら、やる気なさそうに捲っていたヴォレットは、何度目かの溜め息を吐きながら悠介の事を思い浮かべた。

ガゼツタから戻ってここ数日、まともに話をしていない。特殊任務の報告も滞っている。婚約者選定の話は伝わっているだろうから、向こうも気を使っただか、あまり会いに来ようとはしなくなったような気もする。

「……考えすぎじゃな、自意識過剰かの」

会って何時ものように甘えれば、きっと泣き言を口にしてしまう。何かと理由をつけて顔を合わせないようにしているのは自分の方なのだ。こちらが会わないようにしている以上、悠介の性格からして強引に面会を求めて来るとは思えない。

しかし、気持ちの何処かでは、それでも会いに来てくれるのではないかという期待もあった。

「まあよいわ、何時までも心配掛ける訳にはいかんしな」

正式に婚約者が決まれば、今までのような自由な活動は憚られる。将来、王妃として世継ぎを生ず準備に入り、その後は次期国王となる夫と王室を支えていく為の公務に従事するのだ。しなければならぬ事が増え、知りたい事に興味を向けている暇は無くなる。

真に高貴な者となるべく見識を深める。そんな想いと在り方を認めてくれたゼシャルドや悠介との約束も、ここまでになりそうだ。

「さつさと相手を決めて、ユースケ達とは新しい接し方でも考えるか……」

気持ちを切り替えたヴォレットが選定資料に向き直ろうとしたその時

「ヴォレット！」

「！っ」

ノックもそこそこに部屋へと飛び込んで来た悠介に、ヴォレットは一瞬気が動転してしまった。諦めを懐きながらも未だ心に燦る想い、その気持ちを振り切ろうとしていたタイミングで現われたので、何だか咎められたような気分になったのだ。

「な、なんじゃユースケ、悪いがわらわはこれから稽古に行かねばならんのじゃ」

ばたばたわたと選定資料を纏めながら、慌てて席を立とうとするヴォレットの肩を抑えて座らせる悠介。

「逃げんな、目逸らすな、大事な話がある」

「べ、別に逃げておらんし目も逸らしておらんぞっ」

「んなキヨどりながら言われてもな……、まあそんな事はいい」

眼を泳がせながら説得力の無い反論をするヴオレットに呆れ半分、苦笑半分の悠介は、とりあえず正面に回って姿勢を落とし、戸惑いに揺れる紅い瞳を真っ直ぐ見据えると、徐に切り出した。

「ヴオレット、お前女王様になれ」

「……は？」

悠介に言われた意味を理解するまでに数秒ほど要したヴオレットは、複雑な表情を浮かべて椅子に座り直す。婚約者候補の選定資料をテーブルの端に置いて頬杖をつく、対面に腰掛ける悠介に問い掛けた。

「それは、わらわに父様の跡を継げという意味でよいのか？」

「ああ、そうなる」

「……本気で言っておるのか？」

「勿論」

じつと悠介の目を覗き込んでいたヴオレットは、悠介が本気で言っているらしい事を感じ取ると、頬杖のままふいつと顔を背けた。会いに来てくれるだろうとは期待していたが、またとんでもない提案を持ちかけてきたものだど溜め息など吐いてみる。

「はあ……そんな事、出来る訳なからう」

「そうか？ あの王様ならヴォレットに王位継がせて隠居した後には花の栽培とかしながらじっくり娘の婿探しとかやりそうだけどな」

「や、やけに具体的じゃな。まあ父様はともかく、周りの者達が反対するじゃろう」

婚約者候補組も次期国王の座を射止める事が最大の目標となっている集団である以上、王配の座に甘んじる事をそう簡単に受け入れられるとも思えない。

「それに、父様のような治世がわらわに務まるかどうか」

「大丈夫だって、俺がついてる」

「ユースケ………今のは著しく誤解を招く発言だと気付いておるか？」

「あ」

悠介は笑って誤魔化しながら『俺たちがついてる』と言い直した。

「実際、クレイヴォル隊長とかヒヴォデイルはこっちの味方だし、シアヤラサ達も協力してくれる事になってる。あと自称森の民もな」
「まったくお前は、偶に強気で強引な所があるな」

そう言っただけで表情を緩めたヴォレットは頬杖をやめて悠介に向き直る。何かを諦めたような雰囲気だった表情の陰で、僅かに残っていた希望の光が紅い瞳の奥で揺らめく。

「どうせならゼシャールド先生も巻き込んでおもう」

「爺もか？ うーむ、それは……面白いかもしれん」

何時もの調子を取り戻した炎の姫君と闇神隊長は、暫らくごにごによと密談を交わすと、後日また改めてメンバーを招集するなどした上で、本格的な議論を行なおうと約束した。

ちなみに、テーブルの端に放置されていた婚約者候補の選定資料は別の形で有効利用される事になった。

エスヴォブス王の私室では、楽しげな表情のレイフヨルドが悠介邸で行われていたヴォーアス家嫡男と闇神隊長の密談内容と、邪神に示された新たな選択肢について報告を入れていた。

ヴォレット姫に次期国王を迎えさせるのではなく、次期国王の座を将来ヴォレット姫に譲るといふ発想。

「いや、考えもしなかった……」

「僕もその可能性には、目を向けていませんでしたよ」

ヴォレットの持つ資質については、王に深い忠誠を示す専属警護兼教育係からのお墨付きも出ている。彼は以前からヴォレット姫が時折見せる鋭い見識や慧眼に目を向けており、この頃は特に成長の著しい姿を目の当たりにしていた事を告げている。

「新しい時代が来るのだから、それもありがたか」

嘗て賢王となるべく見識を深める旅で諸国を巡った経験を持つエスヴォブス王は、ヴォレットが闇神隊を使って、俗世と民を知る活

動』を行なっている事に、自身のそれを重ねた。

「しかし、これはこれで大変ですねえ。まだ王室入りの希望が残る候補組はともかくとして、重鎮達の説得はどうします？」

「問題ない。リシャレウス女王を例に神器について少しぶつちやけてやる」

娘に対する憂いが掃えたせいか、賢王としての能力を遺憾なく発揮し始めるエスヴォブス王。ヴォレットには今後の教育課題に帝王学を導入し、将来の戴冠に不安を訴える官僚にはブルガーデンの女王が使っている神器の性能とその出目をちらつと明かす。

「例の白金属はまだ宝物庫に残っていたかな」

「ユースケ君にはまた一働きして貰わなくちゃなりませんねえ」

悠介の力と存在は将来、ヴォレット女王を大いに助け、役立ってくれるだろう。

フォンクランクの女王誕生に向けた下準備は、そうして着々と進められて行った。今回の決定と方針はヴォレット姫が成人する年まで正式に発表される事はなかったが、その頃には宮殿内外でも周知の事実となっていた。　　が、それはまたずっと先の話である。

滞っていた闇神隊長の特殊任務報告がようやく再開されてから数日、ヴォルナーの土月の十三日目。

「エスヴォブス・ヴォイラス十八世の名において、フォンクランク

の全ての民に告げる

「我が民、ブルガーデンに集う人々よ。私リシャレウス・トゥールは

「儂はクリフザッハである。皆の者、気を楽に聞いて貰いたい。我々トレントリエッタの民は

「お前達の王、シンハ・トルイヤードだ。ガゼッタは今この時より

フォンクランク、ブルガーデン、トレントリエッタ、ガゼッタの四大国は五族共和制の導入と新体制への移行を同日発表。四大神信仰の神格を元に制定されていた等民制度は段階的に解除されて行く事が世界中に向けて公布された。

当初予想された混乱は事前情報として五族共和構想の概要など詳しい説明が記されたビラが大量に撒かれていた事もあり、何れの国の街でも住民達は比較的落ち着いた様子を見せている。

等民制度によって無技の民が自由に街中を歩く事が出来なかったフォンクランク、サンクアディエットの街でも、高民区周辺ではまだ見掛ける事は少ないものの、清掃事業で見慣れた街に行く無技人の姿は、既に違和感のない存在となっていた。

神技人中心の社会だったカルツイオは転換期を迎え、この日を境に世界の姿は大きく変化して行くのだった。

神ならざる神を駒に覇権を競うカルツイオの歴史。

「結局、賢王は勝者を選ばず、新しい世界に踏み出す事を選んだ訳だ」

永く続いて来た世界の常識を突き崩す鍵たる存在。確かに、彼は旧世界を破壊する災厄の邪神だったといえる。平穩を求め、自ら選んで反閻神隊派との共存も勝ち取った。己が望む世界を創り出したのだ。

「世界の变革は成ったのう」

中枢塔の空中庭園から遠く地平線の森を眺めていたアユカスは、一人呟いて空を見上げる。古の邪神ヴィ・ザードの導いた世界は、その後、四大神信仰を打ち立てた神技人社会を生み出し、二千年余り続いた。

今世の邪神はこの先どんな世界を見せてくれるのか。

「どれ、久し振りに里帰りでもするかのぉ」

古代カルツイオに生まれた嘗ての少女、里巫女アユカスは、実に約二千八百年ぶりに今は無き生まれ故郷へと足を向けるのだった。

100話：ワールド・カスタマイズ・クリエイター（後書き）

次はエピソードになります。

エピソード

肌を焼く照り付ける太陽、火照る身体を撫で癒やす浜風、寄せては返す波の音。遠くにちらつと見える自称森の民の緑髪。

「ユースケー！」

「ユースケーさん」

何処までも続く真っ白い砂浜に立てたビーチパラソル、というよりマーキーテント仕様に改造された野営用天幕の下でノンビリ寝そべる悠介に、海辺を走る小型動力船から手を振っている水着姿のスンとヴォレット。ちなみに動力船を操縦しているのはフォンケだ。

近くでは浮き輪を並べたエイシャとイフォカがぶかぶかと波間を漂っている。

二人に手を振りかえして身体を起した悠介は、波打ち際で砂遊びをしているラーザツシアとエルフォナに和み、隣为天幕でブルーシヤとラサナーシヤに挟まれて心なしか頬の緩んでいるゼシャルドとソルザツクに肩を竦める。

纏まった休暇を貰えた悠介達闇神隊は、ゼシャルド達も誘ってフォンクラククの北部にある砂浜海岸まで遊びに来ていた。ここまでの移動に使った衛士隊輸送動力車の中では、ヴォーマルやシャイード、クレイヴォルが座席で横になって休んでいる。

ヴォーマルとシャイードは長時間の運転疲れ。クレイヴォルは長時間の姫様諫め疲れだったりする。

「で、お前は帰らなくていいのか？　なんか揉めてるんだろ？」

「……ユースケ、女は面倒だ」

隣で見事な筋肉を緩めてノンビリ寝そべっている白髪の獣、ガゼツタの王に声を掛けると、そんな答えが返って来る。

「本当に、面倒なんだ……」

「そ、そうか……」

何だか大変そうなので暫らく息抜きさせてやろうと、悠介はアユウカスへの通報を少しだけ延ばす事にした。

四大国で五族共和制が公布されて最初の祝福祭が過ぎる頃。サンクアディエットの街では栽培と品種改良に成功した太陽苔によってリーンランプが普及し、宮殿内のみならず一般家庭や通りの街灯などにも使われるようになっていた。

長時間安定した光度を保てるフォンクランク産の太陽苔はブルガードンやガゼツタにも輸出され、世界中の照明器具にリーンランプが使われるようになった。

一方で根立ち木の森から取れる天然の太陽苔は独特の深みある淡い光を放つ希少品としての価値が付いた事で、主に高級宿や一流飲食店などで取り扱われるようになり、リーンランプの普及で需要の伸びた水石と共にトレントリエツタ国の重要な財源となっている。

ガゼツタでは世継ぎの問題が少々拗れているらしく、シン八王の后となる女性が決まらずブルガーデンの女王も巻き込んだの騒動に発展していた。当事者であるシン八王が雲隠れしてしまっているの
で、旅先から近々帰国すると報せを出した里巫女が收拾を付けるま
で、ガゼツタ王宮の混乱は続きそうであった。

フォンクランクは謎の動力によって動く機械や乗り物によって急速な発展を遂げ、今や四大国の中でも突出した存在となっている。特に街中を走る車両の殆どが従来の馬車に取って代わり、引き手の
いない動力車が普及していた。

動力車は一般大衆が利用する乗り合い動力車の他に、元中民区や高民区であった現在の貴族街では各家の紋章入り自家用動力車が走っている。自家用動力車を所有しているのは殆どが中流以上の貴族
達だ。

動力車の普及にあたってはまず、試作動力車から改良に改良を重ねられた量産初期型の自家用動力車が数台、宮殿に献上された。

その利便性は十分に理解されたものの、当初は馬車に比べると格調が低いなどとして新しいモノへの拒絶反応を示す声も多かったのだが、ヴォーアス家の嫡男がオーダーメイドで造らせた豪華な動力車
でヴォレット姫と貴族街を遊覧した事を皮切りに、婚約者候補組の各名家はこぞって自家用動力車を注文、自分の家の専用車両を所有するようになった。

それからは貴族達の間で自家用動力車を持つ事が、財力とセンスを誇示する一種のステータスとなっている。

量産型の販売用動力車は心臓部の動力機と車体部分とが個別に取り扱われ、車体の装飾、備品などの仕様は注文に合わせて土技の職人達が製作している。これらは悠介とソルザックの共同事業として、

ギミック製品開発の資金源となっていた。

ちなみに、動力機にはわざと壊れ易い部分を残して定期的に点検や修理を行なえるよう、細かい工夫も取り入れてあったりする。

宮殿御用達の動力車を元に各宮殿衛士隊にも専用車両を導入する事が決まったのだが、その初期開発費用にはイヴォール派から内密に送られた援助資金が使われていた。

五族共和制への移行に備え、権力維持を掲げて鬭争の構えを見せていたイヴォール派は等民制度の解除で不利益を被る事は殆ど無く寧ろそれなりの身分を持つ者にとって有益な改革である事を知った彼等は、直ぐに鬭争の矛を下ろした。

そもそも鬭争の必要すらなかったのかと、己の見識足らずを恥じるヴォルダート侯爵は、これまで反閻神隊派として行なってきた活動を清算する意味で閻神隊と悠介邸にこっそり活動資金を回していたのだ。

今後もイヴォール派の活動が表沙汰にされる事は無いが、悠介自身も事を公にして糾弾するようなつもりはないので、宮殿関係者も皆が暗黙の了解のもとに反閻神隊派が存在していた事を口にする事は無い。

様々な問題やその痕跡を残しつつも、新たな時代を迎えたカルツイオの国々は日々の歴史を刻んで行く。

「やっと来たか、ユースケ」

「遅いですよ、ユースケさん」

「二人とも元気だなあ……って、ちべてっ」

動力船から飛び降りたヴォレットにぶわしゃと海水を掛けられ、悠介は思わず背を向けた。

「わはははっ 遅れた罰じゃ、それぞれ〜！」

「わたしも、えいっえいっ」

「やめれ〜」

カルツイオの空へと舞い散る海の波飛沫が、眩しい陽光を反射してキラキラと輝いていた。

おわり。

エピソード（後書き）

ここまでお付き合いありがとうございました。

光と影の大陸

日に日に太陽の昇っている時間も長くなり始めたカルツイオの空。五族協和制の成功に平和と発展を謳歌するサンクアディエットでは、ヴォレットの女王戴冠に向けて着々と準備が進められている。

といつても、エスヴォブス王が健在である内はこれまでとそう変わりなく、少しばかりヴォレット姫のお稽古事が増えた程度であった。

「姫様は何処へ行かれたのだ……」

「ヴォレット様なら、闇神隊の皆様と宮殿の地下を探索すると言って出掛けられましたよ？」

朝から姿の見えないヴォレットを探して宮殿上層階を歩き回っていたクレイヴォルの呟きに、偶々通り掛った使用人が答える。なぜまた宮殿の地下などと後を追う専属警護兼教育係な炎神隊長クレイヴォル。

この頃は以前のような近付き難い雰囲気も薄れてきた仕事熱心な炎神隊長殿を見送り、使用人も自分の仕事に戻った。

街を拡張する度の上へ上へと増築が重ねられたヴォルアンズ宮殿。その地下部分は時代ごとに内装様式も違っており、時の支配者の趣

味や当時の流行など、街の歴史的資料として非常に興味深いとはソルザツクの言である。

「この辺りは急に雰囲気が変わっておるのう」

「特に戦乱の激しかった時代ですね、宮殿内でも度々衝突があったせいで壁や床の彼方此方に修繕の跡が見られますよ」

「そついや壁の装飾とか極端に少ないな」

地下六階層付近の水没していないエリアを探索する悠介達闇神隊を引き連れたヴォレットは、自前のリーンランプで足元を照らしながら、ボロボロに解れて目の粗い網のようになった元は立派な絨毯だったのであろう繊維をつま先でつつく。

一応、神技の明かり役で同行しているヴォーマルが何処か崩れかけているような危険な箇所が無いか、付近の壁や天井を目視で確認しているが、これは身に付いた危機管理に従った動作でしかない。

”ユースケ隊長”がこの場に居る時点で、その手の危険は存在しない事を、ヴォーマル達はよく分かっていた。

「ユースケ、この階に隠し部屋とかはないのか？」

「んー、ちよつと待ってくれ」

おもむろにカスタマイズメニューを開いて周辺の構造を調べる悠介。既に皆が見慣れた悠介の空中に何かを描くような動作と共に、得体のしれない神技の波動が広がる。

この判別不能な神技の波動も、今やそれ自体が闇神隊長ユースケを示す波動であると多くの人々に認知されていた。

「お、近くにそれらしい部屋があるぞ」

「おおっ あるのか!」

「おおっ ありましたか！」

わくわく顔で声を揃えるヴォレットとソルザック。二つほど上の階で見つけた隠し部屋や隠し通路には当時の甲冑らしき残骸や、現在カルツィオで流通している晶貨が作られる以前に使われていたらしき古い貨幣などが見つかり、歴史的資料として確保している。

「入り口は あー駄目だな、完全に塞いである」

「という事は、シアの出番じゃな」

「はい、任せて。イフヨカちゃん、補佐宜しくね」

「は、はい、頑張ります」

暗い所が苦手なエイシャの代わりに治癒系探索メンバーとして付いて来たラーザツシアが、試験管のような器具を手に隠し部屋の壁の前に立った。

完全に塞がれた形の隠し部屋には有害な空気が充満していたりという事もあるので、壁に小さな穴を開けて部屋の空気のサンプルを採取し、病気や毒性などの危険が無いか調べるのだ。

悠介がカスタマイズ能力で壁に小さな穴を開け、イフヨカが繊細な伝達系風技を使って部屋の天井付近と床付近、中央付近の空気を集めると、ラーザツシアの持ち込んだ鑑定用の器具の中に納める。

器具の中に見える毒物鑑定液に色の変化は見られず、異常無しの判定が下された。

「うん、大丈夫みたい」

「そっか、じゃあ入り口作るぞー」

何時もの見慣れたエフェクトが発生し、壁に入り口が現れる。長い年月そこに留まり続けていたカビっぽい空気が流れ出し、通路の

空気と交じり合って微かに風を巻き起こす。

部屋と廊下の繋ぎ目などから、ここは元々部屋ではなく廊下の一部であったらしい事を付き止めるソルザック。明かりで中を照らし出すと、ガラソとした石造りの空間が広がっていた。

「なぐんもないな」

「なんじゃ、からっぽか」

「いや、奥の壁に何か見えますよ？」

地下街の探索経験が豊富なソルザックが、早速何かを見つけて壁に駆け寄って行く。なんじゃなんじゃと後を追うヴォレットに、ノンビリ続く悠介達。壁には大きな彫刻画らしきモノが広がっていた。

「ほう、これは壁に掘り込んであるのか？」

「ちよつと待ってください　うーむ、石の質が違う……しかも随分と古い」

ソルザックの土技鑑定によれば、この彫刻画はこの壁石に掘り込まれたモノではなく、余所から持って来たかなり古い彫刻画を壁に埋め込んであるモノらしい。

「描かれているのは”天地創造”でしょうかね、二つの太陽に砕けた大地　いや、大地が形成されている所でしょうか」

空に浮かぶ島のような複数の大地に神や精霊を象徴する人型の姿が、互いの手を取り混じりあっているような構図。ソルザックの解釈を聞いていた悠介がポツリと呟く。

「天地創造か……そういえばこのカルツイオって、どうやって出来たんだろっな」

「ん？ そういえばユースケは前に言っておったな、この世界は”空飛ぶお皿”のような形をしておると」

「ああ、こつちに喚ばれる時にちらつと見えた覚えがあつてさ、最初に目覚めた祠の天井にも描かれてたし」

約三百年周期で異世界から変革をもたらす”邪神”が召喚されるというシステムが何千年も続くカルツイオの大地。

現ガゼッタの首都、パトルティアノーストの中枢塔にある『神眼鏡』のような千里眼的遠見の道具を作る邪神も、過去より幾度と無く召喚された事があつたであろうと考えるなら、降臨後、その力でカルツイオの全容を見渡せた邪神が居たとしても不思議ではない。

「ふーむ、この世界の歴史か。有史以前の世界の姿なぞ想像もつかんのう」

「この彫刻画が制作者の想像を元にした創作なのか、或いは当時の伝承などを参考にしたモノなのか、興味は尽きませんねえ」

古代カルツイオの歴史を紐解く素晴らしい発見だとソルザックは称える。ゼシャルド先生辺りに見せれば興味を持つかもしれないという悠介に、ヴォレットも同意した。そこへ

「やっと見つけましたよ姫様っ」

「げっ クレイヴォル」

神技の波動を追つてここまで下りて来たらしい専属警護兼教育係クレイヴォルは、何時もの決め台詞を放つてヴォレットを捕まえる。

「お稽古事の時間です！」

「やじやーっ まだまだコレからがいい所なのにー！」

「じゃあ今日はここまでだな、目印付けて上に戻るか」

地下探索が楽しくて仕方がないらしくゴネるヴォレットを余所に、手早く帰り支度を整えた悠介は床に丸を描いて”シフトムーブ”の態勢に入った。

指定した床の一部を別の場所の床と入れ替える事で、その床上に乗っているモノ諸共一瞬で移動させる仕様上の反則技。

「もどるぞー、みんな丸の中に入ってくれー」

「むう、仕方あるまい。探索の続きは明日じゃ」

「ほら、チャンスよイフヨカちゃん。もっとユースケにくつついちゃえ」

「えっ で、でも……じゃまになるかも……」

「戻ったら一度古代史の文献を漁ってみなくては」

「古代史関連の文献なら宮殿図書館にゼシャルド氏の集めたモノが揃ってたな」

わいわいと皆で丸の中に納まり、地上階への帰還を待つ。サンクアディエットの街とヴォルアンス宮殿の歴史を探るこんな活動も、将来フォンクランクの女王になる者として教養を磨くに良い勉強材料となる。

等と言って御小言躲しを狙うヴォレットに、『では歴史の勉強科目を増やしましょう』とカウンターを放つクレイヴォル。

「ユースケ、クレイヴォルだけここに置いて行こう」

「無茶言っな……もどるぞー、実行」

足元から発生する光のエフェクトに包まれ、地下階の床と地上階の床が入れ替わる。宮殿上層階の一室に帰還した地下探索隊はこれにて解散、今日の活動は終了した。

「さーて、わらわはこれから楽しい楽しい稽古事じゃ。ユースケよ、今度はスンも誘って最下層を目指すぞっ」

「ああ、弁当でも用意して行こうな」

若干、自棄気味なヴォレットを苦笑まじりで見送った悠介は、ラーザツシアを連れてスンの待つ”悠介^{じたく}邸”へと帰宅する。

イフヨカはお疲れ様でしたと神民衛士隊の控え室に下りて行き、ソルザツクは宮殿図書館の利用許可申請を出しに別館の受付へ。ヴォーマルも付き合うようだ。

「さて、帰るとするか」

「うふふ、お疲れ様」

メンバー全員を見送り、漆黒のマントを翻し損ねて踏んづけそうになっている悠介を労ったラーザツシアは、奴隷の証である黒い腕輪を隠そうともせずピトリと傍に立つと、おもむろに腕など絡めてみたりする。

「やめいっ あらぬ噂が立ってしまっ」

「いまさらでしょっ」

反閻神隊派の活動が無くなり、ヴォレットの婚約者候補組は特別な宮殿機関組織として、公共事業に携わる事で国に貢献できるようになってからは、閻神隊長^{ユースケ}に対する対立的な態度を軟化させ始めた。旧ノスセンテスから亡命してきた住人達も、発展を続けるサンクアディエットで生活基盤を得て将来の不安が拭えると気持ちにも余

裕が出来たらしく、闇神隊に対する”ガゼッタの襲撃に協力したのでは？”という疑惑は薄れて行き、やがて忘れ去られる。

闇神隊長に纏わる数々の黒い噂やら誹謗の類は酒場の席からも駆逐されていった。のだが、”闇神隊長の女癖の悪さ”という、最も本人の資質とは程遠い噂だけは相変わらずしつかり根付いていた。

「露店で材料の指輪見てるだけなのに、女の店員さんがすっぱー警戒するんだぜ……」

「だからー、もう開き直っちゃえばいいのよ」

いっそ、スンや私やラサナーシャやイフヨカやエイシャやヴオレツトも含め皆を侍らせて街を練り歩いてみては？ と無茶な提案をするラーザツシア。

「悪化させてどうするー！」

「そこまでやっちゃえば、逆にみんな気にしなくなると思うわよ？」

「冤罪はいやだー」

『別に罪じゃないけれどっ』と自己フォローしつつ宮殿の元馬車乗り場、今は動力車用に柱の位置などを改築された動力車乗り場まで下りて来た悠介は、自家用動力車の運転席につくと助手席にラーザツシアを乗せて帰宅の途に就いた。

フォンクランクを始め、ブルガーデン、ガゼッタ、トレントリエッタの四大国は五族共和制の理念の元に協力し合い、大きな問題も起こらず、豊かで平和な時間を過ごしていた。

悠介達がヴォレット姫の見識を深める活動の一環　という名目で遊んでいた頃、ガゼッタの城塞都市パトルティアノースト、中樞塔の何時もの空中庭園にて、膝裏まで伸びる紫掛かった白髪を風に靡かせながら、じつと空を見上げている少女が一人。

外見は12歳の頃のままだが、かつてカルツイオに光臨した邪神の力で不老不死の存在となり、実に3000年にも及ぶの時を生きる里巫女アユウカス。　ちなみに今年で3005歳になる。

「妙だのう……」

「どつした婆さん」

昼食前時になっても空中庭園から帰ってこない里巫女の様子を見に来たシンハが、空を見上げながら不可解そうに呟くアユウカスに声を掛ける。

「うむ。何か大きな存在が近付いておるようなのじゃが」

空から視線を下ろさず答えるアユウカスは、気配の正体を探ろうと眼を細めた。自身の奥に宿るカルツイオの神と繋がる力。邪神と共鳴する力に意識を集中する。

「次の邪神が喚ばれるには早過ぎる……しかし、邪神の気配にも近い」

「同じ時期に複数の邪神が喚ばれた事はないのか？」

「無い、とは言い切れんかもしれんが、少なくともワシは知らんの

う

邪神が降臨する時など、カルツイオの神の力が働く時はそれを感じ取り、大規模な災害が起きる時も大地の変動を察知する事が出来るアユウカス。その彼女が今感じているのは、邪神降臨と大規模災害の両方が混じったような気配なのだと言う。

「……いや、まてよ？ もしや
「なにか、覚えがあるのか？」

うむと頷き、アユウカスは遠い遠い大昔に聞いた話を思い出す。まだ普通の、人間の少女だった頃。病を患っていた当時の自分と不死の身体を交換して死を得た邪神、古代カルツイオに降臨して悠久の時を生きて来た、とある一人の邪神より聞いた話。

古代のカルツイオは今よりもずっと小さな大陸だったという。この世界にはカルツイオのような大陸が無数に存在し、それらは互いに遠く離れた場所でそれぞれ独自に生命を育み、文明を栄えさせ、その大陸に住む”人類”による生活が営まれているのだと。

「凡そ数万年に一度という長い周期で大陸同士が引かれ合い、融合する場合があるのじゃそうな」

現在のカルツイオ大陸も、かつて別の大陸との融合を重ねて来た事で今の形と規模になったのだ。カルツイオを見守る存在と被る同質の存在が近付いている。そう考えれば、この不可解な気配にも納得がいった。

「カルツイオと同規模の、別の大陸が接近しておる、という事が…

…」

大陸同士の融合はただ土地が広がるというだけではない。かつての邪神の話に聞く限り、それぞれの大陸は何れも似たような環境なので、そこに住む”人類”も大きく姿形、在り方を違える事はないという。

しかしそれは、互いの大陸に住む人々が融合した相手大陸の土地を”新たに増えた大地”と認識する事も意味する。

双方の大陸に住む人々が互いに纏まり合い、共に手を取り合える平和的な”人類”であったならば、大陸融合は邪神降臨以上の変革効果をもたらせる吉兆といえるだろう。だが、人類の歴史は戦いの歴史でもある。

このタイミングで五族共和制が浸透した事に、アユウカスは久しく感じていなかった戦慄の想いをいなく。

「これはカルツイオ^神の意志か……或いは、ユースケの資質か」
「婆さん？」

謎の呟きにシンハが小首を傾げる。アユウカスが見上げる空は北西の方角、フォンクランクとブルガーデンの国境がある辺り。

風に舞う花びらが北西の空へと流れて行き、何となく眼で追ったシンハの視界に、大きな薄雲のような影が映る。ざあっと空中庭園を吹き抜けていく風に紫掛かった長い白髪を靡かせて、振り返ったアユウカスは強く静かに、里巫女のお告げをくだす。

「シンハや、戦の準備と覚悟をしておれ。この平穩、暫くお預けとなるぞ」

ポルヴァーティアの勇者

カルツイオを見守る存在を一つの”神”と定義するならば、別の大地を見守る”神”は別個でありながら同質の存在。大地が融合すれば、それを見守る”神”もまた融合する。大地の上での出来事は基本、そこに住む者達の選択に任される。

滅ばし合うも良し、共存するも良し。”神”は人々の選択に感知しない。ただ見守り、与え、育むのみであった。

狭間の世界に浮かぶ大地の一つ。この世界に存在する精霊に見守られし大地の中でも、一定周期に召喚される異世界からの使者を管理、支配し、使いこなす事で魔導技術を発展させた大陸、ポルヴァーティア。

その技術は狭間世界を漂う大陸を細かい制御までは不可能だが凡そ任意の進路に向けて航行させられるにまで至っていた。

「ここにいたのかね、勇者アルシア」

「大神官……」

荘厳な装飾の凝らされた法衣を纏う壮年男性に声を掛けられ、少女は静かに振り返る。背中の辺りで束ねられた腰まで伸びる金髪をさらりと揺らして礼をとる少女に、手を翳して楽にするよう合図を向ける大神官と呼ばれた男性。

ポルヴァーティア大陸に唯一存在する国であり、街でもある”聖都カーストパレス”。その中央に聳え立つ大聖堂の展望階からは、これから”浄伏”じよふくを行いに赴く事になる”不浄大陸”ふじよたいりくの姿が見渡せていた。

「緊張しているのかね？」

「少し」

いよいよ出陣の時とあつて、これが初陣となる”勇者”アルシアは、上手く戦えるだろうか、不浄大陸の蛮族はどんな相手だろうかと不安や期待に心を揺らす。

大神官はそんな彼女の髪を優しく撫でると、心配せずとも神のご加護は君と共にあると言つて励ました。先に斥候が威力偵察に出るので、勇者の出番は本格的な”浄伏”を行う本隊、”聖機士隊”の出撃する戦場が舞台である。

「大丈夫、君は神に喚ばれた勇者なのだから」

「はい。私、頑張ります」

憂いを払って自室へと戻っていくアルシアを見送った大神官は、窓の外に見える巨大な影、空いっぱいに広がりつつある他大陸の全景に眼を細めた。

神と定める存在を象徴に、仕える神官が治世を行う神聖大陸ポルヴァーティア。統治機構である中枢組織は執聖機関と呼ばれ、民衆は信徒として神の信仰と執聖機関への奉仕を義務付けられている。

世界の崩壊を防ぐ為、バラバラになった神聖な大地を再び元の姿に戻す事を使命としているポルヴァーティアの執聖機関。

彼等が崇める”大地神ポルヴァ”は、この世界に大地を創り、人々を創造した大神。魔導技術の力の源である。と、されているが、実態は執聖機関が生み出した偶像であった。

これらは他大陸への侵略を正当化する言い分で、別にそれが真実という訳ではない。

この狭間の世界に浮かぶ大陸それぞれに文明がある事を知るポルヴァーティアの権力者たちは、自分達の住む大陸をこの世界の中心とすべく、計画的に他大陸との融合を進めて領土の拡大を続けているのだ。

宗教的な指針は民衆を管理統治する便利な道標として使われているに過ぎない。

ポルヴァーティアの支配者達が狭間の世界とこの世界に浮かぶ大陸の事を知ったのは、純粋な技術の発展による世界の観察からではなく、”勇者”の力によつて世界の姿が知られ、それが代々王家などに秘匿される事実として言い伝えられて来た事による。

他大陸の存在を知り、大陸の進路を定める術を得て、支配者に領土拡大を目論む者が選ばれた時から侵攻計画が始まった。

一定周期で異世界から召喚される特殊な存在を、時に捕獲し、時に祭り上げ、その力を管理支配し、研究する事でポルヴァーティアの力として取り込んで来たのだ。

召喚された勇者のタイプによつては、他大陸と融合する際に相手大陸を制圧する役割をもつた勇者として旗印に利用される。当代の

勇者であるアルシアは、三年ほど前にポルヴァーティア大陸の街外れに召喚された所を執聖機関に保護された。

人外の身体能力を”勇者の力”として発揮する彼女は直接戦闘力に特化した型の勇者であると判定され、神聖軍施設で訓練を受けて今回の侵攻で制圧作戦に参加する事が決まっている。

自室のある階へと下りる為、昇降機に乗り込んだアルシアは、よく見知った一団と乗り合わせた。

「お？ 勇者ちゃんじゃないか」

「また上の展望階にでも行ってたのか？」

「そーいや浄伏の制圧戦が初陣になるんだってな」

「こんにちは、カナンさん、偵察隊の皆さん」

神聖空軍偵察部隊の若い部隊長とその部下達に挨拶を向けるアルシア。この世界に文字通り身一つで放り出されていたアルシアを最初に発見し、最終的に保護した部隊である。

部隊長のカナンとは訓練場で度々顔を合わせる事もあり、回りにいる軍人達の中では比較的穏やかで軽い性格をしている為か、話し易さから割と親しい間柄であった。

「最初の偵察に出るのはカナンさん達だっけって聞きましたけど……本当なんですか？」

「ああ、まあね。どうやら今は向こうにも異世界から喚ばれた存在がいるらしくてな」

「アルシアを”保護した実績”を持つ彼らに使命が下されたと言う。
”保護した実績”という所でさつと赤面するアルシア。」

「あ、あの時は、気が動転してて、ゴメンナサイ」

「はっはっはっ 無理もないさ、気にするな」

知らない街の郊外。降りしきる雨の中、甲冑を纏った兵士に怯え、素っ裸で追い詰められて恐慌状態に陥ったアルシアは、近くに生えていた木を引っこ抜いて振り回し、大暴れした。その騒ぎで神聖地軍の機動甲冑部隊に多数の怪我人という被害が出た。

毛布を掲げながら丸腰で近付き「俺達は君の味方だ」、
「保護しに来たんだ」と語りかけてどうにか宥める事に成功したのが、カナ
ンと偵察部隊の面々なのだ。威圧的な機動甲冑の防護兜フルフェイスではなく、
ちゃんと顔を見せながら話し掛けた事が功を奏した。

「ま、威力偵察だから汎用戦闘機に機動甲冑も持つて行くんで、問題ないだろう」

「向こうの文明レベルじゃあ、まだ飛行機械もないそうだからな」

「そうなんですか」

心なしか表情を緩めるアルシア。不浄大陸の蛮族達は世界を混沌に導く妖しげな力を身に宿し、文明が未発達である程その力も強力に作用すると聞く。が、流星に生身で空を飛んだりはずまい。

自分の降りる階まで偵察部隊の皆と暫しの談笑を楽しんだアルシアは、頑張って下さいねと激励して自室へと戻っていった。

聖都カーストパレスの地下奥深くには、大聖堂の特別な通路からしか辿り着けない秘密の場所がある。

数千年も前から秘匿されてきたその場所には、嘗てポルヴァーティアの大地に降臨した勇者によって構築されたという魔導装置、大陸航行制御装置があった。”航行”といっても装置そのものに推進機能は無く、舵のような役割を担う。

大陸後部に取り付けられた大型魔導装置を稼働させる事で、大陸の漂う方向をある程度コントロールできるのだ。

「侵入角度このまま、回転抑制停止、接触まで残り一日をきりました」

「うむ。今回は海からの接陸かね」

「はい、目標大陸の外周は全て海になっているので、太陽周期の関係から接陸出来る場所で最も条件の良い所を選びました」

太陽の衝突を避ける為、大陸を接近させるには互いの太陽が離れている隙間から寄せる事になる。

暫くは二重の太陽から影響を受けて双方に天変地異が起きる場合もあるが、二つの太陽はやがて軌道を合わせて融合するので、この混乱に乗じて相手大陸に侵攻を開始。

大陸が融合して安定するまでに相手大陸の主要国を制圧するというのが、ここ数百年の間に大陸融合で領土を増やしてきたポルヴァーティアの、定石の戦略であった。

気をつけなくてはならない点は、太陽周期の向きを合わせることで、回転方向を合わせておけば安定も早くなる。

ポルヴァーティアが能動的に大陸融合を始めた歴史の中で、太陽

が逆回転状態の他大陸と融合した際、安定するまでに十年近く掛かったという記録がある。

「一番発展している国でも文明レベルは凡そ100年前といった所か、此度も楽に浄伏を進められるだろう」

「ええ、地形も開けた平地が多いので拠点も置き易いでしょう」

大神官の言葉に答える特別高位聖務官、通称”特聖官”は、そう言っただけで今回の目標大陸で最も発展していると観測された街周辺に広がる平地を、描き出された戦略地図上に指し示す。

「一つ懸念される問題があるとすれば、相手の”勇者”たる存在でしようか」

「時期が重なったのは少々面倒だが、幸か不幸か今回の”勇者”は役立たずであつたからな」

思わぬ使い所が出来たと思えば、そう悪くない余興にはなると、大神官は冷ややかに笑う。召喚元の世界より新しい技術や知識を持ち込まない、個人の戦闘力などに特化した”勇者”など、今のポルヴァーティアにとっては最早”無用の長物”だ。

勇者アルシアはポルヴァーティアよりもずっと文明の遅れている世界から召喚されたらしく、色々と教育するのが大変だった。

「敬虔な信徒達には良い宣教のシンボルになるんじゃないですか？」
「まあ、確かに絵にはなるな」

ポルヴァーティアでは異世界から喚ばれる存在を”勇者”と呼ぶ。これは過去ポルヴァーティアに光臨した者達の証言から明らかになっている事で、何れの勇者も召喚される際に”来タレ勇者ヨ”の声を聞いていた所からその呼び名が定着していた。

様々な知恵や力を持つ”勇者”が相手大陸に居る時期は避けたい所ではあるが、大陸航行の制御は漂うに任せつつ進む方向に干渉するのが精一杯なので、近くに見つけた大陸を観測して侵攻可能か否かを判断すれば、後は近付くか離れるかしかない。

今回は観測した結果、目標大陸の文明は自分達より低いと判断。原住民に特殊能力の存在も見られるが、こちらの魔導技術には対抗できないだろうという結論が出ていた。

特殊能力に関してはポルヴァーティアの人間もその昔、まだ魔導技術が確立されていなかった頃には、原始的な魔導術を生身で使用していた記録が残っている。

魔導技術の発展に伴い、人々から自力で魔導術を操る力が薄れていったものと解釈されており、これらは機械的に魔導術を扱えるようになった事によって、人体が生命活動の維持に特化するよう進化したのではないかと考えられていた。

実際、近年の平均寿命や体力、筋力など、生命力全般が魔導術を生身で扱っていた頃の間よりも高いという検証結果が出ている。

「そういえば、軍務総監が斥候に例の二等市民で構成された偵察部隊をあてたそうですが」

「勇者を保護した実績を買ったそうだ。あわよくば、目標大陸の勇者も籠絡できるかもしれんとな」

「本気ですかね？」

「さてな。まあ、使える”勇者”であったなら受け入れを検討してもよいが」

ルツィオ 大聖堂の天辺から見える景色を映し出した『遠見鏡』の画面に目

標大陸の地表を眺めながら、大神官と特聖官は明日から一般信徒向けに広報される不浄大陸の浄伏開始宣言について、あれやこれやと話し合いを続けるのだった。

サンクアディエツトの北側に広がる海岸。何時ぞやの休暇でも訪れた事のある砂浜に集まる闇神隊一行と、同行してきた炎神隊員のヒヴォデル率いる衛士隊。珍しく隠れていないレイフォルド。

さらに、彼等と並び立つガゼツタの白刃騎兵団が五十騎にシン八王と里巫女アユウカスの姿も見える。

「ブルガーデンとトレントリエツタは代表を見送るそうだ」

「まあ、無難じゃろうな。ここはガゼツタとフォンクランクを前面に立てつつ、後方で動いて貰った方が良い」

「だから、王様が前線に出てくんなと」

「ふっ」

地平線の先まで広がる海を正面に見ながら何時もの軽い口調でガゼツタの代表者に声を掛けた闇神隊^{ユースケ}隊長は、シン八のニヒル笑いを聞きながら海の上に浮かぶ巨大な影、正確には空から迫る巨大な大陸を見上げた。

「しかしでかいな」

「おそらくカルツイオと同規模の大地じゃろう」

先日、ガゼツタ王室から各国に向けて緊急の書簡が届けられ、里巫女よりのお告げでカルツイオに嘗てない規模の大異変が起きる事が伝えられた。

それから間も無く、フォンクランクの北の空に巨大な島の影が見え始め、夜にも薄っすらとした太陽らしき光が空に浮かぶなどの異変が起き始める。

お告げの書簡を受け取った各国の王達は一体カルツイオに何が起きているのか、詳しい情報を求めてガゼツタに使者を送った。そうして教えられた古代カルツイオの歴史、大地の成り立ちに関する真実は、カルツイオの人々を震撼させるものであった。

神技人と無技人の関係など、既に周知の事実となっている四大神信仰の欺瞞、そんな二千年にも及ぶ歴史の闇さえ吹き飛ばすような事実。カルツイオは太古の昔から大地の融合を繰り返して今の姿になったという話は中々に大きな反響を呼んだ。

懐疑的な反応を示す者もいたが、それは内容を疑っているのではなく、なぜ今そんな話を暴露したのかという情報開示の目的について、何か深い裏があるのではないかという疑いであった。しかしこれらの疑念は直ぐに払拭された。

フォンクランクの北の空に迫る巨大な大陸という目の逸らしようなない現実には、里巫女アユウカスから告げられた一言。

”カルツイオの大地に住む全ての人々が団結せねば、カルツイオの人間は全てあの大地の者達に隷属させられるであろう”

新たに大地が広がるという一大イベントは、同規模の大地から侵攻を受けるといって壮大なオマケ付きだった。必ずしも相手側からの侵略が行われるとは限らないのではないかという意見も当然あった

ものの、それに対しては

「ワシは里巫女じゃ、この世界の”神”たる意思に触れ、それを通じて諸現象を視通しておる」

向こうの大地の統治者はやる気満々で、しかも意図的に自分達の大地をカルツイオの大地へ寄せてきているのだと答えた。

巨大な大地を操る程の力を持つような者達を相手に、果たしてまともに戦えるのか、取り返しの付かない被害が出る前に和平を申し入れるべきではないか、という消極的な降伏論者の声も多少は聞かれたが、大多数は戦う事を支持した。

そうして先ずは向こうの人間と最初に接触する事になるであろう北部の海岸に各国から代表で使者を送り、宣戦布告か、降伏勧告か、或いは和平交渉など、何らかの動きに備えて相手側の出方を見ようと待機している。

どんな相手がどんな方法で何を仕掛けてくるのか分からないのであらゆる事態に対応できる者が代表の使者として選ばれたのだ。そんな訳で、フォンクランクからは闇神隊が出るのが必然的であった。そして、何かあればまず国王が自ら出向く傾向のあるガゼツタからは、やはりシン八王が顔を見せ、里巫女アユウカスも付いて来た。

「あれって街だよな、サンクアディエツトよりでかいんじゃないか？」

「ワシが視た感じ、向こうは単一国家としてやっておるようじゃな」

相手側の大地はこちらに対してほぼ垂直の角度で接近しており、このままぶつかれば貝の蓋が閉じるように地表同士がぶつかるようなエライ事になるのではないかと大惨事を危惧する悠介。

「ブルガーデンのボーズ山も、その昔カルツイオにぶつかった大地がひっくり返ったのではないかと言われているしなあ」

「えっ マジすか!」

「うそじゃ」

ただのでまかせだとニヤリ笑いを向けたアユウカスは、流石に大地同士が閉じあって双方全滅は無いと言ってカツカツと笑う。

ジト目な悠介隊長を余所に、上空から見下ろすような形で相手側の巨大な街、蜘蛛の巣を思わせる姿を目の当たりにした他の闇神隊メンバーや、ヒヴォデイル達衛士隊も、ただただそれを見上げながら圧倒されていた。

「あんだけデカイ街なら……可愛い子もいっぱいいるに違いない!」

「お前はいつでも変わらん……」

適応力に定評のあるフォンケの呟きに、ちよつと癒される悠介なのであった。

カルツイオの邪神と来訪者

カルツイオの大地に対してほぼ垂直の角度で接触したポルヴァーティアの大地。互いの海が繋がり、接触部分では激しくせめぎあう波が渦巻いている。

見た目こそ接触部分から急角度になっているが、どういう仕組みなのか片方の水がどちらかに流れ込むという事もなく、双方の大地は互いに平行を保っていた。

「すごい……」

「ありえない光景だな」

「あれって、ずっとこのままって事はないよな？」

「恐らく数日掛けて向こうの大地と平行になるのじゃろう。あれを見よ」

ひたすら圧倒されている闇神隊メンバーと素朴な疑問を口にする悠介に、アユウカスは徐々に角度が合わさるのだろうと推論を述べると、向こうの大地に見える海沿いの港を指し示した。整備された海岸には軍艦らしき船が多数接岸している様子が窺える。

カルツイオの海岸にそんなものはない。そもそも漁以外で海側に船を置く理由もなかったのだ。

「あれは軍港じゃな、大地の融合を前提にしたモノじゃろう」

「という事は、向こうと平行になってから船で攻めて来る？」

あのまま出航すれば角の所で確実に引っ掛かる筈なので、海が平
行にならなければ向こうからこちら側まではこられない筈。それな
らば、アユウカスの推測で数日掛かると思われる大地の平行化まで
の猶予期間に、どうにか相手と交渉を持てるのではないか。

そんな考えを浮かべる悠介だったが、もう一つ、あの巨大な街を
見て内心で危惧していた事があった。意図的に大地を操って寄せて
来る程の術すべを持つ相手。それは神技のような力なのか、或いは推進
装置のような技術なのか。

『相手の技術力とかが高いと、現代兵器つえー状態になり兼ねない
からなあ……』

軍港と思しき岸壁に並ぶ船にはマストや帆らしきモノが見えない。
ガレー船のような櫂も出ていないし、煙突らしき突起部分も遠目に
だが付いていないように見える。大砲など積まれていないだろうか
と観察していたその時

「ユウスケさんっ 何か飛んできますっ！」

目の良いスンが空を指差して警告を発した。隣で眼を細めたシン
ハも気付き、慌てて索敵の風を放ったイフヨカがそれを捕捉する。
ヒヴォデイルの率いる衛士隊からも索敵の風が放たれたが、その時
には既に目視で確認できる距離にまで迫っていた。

「な、なんだあれは！」

「鳥 のようには見えないぞ？」

「見ろっ 人が乗っているぞ！」

それは車輪のない動力車にも似た箱型の物体。悠介の知る乗り物

で言うならば、揚陸艇のような形をした飛行機械だった。翼もプロペラも付いていない、ジェットエンジンのような炎も見えない空飛ぶ船が四機、こちらに向かって飛んでくる。

「こりゃヤバイか？」

飛来する揚陸艇モドキを見て、悠介は危惧していた事が当たったかもしれないと身構えた。

カーストパレスの神聖空軍基地を飛び立った威力偵察の斥候部隊は、相手大陸の海岸線に集まっている兵士達らしき姿を見つけてそちらに進路を向ける。だが、距離が近付くにつれてその規模の小ささに違和感を持った。

「やけに少ないな」

殆どが軽装の歩兵で構成され、騎馬兵らしき姿も見えるが何れも数えるほどだ。操縦士の隣で敵勢力の様子を窺っていたカナンのかげに、銃座を担当する部隊員が答える。

「向こうは対話の使者でも立ててきたのでは？」

「ああー、ありうるな」

相手側がポルヴァーティア大陸の接近をどう捉えているのかは分からないが、こちらの侵攻を予測でもしていない限り、いきなり大軍を用意するという事も有り得ないもの、巨大な聖都カーストパレスの姿は相手側からも見えている筈。

人が住んでいる事が分かる以上、まずは何らかの交渉を行おうとする方が自然だ。

「どうします？」

「どうするって……やるしかないだろう」

この斥候は相手の戦力を測るのが目的であり、何よりも執聖機関は対話など望んでいない。問い合わせを向けた所で『いいから攻撃して情報集める』とお叱りを受けるだけだろう。実際そういう経験をしたという空軍の古株が、カナンの知り合いにもいる。

カーstpパレスではただでさえ風当たりの強い二等市民の身、執聖機関の不評を買うのは利口ではない。

「ま、相手にゃ悪いが、段取り通り接近して機動甲冑を投下だ」
「了解」

荷台で待機している機動甲冑の兵士に降下準備の合図を送り、汎用戦闘機は高度を下げ始めた。

フォンクランクとガゼツタの代表者連合が集まる場所より、悠介の目測で50メートルほど離れた正面付近まで降下して来た箱型の空飛ぶ船から、何か投下される。

「何か落としたぞ？」

「甲冑を着た兵士にも見えるが……」

降りて来たというか落ちて来たのは八体の甲冑兵士。地面が砂だ

つたとはいえ結構な高さから降りたにも関わらず平然と歩き出す甲冑の兵士は、左腕側に盾、右腕に短弓らしき武器が備え付けられており、腰には剣を下げている。

見た目から判断するならば、あの甲冑を纏っているのは相当に大柄な人間かと思われた。

「あれ、中身ちゃんと人間なんだろうな？」

「なにはともあれ、ここは僕の出番だね」

今回、交渉担当の任を授かったヒヴォデイルはそう言っただけで前へ踏み出した。カルツイオの代表として、まずは相手との意思疎通を試みる。アユウカスの話では多少の訛りはあれど言葉も同じ筈のことだ。

「風技を使う部下に”広伝”を頼んだヒヴォデイルは、のっしのっしと横並びで歩いてくる甲冑の兵士達に挨拶の口上を述べた。

「我々はカルツイオの大地を治める国々より集いし代表である。来訪者よ、我々是对話の席につく事を望んでいる」

「ヒヴォデイルの”広伝”による対話の呼び掛けに対し、甲冑の兵士達は顔を見合わせるような動作をしたかと思うと、その内の一人がヒヴォデイルを指し示すように腕を向けた。すると、その腕に装着されている短弓らしき部分に白い光が集中し始める。

警戒していた悠介は咄嗟にカスタマイズ操作でヒヴォデイルの周囲に防壁を構築。甲冑兵士の短弓から光の塊を引き伸ばしたような”光の矢”が撃ち放たれ、砂を固めて作った防壁が撃ち抜かれた。

間一髪、ヒヴォデイルの身体は悠介のシフトムーブによって光の粒を残しながら衛士隊の近くへと移動していたので、掠り傷さえ負わずに済んだ。

「決裂だね」

「早いな」

アユウカスのお告げで分かってはいた事だが、対話を求める相手にいきなり致死性の攻撃を放ってくる辺り、話の通じる相手ではなさそうだ。フォンクラークの衛士隊、及びガゼッタの白刃騎兵団は迎撃態勢に入った。

ヒヴォデイルの衛士隊が神技による遠距離攻撃を試み、白刃騎兵団は接近戦に備えて衛士隊の近くに待機。

後方に陣取る闇神隊は悠介を中心に防御陣形を敷く。この辺り一帯の砂浜は広範囲に渡って資材化処理を済ませているので、イザとなれば”シフトムーブ”を使って即座に全員を退避させられる。

「とりあえずイフォカは本国に連絡を入れておいてくれ。他は空からの攻撃に注意しつつヒヴォデイルの部隊と連携して適当に迎撃」

「は、はい！」

「了解」

カスタマイズメニューを弄りながら指示を出した悠介は、資材化した砂浜の全景を表示してリアルタイムに変化する地表の様子を睨む。敵の甲冑兵士が範囲内に入ってくれば、地形のカスタマイズによる捕縛も検討していた。

衛士隊の攻撃で火炎弾、風刃、氷塊、土塊といった神技が次々と撃ち込まれているが、盾を構えながら前進する甲冑兵士には何れもいまいち効果が見られない。そのうち甲冑兵士達が揃って右腕を向けると、短弓に白い光が集まり始める。

「光の矢が来るぞ！」

白刃騎兵団が盾を構えて衛士隊の前に立ち、悠介はヒヴォディルを護った時の三倍近い厚みを持った防壁を構築して備えた。

やがて飛来した八本の光の矢が砂を固めて作った防壁に次々と着弾、派手に大穴をあけていく。が、穿つには至らなかった。それでも十分に驚異的な威力だ。

「あれって連射は出来ないっばいな」

「ああ、だが当たれば一撃で相手を仕留められる威力はありそうだ」

光の矢を放つ短弓の性能を分析する悠介の隣で、『当たらなければどうという事は無いがな』等と、どこぞの赤い人のような台詞を口にしつつ白金の大剣を構えるシンハ。

高い所から飛び降りても平気だったり、砂に足を取られる様子もなくズンズン歩ける敵の甲冑兵士について、パワースーツ系の特殊な効果を持つ甲冑なのではないかと睨んだ悠介は、イフォカに敵甲冑兵士の様子を詳しく探って貰った。

上空を旋回している揚陸艇モドキな箱型の飛行機械を見るにつけ、二メートル近い巨体を持つ甲冑兵士は、実はロボットのようない自動戦闘兵器だったりという事も考えられなくはない。

「あれ……？　なんだか……動力車みたいな音が……」

「人の気配は？」

「話し声が、聞こえます……風技の伝達じゃ、ないですけど……声を飛ばしあってる、みたいな……？」

「ふーむ、やっぱパワースーツの類か？」

それが『装備品』であれば、何でも良いのでカスタマイズを実行して反映させる事により、カスタマイズ・クリエートシステムの仕様で装備を解除させるといふ裏技が使えるのだが、これには一度接近して相手の装備品に触れる必要がある。

だが、あの甲冑兵士が”装備”ではなく”搭乗”しているのだとすれば

「光の矢が来ます!」

「よいしょっと」

味方の攻撃警報にちよいとカスタマイズメニューの画面を弄って砂の防壁を出現させる悠介。今度は五倍ほどの厚みを持たせてある。とりあえず甲冑兵士を無力化する方法を思いついたものの、あの飛び道具は厄介だ。

「シンハ、騎兵団で接近戦仕掛けてこっちの範囲内に誘導できないか?」

「何か、策でも浮かんだのか?」

仕掛ける事に異存はないシンハは、白刃騎兵団に合図を送って自らも突撃態勢に入りながら一応悠介の作戦を聞いておく。落とし穴や檻を作って捕らえるつもりなら、巻き込まれないようタイミングを合わせる必要も出てくる。

「策というか、乱戦になったら俺も接近するチャンスが出来るだろ? 近付いて装備ひっpegがすって方法ともう一つ」

甲冑兵士の甲冑が”装備品”ではなかった場合はもっと効果的に無力化できると答える悠介に、シンハはニヤリと『楽しみだ』の笑みを返すと、半分崩れた砂の防壁を乗り越えて突撃を敢行するのだ

った。

一方、ポルヴァーティアの汎用機動甲冑部隊。人型戦闘突撃機、通称『機動甲冑』を駆る神聖軍兵士は、上空の偵察部隊と連携を取りながら敵の少数部隊が見せた砂を隆起させて防壁に使う防御手段について情報収集をおこなっていた。

恐らくは特殊能力の類によるものと思われる現象の解析を進める。地形に干渉するような能力であった場合、その効果範囲次第では建設した拠点を攻撃される危険性があるので、原住民の使う特殊能力の概要把握は重要だ。

「隊長機より各機へ、敵が接近戦を仕掛けてきた。どんな特殊能力を使うか分からん、十分に注意しろ」

各僚機から『了解』の通信を受けつつ、隊長機は正面から突っ込んでくる白金色の大剣を振りかざした白髪の男に狙いを定めて、接近戦装備の機動甲冑用重剣を装備した。

ポルヴァーティアの全軍に配備されている機動甲冑は、搭乗者の動きを補佐する機構と装甲服の組み合わせで、少々の攻撃ではビクともしない程度の装甲を持ちながら何も着ていない状態並みの素早い動きが出来る。

あくまでも補佐程度だが、重装備でも殆ど体力を必要とせず走り続ける事が出来るなどの優位性を持つ。全身に着用するような形で搭乗している為、安全処置として過剰な力は発生しない。

機能の拡張性が高く、水中仕様や空中仕様などの追加装備があり、用途に合わせて様々な種類の機体を組む事が出来た。

標準型でも飛行機械に使われる浮遊装置が内臓されているので、跳躍してからの滞空時間が長く、滑空しながら上空より”光撃弓”で射撃攻撃を行うなどの戦法が取れる。滞空中も多少の姿勢制御は可能。

ちなみに、機動甲冑の武装は標準で弓と盾と剣。

”弓”は一般兵も使う『汎用神聖光撃弓』。純粹な魔力の塊を凝縮して放つ。最も安価な飛び道具。

”剣”は非常に硬くて重い、機動甲冑で使う事を前提にした近接用の武器。『汎用神聖大剣』。鋳型の大量生産品。

”盾”は普通の盾だが、剣と同じく重い。ポルヴァーティアの紋章入り『汎用神聖大盾』。

基本、左腕側に盾。右腕に光弓。腰に帯剣といった仕様だ。剣を持ったままでも腕を向けて光撃弓を扱える。

風を斬る音が重々しく唸り、機動甲冑の振るった重剣『汎用神聖大剣』が大きく描いた弧を潜り抜け、翻った白金の大剣がそれを振るう大柄な男よりも更に大柄な機動甲冑の脇腹辺りへと叩き込まれる。

ガスンという重い打撃音。僅かに揺れた機動甲冑が、懐に入り込んだ白髪の戦士に向かって左腕の盾を振り下ろす。

素早く横に跳んで躲した白髪の戦士は着地の態勢からそのまま地を蹴って後ろに跳び退ると、返って来た『汎用神聖大剣』の攻撃範囲外へ逃れた。

「あの巨体でこの動きか……しかも異常に打たれ強い」

邪神の力で強化された愛剣による渾身の一撃にも殆ど怯んだ様子を見せず、淡々とした攻撃を繰り返してくる甲冑兵士に、シンハはこれが敵軍の標準的な一般兵士なのか、或いは特別な精鋭兵士なのかを考える。

もし前者だった場合、この先の戦いは相当な苦戦を強いられるだろう。

部下達の様子を見れば、七体の甲冑兵士を相手に五十人の白刃騎兵団戦士がほぼ総出で戦ってどうにか互角という戦闘が繰り返り広げられていた。

剣も槍も通さない甲冑兵士は仲間との連携を取らず、それぞれが個別に戦士達を相手取っている。重量級の大剣や盾を縦横無尽に振り回しているが、些かの疲労も窺えない。

彼らが連携していないのは七体のそれぞれが名の有る戦士なので協力こそし合っても戦いの場では孤高であり続けようとしている、という訳でもなさそうだ。

動きを見る限り、同じ訓練を受けた同じ戦闘技術を持つ同じ組織に属する兵士といった特色が窺える。

「こちらの力を見定めているのか」

規模からしてお互いに斥候、偵察の類であろうと理解したシンハは、予定通り少しづつ後退して”資材化地帯”まで甲冑兵士達の誘導に入った。

隊長機の機動甲冑から上空の汎用戦闘機に通信が送られる。敵側

戦士の戦闘力はほぼ想定の範囲内だが、機動甲冑とサシでやり合えるような飛び抜けた戦闘力を持つ戦士も確認された。

「とりあえず、後方にいる特殊能力の集団にも仕掛けてみる」

『了解した。砂が隆起した際にかなり大きな魔力値が観測されている、十分注意してくれ』

「了解だ。隊長機より各機へ、これより敵の後方部隊に仕掛けるぞ」

シンハと対峙していた隊長機は大きく剣を振るって牽制すると、空高く跳躍してシンハを一気に飛び越えた。僚機の七体もそれに習い、白刃騎兵団の包囲網を抜け出すと、空中から後方で控える衛士隊に光撃弓を向ける。

「……っ これは、誘導するまでもなかったか。しかし 行ったぞコースケ！」

呼応するように現れた砂の防壁に、光の矢が次々と撃ち込まれていく。空中を滑るように前方へと降下する甲冑兵士達は、通常の弓兵が矢を射る程度の間隔で光の矢を放ちながら砂防壁を削ると、そのまま踏み崩すように防壁上へと着地した。

防壁の裏側に隠れているであろう特殊能力を使う敵部隊の集団に攻撃を仕掛けようとしてはたと動きを止める。

「敵は何処だ？」

『左前方に敵部隊を確認！』

砂の壁が現れた時はまだそこにいた筈なのに、何時の間にか随分と離れた位置に移動している。存外、素早く動ける能力でも持つて

いるのかもしれない。

それならばそれで、どういった類の能力なのか敵の動きをしつかり観測しておかねばと改めて攻撃の指示をだそうとして

「なんだ……？ 機体が動かかん」

『隊長つ 機動甲冑が動きません！』

『こつちもです！ 行動不能っ』

『脱出装置も作動しません！』

突然身動きが取れなくなり、僚機からも次々と行動不能の通信が入る。機動甲冑の魔力残量や各部の接続状態に異常は見られない。外部装甲にも大きな圧力が掛かっているような事もなく、全くの原因不明であった。

「よし、捉えた」

カスタマイズメニューを弄って空中に指を這わせる悠介がポツリと呟く。カスタマイズ画面の中には資材化地帯に入った甲冑兵士達の機動甲冑をグループアイテム化して取り込み、完全に掌握した状態が映し出されている。

「っーか、乗り物だったんだなコレ」

外觀はそれほどゴツクは無いが、某むせるアニメを思い出すと謎の言葉を残しつつ、掌握した機動甲冑を解析して色々と情報を読み取る悠介。”ポルヴァーティア神聖地軍所属、汎用機動甲冑『人型戦闘突撃機』”そんな敵兵の名称が読み取れた。

「ポルヴァーティアって向こうの国の名前かな？　とりあえずこっちは無力化できた」

「後は飛んでおる奴じゃの」

悠介のカスタマイズメニュー画面を横から覗き込んでいたアユウカスが、そう言って空を見上げる。旋回を続けていた箱型の空飛ぶ船が大きく軌道を変える動きを見せた。

原因不明の行動不能状態に陥ってしまった機動甲冑部隊。搭乗者は不自然な活動停止に故障の類ではないと判断、隊長機から上空の汎用戦闘機に救出と援護要請が出された。

魔力値を観測していた汎用戦闘機の偵察部隊は機動甲冑が行動不能に陥る寸前、砂の壁が現れる時のような大きな魔力値の変動を感じており、敵側が使う何らかの特殊能力による影響が機動甲冑の行動不能の原因と睨んだ。

通信具は問題なく使用可能な事から、機動甲冑や飛行機械の動力である”魔導装置”に異常を発生させるような魔力の流れを乱す類の特殊能力では無いと推測した偵察部隊長カナンは、汎用戦闘機による攻撃で機動甲冑部隊の救出を指示する。

「二号機と三号機で敵後方部隊と歩兵部隊を攻撃牽制しろ、四号機は上空待機で補佐、搭乗者の救出には俺達が行く」

二機の汎用戦闘機で敵部隊を攻撃して牽制しつつ、カナン達の機

体で機動甲冑部隊の近くに強行着陸して救出する作戦。四号機がこの付近一帯を見渡せる位置について合図を送ると、三機の汎用戦闘機は連なって降下を始めた。

「空襲に注意ー！」

箱型の空飛ぶ船に付いている武装は連射の利く飛び道具らしく、機動甲冑が放っていた光の矢ほど強力ではないものの、石礫をぶつけられるくらいの威力はありそうだ。複数の柱で支える半円状の屋根つき砂防壁を出現させて皆を護る悠介。

空からの掃射という馴染みのない攻撃に戸惑う衛士隊に”空襲警報”を発しながらカスタマイズ画面を弄る悠介は、今し方頭上を通り過ぎていった空飛ぶ船型戦闘機の後に続いて突入してくるもう一機に狙いを定める。

「この辺か……っ 実行！」

低空で侵入して来た戦闘機に対して、悠介はその進行方向に砂塔を建ててぶつけるという迎撃に出た。いきなり正面に生えた塔を回避しようと機体を傾けた戦闘機は、避けきれずに側面から衝突。

ぶつかった瞬間、カスタマイズ画面で機体をグループアイテム化する事により、砂塔の一部として取り込む事に成功した。先程”機動甲冑”を無力化したのと同じ方法である。

「シンハ！ 捕獲頼むっ」

一度ひっくり返して搭乗員を振り落とす、シン八達に捕虜の拘束を頼む。座席にベルトなどで固定されていた操縦者達も、機体を地上まで移動させてその身柄を確保。戦闘機の搭乗員達は何が起きているのか分からない様子で、ただ茫然としていた。

「汎用戦闘機っていつのか……なんか色々ヤバイものも付いてるな」

ポルヴァーティア軍の汎用戦闘機を砂塔の一部とみなすアイテムとして取り込んだ悠介は、機体を解析して一部に修正を加えながら砂塔に組み込んだ。即席の砲台として利用するのだ。

救出に来た残りの敵戦闘機に対して、鹵獲した汎用戦闘機の機銃『神聖光撃連弓』で反撃を始める。

機体から振り落とされた搭乗員達の治癒を引き受けていたエイシヤが、この空を飛ぶ機械に付いている武器を動かし始めた悠介に驚いて声を掛けた。

「隊長、使い方がわかるんですか？」

「人が使うもんだからな、こういうのは似たり寄ったりになるもんだ」

流石に機体そのものの操縦は難しいが、カスタマイズメニューに性能なども表示されるのでそれを見れば大体分かる。操縦席横の銃座でレバーを握って機銃を操作し、照準版の丸印に敵影を合わせながら引き金を引く。

悠介の知る元居た世界の、火薬を使う現代兵器のそれとは随分違った駆動音、魔力の充填音らしき稼動音を響かせながら、凝縮された光の矢を連続発射する『神聖光撃連弓』。

バラ撒かれた光の矢が、接近する敵汎用戦闘機の装甲を叩いた。

「奴等、使い方が分かるのか!？」

『こちら二号機、被弾した! くそっ 推進装置の隙間に当たっちゃまった!』

「二号機は帰投せよ! 四号機は援護に入れ! カナン隊長と機動甲冑部隊の救出を優先するぞ!」

『四号機了解、これより援護に入る』

上空を旋回しながら付近一帯の監視をしていた四号機が降下を始め、二号機は若干姿勢を崩しながら離脱していく。今回は大陸がほぼ垂直方向に接陸しているので、カルツイオの空域からポルヴァーティアの空域に入る場所では機体の向きに注意が必要だ。

ポルヴァーティアの神聖空軍基地と通信が可能になる範囲に入り次第、現在の状況と一時帰投する事を伝える。

「これは、場合によっては救援要請が必要かもな」

「救援か……出してくれると思うか?」

カナンが部隊長を務める偵察部隊は隊員全員が純粋なポルヴァーティア人ではない二等市民で構成された部隊。所謂”使い捨て”の出来る部隊だ。

戦闘の様子は『遠見鏡』でも観測している筈なので、敵兵の特殊能力に関する詳細や魔力値の測定結果は”あれば良いが無くても大して困らない程度の相手”と上が判断したなら、隊員の救出に応援を出して貰える可能性は低い。

「最悪、機動甲冑も鹵獲された機体も吹っ飛ばして終わりだな」
「……捕虜として連れて行かれるのと、どっちがマシかって所か」

そう遠くない内にこの大地もポルヴァーティアに取り込まれ、執聖機関の統治下に置かれるだろう。それまで無事に生き延びる事が出来るなら、捕虜として敵国に連れて行かれる方が良いかもしれない。捕虜の扱われ方次第だが。

二号機の操縦者と搭乗員がそんな会話を交わしていた時、魔力値の観測装置が一瞬、異常な数値を指し示した。が、それは直ぐに通常の数へと戻った。機体の周囲を見渡すも、大きな魔力を発するようなモノは見当たらない。

「故障か……？」

「観測装置にも被弾してたのかもな」

観測装置の魔力を感知する部分は機体下部で剥き出しになっているのだから、推進装置を護る装甲の隙間に当たるような攻撃が観測装置の感知版に当たっていてもおかしくはないだろう。

そう判断した二号機の搭乗員は一瞬だけ指し示された異常数値の事は気にせず、帰投を急いだ。

二機の汎用戦闘機を相手に砂塔の一部と化した鹵獲汎用戦闘機の光撃連弓で応戦する悠介。微妙に威力を強化したり、相手の攻撃を防ぐ防壁を出したり修繕したりと忙しい操作が要求される。そこへ

「どれ、ワシも手伝うか」

邪神との共鳴能力を持つアユカスが悠介のカスタマイズ能力を通じて光撃連弓の操作を覚えると、もう片方の銃座について参戦した。ただし、手足が届かないのでシン八を呼んで膝に座りながらの射撃だ。実はこうしてシン八にも使い方を学ばせている。

アユカスの参戦により、負担の減った悠介はカスタマイズ画面に捉えてある資材化地帯上の機動甲冑をとりあえず一箇所に移動させて纏めると、搭乗員は後で捕獲する事にして少し弄ったのち放置。開いた空間に衛士隊や白刃騎兵団の戦士達と捕虜を避難させておく為の防空壕を組み上げた。

「これで墜落に巻き込まれる危険も減らせるだろ」

「相変わらず部下想い、兵士想いじゃな。しかし当たらんのか」

派手に光の矢をバラ撒いているアユカスと悠介だが、一応狙いは付けて入るものの素人の腕では思いのほか当たらない。

相手側も自軍の機体を奪われての反撃に対して一切の油断や侮りを棄てて掛かって来ているので、二機の回避と攻撃の連携は中々に手堅い。

「なるほどね、そういう仕組みなのか。じゃあ僕も手伝おうかな」

ここで自称森の民、レイフォルドがサポートに入った。戦闘開始時から何時ものように一步というか十歩くらい下がった位置から全体の動きと流れを観察していた彼は、機動甲冑や汎用戦闘機から敵勢の持つ力を見定め、神技での対抗手段を模索していた。

神技だけではどうしようも無いという結論には早々に至ってしま

つたが、幸いにもカルツイオには平穩を望む変革の使者、邪神悠介が存在する。高度な技術を誇るであろう機械類を武器として駆使する相手にとって、悠介の力は相性最悪のカウンタースキルだ。

相手の機械類を乗っ取り、上手く神技と組み合わせる事で対抗する。レイフォルドは先ず自らそれを実践すべく参戦した。

己が風技でこの空域一帯の空間を正確に認識し、敵戦闘機の動きをリアルタイムで把握して次にどう動くのか、何処を狙って撃てば良いのかを照準版に砂粒を集めて指示。

この補佐により、光撃連弓に標準搭載されている照準を使うよりも、レイフォルドの指示した予測地点を目掛けて撃つとよく当たるようになった。

これは悠介が武器にカスタマイズを施して命中率を上げる”使用者に影響する”やり方ではなく、神技による補佐の精密度がそのまま命中率の向上に繋がるやり方なので、熟達した風技の使い手であれば誰もが扱える。

風技の補佐による命中率の向上で敵戦闘機に次々と着弾し始める強化された光の矢。

「左側面装甲剥離！ 光撃連弓充填装置破損っ これ以上はヤバイ

！」

『こちら四号機、浮遊装置に異常発生につき、戦闘空域より離脱する』

「……………仕方ないか」

これ以上の被弾によるダメージが嵩めばこっちも危ないという事で、引き揚げる決断を下す偵察部隊の臨時指揮官。

急上昇して砂塔砲台から距離をとりながら大きく旋回、何時の間にか一箇所に集められている機動甲冑部隊と、砂塔に取り込まれている汎用戦闘機の一号機を視認すると、自爆信号を送る装置に指を掛ける。

「カナン隊長達は捕虜になってるようだけど、機動甲冑部隊は搭乗者がまだ中にいるんじゃないか……？」

「ああ、だが……」

救出できなかった以上、回収不能な機体は爆破して相手側に渡さないようにしなければならぬ。汎用戦闘機の自爆装置は既に試したが、砂塔に衝突した際に故障でもしたのか、作動しなかった。

「せめて隊長の機に取り付いてる黒い奴は道連れにしてやりたかったが…… 赦せよ」

カチリツと自爆信号のスイッチが押し込まれる。しかし、何も起きない。機動甲冑の肩と頭部に付いている識別灯は、自爆信号を受けた事を示す赤い点滅を繰り返しているが、一向に爆発する気配はなかった。

「どついう事だ……！ 幾らなんでも全機不発はありえないぞ」

戸惑いながら上空で旋回を続けていた三号機に、砂塔砲台から飛んで来た光の矢が機体を叩く。既に光撃連弓の射程を越える高さまで距離をとっているにも関わらず攻撃を受けた事で、慌てた臨時指揮官はこのまま帰投する事を選んだ。

『相手にこちらの兵器を奪われては危険だ』という情報を得て、彼等はポルヴァーティアの空軍基地へと引き揚げて行ったのだった。

「やれやれ、引き揚げたか……」

砂塔砲台の銃座から小さくなる標的を見上げる悠介は、そう言って一息吐いた。シフトムーブで砂塔から地上に下りると、闇神隊メンバーが集まって来て労いの声を掛けてくれる。

「お疲れ様でした、ユウスケさん。お水どうぞ」

「隊長、お疲れ様でした」

「今回はなんとかかなりやしたね」

「あの甲冑兵士、頭と肩が光ってるけど、何なんすかね？」

約一名、普段と変わりないのが混じっているが、得体の知れない高度な技術を持つ敵を目の当たりにした事で、皆の表情にも若干の憔悴が見て取れた。

「ああ、なんか自爆装置だったらしい」

「自爆……」

汎用戦闘機と機動甲冑の自爆装置は、実は悠介が自爆用の爆弾をカスタマイズで排除していたのだ。カスタマイズメニューにはちゃんとそれぞれの機能なども表示されるので、やばそうな部分を予め解体しておいた。

「しっかし……あんなのが大挙して押し寄せたら、サンクアディエ

ツトでも一日で火の海になるぞ」

なんとか追い払えたが、あれが斥候に過ぎないのは分かっている。空を飛ぶ戦闘機などという乗り物はカルツイオに無い。当然、街には対空防衛の機能なども備わっていない。

「まあ、今のカルツイオに存在する全ての街に言える事じゃな」

アユウカスがシフトムーブを使って砂塔砲台から下りてきた。もうすっかりカスタマイズ能力を一部だが使いこなしているようだ。シンハはまだ上で銃座に納まって光撃連弓の操作を覚えようとガチャガチャやっている。

とりあえず、戦闘機に装備されていた武器は材料さえ揃えばコピーできるので、これで対抗できるか？ と腕組みで考え込む悠介。

「それはそうと、もう一つ得体の知れんモノが来ておるぞ」

「え？」

じつと警戒するような眼差しで空を見上げるアユウカスが指し示した方向には、黒く揺らめく翼を広げた存在が浮いていた。

勇者と戦女神

ポルヴァーティア神聖空軍基地施設の離発着場にて、帰還した汎用戦闘機の整備運搬が行われる中、高速揚陸艇の前で揉めている甲冑を纏った小柄な少女と空軍将校の姿。二人の間に挟まれる形になった操縦士が困った顔をしている。

「お願いしますっ 行かせて下さい！」

「だから無茶を言わんでくれ！ 汎用戦闘機一機に地軍から借りた機動甲冑の全機が戻らなかつたんだぞっ」

捕虜になったカナン隊長達を助けに行かせて欲しいと懇願するアルシアに、今回の威力偵察総指揮を担当する空軍将校はこれだけ壊滅的なダメージを被った相手に一人で行かせるなどという無謀な出撃は許可できないと首を振る。そこへ

「彼女を行かせてやりなさい、私が許可しよう」

「だ、大神官……っ しかし」

「大丈夫、彼女は大地神ポルヴァーに選ばれし者なのだから。出来るかね？ 勇者アルシアよ」

「大神官……はい！」

軍務総監と特聖官を従えて現れた大神官がそう言っただけでアルシアの出撃を許可した。気持ちを汲まれ、期待を掛けてくれる大神官の問

い掛けにしつかり頷いて答えるアルシア。

故郷でもある母国エパテイタの首都ペンタから国境の街パルスを経て、隣国グランダーにある国境の街、バラッセの訓練学校に向かう途中でこの世界に召喚され、勇者としての自覚はあれど身寄りもない異郷の地で心細い日々を送る中、いつも親身になってアルシアの相談にも乗ってくれた。

心の支えとなり、力になってくれた恩人でもあるカナン隊長と偵察部隊の仲間達。なんとしても助けたい。気合が入るアルシア。

アルシアを乗せた高速揚陸艇が離陸して行く様子を眩しそうに見上げながら祝福の印を向ける大神官は、相手勇者の情報をもっと集めるよう隣に立つ特聖官に指示を出す。アルシアを丁度良い餌にするのだ。

「もし我々の手に余るようなら、秘密裏に始末せねばならん」

「かしこまりました」

例え”勇者”が蛮族との戦いで倒れるような事があつたとしても、それは”試練”として信徒達を纏め鼓舞する材料に使える。ポルヴァーティアの民を統治していく上で、神の使命を遂行する執聖機関に”敗北”や”不可能”があつてはならないのだ。

黒い霧が集まって出来た様な翼は先端の方が陽炎のように揺らめき、仄かに紫掛かった光を纏っている。漆黒の翼を広げて地上に降

りて来たその存在は、赤いコートを着た少女のように見えた。

カルツイオには約一名を除いてその色を持つ者はいない筈の、黒い髪に黒い瞳をした少女。顔の造詣に見られる傾向などから、人種的に悠介との関連を想像する闇神隊や衛士隊に白刃騎兵団の面々。皆が皆、悠介に視線を向ける。

「隊長、お知り合いですか」

「んな訳ないだろう」

「でも、隊長と同じ黒……」

「いやまあ確かに、見た目は同郷の人っぽいんだけど」

少なくとも、自分が知る日本人に”黒い翼を広げて空から降りてくる”ような少女は現実には存在しない、筈だ。地上に着地した少女から翼が消えてふわりと黒髪が靡く。

闇神隊のメンバーは悠介の判断を窺っているし、ヒヴオデイルもしゃしゃり出る気は無いらしく沈黙しており、彼の部下である衛士隊もそれに倣って迂闊な行動は取らず待機中。レイフォルドは何時もあり傍観を決め込むつもりのようなのだ。

シンハはまだ砂塔砲台の上において、白刃騎兵団とアユウカスは悠介がどう出るのかと見守っている。

「俺がファーストコンタクト取るのかよ……」

皆の視線に押されるように、悠介は代表で前に出ると、件の少女と向き合った。すると、向こうから声を掛けてきた。

「えーと初めまして、あたし都築朔耶つひき さくやといいます」

「あ、これはご丁寧にどうも、自分は田神悠介たがみゆうすけといます」

互いに頭を下げ合い、そして驚く。

「どうして日本人がつ！」

「なんで日本人がつ！」

思わず声を揃えて同じ驚きを露にする二人。そうしてふと、悠介の顔をじつと見上げた黒髪の少女、”都築朔耶”と名乗った彼女は、何かに気が付いたような表情を浮かべながら言った。

「あれ？ さっきの人」

「はい？」

出し抜けにそんな事を言われて戸惑う悠介は、思わず間の抜けた声で問い返した。しかし、次に紡がれた言葉に困惑する。

「神社でゲームしてた人」

「えっ？」

ほんの一年程前の事になる懐かしい記憶、悠介はカルツイオの”声”に喚ばれる直前の事を思い出す。確かに、自分は神社の境内でゲームをしていた。だが、『さっきの』とはどういう意味なのか。

『もしかして、向こうはあの瞬間から時間が経ってないとか？』

足早に去っていく自分自身の後ろ姿を見送る所までしか、向こうの事は覚えていない。あの時、周囲には誰も居なかった筈だ。ハテナと小首を傾げる悠介。そんな悠介の反応に、相手も『あれ？』と

いう雰囲気と考え込むような仕草を見せた。

頭を掻き掻き戸惑っている所に『ユウスケさん、ユウスケさんとひそひそ声でスンが話し掛けてくる。』

「ユウスケさんの世界の人って、空飛べるんですか？」

「いや、普通は飛ばない」

「隊長の住んでた世界の人って事は、間違いないんでやすね？」

「ああ、お互いに日本人って言うてたし……名前も日本人の名前だよ。だけど」

『俺の知ってる日本人と違うっ』と、ちょっと焦り気味な悠介。

それを言うならば、カスタマイズ・クリエート能力のような力を持つ人間自体、普通は存在しないだろう。と、思考にツツコミを入れてくれるような相手もいないので、そこは自分で突っ込んでおく。

内心で一人ボケツツコミをやっていた悠介がはたと顔をあげると、こちらを観察するように見詰めている”都築朔耶”と目が合った。

「くすっ」

「ははは……」

ニコリと微笑を向けられた悠介は、照れながら微笑み返しをしておいた。フォンケが『まさかのコンプリートか』などと驚愕を露にし、スンとイフォカが緊張しているが、割と何時もの事なのでスルーしておく。

”都築朔耶”が何者かは分からない、だが言葉はちゃんと通じるし会話も出来るのだ。問答無用で謎の攻撃を仕掛けられるような事もないのだから、とりあえずゆっくり話をして彼女が何者なのか、どんな目的があって自分達に接触して来たのかを問えばよい。

もしかしたらポルヴァーティア大陸と何か関係があるのかもしれないし、元居た地球世界の事も聞けるかもしれない。

そんな事を思いつつ、悠介は改めて都築朔耶に話し掛けようとした。その時

「せっかく興味深いお客様との邂逅だけど、最初のお客様が戻って来たようだよ」

レイフォルドが敵襲の警告を発して地平線を指し示した。垂直に繋がるポルヴァーティア大陸の海を背に、汎用戦闘機よりも細長い姿をした機体が、かなりの速度で低空飛行をしながら真っ直ぐこちらに向かって飛んで来ている。

砂塔砲台からシンハの迎撃と思われる光の矢が放たれるが、細長の戦闘機は僅かに軌道を変えるだけでそれらを回避した。

「迎撃準備！ とりあえず都築さん、危ないですから下がってください」

空を飛んで来たのはともかくとして、懐かしい元居た世界を思い起こさせるデザインの衣服を纏った、見るからに一般人であるう朔耶を気遣いながら迎撃準備を始める悠介。カスタマイズメニューを出して後方に避難所の防空壕を作っておく。

高速揚陸艇は汎用戦闘機に比べて装甲は硬めだが武装は付いていない。その防御力と機動力を持つて素早く確実に目的地まで兵士を運ぶ事に特化させた機体である。

アルシアを乗せて神聖空軍基地を飛び立った高速揚陸艇は斥候の偵察部隊が蛮族と交戦した不浄大陸の空域に到着すると、早々に砂の塔に埋め込まれたような姿の汎用戦闘機から砲撃を受けた。

あれが帰還した偵察部隊員の言っていたやけに命中精度が高く射程も長いという砲台だろう。

「あれを先に潰す、砲台に向かって飛んで」

「正気ですか！」

「私は勇者よ」

不敵な笑みを向けられ、操縦士は分かりましたと機体を砂塔砲台に向けた。光撃連弓からの弾幕を躲しながら低空で近付き、砲台の正面で急上昇。そのタイミングで飛び出すアルシア。

機動甲冑の盾にも使われる素材で作られたアルシア専用の大型メイスを振りかざしながら砂塔砲台に突っ込んでいく。

「やあああああ！」

高速揚陸艇の航行速度に落下速度も乗せた大型メイスの一撃が、砂塔砲台に振り下ろされた。半ばから砕かれて崩壊する砂塔砲台。

「なかなか非常識な事をする！」

砲台の汎用戦闘機から飛び降りたシンハは白金の大剣を一振りすると、特攻攻撃を仕掛けてきた甲冑少女の迎撃に出た。

「私はポルヴァーティアの勇者アルシア！ 神の意に従い、不浄の大地を浄伏しに参上した！」

「ガゼッタの戦士シン八だ。 ふっ 対話の呼びかけに射掛けで応じておいて、今更口上を述べるか」

シン八の指摘に怪訝な表情を浮かべるアルシア。だが、剣を向けて挑んでくる相手の言葉に惑わされるつもりは無いと意味を問う事はせず、カナン達の居場所を確認したアルシアは大型メイスを構えて奪還に踏み出した。

特殊合金の大型メイスと邪神のカスタマイズ付き白金の大剣がぶつかり合う。

両者の振るう剣圧で周囲の砂が巻き上がり、金属の打ち合う重い音が一带に響き渡る。それも通常の剣戟音ではなく、爆発の如く尋常ではない破裂音。一体どれ程の”力”がそこに集中し、ぶつかり合っているのか計り知れない。

ポルヴァーティアの勇者を名乗るアルシアと、ガゼッタの王シン八の一騎打ちを見守る白刃騎兵団の戦士達。悠介と闇神隊は今後の状況に合わせて動けるよう敵の増援に備えるなど、ヒヴォディルと連携して衛士隊を展開させている。

「なんか、シン八押されてないか？」

「そう見えやすね、女相手だからと手心を加えるような御仁ではなかったと思いやすが……」

「シンハとて人の子じゃ。あの娘からはお主と同じ気配を感じる」

悠介とヴォーマルのやりとりに、アユウカスが答えながら悠介達の尻をぽんと打つ。そういう仕草が日々年配者っぽい齡3005歳の少女。それはさておき、悠介は『お主と同じ』という部分に反応した。

「それってもしかして向こうの……?」
「恐らくな」

相手側の”邪神”的な存在であろうと推察するアユウカス。ポルヴァーティアでは”勇者”として扱われているようだ。と、その時、一際大きい衝突音がして砂塵が舞い上がる。

砂の幕が晴れると、ここでは衝撃波の痕を残す抉れた砂地の上でシンハとアルシアが鏝迫り合いに入っていた。

甲冑の少女、ポルヴァーティアの勇者アルシアはシンハよりもずっと小さく、悠介よりも背が低いかもしれないくらい小柄な少女だ。そんな少女が自分の身長よりも大きい金棒のようなメイスを振り回してシンハと互角以上の戦いを繰り広げている。

捕虜にしたポルヴァーティア人である汎用戦闘機の搭乗者達が神技の類を使えない以外はカルツイオ人と変わりない人間だった事を考えれば、確かに普通の人間とは言い難い。

唸るメイスと打ち合うように剣を合わせて受け流す。まともを受けては剣はともかく腕が持ちそうに無い。この少女が纏う甲冑にも

先程戦った機動甲冑のような仕掛けがあるのかも知れないが、それにしてもこの力は異常だ。

『剣の補助効果が無ければここまで持ったかどうか』

片手剣を振るうような速度で打ち下ろされる大型メイスを剣で払うようにしながら斜め前方に踏み出す事で辛うじて躲すと、二度目の鏑迫り合いに持ち込むシンハ。

得物を使つての打ち合いでは扱う武器の重量からして分が悪い。せめてもう少し重そうに振るってくればまだ対処のしようがあるのだが、と愚痴り気味にジリジリと押していく。止めてしまえば大型メイスの重量は相手側の負担になる筈だ。

シンハは体格で大きく勝っているからこそその力押しでアルシアを抑え込みに掛かった。

「ベッドの上でなくて悪いが、少し休むといい」

「っ！ ふ、ふざけるなあー！」

緊迫した場面で相手の虚を付く事を狙ったシンハの言葉は、乙女心の何かを刺激してしまったようだ。アルシアの身体が薄っすらと光を纏うと、鏑迫り合いで押されている態勢から強引にメイスを振るう。

ギヤリギヤリと火花を散らしながら大型メイスと白金の大剣が擦れ合い、殆どその場から腕の力だけで武器を使ってシンハの身体を投げ飛ばすように引っぺがした。

これには流石のシンハも驚き、着地した瞬間を狙って薙ぎ払って来るメイスを大剣で受け止めようとしたが、まるで全力突撃の騎兵にでもぶつけられたが如く勢いで撥ね飛ばされた。

白金の大剣が宙を舞い、肩から砂地に突っ込んだシンハの身体が

二、三度跳ねる。

「シン八が力負けした!？」

悠介は驚きながらもカスタマイズメニューを開くと、シン八を安全な場所に移動させようとシフトムーブの使用態勢に入った、がしかし、今の一撃でシン八の身体は資材化地帯の外に出てしまった。

大型メイスを振りかざしたアルシアが追い討ちを掛けるべく大きく跳躍する。

「とどめっ!」

相当なダメージを受けたらしく、のろのろと起き上がるようにするシン八にメイスが振り下ろされようとしたその時、近くに突き刺さっていた白金の大剣を拾って割り込む小さな影。次の瞬間、凄まじい衝撃音と共に砂柱が上がった。

立ち込める砂煙が風に流されて浮かび上がった光景は、大型メイスを振り下ろした体勢のアルシアと、白金の大剣でそれを受け止めている紫掛かった白髪の小柄な姿。

トドメの一撃を受け止め、シン八を救ったのはガゼッタの里巫女アユウカスだった。この世界の大地を見守る存在精霊に与えられた力であれば、それを宿す者の近くに在る事で同じ能力を行使出来るという共鳴能力を持つアユウカス。

「ポルヴァーティアの”勇者の力”とも共鳴したアユウカスが、そ

の力を持つてガゼツタの王に助力する。小さい見た目からは想像もつかないような怪力で押し返されて戸惑うアルシア。

「喚ばれたおり、純粹に力を求めたか」

「っ！」

眼を見開いて驚きを露にしたアルシアは、直ぐに警戒を滲ませた表情でメイスを構え直すと、白金の大剣を無為に構えるアユウカスと対峙する。

「お前が、混沌の使者か」

「ん？ なんじゃそれは。ワシは里巫女じゃ」

世界を崩壊から救う使者として大地神ポルヴァに喚ばれるは”勇者”。その勇者に対抗すべく、不浄の大陸にも世界を崩壊に導く特別な力を持った”混沌の使者”が存在する場合がある。執聖機関で訓練と教育を受けたアルシアはそう教わっていた。

「ポルヴァーティアの勇者として、この世を崩壊に導く混沌の使者はこの手で討ち払う！」

「せっかく纏まっておったカルツイオに混沌をもたらせとるのは、お主らの方なんじゃがのう」

「問答無用！ 私に幻惑は通用しないっ」

アルシアが仕掛ける。合わせるアユウカス。『敵を討ち滅ぼす強大な力』という共鳴して扱う力としては割りとありふれた能力だけに、アルシアと同等の力を得たアユウカスは剣裁きも巧みで、剣に施されたカスタマイズの補助効果も相俟ってアルシアを圧倒する。

打ち合う度に爆発の如く立ち上がる砂柱。シンハとアルシアが戦った時の比ではない強烈な剣戟の応酬。思わぬ味方の伏兵にぼかん状態だった悠介は我に返ると、呆けている場合ではないとばかりに怪我をしたシンハの所へ駆けつけようとした。

とりあえず資材化地帯まで引つ張り込めば、シフトムーブで安全な場所まで移動できるのだ。しかし

「近付くなユースケ！ 今おぬしの能力と共鳴すると、こちらの共鳴が半減する」

「うおっ マジっすか！」

慌てて回れ右した悠介は、距離を取りながらカスタマイズメニューを素早く操作して実行。資材化地帯からシンハの居る所まで板状に固めた砂板を延ばした。

「シンハっ それに乗れ！」

よろよろと倒れ込むように砂板の上へと移動したシンハを確認すると、カスタマイズ画面で砂板の端部分を自分の直ぐ傍の砂地と入れ換えて実行する。

「必殺シフトムーブ」

『ザ・レスキュー』等と繋げながらシンハを安全圏に移させた。何が”必殺”なのかは深く考えてはいけない。しいて解釈するならば、”危険”そのものを”回避する必殺”といった所か。

「エイシャ、シンハの治癒を頼む」

「はいっ」

シンハの治癒を部下達に任せてアユウカスとアルシアの戦いに注視する悠介は、カスタマイズ画面に落とし穴やら防壁やらを配置しながら援護態勢に入っていた。効果があるかどうか分からないが一応、攪乱用ギミッククオブジエ『うねうね土塊』なども用意しておく。

大型メイスと白金の大剣による暴風雨のような激しい打ち合い。

迂闊に近づく事さえ躊躇われる攻防の中で、アユウカスは身体が小さいハンデをアルシアとの共鳴で得た”勇者の力”に加えて白金の大剣に施されている補助効果で補う事により、速度と手数、それに経験というアドバンテージを持ってアルシアを押ししていた。

「そろそろ疲れて来たじゃろう、ちょっと一息ついて話でもせんか？」

「私はっ 負けない！」

先程のシンハとの攻防でも見せた光を纏うアルシア。逆境に曝された時に発揮される真の力といった所か、一時的に速度やパワーが底上げされる勇者のオーラ。

アユウカスの技巧に押されていたアルシアは文字通り力押しで互角の状態まで押し戻すが

「ふむ、こつやるのか」

「なっ！」

アルシアが力を使う所をしっかりと観察していたアユウカスが同じように光を纏い、速度やパワーが増した事で再び圧倒し始めた。

だが、超重量級な大型メイスとの打ち合いは刀身に掛かる負荷も凄まじく、幾らカスタマイズによって強度を上げられている上に使い減りしない仕様になっているとはいえ、限界はある。

その強度限界を超えない限り決して磨り減らない白金の大剣は、光のオーラを纏ったアルシアの猛攻による渾身の一撃に耐え切れず半ばからへし折れてしまった。

「むっ 剣が」

「やあああああ！」

剣が折れた事で武器を打ち付け合った時の反動という圧力を失って身体が泳いだアユウカスに、大型メイスの一撃が叩き込まれた。直接メイスを受けた衝撃で左腕と肩が砕け、悠介の頭上を掠めて後方の防空壕付近まで吹き飛ばされるアユウカス。

「アユウカスさん！」

頭上を掠めて吹っ飛んでいったアユウカスの小さな身体は、後方に纏めておいた機動甲冑の一体に激突。パーンという破裂音のような衝突音と共に機動甲冑の胸部が真っ赤に染まる。激突の衝撃で機動甲冑も転倒した。

衛士隊の治癒係りが駆けつける様子の確認もそこそこに、アルシアを振り返った悠介は突撃を仕掛けてくる彼女の足止めに掛かった。資材化地帯に入ったアルシアを防壁で囲んだり、落とし穴に閉じ込めたりと封じ込めを試みるが、砂防壁は簡単に粉碎され、落とし穴からは軽々ジャンプして抜け出される。一応甲冑巨人砂バージョンも出してみたが、一撃で破壊された。

闇神隊メンバーや衛士隊から攻撃系神技の使い手が援護射撃を行うも、火炎弾や水球は叩き落され、当たっても大して効いた様子が無く、氷塊や土塊は放った以上の威力で打ち返される。

「隊長、こりゃ全く効果ありやせんぜ」

「捕虜でも人質に使いますか？」

「いやあ、それやるとますますこっちの話に耳貸さなくなりそうな気がする」

「元々聞きゃーしない感じですけどね」

そうこう言っている内にも距離を詰めてくるアルシア。全力のシンハや共鳴状態で同等の力を持ったアユウカスでも止められなかった相手だ、白刃騎兵団の戦士達では総掛かりでも手に負えないだろう。

神技攻撃も殆ど効果がない以上、こちらの懐に飛び込まれば彼女一人に全滅させられ兼ねない。

「俺がなんとか足止めするから、皆は捕虜連れて撤退する準備してくれ」

「了解」

何度目かの多重防壁をぶち破って突っ込んでくるアルシアに対し、ザツと腕を翳して立ちふさがる悠介。漆黒のマントが翻り、”判別不明”と判別される神技の波動が一带を包み込む。

その気配を感じ取ったのか、突撃速度を若干緩めたアルシアが警戒するように大型メイスを正面に翳す。次の瞬間、アルシアの正面に立ちふさがっていた黒尽くめの指揮官らしき男は、大きく後方へ距離を取っていた。

まるで瞬間移動したかのように見えたアルシアは、ふと周囲の違和感に気付く。

「?……これは」

よく見ると黒尽くめの男だけでなく、その後方に見えていた敵部隊や囚われの機動甲冑、砂の防壁まで一緒に距離を開けていた。

「いや、違う」

彼等はその場から動いていない。自分自身が後方に移動して彼等から距離を取ったのだ。何が起きたのかよく分からないまま、再び突撃を敢行するアルシア。

幻術の類か、先程の気配が広がった瞬間に方向を見失わせるような、何らかの力が働いたと考える。

「どんな小細工が分からないけど、罠なら諸共討ち破るまで！」

光を纏い、人外の加速を得たアルシアは波飛沫のように砂を蹴り出して突き進む。再び手を翳す黒尽くめの男。どんな術も見逃さないと、その動きに注視する。

「必殺つ　ふりだしに戻れ！」

「んなっ」

男の妙な掛け声と共に再び先程と同じ位置へ戻されたアルシアは、仕掛けを理解すると同時に驚きと戸惑いに声を上げた。

悠介は足止め策として”シフトムーブ”でアルシアを一定のライ

ンから近づけないよう無限回廊アタックを仕掛けていた。まとも
に戦っても勝ち目が見えないアルシアを相手に、搦め手で時間稼ぎを
するのが精一杯で且つ、最も効果的な対処法。

突撃しても突撃しても『ふりだしに戻れ!』で元の位置に戻され
てしまう。時々方向にも細工するので、ひたすら前へ前への全力疾
走な突撃をやっていると明後日の方向に走らされていたり。何時の
間にか反対方向に走っていたりする。

幾ら”どんな敵をも退けられる戦闘力”を持っていようと、広く
て見通しも良い砂浜で意図的に迷子にさせるような攻撃? には流
石に対処のしようがない。手も足も出ないとはこの事だ。

同じ所をぐるぐると走り回らされて少し息を切らしたアルシアが
切れた。

「ふ、ふざけるな! 真面目に戦え!」

「いやだ! つーかこっちゃん大真面目だつーのっ」

胸を張ってお断りする悠介。そうしてまた元の位置に戻されるア
ルシア。わなわなと大型メイスの柄を握り締めたアルシアは、一連
の流れを思い起こしてこの不可思議な結界を破るヒントを探る。

何度もふりだしに戻される内、結果的に黒尽くめの男に向かって
突撃を繰り返す形になっていたアルシアは、彼が常に自分を注視し
ている事に気付いた。もしかしたら、移動させる対象を”視認”し
ておかなくてはならない術なのかもしれない。

「それなら」

大型メイスを振り上げたアルシアは地面を叩いて大穴をあけつつ

砂塵を吹き上がらせた。僅かな間でも煙幕を作る事で姿を隠し、瞬間移動攻撃を遅らせられる事が出来れば、術者の本体を仕留めるチャンスも出来る筈だと。

アルシアの推測は半分まで当たっており、シフトムーブで相手を移動させるには常に相手の位置を把握しておく必要がある。

ただし、今の悠介は直接目視しなくともカスタマイズ画面にリアルタイムで表示される資材化された砂地の表面を監視していれば、誰かが歩くとそこに足跡が表示されるので正確な位置特定は難しくない。が、何事にも穴はある。

「げ、やばいつ」

砂塵の煙幕で視界を遮り、砂地に大穴を開けたアルシアはその場から直ぐに跳躍したらしく足跡も発見できない。カスタマイズ画面からも見失ってしまった。次々と穴が増える資材化地帯の砂浜。

着地と同時に地面を叩き、砂塵の煙幕を張ってまた跳躍する。アルシアの狙いはこれを繰り返す事で自身の正確な位置を見失わせようとするモノだったのだが、大穴開けと跳躍の組み合わせは視認の妨害よりも効果が高かった。

目測で対象との距離や位置を把握しようとするよりも、カスタマイズ画面に表示される資材化地帯上の痕跡を追う方が楽で確実なのだ。勿論それは対象が資材化地帯上に一人だけの時に限る。

複数の足跡や何かの痕跡が同時に表示されれば、どれが誰やら見分けが付かない。アルシアの策は偶然にもその穴を突いた。

「隊長っ 上です!」

「っ！」

「もらった！」

跳躍してきたアルシアが大型メイスを振り下ろす。咄嗟に防壁を出そうかシフトムーブで回避しようかと行動を選ぶ悠介の頬を、何かがふわりと撫でていく。陽炎のように揺らめく微かに感触を持った黒い風。

次の瞬間、ドンツという空気の震えるような音が響き渡り、悠介の頭上から十数センチの辺りで静止する血濡れの大型メイス。円状に広がる衝撃波が砂煙の波紋を描く。

振り下ろされた大型メイスを受け止めたのは、漆黒の翼を纏った朔耶だった。

「っ、都築さん……？」

絶対絶命の攻撃から護られた悠介と、一撃必殺の攻撃を防がれたアルシアが驚愕に目を見開く。

その二人だけではなく、周囲で戦いを見守っていた闇神隊や衛士隊、白刃騎兵団と回復したシンハやアユカス、汎用戦闘機の搭乗者だった捕虜達も驚きに目を瞠っていた。

まるで時間が止まったかのように静まり返る戦いの場。全員の視線の先では、あの超重量級な大型メイスの強烈な一撃を片手で、それも素手で受け止めている漆黒の翼を広げた少女の姿。

「な……っ」

「ねえ、アルシアちゃんさあ。ここはちょっと冷静になって話し合

「つてみない？」

朔耶の語り掛けで我に返ったアルシアは一步飛び退り、油断無くメイスを構えて臨戦態勢を維持すると、情報の整理に思考をフル回転させる。神聖地軍の拠点防衛戦車にも使われる特殊装甲さえ打ち砕く渾身の一撃を、片手で止められた。

ありえない事だと混乱しそうになる意識を集中して纏めたアルシアは、努めて冷静に状況の説明と答えを模索する。

『落ち着いて、冷静に考えるのよアルシア　混沌の使者は勇者に對抗する存在で様々な力を使う……』

最初の男は恐らく混沌の使者ではない普通の戦士、この地の蛮族の中でも強者にあたる者だろう。

さっきの子供に見える混沌の使者は戦闘力に特化した者で、今の黒い男は攪乱の特殊能力に特化した混沌の使者。この少女は防御力に特化した混沌の使者なのではないだろうか。きっとそうに違いない

三年に及ぶ訓練と教育で培った勇者の在り方。不浄大陸に関する知識より結論を導き出したアルシアは落ち着きを取り戻す。

「お前も”混沌の使者”なら、容赦はしない！」

「え？　なにそれ？」

「問答無用！」

朔耶に攻撃を仕掛けるべく突撃を敢行するアルシアが、ザンツと砂を蹴って大型メイスを大きく振り被る。

「いや、問答しよつよ」

状況の緊迫感をまるっと無視した雰囲気言いながら身構える朔耶。そして

「実行」

シフトムーブ発動。アルシアを振り出し地点に強制移動させる悠介。

「くらーっ！」

「あはは……」

砂浜の随分と離れた場所で素振りをしてしまったアルシアが『ふざけんな』と怒っている。後方からフォンケの吹き出し笑いが聞こえるが、とりあえずそれらをスルーした悠介は朔耶に話し掛けた。

「えーと、さっきはありがとう。一応聞いておきますけど、大丈夫なんですか？」

「うん、大丈夫。ここはあたしに任せてみて？」

まだお互いの素性も分からない、名前くらいしか知らない関係なのに、こんな大陸同士の戦いに関わっても大丈夫なのかと気にする悠介に、朔耶は詳しい事情はまた後で話すと言ってこの場を治める役を引き受けると主張した。

悠介としてはアルシアに対する有効な手立ても無い事は無いが、あれだけの反則染みた力を振るわれると現状ではそれこそ相手に瀕死を負わせて止めるようなやり方くらいしか打つ手が思いつかない。明確に殺し合いレベルで敵対している相手に怪我を負わせる事な

ど、なんら躊躇する必要は無い筈なのだが、そこは平和主義者な悠介。なるべく相手も自分も傷つかずに治められるなら、その方がいい。ここは自信有り気な朔耶を信じてみる事にした。

「きいーさあーまあー!」

怒涛の勢いで突っ込んでくる怒り心頭なアルシアを尻目に、朔耶と話せる時間がとれた悠介は後を任せて闇神隊メンバーや衛士隊、白刃騎兵団のいる後方へと下がった。

「いやー、びっくりした」

空を飛んで来た事を除けばどこから見ても一般人だと思っていた”都築朔耶”について、悠介は『人は見掛けによらない』とはよく言ったもんだなど、自分の事を棚に上げながら呟いた。

さり気無く隊長の傍に控えるヴォーマルが、朔耶について現状で判明している情報を伝える。

「エイシャの話じゃ相当な治癒の使い手でもあるらしいですぜ」

「へえ？ そうなのかエイシャ」

「はい、ガゼツタ王の治癒を手伝って頂いたんですが、物凄い治癒力でした」

「アユウカス様の大怪我也傷一つ無い状態まで治してましたよ？」

恐らくは神器の効果を得たゼシャルド氏の治癒力をも凌駕するのではないか。エイシャやスンにそこまで言わしめるのかと、治癒

を受けたシンハとアユカスに視線を向けてみれば、二人とも過言ではないと頷く。

「そっぴやアユカスさん大怪我したって？」

「さっき弾き飛ばされた時にの、硬いモノにぶつかってちよつとぐちゃけたのじゃ」

不死の身ゆえ、放って置いても自己回復で元通りにはなったのだが、朔耶の放つ治癒の光は瞬く間に傷を癒したのだそう。悠介はシンハから直してくれと渡された白金の大剣をカスタマイズで修理しながら、朔耶とアルシア、対峙する二人に注目した。

ブオオブオオと風を唸らせ、凡そ超重量武器とは思えない振り回し方をしているアルシアの大型メイス攻撃は、悉く片手で止められる。よく見ると直接素手で受け止めているのではなく、翳した手の表面より少し先辺りで見えない壁にぶつかっているようだ。

「ねえ、なんでアルシアちゃんはカルツイオの人達を攻撃するわけ？」

「それが私の使命だからだ！」

先程から幾らメイスを振るっても全く攻撃の効果を得られない上に、絶えず『話し合おうよ』と箆絡の言葉を搔けて来る黒い翼を持つ少女に、アルシアが焦りと苛立ちを募らせている様子が見取れる。

メイスが変則的な軌道を描き始めたのは攻撃が雑になっているからだろうか。

「でやあああ！」

左下から右上に向かって掬い上げるような攻撃、と見せ掛けて朔耶の正面を素通りした大型メイスは翻って垂直に振り下ろされ、地面を叩いて大穴をあけつつ砂柱を上げて砂塵の煙幕を発生させた。

朔耶の視界を遮って背後に回り込もうとするが、突如発生した突風があつという間に砂煙を吹き飛ばす。それでも一瞬の内に後ろを取ったアルシアは、朔耶の無防備な背中目掛けて大型メイスを振るった。

「！っ そんな」

一撃必殺の威力を持ったメイスは朔耶の身体に届く事なく、その十数センチ手前で見えない壁に阻まれて止まった。くるりと振り返る朔耶に、アルシアは思わず後退る。

困ったような苦笑を見せる朔耶。現在は共闘関係にある悠介達から見れば、その笑みは落ち着きと気遣いの籠もった優しい笑みだったのだが、直接戦っているアルシアには違った印象を与えたようだ。

「やあああああ！」

激昂するような咆哮と共に強い光のオーラを纏い、大型メイスの乱れ打ちという常人には絶対に真似の出来ない攻撃を繰り出すアルシア。攻撃が弾かれる度に響いていた『ドンツドンツドンツ』という空気の震える音が、『ドドドド』という有り得ない衝撃音に変わる。

超重量級の武器を素早く振るい続ける。単純な動作の技ながら、振り上げ、振り下ろしの切り返しにはその重量と慣性による強い負

荷が掛かるので、恐らく機動甲冑でもここまで激しい連続攻撃は再現出来ないだろう。関節や駆動部分が反動に耐えられない。

大型メイスの攻撃範囲内は粉碎機の如く、まさに致死領域。迂闊に近づけば人間の身体などあっというまにミンチにされてしまう。しかし、その標的とされている漆黒の翼を持つ少女はそんな猛攻に髪の毛一本揺らされる事無く一步、前へと踏み込んだ。

ドンツという衝撃音を残して乱打が止まる。朔耶に踏み込まれた事で連続攻撃の繋ぎが途切れたのだ。さらに

「なっ
」

一体何をどうやったのか、朔耶がスツと大型メイスを撫でるような動作をしたかと思うと、ピシツという音がして大型メイスの表面に無数の亀裂が走り、やがてボロボロと砕けてしまった。アルシアの握っていた柄の部分まで含めて完全に。

「武器が砕けたぞ」

「ふーむ。あの娘、何から何までよく分かんのだ」

強力な治癒の使い手かと思えば、どんな攻撃も通さない強固な護りの力を見せ、かと思えば丈夫さでは類を見ないであろう鉄の塊のような鈍器を一撫でで破壊する。オマケに空まで飛ぶ。

3000年の時を生きて来たアユウカスも、あんな存在は見た事がないと唸る。

「隊長と波動が似てやすが……似た力を持つ者なんですかね？」
「どうだろうなあ」

武器破壊それ自体はやろうと思えば悠介にも可能だが、アルシアの振り回すメイスに触れる事がまず難しい。

得物が砕け散って空になった自分の両手を呆然と見下ろすアルシアは、ハッと我に返ったように朔耶を見上げると、明らかにそれと分かる恐怖の表情を浮かべた。

「う、うわああああ」

なんとそのまま殴りに掛かった。岩でも砕ける程の強力なパンチを放つアルシアだったが、それ以上の威力を誇る大型メイスの猛攻にもビクともしなかった朔耶の見えない壁を破れる筈もなく、やがてその身を包んでいた勇者のオーラも時間切れか光が失われる。

朔耶が何か語り掛けているようだが、アルシアはひたすら見えな
い壁を叩き続けていた。

「わあああああつー！」

「んー、しょうがない。いなずま」

ほぼ錯乱状態に陥っているようにも見えるアルシアに対し、半身に構えた朔耶の右手が青白く発光を始める。そしてそのままアルシアに向かって踏み込んで行った朔耶は、光の軌跡を引きながら右腕を振るった。

「目覚ましびんたーっ」

スパーンと小気味良い音が響き、尻餅をつくアルシア。辺りに静寂が訪れ、吹き抜けていく風が小さな砂煙を運び去る。

自分の左頬に手をあて、ぽかんと朔耶を見上げていたアルシアがもぞもぞと起き上がると、握った拳を構えて臨戦態勢を取った。が、どこか虚ろで全く覇気を感じられない。その時、後方から何者かの声が上がった。

「もういいアルシア！ 無茶せず戻れ！」

「俺達は大丈夫だ！ 不当な扱いは受けていない！」

捕虜となっている汎用戦闘機の搭乗者が、衛士隊の列から拘束されている身体を乗り出し叫んでいる。「知り合いなのか」と、アルシアの反応している様子を見て捕虜の搭乗員達に視線を向けた悠介は、咄嗟にカスタマイズ操作をおこな行って実行。

彼らを黙らせようと槍を振り上げていた衛士隊の一人をプチ格子状防壁で囲んで止めた。少し”苛っ”としながら注意する悠介。

「あのさ、本人らが不当な扱いを受けて無いからって説得してる矢先にどついでどうするよ？」

確かに避難所防空壕から出て来たのは捕虜の勝手な行動ではあるけれど、絶対に喋るなどか動くな等の処置をとっていた訳でもなし

「臨機応変にいこうぜ」

「は、も、申し訳ありませんっ」

平謝りな衛士隊員。その様子を見た朔耶が『いいねえ』と悠介の判断に感心している。

一連のやり取りで表情に少し生気の戻ったアルシアは、後方に大きく跳躍して距離を取ると、上空で旋回していた高速揚陸艇に回収合図を送って撤退の決断を下した。

現在の戦力ではカナン達を救い出す事が出来ない。黒尽くめの男と黒い翼の少女の護りは堅過ぎる。

低空飛行で侵入してきた高速揚陸艇に飛び乗ったアルシアは、もう一度カナン達を視界に収め、カルツイオ勢に視線を向けてからポルヴァーティア大陸へと撤退して行ったのだった。

迎撃準備と反則技

ポルヴァーティア大聖堂、聖務総監の司令室。遠見鏡にてアルシアの戦いを観察していた聖務総監と特聖官、それに大神官は、カルツイオ側の勇者について困惑していた。

「なんだあれは……」

「向こうの勇者は三人もいるのか？」

「いや、それよりも最後の黒い翼を持つ者、あれは一体どういう力なのだ」

個人的な戦闘力を持つタイプの勇者だとは思うが、何を望めばあんな力を得られるのか。最初は一定範囲内の物質に干渉する力を持つタイプかと思われた黒マントの勇者も、敵味方訪わず対象を転移させるような力を見せるなど、よく分からない。

大地の神から与えられる力は原則一つだけの筈。それなのに、あの二人の勇者は明らかに複数種類の力を宿しているように見える。何れにせよ、判断はアルシアの帰還を待つて詳しい話を聞いてからだ。

「進軍の仕方について見直しを図らなければならぬ」

「信徒達への広報はどうしますか？」

「まだ詳しい内容は伏せておけ。」勇者アルシアが三人もの混沌の使者と戦って生還した”とでも流しておけば良い」

暫くは様子見になると指示を出した大神官は、空軍基地施設へと下りて行った。

アルシアが撤退して行った後、翼を納めた朔耶は、悠介達に向き直ると改めて挨拶を向ける。

「えーと、改めまして、都築朔耶です。よろしくね」

「あ、こちらこそ、田神悠介をよろしく」

どこの選挙候補者のような自己紹介を返す悠介に楽しそうな表情を浮かべた朔耶は、今日ここにやって来た目的、悠介達に接触した理由を掻い摘んで説明してくれた。

「詳細は長いから省くけど」

とある事情から精霊と重なる事により、地球のある元世界と異世界とを自由に行き来できる力を得たのだという。そして今、地球世界と異世界では、この悠介達がいる狭間世界での出来事に影響を受けているのだとか。

二つの大地が融合する事によって発生する大きな力の変動。その余波は異世界で魔力の流れを乱れさせ、地球世界でも超常現象や異常気象を引き起こしているらしい。

今後の影響を踏まえてこの狭間世界で何が起きているのかを確かめに来た所、双方の戦闘に出くわしたのだ。

「なるほど、そんな事になってたんですか……」

色々と荒唐無稽な内容ではあるものの、この世界では悠介自身がその筆頭ともいえる立場でもあるので、朔耶の説明はすんなり理解し、受け入れる事が出来た。

悠介も自身の出自や今この世界（ここ）に居る理由など事情を話してお互いの情報を交換する。

ちなみに、闇神隊メンバーを始めシンハやアユウカス、ちゃっかり輪に入っているヒヴォデルも含めて、二人の会話の内容には半分もついて行けなかったようだ。

「いや、しかし、そっかあ……あれから一年近く経つのに、未だにあそこでゲームしてたか俺」

今なにやってるんだろう？ と、元世界の自分や家族の事を想う悠介。この世界で目覚めた当初から心の奥底で感じていた納得感の正体が分かった気がした。それはそれで、もう元の世界に帰る理由も場所も無くなったのかと思うと、少々寂しい気もする。

「悠介君の家族とか、向こうの悠介君とか、今度こっちに来る時にもそれとなく調べて来よっか？」

「え、いいの？ てか、そんなに簡単に世界渡れるんだ？」

「うん、もう二年近くあっちとこっちを行き来する生活してるからね」

そうなるまでの間に過ごした異世界での生活は、周りに良い人も多く色々と恵まれた環境に居られたものの、身寄りも無い余所の世

界に一人迷い込んだ不安や孤独の寂しさは常に感じていたという。

悠介も多少だが同じ経験があった。これだけ強大な力を持っていても、内面の孤独や寂しさは如何ともしがたいモノなのだろう。と、そこまで考えてピンと来た。自分や朔耶と似た境遇の人間が、もう一人居たと。更に言うなれば、自分とほぼ同じ立場の人間。

「あー、もしかしてそれであの娘アルシアの事を？」

よくぞ察してくれましたといった雰囲気で、こくりと頷く朔耶。先程の戦闘中、朔耶はアルシアに殆ど何もせず圧倒しながら、ずっと彼女に語り掛けていたし、何処か気遣っている様子が窺えた。同じ女の子同士、アルシアの境遇に何か感じるモノがあったのかもしれない。なるほどそういう事かと、悠介は納得したのだった。

とりあえず、悠介達はこれからサンクアディエツトに帰還する。こちらの世界で起きている事など、ある程度の事情を把握した朔耶も今日はこれで元の世界に還るそうだ。

撤収するにあたって悠介は陣地の引き払いに取り掛かり、あちこち隆起していたり屋根付きの柱や壁が建っている一帯を元の砂地に戻す作業を進めて行った。作業と言ってもカスタマイズメニューからちよいちよいと弄るだけなので、ものの数分もあれば終わる。

他の衛士隊員達は機動甲冑から搭乗員の身柄確保に動いていた。そんな撤収作業が続く中、ススツと悠介の傍に寄ってきたイフヨカがこっそり耳打ちする。

「あの、隊長……あの、人、また”幻惑の風”使ってます」
「ん？」

誰が？ とは問わず、誰に？ と振り返ると、例の如く単独行動中のレイフォルドが、作業を観察している朔耶に声を掛けていた。掴み所の無い何時もの微笑を浮かべ、朔耶に助力を求める交渉を持ち掛ける。

「いかがでしょう？ 今後是非、貴女の力を借りられれば、カルツイオの民として実に心強いのですが」

「ん、一応、忠告しておくけどー」

バシュッと、噴出するように漆黒の翼を展開した朔耶から風が巻き起こる。一体何事かと、作業を中断した皆がそちらに注目を向けた。

「あたしにそういうの通用しないよ？」

”幻惑の風”を吹き飛ばした朔耶がじろりと睨みを利かせる。その瞬間、首周りに悪寒が走り、正体不明の危険を感じてゾクリとするレイフォルド。一瞬微笑の維持を忘れる程の危機感に、これは手を出してはいけない相手だと認識した。

「自重しろ、森の人」

「森の民だってば。でも、今のは謝罪するよ」

『心証悪くしてどうすんだ』と、悠介にジト目で促されて頭を下げるレイフォルド。朔耶は然程気にしていない様子でヒラヒラと手を振り、『それじゃあまたね』と言い残して唐突に消えた。元の世界に還ったらしい。

「これで来なくなったらレイフォルドのせいな」

「あはは、参ったなあ」

さしものレイフォルドも今回の好奇心による試みは拙かったと苦笑を返すばかり。だがその内心では、国の支配下という枠に置く事の出来ない人外の力を持つ存在が、これ以上増える事に危惧する気持ちがあつた。

確実にこの先もずっと味方であるという確証が無い限り、得体の知れない存在はあまり歓迎できないのが本音の所といえる。

「ま、とりあえず、撤収〜！」

「引き揚げだ！」

闇神隊長の何時もの気の抜ける号令と、ガゼッタの王の大雑把な号令により、フォンクランクとガゼッタのカルツイオ連合軍はそれぞれの母国へと撤収して行ったのだった。

一方、ポルヴァーティア神聖空軍基地ではアルシアを乗せた高速揚陸艇が無事に帰還。大神官に迎えられたアルシアは消沈した様子で捕虜救出の失敗を詫びた。

「申し訳ありません……」

「君は勇者の使命を立派に果たしているよ。何を詫びる事があるのか」

しょんぼり俯いているアルシアに優しく諭す大神官。君の活躍で向こうに混沌の使者が三人もいる事が判明した。何も知らず淨伏に神聖軍を出していれば、大変な被害を被る所だったと、アルシアの働きを褒める。

ようやく顔をあげる事が出来たアルシアを疲れただろうと労い、今日はもう休むようにと促す。

「新しい武器も直ぐに用意させよう、今はゆっくりお休みなさい」
「はい」

ぺこりと頭を下げて大聖堂の自室へと帰って行くアルシアを見送った大神官は、カルツイオ攻略に際して相手側の勇者にどう対処していくかを考えていた。

『なんにせよ、役には立った』

アルシアと同タイプの勇者にはアルシアを当てておけばいい。物質に干渉し、対象を転移させる男には兵器を近づけさせず遠方からの攻撃を徹底させる。黒い翼を持つ者は攻撃力が未知数だが、防御力特化型ならそれほど脅威ではない。

『とにかく、三者を連携させないよう個別に攻略する方針で進めるか』

ポルヴァーティア側の認識は今回の戦いで見えた表面の部分しか把握できておらず、アユウカス、悠介、朔耶らそれぞれの実態からは程遠い所にあった。

しかしそれも無理からぬ事、直接戦ったアルシアでさえも件の三

人についてはその在り方を理解しきれていないのだ。

四日後に出撃を予定している第一陣の編成に見直しを検討しつつ、大神官も大聖堂へと引き上げて行くのだった。

サンクアディエツト、ヴォルアンス宮殿上層階の一室にて。

「うおーっ わらわも会いたかったぞー！」

「また来るって言ってたぞ」

今日も元気なヴォレット姫は、カルツイオに来訪した悠介と同郷の人、“都築朔耶”の話聞いて悔しそうに叫ぶ。

「ポルヴァーティア大陸との融合問題で地下探索どころではなくなつてしまったヴォレットはしかし、明確に敵対を示しているとはいえ、垂直に繋がった大地や二つの太陽など珍しいモノが見られて概ね機嫌は悪くなかった。」

「しかし空を飛ぶ乗り物とは驚きじゃな〜。 ……のう、ユース

ケ」

「まだダメ」

「ぶうー」

空飛ぶ機械に乗りたいと言う要望を却下されて頬を膨らませるヴォレット。汎用戦闘機と機動甲冑はカスタマイズ能力で構造のコピ

ーを取ったあと、材料の状態までバラバラにして持ち帰っている。
現在は悠介がカスタマイズメニュー内であれこれと解析を進めており、ポルヴァーティア軍の空からの攻撃に対抗する防衛兵器開発に利用されていた。

「地上部隊は戦闘機についでた機銃と神技で対処するとして、街の対空防御さえどうにか出来れば暫く持つだろう」

「暫くか……それだけでは押し返せんのか？」

「いやあく無理だと思っぞ？ 多分、斥候が持って来たのって最低の装備だろうし」

遠距離からの迫撃砲や高高度爆撃のような戦術で来られればどうしようもないと、悠介は肩を竦めて見せる。無限の防壁と工夫でどうにか護りは固められると思うので、余力のある内に相手と交渉を行えるのが望ましい。

「交渉のう、父様もその方向で動くつもりのようにやが、今回はやはり一戦も交えずという訳にもいかんじゃるな」

小競り合いではなく、一度本格的にぶつかってこちらの力を相手側指導者に見せ付けてやらなくては、交渉の席に引つ張り出す事も難しいだろうと腕組みをするヴォレットに、悠介も同意する。

「ちらつと聞いたけど、向こうは一神教で纏まった信仰集団みたいだから、上が話す気にならないと難しいだろうなあ」

「捕虜達の話か。そういえば今日はクレイヴォルも尋問に出向いておるようじゃな」

北の砂浜海岸から帰還する途中、捕虜達からポルヴァーティアに

ついで聞いた凡その内容。大地神ポルヴァを信仰し、神の意志を遂行する執聖機関を中心に統治された、国民総信徒な神聖帝国。

捕虜達の中でも比較的階級の高い人物で協力的な者から一人づつ尋問が行われ、ポルヴァーティアの目的や、なぜ攻撃してくるのかなどの情報が聞き出された。

「ただの侵略だよ。もつとも、一等民の信徒達は殆どが”神の使命”だと思ってるだろうけどね」

不浄の大地とそこに棲む蛮族を浄伏する事が、世界を崩壊から救う神より与えられし使命。ポルヴァーティアの民は皆、幼い頃から受ける信仰教育によって思想や価値観を統一されている。

大陸融合によって浄伏された不浄大陸の蛮族は一部が上級市民である二等市民、三等市民として迎えられ、信仰教育を施されて信徒の一員となるが、大多数は下級市民として奉仕と言う名の労働を課せられているのだそうだ。

カナン偵察部隊長とその部下達はポルヴァーティアの信仰教育に染まりきっていない事もあってか、その辺りの事情について多くの詳しい情報を聞くことが出来た。

ポルヴァーティア人と血縁を持つなどして上級市民入りをした二等市民であるカナン達は、やはり生粋のポルヴァーティア人からは下民の分際と見下されている事もあって、ポルヴァーティアの信仰どっぶりにはなり難いらしい。

『他の連中はこうはいかない』と忠告もくれる。ポルヴァーティアの人間は皆、執聖機関の信仰教育で一種洗脳されているような状態なので、不浄大陸の人間の話など聞きはしない。懐柔する場合も相当掛かるであろう、と。

専属警護兼教育係の仕事に戻って来たクレイヴォルから尋問で得た捕虜達の証言を聞くヴォレットは、四大神信仰が形骸化して自由な触れ合いが増えていた最近のカルツイオを例に、一つの教義に囚われた社会の窮屈さを想う。

「信仰とは、まこと便利で厄介な思考を束縛する鎖だな」

「縛られてる方は幸せ気分らしいからな」

悠介の冗談とも真理ともつかない相槌に感じ入りながら、お稽古事の部屋へと連行されていくヴォレットであった。

朝からカスタマイズメニュー内で防衛兵器開発を進めている悠介。汎用戦闘機の光撃連弓と機動甲冑の光撃弓を解析し、魔力を発生させる装置部分、凝縮させる装置部分、射出する装置部分など個別に強化、改造を施したモノを組み合わせて行く。

「やほー。こんにちは、悠介くん」

「……レイフォルド以上に唐突っすね」

悠介はカスタマイズメニュー越しにそんな感想を述べる。音も気配も予兆も無く、いきなり部屋の中に現れた朔耶はひらひらっと手を振ると、荷物で膨れた手提げ袋を持ち上げて見せた。

「はいこれ、向こうの悠介君から」

「あ、ども」

元の世界にいる自分からの荷物を受け取った悠介は、朔耶にララの絞り実ジュースなどご馳走して労う。見覚えのある懐かしい手提げ袋の中には家族写真と自分の筆跡で書かれた近況ノート、手紙などが入っていた。

「なんかね、最近になってこっちの悠介君の体験とか夢で見るみたいだよ？」

「ありやま。それも例の双星　大陸融合の影響とか？」

「そうみたい」

自分の本体、という事になるのであろう元世界の自分からの手紙にちらりと目を通すと『生殺しは勘弁してくれ』とか書いてある。

直ぐに最近添い寝しているスンの事だと分かり、思わず照れる。が、今は朔耶と向かい合っている手前、表情には出さない。

内心でそんな自分との戦いなど繰り広げていた悠介に、朔耶は耳に入れておきたい事があると言って語り始めた。

「実は、アルシアちゃんの事なんだけど　」

悠介と同じく、一つの大地を司る精霊に複製召喚された存在である。アルシアの事情について、朔耶はアルシアの置かれている立場や、彼女がポルヴァーティアの勇者として戦う事を決意するに至った理由など経緯を説明する。

ある日突然、見知らぬ世界の見知らぬ街外れに文字通り身一つで放り出されたアルシアは、自分を保護してくれたポルヴァーティアの統治機構である執聖機関に促されるがまま、彼等が神と定める大地ポルヴァを崇め、その使命を遂行するという名目の元に勇者の役割を担っているのだと。

この世界に自分が存在している事について、心の奥で納得しているような気持ちがあった事も、アルシアが執聖機関の言う事を信じて受け入れる理由の一つになった。

ポルヴァーティアの勇者として生きて行く上で、他に拠り所となるモノを持たないアルシアは、信仰教育で教え込まれた教義に縋る他なかったのだ。

ポルヴァーティアの執聖機関はカルツイオで言う所の旧ノスセントス神議会のような存在だが、向こうは大陸全土を掌握して信仰と教義で支配しており、召喚される”勇者”も悉く管理しているらしい。

「あーなるほどなあ……って　本人の所まで行ってきたんですか！？」

「うん。彼女の部屋に出たから騒ぎにもならなかったし、落ち着いて話せたよ？」

「なにその出鱈目な能力……」

割と簡単に世界を行き来しているとは聞いていたが、昨日の今日で相手大陸の中核施設に潜り込んで来たという朔耶のフリーダムな神出鬼没ぶりに言葉もない悠介であった。

がしかし、中々興味深い話を聞けたと、朝方クレイヴオルから聞いた捕虜達の証言と照らし合わせて納得する。

その捕虜達について、朔耶に『アルシアちゃんから頼まれている』と様子を聞かれた悠介は、至って元気そうである事を伝えた。

特にカナンというアルシアが気に掛けているらしい偵察部隊長以下、偵察部隊の面々は協力的なので、尋問もスムーズに行われているようだ。

融合された元他大陸の民族という立場にあり、浄伏された不浄大陸の蛮族だったとして純粹なポルヴァーティア人から蔑まれる事情を持つ彼らは、あまり信仰教育の教義にも傾倒していないという話

「アルシアの例を聞いた限り、これでハッキリしたって感じかな」
「そっか、だからアルシアちゃんもカナンさんって人達と親しくなったのかもねえ」

なるほどね」と納得している朔耶。信仰で統べられたポルヴァーティアの内部も決して一枚岩ではない事が証明されたのは、悠介達にとっても戦略を考える上で有益な情報になる。

「ところで、向こうにも自由にいけるんなら、都築さんが向こうの指導者を直接どうこうするってのは」

「うわっ　なんて邪悪な事を　ってのは冗談だけど、あっちの指導者の事はまだよく分からないから、それも調べてみないとね」

迷惑な覇権主義者かと思っていたら民想いの寂しがり屋な傀儡皇帝だったという前例を挙げて慎重に行動する事を告げる朔耶に、『今まで一体どんな体験をして来たのだろう?』と興味を懐く悠介。冒険譚などの話を聞くのが好きなヴォレット辺りが会えば喜びそうだ。

「さて、それじゃあそろそろ御暇するね。ジュースありがとう」「いえいえ、お疲れさんでした」

席を立った朔耶は少し離れて部屋の真ん中に立つと、ひらりと手を振って現れた時と同じく唐突に消えた。朔耶が消えるのとはほぼ同じタイミングで部屋の扉が開かれ、ヴォレットが駆け込んで来る。

「ユースケは居るかー!」「惜しい」

「? なにがじゃ?」

部屋へ入るなり向けられた謎の呟きに、小首を傾げるヴォレットであった。

朔耶と入れ違いにやって来たヴォレットは、防衛兵器の生産工場に屋内訓練場の使用が決まった事を告げる。ヴォレットが直々に知らせに来たのは、もう一つ重要な知らせを届けると同時に自分もそこに混ざる為だ。実は伝令を追い抜いてきた。

「それと、ガゼツタから使者が来ているそうじゃ」
「ガゼツタから？」

開かれた扉の前で仕事を横取りされた伝令が情けない顔を向けながら、『ガゼツタの里巫女一行』を名乗る使者が、闇神隊長に面会を求めているとの趣旨を伝える。

”里巫女アユカス”の名はポルヴァーティアの接近を知らせるお告げによってカルツイオ中に知れ渡っていた。

尤も、アユカスの容姿や風貌、詳しい経歴など正確な姿を知る者は一般的には少なく、里巫女に纏わる噂の数だけ想像される姿があるような状態。まだアユカスと面識の無いヴォレットは、是非とも直に会っておきたかったのだ。

とりあえず、来賓用の客間もある宮殿上層階に招いてあるという事なので、ヴォレットと共に下りて来た悠介はアユカス一行の待つ客間に入った途端すつ転びそうになった。

「わらわがヴォレットじゃ」
「ワシがアユカスじゃ」

何故かヴォレットとお揃いのツータールにしているアユカス。

「何やってんすか、アユカスさん……」
「なに、ほんの遊び心じゃて」

カツカツと笑うアユカスに、悠介は肩を竦めてみせる。『親睦を深める戯れはさておき』と本題に入るアユカス。纏う雰囲気気がピリツとしたモノに変わり、それを感じ取ったヴォレットも御転婆姫モードを止めて王族の表情かおを纏った。

「ワシが来たのは外でも無い、対ポルヴァーティア戦に向けた防衛兵器開発の支援じゃ」

ポルヴァーティアの汎用戦闘機や機動甲冑を相手に、カルツイオの通常兵器や神技だけでは歯が立たないであろう事は、先日の小規模な一戦でも明らかとなっている。

その為、迎撃には悠介が複製したポルヴァーティア軍の武器を利用する事になるのだが、アユウカスが感じ取れた限り、ポルヴァーティアからの本格的な侵攻はここ三、四日以内にあると予測されていた。

「そんなに早く来ますか」

「向こうは最初からそのつもりで準備しておったのだからな」

先の戦闘での思わぬ結果やイレギュラーの出現により、戦略の見直しなどで多少の遅延は出ていると思われるが、あまり間を置く事はないだろうと見ている。

恐らくは地上部隊よりも先に空からの大規模な攻撃があると読むアユウカスに、悠介も聞きかじりの現代戦における戦略・戦術から考えればそうなるだろうと頷く。

現在、カスタマイズメニューの中で色々と弄っている”光撃連弓”は対空兵器として、また”機動甲冑”に対しても有効な武器として使えるよう改造を施しているモノだ。

最初に一つだけ完璧なモノを組み上げさえ出来れば、あとは寸分たがわぬ同じものを複製出来る。

「じゃが、お主の能力は無限に使えても、必要な資材や労働力の確保には限界があるじゃろ？」

「それが問題なんですよね」

大量の兵器を複製するには相応の材料を集めなくてはならず、また複製された兵器を各主要な街に配備するにも相当な輸送力が必要とされるが、現在使用可能な動力車や荷馬車を軍民間問わず総動員しても、一日や二日で運べる総量は高が知れている。

「そこでワシ等の出番という訳じゃ」

悠介の近くに居ることによって邪神の力と共鳴して”カスタマイズ・クリート能力”を扱えるアユウカスが協力する事により、兵器の複製と材料となる資材、複製された兵器などの運搬をスムーズに行えるようにするのだという。

「複製は分かりますけど、資材と兵器の輸送はガゼッタの兵力使っても焼け石に水な気が……」

「ん？ あまり足しにならないという意味か？ なあに問題ない、輸送の大部分はほぼワシが一人でやる事になるがの」

「？ それってどういう」

示された言葉の意味が分からず首を傾げる悠介に、三千年仕込の笑みを向けたアユウカスは『少し以前から進めていたある構想』について教えてくれた。

「反則を使うのじゃよ。お主とワシとでな」

ポルヴァーティア大陸、カーストパレスの大聖堂を囲むように並ぶ軍事施設群。その一角にある機動甲冑の特別訓練場にて、新しく支給された大型メイスの具合を確かめていたアルシアは、ふと天窓から見えるカルツイオの大地に視線を向けた。

まだ土地の殆どが未開拓で、森が広がる緑の多い景色に故郷の地を思い出す。

先日の夜、突如部屋に現れた朔耶は、これから本格的になるであろうポルヴァーティアとカルツイオとの戦いの中で、ここぞと言う時には協力して欲しいと持ち掛けてきた。

世界を自由に行き来しているという彼女はカルツイオ側に味方をしているようなので、協力要請の受け入れはポルヴァーティアへの裏切りになる。しかし

『自分を都合よく利用している人達の手から飛び出す事が裏切りっていうなら、そうかもね?』

あそこまで明け透けに事実を踏まえた言い方をされると、拒否する事は自己否定にも繋がる気がして受け入れてしまった。

心の奥底で燻っている感情。朔耶と話している間は”ポルヴァーティアの勇者”として長く被ってきた偽りの自分から、久方ぶりに僅かでも本当の自分で居られた気がする。

まだその本音とする所を表に出す事はできないが、今後の展開と戦いの結果次第では、冷たく閉塞感に満ちたこのポルヴァーティアでの生活にも何か新しい変化が起きるかもしれない。

『でも……サクヤの目的は何だろうか?』

何が狙いで、誰の思惑で動いているのか。あれ程の不可解な力を持ち、世界そのものを自由に行き来するなど、とても個人だけで有している力だとは思えない。朔耶も背後に大きな組織なりを抱えている筈だ。アルシアはそんな推測を立てていた。

ポルヴァーティアとカルツイオの戦いに介入しようとしている第三勢力。朔耶が属する異世界の組織　もしくは異世界の国家か。

実は特殊な在り方をしている朔耶の極めて個人的な力と理由で訪問しているとは、知る由もないアルシアであった。

ポルヴァーティアがカルツイオに接陸してから三日目。ヴォルアンス宮殿の室内訓練場に設けられた防衛兵器の生産工場では、大量の特殊な迎撃・防衛用の武器が量産されていた。

ガゼッタとトレントリエッタの鉱山にある採掘場から掘り出された鉱石が土技職人達の手によってその場で鉄塊などに精製され、一定量ごとにサンクアディエットへと送られる。

それらの資材を使って複製量産された”対空光撃連弓・改”が各国の首都に送られると、そこから主要な街へと運ばれて行くのだ。

「ユースケや、そろそろ次の資材を移動させるが、トレントリエッタに運ぶ分はできとるかえ？」

「こっちは上がってますよ、あとは予備を幾つか組むだけですな」

武器の製作は闇神隊長がカスタマイズ能力を使ってほぼ一人で組み上げ、複製量産に必要な資材と完成した”対空光撃連弓・改”の輸送は里巫女アユウカスが同じくカスタマイズ能力を使って迅速に進めている。

昨日、ガゼツタからの使者として訪れた里巫女一行より共同作業の提案を持ちかけられた悠介は、アユウカス達に連れられてサンクアディエットの街外れ、ブルガーデンとの国境付近まで出向いた所で”ソレ”を見せられた。地面に半分埋められた角石。

遙か地平線の彼方まで続くその角石は、アユウカスの言った”反則”の要となる単純で且つ壮大な仕掛け。

『港街建設の頃から構想しておった。お主の”しいふうどぶーむ”をえるよう、整備しておいたのじゃ』

『シフトムーブです』

確かに最近ルフク村から例の揚げ物が広がって魚料理が盛んだけど、等とツツコミながらカスタマイズメニューを弄る悠介は、一面に収まりきらない国境線のようなマップアイテムに、物理耐性やら神技耐性の強化を施して実行した。

”シフトムーブ網”

アユウカスの言う”反則”とは、以前ブルガーデンの内戦に干渉したパウラの長城前での戦いで、悠介がシンハに言い放った”本物の反則”を指している。

一つのアイテムとして繋がってさえいれば、規模に制約も無くその物体の端から端まで干渉する事が出来るカスタマイズ能力の仕様

を利用し、カルツイオの主要国や重要な地域を一本の角石で繋ぐ事で、あらゆる荷物を瞬時に運ぶ事が出来る仕組みの構築。

実は悠介もこれと同じモノを考えた事がある。ルフク村とサンクアデイエツトを石畳で繋ぐ構想。皆や北部の海岸まで瞬時に移動できる方法として検討していたが、時間も費用もそれなりに掛かる為、個人で進める事は自重していたのだ。

ガゼツタの兵達が地道に角石を繋いで作った、全長凡そ2300キロにも及ぶカスタマイズ・クリエート専用の道。一度マップアイテムとして全体を掌握してしまえば、後から材料を継ぎ足す事で立派な石畳の街道にする事も出来る。

この”道”を使い、ガゼツタとトレントリエツタの採掘場で精製された資材はアユウカスの”シフトムーブ”によって一瞬の内にサンクアデイエツトの生産工場へと運ばれる。

この資材を使って悠介が”対空光撃連弓・改”を組み上げ、複製量産された武器はサンクアデイエツトに配備される分を衛士隊が街中に運び、ガゼツタやトレントリエツタの主要な街にはアユウカスが”シフトムーブ”で運ぶというサイクル。

物だけでなく人員も運ぶことが出来るので、採掘作業の効率を落とさず常に最高の状態でそれぞれの仕事が進められていた。

「うーむ……まさに本物の反則じゃなあ〜」

工場内で試作小型光撃連弓の試し撃ちをしてみたり、まだ基礎部分しか出来ていない構想途中らしい浮遊砲台に入ってみたりして遊んでいたヴォレットが、次々に運ばれてくる資材の塊や、次々に各地へと運ばれていく”対空光撃連弓・改”の流れ作業を見て唸る。

作業の中心となつてゐる悠介とアユカスは殆どその場で椅子に腰掛けたまま、空中に手を翳して指でちよいちよいとやる何時もの動作を続けており、その周りで衛士たちが出来上がった武器を街中へ運び出したり、資材とは別に運ばれてくる小物を選び分けたりしていた。

「すまぬのうフォンクランクの姫や。もう少し落ち着けば昔話の一つもしてやれるのじゃが、思いのほか忙しくてのう」

「かまわん。カルツイオの地に生きる全ての民に関わる大事じゃからな。ユースケの支援をしっかりと頼む」

「……なんか声も口調も似てるから二人が同時に喋ると区別付かなくなるな」

「わらわがヴォレットじゃ」

「ワシがアユカスじゃ」

ゼンヤールドにも懐なついていた割とお爺ちゃんなつつ子なヴォレットは、中身だけならかなり年季の入つてゐるお婆ちゃんなつなアユカスにも懐なついたようだ。

そろそろお昼を回ろつかという刻。ヴォレットはアユカスと連れ立つて生産工場を後にする。

「わらわ達は食事に行つて来る。ユースケもちゃんと食べるのじゃぞ？」

「さて、では暫し休憩とするか。フォンクランクの宮殿で食べる飯

はどんなモノかのう」

「はいよ、いつてらっしゃい」

二人を送り出した悠介はやれやれと首を回しながら、まだ残っている資材で”対空光撃連弓・改”を一門組み上げ、工場内に並べられた長テーブルの上に置く。

カスタマイズメニューを開き、作りかけの浮遊砲台データを呼び出して次は何処を弄ろうかと考えていると

「あ、いたいた。悠介君、やほー」

ヴォレット達が工場を後にした直後に現れる朔耶。

「なんと狙ったようなタイミング」

「うん？」

「いや、こつちの話」

突然現れた朔耶に衛士たちが驚くも、悠介と親しげに話している姿を見て納得した彼らは武器を運び出す仕事に戻った。

”対空光撃連弓・改”を街の各所に配備する作業は衛士たちが行っている。必要な数を複製生産し終えれば悠介も設置作業に乗り出す予定だ。主に宮殿や展望塔の外壁といった、設置の困難な場所を担当する。

「ずらりと並ぶ大型ボウガンにも似た”対空光撃連弓・改”に興味深そうに観察している朔耶。

「これって武器よね？ あの箱型飛行機とかについてたやつ？」

「そう、その強化改良版」

各パーツごとに分解し、それぞれの部分を弄って再構成した改造品。射程、威力、連射力や耐久性など、元の”光撃連弓”に比べて倍以上の性能に強化してある。

「こういつ兵器って今までカルツイオに無かったモノだから、後々問題が出るかもしれないけどね」

今はポルヴァーティアというカルツイオの民が一つになって当てる必要のある”敵”の存在が、強力な武器の力を全て外に向ける状況を作り出しているが、共通の敵が居なくなった後が問題だ。その辺りの危惧には朔耶も共感を持つらしい。

「でも、カルツイオって結構広いわね。街もあちこちに散らばってるみたいだし、武器の配布とか間に合うの？」

このサンクアディエツトを防衛する為に必要な数を揃えるだけでも、数日掛かってしまうのでは？ という朔耶の疑問に対し、それは問題ないと答える悠介。

「ガゼツタとアユカスさんも協力してくれたお影で材料は十分揃ってるし、運搬もシフトムーブを使うから纏めて運べるし」

カスタマイズ能力を駆使する事で、特定の区間だが荷物を輸送する際に距離も重量も無視出来るうえに、生産作業も時間を大幅に短縮できる。

材料と条件さえ揃っていれば、毎秒二門ほどの速度で複製が可能。一時間もあれば7000門近く複製生産できるのだ。

「なにその出鱈目な能力！」

「いやいやいや」

驚く朔耶に、貴女的能力も大概出鱈目だと突っ込まずにはいられない悠介なのであった。

嵐の前

対ポルヴァーティア軍迎撃用”対空光撃連弓・改”の配備が大急ぎで進められているサンクアディエットの街。

今日も夜明け前から工場に赴き、兵器開発に勤しむ悠介は”対空光撃連弓・改”が予備も含めてある程度の数が増ったので、作り掛けた浮遊砲台に手を付けていた。汎用戦闘機の浮遊装置を組み込んだ空飛ぶ台座。

対空光撃連弓は街の区分けに使われていた防壁や、一般的な建物の屋根などにも台座を取り付けて設置しているが、病院などの施設は攻撃対象にされないよう設置を避けている。

他にも設置できる建物の無い場所があり、そういった空白地帯には上空に浮遊砲台を設ける事で弾幕の隙間を埋めるのだ。外周付近にもぐるりと浮かべられる浮遊砲台。

これは悠介の元居た世界にある対空砲のように砲弾が目標近くで爆発するといったような仕掛けが無いので、命中精度は無視して密集させた砲台からひたすら撃ち続ける高密度対空射撃で対抗しようという試み。

正に『数撃ちや当たる』の戦法だが当たらなくてもいいので、とにかく街の上空には近付けさせないようにしたい。

「よし、こんなもんかな」

浮遊装置とは別個の部品となっていた推進装置がまだ解析中なので汎用戦闘機のように自由に飛びまわるといふ所までは行かないがある程度の移動は可能。

砲手二人と”対空光撃連弓・改”を乗せて安定した浮力を保つ砲台。浮遊砲台を完成させた悠介は、複製量産する為の資材が今日はまだ届いていないので、一旦小休止に入った。

「おう、新しい機械が完成したのか。朝早くから勤勉じゃのう」

「おはよーございます、アユウカスさん」

朝食を済ませたアユウカスが工場にやって来た。彼女の”シフトムーブ”による資材の瞬間輸送という補佐が無くては、複製量産作業は成り立たない。早速資材のシフトムーブ輸送を始めて貰い、浮遊砲台の量産体制に入る悠介。

「これは、サンクアディエットに配備が済めばブルガーデンを優先した方が良くもしれんのう」

「やっぱそうなりますかね」

地形からして攻められ難そうなブルガーデンだが、距離的には”要塞都市パウラ”がポルヴァーティアから最も近い場所にある。

ガゼツタはパトルティアノーストの造りが堅個な要塞そのものなうえにポルヴァーティアからは一番遠く、サンクアディエットが防壁となるので直接脅威が及ぶのはずっと先になりそうだ。深い森に囲まれたトレントリエツタもポルヴァーティアからはかなりの距離がある。

カルツイオの南部と東南部に栄えるこの二国は今の所”対空光撃連弓・改”の配備だけで十分だろう。

出勤して来た衛士隊も作業に加わり、複製生産された浮遊砲台が運び出されて行く。本格的な作業が始まって暫く経った頃には、何時ものようにヴォレットも顔を出した。一応、王女直属の闇神隊が作業を取り仕切る工場の視察という公務も兼ねている。

「おおーっ 浮いておる浮いておる！」

動作チェック中の浮遊砲台に乗って無邪気にはしゃいでいるヴォレットは、工場で作業を進める衛士達の癒しになっていた。悠介もアユウカスも作業中はカスタマイズ画面の操作に没頭しており、特に会話もないので普段ののほほんとした雰囲気はなりを潜める。

判別不明な神技の波動に包まれる工場内にて、有り得ない速度で次々と量産される兵器を迅速に捌いていかなければならず、意外に過酷な作業現場は割と殺伐としているのだ。

浮遊砲台の量産は昼前頃には想定していた数に達したので、悠介は本日の作業をここまでとした。一昨日から量産される兵器のチェックと運び出しに設置作業と、休む間も無く連日働き続けた衛士達を労う。

「みんなご苦労さん、俺の奢りで食堂に美酒とキナ鳥の肉料理を用意して貰ってるから、それ食ってゆっくり休んでくれ」

「うおお、流石ユースケ殿！」

「ありがとう御座います！ ご馳走様です！」

歓声を上げながら工場を後にする衛士達を見送り、悠介は椅子の上で身体を伸ばした。アユウカスもコキコキと首など鳴らして柔軟体操をやっている。

「あくやれやれ、とりあえずこれで一段落ついた」

「運用の方はやはり訓練を兼ねた実戦でやるしかないかのう」

「ですね、向こうから見られてるみたいだし、ぶつつけ本番でいった方が効果も上がると思いますよ」

アルシアから色々と聞き出しているらしい朔耶の話では、ポルヴァーティア側は遠見の道具でカルツイオ全域を監視していて、軍の動きや街の様子などもある程度把握しているとの事だった。

街中に配備した”対空光撃連弓・改”を試し撃ちや訓練で使えば、最初から対応した戦術で来るかもしれない。出来るだけ手の内を明かさず、緒戦の迎撃で相手を怯ませる程度のダメージを与える事で、向こうの指導者を交渉の席に引つ張り出す。

「戦うと損するって思わせられれば勝ちなんだけど……」

「まあ、向こうも熱心な信者を抱えとるなら退くに退けんじやるなあ」

信仰教育による思想を縛っての支配は、教義上の大前提が組織を纏める柱となるので、”不浄大陸の浄伏”を神に与えられた使命として掲げている執聖機関は”不浄大陸に棲まう蛮族”と交渉を行うなど有り得ない。

機関構成員がどの程度の割合で教義の真偽を理解しているかにもよるが、熱心な信徒達にとって”ポルヴァーティア以外の大地は不浄の大地、そこに棲む原住民は悪魔を信仰する墮落の民の子孫”という事になっているのだ。

武力などを背景に権力を行使する普通の独裁体制ならば、組織の頭が右と言えば全て右へ倣うというある種、限定的なれど柔軟な面を持つのだが、信仰を背景にした独裁体制の場合、例えば組織の頭が方針転換を宣言しても、それまで定められていた教義に拘り、上からの通達や組織の方針に従わない信徒達が現れる場合がある。

何せ彼等が心から忠誠を誓い、信仰しているのは、教義で語られる”神”なのだ。その”神”の声を民に届ける役割を担う”指導者”が突然方針転換を告げても、”神”に仕える信徒達は納得出来なければ受け入れない。

そこに付け入ろうとする組織内の野心家、ハナから信仰や教義の内容なぞどうでもよく、組織で昇りつめる為の道具としか見ていない”新しい指導者候補”が加われれば、信徒達の間には派閥が生じて内紛は必至。

「上は分裂、下は反乱を呼び起こして自壊させるのが楽なんじゃがのう」

「泥沼化しそうですね……」

カルツイオを力尽くで屈服させられなければ、その時点でポルヴァーティアの統治機関は立場が危うくなる。

ポルヴァーティアに住む住民は”浄伏”によって国も身分も土地も失い、下級市民として奉仕活動という名の労働を強いられている層が半数以上を占めているのだ。

強力な魔導兵器を駆使する神聖軍と渡り合える”敵軍”の存在は、下級市民層を決起させる切っ掛けにもなり兼ねない。

信徒達には『今こそ信仰を示す試練の時』とでも鼓舞して士気を高めるなど統率を保つ事は出来ても、労働力として取り込んだ元他

大陸の人々は奪われた自分達の大地を取り戻さんと反乱を起こしてカルツイオの援護に動く事も考えられる。

「上手い事やれば、向こうは向こうの統治形態を維持したまま和睦に持つていけなくもないがの」

「それは、例えばどうやって？」

「新しい”事実”を作るのじゃよ」

現ポルヴァーティアの指導者である大神官は信徒達からの信望も厚く、執聖機関がカルツイオ側と和平交渉を持つ程度で彼らの足場が揺らぐ事はないと思われるが、彼らの言つところの”浄伏”がカルツイオに行われないとなれば、後々の辻褃合わせが難しくなつて行くだろう。

ならば、執聖機関が正式に『カルツイオは不浄大陸ではなかった』という”事実”を発表してしまえば良いとアユウカスは言う。

「多少強引じゃがの、教義を一部弄つて”砕かれた大地”とやらの中にも不浄大陸にならなかったモノがあつた事にすれば良い」

「そ、そんな単純なので納得しますかね？」

「するじゃろ。教義の根本さえそのままなら、妄信しておる者でも違和感は覚えんじやろうしな」

神聖軍がカルツイオを武力制圧できなかった言い訳を『同じ神の加護を受けている民だったから”浄伏”出来なかったのだ』とする事で、執聖機関の威厳に傷をつけず、信徒達も納得させられる。

そうして和平が実現すれば、その後はポルヴァーティアの信仰について知らんぷりをしていけば良い。向こうが勝手に『中心の大

地から離れていたのでポルヴァア神を知らないのだろう』などと推測を立ててはカルツイオの立場に理解を示してくれるだろう。

そこまで持つて行く事が出来れば、カルツイオの五族連合とポルヴァアティアの執聖機関は双方の立場を侵害する事無く、一つになった大地の上で平穏に共存していける。

「もつとも、水面下ではちくちくやり合う事にはなるじゃろうけどな」

ポルヴァアティア側は自分達の信仰支配による統治を維持しつつ、労働力である下級市民や魔導技術の流出阻止に躍起になるだろうし、カルツイオ側はポルヴァアティアの神聖軍や執聖機関の力を削ぐべく、下級市民層と接触したり、上級市民からも執聖機関の統治下に比べれば自由に生きられるカルツイオへの亡命希望者を脱国させたりといった工作合戦が予想される。

「ふあ〜」　むつかしー話をしておるのう」

浮遊砲台の台座部分にだらんと寝そべってあくびをしたヴォレットが壁を一蹴り、スイーと工場内を漂いながらごろごろしている。

「猫かお前は」

「にゃーじゃ」

ここ数日、ポルヴァアティア対策であり構ってやれなかった事を思い出した悠介は、退屈そうにしているヴォレットに何か玩具を

作ってやるうかとカスタマイズメニューを開いた。幸い資材も製作ネタも大量に揃っている。

何時もの宙に指を這わせる作業を始めた悠介に、ヴォレットはまた仕事を始めたのかと台座に突っ伏しつつ向かい側の壁をキック。元の位置に戻るつもりだったのだが、ちょうど蹴り出した所に柱があった為、斜めに力が掛かってくるくる回り始めた。

「うおーっ　蹴り損ねた！」

「……なんか、ほつといても一人で遊んでんな」

「ふっふっ　歳相応に無邪気な所は無邪気なまま、聡明で良い娘じやな」

悠介のカスタマイズ画面を覗き込んで何を作ろうとしているのかを察したアユウカスが、『相変わらず主想いじやなあ』などと冷やかす。カスタマイズ画面内で構築されているのは浮遊装置を組み込んだプロペラ推進式の改造ソファー。

浮遊装置を動かす為の魔導装置がどうしても大型になるので、姫君を座らせられる質の良い豪華なソファーのデータを呼び出し、サイズを合わせて整える。推進用のプロペラは装置の隙間に内蔵した安全設計。

「よし、こんなもんかな。実行」

残っていた資材の一部が光に包まれて消えていき、そこに大型の赤色ソファーが現れた。乗降用の短いステップ付きで、下半分はゴツイ装置が露出していて何だかSFちつくな雰囲気醸し出している。

「おお？ なんじゃそれは？」

「プレゼント」

「え、わらわのかっ？」

早速食いついて来たヴォレットに操縦の仕方を説明する悠介。安全を第一に考慮して作られた浮遊ソファは、床から通常20センチ、最大40センチ程の高さまで浮かび上がり、人が歩く程度の速度で移動が可能。

大人が三人並んで座れる程の大きさなので、小柄なヴォレットなら半分寝そべる事も出来る。

「やったあ！ 遂に空に行く乗り物がわらわの元につ」

「あんま高くは飛べないし、ゆっくりしか動けないけどな」

「かまわんかまわん、こういうのが欲しかったのじゃ」

赤いシートを敷いた豪華な大型ソファが工場内を自由に浮遊する。これなら宮殿内の何処へでも乗っていけるとご満悦な様子のおレット。優雅に崩した姿勢で玉座に腰掛けているようにも見えるその姿に、なんだか女王の片鱗が見えたような気がした。

妹を見守るような優しい表情で、楽しそうにしているヴォレットを眺める悠介の傍に、そつと歩み寄るアユウカス。

「あと二年も待てば、乳も尻も膨れて良い感じに育ちそうじゃな」
「耳元でなに囁いてんですかっ」

『あれは将来色気も武器にするぞ』と占う里巫女に、『まあ確か』と、初めて出会った日の事を思い出して否定は出来ない邪神悠

介は、衣装もあのままならエライ事になりそうだなあ等と想像してみたりするのだった。

「しかし、これは良いのう」

ちゃっかりコピーして自分の分も作ったアユウカスが青い浮遊ソファアを操作してヴォレットのソファアに並ぶ。

「おおっ アユウカスも作ったのか。そろそろ昼食じゃ、上まで競争するぞ！」

「ふふふ、ワシのは自前で調整しておるから速いぞ？ 付いて来られるかのう」

まるで仲の良い姉妹のようにも見える姫君と里巫女。空飛ぶ大型ソファアが二台連なって宮殿の廊下を移動する姿はとても目立つ。上層階の食堂を目指して歩行速度のデットヒートを演じようとしている彼女達を見送り、悠介も食事を取りに工場を後にした。

ちなみに、昼食の時間が終わって工場に戻って来た二人の浮遊ソファアにはアユウカスのカスタマイズによる改良が入り、ヒラヒラのフリル付き天蓋とレースのカーテン、リーンプの前照灯まで装備されていた。外に出る気満々の仕様である。

アユウカスの浮遊ソファアはパトルティアノーストでも使えるよう、少し幅を調整してあるようだ。

「のうユースケよ、わらわのはもっと速く出来んのか？」

「出来るけど危ないからダメ」

「むう！ アユウカスのは走るくらい速いのにつ
「あの人は不死身だからいいの」

速度があまり出ない上に人力で簡単に引つ張っていけるので、動力車に比べるとお稽古事に連行し易くなったと、専属警護兼教育係クレイヴナーには好評だった。

昼間のバタバタとした時間も過ぎ去り、夕方頃には宮殿勤務を終えて帰宅する悠介。一応サンクアディエツトはポルヴァーティアからの攻撃に備えて厳戒態勢下にあるのだが、悠介は報せがあれば一瞬で宮殿に戻れるので比較的自由な行動が許されている。

「そつえば、今日は都築さん来なかったなあ」

”シフトムーブ”で宮殿の自室から自宅の玄関ホールに移動すると、逸早く気づいた使用人さん達がわたわたと焦るように集まりながら『お帰りなさいませ』と声を揃えて出迎えてくれた。

普段は動力車で自宅と宮殿を行き来しているので、何時もなら玄関に入った時には既にピシッと整列している彼女達の慌てる姿は、悪いと思いつつも面白い。

「おかえりーユースケ」

「お帰りなさい、ユースケさん」

「ただいま」

二階の部屋からスンとレーザーザッシアも出迎えに下りて来た。レーザーザッシアに隊服のマントを預け、スンを伴って自室へと上がる。部屋のテーブルには先日、朔耶が届けてくれた元世界の家族写真や自分本体からの自筆手紙などが並べられていた。

写真を目にした二人はとても精巧に不思議なものがいっぱい描かれてると興味を示していたが、そこに写っている人物が悠介の両親である事を聞くと、また違う雰囲気に関心を懐いたようだった。

元世界の悠介本人の写真もあり、こちらで邪神をやっている悠介と見比べてみると容姿や姿は変わらないのに顔付きが明らかに違っていた。主に眼光の深みというか鋭さが違うのだ。

『でも……こつちのユウスケさんって、凄く優しそう』

『おのれ俺本体！ 写真でスンをかどわかすとはっ』

『はいはい、自分に嫉妬しない』

— 昨日の夜にはこんなやり取りがなされていたとか。

「ポルヴァーティアの様子はどう？ そろそろ動きそう？」

「どうだろうな、アユウカスさんの予想だと明日か、明後日辺りに一当て来るんじゃないかって話だったけど」

今日生産した浮遊砲台の配備もほぼ終了しているので、一応、迎撃準備は調っている。

戦闘中は悠介邸で働く使用人達を含め、スンもレーザーザッシアも屋敷の地下に設けられたシェルターに避難する手筈だ。太陽苔栽培の地下研究室とはまた別に造られた長期間過ごせる避難施設で、水や食料の備蓄も済ませてあった。

「ユウスケさんは、戦いが始まったらずっと宮殿に？」
「多分ね。状況にもよるけど、街の修復とか砲台の移動とかで掛かりきりになると思う」

特に、サンクアディエツトで一番目立つ建築物であるヴォルアンス宮殿は司令塔としてもシンボルとしても攻撃対象に狙われそうなので、常にカスタマイズ画面で状態を監視する事になる。

何せ急ごしらえの対空防備。ポルヴァーティア軍の戦闘機に対してどこまで効果を望めるか分からないのが実情だ。

街は何処か破壊されても資材が続く限り直ぐに修繕できるが、人が怪我をした場合はそうもいかない。出来る限り負傷者を出さないよう”対空光撃連弓・改”を運用する衛士達には上手く立ち回って貰いたい所であった。

「じゃあ……平穏な今のうちに思いっきり甘えておかないとね？」
「そ、そうですよね……」

ラーザツシアは悪戯っぽい笑みで、スンは何かを期待するような眼差しで、じいじと見つめてくる二人。明日にも起こりうるであろうポルヴァーティアとの戦いについて結構重い話をしてきた筈なのに、何時の間にか桃色空間が発生している。

「……をい、なんだなんだいきなり」
「ユースケもさ、そろそろ真剣にスunchちゃんの事考えてあげた方がいいと思うのよね」

「んな悪巧み笑顔のまま言われてもな」
「あ、これ照れ隠しだから」

唐突過ぎてたじろぐ悠介に、ラーザツシアは普段と変わらない調子でそんな事を言った。元世界の自分からの手紙にあった『生殺しは勘弁してくれ』という訴えを、うっかり二人に話してしまったのが原因か等と推察してみる悠介。　そこへ、来客が告げられた。

「こんばんは、ユースケ様」

「おや、いらっしやい」

毛先にゆるくウェーブの掛かった水色の髪を腰の辺りまでさらりと流す、元唱姫のラサナーシャ。珍しく夜中にやって来た彼女を、良いタイミングとばかりに迎える悠介だったが

「スン様とシアにお誘いされました。今夜はとことんユースケ様に甘えたいのだとか」

「しまった援軍か！」

「うっふふー。もう覚悟決めちゃいなさいよ、ユースケ」

「ユースケさん」

ポルヴァーティアとの一戦の前に、一線どころか二、三線越えてしまいそんな環境にあった事に、今更ながら気付く悠介であった。

サンクアディエツト防衛

垂直に繋がっていたカルツイオとポルヴァーティア。双方の大地は日に日に角度を浅くしながら融合を深め、カルツイオの北の空から見下ろすようにその姿をさらしていた聖都カーストパレスは、徐々に遠く霞掛かった地平線の彼方へと消えていく。

太陽のように大地の周りを回らない月は既に融合を果たし、一回り大きくなった新しい月がカルツイオとポルヴァーティアを合わせた大地の中心付近へと移動して上下軌道を安定させていた。

月が遠のく夜明け前、ポルヴァーティア神聖軍の空軍基地では出撃準備を整えた聖機士隊強襲揚陸艇と戦闘爆撃機、それに拠点構築用の資材を運ぶ汎用戦闘機が待機している。

戦闘爆撃機のみで編成された第一陣は既に出撃しており、もう間もなく拠点構築用の汎用戦闘機部隊と強襲揚陸艇を引き連れた第二陣も出撃する手筈となっていた。

「アルシア様、そろそろ出撃しますので」
「分かった」

第二陣の汎用戦闘機部隊に同行して拠点が構築される間の護衛を務める事になっているアルシアは、一度振り返って天高く聳える大聖堂を見上げると、踵を返して先頭の機体に乗って入った。

今回の戦い、制圧部隊である聖機士隊の機動甲冑を送り込むには例の”黒尽くめの混沌の使者”の動きを封じておく必要がある。まずは空からの攻撃で相手の本拠地を直接叩き、街の中心にある宮殿を破壊する作戦。

斥候部隊の機動甲冑が全機制御不能になつて鹵獲された事から、なるべく直接対決は避ける方針が取られていた。

各機体が宙に浮かび、出撃態勢に入る第二陣の汎用戦闘機。大型メイスを肩越しに背負い、神聖軍基地の灯りを見下ろすアルシアは、この戦いでまた朔耶と対峙するかもしれない事を気にかける。

『彼女を前にして、私は再び戦う事が出来るのだろうか？』

アルシアは自身の”勇者”としての覚悟が、ポルヴァーティアへの信仰や忠誠と同じくらい揺らいでいる事を感じていた。

ポルヴァーティアの勇者として在る事が自らの使命であると掲げて力を振るい、しかし護ろうとした自分の居場所さえ決して望んでいたような温かみは感じられない。色々な虚構から目を逸らしていた事を自覚させられた今、”戦う理由”も薄れてしまっている。

つらつらとそんな想いを巡らせていたアルシアに、同乗する若い神聖軍兵士が声を掛けてきた。

「あの……アルシア様」

「うん？」

「自分はこれが初陣になるのですが、勇者殿と共に出撃できる事を光栄に思います！」

「……そうか」

こういった一般の若い信徒達は上層の聖務官達と違い、真っ直ぐな尊敬の念を向けて来る。もっともそれは、ポルヴァ神への信仰を通してという事になるが。

カルツイオとの融合でポルヴァーティアの現状が変わるかもしれないと朔耶は言っていた。信仰や教義に縛られなくなれば、この若い信徒は自分に対する接し方がどんな風に変わるのだろうか等と考
えてみる。

「……」

「あ、あ、あの、あの」

勇気を出して憧れの勇者様に声を掛けてみたらじつと見つめられてしまい、どきまぎし始めた若い信徒に、アルシアはクスリと笑みを浮かべると『そう硬くなるな』と諭す。

「私の力が及ぶ限り護る。任務をしつかりな」

「は、はい！ よろしくお願いしますっ」

第一陣の攻撃部隊がカルツイオの領域に入る頃、アルシアを乗せた第二陣はポルヴァーティア神聖空軍基地を出撃していった。

明け方頃、サンクアディエットでは北の海岸線に展開されていた哨戒部隊や、ブルガーデンの要塞都市パウラからもポルヴァーティア軍と思しき機影が迫っているのを発見したという一報が届けられ、

ヴォルアンス宮殿内は伝令や衛士達が慌ただしく走り回っている。

この時間帯に珍しく眠っていた悠介も直ちに宮殿へと呼び戻され、アユウカスと並んで宮殿内から迎撃と防衛の任に就いた。

今回、闇神隊メンバーの役割は悠介とアユウカスの補佐を担当する事になっており、ヴォーマルは悠介達の傍に控えて参謀を務め、イフヨカとフヨンケは伝令役。シャイドとエイシャは万一に備えての護衛と治癒係だ。

街中に設置された”対空光撃連弓・改”の運用は悠介に一任されているので、実質、悠介が迎撃の指揮を執る事になる。

「状況は？」

「現在ボルヴァーティア軍は海岸線を通過、数は凡そ120、例の汎用戦闘機よりも大型らしいですぜ」

「多いな。ふーむ、機動甲冑とか積んでるのかな……」

「向こうの指揮官がまぬけならそれもあり得るじゃろう」

悠介の隣に座って早速自分のカスタマイズメニューを開いたアユウカスが、シフトムーブ網の掌握を始めながらフォローを入れる。やはりここは当初の推測通り空からの大規模な攻撃が来るものと考えた方が良さだろうと。

その時、宮殿内に敵の接近を告げる”広伝”が響き渡る。

「北方向上空より接近する敵影を確認！」

「隊長、ご指示を」

「ん、じゃあ敵が高度を下げ始めたら一斉攻撃で」

とにかく近付けさせない事が重要なので、無理に引き付ける必要は無い。撃墜は考えなくて良いのでひたすら撃ち捲くれという指示を出す悠介。サンクアディエツト中に伝えられた闇神隊長からの指示に従い、北側に面する対空砲が一斉に光弾を打ち上げた。

夜明け前の薄暗い街が連続する閃光に照らし出される。攻撃開始の合図で降下を始めていた上空のポルヴァーティア軍からは、街の一角が突然光り始めたように見えた。そして飛来する魔力の塊。

「なんだっ なにが起きた！」

「地上からの攻撃です！ これはまるで、光撃弓のような」

直後、光弾が機体を叩いた。装甲で弾いたものの、かなりの衝撃に姿勢が崩される。

「馬鹿な、やつらにそんな兵器を作れる筈が」

尚も機体を掠める無数の光弾。斥候部隊の汎用戦闘機や機動甲冑が奪われたらしいという話は聞いていたが、この砲撃の量はどうみてもそれらの流用では済まない。

第一陣攻撃部隊の指揮官は有り得ないほどの対空砲火に返って疑問を懐いた。

「いや、まてよ？ 連中は確か、投擲型の特殊能力を持っているという事だったな」

「そう聞いています。もしか、この光弾の雨も……？」

鹵獲した機動甲冑の光撃弓を流用しつつ、そこに特殊能力で作りに出したまやかしの光弾も混ぜているのではないかと推測する指揮官。今の一撃は偶々本物の光撃弓から放たれた光弾が運悪く直撃してしまったと考えれば納得できる。

「よし、各部隊に通達、散開して目標の中央塔を破壊せよ。その後は任意の攻撃を許可する」

斥候部隊が奪われた機動甲冑や汎用戦闘機に搭載されていた光撃兵器は全部合わせても十門程度、これだけ大きな街をカバーするには全く足りない。

「中央塔には本物の光撃兵器が集中している筈だ、近付き過ぎてうっかり落とされるなよ？ 我々の神聖兵器は強力だからな」

指揮官は味方の士気を鼓舞しつつ、リラックスさせようと冗談めいた言葉を送るが、応答する各機からの通信は彼の推測と楽観を打ち砕くモノだった。

『こちら四番隊、味方機の半数が被弾して飛行が安定しない、帰投させる許可を』

『二番隊より報告、空対地光撃砲が破損した機体多数、これ以上の接近は危険だ』

「司令！ 三番隊の隊長が被弾して負傷したとの報告が！」

次々と届く損害報告に一瞬思考が停止した指揮官は、司令機の外装を叩く光弾の衝撃で我に返ると、全機離脱の命令を出した。

「一旦離れる！ 聖都の本部基地に連絡後、態勢を立て直してから

各方角より同時に攻撃を行う」

急上昇による緊急回避を試みながらサルクアディエツト上空より離脱していく第一陣攻撃部隊の戦闘爆撃機。何機かは被弾で浮力を失って街の外周付近へと不時着を試みていた。

引き上げていくポルヴァーティア軍の航空機部隊に氣勢を上げるサルクアディエツトの衛士達。”対空光撃連弓・改”の射手を務めた衛士が祝砲代わりに光弾を撃ち上げる。

宮殿上層から確認した街の様子や、各所より送られてくる状況報告を受け取った悠介は、一先ず追い返せたかと軽く息を吐く。今の所、街の何処にも被害は出ていない。

外周付近に不時着した戦闘機にはエスヴォブス王が指揮下の衛士団から部隊を向かわせているようだ。

「さて、本番はここからじゃのう」

「ですね。どうせ地上からも来るだろうしなあ」

悠介とアユウカスがポルヴァーティア側の動きについて予測していた時、新たな敵部隊が海岸線を超えたとの報せが入る。

今度は最初の部隊に見た大型の戦闘機が30機に、機動甲冑らしき人型を積んだ細長の機体が20機、それに後部が箱型になった汎用戦闘機と思しき機影が40機程だという。

「また多いな……どう思う？」

「そうですね、お二人の考えるとおり、最初の部隊が空からの攻撃で牽制しつつ　という所でしょうか」

意見を求められたヴォーマルは機動甲冑の規模如何で地上からの攻撃部隊か、或いは地上部隊の足掛かりに拠点を作りに来た可能性も考えられると推測する。

汎用戦闘機の仕様について捕虜から得ている情報によれば、あれは資材運搬などにも利用されるという事だったので、後部が箱型になっている汎用戦闘機は陣地を構築する為の資材を積んでいるのかもしれない。

「歩兵満載とかだつたらやだなあ」

「まあ、その可能性もありやすがね」

相手になるべくリスクを抑えようと考えているなら、機動甲冑のような便利な地上戦用の兵器を持っているのに、態々歩兵の投入を行おこなうとは思えない。

「棄てたい兵でもいるなら別ですがね」

「向こうの統治形態を考えるに、それはなさそうじゃのう」
「なるほど」

カナン達のように使い捨て出来る兵を投入したとして、信仰教育による思想統一に縛られていない彼らにポルヴァーティア軍の兵器を持ったままあっさり寝返られても堪らないし、下手に損害を出せば執聖機関の威光にも傷がつく。

”浄伏”と称した他大陸への侵攻は基本的に”楽に勝てる相手”にしか仕掛けて来なかつたので、ポルヴァーティア神聖軍はこれま

での戦いで損害らしい損害を被った事もなかったようだ。

今回のように一方的な”浄伏”が進められない展開は、ポルヴァーティア側にとってはかなり異例の事らしい。

「交渉の糸口はその辺りになる訳か」

「アユウカス殿の言っていた”新しい事実”って妥協案ですかい？」
「まあ、あれは妥協という程の甘い話でもないんじゃないか」

四大神信仰の欺瞞が暴かれ、身分差も緩和された今のカルツイオのような自由な文化に、ポルヴァーティアの閉じた信仰体制が影響を与えられる可能性は低く、逆にポルヴァーティアの民は今まで存在しなかった”異文化”に影響を受けるであろう事は必至。

ポルヴァーティア側にとって、自分達の支配下に置けないカルツイオは隣に存在しているだけで、じわじわと浸透してやがて体制を崩壊に至らせる毒のようなモノだとアユウカスは語った。

「ワシらが飲み込まれん限り、勝算はある。向こうは身動き取れなくなるからの」

「ああー確かに、カルツイオくつつけたままじゃあまた別の大陸にちよっかい出しに行く事もできないわな」

「そついうコトじゃ」

丁度話が一段落する頃、空の敵部隊が別方向から接近中との報告が”広伝”で響き渡る。悠介は即座に先程の要領で撃ち捲くるよう指示を出すのだった。

第一陣部隊から本部基地へ向けられた緊急連絡の内容を受け、第二陣部隊は予定の場所に降りて拠点の構築を進めながら攻撃目標の街へと偵察隊を出していた。

偵察仕様の遠見鏡搭載機動甲冑一機を乗せた汎用戦闘機が低空で近付き、一体どんな対空設備を有しているのかと調べてみると、建物という建物全てに”神聖光撃弓”とよく似た兵器が設置されている事が分かった。

街周辺には浮遊砲台らしきモノも確認できる。これらが一斉に光弾を放っているのだ。

しかもポルヴァーティア神聖軍の光撃兵器と比べて若干性能が良いらしく、かなりの長射程で魔力切れさえ起こさず延々と撃ち続けている。全方位からの接近を試みていた第一陣の戦闘爆撃機部隊が全く近付けないでいる様子が窺えた。

「おいおい……どうなってるんだ」

「なんで蛮族の街にこんな設備が」

「っ！ まずい、見つかった！」

巨大な噴水の如く光弾を撃ち上げ続ける山のような”蛮族の街”を呆然と見上げていた汎用戦闘機の操縦者に、偵察仕様の機動甲冑搭乗者から警告が発せられる。直後、街の方から光弾が飛んで来た。

「うわっ やばい！」

「こちら偵察隊、敵に発見された！ これより帰投するっ」

『あの浮遊砲台、地上攻撃にも対応してるみたいだぞ』

時折り至近弾に機体を煽られてはひやひやしつつ、偵察隊は第二陣部隊の拠点へと撤退していった。

これらの報告を受けて、カーストパレスの大聖堂では急遽、神聖軍務官達を集めての対策会議が行われた。報告にあった向こう側の光撃兵器は規模から判断するに、以前より配備されていたモノと考えられる。

カルツイオの魔導技術は予想より進んでいるのかもしれないと、予測文明レベルの見直しが図られた。

「斥候から奪った汎用戦闘機の光撃連弓を使いこなしていたのは、似たような兵器を既に持っていたからだだったという訳か」

「確かに、それなら納得できますな」

「あれ程の大規模な防衛設備を見抜けなかったのは、些か油断が過ぎたと反省する所ではある」

「うむ、と全員が重々しく頷いた。まさか一日二日の突貫工事で設置されたモノだとは、誰も思わない。」

軌道を合わせ始めた昼夜を乱す二つの太陽もすっかり昇りきり、片方はそろそろ真上に来ようかという刻。

サンクアディエツトでは散発的な地上からの偵察隊や、街の上空で”対空光撃連弓・改”の射程ギリギリ付近を旋回する少数のポルヴァーティア軍機の動きに警戒しつつ、人員の入れ換えなどを行っ

ていた。

「何度か接近を試みていた最初の戦闘機部隊は被害が嵩んだのか、諦めて引き上げていったようだ。」

「今は小康状態ってどこか」

「地上からの部隊が気になりやすね、偵察に来る頻度が高い」

「ふむ、腰を落ち着けて探りに来られる環境を得たと考えるべきかのう」

地上に拠点を作られている可能性が高い。現在は衛士団の部隊がブルガーデンの精鋭団とも協力し合いながら、サンクアディエツトと北の海岸線までの平野を調べている。

海岸線に駐留している部隊の報告では、時折りポルヴァーティアから汎用戦闘機部隊が飛来している事も確認されていた。

「ユースケー、アユウカスー、飯を持って来てやったぞー」

カードを押す使用人達の先頭に立って先導してきたヴォレットの元気な声が部屋に響く。悠介達が指揮を執っている臨時司令室は宮殿内の上層にあるので、交戦中であってもヴォレットは割と自由に出入りできるのだ。

「暫く前から静かになってるようじゃが、今どんな様子なのじゃ？」

「多分、お互いに様子見してる状態だと思う」

「次にどう出てくるかが問題じゃな。川魚のフライは無いかの？」

さっそく食べているアユウカスが『これで交渉に出てくれば楽なのじゃがのう』と理想を口にしながらも、まだ暫く戦闘が続くであろう事を示唆する。

今の所は高密度射撃による光弾バリアでこちらは無傷、相手にそこそこの被害を与えて撃退出来てはいるが、以前に悠介が言っていた通りこの防衛法にも穴はあるので、そこを突かれると戦況は一転する。

「闇雲に突っ込んできて最後は交渉の持ちかけってパターンが望ましいんだけどなあ」

「カツカツ それは向こうの指導者が余程のうつけ者でもなければ無理というモノじゃ」

「よく分かんが、良くも悪くも無い状況という事でよいのか？」

ユースケの言う穴を突かれた場合の対策は考えてあるんじゃないかな？」

「まあ対策というか、一応向こうの攻撃は”効いてない振り”で誤魔化して凌ぐってとこかな」

人的被害を最小に抑えながらハツタリでやりくりするのだという、なんとも小手先の対処法だが、実際ポルヴァーティアとカルツイオでは技術力の差があり過ぎて、まともに戦ってはどうかやっても勝ち目が無いのだから仕方が無い。

向こうからは一方的に兵を送り込んで来られるが、こちらから送り込む事はほぼ不可能な現状。なるべく早く相手が折れる事を期待するしか無いのだ。

「ふーむ。しかし追い返せるとて、しょっちゅう敵が飛んでくるようでは、民は落ち着いて仕事も出来んじゃないやろなあ」

「その問題があるんだよな……」

何時までも厳戒態勢を維持したままでは街の営みそのものが停滞してしまふ。何処か壊されても直ぐに修復できるので街それ自体に

ダメージは無くとも、経済的にはギリ貧に。

シフトムーブ網を使った輸送で物資の滞りは防げるものの、農作物の畑や牧場など畜産の壊滅は避けられないだろう。

やはり長引けばこちらが不利である事に変わりはなく、交渉の呼び掛けも試みているようだが今の所は梨の礫。如何にして早期決着へ持ち込むかについて話していた所へ、敵の接近を告げる広伝が響き渡った。

「来たか。では、わらわは父様の所に戻るゆえ」

「ああ、気をつけてな」

悠介の指揮の邪魔にならないよう、言葉少なに臨時司令室を出て行くヴォレット。カートを押す使用人達もそろそろと後に続く。ヴォレットが食事を持って来てくれたおかげで昼飯抜きにはならず済んだ。

「心配りも出来ておる。良い女王になりそうじゃな」

そんなアユウカスの呟きに、カスタマイズメニューを睨む悠介はただ頷いて応えた。

崩れた建物は光の粒を舞い残して元の姿を取り戻し、砕けた石畳は何事もなかったかのように整然と続く通りを埋める。

街の被害は想定していた通り、何処か破壊されても直ぐに修復する事が出来たが、砲台を担当する衛士達の被害が思いのほか深刻だった。怪我人の数は予想以上に増えていく。

「北側一区、浮遊砲台二機大破！」

「貴族街防壁砲台一機破損！」

「ヴォロディエ邸東館砲台、崩落につき使用不能」

次々と響き渡る被害報告の広伝。ポルヴァーティア軍は昼過ぎから戦術を変えてきた。悠介が恐れていた通り、徹底して射程外からの攻撃に切り替えたのだ。

飛来する戦闘機の数自体は減っていたが、かなりの高高度から地面に激突すると炸裂する石柱”を投下するという爆撃に加え、街の北側に拠点を作られたらしく、そこから長距離の砲撃が行われている状況。

この遠方からの砲撃にも炸裂する石柱が使われている。”対空光撃連弓・改”の射程カスタマイズにも限界があるので、遠くからのちくちく攻撃には対処が難しい。

「やっぱ迫撃砲が痛い」

「上と横から同時に攻められておるからのう。地上の敵部隊には今シン八達が向かっておる」

カスタマイズ画面を操作しながらシフトムーブ網を使ってガゼッタの白刃騎兵団を移動させたアウカスは、テーブル上に広げられた戦略地図に『この辺りじゃ』とコマを置いて敵地上部隊の予測位置とシン八達の位置を示した。

シフトムーブ網でガゼッタのパトルティアノーストからサンクア
ディエツト外周付近に移動してきたシン八率いる白刃騎兵団は、ポ
ルヴァーティア軍の地上部隊を叩くべく”炸裂する石柱”が撃ち出
されている方角へ馬を走らせる。

遮蔽物の殆どない平野なので、それは直ぐに見つかった。

「あれか。全員馬を降りろ、ここからは足を使う」

十分な距離を置いた場所に撤退時の馬を管理する部隊を残し、風
技の移動補佐を纏った白刃騎兵団の精鋭が大地を駆ける。彼らはパ
トルティアノーストの制圧作戦にも参加していた猛者達だ。

今回は対ポルヴァーティア軍用の武器として、機動甲冑が装備し
ていた光撃弓を人間にも扱えるようカスタマイズしたモノを携行し
ている。”邪神の補助装備”も身に付けているので、重い武器を背
負ったまま全力で走り続ける事が出来た。

ポルヴァーティア軍の拠点には四門の大型投擲砲台と幾つかの施
設が仮設されており、機動甲冑も確認。後部が箱型の汎用戦闘機も
何機か並んでいる。

作業員が一般兵員か、シン八達の接近に気付いた何人かが慌ただ
しく走り回り、拠点に警報が鳴り響いた。

互いに顔の輪郭が確認できる程の距離にまで迫ると拠点の防壁に
設置されている光撃連弓から光弾が放たれ、機動甲冑部隊が出撃し
て来た。その中にはアルシアと思しき姿も見える。

「敵の砲台を叩け！ 甲冑と女勇者は無視して構わん、というか避ける」

拠点の周りを駆け抜けながら光撃弓で長距離投擲砲に設置されている石柱を狙い撃つシン八達。ポルヴァーティア軍の拠点施設は砲台もろ共潰して置きたい所だったが、接近戦は機動甲冑とアルシア側に分があるので避ける。

長距離投擲砲を狙い撃ちにして破壊した後はシフトムーブ網の所まで撤退、ガゼツタに帰還する作戦だ。

無技の戦士の脚力に風技の移動補佐という常磐の布陣に、それらの効果を底上げて継続させる”邪神の補助装備”が加わる事によって生身の人間とは思えないような機動力を得た白刃騎兵団の精鋭部隊。

斬り込んで来る機動甲冑を相手に生身ならではの小回りを利かせて悉く回避すると、拠点の大型砲台に光弾を浴びせてゆく。

この人間用にカスタマイズされた光撃弓も重量や反動を考えれば誰にでも扱えるという訳ではなく、交戦状態の中を駆け回りながら狙い撃つなどという行為は身体能力が特に高い無技の戦士だからこそ使える戦法である。

投擲砲の砲身に装填されていた石柱が光弾の命中により爆発を起こし、大破した砲台が隣の砲台を巻き込んで倒潰した。

その一帯が炎に包まれる中、拠点施設の作業員達は消火活動を行いなから近くに並べてある砲台や砲弾である石柱を安全な場所に移動させようと走り回っている。

「このっ 蛮族め！」
「間違つてはいない」

空間に響くように発せられた機動甲冑からの罵声に不敵な笑みを返し、打ち下ろされた重剣の一撃を軽く躲してその機動甲冑の腕に飛び乗るシンハ。搭乗員の息を飲む気配が伝わってくる。

そのまま機体を駆け上がって大きく跳躍。拠点の防壁を越える高さから発射された光弾は、長距離投擲砲のデリケートな装置が密集しているっばい付近に吸い込まれて行った。

ボンツと小さい爆発を起こして煙を吐く砲台。投擲砲の弱点を把握しつつ光撃弓を発射した際に起きる反動を使って空中で軌道を変え、踏み台にした機動甲冑から少し距離を取った位置に着地。

突っ込んでくる軌道甲冑に対して後ろに飛び退ると同時に光弾を撃ちこみ、その反動も使って回避の足しにする。シンハは新しい武器を完全に使いこなし、敵を翻弄していた。

同じ生身で対抗できそうなアルシアも身一つでは縦横無尽に暴れまわる無技の戦士部隊に対応しきれず、いまひとつ振るわない。正面からやりあえばアルシアの圧勝だが、シンハ達の目的は砲台の破壊。

アルシアとの交戦を徹底して避ける事で任務は無難に達成された。

「引き揚げだ！」

速やかに撤退する白刃騎兵団。ポルヴァーティア軍は拠点の鎮火と混乱の收拾に当たる為、追撃は形だけに留めて直ぐに引き返して行ったのだった。

シン八達の活躍により、上空からの攻撃にのみ集中すれば良い状況を得たサンクアディエツトは、爆撃機にこそ光弾は届かないものの、投下される石柱を撃ち砕く事で被害を大幅に抑えられるようになった。

空中で炸裂した石柱の破片が降り注ぐも、”対空光撃連弓・改”に標準装備されている射手を護る為の盾壁で十分に防ぐ事が出来ている。そのうち投下する石柱が無くなったのか、高高度を行く爆撃機はポルヴァーティア大陸へと帰っていった。

もう石柱が降ってこない事を確認した砲台担当の衛士達が疲れた様子で座り込む。序盤で戦闘爆撃機部隊を追い返した時とは違って変わり、勝ち鬨を挙げるでもなく誰もが憔悴した表情で沈黙している。

「やれやれ、何とか凌げたのう」

「でもこの調子で夜間攻撃とかされたら目も当てられんような……」

街に被害らしい被害の痕跡は残していないので、恐らくポルヴァーティア側に対する”効いてない振り”は効いていると思われるが、地上からの遠距離砲撃と高高度爆撃で被った人的被害は予想以上に大きかった。

カスタマイズによる操作で対空光撃連弓・改の砲撃を行う事も出来るが、その場合は命中率が著しく下がってしまう。

単に街上空へ近付けさせない為に撃ち捲くるダケであれば、まだ当てずっぽうでも何とかなるのだが、高高度から投下される石柱を撃ち砕くにはどうしても射手が必要になる。

伝達系風技による空間把握との組み合わせで正確な位置を捉えて狙い撃つという人カージャスシステム。優秀な”索敵の風”使いがいなければ、数を撃つても当たらなくなってしまふのだ。

今後さらに地上部隊が増えれば、シン八達でも対処しきれなくなるだろう。緒戦で驚かせてハツタリを効かせつつ和平交渉に持ち込むという作戦は早くも破綻をみせ始めた。

静かになった臨時司令室で一息つきながらそんな話をしていた悠介とアユウカスの所へ、伝令と共にヴォレットがやって来た。

「ユースケ、アユウカス、二人とも上の会議室まで来てくれ。今後の対策を話し合うそうじゃ」

やはり昼過ぎからの攻撃で被った衛士達の被害が大きかったらしく、今の方針のままでは問題があると判断されたい。シフトムープを使って各砲台の人員交代を済ませた悠介達は、一応監視目的でカスタマイズ画面を開いたまま臨時司令室を後にした。

エスヴォブス王を上座に各宮殿衛士隊から隊長と副隊長達も出席し、ヴォルダート侯らを始め宮殿官僚達とも意見を交えながら対ポルヴァーティア戦略について議論が進められる。

会議が始まって早々、主戦派からは「こちらから打って出るべきではないか」という意見が挙げられたが、これには講和派が「無謀過ぎる」と反対を表明した。

「第一、あれ程の高い技術力を持つ大陸の国家を相手にどうやって攻め込もうというのか。兵を送り込む手段は？」

「大地が平行になれば、海を渡れるのでは？」

「向こう岸に辿り着く前に間違はなく沈められる」

「だからと言って今のような受身ばかりでは、徒に被害を重ねるだけだ」

和睦の交渉をしようにも応じてくる気配は無く、”戦えば損をする”と判断させるには相手側にも相応の損害を与えるなり、まずは互角の戦力を示さなくてはならない。

しかし現実はまだまだこれから空や海からも多くの兵を投入してくるであろう戦力に余裕が見られるポルヴァーティア側に対し、こちら側は最初から後が無い状態。

このままでは相手の侵攻心を挫く前にこちらが潰れるという主戦派の主張は理解されるものの、効果的な対抗策も浮かばないのが実情だ。

「少数の精鋭部隊を向こうの中枢に送り込むというのはどうか？」

「ガゼツタがパトルティアノーストを制圧した時のようにか？ 彼らの時とは条件が違いすぎる」

相手の街の情報全般、構造や中枢施設の位置、重要人物の所在や人相すらも分かかっておらず、敵兵力の配置など警備状況も不明、何よりも部隊を送り込む手段が海を渡っていくしかない現状では作戦自体が成り立たない。

「だが……何か対策を取らねば、我々は滅ぼされる」

「さりとて、どう対応すれば良いのやら」

「ユースケ殿、貴殿には何か良い案はありませんかな？」

皆の注目は唯一対抗出来そうな存在、闇神隊長に向けられる。

「んー……」

黙って議論の行方を見守っていた闇神隊長ユースケは腕組みしながら唸ると、一言。

「ない　　つてのは冗談ですが、何とか出来そうな人に心当たりがあるんで、連絡が取れるまで待つて貰えますか」

ややもすれば悲壮感すら漂い掛けていた会議の重苦しい雰囲気も軽く往なすように答える悠介。隣でアユカスが「ああ、疲れておるのじゃなあ」と思い遣りも籠めたジト目で肩を竦める。

格式を重んじる一部宮殿官僚らが緊張感の無い悠介の態度に何か言い掛けたが、ヴォルダート侯がフォローに入った。今は質問の応え方や意見の出し方に格調がどのと言っている状況では無いのだ。

「それは、有効な手立てがある、という事かね？」

「手立てといたしますか、伝手といたしますか、向こうの中枢まで確実に潜り込める人材が一人」

『ほお』と静かなざわめきが会議室に広がる。諜報に聡い者達はその人物に凡その見当をつけていた。詳しい経緯は明らかにされていないが、最初の斥候との戦闘に介入して以降、宮殿でも度々闇神隊長の近くで目撃される黒い髪を持つ謎の少女。

現場にいた衛士達の証言によれば、その少女は漆黒の翼を持って空を飛び、重傷者の傷を一瞬で癒し、ポルヴァーティアの勇者とされる戦士が放つ鬼神の如く攻撃に些かの揺らぎも見せず一撫でで相手の武器を砕くと、稲妻を纏った一撃で沈めたという。

「我々は彼女に関する情報を殆ど持っていないので判断が難しいのだが、信頼できるのだろうか？」

「少なくとも”カルツイオ”の味方はしてくれるみたいですよ」

悠介は朔耶の立場をあくまでも今回の戦いでカルツイオ側に”協力してくれる人”とした上で、助力を求めてみる事を話した。

その後は対ポルヴァーティアの戦略にこれといった妙案が挙がるでもなく、街の防衛で他国の兵士を何処まで受け入れるか等の細かい人事を話し合っただけで会議は終了した。

闇神隊長の伝手に関しては当人の来訪を待つしかなく、話が付いたならエスヴォブス王に報告がなされるだろう。

解散して各々が自分の持ち場へと戻って行く中、臨時司令室へ足を向ける悠介とアユウカスにヴォレットが並ぶ。

「そういえばわらはまだ会った事がなかったが、そのサクヤという者、ユースケの同郷の者という事だったな」

「ああ、隣町の隣町くらいの所に住んでる人だったよ」

元いた世界の話が聞けて懐かしかったと微笑む悠介。少し複雑そうな表情を見せたヴォレットは、おずおずとこんな事を尋ねた。

「ユースケは、その……帰りがたくなったりは……せんのか？」

「ふむ。ちよつと前までは多少そう思うこともあったけど、今はそうでもないかな」

「そうなのか？」

「まあ元の世界にもちゃんと俺がいるみたいだし、都築さん通じて近況とかも聞けるからな」

未練からの望郷の念よりも心残りを払拭できた感があるという。朔耶のように自由な行き帰りが出来るならちよつと帰ってみようかという気にもなるであろうが、そうでないなら今日まで生きて来たこの世界を棄てて帰る事など考えられない。

「ヴォレットが立派な女王になる所も見守らなくちゃならんしな」
「ゆ、ユースケ……」

ナデナデと珍しく頭など撫でつけてくる悠介に、驚き半分悦び半分なヴォレット。それを微笑ましげに見たアユカスが少し眉を上げながら言った。

「仲睦まじいのう。ワシの頭も撫でてみんか？」
「いやあ、なんか恐れ多くて無理っす」

「なんじゃ、ケチンボじゃの」
「ケチンボて……」

3000歳の子供に拗ねられてもリアクションに困る。などと思っていたその時

「ロリキラー……」
「違います」

何処からとも無く現れた朔耶にそんな事を呟かれて、とりあえず否定する悠介。

「な、なんじゃっ」

「ふーむ、話には聞いていたが、本当に唐突な現れ方をするのう」

宮殿の廊下に光臨する来訪者、都築朔耶。カルツイオの存亡かけた戦いへの協力を求める前に、邪神悠介はまず自身の性癖に関する潔白を説明する所から始めるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7163g/>

ワールド・カスタマイズ・クリエイター

2012年1月12日00時54分発行